

呪術廻戦にP5の  
ジョーカーぶち込んで  
みた

全ての仇を拾い者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黒い蝶と、青い蝶が舞う。

羽ばたいて、水面が揺れる。

ふたつの世界。衝突し、重なり、交ざり合う。

——切り札は既に切られた。

もう、誰にも止められない。

呪術もペルソナも知らない人でも楽しめるよう頑張ります。私の小説を機に、呪術やペルソナに興味を持っていただけたら幸いです。

現在、月一程度で投稿しております。

https://mobile.twitter.com/kawanonakaobobo

Twitterやっています。ご相談等ありましたらこちらからどうぞ。

2021/08/09 匿名投稿を停止しました。

2021/11/28 リアルが忙しいため不定期更新になりました。

2022/02/11 タグにオリキャラを追加しました。

# 目次

#	M	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#
1	e	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
1	n	0									
	u										
	↓										
	S										
	t										
	a										
	t										
	u										
	s										
	;										
	E										
	p										
	i										
	s										
	o										
	d										
458	429	364	308	278	228	197	143	101	70	40	1

M	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#
e	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1
n	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2
u												
↓												
S												
t												
a												
t												
u												
s												
;												
E												
p												
i												
s												
o												
d												
	883	847	801	765	700	668	651	626	604	574	530	491

# # # # # # # #  
3 3 2 2 2 2 2 2  
1 0 9 8 7 6 5 4

914

e  
o  
f  
J  
u  
v  
e  
n  
i  
l  
e  
f  
i  
s  
h  
a  
n  
d  
R  
e  
t  
r  
i  
b  
u  
t  
i  
o  
n

11241112109510871055 999 966 950



# # 1

1.

「先輩方、良いんスね？」

どこか重い空気の家庭科準備室兼オカ研部室の中、そう切り出したのは、短髪のツーブロックヘアの虎杖悠仁<sup>いたどりゆうじ</sup>。いつも以上に目付きが悪いが、見た目とは裏腹に陽気で優しい心を持っている、杉沢第三高校の一年生だ。今日もまた制服の上にパーカーを着込んでいる。校則違反だ。

「……………うん」

眼鏡の少女、佐々木節子<sup>せつこ</sup>が肯定を示す。心霊現象研究同好会、通称《オカ研》の会員である悠仁の先輩だ。悠仁の方を、どこか覚悟の決まった目で向いた。明るい色のカーディガンがよく映えている。

そしてその節子に対面するようにいる、狐目の井口武志<sup>たけし</sup>も、口を紡ぎながら首肯する。冷や汗が坊主頭の額に滲む。野球部の方がビジュアル的に似合っていると先輩は語る。

「蓮も良いな？」

「もちろん」

癖毛の青年、虎杖の竹馬の友、あまみやれん雨宮蓮も覚悟は決まっている。童顔の彼は、他の三人とは打って変わって怯えの表情は無い。容姿端麗、文武両道、篤実温厚、勇気凛々を地で行く彼は、暑くなってきた六月に耐えられず制服のフロントを開けて袖を捲つており、シャツから垣間見える鎖骨から謎の色気を感じる。唯一の欠点は口数が少なく、誤解を招きやすいという点か。武志を野球部の方が似合うと言っていたのは蓮である。

今、四人は戦っていた。オカ研の存亡を脅かす暴虐の魔王、憎き生徒会長を懲らしめなければならぬと、そう決意した。

しかし宿敵の弱点はてんで分からぬ。このままでは意のままに蹂躪される事は明白であった。そこでオカ研は、オカ研なりの矜持を見せようとした。心霊現象研究同好会という名で活動しているが故に常軌を逸した方法で、彼奴にギャフンと言わせてやるのだ。

「——っし、じゃあ行くぞー！」

『こつくりさんこつくりさん、生徒会長がギリ負ける生き物を教えてください！』  
 そう、こつくりさんで。

紙の上を十円玉が四人の人差し指と共にすると動いていく。最初の文字は『く』。次に『り』。そして『お』。最後に『ね』。くりおね。生徒会長の上位存在となる生物、それはクリオネであった。



「クリオネってぎっご!!」

『あはははははは!!』

一斉に四人は吹き出した。皆、腹を抱えて笑っている。蓮も控えめに笑う。

ちなみにこつくりさんをする時は決して十円玉から指を離してはならないのがルールだ。手軽に出来るとは言え、一種の降霊術。侮ってはいけない。ちゃんと戻るよう指示し、紙は細かく破いて廃棄し、十円玉も三日以内に使用するよう心がけよう。

そんな平和な部屋に、しかし乱入者が突如として現れる。

「うるさいぞオカ研！ 廊下にまで響いてるぞ！」

「おつ、プランクトン会長じゃん」

「誰がプランクトンだ、誰が!!」

「三日ぶりですわね……くくつ、プランクトン会長」

「雨宮……お前は最後の希望だと思っていたのに……」

いきなり扉を開けて怒鳴り散らかしてきたのは、杉沢第三高校の生徒会長。我らがオカ研の宿敵である。オカ研の行動の悉くにケチをつけてくる頭の硬い眼鏡の男だ。時々生徒会の手伝いをしている蓮にとっては、真面目すぎるだけの印象しかないが。

「……はっ、いかんいかん。そうではなくてだなあ！ オカ研ども、ここは女子陸上部の更衣室となるのだからさっさと立ち去れ！」

「はあーっ!? なんですよ、差別だ差別!」

節子が講義の声を上げる。便乗して武志もそうだと声を荒げる。

「差別ではない区別だ! 碌に活動報告も出しとらん貴様ら問題児に、費用も居場所も与えられる訳が無かろう!」

「ばつきやろい、俺の先輩方を舐めて貰っちゃ困るぜ」

「その通り!」

「何ッ?」

バン、と節子がこっくりさんで使った紙の上に秘蔵ファイルを叩きつける。かなり罰当たりだ。

「ウチのラグビー場が閉鎖されてる事はご存知でしょう?」

「ああ。利用者が体調不良を訴えたからな」

「それも大勢ね。……でも、おかしいと思いませんか? 病弱ならまだしも、あの屈強かつ健康優良児のラグーマンが立て続けにですよ?」

「だが、それは……」

会長が言い淀む。

「情報によると、彼らが体調を崩す直前、不可解な現象が起こっていたとの事。風もそこまで強く無いのにゴールポールが震えたり、どこからか誰のかも分からない声が聞こえ

てきたり……」

「……………」

会長が固唾を飲む。

「そこでこの新聞記事です。三十年前、建設会社の吉田さんは、建設途中の杉沢第三高校を最後に行方不明となっている。それもそのはず、当時吉田さんは多方面から借金を抱えていたんですよ。……闇金にも手を出しているほどに。

——そしてッ、その筋の人に狙われた吉田さんが恨みを買って襲われ、ラグビー場に埋められた！ つまり一連の騒ぎは高田さんの怨念がラグビー部に襲いかかったため起こったのです!!」

「そ、それは……………」

これで存続を認めてもらえるだろう。オカ研員が勝利を確信した笑みを浮かべながら——

「マダニが原因だそうだぞ」

——思惑が音を立てて崩れ去った。

「……………どーせ私なんて……………」

「あー！ プランクトンが先輩泣かしたー!! オカ研がオカルト解き明かそうとしてんの真つ向から否定しやがって！」

「会長と呼べ虎杖！ こちとら変な噂ばかり流されて迷惑なんだよ！ そもそも問題なのは、虎杖と雨宮の籍がオカ研に無く、陸上部にある事だ！ 同好会の定員不足だぞ！」

「……………だがまあ、雨宮がどーしても生徒会に入りたいと言うのなら」

「えつ、俺らちゃんとオカ研って書いたよ？ な、蓮？」

「ああ。オレも一緒に提出したし」

「……………」

哀れなり、生徒会長。彼なりの必死のアピールに蓮は振り向きもしないのだった。しかし当の本人とその友人は疑問符を浮かべ別の件に意識が向いている。

「——それは俺が書き換えたのさ」

ババーン、と言わんばかりに陸上部顧問の高木が現れる。坊主頭が彼の渋さに拍車をかけている。ジャージの上からでも彼の筋骨隆々さが解る。会長曰く、『生徒より問題のある教師』との事。その証拠に会長が遠い目をしている。まあ、入部届を書き換えている時点でお察し頂けるだろう。

「虎杖！ 雨宮！ 全国制覇には、お前達二人の力が必要だ……」

「しつつけーな！ 俺無理ってなんべんも言ってるだろ！」

「すみません先生、オレもバイトに間に合わせたくて」

「ダメだ！」

「ダメなの!？」

「断る事を断っている……」

(哀れ雨宮……この場は俺が納め、然るのち生徒会に……!)

割と生徒会長も問題ありげだ。

「だが俺も鬼では無い……正々堂々、陸上競技で勝負と行こうじゃないか!」

「ほほう?」

悠仁が興味ありげな反応を示すが、蓮はどこかそっけなかった。というか目が死んでいる。かなり面倒くさく感じている時の表情だ。

それにしても、入部届を書き換えるのは正々堂々なのだろうか。

「俺が負けたなら潔く諦めよう。だがしかし、俺が勝ったら……!!」

「皆まで言うな高木……面白え、やったろーじゃん! な、蓮!」

「まあ……いいけど」

「よし!」

これが、オカ研の四人の日常である。

## 2.

晴れ渡る空、ラグビー場。ボサボサの黒髪の学生が一人、ラグビーで使用するポール

を見上げていた。何の変哲もない真っ白なゴールポールだ。蒼い空に良く映えている。

しかし彼の目にはそう映らなかつた。

(なんだ……)

ゴールポールの頂点に巨大なナニカがいた。その巨軀を鑑みればポールは折れていても不思議ではないのに、驚異的なバランス力か、はたまた見た目に反して質量は伴っていないのかは分からないが、宿木に停まる鳥のようにポールに捕まっていた。——その容姿は、全く鳥とは言えたものではないが。

ソレはイグアナのような爬虫類のようであり、足が六本あり、本来無い筈の歯茎と人間の歯があるため、決して爬虫類ではない。

ソレは蝗バッタのような昆虫のようであり、翅が無く、本来有る筈の鉤爪が人間の手であるため、決して蝗ではない。

ソレは声を発している。おおおおお……と唸るように鳴いている。内臓に響くような重低音で、どこか人間の男の声に似ている。しかしその姿は決して人間のそれとは言えない。

ソレはおそらく普通の生物ではない。……そもそも、ソレは生物なのかすら危うい。——なぜなら、その異質すぎる光景を、彼らを除き誰も彼もがそこには何もいないと言わんばかりに、見向きさえしていないのだから。

(死体でも埋まつてんのか?)

彼、伏黒恵には『常人には視えないモノが視える』。鼻で笑う者もいるかもしれないだろうが、事実視認できているのだからそうとしか言い様がない。厨二病の妄想などではなく、確実に視えている。その普通視えないモノに含まれるのが、先述した巨大不明物体だ。

端的に言つてしまえば、アレは『呪い』だ。正式名称を《呪霊》といい、人の負の感情……恥辱、後悔等が形状を持った物。人から出でし人ならざる怪異。災いを齎す、全ての生命にとって害でしかない存在だ。

——日本の平均年間怪死者・行方不明者は、一万人を超える。そのほとんどが呪霊の仕業だ。

伏黒恵の生業は、その呪霊を祓除し、呪霊が人を襲うのを防ぐ事。悪魔祓師に近いが、恵が祓うのは悪魔ではなく呪霊。大っぴらに世間に存在を明かしている悪魔祓師とは違い、宵闇に紛れ呪霊を祓う影の存在だ。そう区分するように、彼らの存在を《呪術師》と言う。

では何故、このような田舎の学校に呪術師がやって来たのか。

恵の本拠地は、彼の在籍する東京都立呪術高等専門学校。即ち東京だ。しかし杉沢第三高校は宮城県仙台市にある。全国各地の呪霊をピンポイントで探知できるのかと問

われれば……可能な呪術師も全世界を探せばいるかもしれないだろうが、恵にそのような芸当は出来ない。そも恵の目的は、呪霊を祓う事に無いのだ。

《呪物》——文字通り呪いを孕んだ物品の回収。それが伏黒恵に課せられた任務だ。保管場所は杉三高校の百葉箱だった。昨日回収に向かったのだが、見ると箱の中には何も無い。恐らく学校関係者か、あるいは生徒が偶然発見して興味本位で取得してしまったのだ。全く迷惑極まりない。その事態を上司に報告すれば『マジ？ ウケるね（笑）』と言われる始末。毎度の事だが、ぶん殴ってやりたいとこの日ほど思った事はない。

そしてその翌日である今日、生徒に扮して呪いの気配を頼りに呪物探索に勤しむのだが、恵が探しているのは《特級》に分類される危険な代物。その特級呪物の中でも格別に呪いが濃い、本気と書いてマジで危険な物を回収しなければならぬのだ。

何故このような危険物が学校に置いてあるのか。それは『強力な呪いを以って弱小な呪いを寄せ付けないため』だ。

呪いとは人の恥辱、後悔、辛酸といったマイナスの感情が溢れ、それが転じて形を為したものだ。その受け皿となり得るのが、学校や病院といった『人の記憶が残りやすい場所』だ。

生まれる呪いの強弱も能力も様々だが、一つ簡単なルールがある。——弱肉強食の世界。邪悪な呪いに弱小な呪いは寄り付かない。寄れば喰われるのは分かりきっている。



そのため強力な呪いを封じている呪物を、負の感情の受け皿となる学校や病院に置いておく事で、謂わゆる魔除けとなるのだ。

しかしこれはあくまで毒を以て毒を制する悪習のため、長い年月が経てば封印も緩まる。現に杉三高校の魔除けとして使っていた呪物の封印が解けかけている。封印の解かれた呪物は格好の餌だ。取り込んで自身の力にしようと企む呪霊がわらわらとやって来るだろう。このまま放置していれば、学校関係者の命が危ない。

先の巨大呪霊は、恵が見積もった所『二級』に相当する。これは特級を除き六項目ある呪霊階級——一級、準一級、二級、準二級、三級、四級と、上から三番目。現代武器で呪霊を倒せるとして、散弾銃を用いてギリギリといったレベルの強敵。普通の人間が敵うはずもないのは火を見るよりも明らかだ。早く探さなくてはならない。

しかし特級呪物という規格外さゆえか、呪いの気配が学校中に蔓延していて場所を特定できない。恵は右往左往している状態にあった。

(これじゃ近くにあんのかも遠くにあんのかも分かんね……………)

最悪の事態になる前に、さっさと回収しなければ。学校を閉鎖し、呪霊を祓いつつくまなく探す計画を、嫌々ながら練るのだった。

(……………何だ、アレ)

そして、蓮がソレに気付いたのは、高木との勝負のためにグラウンドに出て直ぐの事

だった。風変わりしない日常、その光景に歪な物が映り込んでいる。蓮は自身の目を疑った。

巨大なナニカが、ゴールポールに停まっている。知識量が《知恵の泉》ほどあるのではないかと才力研から噂されるほど博識だが、ソレに類似する生物を知り得なかった。感情があまり表情に出ない蓮でも、流石に度肝を抜かれる思いを味わった。

そう、先述した呪霊である。雨宮蓮は、呪霊を視認できている。

蓮は生まれつき霊感が強い人間だったが、同時に賢い子どもでもあった。幼少期から『変なの』が見えだし、『変なの』が人にくっ付いていると、その人の体調が悪くなっている事も分かっていた。そして『変なの』は他の人には見えないという事も、『変なの』を指摘すると気味悪がられる事も。そんな時は「肩に虫が付いてる」といつて払ってやるか無視していた。

しかしどうだ。このような巨大な『変なの』は、今生において見たことがない。流石にこの大きさのものを無視する事は出来なかった。

「蓮？ 何見てんの？ 砲丸投げ始まるよ」

「あ……いえ、変な形の雲だなあって思ってた」

「えー、変な蓮。……もしかして何か見えてた？」

「まさか。まだ明るいのに活動してる幽霊なんて聞いたことありませんよ」

どうやら節子にも武志にも、果ては見物客の誰も彼もが見えていないようだ。言い訳としては苦しいが、そう言う他無かった。

蓮の不安をよそに、グラウンドは盛り上がっている。高木が選んだ種目は砲丸投げだった。ジャージを脱ぎ、上着がタンクトップのみになっている。気合は十分と言ったところか。もうじきアラフィフになるのだから、その筋力は衰えるところを知らないようだ。砲丸を首につけ、一回転半の後押し出すように投球。遠心力が加わることで、飛距離を伸ばした。

「記録、十四メートル！」

日本最高記録は十八・八五メートル。記録十四メートルは、男子高校生の十二ポンドでベストテンに入れるレベル。見惚れるような肉体美は伊達ではないという事だ。観客から感嘆の声が上がる。

「——フツ」

「スゲーっ、高木全然現役じゃん！」

「どーすんだ、虎杖と雨宮!？」

野次が飛んでくるが、蓮はお構いなしに定位置につく。

「……ねえタケ、悠仁と蓮ってそんなに有名なの？」

「俺もよく知らねーんだけど……悠仁はS A S U K E全クリしたとか、ミルコ・クロコッ

プの生まれ変わりとか何とか。ついたあだ名が『西中の虎』

「……ダサくね？　つてかミルコ死んでねーだろ。蓮は？」

「二年の身体測定で運動部差し置いて二位全部搔つ攫つたつてのは聞いたことあるな。顔も頭も良いから悠仁より人気がある」

「非の打ち所ね……」

「俺も思う」

二人の雑談をよそに、ずっしりとした重みが蓮の手を襲う。高校生男子のそれは重量六キログラムと、手のひらサイズになっただけの十三ポンドボウリング球と何ら変わらない。

(……見様見真似でやれるだけやってみるか)

一度深呼吸し、フォームを作ってみる。さほど風は強くない。追い風には期待できないだろう。

先程高木が見せたように、球を首に、腰を捻り、勢いよく回転し、遠心力に速度を加えられるだけ加え、持てる筋力全てを用いて、思い切り、押し出すようにぶん投げた。放物線を描いて蒼空を飛んで行き——地に落ち転がった。果たして、記録は——

「——16メートル！」

「ムッ」

『おお〜!』

『雨宮くん凄〜!』

「よし」

ガッツポーズを取りながら、確かな手応えを感じる蓮。黄色い歓声が上がる。魅力がぐんと上がった気がする。《魔性の男》と密かに噂されるのも伊達ではないと言う事だ。当の本人は微笑しており、どこかほっこりとしていて満足気だ。これで高木の勝負に蓮は勝利したこととなり、オカ研での活動を認められるだろう。……蓮の活動を決めるのは、決して高木ではないのだが。

「よっし、バトンタッチ! 蓮!」

「頑張れ」

「おうともよ〜!」

互いに手を合わせて、投球順が移る。悠仁には緊張のきの字も無いが、しかし投方を決めあぐねているようだった。砲丸を手で遊びながら、高木に問う。

「ねーねー、投げ方分かんないから適当で良い?」

「ああ、この際それでファールは取らんさ。……すまんな虎杖、短距離選手のお前に力勝負を挑んで……。だがこれも、俺の本気をお前に」

「ゴイイン!!」

嫌な音を響かせながらサッカーのゴールポストに砲丸がぶち当たった。しゅうううう、と煙が上がりながら湾曲している。そこまで広くないとはいえ、グラウンドの両端に置いてあるその位置は、悠仁達から見てもかなり距離があることがわかる。

「えーつと、大体30メートルくらい……」

ちなみに、世界記録は十六ポンド七・二キログラムで二十三・一二だ。皆啞然としている。高木に至つては顎が外れていた。

「うっし、俺の勝ち！」

この場にいる皆は思った。

虎ではない、ゴリラだと。

しかもピッチャー投げである。前述の通り、男子高校生の投げる砲丸は六キログラムもある。ピッチャー投げなど出来るわけがないし、何より投球出来たとしても普通は肘や靭帯を壊すものなのだが、当の本人は何事も無いかのようにピンピンしていた。

「ナイスガッツだ、悠仁」

「おうよ！　じゃーな先生。俺、用事あつから。あと、ナイススローイング！」

悠仁がサムズアップしながら高木の肩を叩いて戻っていく。蓮も後に続いた。佐々木が労いの言葉をかけながら悠仁達に言う。

「お疲れー」

「ウスー！」

「悠仁も蓮も、運動部の方が良いんじゃない？ 才能腐らせとくのは勿体ないし、無理してオカ研残らなくてもいいのよ？」

「いや、俺色々あつてさ。五時までには帰りたいたいんだよね。でもウチって全生徒入部制じゃない？ そんなでどうしよーかなーって悩んでる時に、せつちゃん先輩が誘ってくれたってワケよ」

「オレ、怖いモノ幽霊好きだから。あとバイトに間に合わせたいし」

悠仁には何かしら事情があるようだが、対して蓮はそうでもなさそうにしているのだった。

「ってか、先輩ら俺らがいないと碌に心霊スポット行けないじゃん。怖いのが好きなくせに」

「うっさいわね。好きだから怖いのもーだ」

「まあでも、雰囲気が良いのは確かだ」

「そーだな。結構好きなんだよね。先輩が良いならいさせてよ」

「んま、そういう事なら？ ねえ？」

「まあな〜？」

先輩二人が照れ照れしている。その一部始終を、伏黒は観察していた。

（あの虎杖つてヤツ凄いな……素であの力か。禪院先輩と同じタイプかな。片割れの雨宮はまあまあ……いや、力をセーブしてんのかも）

正確には現実逃避に近かったが、野次馬の一人となっていたのは確かだ。見ている場合ではなかったと少し反省した。

「あつ!?! もう半過ぎてんじやん! やつべ!」

「お見舞いか?」

「そ! んじゃ俺行くわ!」

「倭助さんによろしく伝えといてくれ」

「おー!」

そう言いながら、悠仁が走り去っていく。その折に、偶然か必然か、恵はすれ違う形となり——肌が騒さわつく感覚を覚えた。

（濃い呪いの気配! 間違いない、コイツが……!）

——特級呪物の持ち主。そう考えた時点で、恵は反射的に悠仁に声を掛けていた。

「オイ! ……つて早ッ!」

「虎杖つてトラックより早く走れるらしいぜ」

「マジ? やべーな」

しかし悠仁は遙か彼方へ。見知らぬ男子生徒二人の言う通り、恐らく自動車とトント



ンくらいのスピードだ。呪力を用いれば恵も追い付けるだろうが、人の目がある以上、派手な行動は出来ない。それに、呪力の発動で呪霊を刺激でもすれば、この場にいる教師や生徒が危険に晒されてしまう。

「クソッ」

悪態を吐きながら、恵は素の力で後を追いつめた。

「……………誰だろう？」

恵が悠仁を追いかけていくの その一部始終を、蓮は見ていた。気にする必要はないと断じ、すぐに意識の外に放り出したが。

「蓮。アレほど解くの、今夜ね。今日バイト無いっしょ？」

「無いですね。良いですよ」

「やっつりい。人員確保！」

### 3.

窓が開いている。風にカーテンが靡なびいた。悠仁は鬱陶うつとろしく手で払いながら、花瓶を花で満たしていく。

白い部屋。鼻腔を刺す薬品の臭い。二人の男の影。一人は悠仁。もう一人は、病弱そうな老人。悠仁の祖父、虎杖倭助わすけだ。

痩せ細った腕。皮と骨だけしかないかのように細々としている。皺だらけの顔。目のシミ。髭は生えていない。坂立った白髪。目付きの悪さが、どことなく悠仁との血の繋がりを思わせる。

硬く結ばれた倭助の口から、徐おもむろに言葉が紡がれる。

「悠仁……お前の両親のことだが」

「興味ねーよ」

ばっさり切り捨てた。

「……………お前の！ 両親の！ ことだが！」

「や、だから興味ねーって爺ちゃん」

「くくくつ、オマエなア！ 男はカツコつけて死にてえんだよ！ 最期くらいカツコつ

けさせろクソ孫が！」

「いつもどーりでいいってば」

空気読め！ と毒を吐かれる。拗ねたのか、そっぽを向いてしまった。妙に片意地な所があるのが、この爺の性格だ。

「蓮はどうした？」

「学校に残って部活。爺ちゃんによろしくつてさ」

「少しは蓮みたく老体を労る誠意を見せてくれんかねえ、ウチの孫も」

爺ちゃんが溜め息をつく。

「つたく、ゆとりがよ……」

「ハイハイ、悪うござんしたね」

気にせず花を生ける悠仁。

「悠仁」

「んー？」

「オマエは強いから、人を助けろ」

唐突にそんなことを言われると、流石の悠仁でも手が止まる。倭助の方を見るが、そっぽを向いていて表情は分からない。倭助は気にせずに続ける。

「誰でもいい。手の届く範囲でいい。とにかく、人を助けろ。」

特に蓮だけは死ぬ気で守れ。アイツは良い奴だ。お前には勿体ないほどな。いつだって、お前の助けになってくれる……だからこそ、お前もアイツを助けろ。

——オマエは大勢に囲まれて死ぬ。

……俺みたいには、なるなよ。」

そう言つて、黙りこくつてしまった。

静寂が二人を包む。

「……爺ちゃん？」

声をかける。

返事はない。

……この静寂の意味を、悠仁は解ってしまった。

「……………」

ナースコールを押す手が震える。受話器から女性の声が聞こえる。上手く声が出ない。要件の確認を促している。

目頭が熱い。薬品ではなく、別の要因によって鼻腔が刺されたような感覚がする。溢れないように、上を向く。嗚咽を堪え、悠仁は声を振り絞った。

「——爺ちゃん、死にました」

人を目の前で喪うのは初めてだった  
それでも、声は震えていた。

#### 4.

夜。暗い病院。もう本日の受付は締め切っており、光源は受付の蛍光灯のみ。そこに二人。一人はナース、もう一人は、先刻祖父を亡くした虎杖悠仁だ。

「——うん、必要な書類はこれで全部ね」

「っす。お世話になりました」

礼を言いながら、悠仁はポールペンを置き、死亡書をナースに渡した。目元が赤いの

は、気のせいだ。

「ほんとに大丈夫？」

「……なんつーか、まだ実感湧かないっす。でも、いつまでもウジウジしてたら、爺ちゃんにキレられるんで。あとは笑って、こんがり焼きますよ」

「言い方……」

鼻を嚙りながら言う。残ったのは少しの寂寥。それでも前を向くのだと、悠仁は決めた。寂しさはあるが、後悔の無いように接してきた。倭助も安心して逝けたと思う。

「虎杖悠仁だな」

ふと、声が聞こえた。聞き覚えのない声だ。発した方向へと顔を向ける。ボサボサの黒髪で、喪服のように真っ黒な服を着ている。顔立ちから見ても、同じ年くらいか。眉間に皺が寄っている。

「呪術高専一年の伏黒恵だ」

「……誰？ こっち喪中なんだケド」

「悪いが、あまり時間がない。お前の持っている呪物について話したい」

「ジューブツう？」

「……とにかく、こっちにこい」

ナースに一礼して、彼女に聞こえないであろう待合室に来た。受付時間はとつくに過

ぎているため、かなり暗い。目を凝らせば何となく近辺にあるものが分かる程度だ。  
「お前、コレ拾っただろう」

そう言いながら差し出されたスマホの画面には、『さいまおんてき摧魔怨敵』と書かれた札が貼られた掌サイズの箱と、札がびつしりと貼り付けられた柱状の何かが写っていた。

「……あー！ はいはい、ひろったわ。百葉箱んとこで」

「ソイツは危険なものだ。今すぐに渡せ」

「でもそれ先輩が気に入ってんだよね。俺は良いけどさ、理由くらい説明してよ」  
「……………はあ……………」

溜め息を吐きながら、恵は呪物、及び呪霊について粗方を話した。

「——分かったか？」

「うん。大体」

「なら、今すぐに寄越せ」

「いや、だからそれは先輩に言えって」

「はっ？」

写真に写っていた箱を投げ渡される。

恵が中を見てみると——本命の呪物が、無い。——つまり。

（俺が追っていたのは……………この箱にこびり付いた呪力の残穢だったのか……………!?)

恵は悠仁の胸ぐらを掴んで叫んだ。

「中身は！」

「だから先輩が持つてるってば！」

「ソイツの家は!？」

「知らねーよ！ 確か泉区の………そう言えば」

「何だ!？」

「先輩と友達、今日の夜学校でお札剥がすって言ってたな」

「———っ、すぐに案内しろ」

「え、もしかしてヤバいの？」

「ヤバいとか、もうそういう問題じゃない。」

——ソイツ、死ぬぞ………!」

悠仁達は、既に走り出していた。

5.

「うーん、取れないい〜」

「なあ、これ夜に学校に忍び込んでまでやることか？ 蓮、電気つけてくれ」

「はい」

「ダメよ！　こーゆーのは雰囲気が一番大事なんだから！　つけなくていいからね！」  
『ええ……』

同時刻、オカ研部室。明かりは蠟燭一本のみ。そこに影が三人。節子、武志、蓮だ。既に時刻は夜の八時を過ぎていくにも関わらず、光源が心許ないためかなり暗い。

「どーせ何も起こりやしないわよ」

「そうですかね……」

「いや、蓮が言うとしゃレになんねえんだが」

「もしかしたら、それ本物かも」

「ちよつ、止めてよそんな事言うの」

「冗談ですよ」

「靈感強えお前が言うど冗談に聞こえねーんだよ」

「それよりほら、行けそうじゃないですか？」

「ん。そうね、もうちよつとで……あつ！　取れた！」

ベリッ、と音を立てて札が剥がれる。——だが、その中に入っていたのは……。

「うわつ、何これ!？」

「どうした!？」

「……これは……」



——人間の指、だった。

「えっ……えっ？　これ、本物……？」

「だとしたら、これ、相当やばいんじゃない……」

落ち着かない二人の先輩。蓮の額にも変な汗が流れる。無理もない。オカルトを研究するとは言っても、このような本物にありつけた事は一度もないのだから。興奮と恐怖がせめぎ合う中で、蓮は——おどろおどろしい程に粘着した視線を、上から感じた。——まるで、捕食対象として見られているような、昔、嫌と言うほど味わった——

——醜悪な殺意。

「——つ、二人とも外へ!!」

「えっ!?!」

「何だ!?!」

「いいから早く!!」

耐えきれず、蓮は二人の手を取り、外へと飛び出した。

……その刹那。夕方に見た化け物に良く似た『ナニカ』が、天井からこちらを見て嗤っているような気がした。

——走らなければ、逃げなければ。

走る。廊下を走る。暗闇を駆けていく。肺が千切れそうになる。だが死ぬよりはマ

シだと言い聞かせ、久方ぶりの命の危機に冷静さを失いながら、矢鱈めつたらに走り続ける。

どこかの棟、教室の角を曲がり、投げ出す様に崩れ落ちる。酸素が足りない。肩で呼吸を繰り返す。二人はちゃんと着いてきてくれていたらしい。一抹の安堵が募る。

「ハアツ、ハアツ……もう、一体、何？」

「どうしたつ、てんだよ、蓮」

「シツ」

呼吸を整えながら、静かにしろ、と指で合図を送る。角の柱に背を預け、カバーの体勢を取る。——その仕草は、あまりにも手慣れ過ぎていた。

さておき、目を凝らす。二人も蓮の真似をして柱に身を隠しながら奥を見るも、あまりにも暗すぎて黒以外に何も見えない。宵闇の中、しかし蓮の目は、奥で蠢く何かを捉えた。

……ひたり、ひたり、と音がする。まるで裸足で歩いている様な音。

呻き声が聞こえる。それは、まるで人語のようでいて、しかしその言葉におそらく意味はない。

二人も闇に目が慣れてきた。その『何か』の容姿は——二足歩行の巨大な蛙のようである——蓮だけに視える、『変なの』によく似ていた。

「イま なんじ ですかアアアあ」

「——っ、ひ」

悲鳴を上げようとした節子の口を、蓮は手で強引に塞いだ。

「オイ……マジかよ……」

「本物……なんでしょうね、アレ。その指も」

「嘘……、私……」

節子と武志が絶望の淵に立たされる。だがここで足を止めてしまつては、すぐに追いつかれ、一巻の終わりだ。それだけは避けたい。

「とにかく、逃げましょう。音を立てずに着いてきてください」

「……う、うん」

「お、おう」

蓮は二人をどうにか奮い立たせながら、化物から視線を離し、一階に繋がる階段のあの方へ向いて、足を踏み出そうとした。

——しかし、もう遅かった。

「……………嘘だろ」

蓮にしては珍しく、無意識に弱音を呟いた。振り向いたその先、進もうとした廊下の奥。唯一の脱出経路にて、新たな化物が遠くからこちらを見ていた。海を舞う蛸のよう

な、新たな化物。更にその奥にも、別の個体が見える。

四面楚歌。八方塞がり。逃げ場無し。

蓮達は、嵌められていた。

「いいま なンぢ ですカああ」

そんな三人を運命は嘲笑うように、二足歩行の蛙の化物が柱の側に辿り着いていた。

——その細腕を、節子に伸ばしながら。

「あ」

5.

「そのお札って簡単に取れるモンなの!？」

「呪力の無いヤツには基本無理だが、今回ばかりは中の呪いが強すぎる！ 加えて封印

も年代物だから、紙切れ同然になっちまってる！」

夜の仙台を二人が疾る。友の命が危ない緊急事態。しかし二人は逆に落ち着いていた。慌てればその分時間も体力も消費する事を分かっていた。

「こつち、近道だ！」

（つつても、”呪い”なんてまだピンと来ねえよ……）

呪いが人を蝕み、殺す。

そのような空想や御伽噺を簡単に信じられるほど、悠仁の頭は柔らかくはない。しかしこの伏黒恵の焦りようは、『本物』がいると考えてもおかしくはないと悠仁は思った。ならば急がねば。そう思いながら、全ての力を振り絞って走り続ける。果たして、二人は杉沢第三高校に到着した。

ぞあッ

——瞬間、全身の身の毛がよだつような感覚を、悠仁は覚えた。

(……………これが……………『呪い』なのか……………!?)

禍々しい気配を学校から感じる。腹の底が重い。吐気を催した。内臓が押し潰されそうさ。今までに感じたことのない重圧が悠仁を襲う。思わず後ずさった。

「虎杖、部屋はどこさ？」

「四階の家庭科準備室だけ……………まさか一人で行くのか？」

「ああ。お前はここにいろ」

「ま、待てよ！ ヤバいやツなんだろ!? ——だったら、俺も行く！」

「……………」

「先輩方とは二ヶ月くらいの付き合いだけど、友達なんだよ！ だから」

「……………にいろ」

「……………」

恵の言葉の重さに、悠仁は何も言い返せなかった。  
走り去っていく恵を前に、悠仁は何も出来なかった。

6.

(……………今、どうなった)

意識が遠い。全ての感覚が薄い。ここ数秒の記憶が朧げだ。

まず聴覚が回復した。聞こえるのは嗟い声と、おそらく、節子の悲鳴。

触覚が冴えていく。体が強く締め付けられており、今にも握りつぶされそうだ。

嗅覚を再確認した。ツンと鼻腔を刺すような、鉄と胃液の臭い。

味覚が機能した。喉奥から血の味がする。

視覚がようやく戻ってきた。目の前にいたのは、先刻の蛙の化物。

「蓮!!」

(……………そうだ、確か……………せつちゃん先輩を、庇ったんだ。それで、奴の手で床に叩きつけられて……………)

現在、蓮の体は彼奴の掌の内にある。床に叩きつけられた時、おそらく頭部を殴打した。それにより、極めて軽いものではあるが脳震盪を起こしたのだろう。

まだ回らない頭をどうにか回転させ、化物の手から逃れようともがく。細腕故にすぐ

に振り解けると蓮は考えたが、しかし、化物の力量は蓮の想像を遥かに超えていた。解けない……否、それどころか、振り解こうとする度に締め付けが強くなって行くのを感じる。体の芯からミシミシと嫌な音が聞こえる。

(遊ばれている……という、わけか……?)

絶体絶命の窮地。為す術はもはや無い。

(こんな時こそ、アレが使えたら……!)

「うわああああああああっ!!!」

しかしその考えも、今度は武志の絶叫で掻き消える。

後方で(物理的に見る事は不可能なので蓮の直勘になるのだが)武志が、新たな化物を見つけたのだろう。おそらく蓮が振り返った時に見た、浮遊する蛸の化物だ。

(——どうする。どうすれば、二人を救える?)

しかし……しかし蓮は、蓮だけは。この最悪の状況でただ一人、絶望に染まってはいなかった——。

雨宮蓮は普通の人間ではない。

そもそも、雨宮蓮は『雨宮蓮ではない』のだ。

元々は死した人間であり、そのまま消えてゆくはずの存在だった。名前も雨宮蓮ではなかった。

生前の蓮は、あまり良い行いをして生きてとは言えない。成り行きとはいえ、他者よりも波瀾万丈な人生を送つて来た。故に（そもそもあまり信じてはいなかったが）輪廻転生するにしても、畜生道だとか地獄に落ちるものだと思つていた。しかし何の因果なのか、どういう奇跡が起こつたのか、新たな人として生まれ、育つてきたのだ。

故に蓮はこう考える。自分だけならまだしも、此奴等が、二人をみすみす見逃してくれるとは思えない。次は二人だ。自分を惨殺した後、殺意が二人に向けられるだろう。そして、死ぬ。……それは駄目だ。自分のように、第二の人生を誰もが送れる道理などないのだから。

——ああ、そうだ。忘れかけていた。

オレはずっと、理不尽と戦つていた。世の中の理不尽をぶち壊したくて、救済を求め声すら上げられない現実をどうにかしたくて、ずっと戦つていた。

今、目の前に理不尽の権化がいる。弱者を踏み躪ることを何とも思わない醜悪の化身が。そんな奴に、何の罪も無い者の命を奪わせたりなど、させてなるものか。形振り構わず、蓮は大きく息を吸つた。

「聞こえているだろうー！」

蓮が叫んだ。誰かを呼んだ。返事は無い。節子や武志に向けられたものではない事は確かだ。だがお構いなしに、蓮は続ける。



「お前はオレ……オレの半身だ。もう一人のオレだ！ ……なら解るだろう。この煙りを、この怒りを！」

何を言っているのだろう、と節子らは思った。あまりの恐怖にパニックになっているのかもしれない、と。

そして、ならば助けなければと武志らは思った。可愛い後輩が命の危機に瀕している。ここで動かなければいつ動くのだ、と。

だが肝心の脚は、まるで木偶の棒のように使い物にならない。腰が抜けてしまっている。心に身体が追いついてこなかった。

「誰も守れないまま、犬死になんて……そんなこと、出来ない！ やる事は前と何も変わらないんだっ！ 聞こえてるなら返事をしろ！ そして力を貸せ！！

——アルサーヌ!!!」

——ようやく目が醒めたか。

瞬間、頭蓋が割れた。

あ

否、割れてはいない。頭を押さえた手の感触で分かった。

ただ、頭痛がする。ただそれだけの一事に強制的に意識が向かされる。激痛が消えない。眼球の奥が金槌で叩かれたように痛い。連続している。耐えられない。鈍痛が終わらない。変な汗が流れる。

「——っ、あ……あアツ、ぐ、あ、っ、がああああッ！」

一瞬だけ……ほんの刹那にも満たない一瞬だけ、蓮の瞳が黄金に煌めいているような気がした。だがそれよりも異様なのは、先程まで何も存在しなかった顔面に、白いドミノマスクが上半分を覆っている事だ。——蓮はその冷たい感触に、えも言われぬ懐かしさを感じた。

——だがいいさ。お前に出来る事など、ただ只管ひたすらに前へ突き進む事のみよ。

「いいま なんだいいいいいい」

目の前の化け物が、もう一本の腕で、今度は頭を握り、そして潰そうとしてくる。その腕の隙間から、蓮は化物を睨み付けた。

——愚かしくゆこう。例え地を這い、辛酸を舐める未来が待っていたとしても。

「ハアーツ……ハアツ、っ、く、ああああああアアアアアツツ!!」

絶叫しながら、思い切り仮面を剥いだ。

血液が宙を舞う。どうやら彼奴の腕よりも、蓮が仮面を剥がす方が早かったらしい。

……顔面に触れる空気が痛い。先の頭痛に負けず劣らず激痛がする。仮面を剥がす際に皮膚ごと持っていかれたのだろう。剥がした仮面は地に落ち——蒼く、燃えた。

——再契約だ。我は汝、汝は我。

刹那。蒼く、眩しく、それでいてどこか淡い光が蓮を包んだ。あまりの眩さに、化け

物も思わず手を離し目を覆った。

姿が変わる。変わっていく。先程まで着ていた制服は見る影もない。溢れ出していた血が、蒼炎ごと蒸発していく。

全身を漆黒が覆う。襟と裾の長い黒コートの左胸には純白のポケットチーフがあり、どこか優雅さを感じさせる。ズボンもブーツも漆黒で、唯一の有彩色といえば、真紅の手袋のみ。その装いは、まさに『怪盗』と呼ぶにふさわしい。

——死してなお、尽きぬ魂を燃やし続ける我が半身よ。

蒼い粒子がリボンとなつて、蓮の背後に新たな存在を創り出す。それは、かろうじて人型である事は解る。ただ、この場にいる誰よりも巨大だ。

—— お前の為すべき事は、お前自身が良く解つていよう？

赤を基調とした外套を身に纏い、顔と呼ぶべき部分は黒いバイザーになっている。

鼻は無く、目と口がまるで煉獄を連想させるかのごとく赫い。

クラウンが異様に高い漆黒のシルクハットからは、歪に整えられた剛角が威厳を見せる。

背には堕ちた漆黒の巨翼。羽ばたいた時の風圧で羽根が舞い、月明かりと蒼い粒子に当てられて玉虫色に煌めく。

怪盗紳士の悪魔、逢魔の略奪者が、今ここに顕現した。

——さあ、産まれ堕ちよ。お前の叛逆は、ここからまた始まるのだから……!!  
「奪え。アルセーヌ」

蓮は——否、ジョーカーは、不敵に笑っていた。

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n  
L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .  
# 1   I   a m   t h o u ,   t h o u a r t   I

## #2

7.

力が湧き上がってくる。全能感が心を満たしていく。身体中の血が滾たぎっているのが分かる。早く暴れたいとうずうずしている。

最高に良い気分だ。自然と笑みが溢れる。……それも、普段の彼からは想像も出来ないような、妖しい笑みが。

手袋を締め直して、ジョーカーは改めて懐かしさに浸った。

——思えば、前もここから始まったのだ。どうしようもない絶望の窮地に立たされ、後に友となる男を助けたいがかために叫び、そしてこの《アルセーヌ》が目醒めた。

怒りの結晶、叛逆の決意。

愚者のように、只管ひたすらに前へ。

それが、アルセーヌというもう一人の自分ペルソナなのだ。

——腕は鈍っていないだろうな、我が契約者よ！

「無論だ。……蹴散らすぞ」

——良かろう。我が力、存分に振るうが良い!!



だ。

アルセーヌの両手に呪怨のエネルギーが溜まっていく。敵を嬲り、穿つ為だけに存在する赤黒い怨みの塊を、アルセーヌは思い切り床に叩き付けた。一瞬の内にそれは後方の床を伝播して行き——無数無限の怨念の剣となりて、化物の群れを貫いた。

——《マハエイガオン》。それが、彼奴等を屠った技の名だった。

またジョーカーも、ただそれを傍観していたという訳ではない。アルセーヌが大量虐殺をしていた間、ジョーカーなりの徒手空拳で二足歩行の蛙と戦っていた。

右の手が来れば、こちらは右の拳を脇腹に突き刺す。左の手が来れば、今度は左の拳で顔面を抉る。巨口で喰らおうとするのなら、膝で強制的に塞ぐ。ある瞬間は掌底で、ある瞬間は肘で……その攻防の最中、ジョーカーはある違和感を覚えた。

(手応えが無い。それどころか……)

先刻よりも明らかに肥大化している。出会った時は一五〇センチ程度の身長だったのだが、既に二〇〇センチを超えた。あまりにも異様だ。様子見を兼ねて、念のため一旦退がった。視野が広くなった事で、ジョーカーは唐突な肥大化の正体に気付けた。

曲がり角の奥から来たる化物の群れ。それは芋虫であったり、四足歩行の蛙であったり、山椒魚のようであったり、蜈蚣のようであったり。それらを蛙は取り込んで、体の一部と化している。



振り返ると、井口や佐々木を無視しつつジョーカーの横を通り過ぎていく化物の群れ。それらも、自分から取り込まれに行っている。今の所、狙われているのは自分だけらしかった。

(道理で効かない訳だ)

叩いた所で片っ端から強化され、結果的に無意味となるのだ。効かないというよりは『効かなくなっていく』という方が正しいか。

ジョーカーはこの時知る由も無いのだが、呪霊達はこの時、呪物の取り込みを一旦取りやめ、ジョーカー敵の息の根を止める事を最優先事項としていた。

眼前の人間は危険だと、本能が告げている。事実、一瞬にして(三、四級ばかりの有象無象ではあるが) 同胞を十何体も葬り去った。少なくともこの人間には、今の我々の力では敵わない。

ならばどうするか。導き出した答えは『共同戦線』だった。自ら有象無象の『群れ』を『個』に集め束ねる——すなわち融合する事で、本来であれば三、四級程度の呪霊が、この時だけ準二級レベルの呪霊と成っていた。

この敵を倒せれば、後は野となれ山となれだ。その後で、後ろの二人ごと呪物を取り込めば良い。そう考えた。

——そこに、新たな乱入者が現れるとも知らずに。

## 8.

杉三高校校門前。伏黒恵と別れてから、少しだけ時間が経過した頃。虎杖悠仁は、依然一步も前へ進めずにいた。

——ここにいろ。

恵から発されたその言葉が重石おもしとなつて、悠仁の足を引つ張り続けている。

(……………何、言う通りにしてんだ、俺は)

頭が『動け』と願う。体が拒否する。神経が頭と体で分断されたような気がする。心の奥底にある感情——『恐怖』が、悠仁の全てを支配した。

体は岩のように動かない。足は震えて意味を成さない。己を諭すために腕を振るう事も出来ない。

濃厚な死の予感。一步でも前に進んでしまえば、その重圧に体が吞まれそうだ。冷たい汗が流れる。呼吸が乱れる。

学校にはまだ井口武志がいる。佐々木節子がいる。そして幼馴染である雨宮蓮がいる。ならば、助けなければ、助けなければ、助けなければ。

ここで待ち続けるなど出来ない。

ここに居よう。

皆を助けるために、恵は戦っている。

それがどうした。ここに居よう。

先輩も、蓮も、生き延びるため、きつと戦っている。

向こうは危険だ。ここに居よう。

なら俺は、今何をすべきだ？

俺は戦わない。ここに居よう。

俺は、何のために戦うんだ？

そんなの知った事じゃない。ここに居よう。

——オマエは強いから、人を助ける。

——特に蓮だけは死ぬ気で守れ。

……爺ちゃんは死ぬ時、怖かっただろうか。

そのような雰囲気はしなかった。最期まで強情張りで、短気で、頑固で、口を開けば文句ばつかりの、いつもの爺ちゃんだった。最期まで、爺ちゃんは『爺ちゃんらしく』あろうとした。そして爺ちゃんらしく死んだ。

見舞いなど、俺以外に来やしない。

俺みたくになるな、なんて、言われなくても分かっている。

蓮だけは死ぬ気で守れ、なんて常日頃思っている。

でもさ。爺ちゃん。

爺ちゃんは、正しく死ねたと思うよ。

ならば……理不尽の権化とも言えるそんな奴等に殺されるのは、正しい『死』だろうか。

「~~~~~ツッ！ ああくそツ、迷うな虎杖悠仁!!

人を助ける！ 蓮を守れ！ 絶対死なせんじゃねえ!!

——そんなの、間違った『死』だ!!」

己を鼓舞した所で、恐怖は消えない。

しかし、少しだけ……ほんのちっぽけな勇気が湧いた。

それが分かった時、悠仁は既に走り出していた。

その顔に、もう迷いは無かった。

彼奴の体には、様々な種類の化物が纏わりついており、先の二足歩行の蛙だった時の面影はおろか、原型すら無くなっている。肥大化しすぎた肉体は、もはや這いずりまわることではしか移動する事が出来ないだろう。ジョーカーは率直に、現在の彼奴を「ジョジョのポルポみたいだ」と思った。そして安易に攻める事は出来ないとも思った。

肥大化する前であれば、ペルソナで対応出来ただろう。しかし強化されてしまった以上、ジョーカーは、アルセーヌでは一発で決めきれないと直感した。更に、後方にいる武志と節子の存在が、ジョーカーの不利に拍車をかける。生前から守りながら戦うのは苦手だった。

切り抜ける方法——もといスキルはある。だがそれが決まらなければ、二人を危険に晒すことになる。どうにかして隙を作れないだろうか………そう、思った矢先。

ガシャアアアアン!!!

突如として、窓硝子が割れた。

ジョーカーも流石に驚愕に目を潜め、顔面を両腕で庇った。——しかしその目は、別の意味の驚愕で見開かれる事になる。

虎杖悠仁だ。硝子を蹴り破った張本人は、見紛うことなく、我が親友の虎杖悠仁であつた。

「オオオオオオオオオ、ラアツツ!!」

その勢いのまま、悠仁は化物の顔面を殴り飛ばした。直後にバランスを崩し、転がるように着地。しかし多少は効いたようで、怯む事はないものの、注意が悠仁に逸れている。千載一遇、またとないチャンス。この機は逃せない……!

「行け！ 蓮!!」

「——アルセーヌ!」

アルセーヌの持ち得る最大火力を誇る物理スキル。その双腕から放たれる一撃は、音の追隨を許さない。それはもはや打撃ではなく、斬撃の域に達していた。

——《ブレイブザッパー》。ジョーカーが生前に愛用したスキルだった。

惨い音。肉を無理やり裂いた音。一つの生命が消えていく。

煙のような、霧のような、塵ちりとなって還るのを見送った。手袋を締め直し、アルセーヌもまた、仮面へと戻った。

10.

誰かの叫声が聞こえる。男性にしては高い声だ。おそらく、虎杖悠仁と一緒にいた癖毛の男子学生のものだろう。既に部屋を出ている事に、伏黒恵は焦りを感じ、疾る速度を更に上げた。階段を駆け上がり、渡り廊下の扉を開いた所で……ソレは、恵を嘲笑う

かのようにそこにいた。

野球のバットの形状をしているが、頂点に歪に生えた歯を持つ口があり、体に無数の目がこちらを見ている。まるで百々目鬼腕とどめきに無数の目を持つ女の妖怪のようだ。これを呪霊と呼ぼずして何と呼ぶのか。

「ちゅーる　ちゅーる」

「チツ——邪魔だ」

しかし相手が悪すぎた。喰らう側は自身ではなく相手だった事に、呪霊は気付く事が出来なかった。恵が呪霊に対し舌打ちをしたのは、余計な手間が増えたための苛立ちによるものだ。

両手で犬を模るように掌印を結んだ。左手は中指と薬指を分ける事で口を、親指で耳を、右手は左手を握るようにして顔を表した。

その直後、恵の足元にあつた影が湧き上がり、やがて影は二つの新たな存在を生み出した。

「ウオオオオオオオ——ンツツ」

「ガルルルルル………」

阿形と吽形のように二対で現れた、吠える白い犬と唸る黒い犬。白い犬の額には三角形の模様があり、黒い方の額の三角形は逆さになっている。

伏黒恵は、影を介して式神を操る呪術師だ。手指の掌印を作ることで、自身の影から式神を呼び出す《十種影法术》を使う。これより眼前の呪霊を屠る二匹の犬の名は——  
 「【玉犬】……喰つていいぞ」  
 『グルルアツツ!!』

命を下したその刹那。待ちきれんとばかりに飛び出した二匹が、バットの呪霊を斬り裂き——否、噛み裂いた。

恵に止まっている暇はない。足止めすら成りはしない雑魚を蹴散らしながら、やたらデカイ学校を走り回る。——しかし途中で、恵は何か違和感を抱いた。

（呪霊が思ったより少ない……いや、少なく、な、つ、た……う……）

そう、少な過ぎる。本来ならば、残飯に集る蠅のように、呪物へと集まっていくはずなのだ。呪霊数が多くなるのは当然だし、それも《特級呪物》となれば尚更の事。しかし、一定の場所を通り過ぎた時点で、その数が減った気がした。遭遇しなくなって来たのだ。

援軍の可能性は低いだろうと恵は考える。そも呪物回収の任務に戦闘を想定してはいなかったし、何よりあのバカ上司が来るとは思っていない。

（……まさかとは思うが……）

呪物を取込み、より強くなった呪霊が、他の呪霊を蹂躪しているのではないか。その



ような最悪の事態を想像してしまった。そうやってしまえば、恵の手に余る任務になる。そうなる前に上司に連絡を……と考えたところで、恵は気付いた。

(あつ、帳とほり下ろしてねえ)

恵、うっかり。

それはさておき帳とは、『非術者から内側の様子を認識出来なくする』結界術だ。その結界は、内側から出ようとする意思を持つ者を、何人たりとも、どのような聖人君子であつても、決して出すことを許さない。また(これは副次的なものだが)電波障害も引き起こすため、助けを呼びにくいというのも特徴だ。

——そも、なぜ視認できなくする必要があるのか。それは、呪いが人々のマイナスの感情から生まれる事に起因する。目に見えない呪いに対する恐怖、不安を取り除き、新たな呪霊の増加を抑制するという意図のもと発動される……のだが、呪物を回収する事を考え過ぎるあまり、帳を下ろすのを恵はすっかり忘れていた。

しかしそのうっかりが功を成した。帳を出していないという事は、救援を要請し易いという事。気に食わないが早速スマホを取り出して『五条先生』にコールした。

トウルルルルル

『お電話ありがとうございま〜ちゅ♡ あなたの Good Lookin' Guy、五

じょ』

「人違いでした」ガチャッ

やはり自分一人の力で何とかするしかない。恵は強く思った。通話を切る時の親指の力が若干強かったように見えたのは、気のせいだろう。

そうこうしている内に走り続けて、家庭科準備室に続く四階の廊下を曲がった所で――恵は異様な光景に邂逅した。

甲高い音を響かせてガラスが割れる。その中にいたのは、先程待つていろと念を押しただけの虎杖悠仁その人だった。悠仁が呪霊の顔面を殴り飛ばし、その隙を突いて何者かが赤黒い何かに指示を出したようだ。

「――アルセーヌ！」

赤黒い悪魔の、その両の巨腕と鋭利な爪から放たれた『打撃を超えた斬撃』が、惨い音を立てながら呪霊を屠った。残骸や紫色の血液が、壁や床を汚していく。

（――なん、だ、コレ）

恵は、自身の目を疑った。悪魔が呪霊を屠る点においても――夕方に見た癩毛の学生らしき者が居るといふ点においても……その学生が、何やら妙な格好をしているといふ点においても。

術式は何だ。目的は何だ。味方なのか。敵なのか。そもそもコイツは何者だ……と、あらゆる思考が恵の脳内を支配していく。

すると、赤黒い巨人が蒼い粒子となつて仮面へと取り込まれ、完全に消えた。手袋を締め直して、振り向き——、恵を見て、硬直した。

(この反応……コイツ、呪詛師か?)

それならば、いざとなれば殺害する事も辞さない、恵は覚悟を決め、玉犬を控えさせた。そして、ついに瘵毛が口を開き——

「……………犬と、うに?」

「ぶん殴るぞお前」

ちよつとイラつと来た。

11.

「蓮、ナイスファイト!」

「そつちも、良い援護だった」

掌を打ち合わせる。

「つてか、恵じゃん!」

悠仁はこの青年と面識があるらしい。恵と呼ばれた青年は、頭を押さえながら悠仁に言う。

「(いきなり下の名前で呼んで来んのかよ……)はあ……。何で来た、と言いたい所だが、

良くやった」

「なんでそんな偉そうなの？」

「——それよりも、問題はオマエだ」

恵がジョーカーを向いた。身に覚えが………無い事も無い………というかありまくるジョーカーだが、シラを切るように自身を指差した。

「オマエは一体何者だ？」

「どうも、雨宮蓮です」

「真面目か！ ……いや、そういう事じゃねえ！」

「つてか蓮、何そのカッコ!？」

「ハイカラだろ？」

「ハイカラだな！」

良いツツコミが入った。裏で悠仁達が「良いなー、カッコいいなー、ねーねー、後で俺にも着せてよ」「後でな」と言い合っているのを、恵は無視した。

「頭が痛えよ……もういい、後にしよう。呪物はどこだ？」

「……こ、これの事？」

恐る恐る、節子が先程お札を剥がした指を見せる。二人は柱の影と一体化し、出来るだけ存在感を無くしていたようだ。アルセーヌの攻撃や呪霊に当たらなかったのは、不

「幸中の幸いと言った所か。」

「やっぱり解ほどいてたか……」

「や、やっぱり本物なの……ですか？」

「あつ、先輩。コイツ俺と同年代タメだよ」

「あつ、そうなんだ……」

「立てる？」と悠仁が問う。武志は問題無かったが、節子は完全に腰が抜けていた。ジョーカーが手を取って引つ張り立たせる。なまじ足が長くスタイルが良いので、この一動作だけでも絵になる。初対面の反応もあつてか、恵は更にイラつと来た。

余談だが、お札を解く前にトイレに行つておいて良かったと思つた事を、二人は心の中に留めておくことにした。

「つてか、その犬何よ？　むっっちゃ可愛いな」

玉犬がおすわりの体勢で待っているのを見て、悠仁は問うた。

「俺の式神だ。やっぱ見えてんのか」

「式神？」

「……呪いつてのは、普通は見えねえモンなんだよ。こういう死に際とか、特別な時は別だが」

「あー、確かに俺、幽霊とか見た事ないしな。でも蓮は？　お前霊感強いっしょ？」

「ああ。見えてた」

「は？」

伏黒が眉を擡<sup>しか</sup>める。

「小さい頃から見えてた」

「……何も思わなかったのか？ 気味が悪いとか……」

「特に何も……何か変なのがいるなーとしか」

「……ますますお前が謎だよ。生い立ちにしろ、術式にしろ、その変な格好にしろ……まあいい。後で聞く」

恵は節子達に向き直った。その後ろで「変などとは何だ。カッコいいだろこのコート。本当は羨ましいんだろ」とジョーカーが無言で怒っているが、恵は気にも留めなかった。「その指は危険なモノなんです。今は話している時間も余裕も無いので、後日話します。すぐに渡してください」

「うん……もう、懲りたよ。ごめんね、タケ、蓮。巻き込んだりやって……」

「いや、良いよ。……こんな事になるとか、思ってるわけねーし」

「あの、コレって結局何だったの？」

「——特級呪物《両面宿儺》……その一部ですよ。聞いても知らないと思いますが」

質問をしながら、節子が恵に指を渡す——

「下がれ！」

「ひやつ」

「うおつ」

——その時、まるで節子を狙っているかのように、天井が掌のように湾曲した。そう思った瞬間、ジョーカー含む悠仁達四人は、強制的に後退させられていた。

胴体を襲う衝撃。見ると玉犬二匹が、唐突なる巨大な乱入者に潰されぬようにと、その身を挺して護ってくれたのだ。玉犬二匹も無事そうだが、しかし……

「恵っ！」

「つぐ、何、してる……にげろ……！」

……恵は、呪霊に捕らえられてしまった。ジョーカーが夕方に見た、イグアナのような、あるいはバッタのような外見をした巨大な呪霊に。

計四つの紅い目でまじまじと見つめてくる。首だけを捻り、歯を鳴らす様は、爬虫類のそれにも見えた。

「くそっ、【鶴<sup>ぬえ</sup>】！」

両手で『翼を広げる鳥』を模るように、片方の親指をもう片方の親指に引っ掛け、新たな式神を呼ぶ——

「おおおお お お お つつ」

——よりも疾く、六本足（あるいは六本腕）の内の、恵を握る一本が、思い切り壁に恵を叩きつけた。その衝撃で壁にクレーターが出来る。

「——っ、か、は……！」

一瞬、意識がトんだ。次の一瞬、肺の中の空気が全て外に放出した。恵の術式思考を乱すにはこれで充分だった。玉犬が闇へと溶けていく。更にダメ押しと言わんばかりに、呪霊は壁を打ち破るレベルの威力で恵を押し出した。

「恵!!」

呪霊と共に恵は二階の渡り廊下の真上に漂着したようだが、頭部からの出血に加えてかっけつ喀血。おそらく骨も折れているだろう。どう見ても重傷。戦える状態ではなかった。

しかし——しかし、そんな状況でさえも、恵は立ち上がろうとした。既に掌印は組んでいる。先程の「鶴」を召喚するつもりなのだろう。自身へと突進してくる呪霊を恵は睨みつけた。

だがそれを静観出来るほど、ジョーカーは薄情でも、恩知らずでもなかった。

暗雲の夜、闇の奥。破壊された壁から、ジョーカーは舞うように跳んでいく。

「ペルソナアツ！」

アルセーヌを呼び出しつつ、スキルの選択を脳内で済ませた。再度掌に溜まる呪怨のエネルギー。この巨体を相手にするのであれば、広範囲に攻撃が届く《マハエイガオン》



が適任だ。恵と呪霊との間に着地しつつ、地へ叩きつけエネルギーを浸透させ、爆発させ——瞬間、呪怨の剣が巨大イグアナの全身を、満遍なく貫く。しかし呪霊を祓うには至らなかつたようで、悲鳴を上げつつもジョーカーに注意を向けた。

「お、お、お、お、お、あ、あ、ツ」

「無事……じゃなさそうだな」

「……見りや分かんたらっ、ゴフツ」

「援護する」

「逃げろつつつたろーが……四人分荷物抱えてんだよ、呪術師は」

「それでも、見てるだけで何もしいのは嫌なんだ」

呪霊と真つ向から向き合う。もう一度何かしらのスキルを放てば倒れると、ジョーカーは見立てた。身構えながら仮面に触れ、アルセーヌを——

「——う、あ——？」

——しかし、ここが今の雨宮蓮の限界だった。

突然膝を突くジョーカー。電池の切れた玩具のように、床に手をついてしまう。蒼い炎に包まれて消えていく怪盗服と、嫌に冷たい汗。極度の疲労で震える脚と、痛む筋肉の節々。そして焦点の合わない目が、ジョーカーが——蓮の戦闘不能を示唆していた。

(な、ぜ……………)

この時、蓮は忘れていた。ペルソナの覚醒には、体力や精神力を大幅に消耗する事に。蓮の肉体は（多少鍛えているとはいえ）覚醒及び急激な身体能力の向上について行けなかつたのだ。

また、アルセーヌのスキル発動にかかるコスト——前世における謂わゆる《HP<sup>体カ</sup>》や《MP<sup>気カ</sup>》、今世における《呪力》の消費量が半端ではなかつた事も一因として挙げられる。そして、蓮の最大の失態は、上記の要因に気付けなかつた事だ。

今の蓮は、何もかもが全盛期のジョーカーとは程遠い。それなのに全盛期のペースで——蓮の身体能力を鑑みれば無茶と言えるペースで戦い続ければ、限界に到達するのは、何らおかしい事ではない。

生前の蓮も、アルセーヌが目醒めた時はそうだった。後に最高の相棒となる化け猫の助けが無ければ、永遠に敵陣を彷徨<sup>さまよ</sup>って……おそらく、命を落としていただろう。助け舟を出した本人が一番の足手まといとは、笑えない冗談だ。

「せつちゃん先輩、指貸して!」

「あつ、ちよつ! 危ないつてば!」

「こつち見ろや呪い! ——とうおつりやああああああつ!!」

——悠仁だ。悠仁も跳んだ。超跳躍を見せ、呪霊の後頭部をライダーキックで蹴り飛ばし、イグアナの背中に張り付いた。

「……まったく、どいつもこいつも」

「んな事言ってる場合かようおおおわあああつ?!」

「おお お お お お ツ」

振り回される悠仁。どうにかしがみ付き、一発でも拳を叩き込もうと試みるも、振落とされてしまった。地を数回転がってようやく止まった。額を擦りむいたように、恵程ではないものの、ほんのり血が流れる。

「お前じゃ無理だ。いくらお前が強くても、呪いは呪いでしか祓えない。呪力の無いお前が戦っても意味ねーんだよ」

(……じゃああの時の肥大化した呪いは………)

蓮の読み通り、悠仁は呪霊を弱らせたのではなく、あくまで隙が作れたただけだ。つまり、あの時の《ブレイブザッパー》は急所クリティカルヒットしたに当たっただけなのである。

「恵クン、それ早く言ってくんね?」

「大……丈夫か、悠仁」

「お前よか元氣ビンビンだわ、蓮」

「虎杖、雨宮連れて逃げろ。あの二人とソイツを守れんのは、お前だけだ。このままだと全員死ぬぞ……!」

「……俺らが逃げたら、お前死んじまうだろ。そんなん夢見がワリーよ。俺が引きつけ

とくから、どうにかして『ヌエ』ってヤツ出してくれ」

——オマエは強いから、人を助ける。

——特に蓮だけは死ぬ気で守れ。

「それにさ、コツチも面倒くせー呪いかかってんだ、よッー！」

言いながら悠仁は飛び出した。——その左手に、特級呪物を握りしめて。

「おい髭ヤロー！——コレが欲しいんだろ?!」

特級呪物

悠仁は恵と邂逅を果たしたあの病院で、呪物の役割や呪霊について粗方教わった。呪霊が人を苦しめる事、学校や病院が呪霊を溜め込みやすい事、手にある呪物が呪霊を惹き寄せる餌である事——より強力な呪力を得る為に寄つてくる事を。

呪霊が前両腕を振るう。彼奴の右腕が左腕より早く振われたので、左腕の下を掻い潜り、横腹に蹴りを見舞う。しかしそれ以上の事はしない。悠仁は自身が囹である事を自覚出来ていた。ヒット・アンド・アウェイの要領で、刺しては離れを繰り返す。

しかし、そう上手く事は進まなかった。

(頭回んねえ……フラフラする……、術式が安定して発動出来ねえ……。クソ、こんなトコで躓いてちやいけねーのに……アイツはまだ、戦つてんのに！)

血が止まらない。【鶴】を出そうと掌印を結ぶも、集中が乱れ呪力が練れない。

呪力とは、術式を発動するために必要な、術師から流れる負のエネルギー。自身の負

の感情を火種とし、捻出。術式に呪力を流し込み続ける事によって、術師は呪霊相手に戦える。故に呪力が練れなければ、術師はただの一般人と化す。

時間稼ぎも虚しく、悠仁は巨拳を腹に喰らった。

「うーッ——」

血反吐を吐く。そしてそのまま掌へと吸い込まれるように捕らえられた。その衝撃で指を手離してしまっただが、何とか口で指の根元を噛み締めた。——しかし、絶体絶命の状況には変わりない。そのまま両手で体を押さえ付けられ、身体から嫌な音が聞こえてくる。

(ちく、しょう……どうする? どうすれば皆助かる? 何か方法は無いのか!?)

その身体を呪霊は無理くり口へ放り込もうとするが、喰われまいと呪霊の歯を足場に踏ん張る。しかしジリ貧だ。いずれ根負けしてしまう。何か突破法は無いのか。顛顛こめかみに血管を浮かべ、歯を食いしばりながら、悠仁は脳細胞をフル回転させる。

そこで、悠仁は恵との会話を思い出した。

呪霊が呪物を狙うのは、取り込んでより強力な呪力を得る為である。

この特級呪物には、膨大な呪力が込められている。

そして——呪いは、呪いでのみ祓う事が出来る。

「——あるじゃねーか! 皆が助かる方法が!!」

そう言いながら、悠仁は口で器用に呪物を放り投げた。

「(まさか……!) ダメだ、やめろ虎杖!!」

恵が悠仁の迷惑を察し怒鳴った。しかし呪物は悠仁の——額へと当たって、後方へ。

「……………あつ……………ヤベ」

完全に打つ手無し。悠仁は冷や汗が止まらなくなった。

——しかし、運命はまだ、悠仁を見放してはいないらしい。

「アルセーヌ……………《ブレイブザッパー》……………!!」

限界を超えた蓮が——ジョーカーが居なければ、本当に打つ手は無かつただろう。アルセーヌが呪霊の両腕を断ち切り、悠仁は自由を手に入れた。しかし、ペルソナを発現させる事さえも辛くなってきたようで、ジョーカーは——蓮は膝から崩れ落ち、怪盗服もアルセーヌも消えた。

「ごめん、悠仁……………後、を、頼む……………」

「——サンキュー・ソーマッチ! 蓮!!」

全身を投げ出して倒れる友人を尻目に、悠仁は指を拾い、何の躊躇ためらいも無く飲み込んだ。

(馬鹿か!? 特級呪物だぞ!! 確実に死ぬ!!)

……いや、だが——万が一、万が一の事があれば——)

「おおおお お お お お お お お お」

呪霊が、悠仁目掛けて迫ってくる。重い足音を鳴らしながら、暴走機関車のように突進し、その大口を——

惨。

——音の無い斬撃が、ただ腕を振り上げただけの鎌鼬かまいたちが、巨大なイグアナの呪霊を葬り去った。

勝手に弾けたようにも見えた。無理矢理に引き千切られたようにも見えた。一陣の風が全てを薙ぎ払った。あまりの衝撃に、気を失いかけていた蓮も目を見開いた。分からない。理解が追いつかない。蓮にはこの状況が理解出来ない。ただ一つの事実は、先  
の呪霊は、もはや形を成せない程の肉塊と化した事だけ。

月のない夜の暗雲が晴れていく。

「ゆう、じ……………」

その返答は、笑い声で成立した。だがその笑い声に、蓮は納得がいかなかった。

悠仁を昔からよく知る蓮だからこそ分かる。

決して悠仁が出す事のない、汚らしい嗤い声だけが、辺りに響いた。

「ああ、やはり！　光は生で感じるに限るなア!!」

特級呪物の受肉。呪物を取り込んだ事で、悠仁はその身体を呪物に明け渡した。上着を鬱陶しく感じたのか、呪悠仁のよう何がいはパーカーを、下に着ていた制服ごと引き裂いた。

(最悪だ……!!　最悪の『万が一』が出ちまった!!)

恵はギリ、と奥歯を噛み締めた。

——悠仁の身体は変質していた。上半身から顔に浮かび上がった紋様。普段の彼よりも更に発達した筋肉と爪。そして両目の下に浮かび上がった、新たな二つの目。それは即ち、特級呪物の受肉を意味していた。

「呪霊の肉など、いくら屠った所で詰まらない！　人は！　女はどこだ!!

………ほう」

そこから呪いは、仙台の夜を見渡した。

未だ光の灯っている家屋の数々。両の手では数え切れぬほどにいるらしい、人、人、人。平安の世には無かった、蛆虫の如く飽和する人間達。男も、女も、小童も、老人も、選り取り見取りだ。平安の頃など目ではない。それほどまでに——踏み潰したい人間が、湧いている。



呪いはそれを、心の底から喜んだ。

「ああ——良い時代に、なったのだな……!!」

素晴らしい……!!」

——塵殺だ。

特級呪物《リようめんすくな両面宿儺》。

千年の世を経て、最強にして最恐にして最凶の呪いが、今宵現代に蘇った。

——絶望の夜、終焉の鐘が鳴った日。

宿儺の嗤い声だけが、響いていた。



# L P  
2 e t E  
R  
R y u S  
o s O  
m e n A  
n t a 5  
S r i  
u t n  
k t J  
u t u  
n h j  
a e u  
g t  
a s  
m u  
e . K  
a  
i  
s  
e  
n

## #3

13.

くしやみをした。鼻をすすって息を整える。再度眠りに落ちようとすると、異様な寒さがそれを邪魔する。

肌寒い。凍えそうだ。初夏の暑さはどこへ行ったのやら。

このままでは風邪を引いてしまう——あるいは引いたからこそ肌寒く感じているのかもしれないが——と思い、嫌々ながら目を開いた。

まず、目に入つて来たのは『鎖』だった。天井からぶら下がる鎖。次にレザーのような材質で出来た青い壁、ぼちやりぼちやりと連続して鳴り響く水音。そしてこの時に気付いたのだが、自分は先程までシーツすらないベッド——というよりもはやベンチにて眠っていたらしい。蓮はその光景に見覚えがあつた。

起き上がり、目を擦つて目を覚まそうとする——が、何故か妙に腕が重い。見ると手首に嵌められていたのは、無骨な漆黒の手錠だった。

「な——」

見ると、服装も肌着から襤褸ぼろい白黒ボーダー……すなわち、囚人服に変わっている。

何故だ。何故、またこの服を着ている——？

「お目覚めになりましたか？」

聞いた声だ。反射的に声の方向へ顔を向けた。鉄格子の奥、本来ならば長鼻の老人がいるはずの机の横。そこに立っていたのは——雨宮蓮が、まだ雨宮蓮ではなかった頃から良く知っている少女だった。

身長は一三〇センチ程度で、青と黒を基調としたワンピース、白いハイソックスと、黒い革靴を着用している。プラチナブロードのロングヘアには、蝶を模したカチューシャが。左手には凶鑑のように大きな本を抱えている。健康的な桜色の唇は、しかし悲しみを浮かべている。そして彼女の最大の特徴とも言える、まるで人形のようにクリンとした麗しい黄金の双眼があつた。蓮は思わず、彼女の名を呟いた。

「——ラヴェンツァ……」

「……この再会を、素直に喜べない私がいいます。ですが……あえて申し上げさせていただきます。主が不在のため、私が代弁致します」

かつて記憶を失い、自身の形すら失っていた少女。そして何より、蓮が前世で幾度となく助けられた恩人でもあるラヴェンツァが、丁寧にお辞儀をした。

「——ようこそ、『ベルベットルーム』へ。」

……出来る事なら、もう二度と会いたくはなかった。だって、貴方は——」

「ラヴェンツァ……もう、過ぎた事だ。それよりも教えてくれ。何故キミがここにいる？ 何故オレはまた『運命の囚われ』になつてゐるんだ？」

ラヴェンツァの憂いを遮り、無理やり本題に入る事にした蓮。

蓮がまだ雨宮蓮ではなかつた頃、彼は『運命を奪われた者』として、知らず知らずのうちに『駒』として戦わされていた。元凶によつて蓮は不遇の扱いを受け、冤罪が前科として成立し、誰も彼もが蓮を忌避するようになった。その後、左遷先の東京の四軒茶屋を拠点に、度重なる偶然が相まって、怪盗と学生の二足の草鞋わらじを履きながら生活する事になるのだった。

——かつて蓮が元居た世界には《心の怪盗団》という組織がいた。

正体不明、手口不明、神出鬼没の怪盗集団。ただし、盗むのは『悪人の心』だけ。そして『決して人を殺さない』。歪んだ欲望・悪心を盗む事を『改心』と称し、事前に『予告状』をばら撒いては華麗に盗み消えてゆく。心を盗まれた者はほぼ全員、自身の罪を懺悔し自首に追いやられている。故に、『心の』怪盗団。

そのリーダーを務めていたのが、かつての???であり、今の雨宮蓮だった。

彼らが怪盗として活動する上で、彼ら（特に蓮）が一番欠かせなかつた要素が『ペルソナ』だ。『立ちほだかる異形の敵を倒し、悪人の心を改心させる戦力のため』『ペルソナ使いの戦闘能力は、ペルソナに大きく依存するため』などの理由から、彼らにとって

ペルソナは必須事項なのだ。

ペルソナは原則一人につき一体までとなっているのだが、蓮にはペルソナを複数体所持して操る事が出来る、「ワイルド」という力がある。この「ワイルド」の力をサポートするために、ここベルベツトルームはあるのだと彼女は言う。

ベルベツトルームは、ラヴェンツァ曰く『夢と現実、精神と物質の狭間の場所』らしい。蓮はその所が未だによく分かっていないし、気にも留めていないので、蓮がベルベツトルームを完全に理解する事は無いのだろう。

「……まず、第一の質問に答えましょう。貴方がペルソナの覚醒を果たした事で、かつて貴方がいた世界とこちらの世界の間縁が生まれました。これで再び、貴方の助けになれましょう。」

そして第二の質問への返答です。——貴方は、正確には囚われとなったのではなく、『運命の囚われ』に巻き込まれてしまったのです」

「巻き込まれた？」

「……詳しくは申し上げられません。私からは、近いうちに来る破滅の未来……その中心に彼が居るだけ。その人物を、貴方は良くご存知でしょう」

——脳にフラッシュバックする、彼に飲み込まれる屍蠟の指。浮かび上がる刺青。新たに現れた二つの目。決して彼のものではない、汚らしい嗤い声。浮かんだ一つの可能

性を否定したくて、蓮は鉄格子を思い切り搦んだ。

「まさか、囚われたのは悠仁なのか……………!？」

「——思い出して下さい。新月の昨夜、貴方と彼の身に、何が起こったのかを」

12.

「…………オマエ、何故動ける?」

「は? いや、俺の体だし」

一つの身体で二人が喋っている。しかし側はたから見れば悠仁が独り言を言っているだけなので、その姿は奇妙としか言いようがなかった。そのような奇妙なやり取りをしている間に、突如、身体に浮かんでいた紋様が目に見えて消えていく。

(押さえ込まれる、だと——?)

そして遂に、紋様も爪も、第三・第四の目も、何もかもが元の虎杖悠仁に戻った。その様子を見て蓮は安堵し、恵は——臨戦態勢を取った。

「動くな」

「えっ?」

恵が両拳を握り、動かない頭をフル回転しながら呪力呪いを練くつていく。——まるで、悠仁が敵であるかのように。



「つちよ、なにになに!? どーしたの恵!？」

「……お前はもう、人間じゃない。」

呪術規定に則り、虎杖<sup>お</sup>悠仁<sup>前</sup>を——

——呪いとして、祓<sup>殺す</sup>う。

「——え？」

「なに、を……言ってるんだ、貴様……!」

「……………」

友への殺害予告を聞かされて、黙っていられる蓮ではない。恵を睨みながら、無理やり体を起こし立ちあがろうとする。悠仁も両手を上げ、敵意が無い事を恵に示した。

「いやいや、俺ホントになんともねーってば! つーか俺らボロボロなんだし、早く病院行こうぜ。恵も頭から血イ出てっし、危ねーよ。心配してくれんのは嬉しいけど、蓮もあんま無理すんなって」

(今喋ってる『お前』が虎杖なのか呪いなのか、こっちは解んねーんだよツ……)

「悠仁<sup>友達</sup>を……っ、見殺しには、出来ないんだよ……!」

「ああもう、何でこんな時に頑固なんだよお前は!」

舌打ちをしながらも、恵は術式を解く様子は無いようだ。蓮は歯を食いしばり、どうにかして止めようとするも、しかし、限界を迎えた身体は言う事を聞いてくれない。膝

立ちにはなれたが、それまでだった。

どうしようもないのか——。そう思った時だった。

「今コレどーゆー状況？」

「五条先生!？」

突如恵の後ろに現れた、目隠しをした不審者によって、険悪な空気は破られた。緊張が解けたのか、恵も術式を解いた。

蓮がまず抱いたのは、デカいという率直な感想だった。日本人離れた身長……およそ一九〇センチはある。声質からして若い男性らしいのだが、頭皮から生えている（目隠しによりパイナップルのような髪型になっているが）それは白銀色をしていた。黒い色のハイネックの服装はまるで喪服のように思えた。上着のポケットに手を突っ込みながら紙袋を持っている。本名を五条悟ごじょうさとると言う。

「どうしてここに……」

「いや、来るつもりは無かったんだよ？ でもさ、特級呪物をほっぽると、流石に上がうるさくてねえ。観光がてら馳せ参じたってワケ。

それにしても恵めっちゃポロポロじゃん。ウケる、二年の皆に送る」と

そう言いながら、スマホで恵を連写する悟。恵に更なるストレスがかかる。コイツに人の心は無いのかと、この場にいる悟以外の全員は思った。

「んで、呪物は？ 見つかった？」

「……………」

「え？ あれ？ 呪物は？」

目を逸らして苦虫を噛み潰したような顔をしながら、三人の顔面のあらゆる所から冷や汗が流れる。

「あ の ～……………」

「ん？」

「ゴメン。それ、俺食べちった。…………て、てへ」

この場にいる全員が硬直した。今度ばかりは悟も含まれた。

「……………え、マジ？」

『マジ』

全員ハモった。

さて、その真相を確かめるべく、悟はアマゾンの奥地に——もとい、悠仁の側に寄つて、顔を寄せた。目隠しをしているのにも関わらず迷いなく悠仁の所へと辿り着けるのは、何かトリックでもあるのだろうか。例えば虹彩の所に小さな穴が空いているとか…………と、蓮自身も仮面を被っているので少し親近感が湧いた。

「うーん…………？」

「見えてんの、ソレ？」<sup>目隠し</sup>

「ちゃんと視えてるよ。」

……うはっ、ウケる。マジに混じってるよ。マジだけに」

「うわおもんねー」

「ギャグセンス皆無ですな先生」

「悠仁のモノマネの方がまだ面白い」

「皆酷くない？」

「ちよ待てよ（低音イケボ）、蓮それどーゆー意味!？」

「黙秘権を行使する」

（虎杖のモノマネもそこまで面白くねーな）

わちやわちやする男四人衆。その内の成人男性が蓮を見た。

「んで、その癖毛クンは何者なのかな？ ツーブロクンのお友達？」

「あつ、悠仁の友達の雨宮蓮です」

「ご丁寧にどうも。それで、蓮クンは——ちよつと待つてね」

何か思い当たる節でもあるのか、悟は静止を求めた。そして目隠しを少し上げ、彼のその双眸が明らかにになる。その瞳が、まるで翡翠ひすいのように煌めいていた事が、蓮は記憶に新しい。『瞳の輝き』が翡翠のようという意味ではない。『瞳自体』が翡翠のように見

えたのだ。

五条悟には、生まれ持った全て才能がある。《無下限呪術》むかげんじゆじゆつという術式と、それを補佐するための《六眼》りくがんという瞳だ。

六眼とは、端的に言ってしまえば『呪力の流れや相手の術式が鮮明に良く分かる特別な眼』だ。無下限呪術には緻密な呪力操作を強いられるため、この眼無くして無下限呪術は無いと言つても過言ではない。

ただ、この眼は使用者の意思に関わらず常時発動しており、使用者の負担が大きい。そのため普段は目隠しをする事で負担を抑えているのだ。それでも六眼は能力を発揮し、呪力の流れを探知して高解像度サーモグラフィのように外界が視えるため、目隠しをしていても動きに迷いが無いのだ。

つまりこの時、五条悟が目隠しを外したという事は、蓮の持つ術式——もとい、ペルソナの正体を見破ろうとしているという事だ。しかしそれを蓮が知っている訳も無い。途轍とてつもない気怠さも相まって、蓮は無警戒のまま接近を許した。蓮はこの時暢のんき気に「仮面を被っていた訳ではないのか」と、少し残念に思っていた。

「キミは……………、——っはは、成る程ね。面白い」

何かを納得した悟だが、蓮からしてみれば、一人漫才をしているようにしか見えない。蓮の術式を看破した悟は、目隠しを元の位置に戻しながら続ける。

「——ウン、決めた。キミ、呪術師やってみない?」

「呪術師?」

「は!? コイツがですか!?!」

「スカウトだよスカウト。それに今蓮を視たらね、皆と比べて呪力が極端に少なくなってるんだよね。多分呪力切れか、その一步手前。確かに呪術師じゃないけど、呪詛師でもない。謂わゆる『呪術初心者』って所かな。だから警戒しなくても大丈夫だよ。この残存呪力量じゃ何も出来っこないだろうし。」

それに、これは完全に僕の勘なんだけどさ……蓮が呪術師になつて経験を積めば、憂太や僕の代わりに成り得る実力を持つてると思うんだ。あくまで勘だけどね」

「そりゃ、先生が言うならそうなんでしょうけど……」

「逆に、恵は蓮の何が嫌なの?」

「……………うにつて言われました。俺を見て」

「ブフおつ」

「ぶはっはははははははは！ うにかあ！ 確かにそりゃムカつくだろうね〜!」

「〜〜ツ、笑わないでくださいよ先生！ 虎杖も吹き出してんじやねえ!」

「いや、ごめん。あの時はお前を不審者だと思つてたんだよ」

「それでも納得できねーよ！ それだったら五条先生にも何か言えよ!」

「パイナップル?」

「恵、後でお話しようね」

「何で俺なんですか!？」

(オレじゃなくてよかった)

「蓮は明日ね」

(やっぱりダメだった……)

「どうやら恵は根に持つタイプらしい。悟がひとしきり笑ったところで、ようやく本題に入るようで、一つ咳払いをした。

「悠仁くん……だっけ。体に異常は? 宿儺と変わるかい?」

「え? いや、特に変な所は無いけど。スクナって何?」

「キミが取り込んだ呪いの名さ」

「ああ、そゆこと。多分行けるよ」

「よし——」

「そう言うと、おもむろ徐に準備運動を始める悟。

「じゃ、十秒経ったら戻つといで」

「え、でも——」

「大丈夫! 僕、最強だから。……恵、これ持ってて」

そう言われ、紙袋を渡される。蓮も疲れを忘れ、紙袋の中身を探索する事にしたらしい。身を乗り出して恵に近づく。

「……何すか、これ」

「喜久水庵の『喜久福』！ 仙台に来た時は絶対買ってるよ。僕のオススメはずんだ生クリーム味でねえ、中に入ってる生クリームがこれまた美味しいのよ！」

（人が死にかけてる時にお土産買って来やがった……!!）

後で絶対殴ると誓った。

「食べて良いか？」

「ダメだよ！ それは僕が帰りの新幹線で食べるんだからね！ お土産じゃ——」

「——先生、後ろ!!」

恵が叫んだ。だがもう遅い。悠仁と入れ替わった宿儺が、悟の頭上からその鋭爪を振り抜き、衝撃で砂煙が舞う——。やがて砂煙が霧となり、霧散して晴れていく。そこに居たのは、地に手と膝を突く両面宿儺と、眼前で宿儺を直視する伏黒恵と雨宮蓮。そして宿儺の腰を椅子の代わりに座る、宿儺の爪により切り裂かれたはずの五条悟本人だった。

「生徒の前なんでね——カッコつけさせてもらおうよ」

「——ッ、ウアッ!!」



獣のような声を上げながら、自身を椅子にする不屈き者を今度こそ引き裂こうとする。しかし、直前に両手を握り合う事で掌印を結び、悟は自身の術式を発動し再び消えるように避ける。

引き裂こうとする。消える。引き裂こうとする。消える。腕を掴まれた。背に回られ、腕を引つ張られ、気付けば宿儺は顔面に痛みを感じた。拳で殴られた事に気付くも、体勢を整えるのに時間がかかってしまう。地に足をつけようとするも、間髪入れず鳩尾みぞおちに一発入れられる。先程よりも増加した拳の威力に、流石の宿儺も吹き飛ばされてしまう。鉄柵が宿儺の背中を支えていなければ、そのまま地を這いつくばっていただろう。「恐ろしく疾い……? いや、違うな) 全く、いつの時代も厄介な物だなア、呪術師は

——!!

右手に漆黒の呪力を滾らせ、先のイグアナの呪霊を引き裂いた時よりも更に強化された腕で、悟に振るった。——刹那、杉沢第三高校の三階から上が半壊する。ガラスは割れ、コンクリートは粉々に、鉄骨さえも断ち斬られる。

「だからどう、という話でも——!?!」

——しかし。

「7……8……9。そろそろかな?」

目の前の現実五条悟が、宿儺の敗北を証明した。

斬撃も、瓦礫も、何もかもが五条悟に届いていない。無疵だ。その体には、擦り傷はおろか砂埃さえも付着していない。悟の眼前で『瓦礫や砂が止まっている』。

見ると先程の男子二人に、新たに気絶した男子と女子が加わっている。悠仁と蓮の先輩である、佐々木節子と井口武志だった。大方、校舎の半壊に巻き込まれるのを危惧して、回避がてら保護したという所だろう。

——宿儺の心臓が、一際跳ねた。

（くそ、まただ！ 押さえ込まれる……………！ この虎杖とかいう小僧……………一体……………何もの……………だ……………）

そうして再び目が閉ざされ、刺青が消えていく。表層意識から宿儺が引き剥がされる。その表層には、蓮の旧友である虎杖悠仁が現れた。

「んおつ、大丈夫だった？」

「悠仁こそ、大丈夫なのか？」

「うん。ちよつとアイツ宿儺の声がうるせーけど」

そう言つて耳に入った水を抜こうとするように、頭を傾けながら叩く悠仁。大事無さそうにしている姿を見て、蓮は安心した。

「——驚いた。凄いな、本当に制御出来てるよ……………！」

そう言いながら悟は悠仁に近付く。人差し指と中指を立て、額にそれらを当てた瞬間

——悠仁は膝から崩れ落ちる。意識を失ったようだ。完全に倒れる前に悟が抱えた。八十キロの重みが悟の全身を襲う。

「うわっ、重たっ」

「何を……………!」

「そんな怖い顔しないでよ。ただ気絶させただけだって」

『ただ気絶させただけ』と、言葉の軽さと事の重さが比例していない。そのギャップに蓮は内心戸惑った。

「これで次に目覚めた時、宿儺に体の主導権を奪われていなかったら、彼は『器』の可能性がある。

さて恵、問題だ。彼をどうするべきかな？」

「……………仮に『器』だとしても、呪術規定に則れば虎杖は即処刑対象です。上層部もきっとその判決を出すでしょう。」

——でも、死なせたくありません」

恵ははつきりと言いつつ切った。

「恵……………」

「言つとくが雨宮、お前のためじゃない。俺が嫌だから言ってるんだ」

悠仁が呪物を取り込まざるを得なかった状況を作ったのは、他でもない恵自身だ。恵

に力が無かったためだ。故に恵は、悠仁に対し責任を感じていた。……否、それも理由の一つなのかもしれない。しかし本命ではなかった。

善人が死んでいくのを見たくなかったのだ。虎杖悠仁との付き合いはあまりにも短い。だがこの短時間で、悠仁が根明の善人である事を恵は解っていた。だからこそ、恵は悠仁に生きていてほしいと思った。

「私情かい？ 恵」

「私情です。何とかしてください」

「オレからも……よろしく頼む」

「ウンウン、可愛い生徒とその候補の頼みだからね！ ンまっかせなすあくいー！」

そう言ってサムズアップする悟。横で恵は「本当に入れるつもりなのか……」とゲンナリしていた。失礼な、とムツとしたのを最後に……悟に額を触れられて、蓮は意識を失った。

記憶はここで途絶えている。

14.

「悠仁が……『処刑対象』……」

「……………」

昨夜を完全に思い出した蓮。事態の重大さに腹の底が煮えたぐった。

死刑だ。まだ年端も行かぬ十五の、善良で心優しい青年が死刑だ。あまりにも……あまりにも、背負っている運命が重過ぎる。鉄格子を握る手に力が入り、怒りに震える。自然と眉間に皺が寄る。奥歯が割れそうなくらいに歯を噛み締める。顛顛こめかみに血管が浮かぶ。目が血走る。

「……………どうされますか？」

彼が前世でどれほど辛い思いを経たのかを、ラヴェンツアは嫌と言うほど知っている。前世でどれほど苦しい痛みに耐えたのかを、目を逸らしたくなるほど分かっている。故に、前のように破滅に抗う意思の確認を、彼女はいつしかしなくなった。

もう戦いたくないと言って欲しい。もう休みたいと言って欲しい。傷付いていく彼を止めたい。ラヴェンツアはペルソナの補佐しか出来ない自身の立場を呪った。彼を襲う悲痛なる運命を嫌った。……だが、この思おもいは届かない。それはラヴェンツア自身がよく分かっている。

誰が何と言った所で、どのような運命が待ち受けていたとして、ジョーカーという男が止まる事は決して無いのだから。

「例え友達のものだとしても、破滅は御免被る。

——戦うよ。」

壊れているかのように。呪われているかのように。

愚直にも、真つ直ぐな目で。

蓮は前世と、全く同じ言葉を放つのだった。

「……そう言うと思いました、マイ・トリックスター。であれば、私も協力を惜しみません」

嬉しそうな声で、悲しそうな表情で、ラヴェンツァはその意思を尊重した。

——ジリリリりとチャイムが鳴り響く。現実世界の雨宮蓮が目覚めようとしているのだ。ラヴェンツァとの会話は、今回はどうやらここまでらしい。

「時間ですね。マイ・トリックスター、これを……」

鉄格子の隙間から、古風な鍵を手渡される。奇妙な鍵だ。持ち手に人の顔面が描かれており、左半分は黒く、右半分は白くなっている。

……段々と景色が臃おぼろげになって来た。

「これは……ベルベットルームの鍵か？」

「はい。これでいつでも、貴方はこちらへと来る事が出来るようになりました。お好きな時にお越しください。

——破滅の未来の、その先にある幸福を祈っています」

窓から入る日差しが鬱陶しい。自室のベッドのようだ。シーツで覆い二度寝を決め込もうと思ったが、生憎蓮は寝相が悪く、シーツは足元付近へ。内心で悪態を吐いて、嫌々ながら起き上がる。大きく欠伸をした。

掛け時計を見ると、時刻は午前十一時を過ぎた所………真昼間だ。

「ヤバいやバいどうしよう学校は!？」

そう思いながらスマホを見ると………今日は土曜日だった。バリバリの休みである。舌打ちして不貞寝しようとするも、先の動揺で目が覚めてしまったので、苛立ちは増すばかり。

蓮は朝が弱い。休日は平気で午前十時くらいまで寝ているし、学校のある平日でも、毎朝悠仁や家族が起こしてくれないと起きれない。しかし彼の生活リズムが悪いだけなので、自業自得としか言いようがないのだが。

(寝た気がしない……)

更にベルベツトルームが追い討ちをかける。前世でもこれに散々悩まされた。警告無しに夢に現れ、そして起きた時に寝不足の気分を味わわせていくので、出来るだけ現れてほしくないと思っている。

気分が優れないまま、洗面所ではなくダイニングキッチンを目指し、部屋を出て階段

を降りていく。蓮の家は二階建ての3LDKの賃貸だ。そこに両親と父方の祖父母と共に住んでいる。両親家庭のため、両親は夜にしか顔を合わせないが、蓮の料理を食べるために毎晩必ず帰ってくる。むしろ帰らない日はほとんどない。蓮はそれが何よりも嬉しかった。

蓮は料理が好きだ。否、好きになったと言えば語弊がないだろう。と言うのも、前世から台所に立つ習慣があつたのだが、それは東京に来てからの話なのだ。東京に来る前までは、食事はカツパ麺で済ませていた。和洋中何でもござれ……積み上げてきたキャリアもあつて、蓮の料理は家族から好評だった。

特に得意な料理は、カレーとコーヒード。カレーは前世の義父から教わった家庭の味だ。珈琲も、義父から手取り足取り教わった。カレーと珈琲に関しては、義父の右に出る者はいないと思つている。

男の電話番号は登録しないタチだ、などと言つておきながら、なんだかんだで世話を焼いてくれた男だった。血の繋がっていない娘にどう接すれば良いのかも分からないほどの、不器用な男だった。蓮を息子と認め愛してくれた、優しさが伝わりにくい男だった。ハードボイルドとは、正に彼の事を言うのだろうと思ひ、蓮は憧れた。そのカレーとコーヒードの味は、今なお蓮の心に生きていた。

朝起きた時、蓮は気付けのために珈琲を淹れる。顔を洗うのはその後だ。昨日大変な



事があつたとはいえ、毎朝のコーヒーを欠かす事はない。サイフォンとドリップを巧みに操り、豆の味を最大限に引き出していく――。

説明しよう！

蓮が使っている豆は、ジャマイカ産ブルーマウンテンという銘柄のものだ！

ジャマイカは、豊富な雨量と厳しい寒暖差、水捌けはの良い土壤など、コーヒー豆を栽培するには好条件の揃った国だ！

ブルーマウンテンとは栽培地の山の名前であり、厳しい基準をクリアした高品質豆にのみ、その名が与えられるぞ！ 豊かな薫りかおとコクを持つ人気ブランドの一つなのである！

「うん、良い匂いだ」

出来上がったコーヒーを、お湯で温めておいたカップに注いでいく。芳醇な豆の薫りが鼻腔を擦るくすく。アフタヌーンティーならぬアフタヌーンコーヒーを、前のテーブルに運び、まずは薫りで楽しむ。先の苛立ちと昨日の疲れは遥か彼方へ飛んで行った。贅沢し

てブルーマウンテンを選んだのは正解だったようだ。

そして次に舌で楽しむ。仄かな苦味と、胃袋を刺激する薫りを、口内で少し遊ばせ、味わい、飲み込む。喉を通って、胃を通じて、全身へと温かさが渡っていく——。自然と口に笑みが浮かぶ。美味く作れたらしい。確かな手応えを感じる。魅力はこれ以上上がらない。

ここままでしておいて意外に思うかもしれないだろうが、蓮はかつてブラックコーヒーが苦手だった。義父の経営する純喫茶にて、初めてコーヒーを飲んだ時も、苦さに舌を痺らせながら砂糖を流し込みまくった。義父に苦笑いされたのをよく覚えている。

「美味しそうに飲むねえ」

「実際、美味いからな。何なら、残っているのを飲むと良い」

「僕甘党だからムリ。砂糖あるなら別だけど」

「角砂糖あるから、好きなだけ使え」

「やった」

そう言いながら、一旦テーブルにカップを置き、新たにカップを用意する。サイフォンに残ったコーヒーを注ぎ、取っ手のついたシュガーケースと一緒に持っていき、蓮はスマホを取り出して——

「もしもし警察ですか？」

「いやいやいやいやちよつと待って！ 僕だよ僕！ 昨日会ったじゃん！」

目の前の不審者五条悟を通報しようと思ったのだが、阻はばまれてしまった。そも蓮はとある理由から警察を信用していないので、掛ける相手はいないのだが（掛ける相手候補に悠仁はいるものの、携帯そのものを持っていないのでどうしようもない）。

「いやー、危ない危ない。おつそろしい事するね、キミ」

「しれつと家に入り込んで来てるアンタの方がよっぽど怖い。いつから居たんだ」

「ざつき。玄関から入って来たよ。鍵かかってたけど、僕にかかればチヨチヨイのちよいさー！」

そう言いながらドボドボとコーヒーに砂糖を入れていく五条悟。蓮の中で悟の評価が物凄い勢いで落ちていく。本気で通報してやろうかと思った。ここまで警察を頼りにしたのは前世も併せて生まれて初めてだ。

「で、何の用だ？ コーヒーと砂糖の代金は高くつくぞ」

「呪術師にスカウトだってばさ。昨日も言ったけど。」

「……うおつ、コーヒー美味っ！」

「砂糖何個入れたんだ？」

「十個」

「掛ける十万金払え」



「うんうん。悠仁もスカウトしたしね。結果待ちだけど」

——『悠仁』という単語が出て、蓮はテーブルを叩き悟に問いたです。

「悠仁はどうなったんだ?！」

「うーん……………まあ、聞かせても良いか。

執行猶予があるけど、死刑判決になった」

「——っ、そうか……………」

蓮は素直に生きていた事を喜んだ。

しかしその直後に、怒りが再び湧いてくる。何故悠仁が死ななければならぬのか。

悠仁が一体何をしたのか。何も知らない奴が、何故悠仁の命運を決めるのか。蓮は憤怒

に戦慄わなないた。

「悠仁はね、特級呪物……………呪いを孕んだ屍蟻しろうを取り込んだんだ。恵にも聞いたけ

ど、あの状況では最善だったとはいえ、その所為で今まで封じ込めていた呪いが現代に

蘇ってしまった。ソイツが暴れ出して、現代に被害を及ぼす事を危惧した上層部は、虎

杖悠仁の秘匿死刑を決定した」

「……………勝手な事を」

「そうだね。だからこそ、僕は上を説得して執行猶予を付けさせた。宿儺の器なんて、今後生まれる可能性を保障できないからね。『どうせ殺すなら、宿儺の指を全て取り込ま

せてから殺せば良い』……上は了承したよ。

あつ、《宿儻》ってのは、悠仁が取り込んだ呪いの名前ね。ゲームとかに出てくるような鬼神じゃなくて、千年前に実在した人間だけど」

ケタケタと笑みを浮かべながら悟が言う。

「——んで、キミはどうする？」

「……………呪術師は今のバイトより給料良いのか？」

蓮のペルソナや「ワイルド」の能力を活かすには、多くの金が必要だ。二ヶ月分のバイト代の貯蓄はあれど、ペルソナの召喚や強化に充ててしまえば、一気にすつからかんになる。仲間の装備、補給品、日常用、そしてペルソナの強化……金の使い所が多々ある前世では、この仕様には頭を悩まされた。そしておそらく、今世でも頭を悩ませるのだろう。

「めちやくちや良いよお給料！ もーそこらのバイトとか目じゃ無いね！ 何ならふつーに就職するより給料良いし。ちよつと命に関わるけど、キミには打って付けのオシゴトだと思うんだ」

「……………分からないな。どうして矢鱈とオレを推すんだ？」

「勘だよ。昨日も言ったけど。理論とか根拠とか、そう言うモンじゃない……けど、何となくそう思ったんだ。キミには才能と力がある。いずれ『最強』の僕に並ぶ可能性を秘

めてるってね」

「買い被りすぎだ。まだオレにそんな力は……」

「ある。断言出来る。何せ『最強』の僕が言うんだからネ！」

悟が『最強』という言葉をやたら連呼してくる。

蓮には不可解だった。なぜこんなにも悟がグイグイ来るのかも、こんなに過大評価してくれているのかも。——だが蓮は、これをチャンスだと思つた。

——虎杖悠仁の秘匿死刑。その一事が、それだけが悉く気に入らない。

虎杖悠仁は善人だ。陽気で、社交的で、他者を差別しない。友人も蓮より多い。蓮は、虎杖悠仁こそ幸せになるべき人間の筆頭だと思つている。だからこそ、悠仁の死刑には反対だった。

故に、蓮は決意する。腐つた規則も、呪霊も、大人も、世界も、何もかもに。ジョーカ<sup>切</sup>ーカ<sup>リ</sup>ーとして知らしめるのだ。友を殺させはしないと。欺瞞も嘘も通じないと。貴様らの思い通りには成り得ないと。もはや貴様らの居場所など無いと。貴様らの思

——虎杖悠仁<sup>我が親友</sup>を殺させはしないと。

「——『最強』<sup>アシタ</sup>を超えれば、悠仁の秘匿死刑も撤回出来るか？」

「——もちろん、キミならきつと出来るさ。」

……あつ、キミもしかして上の人嫌いなタイプ？　そういう理不尽な事許せない系男

子？」

「冷めたコーヒーと警察と、腐った大人が大嫌いなんだ」

「——っはは、良いねえ！ 僕もそう思ってるよ！ やっぱキミ、面白いね！」

……ねえ、僕ら気が合うと思わない？ 実は僕も上の連中老害共が大っ嫌いだね。どうにかして引き摺り下ろしたいんだけど、『最強』ってだけじゃイマイチ決め手がなくってさ。君みたいな子を探してたんだ。

——取引しようよ。僕が直々に、キミを『最強』に少しでも早く近付けるように鍛え上げる。その代わり、キミは僕の『革命』に協力する……どうかな？」

やる事は、前と変わらない。

覚悟など、とつくに出来ている。

「悪くない。取引だ」

「——決まりだね。よろしく、蓮」

手を差し出される。蓮もまた手を差し出し、硬く握手をした。

これで蓮は、再びこの世界で戦いに身を投じる事となった。

悟からの信頼を感じる……。

我は汝……汝は我……。



汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、「皇帝」のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

「——よし、じゃあ身支度して。行くよ」

「え、どこに?」

「え? ああ、言つてなかったっけ。蓮には転校してもらおうから。行き先は東京ね」

「あ?」

どうやら自分は、何かと東京に縁があるらしい。そして次に家庭内事情を連想した。前世とは違い、両親や祖父母と仲は良い。加えて怪<sup>五</sup>しい人<sup>栞</sup>に着いて行くとすると、絶対に反対される。

「き、聞いてないぞ、そんな事! ああもう、皆と相談しないと! 高校の学費はどうし

よう……皆のご飯は……というか呪術師の事、どう説明すれば……!?!」

「大丈夫。僕『最強』だから!」

「答えになつてない……!!」  
ぶん殴りたい。そう思った。

PERSONA 5 in Judgment  
Let's start the game.  
#3 Gleam of hope

## # 4

16.

「——つてな訳で、キミ死刑ね！」

ばきゅーんと悠仁の脳内に銃声走る。

そう言いながら、ニッコリと笑う目の前の五条悟。現在虎杖悠仁は、その両腕を、所々に呪符の付いた標繩しめなわで縛られ拘束されていた。制服をパーカーごと宿儺に引き裂かれてしまったため、上半身に新たに無地の白いTシャツを着せられていた。

——ここは何処なのか、と問われれば、悠仁は答える事が出来ない。部屋である事は確かだ。しかし出口のためのドアが無い。部屋には全体的に、標繩に使われている呪符がびっしりと貼られている。灯りのためか、床に灯籠が置かれている。まるで——何か忌むべき物を此処に閉じ込め、外界から隔絶しようとしているかのように。

「つーか、前話の回想と展開が合ってねーんだけど」

「いや、これでも頑張ったんだよ？ 死刑つちや死刑なんだけど、執行猶予が付いてね。

……まあ、一から説明するよ」

がさごそとポケットの中を漁る悟。旧ドラえもんの如き効果音と共に取り出したの

は——悠仁が取り込んだ呪物と酷似した指だった。

「《両面宿儺の指》……キミが取り込んだ呪物と同じモノだよ。僕らはその内の六本を保有してる。本来なら全部で二十本あるんだけどね」

「二十本……？ ああ、足も含めてか」

「いいや、宿儺は腕が四本あるんだ」

そう言いながら悟は、貴重であろうソレを投げ——瞬間、悟が手を開いた方向の壁が、呪物ごとめり込んだ。……しかし肝心の呪物である《指》は、先程悟が見せた時の形状のままだった。つまり、この呪物は——

「見たろ？ 壊せないんだよ、これは。この所日に日に封印が弱まってきてるし、現存の術師じゃあ封印が追いつかない。それほどに強力な呪いなんだよ、宿儺は。——そんな時、キミに白羽の矢が立った。

キミが死ねば、中の宿儺も死ぬ……けどウチの老人共は臆病でねえ。今すぐに君を殺したいらしい。でも、そんなの勿体ないじゃない？ 宿儺に耐性のある人間なんて、今後現れるという保証は無いしね」

「……………だから、俺が《指》を全部喰えば——」

「両面宿儺は完全に消滅するってワケ。——虎杖悠仁。キミには今二つの選択肢がある。

今直ぐに死ぬか——全ての宿讎の指を見つけ出し、取り込んでから死ぬか。キミは、どうしたい？」

「——俺は……………」

17.

箸渡しや違い箸を何故してはいけなかったのかを、悠仁はこの日初めて知った。骨上げという儀式の時だけに行う箸の使い方であり、日常生活の中に、葬儀という『非日常性』を持ち込まないようにするためだったのだ。

悠仁が悟と問答してから一日が経過した。火葬を済ませた悠仁と、葬儀に参列した蓮は、虎杖倭助の骨上げを行なっている。二人一組となつて、一つの骨を蓮の箸で拾い、隣の悠仁が箸で受け取り骨壺に入れていく。手に持っている箸は、竹製と木製のそれぞれ長さの違うものだった。

珍しく、蓮が先に口を開いた。

「……………倭助さん、御逝去されていたんだな」

「うん。一昨日、死んだ」

「何か言つてたか？」

「——人を助ける。手の届く範囲で良いから、出来るだけ沢山助ける……………」

『蓮だけは死ぬ気で守れ』の部分、本人の前では恥ずかしくて言えなかった。

「倭助さんらしい。あの人は、自分よりも他人を心配するお人好しだったから……」

「そうだったん？」

「そうだったさ。悠仁の前では強がってるだけだよ」

「そうだったんか。……爺ちゃんらしいや」

「ああ……、そうだな」

蓮は倭助とは知り合いだった。さほど長くはないとは言え、中学生の頃には蓮もお見舞いに行っていた。最初こそ歓迎はされなかったものの、日を重ねるにつれて段々と心を開いてくれた。三年も付き合っていたら、色々と胸に込み上げてくるものがある。

骨壺に骨を入れ終わり、悠仁が蓋を閉める。静寂を先に破ったのは、悠仁の方だった。

「……………俺さ、指食べたじゃん。アレ、かなりヤバイやつらしくてさ」

「うん」

重い唇が言の葉を紡いでいく。

「それで、五条って人がさ……俺が……指を全部喰うまではしないけど、死刑だって言ってきたさ」

「うん」

腹の底が重くなる。自然と顔が俯く。

「だからさ、俺……蓮や先輩方とかと、もう一緒に居られねえ。仕方ないんだけどさ」  
 「……………」

自分でも何を言いたいのかわからない。だが何かを言わなければいけない。

「だから蓮。俺ね、蓮や皆と一緒に居られて……」

「嫌だ」

——虎杖悠仁は、雨宮蓮こそ、その頑張りを報われる人間だと思っている。

雨宮蓮は善人だ。無口で誤解されやすいという欠点はあれど、頼まれ事をほとんど断らないほど優しく、悪行を見逃せないほど正義感が強くて、自分に害が及ぼうとも人を助けられるほど強い心を持っている。もし仮に蓮が悲惨な人生を送ってしまうのなら、悠仁は神や運命を、何の躊躇ためらいも無く呪うだろう。

だからこそ悠仁は、蓮が危ない目に遭わないように、祖父の遺言の通り『蓮を守る』ために、脅威虎杖悠仁から遠ざけようとした。

「いや……嫌だとか、そういう問題じゃねーんだよ。俺が喰った呪いは、俺を死刑にするほど危ねーモンなんだってば」

「それでも、悠仁死刑がそれで辛い思いをするのは嫌だ」

「俺は……俺の所為で、お前が危ない目に遭うのが嫌だ。……俺が居なくなりや、お前や先輩方や……皆が危ない目に遭う事も無くなる」

「だから、オレに悠仁の死刑を見逃せと？」

「執行猶予までは死なねーってば、俺。……話聞いてたか？」

「聞いてたから言ってるんだ。オレは悠仁の死刑そのものが気に入らない。……悠仁はオレの嫌いな物、知ってるだろう？」

「……何だっけ。理不尽とか、悪い奴とか……そんなんだろ？ それが何？」

「そう。——オレにとって、悠仁の死刑は『理不尽』だ。だから許せないし、反対する。オレは受け入れない」

「だから——ッ、死刑は仕方ない事で、決まっちゃってもう変わらねえって言ってンだろッ!!」

怒鳴りながら蓮の方を向き胸倉を掴んだ。瞳孔が開ききっている。焦点が合わない。どうしてここまで聞き分けがないのかと、いつの間にか肚の底に孕んでいた怒りを表に出した。あるいは、独りになる事の寂しさを紛らわしたかったのかもしれない。どちらにせよ、もう悠仁の口は止まらなかつた。

「中二の時、覚えてるよな。お前、虐められてる奴の事助けたよな。……お前も標的になるっての、解ってたよな？ 解つてて助けてたよな？ そんな俺、お前の事凄えって思ったよ！ 後にも先にも、お前みたいな良い奴は居ねえだろうなって思ったよ!! お前みたいに強くなりてえって思ったんだよ!!」



……お前は凄えよ。けどさ……コレはもう別次元なんだよ。お前がいくら頑張ったって、無理だって。………解ってよ、蓮」

——雨宮蓮と自身を比較して、悠仁はふと思う事がある。『何故、自分にだけこのような人間離れた怪力があるのだろうか』と。自分では普通だと思っていた事が、親友と比較する事で普通ではなくなっていた。——そして、普通ではない自分は一体何者なのだろうか、と思うようになった。

おそらく蓮のような幼馴染が居なければ、このような事は考えもしなかっただろう。持ち前の陽気さで取り繕ってはいたが、普通なら恐ろしい物を見るような目を向けられるのを、流石に悠仁でも解っていた。

「……………それは……………」

「……………あ?」

「——それは、お前の本心か?」

「いや、だから——」

「本当に仕方のない事か?」

「さつきからそう言って——」

——そして、新月のあの夜、虎杖悠仁は化物に成り下がった。両面宿儻の指を取り込んだ事で、『化物級の人間』から『化物』となった。虎杖悠仁は雨宮蓮と共に居られな

い。いつかきつとその爪で、彼の肉体を魂ごと引き裂いてしまおうから……。

「このふざけた運命を受け入れて、言われるがままに死ぬだけか？」

——答えろ、虎杖悠仁。」

「……………」

だというのに、我が親友雨宮蓮は——。

「諦めるのか？」

普段と変わらぬ、真つ直ぐな目で。

信じるように、けが穢れなき目で。

虎杖化物となった自分を、見てくれた。

焼却場にて、静寂が二人を包む。しかし長くは続かなかつた。

萎れる顔、虚勢を張った表面、心を蝕んでいた寂寥と恐怖が、涙となって溢れ出る。何の罪も犯していない自分が、何故に死刑を定められたのかという絶望感と、虎杖悠仁が内に秘めたる『死にたくない』という本心を、流れるままに吐露していく。

……それらを全て、雨宮蓮は受け止めた。

虎杖悠仁は、もう溢れる涙を止める事は出来ない。

もう限界だった。心が許容範囲を超えた。自分の中の思いをギリギリまで堰き止めていたものが壊れた音がした。

俯き、言葉を紡いでいく。

「……………頼む、蓮」

「何だ」

嗚咽を堪えて、ゆっくりと唇を動かす。

「俺を…………つ、助けてくれ……………」

「任せろ」

ただの少年虎杖 悠仁が両肩に背負うには、この運命はあまりにも重過ぎた。

18.

「……………亡くなられたのは？」

「爺ちゃん。でも、親みたいなモンかな」

「……………そつか。すまないね、そんな時に」

「別にイイよ」

ずっとと鼻を吸りながら悠仁が答える。鱗雲がぽつぽつと浮かぶ蒼空の下。焼却場の外、昼前の空。虎杖悠仁と雨宮蓮、五条悟は、三人での再会を果たした。悟と蓮が悠仁を挟むようにしてベンチに座っている。

「——で、どうするか決まった？」

「……こういう呪いの被害って、結構あんの？」

「うーん、今回主に被害を負ったのは学校だけだからねえ。怪我したのも恵だけだし、今  
 回ばかりは超ラッキーなケースだよ。あの時、蓮がいなかったらあの二人は……いや、  
 止よそうか」

蓮が口を開き始める。

「怪死者・行方不明者が年間平均一万人って事は、それなりに規模は大きいのか？」

「ザラにあるよ。呪いに遭遇して普通に死ねたら御の字、遺体が見つかればまだマシ。  
 更に宿儺特級呪物の指を搜索するとなれば、凄惨な現場を見る事もあるだろうし……キミらが  
 『そう』ならないとは言ってあげられない。」

——ま、好きな地獄を選んでよ」

……背負った運命が重い。それこそ、日本全土に住む一億二千万人に牙を剥きつつ、  
 その命を双肩に背負っているようなものだ。悠仁は息を呑み、蓮は組んでいた手を固く  
 握った。

——オマエは強いから、人を助けろ。

——特に蓮だけは死ぬ気で守れ。

その言葉が、脳裏に焼き付いて離れない。

虎杖悠仁はあの日、この言葉を胸に刻まれた。この言葉に、生涯を呪われたまま生き

ていくのだろう。気付けば口は開いていた。

「……あの指、まだある？」

「ん」

悟が屍蠟の指を悠仁に手渡す。それを悠仁はまじまじと見つめ、口の中に放り込んだ。

——瞬間、溢れ出る呪いの波が、憎悪となつて周辺を襲う。木々が怯えているかのように揺れる。停まっていた鳥達は本能が訴えるままに逃げ出した。新月のあの夜、刺青のように湧き出た紋様が、再び悠仁の身体に浮かんでいた。流石に悟も警戒を取る。

「く、くく、はははは……！」

（二本目、十分の一……どうかな？）

悪意が渦巻く。邪悪な笑みが溢れる。体が熱い。涙袋に浮かんだ新たな双眸が開く。上下左右の感覚が薄れ、意識さえも失い、その呪いが表層に——

「ぐお、え、えまつずうツツ!!」

——顛れる事はなかった。新たな双眸が閉じ、紋様が消えていく。木々の怯えは消え、鳥も先の喧騒を忘れ枝に停まった。

「どんな味なんだ？ 見た目はジャーキーっぽいけど」

「ひえっひえんひはいはあひ！ ほえおいはやう、はんかほいおんほっへひへー！」

「そうなのか。分かった、適当に買ってくる」

「え、解るの？」

立ち上がり財布を取り出す蓮。自販機が近くにあるのが悠仁にとっては救いか。しかし悟には悠仁の日本語（唇縛り）を理解出来ないようだった。

（しかし……これで確定した。肉体のみの耐性だけではなく、宿儺を相手に難なく自我を保っている。千年生まれてこなかった逸材だ……！）

「コーラとファンタ、どっちがいい？」

「ほーあ！」

「ファンタか」

「ひえーよ!!」

「スプライトは売ってなかったって」

「はよほーあひよーはい！」

「はいはい」

そう言いながらコーラを渡す。ひったくるようにしてペットボトルを掴み、一息にキャップを開けて飲んでいく。喉越し爽快、気付けばコーラは半分ほど減っていた。

「……………ぶはー！ ぐおえええつぶ」

「ゲップをするな汚いな」

「……これペプシじゃん！ 何でコココーラじゃないの!？」

「それしか無かったんだ、わがまま言うな。ペプシでも良いだろ」

「いやここはコココーラだろ！ 最強じゃんコココーラ」

「いや、断然ペプシだな。甘過ぎないのが良いんだろ」

「あ？」

「は？」

「おつ、戦争クリックかい？ メッツ派の僕も混ざっちゃおつ！」

「まさかの第三勢力!!」

「将棋してる時にチェスで乱入して来るタイプだなこの人」

皆で一頻りひとしき笑った。

「……覚悟は決まった、という事で良いのかな？」

「ううん、全然。何で俺が死刑なんだって思ってるし、普通に死にたくねえ。」

——けど、呪いは放つとけねえ。宿儻は全部喰ってやる。……ほんと、面倒臭え遺言呪いだよ。

それにさ、何つーか、死刑って決まっちゃったけど、つらくは無え……違えな、つらく無くなったんだ。……簡単に死なせてくれなさそーだしね」

悟の問いかけに、悠仁がそう答えながら蓮を見る。蓮が浮かべていたのは、新月のあ

の夜のような、底知れぬ妖しい笑みだった。だが不思議と、悠仁はその笑みに不安ではなく、安心感を抱いていた。

「地獄つちや地獄だけどき——結構、楽しい地獄になりそうなんだ」

だからこそ、普段は絶対に思わない事を思えたのだ。

「——あはは、イイね！ キミみたいなのは嫌いじゃない。

——よし、じゃあ今日中に荷物まとめておいで。直ぐに出発するよ」

「えっ、どこに？」

悠仁の目が点になる。——その返答者は、悟でも蓮でもなかった。

「……東京だよ」

返答者は、頭部に包帯やガーゼを貼られた伏黒恵だった。見るからに怪我人だが、お構いなく悠仁と蓮は話しかける。

「うおっ、恵！ 元気そーじゃん！」

「包帯コレ見てそう思うか？」

「恵。元気そうだな。大した怪我也無さそうで安心した」

「お前から目エふしあな節穴ふしあななのか？」

「えっ？ 伏黒だけに？ 節穴？ んふへへ、ふ、伏黒なだけに？」

「俺が怪我してて良かったな虎杖。でなきやお前の数少ない脳細胞が大量に死滅してる



所だぞ」

「アツ、その節はどうもアリガトウゴザイマス……」

「節だけに？」

「YES!! よろく分かってんじゃんレンレ〜ン！」

イエーイと言いながらハイタッチするお馬鹿二人。

「お前らマジで覚えとけよ……」

悟も便乗して三人で笑い、一人は眉根を寄せた。

「で、東京に何しに？」

「呪術の学校に転入すんだよ。……雨宮もな」

「オレの時あからさまに顔を顰めるの止めてくれないか？ 悪かったつてば」

「ぶふっ、うに……ふへへへ、恵がうににトラウマ持つてる……あつはははは！」

「五条先生も笑わないでください殴りますよ」

「いやん！ 教え子が過激っ！ ほかあそんな子に育てた覚えはありませんよ！」

「アンタに育てられたから『こう』なったんだよ！」

「そんなに怒ったら傷が開いちまうよ恵、安静にしてねーと」

「誰の！ 所為だと！ 思ってたんだよ!!」

わちやわちやする男四人衆。

「あつ、ちなみに一年生はキミらで四人目ね」  
『少なっ!!』

19.

時刻は午後二時を少し過ぎたところ。雨宮蓮、虎杖悠仁、伏黒恵、五条悟が駅のホームに立っている。蓮と悠仁は大荷物で、キャリーバックを持ち歩いている。中には私服やら本やらが入っているが、悠仁のはほとんどが漫画本なのに対し、蓮は古今東西様々なものを。それこそ悠仁と同じく漫画や文庫本、哲学書、ナンプレ等のパズルとジャンルを問わない。

もうすぐ、埼京線の渋谷駅行き新幹線やまびこ号が来る。地元の仙台と、暫しの別れを告げなければならぬ。そんな中、蓮はかつての住処の東京に思いを馳せていた。

(東京……か)

今世では蓮は東京に行った経験はほとんど無い。渋谷を中学二年の修学旅行で経由しただけだ。特段東京に用がある訳でもなく、ましてや親戚が関東に居る訳でもないため行く事も無かったが、故郷の四軒茶屋を見たいという思いはあった。

——蓮の家族は、蓮の急な編入を断固拒否した。

蓮の家庭は、陽気な父と優しい母、少し禿げた厳しい祖父と祖父を尻に敷く祖母……

と、極めて普通だ。(あまりやらなかった事は無いが) 悪さをすれば怒るし、怪我をすれば心配する程度には自分の事を想っているのだろう……と、蓮はそう考えて『いた』。中一からスマホを持たせてくれた時や、高校進学の記念としてサイフオンを買ってもらった折、一緒に祖父母が買ってきた豆の中にブルーマウンテンがあった時、蓮は自身の目を疑った。

前世で蓮がスマホを持ったのは中学を卒業した後からだ。中学生かつ思春期の男児がスマホを何に使うかなど決まっている。ソレを含めた上で前世の両親は危惧してか、ネットの恐ろしさのある程度学んだ後で使わせたのだが、今世の両親は蓮を信頼しきっているらしい。

ブルーマウンテンは高品質かつ高級豆で知られている。とても初心者向けとは言いがたい。前世では義父の許可こそ得た上で高い豆を使わせてもらっていたが、同じような時期に再びこの豆と出会えるとは思っても見なかった。その日は、両親と祖父母に感謝しながら『心を込めて』淹れた。

自身の親が子煩悩……俗に言う『親ばか』や『過保護』だという事を知った時、蓮は何とも言えない感情を抱いた。前世でこのように甘やかされた記憶はあまり無い。思えば小学生の時もかなり甘かった気がするが、良い歳こいた精神年齢オッサンが小学生をやり直すのは、正直精神にくるものがあった。……しかし蓮の生い立ちを知れば本人

でも口を噤つぶんでしまう。

——雨宮蓮は産まれた時、死いんでいた。

聞く所によると、蓮は心停止の状態で産まれたらしい。心停止状態で出産が確認された直後、蘇生活動を行うもあまり効果は見られなかった。このままでは死産の可能性も考慮しなければならぬ……と、担当医が諦めかけた時、急速に心臓が活動を開始。先程まで生命の灯火が消えかけていたのを忘れたかのように、雨宮蓮は何事も無かつたかのように生還と生誕を果たしたのだという。

この経験もあつてか、蓮のやる事なす事心配なのだ。もし再び蓮が死ぬ程苦しめられるような事があれば、それこそショック死してしまうのではないかと考えるくらいには。

故に、蓮の急な転入には反対した。……そも家族からすれば不審者でしかない五条悟と共に、呪術という不可思議極まる物を、その危険性と……悠仁の死刑を撤回させたい思いとを説明しながら説得を試みたところで、反対されるのは分かりきっていた。

意外だったのは、祖父の助け舟があつた事だ。我関せずといった態度でテレビを見ていたのだが——

——戦いてえなら戦わせりやいい。男達が決めた事だ。他の奴が一々口を挟んでんじゃねえよ。

唐突にそう言い放った。テレビを見ていた祖父の背中が、痩せこけて小さかったはずだったのに、その日だけは大きく見えた。蓮はその背中に、かつての義父を重ねた。虎杖倭助の葬式の前日の出来事だった。

斯くして、<sup>か</sup>雨宮蓮は東京都立呪術高等専門学校に入学——もとい編入が決定したのである。

「昼、何も食ってねえから腹減った……」

ズギューンと腹から銃声、後にぐぐぐぐと胃の鳴き声が。

悠仁の腹時計はいつも正確ではあるが、肝心の鐘はぶつ壊れてしまっている。空腹時、銃声が聞こえるのは何故なのだろうと原因解明に蓮は努めるものの、未だ理由は不明だ。蓮的世界七不思議の隠された八つ目である。口を開いたのは恵だった。

「もうすぐ新幹線来るんだから我慢しろ」

「いや、でもオ……」

「でももへったくれもあるか。弁当買っただろ」

「恵サン何か冷たくくない?」

「……さあ、何の事かな」

雑談しながら時間を潰していると、女性のアナウンスが聞こえ始めた。もうすぐやまびこ号が到着するらしい。新しい日常に思いを馳せるその最中、聞き覚えのある男女の

声が聞こえてきた。佐々木節子と井口武志の二人である。

「蓮！ 悠仁！ ……ひい、ひい、追いついた……」

「せつちゃん先輩とタケちゃん先輩じゃないっすか！ どうしてここに……ってか、どうして俺らがいるって分かったん？」

「え？ えつと……」

蓮が人差し指を口に当てた。悠仁には内緒に、葬式の前日に蓮は二人にSNSで連絡を取っていたのだ。——決別を悔いのないものにするために。

「ま、まあそれよりもさ……二人って、転校するんでしょ？ どうしてこんな急に決まったの？」

「まあ、あのー、えつとお……うーん、何て言えば……」

「——」昨日の化物、先輩方も視えましたよね？」

そう切り出したのは蓮だ。

「……あの蛙みたいなヤツとか？」

「はい。生来霊感が強いからか、オレはアレが普通に視えてたし、今も視えてる。悠仁はあの日を皮切りにずっと視えるようになったらしいです。アレが恒常的に視えて、かつ対抗手段を持ち得る人材として、スカウトされたんですよ。

な？ 悠仁」

「おつ……そうそう、それが言いたかったんだよ！」

蓮の言い訳に悠仁は激しく相槌を打った。

「けどよ……それって、別にお前らがやんなくても……」

「……アレみたいなヤツと戦うんでしょ？ 危ないって……」

苦渋の思いを示す二人。

……全くその通りだと悠仁は思った。死ぬのは怖いし、痛いのは嫌だ。恐怖はまだ虎杖悠仁の体を縛っている。祖父のあの言葉が心こゝろを雁字搦がんじがらめにしてくる。蓮のように真つ直ぐな覚悟がある訳ではない。正直、今すぐにも逃げ出したい。

——だがここで逃げてしまうのは、『違う』と思つたのだ。

自分の悪心に従つて逃げて、何もかも知らんぷりして逃げて、守るべき人を見捨てて逃げて……逃げ続けた先に、きつと皆の笑顔は無い。あるのは絶望と、血と、憎悪のみだ。果たしてその結末を、虎杖悠仁は納得出来るだろうか。

——否だ。

この使命から逃げた所で、死刑は免れない。宿讎自の所為分で人が死ぬのならば、その何倍もの人を助けたい。望まれなくとも、汚らわしいものを見る目で見られようとも、偽善者だと罵られようとも——それでも、虎杖悠仁悠は止まりたくはないのだ。

……二人の言い分も理解は出来ると蓮は思った。前世にてペルソナに目醒めずにい

たとしたら、自分はただ言われるがままに生きるだけのロボットとなっていただろう。正義の価値も、悪の美学も、生きる理由も、死なないための明日も、きつと放棄していただろう。

——ただ、戦う理由はあったのだ。だからこそ蓮は生きた。その人生に意味を見出した。故にその言い分に納得はしない。

自分の正義が本当に正しいものなのかは、未だに蓮もよく解らない。雨宮蓮は間違える。???だった時も、幾度も間違えてきた。その間違い故に、仲間の親を喪わせてしまった。それを伝える事は無かったが、その悔いは転生してもなお消える事はない。

——だからこそ、もう間違えないと誓った。

雨宮蓮は、雨宮蓮が『正しい』と思つた事を為す。友を助ける事で、結果的に中の化物をも助けてしまう事は重々承知している。善か悪かと問われれば悪だ。——けれど友を見捨てる事は、決して『正しい』事ではない。

「ワリい、先輩。そりゃ無理だわ」

「すみません、先輩。オレは戦います」

——虎杖悠仁雨宮蓮は、己の正義を信じる。

「これが、オレのやりたい事なんだ」

かつての日常は崩れた。もう二度と直りはしない。この別れを未来永劫、四人は忘れ



ないだろう。

しかし蓮と悠仁は前へ進まねばならないのだ。例え望まなない結末が待っていたとしても。

「……………そつかあ。それじゃ、仕方ないか」

「別にもう会えないって訳じゃないんだからさ。暇が出来れば、ちよくちよく帰ってくるよ」

精一杯の作り笑いで悠仁は心配かけまいとするも、口角は歪みかけていた。蓮も別れを惜しむように、それを隠すように、ほんの少しだけ眉根を寄せている。先輩二人も、何かを堪えているようだった。

——と、そうしている内にアナウンスが終わり、新幹線がようやく到着したらしい。白い流線型のフォルムとピンクのライン、そしてそのラインの下には紺色のペイントがされている。東京行きやまびこ号だ。甲高い金属音を響かせながら、寸分変わらずホームの線に沿って停車した。

「それじゃ……………またね、先輩！」

「おう。……………達者でな、蓮、悠仁」

「うん、またいつかね！」

「はい。……………先輩方も、お元気で」

挨拶を交わして、新幹線へと乗り込む。その直後、ドアが閉まって、二人と二人は隔たれた。ドアに付いた窓の外、ホームから手を振る二人の先輩が見えた。二人の後輩も振り返す。駅から離れて、二人の影が見えなくなるまで。

いつか来たる再会を信じて、悠仁と蓮は、故郷に、友に、日常に別れを告げた。

「……出ちまつたな」

「ああ」

悠仁が鼻を吸りながら続ける。

「……なんつーかさ」

「ん？」

「あんま……うまく言葉に出来ねーんだけどさ。」

俺、お前が居てよかったわ。あんがとな、蓮」

「違うな」

「あいー……？ 何だよ」

『今後ともよろしく』だろ？ 悠仁」

「——っはは、やっぱ蓮にゃ敵わねーわ。……そーだな。

改めて、今後ともよろしくな！ 蓮！」

「ああ。よろしく、悠仁」

そう言いながら、互いに固く握手を交わした。  
悠仁からの友情を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『戦車』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

「——んじゃ、早く席座ろうぜ。腹減った」

「ああ。先生と恵も待つてるだろうしな」

蓮はそう答えながら、トランクを握り締めて客室側のドアノブに手をかける。  
今はただ、悠仁との新たなる生活の期待から来る高揚感に浸っていたかった。

東京都立呪術高等専門学校は、東京の郊外の、それも更に山奥に位置している。本校は日本に二校存在する内の一校であり、表向きには私立の宗教学校とされている。悟曰く、多くの呪術師が卒業後もここを起点に活動しており、任務の斡旋や呪術師のサポート等を行なっているのだとか。

飛鳥時代にタイムスリップして来たのではないかと錯覚する程に外観は浮世離れしてはいるものの、国立大学でよく見かけるような広い陸上競技場がポツンと存在しており、しつちやかめつちやかな空間となっていた。三重塔や仏寺が並ぶ中、現代の競技グラウンドが異彩を放っている風景は、中々にカオスだ。

陽射しが暖かい。

(……………)、本当に東京なのか?)

蓮でさえも東京に巨大な野山がある事に驚愕したというのに、その野山に清水寺のような寺院があるのだから、本当に現世なのかも疑ってしまうのは仕方ない事だ。

「すげー山の中！ 東京ってこんなトコもあるんだな」

「東京も郊外はこんなモンよ?」

そう会話するのは悠仁と悟だ。歩きながら、校門前の石段を登り、そしてようやく辿り着いた。ふと蓮が悟の方を見ると、六月という初夏の、温かいを通り越してもはや蒸し暑い時期に差し掛かった時期だというのに、喪服の如き真っ黒な服装を着用してな

お、悟は汗一滴も流していない。黒い服は熱が籠りやすいと家庭科の授業で聞いた事があるが、蓮とはどうやら鍛え方が違うらしい。

「そういや、恵どつたの?」

「術師の治療を受けて爆睡中」

「へー」

「悠仁と蓮はこれから学長と面談あるから。下手したら入学拒否られるから頑張つてね」

「ええー!? そしたら俺、即死刑!?!」

どうしよう文面何も考えてないよと焦る悠仁。しかし――

「なんだ、貴様が頭ではないのか」

――突如、呪いの声が聞こえた。

蓮はその声に聞き覚えがあった。最近聞いた声だ。新月のあの夜、虎杖悠仁が呪物を取り込んだ事で受肉した、両面宿儺の声だ。

右を見ると、悠仁の左頬に『二つ目の口』が浮かんでいる事が分かる。明らかに人体の構造を無視している。どうやら宿儺は、一部を悠仁の体に浮上させる事が出来るらしい。

「力以外の序列は詰まらん」

べちつ。と、羽虫を叩くように第二の口を叩く悠仁。

「ごめん先生。何かたまに出てくんだよね」

「ほー。愉快な体になつたねえ」

「貴様には借りがあるからな」

しかしその手の甲の上から、にゅつと再び口を形成する宿儺。

「あつ、また！」

「小僧の体をモノにしたら、真つ先に殺してやる。その次はこの癖毛の小僧だ。……

いや、敢えてその小僧を前菜にするという手も——」

「オイ。あんま調子乗ってんじゃねえぞ、呪い」

低い声で殺意を込めて言いながら、今度は強めに甲を叩いた。興が冷めたのか、それ以降宿儺が悠仁の体に浮かび上がる事はなかった。

「……はあ、やつぱ呪いは呪いつてワケ？ もつとこう……ナルトの九喇嘛クラマみてーに仲良く出来ねーかなとか思ってたんだけど」

「あつはは、無理無理。漫画やゲームじゃあるまいし。まあでも、良かったじゃない、蓮。宿儺に狙われるなんて光栄だね」

「すつごい嫌だ」

「だよな。ねー先生、コイツってそんなに有名な奴なの？」

「僕らの世界ではね。」

——両面宿儺。本来は、顔が二つ、腕が四本ある仮想の鬼神。でも悠仁の中にいるのは実在した人間だよ。まあ千年以上前の話だけだね。

呪術全盛の平安時代、術師が総力を上げて宿儺に挑み、そして敗れた。両面宿儺の名を冠し、死後呪物として時代を渡る屍蠟……悠仁が取り込んだ指でさえも、僕らは消し去る事が出来なかつた……」

——紛う事なき、呪いの王。それが両面宿儺という呪いだ。

「……先生とどつちが強い？」

「んー、全ての力を取り戻した宿儺なら、ちよーつとしんどいかな」

「負けちゃう？」

「まさか。勝つさ」

さて、三人は現在校門をさらに進み、奥の金堂のような寺院に入った。門が開かれ、鳶とびの聲が遠ざかっていく。

仄暗い。熱の匂いがする。現代には多様な文明の利器があるというのに、蠟燭で灯りを確保しているらしい。風情があるというか、古臭いというか。その最奥——雛壇に鎮座しつつ人形を作っている、蝶野○洋が。

「遅いぞ悟。八分遅刻だ」

サングラスに褐色の肌。整えられた髭は口と顎を繋げている。ワイルドさをもはや隠そうともしていない。常に眉根を寄せており厳格そうなイメージを沸き立たせる。周りに丁寧に置かれた人形達——犬の口を持つカツパ、デフォルメされた節足動物に乗られる一眼の猫、ビキニ柄のパンダなどが、彼の異物感を引き立てている。

「全く……責めるほどでもない遅刻をする癖、治せと言っただろう」

「んじゃー責めないで下さいよ、学長。どーせ人形作ってんだから良いでしょ」

（オッサンがKAWAIIを作っている……!!）

（……ガツデムの人？）

悟と問答する蝶○……もとい、夜蛾正道。彼こそが、呪術高専東京校の学長である。なぜ人形を作っているのかというと、それは彼の術式が、《呪骸》を作り、操る事に特化しているためだ。

呪骸。呪力を込めて作られた人形。内部には心臓の代わりとなる『核』が存在しており、術師の『操作』によるものではなく『自立』して行動できる存在だ。

夜蛾正道の術式は《傀儡操術》。一度術式を発動すれば、呪骸は敵を屠る殺戮マシーンと化す。因みに、カツパの名はキャシイだ。

「……キミ達が？」

「オッス！ 虎杖悠仁です！ 好みのタイプはジェニファー・ローレンスです！ よろ



しくおなしやすー！」

「雨宮蓮です。カレーと珈琲と、あとキーピックが好きです」

「……何でキーピック？」

「冗談だ」

「毎度思うけど、冗談に聞こえねえ……」

「何しにきた」

夜蛾正道はぶつきらぼうに言い放った。依然として厳格な態度は崩さない。蓮は少しだけ警戒を取った。——強敵。強固なる壁の存在を、夜蛾正道から感じ取ったのだ。先に答えたのは悠仁だった。

「……………面談？」

「高専にだ」

「呪術を学びに…………？」

「学んだ後の事を聞いている」

「あつ、そういう事ね。あの…………宿儺の指、回収するんすよ。放つとくと危ないんで」

「何故？」

「——あ——え？ 何故って…………んんー??」

悟が言っていた面談…………即ち、この質問に、彼が満足のいく答えを放てなければ、呪

術師になる事はおろか入学すらも出来ない。門前払いを喰らってしまい、帰宅するか途方に暮れるかのどちらかの選択を迫られる事になるだろう。

「……………まずはこちらから聞くとしよう。」

雨宮蓮。キミは何をしにここに来た？」

唐突に対象が転換され、少しだけ動揺した蓮。しかし直ぐに気を取り直し、口を開く。

——何を為しにきたかなど、決まっている。

「——悠仁の死刑を撤回させるために」

それを聞いた正道は、蓮に再び問いかけた。

「……………家族ですら無いのか？」

「悠仁とは友達だ」

「関係は無い。家族や友人であっても、結局『他人は他人』だ。それに虎杖悠仁の死刑は確定事項……………キミがどれほど頑張ろうと、この決定は揺るがない。彼が死ぬ事で、彼の中の呪いも祓除されるのだからね」

「だからといって、悠仁は死んで良い人間じゃない！」

「そうだな。未来ある若者に刑を下すのは、私だつて心が痛むよ。」

だが、彼がふとした拍子、宿儺に体に乗っ取られない確証がどこにある？ 彼が呪霊

側に寝返らないという保障がどこにある？ その結果、何人の人が犠牲になる？ 千人

か？ 一万人か？ それとも一億二千万人か？」

そう言いつつ、正道はすくつと立ち上がり、サングラス越しに真っ直ぐに蓮を見た。

……夜蛾正道の言葉は正しい。蓮が間違えているのは分かっている。

全体の命と個人の命。天秤が傾くのは明らかに前者の方だ。一人死んで大勢生きるか、一人の所為で大勢死ぬか……そのどちらかの選択であり、上層部は前者を選んだだけの事。実に合理的な判断だ。かつての???も、ペルソナに目覚める前であれば、マジョリテイに合わせるようにそれに従っていただろう。

だが、今の雨宮蓮がそれに納得する事はない。

「……だから諦めろと？」

「そうではない。現実を見ろと言っているんだ。

キミは優しいな。それこそ友を守ろうとする姿勢は素晴らしいと思う。だがそれは、彼が『歩く核爆弾』で無かったらの話だ。核の危険性を説きながら、必死に核爆弾を擁護しているようなもの。矛盾しているんだよ、キミの在り方は。

呪術師に『悔いの無い死』など無い。このままではキミの親友を殺すか、それともキミが親友に殺されるかを選ばねばならんぞ。……両面宿儺を抑え、もしくは被いつつ、虎杖悠仁も生かせられるのなら……その力や方法がキミの中にあつて豪語するのなら、話は別だがね」

「——ある、と言ったら？」

夜蛾学長の眉が反応を示した。

——夜蛾正道の言葉は正しい。雨宮蓮の考えは、大衆からは到底受け入れられるようなものではないだろう。厄災を野放しにするのだ。何も知らぬ大衆からしたら迷惑極まりない。

だがそれでも、虎杖悠仁には生きていて欲しいのだ。

理不尽によつて心を押し潰され、不条理によつて心を壊された男がいたのを、雨宮蓮は良く知っている。だがその男は、地を這いずつて泥水を啜つてでも前へ進み、立ち向かった。蓮は悠仁も、例え絶望の渦中に居たとしても、決して諦めて欲しくない。生き延びる事を諦めて欲しくないのだ。

「ほう。その根拠は？」

「……今は無理だ。今のオレの力では、悠仁を救う事は出来ない。だからこそ、高専こくで強くなつて力をつける。『最強』五条先生を超えて、両面宿儺を祓い、悠仁を救う。大衆を助けるのはその次だ」

「……強欲だな。それはキミ一人でどうにかなるレベルではない。」

両面宿儺はそこいらの呪いとは格が違う。呪術全盛期の時代でも彼奴を葬る事は出来なかった。彼奴に掛かった術師が全員敗北したのだぞ？ キミ一人だけで勝てる道

理は無い」

「分かっている。オレ一人の力なんて高が知れてる。けど——！」  
「……分らないな。何故キミは、そこまで虎杖悠仁に固執する？」

正道が答えを遮って言った。

「悠仁は善人だ。善人が痛い目を見るなんて、そんなの因果応報に適っていない。

オレは不条理が大嫌いだ。罪を犯した者は裁かれるべきだし、善を成した者はその行いを報われるべきだと思ってる。悠仁だって報われるべきなんだ………多分、自己満足なんだと思う。——けど、その自己満足で悠仁のような善人が救われるのなら、オレはいくらでもそれを為す。

……不可能だの何だの、こっちは聞き飽きてるんだよ」

雨宮蓮は、どこか壊れている。自身を勘定に入れず、他者を優先する傾向にある。脳内を自己犠牲で汚染されている。おそらく、蓮が前世でペルソナに目覚めた時から、それはもう始まっていたのだらう。一種の性さがのようなものだ。

だが、ジョーカーの在り方は変わらない。???の時も、雨宮蓮になろうとも、決して変わりはしないのだ。

「——オレは、オレの強欲を信じる。強欲が示すままに人を——悠仁を助ける。不可能

なんて、いくらでも乗り越える。」

自分の信念に従い、愚かしく真っ直ぐに生きる。  
それが、ジョーカーが選んだ道だ。

「……………虎杖悠仁、キミは？」

「あつ、えーと……………俺、爺ちゃん亡くしてんすよ。ここに来る前に。んで、爺ちゃんの遺言で、『人を助ける』って言われて。それで、じゃあ助けなきゃって思って……………でも、『違うな』って思ったんだ」

「ほう。というと？」

「何っーか……………遺言に従う『だけ』になっちまうと、『俺』が居なくなっちまう気がした。ただ爺ちゃんに命令されて動いてるロボットになっちまう……………って。いや、爺ちゃんは嫌いじゃねえし、爺ちゃんの言葉が間違つてるとは思えねえけど」

頭を掻きながら悠仁が言う。

「宿儺の指を回収するとか、大勢の人を助けるとか、そういうのは言われたからやるだけ。勿論人は助けるし、宿儺は全部喰う。けど、蓮を守りたいってのは、ずっと前から思っ

てた事なんだ。見たらわかる通り、蓮つて、結構向こう見ずで頑固なトコあるし。だから、爺ちゃんに言われるまでもなく——」

拳を握り締める。

泣くだけ泣いた。恥も晒した。

故に、虎杖悠仁は迷わない。

「——俺は俺の意思で、蓮の背中を守りたい。」

親友蓮に比べたら陳腐でお粗末な理由だ。

だがこれこそが、虎杖悠仁の行動理念であり、信念だ。

それだけで、戦う理由になる。

長生きするか、早死にするかも分からない、波瀾万丈なこの人生で。

それでも、生き様で後悔はしたくない。

「フツ——悟。寮へ案内してやれ。セキキュリテイ等の設備の説明も怠るなよ」

「ん？ つて事は……」

「——合格だ、雨宮蓮君、虎杖悠仁君。ようこそ、呪術高专へ」

「——はい、ここが蓮の部屋ね」

「おお……広いな」

「悠仁はこつちね」

「は——い！」

　　そう言い渡され、案内された寮の部屋は、蓮の言う通りかなり広かった。一人どころか三人で寝泊まりは出来るほどの広さだ。ベッド、クローゼット、勉強机、そして何より冷暖房完備。一人部屋にしておくには勿体ない。キャリーバックを置いて、蓮はさつさと荷物を取り出して行く。衣服をクローゼットに、本を勉強机に。

「うおー、広い広い！　これ俺の部屋!？」

「そう。一、三年は今出払ってるけど、まあ直ぐに会えると思うよ。人数少ないし」

　　直ぐ隣の悠仁と悟。ハイになった悠仁が、秘蔵のグラビアポスターを丁寧に貼り付けて行く。ボンキュッボンな北歐美女が、浜辺にて、その豊満な二つの果実を強調するようにして座っていた。

「……悠仁」

「んー?」

「改めて聞こうか。——覚悟は決まったかい？」



「——うん。何つーか、やりたい事がはつきりしたよ。」

俺さ、蓮がいなかったら、俺はここで指の回収を待ってただけかもしれない……って思うんだよね。……ぐーたらしてる俺に、ボロボロになりながら指届けにくる恵を想像すると、ちよつとウケるけど」

「あはは、確かに」

「でもさ、どーやって指探すの？ そんなすぐ分かるモンなの？」

「気配が大き過ぎるモノ、息を潜めているモノ、既に呪霊に取り込まれたモノ……探すという点において、これほど厄介なモノはない。でも、キミの中の宿儺が教えてくれるはずだ」

「えー……コイツそんな素直に見えねーんだけど」

「ま、そこはW I N—W I Nの関係が築けるんじゃないかな」

そう言いながら、部屋や物品の整理が終了した。寮の割り当ての後、悟にはセキユリティや設備等の説明という使命が残されている。蓮を呼ぼうとした矢先、同じタイミングで二つの部屋のドアが開かれた。どうやら蓮も、整理が終わったらしい。そしてもう一つの扉からは——

「うげ、隣かよ……」

——あからさまに嫌そうな顔をして現れる、寝間着姿の伏黒恵の姿があった。どうや

ら傷は癒えたらしい。

「おー！ 恵、今度こそ元気そうだな!!」

「うるっさ。……何で隣なんです、先生。空室なんてもつと他にあつたでしょう?」

「いやー、賑やかな方が良いと思つてネ!」

「授業と任務で充分です。ありがた迷惑だ」

「うおつ、恵の部屋、めっちゃしつかりしてら」

「へえ。オレも見たいな」

そう言いながら、悠仁と蓮が恵の部屋を何の躊躇いもなく覗いていく。悠仁の顔の下の隙間に蓮の顔がある。因みに部屋の割り当ては、寮の玄関から近い順に恵、蓮、悠仁の順となっている。シンプル・イズ・ベストな、何の変哲もない質素な部屋だった。

「だから迷惑だつっのツ」

バシンと、悠仁と蓮がいるにも関わらずドアが勢いよく閉められる。悠仁は避けられなかったが、間一髪で蓮は回避に成功した。

「あいてっ」

「避けたっ」

「避けんな」

「あつはつは。仲が良さそうで実によろしい」

「先生の目も節穴なんですか？」

「そんな事より、明日は皆でお出かけだよ！」

皆のメガテン……もとい、目が点になる。

「えっ、どこ行くん先生？」

「四人目の一年生を迎えに行きます！ 場所は——」

22.

翌日、午前十時過ぎ。

盛岡から品川行きの新幹線の中、駅弁を食べる少女が座っていた。桜色の唇、茶髪のシヨートヘアが、左から右へと額を流れる。年頃の娘らしい健康的な素肌。長いまつ毛が綺麗に揃った、若干垂れ目気味の相貌を持つ。

少女は盛岡の風景を肴にしつつ、梅干しを味わっている。身長こそ蓮達と比べて低めだが、かといってスタイルが悪い訳ではない。むしろ、発育の良いプロポーシヨンと言えるだろう。その身には、伏黒恵が着ていたような呪術高専の制服を纏っていた。

「盛岡まで既に四時間……ようやくあのクソ田舎とオサラバね。

午後には東京から、……スカウトとかされたらどうしよう!?! スタダとか!」

鉄骨のごとき精神を持つ田舎少女が東京の地を踏むまで、後——

# L P  
4 e E  
t t R  
W u S  
h a s O  
t s N  
I t A  
w r 5  
a t i  
n t n  
t t J  
t h j  
t e u  
o g t  
d a s  
o m u  
e. e  
K  
a  
i  
s  
e  
n

## #5

23.

平日の昼間だというのに、原宿の街はその人通りが色褪せることはない。蒼天の下、蒸し暑い雑多の中、三人の男子学生が原宿駅前たむろで屯っている。

一人は原宿駅の隅で上の空で突っ立っている雨宮蓮、ガリガリくんを味わう虎杖悠仁、スマホを見て時刻を確認している伏黒恵だった。入学が正式に決定したその翌日。三人は、集合場所に指定された原宿に集まっていた。

現在の時刻は正午の少し前。空腹で胃がインボリユート曲線湾曲螺旋を模ってくる時間帯。蓮は久々に、ハンでバーガーなジャンクなフードを食べたい気分だった。

蓮は料理は得意だが、日々の食事に一々栄養バランスを考えるほど几帳面ではない。前世の東京では、朝にカレー、昼に焼きそばパン、夜に巨大ハンバーガーといった、炭水化物のオンパレードな食生活をしてきた。その代わり怪盗活動で食べた分以上に動くので、プラマイゼロはおろか筋力的な意味ではプラスになっていたと言えるのだ。  
た。

「なあ恵。何で一年が四人なワケ？ ちと少な過ぎねえ？」

「じゃあお前、今までに雨宮以外で呪いが視えてる奴と会った事あるか？」

「……………無えな」

「それだけマイノリティなんだよ、呪術師は。…………尤も、雨宮みたく『視えててもそれを言いふらさない奴』も居るには居るんだろうが、術式戦がえ使えるか否かを選別すると、その数は更に少なくなる」

「つてか何でこんな時期に来てんだろーな。俺と蓮はともかく」

「さあな。こんな学校だし、色々込み入った事情があるだろ。入学はお前からより早く決まってるらしいが」

「つてか、何で原宿集合なの？」

「聞いてないから知らん。大方、竹下通りを見て回ってたとかだろ」

「なくんか凶太そんな予感すんな…………。にしても暇〜！ しりとりしようぜ」

「何でだよ」

「じゃあオレからだな」

「おつ、蓮おかえり」

「ただいま」

「いや、それこそ何でだよ。つーかお前何してたんだよ」

「内緒」

フリーズから目覚めた蓮が乱入してきた。

「じゃ、しりとりの『リ』からな！」

「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」

「何じゃそりゃ!？」

「竜宮の乙姫……これか。あー、アマモの別名だと。和名では一番長い名前の植物らしい。……お前これが言いたかっただけだろ」

スマホを手に持っていた恵がウイキペディアで調べたようだ。

「へえ、良く知ってんな蓮」

「長い名前って何か覚えなくなるだろ?」

「あー、何か分かるわ。寿限無とかピカソのフルネームとかな。えーと『シ』……うーん、シルバニアアファミリー」

「虎杖も何だそのチョイス」

「ほら恵、『イ』!」

「何で俺まで……ってか、『リ』じゃねえのか?」

「え? 伸ばし棒の『イ』つしよ?」

「ふーん。……イギリス。ほら雨宮、『ス』」

「スリジャヤワルダナプラコツテ」

「あー……なんか聞いたことあるわ。何だっけ……?」

「スリランカの首都だ」

「あーそうそうそう! えーと『テ』……テトリス」

「炭<sup>すみ</sup>」

「身から出た錆<sup>さび</sup>」

「『び』!? えー、『び』なんてあったかなあ……び、び……あつ、ビンテージワイン!」

「……虎杖、お前しりとり弱すぎ」

「え? ……ああつ!」

斯くして第一回呪術高専一年生しりとり大会は、悠仁を敗北者として終了したのだ。た。

「おつまた。おつ、制服間に合ったんだね、悠仁、蓮」

——と、そこに現れたのは、責めるほどでもない遅刻魔の五条悟だった。相変わらず黒い目隠しをしているので、周囲の人からの視線が熱い。主に奇抜さで。

「おう、ピツタシ!」

「でも、恵のものとは若干違うな」

「俺のはパーカー付いてっし、蓮のは裾長えしな」

本日四人目の一年生を迎えるに当たり、蓮と悠仁は支給された制服を身に纏っていた



のだが、悠仁の制服は襟首部分が赤いパーカーとなっており、蓮のは燕尾服のように後方の裾が長い。

「希望があつたら制服は改造してもらえるよ」

「えっ、俺そんな出していないよ？」

「そりゃ僕が出したんだもん」

「……………まあ、いつか！」

「氣イ付けろ。五条先生こういう所あるぞ」

「……………もう少し裾を長く出来ないか？　こう……………怪人二十面相みたいなイメージで」

「お前はお前で気に入ってんのかよ……………」

「そんな事より先生、俺腹減った」

「んー、じゃあ何か買いに行こうか」

「俺ポップコーンとかクレープとか食べたい！」

「オレマツク行きたい」

「あー、ビッグマツクも追加で！」

「おっけい。んじや、僕も何か食べよっかな。恵は何か希望ある？」

「……………照り焼きチキンフライオで」

原宿の竹下通りに、ある一人の男がいた。スーツを着こなし、貼り付けた笑顔で女性に縫すがっている。男はスカウトマンであり、モデルの勧誘に今日も勤しむ。金かねになりそうそうな女性に片っ端から声を掛けていき、最終的に枕仕事に行き着かせ、搾れるだけ搾り取り、後は知らんぷり。墮ちる所まで墮とし、自分は美味しい汁を啜る。それがこの男の生き方だった。

しかし男は容姿が優れているという訳ではない。太り気味で足も短く、雨宮蓮の顔を満点とした時、顔面偏差値は甘く見積もっても10点満点中3点程度だ。そんな条件の男がそう易々と女性が捕まえられる訳も無く、先も一人良さそうな人材を逃した。

——すみません、少々お時間よろしいでしょうか？

——急いでいるので。

——ワタクシ、こういう者でして。モデルとか興味ありませんか？

——急いでいるので。

——あ、いや、話だけでも……。

——警察呼びますよ？

作り笑いを絶やさず、心の中で舌打ちし、次の獲物を見繕おうとした矢先——その獣は現れた。

急に背後から肩を掴まれる。ポリ公か、と一瞬体を強張らせ、恐る恐る背後を向いたが、そこにいたのは高校一年か中学三年程度の女子生徒である事は分かったため、一つ安堵の溜息を吐いた。

少女の顔は良かった。絹のような茶髪、健康的な肌、垂れ目気味の双眸、桜色の唇。スタイルも良い。少々田舎臭いが、逆にこのような世間知らずの田舎者こそ釣れやすい。鴨がネギを背負ってきたとはまさにこの事。このような上玉に出逢えたのならば、先の女などどうでも良かった。

しかしよくよく見れば、制服がどこの学校の物かが分からない。モックネックの、その豊富なスタイルを際立たせるデザインの制服に見覚えがない。男は未成年にも手を出す程の変態であり、原宿近辺の女子学生の制服はある程度把握していた。そのため、眼前の女子生徒が只者ではない事を悟った。

「オイ」

「ひえっ!? な、何でしょう……?」

「私は?」

——ワタシハ!?

「え、いや、あの……わ、ワタクシ、急いでいるので……!」

そう言いつつ、既に踵を返して眼前の少女から離れていた。足は無意識的に反対方向

のどこかへと向かおうとしていた。失われたはずの男の野生が警報を訴えている。鴨ネギだと頭では分かっているけれども、体は真反対の行動を起こす。この一瞬で、男は本能で理解したのだ。

——この女、ヤバい……と。

しかし少女のそのヤバさが、この程度で終わるはずもないのだった。

「ちよつと、どうなのつて聞いてんでしょ？ 答えろや」

「ひいひい、ごめんなさいい……!!」

襟首を掴まれ、それ以上前に進めない。膂力が女子高生のそれではない事に恐怖心を抱き、謎の力に対抗しようと必死に足をジタバタさせる。悲しいかな、捕食者は既に入れ替わっていたのだった。仕事柄自意識過剰な女性はこれまでに幾度も見てきたが、ここまで傲岸不遜を極めている者は初めてだった。

もうこんな事するの辞めよう。

切実に男はそう思った。

そんな少女を側から眺めていたガヤの内に、呪術高専一年男子達とその担任がいた。

「ええ……アレに話しかけんの？ ちよつと恥ずいなあ」

「お前がだよバカ」虎杖

「ひようはほ。ほっほひっはいほひっほははえはいほ」

「ロン中に物入れたまま喋んなバカ<sup>兩宮</sup>」

「おいしい、こつちこつち！ この Good Lookin' Guyの方だよ。……うおつ、アイス甘つ。僕のフェイバリットに追加だね」

「せめて生徒の模範にはなつてくださいバカ筆頭<sup>五条先生</sup>」

目元に傷のあるおバカ甲と、癬毛のおバカ乙、二十八歳児のおバカ丙、そしてツッコミ担当である。

おバカ甲は、初の原宿ともあつてか目に写つた商品を衝動買いし、左手にクレープ、右手にポップコーン、後の主食としてビッグマックも追加して、2018とデザインされた眼鏡を購入、装備&食事中。おバカ乙は、適当にお気入りのバーガー達とポテトをテイクアウトで購入、食事中。おバカ丙は、マックで期間限定商品のぐでたまコラボマックフルーリーに加え、流行りのマンハッタンロールアイスを購入、食事中。ツッコミ担当は頭を抱えていた。

閑話休題、少女は近場のコインロッカーに荷物を置いて、改めて自己紹介をするのだった。

「釘崎野薔薇<sup>のの</sup>——喜べ男子。紅一点よ」

「やったー……う？」

「何で疑問系なんだよその癬毛！」

「はいはい！ 俺、虎杖悠仁！ 仙台から！ よろしくね、野薔薇！」

「……伏黒恵」

「雨宮蓮です。よろしく」

じと――

と品定めをするように男三人を見る野薔薇。田舎で

鍛えられた彼女の慧眼は上つ面を全て見破る。彼女の眼前で誤魔化しは一切通用しない。彼女の独断と偏見の眼差しが三人を襲う。

（見るからに芋臭い……絶対ガキの頃鼻クソ食つてたタイプね。つーか彼女どころか友達ですらないのにいきなり下の名前で呼んでくるとか、どおゆー神経してるワケ？

名前だけ？ 私偉そーな男つてムリ。きつと重油塗<sup>まみ</sup>れのカモメに火イ付けたりするんだわ……。『うに』つて言われそうな頭してるし、きつとそうね。

うーわ出たわ。コイツ完全に天然ジゴロだわ。料理とかちよつとした気遣いとかで知らず知らずのうちに惚れられるタイプだわ。その気になれば十股とか出来そうなくらいにはモテるわね。貶す要素見つかんなくて逆にムカつく）

「……ふーん。まあまあつてとこね」

「何か人の顔見て評価してんだけど。まあまあつて事は喜んで良いの？」

（うぎ……）

「仲良くなれそうだな」

「どこをどう見てそう思ったんだよお前は」

前世では様々な癖の強い人と信頼コトノブル関係を築いた蓮である。舐めてはいけない。例えば、オリジナルの薬を売ってくれる代わりに治験の協力を要請（というより強制）する女医や、モデルガンのカスタムをしてくれる代わりに極道の情報を集めさせる店主など……良く生きていられたとつくづく思う。

そんな思い出に浸っていると、恵が口を開いた。四人目の一年生との顔合わせも済んだ事だし、もう用はないだろうと蓮も思っていた所だ。

「先生、これからどっか行くんですか？」

「四人目の一年生は回収済み、内三人はおのぼりさんだよ？」

——行くでしょ、東京観光!!」

『東京っ！ トーキョーっ！ TOKYO!』

We Love TOKYO!!』

「ほら、仲良くなれた」

「ええ……」

地方育ちの悠仁と野薔薇には、東京という都会はあまりにも眩い。蓮もまた、久方ぶりの東京に想いを馳せている。悠仁と野薔薇は、散歩待ちの犬のように悟に擦り寄せていた。





「——いますね、呪い」

『嘘吐きいいいいいい!!』

「六本木ですらねえじゃん!!」

「地方民を弄びやがってえええ!!」

「まあ予想はしてた」

阿鼻叫喚の嵐に、蓮は苦笑いするしかなかった。悠仁は既に切り替え、呪術師ムードに突入したが、野薔薇は未だ文句を言うのだった。五人が到着したのは、原宿駅から一番近い青山霊園付近の廃ビル。六本木はその先にある。一応どちらも港区ではあるとだけ記しておくが、それでも二人は納得出来ないだろう。

「廃ビルとでかい霊園のダブルパンチで呪いが生じてるんだよね」

「ほー、やっぱ墓とかって出やすいの?」

『『墓』怖い』っていうイメージが根付いてる人間の心の問題なんだよ」

「あー、確か学校とか病院とかも同じ理由だったっけな」

「ちよつとアンタ、そんな事も知らないの?」

「実は……」

恵は野薔薇に悠仁の経緯を話した。新月のあの夜に両面宿儺の指を取り込んだ事や、蓮の術式開花について。流石に悠仁が死刑である事は話さなかった。

「——飲み込んだ!? 特級呪物を!」

うゝわキツシヨ! ありえない! 衛生観念キモすぎ! ムリムリムリムリ!

「んだとオ!」

「これに関しては同感」

「ちよ、恵までそんな事言うなよ!」

「流石に石鹼せっけんを食べる気にはなれないな」

「レンレ〜ン……………あれ、俺味方居なくね?」

ゲテモノ料理を食う気にはなれない蓮であった。

「さて——」

新月の夜に発現した怪盗服に変身する蓮。蒼い炎が蓮を包み、一瞬にしてジョーカーへと変貌を遂げた。ドミノマスクが漆黒の全身によく映えている。悠仁は目を煌めかせ、恵は無表情を貫き、野薔薇は驚愕に身を引かせ、悟は相変わらず黒布で目を覆っていた。

「おーっ、あん時の格好だ! なあ蓮、その格好何かモチーフとかあんの?」

「怪盗だ……………と思う」

「怪盗……………! 響きちよーカツケーな……………!」

「念のため、コードネームもちやんと考えた」

「めっちゃめっちゃ本格的だなオイ！」

「なに、厨二病なのアンタ？」

「こういうのは形から入るものだからな」

「ふーん。……で、どんな名前なの？」

口では刺々しい野薔薇も、少し興味があるらしかった。

かつて前世で呼ばれた名。怪盗の師に名付けてもらった名。切り札としての役割を担った、悪役に最も相応しい名前。

「——『ジョーカー』だ」

「……なんでババなん？」

「そっちじゃない。『切り札』の意味合いで付けた。いぎという時の切り札でありたいと思っただ」

「あー、なるほどね！」

「ま、悪くないんじゃない？ ムカつくほど似合ってるし」

「あつ、じゃあさじゃあさ、その格好の時はジョーカーって呼ぼうぜ！」

——よろしく、ジョーカー——

——オマエも気張れよ！ ワガハイに損させんじゃねーぞ？

——ははっ、だよなブラザー！ これから、明日に向かって走ってこーぜ！

——キミは、私の『光』だよ。

——お前がいてくれて、俺は本当に果報者だ。

——私ね、これからもっと違う世界を見られる気がする。

——何でも言つて？ ピンチの時は絶対助ける。ホントだよ?!

——もつと頼つて？ やれるって思えるだけの力を、自分の中に感じるの。

——くれぐれも忘れないでくれ。君を倒すのは必ず、この僕だ。

——私、先輩と会えて良かったです！

——何かあつたらいつでも頼れ。必ず力になる。

——……ありがとう。皆の事、この旅の事、私は忘れない。

——ジョーカー！

……懐かしい思い出が、蓮の脳裏を駆け巡った。

目頭を押さえる。溢れそうになる涙を堪える。寂しさが流れるのを必死に抑える。

男が泣いていいのは、生まれた時と親が死んだ時、そして子供が産まれた時だけなのだから。

けれど……………。

どうしようもなく、仲間や、世話になった人に……皆に会いたい。

「どつたの、ジョーカー？」

「……いや、何でもない」

「何よ。今更自分で『イタイ』とか思ってるんじゃないでしょーね？」

「そんな事はない。むしろ……嬉しいんだ」

「それはそれでどうかと思うけど……」

「ちよつと待て。まさか本気で呼ぶつもりなのか？」

「何だよ、恵。こーゆーのはノリだよノリ。」

あつ、そうだ！ 俺らもコードネーム考えね!？」

「もーこの際だしね。とことんまで乗ってやるわよ」

「冗談だろ……」

「俺は……『タイガー』かな！ 虎杖の『いた』って、トラって書くんだよ。だから『タ

イガー』！」

「安直ね〜」

「じゃ野薔薇は何にすんだよ」

「『ヴェルサイユ』ね」

「『薔薇』繋がりじゃん！ お前だって人の事言えねーじゃねーか！」

「えー………じゃあ、『ソーン』かしら」

「………何で？ つーか何それ？」

「よく言うでしょ？ 『綺麗な薔薇には棘がある』 って。だから棘の意味で、『ソーン』  
名前で威圧しなくっちゃね」

「綺麗な薔薇ってそれ自分で言う？」

「伏黒はどーすんのよ？」

「俺はいいって……」

「オレは『アーチン』でいいと思う」

「……理由を聞いてやるよ」

「アーチンの意味は『うに』だ」

「表に出ろジョーカー」

「安心しろアーチン、既に表だ」

「ねね、ジョーカー。このG T グレートティーチャー 五条には？」

「『五条先生』」

「くやし……」

皆で一頻り笑った。恵はしか響めつ面だった。

「……まあともかく、キミ達がどこまで出来るかが知りたいんだ。今日ここに連れてきたのもそのためさ。」

悠仁、野薔薇、ジョーカー。キミ達三人で、建物の中の呪いを祓って来る事。良いね

？」

「うげ……」

「了解した」

「良いけど……でも先生、呪いは呪いでしか祓えないんですよ？ ジョーカーならまだしも、俺呪術とか使えねえよ？」

「——そう言うと思って、はいこれ！」

悟から渡されたのは、無骨な片刃の短剣だった。柄には黒色のファーが裝飾されており、一目で普通の武器ではないと理解出来る。グリップには滑り止めが包帯のように巻いてあり、気を抜かない限り戦闘中にすっぽ抜けてしまう事もないだろう。

「うおっ。何これ？」

「呪具《屠坐魔》。呪力のコントロールは一朝一夕で成るものじゃないから、悠仁はそれを応急処置として使つてね。それがあれば、呪いに対処出来るよ」

「うわー、すつごいこれ！ FFVIIのバスターソードみたい！」

「だっせえ」

「んだとう野薔薇！」

「あと借り物だから壊さないようにね」

「了解っ！ ……えっ、借り物なのこれ？」

「蓮はこつちね」

蓮が渡されたのは、すらつと伸びる両刃のシンプルなダガー。装飾は特にされておらず、グリップからブレイドにかけて白銀一色であり、蓮はかつて前世で愛用した《シルバードアガー》を思い出した。尤もアレはレプリカであり、手に感じる重量はこのダガーよりは無かったが。

「これは？」

「呪具《剛巖》。要らなかつたんだけど、ジョーカーには持つて来いなんじゃ無いかなつて思つてね。僕ン家の倉庫から適当に見繕つてきた」

「（それを聞かされてオレはと言えば良いんだ……）……まあ、ありがとう。戴いていく。トカレフは？」

「まだ許可取れてないんだ。拳銃の所持許可得るの、結構大変なんだよ？ まあでも来週ぐらいには取れるだろうから、期待して待つてよ」

「分かった」

ダガーを回して遊ばせ、逆手でキャッチする。その一連の動作は、ある種芸術の域に達していた。

「なあジョーカー、後で剛巖振らせてくれよ。あとコート着させて」

「任務が終わつてからな」



「やつりい」

「ほら、さつきと行くわよ！」

「へいへーい」

「そうそう、悠仁」

「ん？ 何、先生？」

野薔薇に怒鳴られ、二人は足を進めるも、悠仁は悟に引き止められる。駆け足をしながら悟の方へ体を向けた。

「宿讎は出しちゃダメだよ」

「……周りに被害が及ぶから？」

「その通り。今回はあくまで、キミら自身の実力を測るためつてのものもあるけどね」

「りよーかい。行つてくるね！」

「行つてらつしやい〜」

そう言いつつ、悠仁は三秒と経たずに野薔薇とジョーカーの元に到着した。錆びついたシエルターを、無理やり人が通れる高さにまで持ち上げる。そんな中、恵は悟に語りかけた。

「……先生、やっぱ俺も行きますよ」

「無理しない無理しない。病み上がりなんだから」

「でも、虎杖は要監視でしょ」

「まあね。でも——」

——今回、試されてるのは野薔薇の方だよ。

## 26.

電気が通っていない所為か、昼だというのに廃ビルの内部は恐ろしく暗い。加えて謎のおどろおどろしさを感じ、肌寒さは収まる所を知らない。その廃ビルに三人の少年少女が。虎杖悠仁、釘崎野薔薇、雨宮蓮ことジョーカーである。悠仁とジョーカーは、カバークエストを駆使して警戒しながら進んでいくも、野薔薇の方はどこか気怠そうに……あるいは面倒くさそうにして、正面を堂々と歩いていった。

「はア~~~~ダルつ。何で東京来てまで呪い祓わなきやならんのよ」

「いや、呪い祓いに来たんだろ……?」

「めんどくさいし、時短しましょ。私は上から、アンタら下から。一階しちうみずつ風潰しちうみしに呪霊をブツ飛ばす。とつとと終わらせてザギンでシースー。ユー・コピー?」

「いや、ちよつと待てよ。もっと真面目に行こうぜ。呪いつて危ねーんだよ」

「ムっ……」

少しムカついた野薔薇。ドダドダドダと勢いよく階段を降りてそのまま悠仁を足蹴

にした。

「あだーっ!？」

ドゴオ、と人体からは決して発せられてはいけない打撃音が聞こえ、そのまま悠仁は地面に突つ伏す。一部始終をジョーカーは見えていたが、そつとしておく事にした。

「最近までパンピーだったヤツに言われたくないわよ! さつさと行けっ!」

「……今日お前の情緒が分かんねーんだけど!？」

「だからモテないのよ!」

「何で知ってんの!？」

そう叫びながら蹴られた尻を摩さする悠仁。

「いっちち……クソ、蓮……じゃなかった、ジョーカー。癩しやくだけど、アイツの援護してく

れねえ?」

「悠仁は?」

「俺はだいじょーぶ。まあ、任せとけよ」

「了解した。気を付けろよ」

そう言い残し、ジョーカーは野薔薇の後を追い階段を登る。

「つーかテメーは言うほどモテてんのかってんだよ」

クソが、と悪態を吐き一階のビルを進んでいく。

——静寂。悠仁の履いている赤い靴が、床のタイルに規則的なリズムを刻む。ゴム底故、吸い付くようなほんの小さな音であるが。それを除けば、羽虫の声一つも聞こえない。故に悠仁は——自身の首に近づく二つの刃に、寸前まで気が付かなかった。

「シッ——」

しかし研ぎ澄まされた悠仁の第六感は、迫る死の感覚に敏感に反応した。刃の一つを根本から屠坐魔で切断しつつ、本体である呪霊から、全ての脅力を利用して回避した。彼奴はどうやら天井から命を刈り取るうとしていたようで、それに失敗したため地上に降り立ち、怯みもせず悠仁を睨んだ。

「れ　しいと　りよお」

（——出た、呪い!!）

その呪霊の風貌を一言で言い表すなら、『昆虫版ケンタウロス』だった。かつてのイグアナの呪霊よりは小さいが、悠仁よりも五十センチは大きい。上半身は、腕部を除けばほぼ人間のソレだが、下半身は昆虫の腹で、そこから四本の節足動物の足が生えている。悠仁は改めて敵を見据え、屠坐魔を逆手に、体勢を低くして構え——バネの如く弾き跳んだ。

真正面。脳死で両腕の鎌を振り翳すケンタウロスだったが、その体型故に殺される事になろうとは最期まで思わなかった。スライディングで間一髪鎌を避けつつ、切った鎌

と同じ方向の脚部も切り落とし、バランスが崩れた所を一気に跳躍。脳天に屠坐魔を突き刺し——

「ぎ」よう れじい、い、い、い、ど」

「くたばりやがれ」

引き抜き、もう一度——今度はより深く脳天に突き貫き、ケンタウロスは絶命した。紫苑の蜜が辺りに飛散している。呪いにも血は存在し、しかもそれが紫色である事に、悠仁は初めて気が付いた。

「——うし。動けんね、俺。」

虎杖悠仁の呪術師としての初陣は、圧勝で幕を閉じたのだった。

「悠仁はさ、イカれてんだよね。自分の命を奪おうとしてくる呪いを、何の躊躇もなく殺りに行く。君みたいに小さい時から呪いに触れてきたワケじゃない、ふつつーの男子高校生がだよ？ 真つ当な神経じゃない」

「……雨宮はどうなんです？ アイツ、常に呪いが視えていたと言っていましたけど」

「蓮か。蓮はね——」

27.

「で、アンタ何？」

「何とは？」

「何しに來たの？」

「援護に」

「別にいらないわよ。居なくてもヨユーだつつの」

「一人より二人の方が確實だ」

「(めんどくせー……)……あつそ。じゃあ好きにすれば」

「判つた。——では、好きにさせてもらおう」

——そう言つて振り返りながら、ジョーカーは剛巖を後方にて横薙いだ。

瞬間、飛散する紫苑の花弁。音を殺し這い寄つて來ていた、蜘蛛クモの呪霊の前足——腕二本を斬断しつつ、飛沫する血液が付着しないように、野薔薇を抱き寄せて距離を取つた。呪霊は音を殺したつもりだろうが、ジョーカーの地獄耳は決してその足音を聞き逃さない。退避の際、野薔薇を横抱きにしたのは言うまでもない。切断された腕は数秒間跳ねて脱力し、そのまま動かなくなつた。

「お かあさ これかつて」

「——呪い。そしてこれが、呪具《剛巖》の力か」

悟は自身の家にあつたものを適当に見繕つたと言つていたが、それにしてはかなり切れ味が良い。『適当にと言つておきながら実は時間をかけて持つてきた』か、『本当に適

当に持ってきた』のどちらかが考えられるが、もし仮に後者であれば、五条悟の家にはこのレベルの呪具がごろごろ転がっている事になる。なんとも魅力的——もとい、凄まじい経済力だ。

閑話休題、その蜘蛛は、全長が約二・五メートルはあり、顔面に当たる部分には、人の歯茎及び無数の犬歯と、血走った八つの眼球がこちらを見ていた。足は完全に人の腕で構成されており、節足動物特有のクチクラのような外殻は無いらしい。

「ちよ——いつまで抱き上げてんだっ。降ろせっ」

「ああ、すまない」

そう言いつつ、野薔薇をゆっくりと下ろすジョーカー。直ぐに蜘蛛に向き合い、ドミノマスクに触れる。ペルソナ召喚の合図だ。

召喚するのは、しかしアルセーナではない。確かにアルセーナは強力であり、アレに任せれば眼前の呪いは瞬殺できよう。しかし強力過ぎるが故にその分コストも大きいし、アルセーナの力に老朽化したこの建物が耐えられるとは思えない（これに関しては完全に後付けなのだ）。故にジョーカーは、呪術師としての正式な初陣に際し、新たにペルソナと再契約を交わした。

——円卓がある。そこには三体の悪魔が座っている。一体は我が半身アルセーナ、一体は亡霊、もう一体は妖精だ。アルセーナに当たっているスポットライトを、亡霊の方

に当てるイメージを現実に昇華する。イングランドにおける鬼火のような存在。墮落した人間の成れの果てと言われる亡霊。その名は――

「来い――ジャックランタン！」

「ヒホー！」

カボチャ頭の魔法使い、ジャックランタンである。右手には小さなランタンを持つ、魔女の帽子を被った二頭身。かつて色欲の巨城にて、ジョーカーが三番目に獲得したペルソナだった。

ペルソナは人の叛逆の魂を具現化したもう一人の自分だ。それ故に、ペルソナは一人一体というルールがある。心の成長に伴い姿形を変える事はあれど、ペルソナを内包する数は変わらない。しかしジョーカーは、ランプから擬えて〔ワイルド〕という類稀なる才能を有しており、数に限りはあれど他者よりも多くペルソナを保有する事が出来る。

ベルベットルームは、ペルソナに関する事柄のサポートの役割を担っている。……〔ワイルド〕の素質を持つ者限定で、という一文が文頭に付加されるが。

例えば、異なるペルソナ同士を融合させて新たなペルソナを作り出したり、ペルソナを『装備品』としてアイテム化したり、ペルソナを生贄にして別のペルソナを強化したり……と、その活用法は多岐に渡る。



そのサポートの中に、ラヴエンツアの持つ『ペルソナ全書』に登録されたペルソナを、マナーと引き換えに再召喚出来るというものがある。蓮が利用したのはこれだ。加えて割引制度まで設けられているので、蓮の財布は少し痛手を負ったのみ。……やはり高校生の小遣い程度しかない財布では、一体に千円以上もするペルソナの再召喚は痛手だった。ベルベットルーム内で蓮は少し凹んだ。

しかし読者の諸君らは、『蓮がいつペルソナを再召喚したのか』と思つた事だろう。

——ではここで、本話の冒頭に戻つてみてほしい。そこには、『原宿駅の隅で上の空で突つ立っている雨宮蓮』の姿があるはずだ。お察しの通り、その時蓮はベルベットルームにてペルソナの調整を行つていたので。しかし周囲の人間からは蓮がぼーつとしているようにしか見えていないらしく、かつて前世でも何度か仲間に安否を尋ねられた。

閑話休題、現在のジョーカーの呪力量キヤグシテイを鑑みれば、強力なペルソナではその圧倒的な呪力消費によって直ぐに食い潰されてしまうが、逆に弱小なものであれば、現在のジョーカーでも難なく使役出来る。

止め処なく湧き上がる怒りに任せ、堪忍袋の尾が切れると共に、ランタンから出づる極小の豪炎もまた、その奔流を加速させていく。

「《アギ》！」

火炎系最弱のスキル。しかし今はこれで良い。ランタンから火花が不規則な軌道を

描いて蜘蛛に直撃。蜘蛛は苦悶に奇声を上げ、消火しようとするも潰えず、そのまま熱伝導が作用し、蜘蛛を焼き尽くさんとして全身へと燃え盛っていく。

「おかさ おかあさ かあさんかおかさおかさあんさあかさおかさあかさ」

「——幕引きだ」

一瞬で距離を詰め、足を、体を、蜘蛛<sup>呪霊</sup>を蜘蛛<sup>呪霊</sup>たらしめる要素を、痕跡を、その存在ごと抹消する——！

## THE SHOWBOX OVER

手袋を締め直すと同時、紫苑の血飛沫が飛んだ。

「蓮はね——底が知れないよ。悠仁と共に普通の高校生活を送つといて、呪いを常に視認できるほどの才能を持ちながら、それらを『何とも思わない』なんて……はつきり言つて『異常』だよ。恵も見てきたでしょ？ 才能がありながら、それでもなお呪いの嫌悪と恐怖に打ち勝てず、挫折して辞めていった人を」

「……………」

「オマケに手前は、自己犠牲精神の塊と来た。どんな人生経験積めば、『本気で』他人のために命も捨てられるなんて考え方が出来るんだろうねえ。そういう意味では、あんなに

イカれてる子を持つのは、僕も初めてだ」

「……アイツ、『見てるだけで何もしないのはイヤだ』って言ったんですよ。先生が言っていたように、呪術初心者のクセに……呪力切れ寸前のクセに、瀕死の俺を助けようとした。自分だつて死ぬかもしれないのに……」

「ウンウン、<sup>ジョーカー</sup>蓮をスカウトして良かったよ。——やつぱり彼、<sup>イカれてる</sup>面白いね」

「……何が面白いんだか」

「野薔薇にも期待だねえ。彼女のやり方がどこまで持つかな」

「釘崎は経験者でしょう？ 虎杖と雨宮だけで良いんじゃ……」

「呪いは心から生まれる。人口と共に比例して呪いも強くなつていくでしょ。野薔薇に分かるかな——地方と東京じゃ、呪いのレベルが違うつて事。」

28.

「……ふーん。まあまあやるじゃない、ジョーカー」

「お褒めに預かり光栄だ」

切り札の名に恥じぬ戦いが出来たようだ。ナイフ捌きの腕は鈍っていないらしい。奥へと進みながら野薔薇が口を開いた。

「ねえ、アンタも最近までパンピーだったんでしょ？ そんな戦い方、どこで覚えてきた

ワケ？」

「アニメとか漫画とかかな」

「やっぱめっちゃ拗こじらせてるじゃねーか！」

「拗こじらせてないもん」

「何が『もん』よー！」

あなが強ち嘘は言っていない。それらの創作物において参考になる動きは山ほどあるし、それらからインスピレーションを得た事も少なくない。加えてとある仲間からの勧めもあり、ジョーカーはどんどんサブカルチャーにのめり込んで行った。野薔薇の興味は尽きないようで、次々と口を開いていく。

「じゃあさ、『アジャックレランタン』は何なの？ アンタ呪霊を取り込める術式持ってるの？」

「アレはペルソナだ。オレの逆の魂が形を持ったもの。もう一人のオレだ」

「……………要するに幽ス○ソ紋ドってこと？」

「似てはいるがそう言うのと怒られるからやめてくれ」

主主に集英社に。

話している内に先へと進むジョーカーと野薔薇。その間に呪霊と遭遇する事もなく、二人はおそらく会議室であつた大広間に出た。

部屋は散乱としており、段ボールや多数のマネキン置き場と化していた。五体満足の

物や、腕が無かったり脚がなかったりする物とで雑多している。随所にはやはり埃や蜘蛛の巣が見られ、野薔薇は不快そうな表情を隠そうともしなかった。

「助けてもらったし、次、私の番ね。手エ出すなよ?」

「了解」

やや横暴な面はあるが、恩義を仇で返すタイプではないらしい。ジョーカーは一步退がり、野薔薇の戦い方を観察する事にした。

「オイ、そのマネキン。真ん中のお前だよ。」

——来ないならこつちから行くわよ」

釘崎野薔薇は、《芻霊呪法》すうれいじゆほうという術式を使用する。ハート形が彫られたお気に入りのお金槌と、何の変哲もない五寸釘、そしてもう一つのキーアイテムで成り立つ術式だ。

彼奴のレベルはおよそ三級。であれば釘は二本で事足りる。腰のポーチに仕舞っている五寸釘を取り出し——右手に持っていた金槌で撃刻し、二本共に中央の五体満足のマネキンの頭部に着弾した。

「うし」

(……凄いコントロール力だ)

恐らく、その中精度に関して術式行使によるサポートは無い。打った釘を自在に操れる訳ではないようだ。野薔薇の技術と実力の賜物なのだろう。ジョーカーでさえも、

弾丸を外す時は外してしまうのだ。ジョーカーは感心を覚えた。

さて、釘で穿たれたマネキンはというと、自身を支えていた器具が衝撃により吹き飛んだため、後方へと倒れ、床に落ちバラバラに分解される——事はなかった。

頭部が地に触れようという寸前、弧を描いた身体は留まり——マネキンが目を見開いた。そのマネキンにはおよそ頭と呼べるものはあつても、顔は存在していなかった。存在しない顔面から、存在してはいけない箇所にも、一つだけ眼が浮かび上がったのだ。それを野薔薇は何とも思わず、逆にマネキンに注意を送る。

「それ、抜いた方がいいわよ」

祖母から遺伝したため、野薔薇は《芻霊呪法》を操れる。祖母から使い方を教わった《芻霊呪法》により、野薔薇が金槌で打った五寸釘は、ただ敵を穿つだけでは終わらない。「私の呪力が流れ込むから」

指を鳴らす。マネキンが苦しみ悶える。釘を起点に罅が入っていく。放った五寸釘に呪力を流し込み、瞬間的に爆発させる事で対象の部位を破壊する術式。《芻霊呪法》の応用編。

「——芻霊呪法【簪】」

瞬間、マネキンの頭部は粉々に砕け、呪霊は祓われた。

「………凄いな」

「フフーン、まあね。伊達に経験積んでないわよ」

得意げに鼻を高くして、踏ん返り返る野薔薇。

——瞬間、マネキンの群れの最奥にて、ごそ、という雑音が聞こえた。新たな呪霊か、とジョーカーは思ったが、その鋭眼は、段ボールに隠れる小さな靴の存在を認識した。二人がそこに近づいていく。そこに居たのは、呪霊でも何でもない、小学生低学年程度の男児だった。

「遊びで入って呪いに……つてどこか）ほら、おいで。もう大丈夫だよ」

「……………」

しかし少年は横に首を振る。野薔薇はガーンとなった。

「ま、まあ？ 子供は美人に懐かないって言うし？」

「そうだな。仕方ないと思う」

「……サラツと褒めるのね」

「オレは怪盗であり紳士だからな。」

兎に角、悠仁を呼ぼう。アイツならこの子も接しやすいはずだ」

「——ま、待って!!」

少年の叫声が響く。助け舟の二人に静止を求める——その背後の壁から一本の腕が透過して、男児の頭を鷲掴んだ。

「置いて行かないで——っう、あ」

「——ツツの野郎!!」

「く——!」

呪霊だ。全身が毛むくじやらの一頭身。目が蝸牛かたつむりのように飛び出しており、生理的な気色悪さを感じさせる。呪霊は驚掴んだ手とは反対の手の爪を——男児の首筋に当たった。

鋭利な爪が皮膚を破り、少量の血を流させる。垂れた血が服の襟に染みを作っている。男児はもはや恐怖に耐えられず、双眸から恐れが形となって溢れ出る。呼吸もままならず、嗚咽も漏れ出ている。

……野薔薇とジョーカーは行動に移すのが遅かった。無理にでも手を取っていれば良かったのだ。部屋にいる呪いが一体だけだと思いついていたのが間違いだった。

——子供を、人質に取られた。

「レベルと言っても、単純な呪力の総量だけの話じゃない。『狡猾さ』……知恵をつけた獣は、時に残酷な天秤を突きつけてくる。何を捨て何を優先するか……そうやってしまったら、野薔薇はどうするかな?」

「……雨宮だったら、どうでしょうね」

「あはは。蓮だったら『呪いを祓いつつ』『命も救う』って言いそうだね。しかも有言実



行しそудし。……ああ、蓮には『その可能性しか考えられない』な。実力もまだペーペーなのに、何でだろうね」

「それほど、アイツは規格外イカれてるつて事でしょ」

「まるで僕みたいだね！」

「常識を持ち合わせていない所とかよく似てます」

「恵、後でマジビンタね」

29.

(クソ——クソ、クソクソクソクソクソツツ!!)

こんな奴に！ こんな四級程度の雑魚なんか！！ してやられた！ 手前の貧弱さ加減を解ってるんだ！ 解ってるからこそその人質作戦なんだ！！ コイツには知性がある！！ 田舎の時とは全然違う！！

……落ち着け私。ここで私が死んだら、次に死ぬのはジョーカー、そしてあの子……。不本意だけど、今優先すべきは私とジョーカーが死なない事……！！)

「……………分かった。降参する。」

ほら、丸腰よ。だからその子を離して。

……ほら、ジョーカーも」

そう言つて、野薔薇は手に持つていた釘と金槌を手離した。腰に巻いていたホルダーも外し、これにて野薔薇は攻撃手段を失つた。——しかしその行いが、直ぐに間違ひだつた事を理解する。

(私のバカ……アイツ全然手離す気無いじゃない……!)

遊戯王のクリボーをエグい方面に進化させたようなビジュアルの呪霊は、依然子供を手離さない。失策だつた。遣る瀬無さに野薔薇は唇を噛み、桜色を紅に染めていく。

釘崎野薔薇が幼い頃、年上の友人がいた。野薔薇は『沙織ちゃん』と呼んでいる。都会から野薔薇のいる田舎に引っ越してきた女性で、当時野薔薇が知らない物事を何でも知つていた。野薔薇にとつて『沙織ちゃん』は憧れであつた。聖母のような存在だつたのだ。

しかし、そんな『沙織ちゃん』の存在を快く思わない人間もいた。……というよりは大多数がそうだつた。「田舎者を馬鹿にしている」と勝手に被害妄想を膨らませ、『沙織ちゃん』を仲間外れにした。遂には村から追い出され、東京への逆戻りを余儀無くされた。そんな村の人々を、野薔薇は嫌つた。家族だろうと誰だろうと関係無く、そこにいる人が嫌いだつた。

吐き気を催すほどの邪悪。野薔薇にとつては、かつて野薔薇が住んでいた田舎の皆がそうだ。『己が不快だから』というだけで友を貶し、友を蔑し、そして追い出した。そん

な皆が、野薔薇にとって『不快』だった。故に祖母の反対を押し切つて、田舎から抜け出したのだ。

(せめて最期に、一目でもいいから会いたかつたなあ……………)

——しかし、その思考は、直ぐ右から感じる怨念の波動に阻まれる。——ジョーカーだ。ジョーカーはまだ、得物（おぼえ）を手離（な）すつもりはないらしい。

ジョーカーは今、この状況に怒（いか）つている。それは眼前の狼藉者に対してでもあり、自身の醜態に対してでもあつた。

少年を人質に取られたのは、完全に自分の失態だ。確かにナイフ捌きは鈍つていない。だが敵に対する感情は無意識のうちに軟化していた。甘く見ていたのだ。呪術を、呪霊を……………命を奪られるかもしれないという死地の真つ只中を。

(情けない……………)

だが、この絶望的状况下でも出来る事はある。ジョーカーはそれに賭け、ジャツクランタンから己が半身へと、半ば無意識にペルソナを切り替えていた。相手は下の下、三下以下だ。ジョーカーは、三下程度の度胸に、一か八か賭けたのだ……………!

「バカ、ジョーカー……………! 今はアイツを刺激しちや——」

その先の言葉を紡ぐ前に、釘崎野薔薇は絶句する。武器を捨てろとまでは行かずとも、下ろすように伝えようとして、右にいたジョーカーの方を反射的に向いた。目が血

走っている。普段は無表情の彼の顔に羅刹が浮かぶ。その目は未だ、屠るべき敵を見据えていた。

——向いたのは、間違いだった。

(何よ……コレ………)

そこにいたのは、ジョーカーであつてジョーカーではなかつた。

——『悪魔』。血色のタキシード、漆黒のシルクハットから伸びる角。顔面に当たる部分はバイザーで、猛る怨讐が辛うじて顔を模っている。玉虫色の翼が禍々しく揺れる。それらが、彼奴が悪魔である事の証明だった。悪魔がジョーカーの背後にて佇み、今にも襲いかかりそうな勢いのままなんとか留まっていた。

野薔薇が今まで屠つてきた呪霊や、現在人質を取っている雑魚……そして、ジョーカーが先程召喚したジャックランタンとは格が違う。野薔薇の全てが警鐘を鳴らす。声を発せない。呼吸が出来ない。すれば死ぬ。身動き一つ赦さない。恐怖に怯え、震える事さえも出来ない。呪霊もまたそれを理解し、体を強張らせる。

「その薄汚い手を離せ」

——その禍つ赫星は、まるで、ジョーカーの怒りを代弁しているかのようだった。

バゴオン!!!

呪霊と野薔薇が畏怖の念に支配されているその間、突如として呪霊の背後のコンクリート壁から左手が飛び出してきた。ジョーカーも驚きのあまり注意が手に行き、ペルソナを引つ込めた。

壁を破壊してきたという事は、位の高い呪霊か人間の膂力による物のどちらかだ。別の呪霊の可能性もあるだろう。だがクリボーの呪霊に有利なこの状況で、わざわざ参戦してくる意味は無い。であれば人間の仕業だろう。そして我々は、このような芸当が出る人間を、ただ一人しか知り得ない……!!

「あつれエおかしいなく、外した?」

「もう少し左だ——悠仁!」

「——ん、おっけ!」

コンクリート壁をブチ破り、現れたのは虎杖悠仁だった。クリボーは直ぐに子供を悠仁に向け、人質の存在を明らかにした——が、それよりも早く悠仁は屠坐魔を振り下ろした。斬、と音を立ててクリボーの腕が切り落とされる。その隙を逃す事なく、人質となっていた男児の腕を取り引き寄せ救出。人質作戦は失敗に終わった。

「大丈夫か？」

「うっ……うん！」

「よし」

しかしクリボーの余裕は潰えない。壁をすり抜け、今度は逃走を図った。どうやら先のクリボーは、壁を透過出来る能力を持つらしい。

「てめ、逃げんなッ！」

「逃さねーよ！ 悠仁ッ、その腕寄越せ!!」

「う、腕エ？ よく分かんねーけど、ほらよっ」

「褒めて遣わす！」

野薔薇が制服のフロントのボタンを外した。その内ポケットにあつたのは――

「――藁人形!?」

「こわ……」

「るっせえ黙ってろ！」

呪霊が落とした腕の上に藁人形を乗せる。釘崎野薔薇の三つ目のキーアイテムがこれだ。ヒトカタ人形を敵の一部に乗せ、釘を打ち付ける事で真価を発揮する、《芻霊呪法》の本領。

「芻霊呪法――【共鳴り】!!」

呪力を込めた釘が、大きく振りかぶった金槌により、藁人形を貫通し呪霊の腕に突き

刺さる——！

「おっ」

廃ビルの外、すぐ正面。窓をすり抜け、先のクリボーによく似た呪霊が飛び出してきた。恵は立ち上がり、両手で鳥を模り、呪力を練る——

「祓います」

「ちよい待ち」

——その寸前、心臓が一際大きく拍動した瞬間、呪霊の身体から極太の釘が突き出てきた。呪霊は悲鳴を上げ、どこにも居ない誰かに助けを求めも……その思いも虚しく、呪霊の生命は終わりを迎え、黒い塵となつて消えた。

「イイね、野薔薇もちゃんとイカれてた」

30.

「うし、勝った」

「だから俺言つたら、一人は危ねーから真面目に行こうぜって！」

「一人は危ないは言つてないぞ、悠仁」

「あれ、そう……だっけ？」

「つーかアンタ、何でコンクリブチ破れんのよ！」

「あれ鉄コンじゃなかったんだよ！」

「鉄コンじゃなくてもフツー無理だっつもの！」

わーきゃー言っている二人を無視し、ジョーカーは子供の首筋に注意を向けた。

「——キミ、怪我が……」

「……………あ、う」

「あーらら、怖がられちゃってるわ」

「……………致し方ない。怖がらせたのはオレだ。動くなよ」

円卓のイメージが浮かぶ。

アルセーヌとジャックランタンと、もう一体がそこに鎮座している。

ジョーカーは『ソレ』を連れてきて良かったと心から思った。スポットライトが最後の一体に当たる。蝶の羽を持つ少女、耳の尖った、青いレオタードとストッキングを履いた<sup>こわく</sup>蠱惑的な少女。名を——

「——ピクシー、《ディア》」

イングランドに伝わる妖精、ピクシー。翠色の奔流が少年の首へと伸びていき、みるみる内に血が止まり傷も癒えた。痕も残っていないようで、ジョーカーは一安心した。

「よし、もう大丈夫だ」

「——いやいやいやいや！ ちょっと待てやオイ！」



急に野薔薇に首を掴まれる。何か間違いを犯したかと一瞬だけ思ったが、本人にそんな覚えはない。何がそんなに気に食わないのかを、余裕を失ったままジョーカーは問うた。

「な、何? どうした?」

「アンタ、《反転術式》使えんの!」

「はんぺんの術式がどうしたんだ?」

「何ではんぺんになるんだよ! 反対の『反』に転がるの『反転』! それを使えんのかつて聞いてんの!」

「知らない……何それ、怖……」

「ぬああああああああ反応ムカつくうううううう!!!」

「飴舐めるか?」

「お前のせいだかん!? 原因お前だからな!」

「なあ、何の話してんだろーな?」

「僕が知るわけないじゃん……それよりも」

ガミガミ言う野薔薇。おどおどするジョーカー。側から眺める話についていけない悠仁と少年。先の緊迫した空気は、いつの間にか霧散していた。

「ねーねー、あの赤いヤツ、もいつかい見して!」

「——へ？」

突然男児が口を開いたかと思えば、その恐怖の対象の一つを見たいと言いつ出したのだ。本人は呆気にとられ、普段は出さないような素つ頓狂な声が出た。先程まで自分を怖がっていたというのに……とジョーカーは思ったが、男児は怪我を治してくれた時点で、ジョーカーに対する恐怖はほとんど無くなっており、それよりも彼の興味は、ジョーカーの出したアルセーヌに向いていたのだ。

「怖いけど、かつこよかった！」

「アルセーヌ？ ……あの時に見たのか。相手が三下で良かったよ」

「そのお陰で隙が出来たしね」

「まあ、出すのは構わないが……最近の子の趣味はよく分からないな……」

「アンタいくつなのよ。完全に子供の誕プレに迷う父親じゃないの」

「みーせて！」

「俺も見たい！」

「ガキかよ虎杖。あーもー、黙らせなさいよジョーカー」

「……まあいいか。」

——来い、アルセーヌ！」

顕現する赫星、アルセーヌ。サーピスで翼をはためかせてやると、悠仁と少年は目を

煌めかせた。

『おおおとおお〜!』

「アルセーヌ……『アルセーヌ・ルパン』？ ルパン要素どこだよ。ソレもアンタのペルソナってやつなの？」

「最初に目醒めたのはコイツだ」

「俺ソイツしかいねーモンだと思ってたわ」

「もういいでしょ。早く帰ってザギンでシースーよ」

「お前そればっかだな。ってかさ、俺らも聞かれたけどさ、野薔薇って何で高専来たの？」

「はア？ んなモン決まってるでしょうが。」

田舎が嫌で、東京に住みたかったからよ!!!」

「ええええええええええ!!」

悠仁に電流走る。

「お金の事気にせず上京するには、こうするしか無かったのん……」

「そんな理由で命賭けられるの……?」

「賭けられるわ」

その問いには即答する。

釘崎野薔薇は、自身の友人を否定した田舎の人々を捨てた。凝り固まった概念しか持ち得ない、クソの掃き溜めには居られなかった。自身を天上天下唯我独尊と思つてゐる訳ではない。ただ——自分の心や信念を腐らせてまで、あの田舎には居たくないと思つたのだ。

あの日の約束。沙織ちゃんが言つていたあの店に、いつか沙織ちゃんに行くその時に、誇れる私でいられるように。

「——私が私であるためだもの」

気高く、優美に。

釘のように、薔薇のように。

釘崎野薔薇は曲がらない。

——沙織ちゃん。私、東京に来たよ。

「……強いんだな、君は」

「意地みたいなモンよ。ともあれ、私が死んでも、ジョーカーが死んでも、この子が死んでも、明るい未来は無かつたわ。そういう意味では、感謝してる。」

だから——ありがとね。蓮、悠仁」

「……………お、おう」

その立ち振舞いは、凜と咲く赤薔薇のようできて。

二人に見せたその笑顔は、向日葵のように晴れやかだった。

それこそ女性経験のない朴念仁の悠仁でも、頬を赤らめる程には…………。

野薔薇からの信頼を感じる…………。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『女帝』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん…………。

「…………ンまあ、理由が大きけりやいってモンでもないよな」

「ハイ、お礼言ったからチャラー！ 貸し借り無し！」

「な、何だコイツ……」

「はは」

31.

「家、こつち！　ありがとう、ジョーカー！」

「気をつけろよ」

「うん！」

手を振り、男児が笑顔で帰っていく。夕刻、門限の時間にはどうやら間に合いそうらしい。蓮も手を振って見送った。

「しつかり切り札が板に付いてきてんじゃん。やるね」

「最強にそう言ってもらえるなら、切り札を担った甲斐もあるな」

一方廃ビル前。悠仁の隣で、貧乏揺すりで制服が擦れる音がする。不機嫌さを隠そうともしていない野薔薇によるものだ。二人は廃ビルから脱出し、子供の保護も完了して、見送りを恵と悟、蓮に任せた。しかしその後が問題だった。

遅い。五条悟が遅い。子供を送り届けると言っておきながら、かれこれ一時間は待っている。家が遠いのであれば仕方ないが、子供はおよそ小学生低学年だ。小学生の行動範囲など高が知れている。そう遠い所に住んでいる訳でもないだろう。だのに往復一

時間もかかるものなのか、と野薔薇は空腹も相まってイライラの臨界点に到達しようとしていた。

「……ねえ悠仁。私お腹空いてんのに待たされんの大っ嫌いって話する？」

「しなくていいよ分かったから」

——と、噂をすれば何とやら。蓮と恵を引き連れた悟は、ようやく空腹の獣二匹の元へやって来たのだった。

「お疲れサマンサ、子供は送り届けたよ。今度こそ飯、行こっか！」

「ビフテキ！」

「シースー！」

「フツフツフ、ンまっかせなすあ〜い！」

今回の戦闘を経て、悠仁と野薔薇は仲を深めたようだった。

夕焼けが空を黄昏へと導く。原宿駅へと向かうその道中でも、会話は絶える事は無い。仏頂面に拍車がかかる恵にその理由を悠仁が問う。

「あれ、どつたの恵？」

「……別に」

「出番が無くて拗ねてんの」

「プツプ、うに頭〜」

「おい雨宮、お前釘崎に教えただろ？」

「えっ、野薔薇に？ 何の事だ……？」

「そんな頭だから性格もツンツンしてるのよ」

「雨宮……！」

「いやオレ本当に何も知らないぞ!？」

『あつはははははははははは!!』

新たな生活。呪術師としての生業。蓮は今しがた、呪術師として生きる事の苦渋を学び、戦う時の意気込みや執念を思い出した。次は今日のように上手く行かないかもしれない。不安は泥のように、蓮の脳裏にへばり付いて離れない。

——けれど今はただ、この新しい日常の平穏の中で、笑い合っていたかった。





記録二〇一八年七月

西東京市 英集少年院 運動場上空にて、特級仮想怨霊（名称未定）の呪胎を非術師数名の目視で確認。緊急事態のため、高専一年生四名が派遣され――

内一名 意識不明の重体

内一名 死亡

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n

L e t     u s     s t a r t     t h e     g a m e .

# 5     F o r     m e     t o     b e     m e .

## # 6

「雨宮蓮。

元・杉沢第三高校一年生。両親及び祖先共に非術師の家系であり、術式が開花したのは突然変異によるものと思われる。術式は《魂<sup>ベル</sup>靈<sup>ソル</sup>召喚<sup>ナ</sup>術》……だと。何だこれは」

「何だこれはって、そのまんまの意味ですよ」

「説明が足りている訳が無いだろう！ 乙骨とは訳が違うのだぞ！ 彼奴<sup>あやつ</sup>も突然変異、

此奴<sup>こやつ</sup>も突然変異と、職務怠慢も大概にしろ、五条！」

「そうとしか書けないからそう書いてんですよ。私が直々に視たんですからね」

「彼奴との関連性も確認出来ていないというのに、ソレが偶然発現したというのかえ？

その六眼<sup>りくがん</sup>、腐っているように聞こえるがね？ ギツヒヒヒヒ」

「……ま、そこは何か分かったら報告しますよ」

「彼奴は乙骨憂太はおろか、貴様にも成り得うる可能性を秘めていた。此奴にもそれがあるとっ？」

「そうなりますね。であればそのレベルの逸材を、みすみす手離す訳にもいかんでしょ。未来ある若者の教育は、先達としての役目ですので」

「お前のお気に入り、此度はどこまで持つであろうなあ？」

「——私の教え子は、そう簡単に死ぬほどヤワではありませんよ。では、これで」

33.

〈2018年6月21日〉

「Automatic punching doll」

「ふあ~~~~~……」

朝七時前。ヒヨドリがけたたましく歌っている。早朝の顔面洗浄を終えるも眠気は消えず、虎杖悠仁は、一つ大きな欠伸をした。朝食にしようとする食堂に寄った悠仁のその目には、洗い損ねた目脂めやにが付着している。本日の朝食は目玉焼きを乗せたトースト、トマトとレタスのシーザーサラダ、コーンスープ、そしてコーヒーのようだ。

現在の時刻は午前六時半過ぎ。本日は教師陣の都合から、丸一日自習のカリキュラムとなつている。教師とは言つても呪術師であり、彼らにも任務がある。恵曰く、このよ  
うな事は珍しい事ではないらしい。

特にやる事も無いので、悠仁は今日一日をどう過ごそうか迷っていた。ゴロゴロするもよし、仲間を誘つて鍛錬するもよし、東京の街を何気なく観光するもよし。選り取り見取りであった。

「おろ。っはよー蓮。早起きなんて珍しいなー」

「……ああ。おはよう」

いつになく早起きし、先に到着していた雨宮蓮。当然ながら先述のコーヒーは蓮が直々に淹れた物だ。サイフォンと豆は実家から送ってもらったため、蓮は今日も朝からコーヒーをキメられる。悠仁に背中を向けて黙々と朝食を食べているが、しかしその言葉には覇気が無かったように思えた。普段のテノールに加え、どこか口籠もるような声だった事に、悠仁は違和感を覚えた。

「どつたん蓮？ 元気ねーな」

「今こつち見ないでくれ」

「お、おう……なんか深刻そうだな。アレか？ ポリジュース薬飲んだけど、入れた髪の毛がペットの奴だったとか？」

「《ナメクジくらえ》された」

「うわー、めつちや嫌だわーそれ。……んで、本当はどうなんだよ？」

「……笑わないなら、見ても良い」

「笑わない笑わない。ってか何見せてくれんの？」

出入口からは蓮の表情が窺えな<sup>うかが</sup>いたため、悠仁は覗き込むようにして蓮の顔を見て——  
思い切り吹き出した。

「——ブツ、ぶっひやっひやっははははは!! 何その顔、顔面湿布まみれじゃん!!」  
「笑わないって言ったのに……」

「ふ、はは、ごめんムリ、腹痛いつ、ははははははは!」

彼は雨宮蓮である……はずだ。しかしその顔面にびっしりと貼られた湿布が、蓮の顔を六割程度覆っていた。目下の隈も酷い。おそらく痛み故に眠れなかったのだろう。魅力が《魔性の男》から《人並み》を通り越して《無い》にまで降格してしまっていた。「はー笑った。んで、誰にやられたん?」

「人形」

悠仁はポカンとなった。蓮の口から人形というワードが出てくるとは思わなかったのだ。

「……………はい? 人形? 何で?」

「呪術の……ふあゝ……訓練だよ」

欠伸しながらそう言ったのは恵だ。寝間着がほぼ黒一色で統一されているのは、彼の術式故か、はたまた無意識故か。寝癖によって彼の頭髮のウニ具合に更に拍車がかかっている。やはりというか何というか、恵も蓮の顔を見て吹き出すのだった。

「くくっ、雨宮……何だその顔……」

「恵も頭凄いぞ」

腹いせに言つてやった蓮。しかし効果は今一つのようだ。一応蓮の方向へ顔は向けていないが、笑う素振りを隠すつもりはないらしい。腹を抱えてツボに嵌っている。

「お前よりは……………つくは、ダメだ、可笑しすぎる……………！」

「こんな笑つてる恵俺初めて見た」

「くつ、一体オレが何をしたと……………」

「いやお前めっちゃうにうに言つてんじゃん」

「虎杖の言う通り、日頃の行い……………ふつ、つて奴だよ」

「それよかさ、何で呪術の訓練に人形が関係して来んの？」

「それは……………」

昨日の記憶を、蓮はゆつくりと紐解いていく……………。

32.

〈2018年6月20日〉

「Reversal technique」

「……………ぐうつ」

勢いよく弾き飛ばされ、稽古場の床を転がり伏す。右手に握っていた木刀も手離してしまった。息は絶え絶え、服は汗塗れでみつともない。体の所々が激しく痛み立ち上が

れない。昨日の蓮からは想像出来ないほど無様だった。

「はい、本日の稽古終了」

「つはあッ……はあ、いつつ……」

容赦の無い応撃。契約通り、悟に稽古をつけてもらったがこの様だ。術式無しの単純な組手で、稽古中ずつと遇らわれ続け、ついぞ一本も取れなかった。『最強』は、術式が無くとも『最強』なのだという事を、蓮は静かに噛み締めた。

「筋がいいね、蓮。僕ちよつとだけ本気出しちゃった」

(汗一滴も垂らしていないクセによく言う……)

「いや、それにしても驚いたよ。まさかキミに、反転術式の才能があつたなんてね。それも術式目醒めたばかりのペーパーが。ちよつと嫉妬しちゃうな」

「……反転、術式……つて、何だ。野薔薇も、言つてたけど。術式を、反転して……つ、はあつ、何がしたいんだ」

「まずは深呼吸。落ち着きなよ、蓮。」

蓮、キミはちよつと勘違いしてる。反転術式は、名前の通りの意味じゃないんだ。そうだね……まずは呪術師にとつて欠かせない要素である『呪力』から説明しようか」

悟も胡座あぐらをかいて座る。汗一つ無いその姿に、蓮は少しだけ嫉妬した。というよりは己の貧弱さに腹が立った。悟に一矢報いる事すら出来ない現状が、どうしようもな



く歯痒かった。それに構う事なく、悟は口を開く。

「呪力つてのは、負の感情……妬み、嫉み、怒り、悲しみ……そう言った感情から生まれるエネルギー。僕らはそれを、小さな感情の火種から捻出し、術式に流し込む事で呪術を使う。《反転術式》も、元を辿れば呪力だ。

さて蓮、ここで簡単な問題だ。『 $1 \times ( - 1 )$ 』は何？」

「……—1」

「正解。じゃあ『 $( - 1 ) \times ( - 1 )$ 』は？」

「1。……なぜ今数学を？」

「まあ聞きなよ。」

呪力つてのはね、攻撃する事にしか適さない『マイナスのエネルギー』なんだ。ストレスが原因で胃潰瘍かいようが出来たって話は聞いた事あるでしょ？」

「確かに、聞いた事はある」

「でも、負の力である呪力同士を掛け合わせる事で、呪力は『プラスのエネルギー』へと昇華する。さつき数学の問題を出したのは、呪力を $( - 1 )$ みたいな、負の数式として考えやすいようにするための例さ。

そして正の力に昇華した呪力は、治療ちりょうの力を持つ。ストレスの真反対に位置するエネルギーだからね。そしてこのエネルギーの事を、僕らは《反転術式》と呼んでいる」

「……なるほど、そういう事か」

「蓮が言ってたのは、『術式反転』。プラスのエネルギーである『反転術式』で術式を行使する事だね。使えるかどうかは本人の才能や術式の相性にもよるけど」

「紛らわしい名前だ。それで、『術式反転』を行うとどうなるんだ？」

「んー、これはやって見せた方が早いかな」

「……？」

そう言つて悟は、左手の人差し指を天井に向けた。五条悟の術式《むかげんじゅじゅつ無下限呪術》は、端的に言えば『物体を段々と遅くする』術式だ。悟はこの仕組みを説明する時、いつも『アキレスと亀』というパラドックスで解説する。

ここに一匹ずつアキレスと亀がいるとする。アキレスの出発点を原点0とし、アキレスと亀の距離は100メートルで、アキレスは分速10メートル、亀は分速1メートル前に進むとする。

アキレスが10分進めば100メートル進んだ事になり、同時に亀は10メートル進んだ事になる。更に一分進めば、アキレスは原点に対し110メートル地点に進んだ事になり、亀は111メートル地点に進んだ事になる。そこから一秒進めばアキレスは110.166666……、亀は111.0166666……と、これを繰り返す事で、アキレスは永遠に亀に追いつけないという逆説だ。

実際にはアキレスは亀を追い抜き、この逆説は立証出来ないが、これを現実に昇華できるのが、《無下限呪術》という術式なのだ。そしてこのパラドックスを自身の呪力で更に強化する事で、このアキレスと亀の距離をより薄く縮め——最終的に『0』を通り越して、《収束》の力を発動する事が出来る。

右手の人差し指に生まれた虚空、《収束》の局地、深海のように、どこまでも吸い込まれそうになるブラックホール。それが——

「術式順転【蒼】」。これは普通の呪力で編み出した僕の術式。これを《反転術式》で行うと——」

今度は悟は、サングラスを外してネックに引つ掛け、右手の人差し指を天井に向けた。

それは太陽よりも赫く——残酷なほどに綺麗な虚空だった。

「——術式反転【赫】」。これが、《反転術式》で編み出した術式。蓮、この違いが分かるかい？」

「……………赤い方は、強力になってたりとか…………いや、《反転術式》を術式に流し込んだという事は、術式の効果も変わっているのか？」

「正解。尤も、強力なのは間違いじゃないよ。だって僕『最強』だし」

「答えになつてない」

「まあ冗談は置いて…………あ、触れると危ないからこれはもう消すね。最悪死ぬし」

「そんなものを易々と目の前に出ささないでくれ」

悟が術式を解き、二つの虚空は霧散した。サングラスを掛けて再び口を開く。

「まとめると、術式反転を行うと、術式の効果も反転する。……まあ僕以外でしてる人見た事ないけど」

「したくても出来ないか、した所で意味がないのどちらかか」

「そもそも《反転術式》を使えるのが、ほんつとーに才能のある人だけだしね。緻密ちみつな呪力操作を要求されるから、出来ない人は死ぬまで出来ない。僕だって使えるようになるまで結構かかったんだよ？」

「そうなのか？」

「そうさ。僕以外に出来る人もいるっちゃいるけど、術師の中でもほんの一握りだしね。使える人に聞いても何のこっちゃだから、余計に時間かかったよ。だからこそ、キミのその才能は貴重だ。本来なら治療員ヒールとして扱うべきなんだろうけど……キミは納得しないだろう？」

「しない」

「だよ。まあでも、まずは呪力コントロールから鍛えようか」

「……鍛えられるのか？ どうやって？」

「フッフッフ……コレレさ！」

ペーっペーパーっぺてれれくと、若干間違えている音痴な効果音を口ずさみながら取り出したのは、ボクシンググローブを装着した黒い熊の人形だった。鼻提灯が膨張と収縮を繰り返している。およそこれを作成したのは悟ではないというのに、なぜ効果音をドラえもんではなくキテレツ大百科にしたのかを、蓮は小一時間ほど問い詰めたくなつた。

「夜蛾学長から搔っぱら……もとい借りてきた、呪骸じゆがいのツカモトでっす！」

「名前があるのか。名付け親は？」

「学長だよ。はい、コレ持って」

「ネーミングセンスどうなってるんだ学長」

ここまで来ると逆に可愛く思えてくる。言われるがままに手渡され、人形の暖かく柔らかな生地が蓮の掌に満たされていく。……それだけだった。耳を触ったり、強く揉んでみたりするも、一向に何かが起きる気配は無い。

「……………オレにどうしろと」

「焦らないの。そろそろだから」

「そろそろ？ 何が始まるんだ？」

「大惨事さ」

——悟がそう口にした瞬間、蓮は左頬に強烈な痛みを感じ、身体と思考が共に吹き飛



（本当に反転術式を使えるのか……ますます彼の存在が謎だ。その術式も、彼自身の才能も、ペルソナの種類も……本当に、アイツと良く似ている）

かつての青春を思い出す悟。少しだけ、その懐かしさに目を細めた。かつて悟が高専生だった頃の同級生……悟が気を許せる数少ない親友だった男に、あまりにも良く似ているのだ。雨宮蓮ジョーカという男は……。

「何で殴ってくるんだよこの人形は……!」

「だって呪骸って呪力が込められた人形だよ？ 動かないワケないじゃん。ちなみにその呪骸は、一定量呪力を流し込んでいないと、手にしてる人をブン殴るようにプログラムムされてるんだ」

「先に言えっ!」

「てへぺろりんちよ☆ んまあそれは置いといて、蓮は映画観ながらソイツに《反転術式》を流し込み続ける事。必要量も徐々に上がっていくからね」

「……………なぜ映画?」

「いついかなる状況下、いかなる感情下でも、呪力出力を一定に保つため。そのシチュエーションを作るには、映画鑑賞が一番容易いからね。

必要分以上の呪力を練っちゃえば無駄が生まれる。無駄の繰り返しを許容するのは、最高のパフォーマンスとは言えないでしょ。そーゆー無駄を徹底的に削るためだよ」

「アニメでも良いか？ 見たいアニメがあるんだ」

「別に映像なら何でも良いよ」

手をひらひらさせて悟が言う。

なお、以下丸括弧内の全容を悠仁と恵、野薔薇に聞かせていないものとして進める。

（——その直後、雰囲気が変わったのを蓮は感じた。まるで尋問するかのように、悟の雰囲気、普段とは違う厳格なものに変容したのだ。少しだけ蓮は警戒する。

「蓮。キミのペルソナは、結局のところ『何』なのかな？」

「学生証作る時にも言ったが、オレの反逆の精神が具現化したものだ。……どうかしたのか？」

「いや、キミの術式はまるで見た事も聞いた事もなくてね。反逆の精神が具現化するとなぜそんな形になるのか、どこから他のペルソナを連れてきたのか、他のペルソナを何体まで溜め込む事が可能なのか……疑問は尽きないよ」

「へえ……そんなに珍しいのか、オレの術式は」

「珍しいっていうか、その力の大きさが理に適ってないんだよ。術式自体には特に問題はないけど、アルセーナ……だったかな。アレは今のキミには過ぎた力だ。それに対し先程召喚したピクシーは、今の君でも難なく扱える……まあつまり、キミの今の実力に対して、アルセーナという存在が異質なんだよ。アレ、普通に特級呪霊として登録され



てても何らおかしくないし、それをキミが『最初から』溜め込んでいる事も気掛かりだ。戦い方も妙だ。さっきの稽古で木刀を併用した徒手空拳やってたけど、言っちゃ悪いけど全然なつてない。……のにも関わらず、僕に対し良い線行つてるとなると、『君流の徒手空拳を確立している』という事に他ならないんだよね。悠仁曰く、運動は出来ても喧嘩はした事がないキミがだよ？

これらの点を踏まえて、質問を変えようか——ゾウカー雨宮蓮、キミは一体何者なのかな？」  
 ……呪術師最強と名高いだけあって、どうやら悟は勘が鋭いらしい。その考察力と洞察力に蓮は少し恐怖を——気色悪さを感じた。その様は、まるでかつての好敵手を思い出させた。ギリギリで顔には出さなかつたのは、前世で不本意とはいえポーカーフェイスが鍛えられたからだろうか。

蓮は自身の前世を話す事に、なんら抵抗感を持ち合わせていない。しかし自身の秘密を他人に易々と話せる程、その口は軽くはない。前髪をいじりながら、冗談と嘘をカクテルして返答する。

「前世で俺TUEEEでもしていたんじゃないか？ この術式は前世の名残とかだろう。当時の記憶は全く無いが、五条先生の話を聞く限り、そうでなければ説明がつかない」

「えー、僕異世界転生チートハーレム系は苦手なんだけど」

「アンタがそれ言うのか？」

「僕異世界転生ハーレムじゃないもん！ チートだけだ」

悟も冗談を交えて話す。どうやら尋問は終わったようで、悟は再びへらへらとして蓮に語りかける。）

「ま、とりあえず今日から頑張ってみてね。寮の共有スペースにあるテレビ、自由に使っているから」

「わかった」

「何本か映画用意してるけど、どうする？ どれから観たい？」

「アベンジャーズを所望する」

「メタルマンならあるよ！」

「クソ映画じゃないか」

果たして自分が『最強』に至るまで、一体どれほどの時間を要するのだろうか。蓮はそう思いながら、悟とより絆が深まった事を確認した。

34.

〈2018年6月21日〉

「——んで、律儀にメタルマン観ながら呪骸にブン殴られ続けた結果、見終わる頃には呪

力切れを起こしており反転術式も使えないまま今日に至る、と。薄々感づいちやいたが、お前アホな所あるだろ」

「返す言葉もございませぬ……ああくそ、ピクシー」

「とおつ」

こんな時こそ毎度お馴染み、ピクシーの出番だ。翠色の治癒の奔流が、蓮の顔面を覆っていく。その横で恵は目を見開いていた。

「……本当に使えるんだな」

「オレからしたらその下り二回目だぞ」

正確には悟も疑っているので三回目だ。読者もその反応は飽き飽きしている事だろう。天井は二回まで。

「んで、蓮は今日何観んの？」

「悠仁に勧められたやつ」

「おつ、アレね！俺も一緒に観ていい？勧めたは良いけどさ、俺も観た事ねーんだよな」

「もちろん。……それなのに勧めたのか」

「朝っぱらから何のはなひよ……」

と、そこに乱入してきたのは釘崎野薔薇だった。パジャマ姿の野薔薇は、目を擦りな

がら三人に問うた。笑顔で挨拶を交わし悠仁が答える。

「おつ、野薔薇。はよー」

「ん。んで、何の話？」

「皆でアニメ観ようぜって話」

「いや、俺を巻き込むな」

「いーじゃんいーじゃん、親睦深めようぜ恵！」

「何観んの？ 私コーラ無いなら観ないけど」

「だいじょーぶ。俺自分用に2リットルのヤツ買ってんだ」

「未開封？」

「開けてないやつあるよ」

「……んで、結局何見るんだよ、雨宮」

「こ・れ・だ」

「ワン・トウ・スリー！」

「ベストハウスじゃねーか」

35.

『詰みだ。さっきのは割と驚かされたぜ、坊主。』

しかし解らねえな。腕は悪かねえのに魔術はからつきしと来た。筋は悪くねえのによ……もしかしたら、お前が七人目だったのかもな。

まあ何にせよ、これで終いなんだが』

『——巫山戯るな……!』

俺は助けられたんだ……助けられたからには、簡単には死ねない……。俺は生きて義務を果たさなければならぬのに、死んでは義務が果たせない……。

——殺されてたまるか……! こんな所で意味も無く……平気で人を殺すような、お前みたいな奴に——!!』

『な——七人目のサーヴァント、だと!?』

『——問おう。貴方が、私のマスターか』

『うおおおおお、かっけえええええ!!』

『うるっさいのよ今良いとこでしょうが!!』

『いっつ!』

『コイツらうるさ……!』

別作品だと思ったその君。案ずるな、P5×呪術廻戦だ。

男子寮舎の大広間。悠仁、野薔薇、蓮、恵の順に、四人がテレビを凝視している。上映中だというのに大声を出してしまった悠仁は、その制裁を隣席の野薔薇に受ける事に

なった。主にグーパンでドタマに一発。「いひいくん」と泣きながらギャグ漫画でよく見るような肥大化したたん瘤こぶを摩さすっている。

「……しかし、何だ。このアニメ、めちやくちや動くな」

「すげーかつけーよな！ 特にあの『アーチャー』ってやつ！の剣捌き、めつちや凄かった

『『凄い』だけじゃ伝わらねーよ虎杖」

「こう……なんか、ズバーンバシユーンガキーンって感じ！」

「尚更分かんねーよ」

だが確かに、悠仁の言い分も分からなくはなかった。

前話……少々奇妙だが『0話』に当たる回にて、一同は驚愕に目を見開き、そして離せなくなった。演出、設定、バックグラウンドミュージック、キャラクター……上記事項も確かに魅力的だ。これらでも四人を魅了するには事足りる。では、その最たる理由とは何かと問われれば——戦闘描写だった。

それを『戦闘』という生優しい言葉では、蓮は表現出来なかった。

——『戦争』。たった二人きりの剣戟は、その域に達していた。『アーチャー』の双剣と、青い外套の男の朱槍。何者をも寄せ付けぬ殺陣は、一瞬で四人をその世界に引き込んだ。このクオリティで当時週一で放送されていたのだとしたら、製作関係者の愛は凄

まじいを通り越しもはや狂気の域だ。蓮も知らず知らずのうちに、ツカモト（呪骸）を握る力が強まり——一発ブン殴られていたのだった。反転術式で回復はしたものの、不貞腐れている様子を隠そうともしていない。

「ねー蓮。アンタ、アニメとか漫画とかから戦い方学んだって言うってたわよね？ こーゆー奴からも何か学べた？」

「そうだな。特に『アーチャー』の動きは参考になる。……再現出来るかはともかくとして」

「私にやムリ。設定聞いてたから最初ハナっから分かってたけどさ。でも悠仁なら出来るんじゃない？」

「学校の四階の窓まで跳躍出来るし、『屠坐魔』もあるし、案外行けそうだな」

「あつ、それだったらさ、蓮の《剛巖》貸してくれよ！ ちようどコートもあるし、『アーチャー』スタイル出来んじゃないか?！」

「制服の上にコートは流石にダサイんじゃないか……?！」

「んじや全部貸してよ」

「オレにすつぽんぽんになれと？ PTAに存在を抹消されるぞ」

「蓮はPTAを秘密警察と同一視してんの？」

「っーか『ランサー』役は誰がやんだよ」

「うーん……………恵かなあ？」

「何でだよ」

「何となく。けどさ、何か似合いそうじゃね？ 槍までは行かないにしろ、薙刀とかさ」

「あー、分かる。無駄にクルクル振り回してそんなイメージあるわ」

「お前らの俺に対する印象どうなってるんだ」

「それよりほら、まだ続いでる」

「あれ、これも40分くらいあるのね」

「初回サービスとかかな？」

『これより我が剣は貴方と共に有り、貴方の運命は私と共に有る。ここに、契約は完了した』

『け、契約って何の!? ツ……………!!』

『フ……………!!』

『てえツ……………!!』

「えっ……………え、何、今の？」

「こりや……………凄い、つーかエグいな。何だこりや、規格外過ぎんだろ……………」

「悠仁、何合打ち合わせたか分かったか？」

『『セイバー』って奴が最後に突撃したのを含めなければ……………十八……………いや、十九かなあ』



……？」

「——ちよつと待つて。完全に体感だけど……今の、3秒しか経つてないわ」

「……再現出来そうだったの、アレ撤回するわ」

「ともかく、参考にはしよう……」

「関係ないけどさ、『ランサー』の槍のコンツて音好き」

『わかる』

最終話まで今日一日を四人で過ごした……。

ちなみに合計被弾回数は九回。三話ごとに一回は殴られている計算になるが、尤も殴られていたのは序盤だけで、後半になってからその頻度は激減、遂には無くなった。

36.

〈2018年6月24日〉

「Ren's Special Leblanc Curry」

灼熱の蒼炎、鍋底を炙る。グツグツ、コトコト。スパイスの海を野菜と肉が泳いでいる。レエドルがルウを掻き混ぜるたびに、鍋から芳醇な香りが湧き上がる。既に客達は、香りだけで胃袋を驚掴まれていた。

客達は、もはや食はずとも理解できていた。現在進行形で、シェフが手掛けているカレエは、素晴らしい物に違いないと。

生物でも人のみが持つ、食を楽しむという感覚。それを刺激するシェフの名は、雨宮蓮。肌色の長袖Tシャツに自前の緑色のエプロンが良く似合っている。

そんな蓮に食堂にて視線を送る者が三人。虎杖悠仁、釘崎野薔薇、伏黒恵である。うち二名は今か今かと待ち遠しくしている様子だ。普段は仏頂面の恵も、今日はどこかわそわしている。

——そう、お楽しみの時間である。激闘の日々を送る彼らにとって癒しの時間帯。即ち食事である。特に蓮の幼馴染であり、蓮の手料理の質を、カレーの味を知っている悠仁は、他の二人よりもワクワクしていた。

蓮は料理が上手い。どれくらい上手いかと言うと、蓮が料理を担当する日は家族がどれだけ仕事が忙しくても辛くても絶対に食べに帰るほどだ。

というのも、生前の主夫兼喫茶店のマスターとしての経験があるためだ。そんなよそからの学生とは年季が違う（蓮自身は少し狡いよなと思っていたりするのだが）。

独自にレシピを組み料理を編み出すこともあったが、しかし彼はカレーだけは、彼の料理の師であり義父でもある男の教えを忠実に守っていた。時々アレンジするのだが、これが中々上手くない。

東京の四軒茶屋に居候した時、朝つばらから出されたカレーとコーヒーがとても美味かったのを、転生した今でも覚えていいる。人生に絶望していた最中、義父から貰ったあの料理は、少し塩気が多い気がしたが、今まで食った物の中で一番美味かった。その美味さを伝授してもらい、受け継いでからも守り続けた。

故にカレーとコーヒーなら、蓮は誰にも負けない自信がある。そして負けたくないという矜持もある。故にこの二つにおいて、蓮は妥協を許さない。

「うん、美味い」

小皿に少しルウを移し、味見する。まろやかさとコク、舌を刺激するスパイスと、仄かな甘みの先にある旨み、そしてこの懐かしさ……どうやら義父の味を再現出来ているようで、安堵と美味さに自然と口角が上がっていく。

——事の始まりは、主夫時代の名残りで何気なく業務用スーパーに寄った事が発端だ。お得用の新じゃが900グラムが、幸運なことになんと30%オフで300円だったのだ。新じゃがの旬は春先から初夏にかけてなので、丁度この時期が食べ頃というわけだ。蓮の主夫としての勤が叫び、手に取らざるを得なかった。

しかしいざ買うとなった時、900グラムのじゃがいもをどう調理しようかと悩んだ。金銭的余裕は……任務の稼ぎを考えれば、あるにはあるが、ほとんどがペルソナの強化等に費やされていくのだ。無駄遣いは出来ないし、後先考えずに購入すれば財布事

情が悲しいことになってしまふ。それだけは何としても避けたい。

——メモントスに入れたら、荒稼ぎできるのになあ……。

と、過去の思い出に浸りながら、蓮は献立を考えていた。グラタンにしようか、しかし最近サイゼリヤで食べたばかりだし、新鮮味が欲しい所だ。ジャーマンポテトにしようか、ならば水気の無さを他の料理でどうにかしなければ……しかし財布が……と、悩みに悩んだ末に、蓮はふと閃いた。

——そうだ。久しぶりにカレーにしよう。単品で済むし、最近食べてなかったし、何より美味しい。幸い、買い置きしていた玉ねぎは高専の寮にて干されている。あとは牛肉と、この際だから、スパイスもいくつか買っていこう——そして、今に至る。

「んはあくつ、めつちや良い匂いく！」

「だろ！ 言つたら！ 蓮のカレーは世界一だつて！」

「すぐに注ぐから待つてろ」

『やつたーっ！』

「子供かよ……」

「恵の分は私が貰つても良いわよね？」

「何でだよ！ 俺だつて食うっつーの！」

「喧嘩しない。ほら、出来たよ」

コトンと音を立てて、客達のカレーの入った丸皿が眼前に置かれた。

白い湯気。ルウに寝転がる野菜と肉。煌めく白米の一粒一粒が眩しい。唾液は留まる所を知らず、胃袋は空腹に音を上げている。

『いったただきまーす!』

「……いただきます」

「——うまつ!!? 何コレうつつまつ!!?」

「……確かに、美味しい。今まで食った中で一番……」

「………んむ……もぐ……もつ、むぐ」

「あつ、ちよつ悠仁! テメエ抜け駆けしてんじやないわよ! んむんむ……!」

「そんなに急がなくても無くなんねーだろ。んむ」

「ばーろー恵、これは戦いくなんだよ!」

「腹減ってるのにか?」

「腹減ってるからこそなの!」

「いやゝにしても美味しいね! 僕甘党んだけど結構いけるよコレ。何入れたの?」

「磨すりおろしたリンゴさ」

説明しよう！

リングゴはカレーの隠し味として良く知られているぞ！ 適量を加えれば味に甘味が増え、まろやかな味わいになるぞ！

磨りおろしたリングゴには繊維質が含まれており、一緒に煮込む事で甘さとまろやかさが増し、マイルドな仕上がりになるぞ！

「なるほどね。だから僕でも食べられるんだね」

「蓮！ おかわりしていい!? つーかするね！」

「まだあるから、慌てるなって」

「あれ、恵あんま減ってないわね。食欲無いの？」

「いや、むしろ食欲はいつになく良い」

「ゆっくり味わってるって訳ね」

「いやこれ二杯目」

「早過ぎんだろ!？」

「なんだかんだ言ってアンタも食べたいんじゃないのよ！」

「僕もおかわりしようっと」

「私もー！」

「オレも食べるかな……」

木製の食器棚から蓮用の皿を取り出し、炊飯器のジャーから米を注ぐ——そして冷蔵庫にて保存していた、密かに買っておいたミックスチーズをパラパラと振り撒き、その上にルーを掛ける。簡易的なチーズカレーの完成だ。五つある席の最後の一席にスプーンと共に置き、水をコップに注ぎ、スマホを取り出して——

「もしもし警察ですか？」

「いやいやいやちよつと待ってよ蓮！ 僕カレー食べてただけだよね!!」

いつの間にか鎮座していた<sup>不審者</sup>五条悟を通報しようとして、すんでの所で止められてしまった。

「はーあつぶな。キミってば行動力の化身って渾名あるでしょ」

「一声かけてくれたらこんな真似しなくて済むんだが」

「めんごめんご☆」

（今度マジで通報しよう）

「ねー蓮、いい加減カレーのレシピおせーてよー」

「味を盗め」

「怪盗なだけに？」

「分かつてるじゃないか」

ハイタツチを交わす蓮と悠仁。食事中に行儀の悪い事をするのはダメ、絶対。

「てかふと思つたんだけど、恵つて私らを下の名前で呼ばないわよね」

「あー、確かに。言われてみりやそうだな」

「お前らがフレンドリー過ぎるだけだろ」

「呼んでみてもいいのよ、特別に許したげる」

「釘崎、英雄王が感染うつつてないか？ ……虎杖、雨宮、釘崎で良いだろ、別に」

「頑固だなあ恵は。呼び方変わるだけだぜ？」

「そこら辺お前らがルーズなだけだ。ほら、食い終わったんなら皿渡せよ。洗つてやる。

「飯の恩つてやつだ」

「おつ、気が利くう！ 僕のもお願いね！」

「五条先生アンタは自分で洗え」

「え……僕の生徒が冷たい……」

結局、洗わされる悟であつた。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen  
Let us start the game.



#  
6  
  
J  
U  
J  
U  
  
S  
A  
N  
P  
O

## #7

37.

〈2018年6月25日〉

「Tokarev TT-33 and “Pact”」

東京都立呪術高等専門学校には、弓道場の地下に歴れっきとした射撃場がある。内装は主に鼠色や鉄色の無彩色で、使われた形跡こそないものの、バリケードや人型及び円形のものには、きちんと整備が行き届いているようだ。

その射撃場には二人の男がいる。一人は我々が雨宮蓮、もう一人は安心安全の五条悟だ。そして蓮は、眼前に広がる光景に興奮して、一步も動けずにいた。

「こ、これ……全部本物なのか?」

「イグザクトリー」

——それは、絶景だった。S & W M19コンバットマグナム、コルトガバメント、H & K P9S等の拳銃や、蓮でさえも名を知らぬような散弾銃、サブマシンガン、アサルトライフル、スナイパーライフルがその部屋には山ほどある。マニアには堪らない光景だろう。特段銃が好きという訳ではない蓮も、今回ばかりは心を躍らせていた。いつ

の時代も、何歳になっても、銃は男の浪漫なのである。

あまりの衝撃に声の上擦ってしまふ蓮。前世でもこのような光景は見た事がない。ペルソナの覚醒時以上にテンションが爆上がりし、もはや天元突破している。日頃落ちて着いている彼からは想像も出来ないほど年相応に目を輝かせている様子を、同伴者の五条悟は微笑ましく見守っていた。とはいっても、蓮の精神は本人の年齢を大幅に上回っているのだが。

——端緒は、蓮がトカレフという自動拳銃を欲しているのを悟に相談した事にある。かつての蓮は——というよりジョーカーは、ナイフと自動拳銃（どちらもレプリカ）とを状況によって使い分ける戦法を使っていた。今やジョーカーの戦闘において、ナイフと自動拳銃は欠かせないものとなった。

要するにジョーカーは、拳銃が無くてしっくり来ていなかったのだ。

それを相談した折、悟から「じゃあ持つてみる？ 拳銃」と問われ、蓮はいつになく豪勢に承諾したのだった。

そして、現在に至る。

「凄いな……！ 射撃場があるのも、これほど装備が充実しているのも、想像以上だ……！」

「ふっふーん、まあね。呪術高专舐めちゃダメよくダメダメ」

「久しぶりに聞いたぞソレ」

「二応約束のトカレフは持つて来てるけど、自分に合うのを試しなよ。腐るほど沢山あるんだし。あつ、間違つても公衆の面前で振り翳すような事はしないでね。まあキミならしないとと思うけど」

「分かった」

蓮はあくまでも拳銃使いだが、悟の言葉に甘える事にした。戦闘で使う事は無いが、アサルトライフルやスナイパーライフルの実銃など、今後出会う機会はほぼ無くなるだろうと考えたためだ。

「何から試す？ MINIMI？ AKM？」

「じゃあ、AKMから」

「おつけ。弾詰める所から教えるね。えーっとこれはね……」

「……先生は使った事あるのか？」

「えっ、無いけど？」

「じゃあ何でそんなに自信満々なんだ」

「こーゆーのはノリと勢いが肝要なのさ」

「……やっぱり拳銃だけにしておく」

「えー、勿体ないなあ」

「本当だ全く」

——前言撤回。蓮の危機管理能力が本能に危険を訴えたため、蓮は拳銃以外取り扱わない事となった。最後の台詞がやや強調されていたのは、悟の訳の分からぬ自信（蓮からしたら疑心）から来る不安がこのやり取りで溜まったためか。ジト目で目を顰めながら、視線を陳列した拳銃達へと向けた。

さて、机上を見ると様々な拳銃が整列されているのが分かる。蓮がまず手に取ったのは、コルト・シングルアクション・アーミー。正式名称をM1873といい、西部劇のガンマンがよく佩帯はいたいしているもののイメージが根強いのではないだろうか。

M1873はサイズによって愛称が異なっており、蓮が選んだのは——というか置いてあったのは、民間向けの、45口径モデルの『ピースメーカー』と呼ばれるものだ。楕円形の弧を描く独特のグリップには、コルト社のロゴである嘶いななく馬が掘られてある。トリガーは他の拳銃に比べて細めだ。バレルは綺麗に磨かれており、鏡面であるかのように蓮の顔を写している。見る限りは何もカスタムされておらず、極めて新品に近い仕上がりだ。

蓮は一度もリボルバーで撃った事は無い（そもそも実銃を持った事すら無い）が、かつての仲間が使っていたのを思い出し、ふと手に取って見たのだが——重い。レプリカのそれとは比べ物にならない。約一キログラムの重圧が、頼もしさと恐ろしさを両立さ

せる。この一発で人の命を軽々しく奪えると思うと、自然と手に籠る力が強まった。

「シングルアクションアーミーだね。それだったら……えーつと……分かんないや！

hey蓮、『シングルアクションアーミー 使用弾』

「誰がSiriだ。……45ロングコルト弾だな。使うのを拳銃だけにしておいて良かったよ」

「えへへ、てへぺろ♪」

「笑い事じゃないし可愛くない」

蓮がウイキペディアで調べたままに罵倒とともに答えた。

M1873 《コルト・シングルアクション・アーミー》は、正式名称にある通り、生産されたのは1873年からだ。使用銃弾は、45ロングコルト弾。リムレス化された。45ACP弾の全長は1.260インチなのに対し、コルト弾は1.600インチと長めだが、今でも生産はされている。蓮はてつきり銃弾も置いてあると思っていたが、御目当ての銃弾は影も形も無かった。

「弾は？」

「ロッカーの中。はい、鍵」

「ありがとう」

弓道場へと繋がる上り階段の近くにある、南京錠付きのロッカーの中にあると悟は言

う。錠前を外して丁寧ニに探つていくと、開けた形跡も埃もない新品同様のそののパツケージを見つけ取り出した。

ゲートと呼ばれる弾詰まりシヤムが起きないようにするための装置を開き、撃鉄をハーフコックにする半分だけ起こす。シリンドアーに六発リロードし、撃鉄を完全コックに起こして、射撃準備は整った。

「撃つぞ」

「おっけい」

「……下がってほしいんだが」

「大丈夫大丈夫」

一声かけて悟を下がらせ……ようとしたが、余裕ぶっているのか、直立不動のまま悟は蓮を見守っている。狙いを定め、人差し指の腹にトリガーを掛け、円形の的へ——当たる事は無かった。

手首へと伝わる反動に歯を食い縛り、危うくピースメーカーを落としそうになる。もしも手放していたら蓮の顔面が危なかった。緊張に少しかだけ肩が強張っていたのが逆に幸いしたようだ。じんわりと痛む手首に少し顔を顰めながら、一つ大きく溜息を吐いた。

「ふう——つ、想像よりもクルな……」

「へいへいどんまい腰引けてるよー！」

「野球の応援みたく言われても……」

口にガムテープでも貼ってやろうかと本気で思いながら、再びハンマーをコックして狙う。

……心を鋼に、精神を冷徹に。

より巧く、より正しく、弾を導くために、蓮は一つの機械へと変貌し——パドオン、という決して小さくない二回目の銃声を響かせて、銃弾は的の三点ラインのやや左上方向に直撃した。

「ヒューツ、初めてにしてはやるね」

「……リロードに手間がかかるな。やはりマガジンの方が楽か……」

「コンバットマグナムとかもいいんじゃない？ それよりは手間は掛からないし、威力も高い」

「ああ。だが、ここの拳銃達いつらを見せつけられると、ワルサーP38も捨てがたくなってきた。威力こそ低いなが、先達に倣なうのも悪くない」

「ま、そう言うと思つて色々出しといたから、好きなだけ試しなよ」

「そうさせてもらう。だが今は——十二発だ」

「……キミ、ソレが言いたかっただけ——」



以下、ダイジエストでお送りする。

S & W M19 《コンバットマグナム》の場合。

「オレに言わせれば、浪漫に欠けるな……」

「だから言いたいだ——」

S & W M49 《ボディガード》の場合。

「キスでもしているんだな………スピードが、つ、いてる分だけ『道路さん』に熱烈なヤツを——ツ」

「さつきから——」

M1911A1 《コルトガバメント》の場合。

「なあ先生。チャカと段平<sup>だんびら</sup>、どっちが強いと思う？」

「僕の——」

以下、中略。

さて、残る一丁は、かつて前世で愛用し、親友がくれた思い出の拳銃（アレはレプリカだったが）、TT-33 《トカレフ》のみだ。蓮が要望していた通りにシルバーメタリック塗装がされているが、それ以外に目立ったカスタムは見られない。指紋一つ無い、完全新品のトカレフだ。部屋の隅で限りなく小さく縮こまりながら体育座りをして、蓮はそれを手に取った。

トカレフは安全装置の無い拳銃で名高い。……いや、全く存在しない訳ではないが。自動拳銃の多くには、暴発を防ぐために手動の安全装置操作レバーを備えるが、このトカレフにおいてはそれは存在しない。生産性の向上や、極寒による凍結を防ぐため、部品の交換を簡易にするためと理由は多々あるが、なんとも危なっかしい銃である。だがかつてのソ連軍はこれを普通に使っていたのだ。作る方も使う方も、流石はおそロシアといった所か。

(——ああ、酷くしつくり来る)

他の拳銃ではFN Five-sevenが最も手に馴染んだが、このトカレフだけはどこか格別だ。蓮は頼もしさの奥底に、少しだけ寂しさを孕んだ。マガジンへの装填もリロードも既に済ませた。スライドストップパーを落とし、射撃準備は整えられた。蓮は今度は人型的を狙っている。

TT-33《トカレフ》は——というより、使用銃弾の7.62x25mmトカレフ弾の貫徹力は、他の自動拳銃の一步先を行っている。前世でトカレフのレプリカを貰った折に蓮が興味本位で調べた所、とある実験が行われたらしい事を目撃した。厚さ一ミリの鉄板を複数枚並べ、同じ距離から発砲して貫徹力を測るというものだ。

ベレッタM92、グロック17、トカレフが使用され、結果はベレッタとグロックが四枚に対し、トカレフは六枚だったとの事だ。その威力に、度胸が《なくもない》レベ

ルだった当時の蓮は身震いしたものだ。

閑話休題、蓮が狙うは頭部一点。左手で支え、右手で引き金を引こうとして——止めた。

「……違うな」

——そう言い放った瞬間、蒼炎が湧き上がると共に、蓮の姿がジョーカーへと変貌する。

(そろそろ、実銃の反動にも慣れて来た頃だ)

先程まで両手で支えていたトカレフを、ジョーカーは右手だけに持ち替えた。そしてそのまま照準を合わせる。仮想の敵——先日の廃ビルで、釘崎野薔薇が敵対したマネキンの頭を貫通させたように……！

片手撃ち。文字通り片方の手を使つて行かう。ブレを抑えきれず命中精度は落ちるし、反動を抑えきれず銃が吹っ飛び怪我をするケースもあるため危険だ。初心者が絶対にはいけない、これと言つてメリットの無い射法だ。強いてメリットを挙げるとするならば、浪漫がある事くらいか。

——そう、浪漫がある。怪盗において『浪漫』と『美学』は欠かせないセオリーだ。命中精度が低かろうが、危なっかしかろうが、『浪漫がある』という一言で全て覆る。それを追い求めずして何が怪盗だろうか。

どこか妖艶さを感じさせる妖しい笑顔で、ジョーカーはトリガーを引き——その銃口から弾丸がマッハを超える速度で放たれ——パシユンという音を立て、脳天を貫くに至った。

陽炎のような硝煙が、辺りを包んだ。

「やるね」

「うおびつくりした」

「そんな驚く?」

葉莢が地を転がる音を響かせている裏でいつの間にか立ち直っていた悟に、ジョーカーはわざとらしく驚いてみせた。

「んー、こんなに攻撃手段も多くなっていると、『縛り』を組むのも楽になるだろうね」

「『縛り』……何だそれ?」

「あれ、言ってなかったっけ?」

……こういう所があるため、ジョーカーは今一悟を尊敬出来ない。主に人間的な意味で。実力面では不足は無いのだが……どうしてこのような性格になってしまったのだろうかと蓮は思った。

「『縛り』ってのは、自身の行動をあえて制限するもので、術式の能力を向上させる事が出来るよ。逆に『縛り』を破っちゃえば、術式のパワーは下がる事になるけどね。身近

なものでと、HONTERX×HUOTERの『制約』と『誓約』が分かりやすいかな」

「いつになったら連載再開されるんだ」

「ホントにねえ」

ともあれ、これ以上なく理解しやすい解説だった。

「先生にも『縛り』があるのか？」

「うん、あるよ。どんな『縛り』なのかは、言えるヤツと言えないヤツがあるけどね」

「言えるものの例は？」

「一番手っ取り早いのは、『術式の開示』だね。相手に手の内を晒すから、対策を練らせる可能性を上げること繋がりちゃうけど、その対価として、自身は更に身体能力が向上する……って具合かな。まあ『縛り』の特性を利用して、ブラフの可能性を考えさせる事も出来るけどね」

「なるほど……」

ジョーカーは思案しながら、再び的を狙う。

率直に思い浮かんだ事項——もとい『縛り』を、ジョーカーは口に出してみた。

「なら——」

「ん？」

「第一に、命を賭けよう。オレが縛りを破った時、オレは——死ぬ。」

「……つははは。やっぱ君、とことんイカれてるよ」  
悟がケラケラと笑う。

放たれた銃弾は、今度は心臓部分を貫いた。

38.

〈2018年6月26日〉

「All out Attack」

「——はい！ という訳で今日は任務で〜す！」

「……いや、早朝からどうという訳ですか」

「場所は仙台ね」

「今から行くの!?!」

「新幹線予約してるらしいから、いってらっしゃい」

「アンタがした訳じゃないんかい！」

「経費はこつちで落とすとくから大丈夫さ！」

「にしたつて連絡が遅過ぎるだろう……」

という経緯があり、現在高専一年生四人は仙台駅行きの新幹線に、向かい合うようにして乗車している。時刻は午前八時半ごろ。目的地は、仙台でも有名な心霊スポットの

太白たいはくトンネルだ。高専から配布されたタブレットを片手に、恵が今回の任務について語る。

「今回は人命救助と呪霊ほっしよ祓除が目的だ。被害者は、地元の大学生の男性が三人と女性二人。肝試しにと太白トンネルに来た所、呪霊に遭遇。一目散に逃走し、気付けば男性陣だけになっていたとの事だ。ソイツらは救助済みで、今は術師の治療を受けてる。……んまあ大した怪我也無く、精神鑑定だけらしいがな。

だが問題は、女性陣がござって行方不明って事態だ。幸いと言うべきか、通報から時間ほそれほど経ってない。今日の深夜——丑三つ時に行っただとよ」

「頭底辺〇〇Tuberかよ」

「特定の人々を敵に回すのは止めてくれ野薔薇」

「恵、どんな奴らなのか俺にも見せて」

そう言いつつ、恵と対面して座る悠仁が、スマホを片手にタブレットを覗き込む。

「うーん、コイツらどつかで……あつ、そうだ思い出した！ コイツら、ちよつとした炎上系の動画で有名な奴らだよ。こないだニュースでやってた。一応チャンネル登録者が十万人を超えてるんだって」

「……ちなみにソイツらの持つていたカメラから、今回の事件の一部始終が撮影される。現在は消去済みだが、大方アレを編集して載っけるつもりだったんだらうな」

「うーわ、初めて見たけどサムネイルも悪い意味で凝ってんなー。見てよ野薔薇、これとか心霊スポットですんげー罰当たりな事してる」

「マジモンの方かよ！ 底辺Y o u O u b e r j ゃんかよ！」

「だから止めてくれ野薔薇」

「続けるぞ。……まあ、後伝えるべき事は呪霊の階級だけだな。《窓》——非術師の偵

察によると、事情聴取による外見的特徴から、階級は高く見積もつても二級だと。後は、

気配で三級有象と四級無象がバラバラと」

「つまり、術式持ちは居ないってワケね」

「えっ、何で術式が有るか無いか分かんのか？」

悠仁の問いに対し、野薔薇の表情が「コイツめんどくせえく〜く〜」という思いを物語っていた。蓮もその区別がよく分かっていないので、耳を傾ける事にした。野薔薇の雰囲気を感じてか、口を開いたのは恵の方だった。

「……呪霊や呪物、そして呪術師には階級があるのは知ってるよな」

「おん」

「呪霊の場合は準一級と二級を区別するのに『術式の有無』で決めるんだよ。んで、基本的には階級に見合った術師が任務に割り当てられる。

俺は二級だから、今回はお前らを引率する形で任務を進める事になったんだ。五条先



生曰く、『三人を鍛えたいから、よろぴく』だとさ」

「へー、なるへそ。……恵がよろぴくって言ったんの、何かウケるな」

「はっ倒すぞ」

満足したようで、悠仁は背凭れに寄りかかり、じやがりこサラダ味を啄むようにして食べ始める。恵は一つ小さく欠伸をして頬杖をつき景色を楽しみ、野薔薇はスマホで最近の流行やニュースを確認している。そして蓮はというと、魔法瓶とカップを四人分取り出し、それぞれにコーヒーを注いでいるのだった。

「おっ、サンキュー蓮。今日の豆は？」

「キリマンジャロだ」

説明しよう！

蓮が今回使用したコーヒー豆は、アフリカはタンザニア産のキリマンジャロという銘柄のものだ！ アフリカ大陸最高峰のキリマンジャロ山の、標高一五〇〇メートルから二五〇〇メートル付近で栽培される豆だぞ！

キリマンジャロは強い酸味と甘酸っぱい香り、マイルドなコクが楽しめるぞ！ 焙煎度合いで味が変化するのも、愛される特徴の一つだ！

「いつの間に淹れたんだ……」

「今朝の朝食前に。いるか？」

「……まあ、貰つとく。眠気覚ましに丁度良いしな」

「蓮、ガムシロップある？」

「買っておいた。はい、野薔薇」

「気が利くう。ありがと」

そう言いながら、皆々にコーヒーを渡していく。最初に感想を呟いたのは恵だった。

「……美味しいな」

「はあくやつば。この味知っちゃったら私、自販機の缶コーヒー飲めなくなるわあ……」

恵と野薔薇が蓮のコーヒーを口にしたのは二回目だが、初回と変わらず蓮のバリスタとしての腕前に驚嘆するばかりだった。普段は好んでコーヒーを飲む訳ではないが、蓮のそれなら毎日飲んでも良いと思えた。コーヒーで心が安らぐというのは、生来初めての事だったのだ。

「ぐええ、にぎやい……」

「何でガムシロップ入れなかったんだよ」

「いや、らつてうらつくコーヒーってかつこいいらろ」

「何言つてんのか分かんねーよ」

「吹き出さなくなったあたり、成長したな悠仁」

「何で雨宮は分かんだよ。つてか、もし吹き出してたら俺危なかつたじゃねーか！」

「うう……ぼりぼりザクザクむしやむしや……」

「じやがりこで口直ししてる奴私初めて見た」

「野薔薇もじやがりこ食う？」

「食べる」

「……つたく。オイ、そろそろ着くぞ」

「えっ、もう？」

「駅前で車待たせてるから、途中まではそれに乗るぞ。良いな」

「うーい」

「こーゆー風に指示出してるのを見るとさ、恵って何かお母さんみたいよね」

「あー、分かる。ちよつと厳しめのな」

「誰がお母さんだよ。せめてお父さんにしろよ」

「いや、何かちびまる子ちゃんのお母さんみたいだなーつて」

「かつぼうぎ割烹着ぎ着て、髪をちよつとふわつとさせたらもうそんな感じよね！」

「それは遠回しに俺を『うに』って言うてんのか?」

「さ、行きましょアンタ達!」

「おうよ」

「了解だ」

「オイ待てコラ座れお前ら」

「さっさとしろよ。遅れるわよ」

「解せねえ……」

39.

雲行きの怪しい山の中、四人の少年少女がトンネルの前で佇んでいる。赤いパーカーを制服の中に着込む虎杖悠仁、一番制服のデザインがオーソドックスな伏黒恵、金槌を握りつつも眉を顰め面倒臭そうにしている釘崎野薔薇、リロードの終わったトカレフを、新たに着用した右脇のホルスターに収めているジューカー<sup>宮蓮</sup>だ。ジューカーのその様子を見た悠仁は、童心に帰ったかのように蓮のトカレフを見ていた。

「ジューカー、それ銃持ってんの!? すっげー! 良いなく! めっちゃ怪盗っぽい!」  
「だろ?」

五条先生に言えば試し撃ちくらいはさせて貰えると思うぞ。だが実戦で使うのはお

勧めしないな。やはり費用がな……」

「でも外国だったら結構安値で売ってるって聞いた事あるよ?」

「呪具として使えるように銃弾一発一発に呪いを込めてて、その分手数料が嵩かさんでいるんだ。銃本体もオレの貯金から崩したし。諭吉が羽生やして空へ旅立っていくのを、涙ながらに見守らなければいけないくなるぞ」

「……試し撃ちで止めとくわ」

「それがいい」

「ほら、ぱぱと済まして牛タンよ! ボサツとしてんなよ!」

「へいへーい、仰せのままにと。……あー、まだ腹痛えや」

「食べ過ぎだと言ったろうに……」

雑談も終わり、改めて全員がトンネルへと向き合う。

——凡およそ十日前ほどにもなる、廃ビルでの戦い……その時の雰囲気よりも『黒く』『暗い』。だが今更、この程度で固唾を飲むような者は、この四人の内には誰一人としていなかった。悍おそましきは感じるが、所詮はその程度の『暗さ』なのだ。

怖気付く事はおろか、冷や汗一つとして存在しない。四人は一斉に歩みを進める。

カツコツ——カツコツ——と、四人分の靴音がトンネル内に響いている。各々はすでに臨戦体勢だ。右手で《剛巖こうげん》を遊ばせ、《屠坐魔ととま》を持つ右の肩を回し、両手で犬を模

り、ポーチから二本ほど釘を取り出す。先頭は恵で、「玉犬」に搜索させようという計画なのだろう。さながら警察犬のようだった。

長いトンネルを抜けると樹海であった。本日の仙台は曇り空で、日中だというのに樹海はかなり暗い。雨の一つでも降って来そうな雰囲気だ。そうなってしまうえば、救助は難しいものになるだろう。うかうかしてはいられないが、ここで焦ってしまうえば、却つて本末転倒の事態にもなり得る。ジョーカーは冷静だった。

森の奥深くへと更に歩みを進める。耳を澄ませ、草木の擦れる音を聞き分ける。もはや『道』と呼べるものさえも存在しなくなっている。蝉の声はまだ聞こえない。

——何分歩いた頃か、恵が携えていた【玉犬・白】の尾の毛が逆立ち始めたのは。それを見て、ジョーカーの目も異常を感知した。

「——呪霊がいる」

「こちらでも視認した。……近いな」

「うえつ、どい？」

「シッ」

素つ頓狂な声を上げる悠仁をジョーカーが引き寄せたのは正解だった。口元を手で塞いだのは杞憂となったが、悠仁の声に呪霊達が反応していたのだ。振り向く時の速度が常人のそれでは無かったが、どうにか各々が木を影にして隠れられたようだった。

(わ、ワリ、ハマした……)

(問題無い。それよりも、音を立てるなよ)

手を離し、カバークションの体勢から、ジョーカーは機を伺っていた。彼奴等の視線が全くこちら側を向かない、向いていない瞬間を――。

彼奴等との距離は、先程の悠仁の声に反応したため更に近付いている。目視のため曖昧だが、凡そ10〜15メートルと言ったところか。ジョーカーは剛巖をコート内側のナイフ用のホルスターを兼ねたポーチに仕舞った。

胸部と脛を横切るような傷痕のある、能面をホチキスで被せられた、痩せぎすの褐色……否、焦茶の肌を持つ人型。ジョーカーの膝丈程度の身長しかない、襤褸いドイツの民族衣装を着る西洋人形の呪骸しゅがい。空をへつほと漂う、異様に爪の長く鋭い、無理やり新たな生命として生まれ変わらされたような人肉製の雲丹――否、もはや肉塊と言うべき物体が二体。片方はかなり小柄だ。以上が、ジョーカーが視認できた計四体の呪霊の詳細だ。

(流石、仙台でも有名な幽霊スポットなだけはある……)

太白トンネルには、かつては電気鉄道が走っていた。故にトンネル内には、人身事故や自殺によつて死亡した者の怨霊が浮世を彷徨っていると噂されるほど、心霊スポットとして知名度が高い。やけに人、もしくは人だったもののビジュアルの呪霊が多く見ら

れるのは、それ故だろうか。

(こつからどうすんだ?)

(——決まっている)

……静寂。聞こえるのは木々の囀りと、小鳥の騒めきのみ。枝はおろか、枯葉さえ踏み砕く音は無い。何も聞かせない。何も感じさせない。そこに誰かが居るといふ、その考えの全てを否定させる……そこには誰もいない。ここには誰もいない。何も、居ないのだと……。

「アツイヨオオオイタイヨオオオオ」

「あめチャン イっぱいたベル」

「いらぬい カラ スてちやおウ」

そう判断した呪霊達が背を向ける。微かに感じた呪力の行き先を、真反対の所にいる物と勘違いした。三人にアイコンタクトを送りつつ、振り返ったその瞬間<sup>瞬</sup>を、ジョーカーが低い体勢から一息に突く。

「速<sup>すみ</sup>やかに黙らせるのさ……」

グローブが闇夜に紅蓮の軌跡を描き、人型の肩へと飛び移った。呪霊一同は驚愕に目を見開き、ジョーカーを迎撃しようと構えるが、もう遅い——『縛り』で更に強化された筋力を以って、その能面をホチキスごと引き剥がす——!



「——その本性、暴いてやる……！」

ぶちぶちブチブチベリヤツ、と不快な音を立てさせながら仮面を剥がし捨て、呪霊が顔を押しさえ苦しみ悶えている。引き剥がした能面を追うように天を舞いながら引き金を引く。果たして放たれた一発は、見事に脳天を貫くに至るのだった。

だが着地地点は針の山。ジョーカーは呪霊達が着地後に生じる隙を狙っているの分かっている。着地イゴール……もとい、イコール『死』と考えても何ら間違いはない。——だが呪霊達は大きな勘違いをしている。根本的な大間違いを犯しているのだ。

「ウ——だりやあつ！」

「【玉犬】………！」

「すうれいじゆほう 芻霊呪法——かんざし 【簪】」

——ジョーカーには、頼りになる仲間がいる。

小さな肉塊は出刃包丁で断斬され、大きな肉塊は二匹の犬に噛み裂かれ、西洋人形は頭部を貫かれ破壊され……そうして、祓除は遂行された。

「うっし、楽勝楽勝！」

「んまつ、当然の結果ね」

「ほら、次行くぞ。【玉犬】、引き続き人の匂いを辿れ」

『ウバウツ』

## 40.

草木生い茂る森の中を、当てもなく走る。走り続ける。走らねばならない。いかに脚が重かろうが肺が千切れようが、例え怪我を負った友人を背負ってしようが、自分は決して追いつかれてはならないのだ。パーカーを羽織ったシヨートパンツの女性は、Tシャツにジーンズの彼女の肩を組みつつも、昼だのに夜のように暗い森を必死に走っていた。

事の発端は、仲間内である男の一人からの提言だった。『仙台一の心霊スポットに手を出してみよう』という、何とも安直で、後先も考えないような提案だ。前者の女性は靈感が強く臆病な性格だったため、提案を取り下げようとするも、後者の友人の女性に激しく推されてしまい、結局賛同せざるを得なかった。友人の彼女は好奇心旺盛だったのだ。……否、見境が無いと言うべきか。現に今、命の危機に晒されているのだから。そして当日である今日午前三時前……草木も眠る丑三つ時と呼ばれる時間帯に、わざわざ危ない場所へと足を運んでしまった。そして男性陣は、怖気も知らずにカメラを回し、ずかずかと領域に踏み込んだのだ。トンネル内は嫌に冷たい風が吹いていただけだったが、何も起こらなかつた。……起こつたのは、トンネルを抜けて数分歩いた直後だった。

『何だよ、何も来ねーじゃん。ツマンネー』

『ねみい……ふあ〜』

『なあ、呼びかけたら何か出てくつかね？』

『おつ、言い出しつぺ』

『えええ〜マジかよ！ 言わなきやよかつたあ……』

『……ねえ、もう帰ろ？ 何か寒いしき……』

『ビビってんのかよ？ 大丈夫だって、どうせ何も出やしねーよ』

先頭を男三人、女二人という陣形で固めて歩きながらの会話だった。

嫌な予感がする。

引き返せと本能が叫ぶ。

『ねー、誰かいませんかー!!』

『はーあーい。なーんつつてな！ はははは！』

『もー、怖い冗談やめてよー!』

『いやー悪い悪い。出来心でつい』

『ね、ねえつ。ほんと、帰ろうよ……』

『何だよ、空気読めよ。連れねえなあ……いたつ』

先陣を切っていた男が急に止まったので、後の四人も止まらざるを得なくなつてし



眼球を思い出して、女性は一度立ち止まって嘔吐した。鼻を貫く酸の臭気が辺り一面に漂っていく。そして崩れるように倒れ伏して、身を擲つなげう。

もう限界だった。女性はマラソン選手でもなければ、特段身体能力が高いという訳でもない。にも関わらず、人を一人抱えたままこれまで走って来れたのは、アドレナリンの分泌によるものか。はたまた絶対に生き延びてやるという執念故か。大きく呼吸を繰り返す。

今が何時で、ここが何処なのかすら分からない。何時間走ったのかは数えたくない。ただ、生き延びたかった。自分を助けたかった。友人なんて見捨ててもよかった。

彼女が起きた所で、もう以前同様の関係には戻れないだろう。ギスギスして……最悪、絶交を持ち掛けてしまうかもしれない。そして月日が過ぎて、今更になって後悔するか、これで良かったと思えるか。それは、月日が過ぎなければどうしようもない。だが、縁は切りたくないなあと、漠然とそんな事を考えていた。

どうにかして木に寄りかかり、仰向けの体勢になる。靴も、お気に入りのパーカーもボロボロだ。何と最悪な日なのだろう。横の彼女を見ると、掴まれた部分と血液とシャツが溶け合っており、見るも無惨な光景だった。治るのだろうか。仮に治ったとしても、痕が残ってしまうのではないだろうか。ふと、そんなことを考えていた。……否、現実逃避をしていた。

「み い つ け た」

……死神が、すぐそこまで迫っている。

その現実を否定したかった。逃げたかった。だが不可能だった。

女性は、自身の運命を悟り、呪った。

(……ああ………死ぬんだ)

淡々とその事実を理解した。

何をする訳でもない。抵抗するための気力など、既に微塵も残っていない。

『奴』に襲われて、死ぬ。ただそれだけだ。友人を巻き添えにしてしまう事は、申し訳ないと思う。けれど、自分なりに頑張ったのだ。必死に引き連れて、どこかも分らない場所を走って逃げていた。しかし『奴』の執念深さは底知れない。どうしようもないのだ。仕方ないだろう。

もう走れない。

もう歩けない。

もう疲れた。

眠ってしまいたい。

死ぬのなら痛くない方がいいな。

……ああ、死にたくないなあ。

せめて、せめて。

颯爽と現れるような、そんなヒーローがいてくれたなら……。

「……誰か、助けてよお………っ」

誰が聞いている訳でもない、蚊の鳴くような声で呟いた。

当然の如く、返事はない。諦めて目を瞑る。瞼の裏に溜まっていた雫が落ちる。『奴』  
 のその毒手が、自分の頭部を鷲掴み、激痛と共に蝕んでいくのだろう事を、女性は想像  
 して――

――。

……。

………一向に何も起こらない事に気付く。

何秒、何十秒目を瞑っていただろうか。激痛が頭部を襲わない事を不思議に思った女性  
 は、片目を少しだけ開き――そして驚愕に両目を見開いた。

そこに立っていたのは、顔面トマト目玉の怪物ではなかったのだ。そしてであろう事か  
 その怪物が、トマト目玉の怪物を抑えていた。まるで、女性を――自分を護ってくれて  
 いるかのように。

別の怪物である事には間違いはない。だが不思議と恐怖は無かった。あの赤い怪物  
 とは違い、この騎兵の怪物を――そして隣で翻る、黒いコートの男を――

「……………あ、ああ……………」

奇妙なほどに、頼もしいと思えたのだ。

「切り拓け、ベリス」

「ウオオオオ——ツツ!!」

41.

ソロモン七十二柱の一柱、赤軀の巨馬に跨る墮天使《ベリス》。ジョーカーのペルソナの一体だ。巨馬を差し引いても、隻腕の無限赤眼の呪霊、ジョーカー、女性二人よりも背が高い。故に体格的なアドバンテージはベリスの方が上だ。……………だのに。

「オオオオオッ」

「あ そぼ」

……………そのベリスが、逆に押されている。

現在ベリスは、右手に持つ黄金色の三叉槍さんさそうを呪霊に突き出しているものの、一向にそれ以上進む気配が無い。それどころか、先程から何やら穂先からじゆううとうと音がする。まるで熱せられた鉄が、冷却水に一気に浸されたかのような音が……………。だがそれす意に介さず、ベリスは更なる呐喊とっかんを試みるも——突如として、槍は全く的外れである地を突き刺した。



槍を見ると、中央の穂先が融解しているのが分かる。そしてあの呪霊を見ると、たった片手で白刃取りを為したその穂先が、液体となつてポトポトと地に落ちて行つていく。何故にか、ベリスの槍はあの呪霊によつて溶かされてしまったのだ。

「——ッ、《ガル》！」

スキル使用の判断を下したのは正解だった。無限赤眼は、驚異的な跳躍力と速度を以つて、ベリスと巨馬を驚掴もうとしていたのだ。

ベリスは本来、《ガル》のスキルを習得しない。だが、ペルソナ合体によつて作成されたならば話は別だ。合体によつて生み出されたペルソナは、合体元のペルソナのスキルを一部受け継ぐ事が出来るのだ。

果たして、小規模の旋風つむじかぜによつてその目論見は外れ、吹き飛ばされながら手のひらから着地する事になるのだが——そこに生えていた草や枯葉を、またしても融解させるに至つた。

（この呪霊、術式じゆしきを持つて、いるのか？ その掌は王水とでも言いたいのか。だが、二級以下は術式じゆしきを持たないはず……）

「無事か、ジョーカー！」

遅ばせながら参上する、悠仁と恵と野薔薇。

二分ほど前、四人が四体の呪霊を屠つてから三分後の事だった。【玉犬】は、比較的

しい人の匂いを二人分感知した。そして、嗅ぎ慣れた呪いの臭いも、その鼻腔を刺激したのだ。玉犬の後を追いつつ、ジョーカーもまた目を凝らしていた。

ジョーカーの目は、謂わゆる『鷹の目』という物に近い。前世で怪盗業を営んでいたジョーカーは、ラヴェンツァの主人であるイゴールという長鼻の老人から鷹の目——《サードアイ》を貰った。これがまた便利な代物で、怪しい部分をピックアップしたり、敵の強弱を判別したり、足跡を視認出来るようになったりと、何度世話になった事か。

そうして走っている内に、ジョーカーのサードアイが異変を感知した。もはや布切れと言った方が良い死装束を纏っている呪霊、つまり無限赤眼の呪霊に——赤い炎が滾たぎっていた。

サードアイは、五条悟の六眼りくがんのように、術式を看破する能力は無い。精々が敵の強弱をオーラとして見分けられる程度だ。自身よりレベルの低い者は水色に、同等レベルの者は黄色く、そしてジョーカーよりもレベルの高い強敵は——オーラは赤く燃える。

それを察知したジョーカーは、ある一体のペルソナを呼び出した。先程のベリスである。犬である玉犬よりも、同等レベルのウサイン・ボルトよりも速く疾走できる生物に跨またっているベリスこそが適任だと思っただのだ。

そして現在に至る。

「オレは大丈夫だ！ 氣絶してるが、行方不明だった二人も見つけた！ だが一人軽症

を負ってる。治療がしたい、皆一分くれ！」

「悪いが四十秒で頼む！」

「無茶を言う……！」

追加でジョーカーは情報を提供する。

「その呪霊には術式がある！ 触れた物を溶かす能力のようだ！」

「えーっ!? 恵、術式無いつて言ってたじゃん！ あるんじゃない、アレ!」

「報告には二級と書いてあった。《窓》の報告ミスか……? 意図的なものでない事を願いたい……いや、そうだとしても何のメリットが」

「何でもいいつつーか、ベラベラ喋ってつとやられるわよ！ 時間稼ぐんでしょ!」

先陣を切ったのは恵だった。兎にも角にも、まずはジョーカーや行方不明者二人と距離を置かせなければ危険だと判断した恵は、新たな式神を召喚するため掌印を結んだ。

【鶴<sup>ぬえ</sup>】では、周囲の木々を気にしてしまい、まともに戦わせられないだろう。であればと、

恵は片手で、蛇頭を表した——!

【大蛇<sup>オロチ</sup>】

アナコンダのような巨大な蛇が体当たりし、木々を薙ぎ倒しながら呪霊を大きく吹き飛ばした。その距離凡そ6メートルという所だが、死装束を更に襤褸<sup>ぼろ</sup>にしつつ、木に寄り掛かりながらも呪霊は立ち上がっていた。

どうにかジョーカーとは距離を置けたが、恵が大蛇の三角形の頭部を見ると、鼻の上にはほんのりと煙が立っているのが分かった。おそらく体当たりの際に、ほんの少しだけ掌に触れられてしまったらしい。もしくは、体全体が術式発動のキーなのだろうか。警戒すべきは『決して呪霊に触れない事』と、恵は改めて認識した。

「……良くやった」

礼を言いながら影に戻させて、改めて吹き飛ばした方向へと走る。

追撃は悠仁だった。その圧倒的脚力で大きく跳躍し、『屠坐魔』を逆手に持ち替えて刺突——という寸前で体に捻りを加え、振り翳された掌を危うく回避する。

しかし、ただ回避するだけでは終わらない。悠仁には持つて恵まれた膂力に加え、筋肉の柔軟性すらも持ち合わせている。着地からコンマ三秒、バネの如く飛び出して更なる刺突を試みる——そしてその裏（呪霊からしたら面前）では、野薔薇が釘を三発ほど刻撃していた。

釘は、顔面を狙った一本は呪霊の右手にて奪われ融解してしまっただが、一本を呪霊の唯一の頼みである右腕の肩に、一本を背後の木に突き刺した。短剣は肋骨で守られていない横腹を突き刺し、文字通り断腸させ、横薙ぎにする事で掌に触れられるリスクを回避した。

「避けるよ悠仁——芻霊呪法【簪】！」



る虎と薔薇。そんな中、最終確認のため、恵は倒された木と潰れたであろう呪霊の痕跡を瞥見し——野薔薇の【簪】によって落とされた腕が、ポツンと存在している事に気付いた。

呪霊は原則、祓除される時、紫煙となつて霧散する。霧散する事こそが、祓除されたという証左なのだ。つまり、ここに腕が在るといふ事は——

「周囲を見張れ!!」

恵が声を荒げて二人に喚起するが、もう遅い。音も無く二人の背後にて、挟み撃ちの形だというのに、余裕そうに呪霊は立っていた。

「ぼおる」

瞬間、呪霊の肥大化した眼球の一つが弾き飛び、釘崎野薔薇の頭部へと——

「伏せろ野薔薇!!」

「うおわっ」

——着弾する事はなく、悠仁の本能が生命の危機を訴え、直感となつて野薔薇を庇つた。幸いにも掠めたのは悠仁のフードだけだったが、当たり所が悪く、頂点に穴が開いてしまつている状態だった。実際に着弾した樹幹は、その部分から融けている。どうやらあの呪霊の術式は、融解出来る物質を選ばないらしい。あのまま頭部に直撃していたのなら……想像したくもない。

「つぶねー！ アイツまだ生きてたのかよ！ 大丈夫、野薔薇？」

「——っ、問題無いからどけ！ 次来んぞ！」

「もつと あ そ ぼ」

立ち上がる野薔薇。怪我は無いらしい事を確認しながら、悠仁は無限赤眼の呪霊の分析を行なっていた。

（ジヨーカーはアイツの術式が『物を溶かす』術式って言うってたけど、その範囲は無制限って訳じゃねえ。だったら、アイツ素足だから地べたがボロボロになつてないとおかしいし、アイツを斬りつけた時点で、俺の屠坐魔は溶かされてるだろ。……借りモンだから別の意味でホント危なかったけど。

多分物を溶かせられる範囲は『掌』、もしくは『腕全体』と、あの飛び出して来る目玉。腕はもう無いっつーか、野薔薇が落としたから警戒しなくても良いか。踏んづけないようにすれば良いだけだし。……もつとあそぼって言うってたし、多分もつと沢山出て来るんだろーな）

「悠仁」

「ん？」

野薔薇が、自身の制服のフロントを開けながら悠仁に声掛ける。その時点で、悠仁は自身の役割が口に出ずとも心で分かり、悠仁はニヤツとした。

「——ウシ、バツチ来い野薔薇！」

「野球じゃねーんだよアホ悠仁！」

背を向ける男を見て、何をする気なんだろうかと呪霊は率直に思った。呪霊は野薔薇に術式がある事は理解していても、その全容を理解した訳ではない。知性があれば、五寸釘に藁人形を用いる呪術である事は連想出来るだろう。だがこの呪霊にそれは無かった。腕を落とされてなお『遊ぶ』事しか頭に無い無限赤眼に、それを考えるほどの能は無い。目玉を再度、今度はマシンガンのように大量に放出しようとして——

「【蝦蟇<sup>がま</sup>】——！」

首を、胴体を、右足首を、ねばねばとした液体を伴う気色悪い物が巻き付き、目玉があらぬ方向へと飛んで行く。見ると、それは舌である事が分かった。恵の式神の一種——【蝦蟇】という三匹の蛙の舌が巻き付いて、射出線を大幅に攪乱させているのだ。無い歯を呪霊は噛み締めた。更に、呪霊にとっては不幸な事だが——

「ダメ押しだ。エンジェル、『マカジャマ』」

——ジョーカーによる治療が終了し、片方の女性にあつた傷は、既に跡形も無く消え去っていたのだつた。

さて、肌と衣類の対比が8：2という魅惑的なボンテージを着る女性の下級天使エンジェルが、呪霊が『先程まで何をしたかったのか』を忘れさせる。



《マカジャマ》は、一定時間、一定期間の『記憶を奪う』事で、敵のスキルもとい術式の発動を阻害するスキルだ。果たしてスキルには効き目があったようで、発射されるはずだった大量の目玉の膨張が収まっていく。そしてそれだけの時間があれば、野薔薇の攻撃は容易く通り得る。

「ナイス恵、ジョーカー！　せ——えのツ」

「芻霊呪法——」

悠仁の協力もあり、野薔薇は普段では考えられないような高度の跳躍を可能にした。簡単な理屈だ。バレーボールのアンダートスの要領で、悠仁が野薔薇の跳躍力に更なる加速を掛けただけ。しかしそれで充分だった。——切り落とした右腕に、野薔薇はついに到着したのだ。そして左手に持っていた藁人形を腕に重ね、芻霊呪法の真髓を發揮する——！

「共鳴り」！！

刹那、呪霊の心臓と肉を突き破って出る巨大な五寸釘。絶命には至らなかったが、これには堪らず、呪霊も奇声を上げて苦しみ悶える。これまで一度たりとも突かれなかったその膝を突かせる事に成功したようだ。

ジョーカーはトカレフを構えながら、悠仁は屠坐魔を順手に持ち替えながら、恵はいつでも式神を召喚出来るように掌印を結びながら、野薔薇は中腰になり機を窺いなが

ら、全員が呪霊の周囲へと到着した。

H O L D   U P !

「うう   う   ああ   たすけ   て」

「……命乞いつてワケ？」

呪霊から一番近い野薔薇に向かって首を垂れ、野薔薇の問いに首肯する。先程の驚異的な雰囲気からは信じられないほどに弱気になっていた。

「けど残念。私ら、最初ハナっからテメエの事赦すつもりはねーんだわ。『助けて』だあ？  
女の子に手出して  
人の命奪おうとしといて何様のつもりなのよ。

……つたく、白けたわ。ジョーカー。メ締はアンタにあげる」

「いや、ごめん。今は無理だ」

「はあ？   何だよ」

「……縛りで今、ペルソナを使えないんだ。決定打を与えられない。だから——」

悠仁が『縛り』という単語に対し疑問を抱くが、二人は無視した。一方で恵は目を細めてこちらを睨んで……否、あろう事かこの状況で寝ようとしていた。それに気付いた悠仁が「えーっ!?   何してんの恵!」と大声で叫んだ事で薄らと目を覚ましたが、欠伸を隠そうともしなかった。当人である呪霊は、何やら困惑しているように見えた。

ジョーカーは昨日の25日、縛りを合計で七個ほど課した。内容を記述すると、以下

の通りとなる。

縛り①：以下の縛りを一つでも破った場合、雨宮蓮は死ぬ。

縛り②：術式もしくは縛りの開示を行う場合、偽りなく情報を伝えなければならない。

縛り③：ペルソナのスキルを使用した場合、それが以前に召喚したものであるかどうかに関わらず、雨宮蓮は一分間ペルソナを召喚出来ない。

縛り④：自身のレベルよりペルソナのレベル数が一つでも高いペルソナのスキルを発動した場合、以降七十二時間経過するまで、ペルソナを召喚できない。

縛り⑤：ペルソナの耐性において、属性攻撃無効、吸収、反射は一切適用されない。この場合、以上3つの属性に対する恩恵は、全て『耐性』へと降格する。

縛り⑥：過失であれ故意であれ、雨宮蓮及びペルソナが『呪霊を視認・知覚できない者』を殺害してはならない。

縛り⑦：回復系のスキルを使用する際、雨宮蓮は《魔術の素養》等のコスト軽減の効果の恩恵を受けなくなる。また、雨宮蓮はペルソナの回復スキルを介さずに反転術式による治癒ができない。

今回の場合、縛り③が適用され、ジョーカーは現在ペルソナを使わずにいた。故に――

「――皆で殴る」

「おっけ！」

「つまり、総攻撃って事だろ」

「目ん玉ブチ抜く！」

ジョーカーが縦横無尽に切り裂き、悠仁が臂力を以って引き裂き、恵が【玉犬】らに抹殺を指示し、野薔薇が五寸釘を刻撃する——！

Kneel, Underling

金槌を背負い、左手の指を鳴らす——瞬間、紫苑の血飛沫が舞う。

まさに、今度こそ完全に呪霊が祓除された事の証明だった。

42.

〈昼↓放課後↓夜↓深夜〉

「生温いですね」

「はい……?」

ベルベツトルームに召喚された蓮は、ラヴェンツアの発言に首を傾げるばかりだった。

「ええ、ええ。トリックスターの活躍を見るのはとても気分が良いです。生き生きとしている貴方を見るのは実に。ですが少々、『甘い』ではないでしょうか？ ペルソナ全書に頼りきりになっていないでしょうか？」

「……まあ、確かにそうではあるけど」

「要するに——『縛り』と共に、あなたに試練を課します。トリックスター、こちらを」  
 そう言つてラヴェンツァは鉄格子の近くに寄り、左脇に抱えていた黒い表紙の辞書——ペルソナ全書とは別の、白い表紙のそれを蓮に見せる。鉄格子越しに手渡された蓮は、とりあえずページを捲つてみるが、幾ページにも渡り、無限に純白が続いているだけだった。……蓮はそれに、途轍もなく嫌な予感がした。

「……ら、ラヴェンツァ。これは？」

「はい。新たな全書——いわゆる、裏・ペルソナ全書と呼称しましょうか」

「すまないラヴェンツァ七時半に空手の稽古があるんだオレは帰る」

「今日は休んでください。それに、貴方にとつても悪い話ではありませんから。だからその仮設ベッドに寝転がっても現実世界の貴方が起きる事はありませんよ」

死んだ魚のような顔をして蓮が渋々起き上がる。

ペルソナ全書とは、蓮が契約したペルソナの能力を予め記しておいた事典の事だ。勿論蓮が使うには、ペルソナを集めるか、ペルソナを合体して取得するなりして、蓮自身

で登録せねばならないが。

「ワイルド」の素養を持つ者のサポーター兼、力を司る者——ラヴェンツァ談——である彼女は、（金に物を言わせれば）全書からペルソナを呼び出し、蓮のいわゆる『手持ちペルソナ』に加えさせる事が出来るのだ。

だが、ペルソナ全書のコンプリートには多大な労力と時間、そして金を要する。しかも蓮は、最後の項目を残したまま——つまり、このペルソナ全書は未完のままなのだ。前世では、蓮自身の技量がまだ低かった事やペルソナのポテンシャルを過小評価して結果的に見誤っていた事もあり、当時蓮が想定していたよりもそれらが掛かったため、蓮は（完全に自業自得かつ逆恨みだが）あまり全書の登録に良い思いを抱いていない。嫌悪感を抱いていると言っても良い。二度とあんな作業という名の苦行を繰り返したくないと思っていたのだ。

——そう思っていたのだが。全て白紙のもう一冊という現実を見せつけられて、蓮のテンションはどん底に落ちていた。

「こちらが、この世界におけるペルソナ全書です。……この世界には《パレス》や《メモントス》といったイセカイが存在しないため、表のペルソナを掛け合わせて作成する事になります。」

勿論、以前の世界で紡がれたこの表も使用出来ませんが、それでは貴方を更に強くする

には至りません」

「……つまり？」

「——私と貴方との間に『縛り』を設けましょう。今後、貴方は『ペルソナ合体を行う時以外で、ペルソナが破壊・消滅した場合、そのペルソナは、二度と全書による再召喚を実行出来ない。また、破壊されたペルソナを、合体により新たに作成する事も出来ない』。その代わりに、私は『ペルソナの再召喚にかかる費用を下げる』……いかがでしょうか？」

「悪くないが……二度と召喚出来ないのは痛いな」

今は蓮の技量が至らないために使用を禁止されているものの、全書を捲れば、現在の手持ちの者とは比較にならないほどの強力なペルソナも、確かに存在する。しかし、宿儺の実力を知ってしまっている以上、これ以上行動に制限が掛かるのは……と思った所で、ラヴェンツァが口を開いた。

「——トリックスター。私は貴方が強くなろうとする事に関して、一切の怠慢を享受致しません。これも全ては、貴方が『最強』<sup>五条悟</sup>を超えるための処置故<sup>標</sup>に、どうか、受け止めていただきたいのです」

「……そうか」

ラヴェンツァは、蓮が戦う事を良しとしていない。だがそれはそれとして、蓮の『戦

いたい』という意思は尊重……というより、一種の諦めの境地にある。

誰が何を言った所で、兩宮蓮が己を曲げる事はない。親友である虎杖悠仁でも、盟友であるラヴェンツァでも、蓮を止める事は出来ない。ならばせめて、蓮が苦しまぬようにしたいのだ。そしてそんなラヴェンツァの思いを、蓮自身も分かっている。

「分かった。『縛り』を組もう」

「——ありがとうございます、マイ・トリックスター。」

……ふふ。取引成立、ですね」

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『愚者』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。



〈2018年6月27日〉

〈丑三つ時〉

「虚偽申告された準一級呪霊……ね」

「担当の《窓》に問い合わせましたが、何も知らないとの一点張りで……申し訳ありません」

「いや、いいよ伊地知。どうせ上の仕業だろうしね。」

けれどそれはどうでもいいんだ。最も重要なのは、準一級呪霊と遭遇しているにも関わらず、行方不明の二人を救出しつつ、誰も目立った怪我無く生還した事だ。いやあ、良かった良かった」

「……上層部は、彼……雨宮蓮君の存在を、懸念すべき人物として扱っているのですか？」

「そうっばい。……まあ、そうだろうね。かく言う僕も、ちよーつと警戒してる。地味っばい雰囲気醸し出して周囲に同化しつつ、肚はぢの底を見破らせないようにしてる。あれはプロだよ。ま、そっちがその気なら、僕も僕で隠蔽し続けるけどネ。」

察するに、素性、能力、そして過去……何もかもを隠してる。僕の親友と同じだ」

「親友……夏油傑の事ですか？」

「いいや。……ああ、伊地知には言っていなかったっけ？」

「ご友人は二人いらつしやるとはお聞きしましたが、それ以上は……」  
「そう。傑じゃない方さ。」

日本に五人しか存在しない特級呪術師の一人。そして僕の数少ない旧友。天内理子  
護衛抹消作戦時に、彼女の母代わりだった黒井美里を庇い死亡した――

——明智吾郎だよ」

P E R S O N A 5 i n J u j u t s u K a i s e n  
L e t u s s t a r t t h e g a m e .  
# 7 O a t h

## # 8

44.

〈2018年6月29日〉

〈放課後〉

本日は晴天なり。時刻は午後四時を過ぎた頃で、まだ外は明るい。呪術高専のグラウンドには、日差しが叢雲むらくもから顔を出して伸びている。

そんな中、高専生一年生徒達は、午前の座学、午後の鍛錬を終え、茹うだるような初夏の熱気にへばっていた。その光景が見ていないかのような素振りです、気楽に五条悟が授業終了の合図をする。

「はい、本日の授業終わりー！」

『ありやとーごーぎーしたー……』

皆が皆、制服のまままで気怠そうにしている。

語勢も無いまま返事をして、虎杖悠仁は蹲うずくまり、釘崎野薔薇は制服や髪が汚れるのも構わずへたり込み後ろに倒れ、伏黒恵は膝に手を突いて呼吸を整え、雨宮蓮は一息ついて制服の襟を仰ぎながら左手で汗を拭っている。

悟以外全員の呼吸が荒く、汗が制服にへばりついており、不快感が一年生を襲っているのだった。

「はーっ、あつぢいゝ……。今何℃なんだよ……」

「……気温30℃だと」

「どーりであちい訳だよ……。なあ、起きろよ野薔薇。流石にだらしねえって」

「うっさい……。ッあゝーも、う死ぬゝー、私もゝう無理……。ああ、パトラッシュ、疲れたろ……?」

「その犬はヤバいって、戻ってきて野薔薇ーっ!」

「はは、お疲れ様」

永い眠りにつこうとしている野薔薇をさて置いて、蓮は石階段に置いてあるクーラーボックスに入れていた、各自持ち込んでいたお茶やスポーツドリンクと、塩分補給用タブレットを取り出し、皆々に渡していく。

「おつ、蓮。さんきゅ」

「はあ、ーっ。悪いけど蓮、そこ置いて。後で飲むから……」

「今の野薔薇めつちやお爺ちゃんみたい」

「……………そこは何でお婆ちゃんじゃないのよっ、うりや」

「あだだだだっ! 悪かったって、謝るから脇腹わきばた抓つかむの止めてえええ!!」

「うるせえよ虎杖。気温が上がる」

「叫んだだけで!? 俺松岡修造じゃねーし!」

「本人それ言われるの嫌だつて知ってたか?」

「えっ……あつ、ゴメン。」

「……いやこれ言い出したの恵が原因じゃね?」

「……ふう、水が沁みる……」

「いや聞けし!」

雑談を聞きながらやがて渡し終わった蓮は、自分用の、予め炭酸を抜いておいたコーラを飲んでいた。

「オイオイオイ、運動の後にそんなモン飲んで大丈夫かよ蓮」

「死ぬわよ流石に」

「へえ、炭酸抜きコーラかあ。大したものだね」

「知ってるんですか先生?」

「炭酸を抜いたコーラはエネルギーの効率が極めて高いらしく、レース直前に愛飲する馬拉ソンランナーもいるみたいだよ。それに塩分タブレットは、発汗で体内から失われた塩分を回復するのにちょうどいいし、何より熱中症対策にもなるんだ」

「へえ。……どつちにしろ運動前にする事じゃないですか」

「まあね。」

「さあ〜って蓮、今日の放課後時間あるかい？　つてかあるでしょ？」

「……よし——ああ、特に予定は無い」

「んじや、ちよつと残つといてねー。今日はこのまま、青空教室なんてどうかな？」

「分かった」

「あつ、皆はもう解散して良いよー」

「はーい」

「蓮、麦茶冷やしてくれてありがと。助かったわ」

「ああ」

「……………」

悠仁が無い気力を振り絞って空元気で返事し、野薔薇は蓮に感謝を伝えつつ砂を払い、恵は残れと言われた蓮の方を無言で見ている。その顔の裏に何を思ったのだろうか。それは知る由は誰も持ち合わせていなかった。

寮へと戻るため歩く三人だが、悠仁が石階段を登り終えた後、蓮と悟の方へと向いて、残りの二人へと唐突に問う。

「なあ恵、蓮っていつも先生と何してんの？」

「青空教室つつつてたし、課外授業とかするんだろ。何するかは知らん」

「へー。そんなに仲良いのね、あの二人。ちよつと意外」

「あーいや、仲良いと言うか何と言うか……」

「あん？ 何よ？」

「あの……非常に言いづらい事なのですが……」

「悠仁アントナが死刑って話？」

「そうそう、俺、死刑決まっててさ……って、ええええええ！ 野薔薇知ってたの!？」

もし悠仁が犬であれば耳や尾が垂れ下がっているであろうテンションから、猫であればキュウリを見て飛び上がる時のようなテンションに、一瞬で上がり下がりする。

「うるっさ、耳元で叫ぶなよ。」

いや、まあ、ね。呪物取り込むのって規定違反だし。それが特級で、受肉したとなつたら尚更。んで蓮は、大方アントナの死刑を取り下げるために頑張ってるって感じでしょう？

「す、凄え洞察力……」

「あたぼうよ。釘崎野薔薇舐めんじゃねーわよ。んっ……ぷはー！ 冷えた麦茶うまー！」

「ま、それはともかくとしてだ。アイツが強くなるうとしてるのは、俺達も見習う部分があるかもな」



「結構アイツ、熱血な所あるのね。ちよつと意外。モテるとは思つてたけど、まさかギヤツプ萌えとはねー」

「そうそう、モテるつて言や蓮……あつ、蓮と俺つて幼馴染なんだけどさ、バレンタインデーの時女子からめつちやチョコ貰つてたわ。クラス違う奴とか、名前も知らねえ後輩とかからも貰つてて……確か、20個とか30個とか、そこら辺だった気がする。勿論本命アリ。まあ本命貰つた子、お友達からくつつつてフつてたけど、ちやつかり連絡先交換しててさ。今も連絡取つてるみたい」

「早く付き合えよ」

「俺も思うんだけどな……」

「でも一見地味っぽいから、クラスのマドンナ的な奴からしか貰えないと思つてた。精々十股くらいかと」

「……地味なのに十股？ 何で十股つてピンポイントで分かんだよ、クラスのマドンナ多すぎだろ」

「女の勘よ」

「アテにならねえ勘だな」

「けど、そこで終わんねーのが蓮クオリティなんだよね。更に凄いのがさ、毎年クラスメイトの分蓮が作つてくれつから、比較的モテてない奴らが貰つた時なんか、マジで俺の

ように泣いてた。俺も貰ったよ。めっちゃ美味かった」

「そんなに!？」

「マジか……」

「マジマジ。中二、中三の頃は、『蓮に貰えれば勝ち』みたいな風潮あった。男女問わずで。ついたあだ名が《慈母神》。男だけど」

「ヤバいな、蓮は」

そう恵が言った瞬間——バツ、と音を立てて悠仁が振り向いた。

「恵……!」

「な、何だよ虎杖。俺何かおかしい事言ったかよ?」

「今、蓮の事『雨宮』じゃなくて『蓮』って呼んだよな!？」

「あ? ……あつ」

「ああ、そう言えばそうね」

「——つかあくそつかそつか! 恵もようやく打ち解けてきた感あるな!」

「まあ、名前で呼んだから何だって話だけどね。私はもう慣れちゃったから下の名前で呼んでるけど」

「……つたく、呼ばねえようにしてたのに」

「えー、何で何で?」

こいつめんどくせー、<sup>虎杖</sup>と思ひ頭を掻きながら恵は口を開く。勿論、恵は理由を話すつもりはない。話した所で、余計に一年生同士の関係に亀裂を入れる事になるだろうか。

「……拘りがあんだよ」

「どーゆー拘りよ。何かの縛り?」

「縛り? 何ソレ?」

「……いや、そういう訳じゃない」

「んじやー何だよ?」

「何でもいいだろ。それよりシャワー浴びてえ。帰るぞ」

と吐き捨てて、一層不機嫌そうにして恵は先に行つてしまふのだった。縛りの存在を知らない悠仁を他所に、野薔薇はほんのり鼻でため息を吐いた。

「なーんでアイツ、名前で呼ばねーのかな」

「繊細なのよ、きつと。というか悠仁は無神経すぎ」

「えっ、そうかなあ?」

「自覚ないのが一番タチ悪いわよ……そこまで仲も良くないのに、初っ端から名前呼びは、馴れ馴れしいって思われて逆に印象を悪くするモンなの。特に、恵みたいな捻くれた奴はね。」

あと、いきなり女子を名前呼びすると、『何コイツ、いきなり彼氏面？ キモっ』って思われるわよ。実際私思っつたし」

「酷っ!! いやーマジか……今まで気にした事なかったわ。だからモテなかったのかな……。いやでも、そう言う野薔薇だって恵って呼んでんじやん」

目を細めながら悠仁は野薔薇に問うた。対して野薔薇はあつげらかんと答える。

「アンタの口調が感染うつつたのよ。あと、名前の方が文字数が少ないから楽」

「そおゆー理由で……？ 一文字少ないだけじゃね？」

……蓮つてさ、小っちゃい頃から、仲良い奴の事名前で呼ぶんだよね。多分それかなあ、気付けば俺も名前で呼ぶのが当たり前になつてたわ」

「あー、まあアンタ、初対面でもめっちゃくちやフレンドリーにして来るし、そうなっちゃうのも分かる……いや分かるわ」

「分かんねーのかよ!! ちよつと、俺の期待返せよー!」

「しかしあの蓮がねえ……」

グランドの石段を登った所にある城郭の影の下で、そう言いながら振り返る野薔薇だったが……しかし次の瞬間、目に映る光景に野薔薇は言葉を詰まらせてしまう。二人の背後では、恵の予想通り、蓮と——ジョーカーと悟による組手が行われていた。

……しかし、そのクオリティは全員の想像を凌駕していた。

ジョーカーの技量は全盛期には未だ遠い。右手の木刀を順手と逆手とを器用に持ち替えたり、刺突、斬撃、徒手、足蹴を織り交ぜたりと翻弄しようとするも、悟には直前で受け流されるか避けられ、刀身がその身体に到達する事は無かった。

だが明らかに十日ほど前よりも上達しているのが分かる。

殴打を受けてもギリギリで踏ん張り耐え、こちらも反撃のチャンスをも、全神経を動員して窺っている。初めて稽古した時よりは、蓮は格段に、確実にレベルアップしていた。『最強』を前にして不遜にも足搔こうとするその様は、さながら雀蜂に一矢報いようとする愚蒙なる蜜蜂であった。

——悠仁がそう思った矢先の事だった。

ジョーカーの右から繰り出される刺突を、手首を掴む事によつて防いだ悟。そのまま自身も空いた右手を見舞おうと画策するも、お返しと言わんばかりに、繰り出される前に手首を掴まれた。術式を使用していないとはいえない、その瞬発力に悟はほんの一瞬感嘆した。

拮抗は、意外に早く終了した。

——その瞬間は、悟にとつては一瞬で灼け死ぬ流星のように刹那的でいて、ジョーカーにとつては白夜のように永劫的であった。

ジョーカーの左手が悟の右手を抑えようとしていた間、彼は反対の手首のスナップだ

けを利用して木刀を振り投げていたのだ。そして狙い通り、ジョーカーの口元へと到達、キヤツチ。《超魔術》級の器用さを誇るが故に出来る芸当だった。

その直後、悟が足を出す前に木刀を口で振るう。その首を刎ね飛ばすとまでは行かなくても、喉笛を掻き切るつもりで――

「あつぶな。真剣で術式無かつたら死んでたね。一本を認めるしかないかな？」

――しかしその斬撃は、不可視の鏡面によって阻まれた。

進まない。刃は喉元に至る寸前で、ゆっくりと静止していく。いくら力を込めても届かない。それを確認して、ジョーカーはゆっくりと得物を首元から離し、同時に悟も掴んでいた手首を離れた。ジョーカーは苦虫を噛み潰したような顔をして悟を睨む……というよりは不機嫌そうにしている。

「しかしまさか口を使ってくるとはね。執念深いと言うか何と言うか。そう言う泥臭いのは嫌いじゃないよ」

「……チートめ」

「褒め言葉さ。さあ、もう一本やるよー！　そろそろ僕も、術式使わないとネー！」

「ペルソナ使つてやる」

「良いよー。さあ、打つておいで〜」

第二ラウンドが始まったのを、二人は影で見ていた。数秒経って、先に口を開いたの

は野薔薇だった。

「……ねえ、蓮の術式の事、アンタ何か知らないの？ 怪盗服とか、ペルソナとか。幼馴染なんですよ？」

「いやあ、マジで知らねーんだよね。ペルソナって言葉自体、蓮が術式に目覚めるまで聞いたこと無かったし。けど、何で今更？」

「いや……。……どう考えてもあの動き、頭おかしいでしょ。術式を使つてないとはいえ、呪術学んで十日の蓮が、あの五条悟に追いついて来てるのよ？ 成長速度どうなってるのよ。」

「……はあ。私、蓮の事何にも知らないや」

「ま、まあまあ。野薔薇は知り合つてからそんなに時間経つてねーんだし、仕方ないつて。これから分かつていけばいいじゃん？」

「……悠仁のクセに良い事言うのムカつく」

「あーっ！ だから横腹抓むの止めてーっ!!」

腹いせに悠仁の横腹を抓む野薔薇。行動では反抗的だが、野薔薇はほんの少しだけ悠仁に感謝していた。悠仁の一言に、野薔薇はどこか救われたような気がしたのだ。表に出す事は無いが、野薔薇は友人想いなのであった。

そんな中、その城郭の裏で一人、伏黒恵は雨宮蓮という男の本質を疑っていた。

蓮は奇妙だ。呪術界を知って十二日、呪術を学んで十日間で、術式無しとはいえ五条悟の足元に到達した。恐らく縛りを組んだ事により身体能力を上昇させたのだろう。だが、そのような事は恵にとってどうでも良かった。

問題は、強さを求める理由だった。

恵は、実の所、蓮の事をあまり良く思っていない。だが、肝心の本人でさえ『どこを良く思っていないのか分からない』。

確かなのは、『どこか気に入らない』という事だけ。悠仁と同じく善人である事には変わらない。散々うにと揶揄してはいるが、蓮も根は善人だという事は分かっている。……だが、それだけだ。

恵には、蓮の善性の出自が分からない。人の善性には、何かしら理由がある。だが蓮にはそれが無い。あるのかもしれないが、恵には思いつかない。何故人を——悠仁を助けたと思うのか、皆目見当もつかなかった。

先程野薔薇が代弁した通り、恵には蓮の事が分からないのだ。蓮から感じる原因不明の『気味の悪さ』を、恵は究明したい。その意味不明な善性の正体を暴きたいのだ。恵は分からない事を分からないままにしておく事が嫌いだった。

しかし依然として分からないままで、苛々は増すばかりなのだった。

全員に悟られぬよう、姿を見られぬよう、その眉根をどこか忌々しそうに険しくして、



陽の落ち始めた高専を進む。

肚の内の知れない同期に孕んだ、この釈然としない感情をどうすればいいかを、今日日ずつと錯誤したまま。

45.

〈放課後↓夜〉

恵は決心した。怪盗の如く正体不明の同期と語り合い、自身の感情を解析する事にした。軽く拳を握り、一瞬だけ躊躇うように深呼吸して、蓮の部屋の扉をノックする。

「はい」

「俺だ」

「詐欺か?」

「声で分かんذارろ、伏黒だよ! ……つたく、夜なんだから大声出させんな」

「これオレが悪いのか?」

蓮が扉を開く前に軽く駄弁った。

部屋の中には本棚が新たに設置されており、様々な本が収められていた。仙台から持ってきていた本が更に増えている。そして蓮本人はというと、その内のどれかを読んでいる訳ではなかったようだ。指先に若干の煤すすがこびり付いているのが見えた。

「何してたんだ？」

「トカレフの整備。と言つても、マガジンに弾を込めたり、部品を磨いたりするだけだ。恵は何しに来たんだ？」

「……虎杖には聞かれたくねえ。ついて来い」

恵に促されるまま、蓮は茶色のスリッパから靴に履き替え、外に出る。靴下を履いていないと寝られない性格だったのが、蓮にとって功を成したようだった。除菌シートで手を拭きながら部屋を出る。

今にも落ちてきそうな満点の星空の下、本宮の左脇、高専寮玄関前に二人は到着した。寝間着姿の恵と蓮を、月明かりが照らしている。

「なあ、雨宮」

数瞬の沈黙の後、恵は口を開く。いつにも増したその仏頂面が、特段機嫌が悪い訳でもあるまいに、その表象をより陰鬱なものに感ぜさせる。

「お前、何で呪術師になろうと思ったんだ」

「ん？ 五条先生から聞いてないか？」

「聞いてねえし、お前の口から聞くべきだと思ったんだよ」

律儀な男だ、と思いつながら蓮は口を開いた。

「悠仁を救いたいからだ。悠仁が死刑なんて納得いかないし、させたくない。そのため

に、早く強くなりたい。出来るだけ早く、誰よりも」

「——五条先生と両面宿儺にもか？」

「無論だ」

「……お前、本気で言ってるのか？」

「こんな時、オレは冗談を言わない」

愚直なほどに真つ直ぐなその目に、恵は自身の心を貫かれたような気がした。

恵だつて、悠仁のような善人には死んで欲しくはないと思う。悠仁を生かして欲しいと悟に乞うたのもそのためだ。

だが五条悟や両面宿儺を超える実力、果ては頭の硬い上層部に對抗できるようになれるほどの成長性があるかと問われれば……恵が蓮の立場であっても、厳しいと答えるだろう。更に言えば、両面宿儺の死＝虎杖悠仁の死だ。常套な手段では、宿儺を祓えたとして虎杖悠仁を生かす事は出来ない。

——だがそれをこの少年は、あつげらかんと、可能だと言ってみせた。

「……何だよ、それ。じゃあお前、その結果自分が死んでも良いってのかよ」

「オレは死なない。死んだとしても、そのうちひよっこり顔を出すさ」

「その根拠は？」

「不可能を可能にするのは怪盗の十八番だからな」

「意味分かんねーよ……」

……その言い方は、言い分は、まるで死んでも構わないと暗示しているかのようだった。少なくとも、恵にはそう感じた。

（——ああ、そういう事かよ）

この瞬間、恵は分かった。

蓮に抱いていた気味の悪さ、違和感の正体は——人間らしさの欠如だった。

雨宮蓮は普通ではない。呪術を使えるという、呪術師にとつて一般的な意味ではなく、人間の抱く感情や思考が、常人のそれとはかけ離れている。こと『友人を救う』事に関して、蓮ほど熱意を注ぐ者は、恵が知る限りいない。それこそ創作の中でしか。

結局のところ、人間は『自分が一番可愛い』のだ。我が身可愛さ無くして、人は人足り得ない。この界限に居ればそれが良く分かる。それを恵は、罪を犯さない限りは咎めるつもりは無い（というかはつきり言つてどうでもいい）。

だが蓮に限つては、人ならば誰しもが持ち得る我が身可愛さを、彼の母親の腹に置いてきたようだ。

蓮が人を助けたいと思うのは——『人を助けたいから』だ。誰かに認めてもらうためではなく、誰かからチャホヤされたいでもない。助けたいと思つたから、助けるのだ。おそらく、自分の幸せなどこれっぽっちも考えていないのだろう。そこが、恵は気に入

らなかつたのだ。

そもそも五条悟や両面宿儺に挑むのは、地獄に向かつて素っ裸でBダツシュ&デレツデ デデツデ デンしに行くのと何ら変わりない。実力が伴っていなければ尚更、逃避や忌避は必定。埋まらない差、立ちほだかる巨壁に、しかし蓮は、それでも前へと進みたいと言うのだ。

正体不明の怪盗に関して、恵が理解出来た事はただ一つ——雨宮蓮は、自身の生命や尊厳を、誰かのために軽んじる傾向にあるという事。

齡十五歳。思春期真つ只中。雨宮蓮のその精神は、武士道の教えと酷似していた。仕える……というより、支える人物が虎杖悠仁であるだけだ。

恵は武士道を否定するつもりはない。どうぞご自由にしてくれと思う。だが蓮の行いは無謀だ。武士道ではない。無謀者を——それも同期を見捨てられるほど、恵は薄情者ではなかつた。

……だが恵には、どう言つてやれば良いのか分からなかつた。

恵が物心ついた時には両親と呼べるものがいなかつた。いなくなつた、と言う方が正しいか。唯一の身内は、再婚した父親が連れてきた母親の子……恵の義姉。恵の母親は恵を産んでから一年と経たず逝去しており、再婚後の両親は共に蒸発。恵が小学生になつたばかりの事だ。義姉は優しく成長したが、当時から捻くれていた仮にも小学生の

恵が、見本となる両親無くしてまともに育つはずもなく、更に五条悟大馬鹿との邂逅もあり、滅茶苦茶な人生を過ごした。

呪術師として本格的に活動を始めた時、恵は、対人関係において、常に一線を置くよう意識するようになった。呪術師とは常々死と隣り合わせな職業なのだ。自分にしろ、同僚にしろ、いつ死ぬかは分からない。そんな中、一々死を悼んでいては、自分の心が持たないと考えた。

故に彼は、いつしか姉以外を下の名前で呼ばなくなっていた。態度や思考では煩わしくしていたものの、心の奥底では、義姉の幸せを願っていた。……だが、その義姉を呼ぶ機会も失われてしまった。

死去した訳ではない。だが、謂わゆる植物状態にある。呪詛の類が原因だと推測されるが、その詳細は一切不明。義姉は昏睡したまま、一年以上経つても目を覚ます事はなかった。

義姉がそうなってしまった時、恵は己の弱さを呪った。世の不平等さを齒噛んだ。善人であるはずの義姉が苦しんでいる事を恨んだ。成立しない因果応報を嫌った。——そして誓った。もう二度と、自身の目の前で善人が不幸にならないように救うと。

恵も、悠仁を救うという志は蓮と同じだ。だが、わざわざ仲を深めるつもりはなかった。

深めた所で、会話出来なくなってしまうえば意味がない。——ならば、最初から誰とも仲良くならなければ良い。

大切な物は喪わなければ分らない。恵にはそれが良く分かつている。だからこそ、これ以上進むのは危険だと、恵の中の警鐘が理性と本能に訴えていた。——喪つてしまえば、今度こそ心が折れてしまいかもしれないから。

だから、下の名前で誰かを呼ぶ事は無い。——親しい人がいればいるほど、心が脆く崩れそうになるから。

だから、何も言えない。何も言わない。

だから、何を言えば良いのか分らない。

だから、何も言つてやれない。

「何か言いたそうだな」

「——っ」

「けど、口下手なお前の事だ。何を言いたいのか、自分でも分らない……つて所だろうか？」

「……無口にや言われたくねえ」

「冗談吐けるくらいには余裕があるらしいな」

人心掌握術でも持ち合わせているのだろうか、と恵は思った。一つため息を吐いて、

いつものように無愛想に口を開いた。

「なあ、雨宮」

「何だ」

前々から思っていた事だ。圧倒的強さや成長性に対するジェラシーではなく、はたまた恵にそつちのケがあるというLGBTに敏感で危険な話題でもない。それよりもっと吐き気がするくらい純粹で、清々しいほどに鬱陶しい感情だ。

「——俺は、お前が嫌いだ」

「いや、さらつと酷い事を言うな」

「普段の行いを顧みれば当然だろうが」

「悪かったよ。……で、何が言いたい？」

「……………お前の事は嫌いだが、死んでほしくはない。虎杖と同じに、お前は根はきつと

善人だしな」

「失礼な。真正正銘、根つからの善人だぞオレは」

「嘘吐きは泥棒の始まりって諺、知ってるか？」

「めっちゃワルです」

「それはそれでどうなんだよ」

全く調子が崩される。心を無理やりこじ開けられていくような気分だ。だがそれを



悪くないと思つてしまふ自分がいる事に、恵は否めなかつた。

「喋り慣れて来たか？」

「余計なお世話だ。元々寡黙かもくなキャラで売つてんだよ俺は」

「オレと駄々被りだな」

「俺の方が先だつーの」

「盗られる方が悪い」

「さつすが、怪盗が言うと重みがちげえな」

「……フツ」

「……く、ははは」

このやりとりが、どこか可笑しくて笑つてしまふ二人。恵は蓮の、蓮は恵の笑う所を、初めて真つ向から見た気がした。

恵は、ほんの少しだけ理解出来た。

——彼は、かなりの偏屈者だ。一度決めた事は、成し遂げるまで諦めない。それが雨宮蓮という男だ。例えそれが神に挑む事だとしても、蓮はきつと、這つてでも進む。多分、誰が言つても止めないし、止めてしまったのなら、それはきつと雨宮蓮ではない。

恵は分かつた。蓮の性根が。

——彼は、諦めを知らない男だ。勝てぬ戦いと知つてなお屈する事なく、牙を剥く狼

がジョーカーだ。だからこそ、ほんの一瞬だけ五条悟の足元に喰らい付けた。不屈こそが、ジョーカーがジョーカー足り得る要素。

伏黒恵は、雨宮蓮が嫌いだ。けれど……雨宮蓮の在り方を、どうにも否定したくはなかった。だからと言って、認めるつもりもなかった。

ただ一つだけ、二人は一致している所がある。笑い終わって、先に口を開いたのは恵だった。

「はー、いつになく笑ったよ。お前って、結構喋るんだな」

「そっちこそ。寡黙って言ったくせして、饒舌じょうぜつじゃないか」

「はっ、違いない。俺もこんなに誰かと喋ったのは久しぶりだ」

「ぼっちなのか？」

「うるせえ」

「……誰かと腹を割って話すつても、中々悪くないだろ？」

「ああ……確かに、悪くねえな。けどお前一人にだけ喋らせるのは割に合わないし、俺も喋るよ。」

……なあ、雨宮。俺は……呪術界この界限で誰かと仲良くするつもりは無かったんだ。上司も、後輩も、同期も……そして俺も、いつ誰が死んでもおかしく無え。そしてソイツが死んじまった時、顔見知り程度に留めとけば、余計に悲しむ事も無えって思ったんだ」

「……………」

「だが、気が変わった。」

——やってやるよ、蓮。俺も虎杖……いや、悠仁を助けるのに、協力してやる。利害の一致って奴だ」

「それは何とも、心強いな」

「……だが勘違いすんなよ。俺は俺のために、時にはお前を踏み台にする」

「利害の一致って言ったが、悠仁を助ける以外にも何かあるのか？」

「……そうだな。」

俺はただ——五条先生の余裕ぶっこいた顔をぶん殴りたいだけだ」

「はは、ソイツは良いな。」

——良いだろう。お前みたいなクセの強い奴からは、学べる事もきつと多い」

「せいぜい盗んでみろよ、怪盗」

「望む所だ、呪術師」

恵が掲げた手に合わせるように、蓮も手を掲げた。

不敵に笑い合う、恵と蓮。

いつしか始めていた、悠仁とのコミュニケーションツールであるハイタッチは。

二人の歪な関係の下、ここに為された。

微かな絆を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『魔術師』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

「は——下らねえ事で悩んじまったよ」

「気は済んだか？」

「まあな……寝るぞ」

「ああ」

この関係に、多く言葉はいらない。

そう言わんばかりに、寮を目指す二人の男。

その背中を、月明かりだけが見守っていた。

46.

〈2018年7月2日〉

〈放課後〉

「はい、今日の授業終わりっ！」

『ありやとーござーしたー……』

本日も晴天なり。時刻は午後四時を過ぎた頃で、まだ外は明るい。呪術高専のグラウンドには、日差しが叢雲むらくもから顔を出して伸びている。呪術高専のグラウンドにて、一年生四人は、五条悟の指導の下鍛錬を行っていた。そして読者諸君のお察しの通り、皆々ぐでたまと化しているのだった。

定例の如く、悟が蓮を呼ぼうと口を開いた。

「蓮、今日は——」

「先生、蓮借ります」

——が、それは一人の男によって遮られる。呪術高専が誇るうに頭、伏黒恵その人であつた。

「オレは物じゃないぞ、恵」

「るっせえ、ほら準備しろ」

「せっかちだな。コーラ飲むから待ってくれ」

「また炭酸抜きコーラか。効果あんのか、それ」

「炭酸苦手なだけ。短時間の運動に効果があるって聞いた」

「……お前、ペプシ派か」

「ああ。恵は？」

ドクターベッパ  
「ドク。ペ一択」

「まさかここで袂を分つ時が来るとはな……」

「一度その気味悪りイ笑顔を歪めてみたかった……!」

「醜い争いは止めろ野郎ども」

「そう言う野薔薇は何派なんだよ」

「おフランス産のミネラルウォーター」

「ジュースの話じゃないの？」

「つてか恵、ちやつかり名前呼びになつてるわね」

「……ああ。拘りとか、もうどうでも良くなったからな」

うおっほん、と咳払いをして悟が口を開く。

「今日は、放課後から明日の夜に掛けて時間取れなかったから、お稽古は明後日にしようって言おうとしたんだけど……ふうくん、ナルホドねえく？」

「何ですか先生気持ち悪いですよ」

「きつとオレ達をダシに変な噂を流そうとしてるんだ」

「最低な先生だな」

「間違いない」

「担任が変態教師とはね」

「ごめん先生、流石に擁護出来ねえや」

「皆酷くない？」

ま、まあともかくとして！ 蓮、明後日は空けといてね！」

「分かった」

「あつ、皆もう解散して良いよー」

そう言つて、悟はそそくさと高専本堂に戻つていく。悠仁と野薔薇は跡を追うようにして歩いている。石段を登ろうかという所で、ふと悠仁が残つた二人の方を見ると、蓮が恵の術式の仕組みについて聞いている所を目撃した。

「そう言えば、恵の【玉犬】は二匹同時に出せるんだつたな」

「ああ。お前のペルソナは出来ねえのか？」

「試した事もない」

「ふーん。ま、やるだけ損つて事はねえだろ。出来るなら出来る、出来ねえなら出来ね

え。それが分ければ十分だ」

「まあな。……やってみるか」

そう言いつつ（悠仁と二人との距離では何を言っているのか分からなかったが）、蓮はジョーカーへと変貌する。何とかしてペルソナの二体同時召喚……果ては、複数体同時召喚を目指す事に決めたようだった。二人を見て呆然としている悠仁へと振り返った野薔薇が、彼へ問うた。

「どしたの悠仁」

「なあ野薔薇……俺、ちよつと出掛けてくるわ。夕飯になったら帰る」

「んー、行ってら」

そう言つて先に城郭を出て行く悠仁。出掛けると言つておきながら、財布も持たずに走つて行く彼を、その影が見えなくなるまで見送る野薔薇。一瞬だけ残つた二人を見遣り、一つ大きな伸びをした。

「んん、く……ふう。ピラティスでもやろうかしら」

と、野薔薇は独り言ちた。

少年少女の青春を、懐かしむように、本堂の屋根にて悟が微笑む。たった二人の親友に想いを馳せて、沈み行く日を、膝に頬杖を突いて眺める。遅刻癖と言いつれば何とかなるだろうと、適当にこの後の事を考えていた。



しかし……暗雲は水を差すように、すぐそこまで迫っていた。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t    c o u n t d o w n    t h e    g a m e .  
# 8    C o u n t d o w n    t o . . .

## #9

47.

〈2018年7月5日〉

曇天の雨。憂鬱色の雲。本日の空は泣き虫だ。梅雨はもう終わったというのに、何をそんなに悲しむ事があるのだろうか。釘崎野薔薇は、本日の任務にあまり気分が乗らなかった。

英集少年院入口には、立ち入り禁止を警告する黄色のテープが張り巡らされている。そこにいるのは、複数名の背広を着た職員と、虎杖悠仁、伏黒恵、釘崎野薔薇、雨宮蓮。皆、険しい顔をしていた。

雨の中、呪術高専補助監督から任務の概要を知らされていた。補助監督の名を、伊地知潔高いじちきよたかという。黒い背広に茶色のネクタイを着た、中別なかわけヘアの眼鏡の男性だ。痩せぎすであるためか、実年齢よりも老けて見える。

さて、ハスキーな声音で潔高は続ける。

「我々の《窓》が『呪胎じゆたい』——集積した呪力が胎児を成した物を確認したのが、約三時間前。避難誘導が九割が完了した時点で、現場の判断により施設を閉鎖しました。50

0メートル以内の住民の避難も完了しています。

英集少年院・受刑在院者第二宿舎に五名が、現在も呪胎と共に取り残されています。呪胎が変態を遂げるタイプの場合……『特級』相当の呪霊に成ると考えられます」

「……つまり、スнгеー強いつて事か」

「それも五条先生並にな。こないだ言つた通り、本来なら相当級である特級呪術師の五条先生が相手するんだが……」

「その先生はどこなのよ」

「出張中。そもそも高専をプラプラしていい人材じゃねえしな。まあ本人はプラプラしてるけど……お土産には期待すんなってさ」

「お土産なんてどーせ新幹線の中で独り占めするじゃん先生。けど……俺ら、ソイツに勝てんの?」

「今回の皆さんの任務は、あくまで『生存者の確認』及び『救出』です。戦闘は目的ではありません。……今の皆さんが特級に会敵した時、与えられる選択肢は、『逃げる』か『死ぬ』かです。絶対に戦わずに、自分の恐怖には素直に従ってください。くれぐれも、お忘れなきよう」

「……んで、さつきから気になってただけさあー……ツち、ああもうー!」

潔高の説明を聞きつつも、流石に腹を据えかねた野薔薇が……いや、この状況下では

全くもつて至極当然の事なのだが——

「非常事態こーゆー時にアンタはそこで何しとんじやクオラ——ッ!!」

「はびやあつ!?!」

——フルスイングで、説明をよそにブーツとしている雨宮蓮のご尊顔をパーで引つ叩いた。

効果は抜群だったようで、譲れない事で有名なフィギュアスケート選手も驚愕の五回転アクセルを決め、顎を強打しながら着地する。頬には、季節外れの紅葉が咲いていた。魅力のパラメータが下がった気がする。それを滑稽に思った恵と悠仁は、緊張感の『き』の字も無く嘖き出した。

「ふくつ、はびやつて……何だよそりや」

「ははははははは! はひつ、うえ、つごほつ、むせちやつたははははは!」

「……いや、こっちはこっちで準備してたんだつて!」

「ブーツとするのが準備なら誰も苦労しないっつーのよ!」

「オレも色々と事情がだなあ……いや、ちよつと待つてくれ」

いつにない慌て振りで、携帯で銀行の通帳明細を確認する蓮。そこには、最後に四に零が五つほどつく金額が引き出されているのが分かる。ペルソナの強化や再召喚により自動的に引き出されたのだろう。そして、その残額は実に——絆創膏がギリギリ買え

る値段だった。

「……………二百円……………」

刹那、蓮は白目を剥きながら後ろに倒れてしまう。満身創痕の蓮が地に落ちる寸前、その肩を悠仁が抱き、顔を悲哀に響めて叫んだ。

「どうした!?! 蓮、しっかりしろ! ……ふふ、し、しっかりしろっ!」

「やるんならちゃんとやれ悠仁」

……訂正、少し楽しみながら、笑いを噛み締めて叫んだ。

「……………オレの……………」

「何!?!」

「オレの……………貯金が……………がくっ」

「おい蓮!?! しっかりしろっ! 蓮! レエエエっ、ごめんむり笑っちゃうわふふえへ

へへへへ!」

「行くぞ野薔薇」

「はいよっつと」

「いやいやちよつと待ってよめぐみんのばらん!」

『誰がめぐみんだ』

「オレ……………今、結構傷心……………」

「任務済ませば金は入るだろ。そもそも何に使ったんだよ」

「結構な額をさつきペルソナに……」

「……ペルソナってお金で買えるのね」

「金で買える叛逆の魂って……」

野薔薇と恵は呆れ、頭を押さえた。踟躕めきながらどうにか立ち上がる蓮は、死んだ魚の目をしていた。その光景を、潔高は微笑んで見ているのだった。

——そうしていた最中だった。

「あのっ！ 息子は!? 正は無事なんでしょうか!?!」

やや歳を取った女性だ。四十代の半ばほどだろうか。白地のシヨルダーバッグを掛け、息を切らしながら高専職員に、切羽詰まった様子で問う。正とは誰の事だろう、と蓮がふと考えていると、潔高が一步前に出て、生徒と女性とを阻む壁となった。そして女性に聞こえない程度の声量で四人に言い、後に本人に警告する。

「(面会に来ていた保護者です)」

——お引き取りください。何者かによつて、毒物が撒かれた可能性があります。現時点で、これ以上の事は申し上げられません。安否が確認出来るまでは……」

「そんな……何で、何でなのよお……っ!」

残酷な現実を押し付けられて、涙滂沱とする女性。目に当てるハンカチが涙に染みを

作って行く。その光景を見て、悠仁は顔を遣る瀬無さに歪めた。

虎杖悠仁には両親がいない。物心ついた時には、既に両親はいなくなっていた。他界したのか、はたまた蒸発したのかすらも分からないし、興味も無かった。唯一の身内は、厳しい頑固な祖父の倭助だけだった。そしてその唯一の身内さえも、もう居なくなってしまった。

身内を喪った経験のある悠仁だからこそ理解できる、何も出来ない、してやれないという悔しさ。

けれど、今は違う。虎杖悠仁は力を付けた。人を助けられる力を。

——絶対に死なせない。気付けばその思いを、口を介して皆に伝えていた。

「助けるぞ。皆」

「トーゼンよ」

「ああ」

「……………」

悠仁の問い掛けに、野薔薇は鼻を鳴らし、蓮は拳を握り締め、恵は無言で前へ進んだ。英集少年院は、その外観を灰色のコンクリートで固められている。これといって特筆すべき点もない、ごく一般的な少年院だ。まるで田舎町の小学校のようだ、と蓮は思いつつ、潔高と共に、受刑在院者第二宿舎の入口へと到達する。

「《帳とほり》を下ろします。お気をつけて。」

——闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え」

潔高が祝詞を唱えると、まるで絵の具のような泥々とした『黒』が、少年院を覆っていく。

「おっ！ 夜になっていくー！」

「《帳とほり》……非術師から俺達を見えなくする結界だ。今回は住宅地が近いからな」

「見えなくする理由って？」

「呪いは人のマイナスなイメージから生じるだろ。ストレスとかな。それらから出来るだけ予防するための策、結界術だ」

「無知め」

「知らないんだから仕方ないでしょーが！ 俺ら入学したてホヤホヤのハリーポッターとまんま同じだからね！」

「無知は罪よ。知らぬ存ぜぬで通せる世の中じゃないの」

「うぐ、何も言い返せねえ……あれ？ 恵、じゃあ何で杉三高校の時は下ろしてなかったの？ 帳つて、誰でも下ろせるって訳じゃねーって事？」

「……………【玉犬・白】！」

「ワウツ」



「え、恵サン?」

「……うるせえよ俺だつてミスする時はするんだつーの」

「聞こえてるぞ恵」

「何で聞こえてんだよ蓮!」

「生憎オレは地獄<sup>耳が良くて</sup>耳でな」

「聞くな聞こえんな!」

「そんな無茶な!?!」

そう言い合いながら、緊張もやや解<sup>ほぐ</sup>れ、いつもの雰囲気を取り戻した一年四人。顕現した「玉犬・白」を悠仁がヨスヨスと撫<sup>なで</sup>でる。当の本人もとい本犬は、Oh... Yea h... と言わんばかりに目を細めていた。それを見て蓮もジョーカーへと変貌した。

さて、仕事モードに切り替わった四人は、伏黒恵を筆頭に、その扉を開けて内部へと侵入する。ギギギイ……という音が鳴り響いた。一寸先は闇、内部の状況は視認出来なかつた。闇を臆<sup>おそ</sup>わずに進み、そして――

「――えつ、え!?! あれ!?! ここ、二階建ての少年院だよな!?!」

「おおお落ち着け悠仁、メゾネットよ!」

「メゾネットなら仕方ないよな?!」

「何が仕方ねえんだよ、メゾネットでもねえよ」

——扉を潜るとそこは迷路であつた。

少年院の複雑な内部を説明するための比喩的表現ではない。このただつ広い空間は、少年院内部の構造を明らかに無視している。入り組んだ排水管と錆びついた鉄格子で出来た監獄。まるで広島県の工場島、契島を彷彿とさせる。

悠仁はこの現象を知らない。呪霊によるものだと推察は行くが、それ以上は分からなかつた。だがこの現象に、一人——否、二人ほど、思い当たる節がある人物がいる。

「呪霊の《領域展開》か」

「——！ ジョーカー、知つてたのか」

「昨日先生に教わつたばかりだ」

「そうか。……けど、コイツは未完成みてえだ。生得領域を、術式を付与せずに展開しているだけ。何にせよここまでの物は、俺も初めて見るが……」

「リョーキテンカイ？ ショートクタイシ？ 何ソレ？」

「説明は後……——扉は!？」

バツ、と振り向き、来た道を確認する。

そこにあつたのは扉ではなく——蜘蛛の巣のように張り巡らされた排水管だつた。扉の姿形など、どこにもなかつた。つまる所、脱出が不可能となつてしまった。

「うえっ!? 何、何で!? 私達、こっから入つて来たわよね!？」

「これじゃ出れねーじゃんか!？」

『どーしよおっ、あそーれどーしよおっ』

そうしてパニックになり踊り出す虎と薔薇。どうしようと言ってはいるが、どうしようもないのでどうにもならないのだ。

「落ちて着けお前ら。玉犬が入り口の匂いを覚えてるから、脱出の際は玉犬が誘導する。だからその変な踊りを止めろ」

『あらま〜〜!』

「いよお〜しッ、よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし良い子だ玉犬お前はホントによくしよしよしよしよしよしよし」

「ジャーキーよ！ ありったけのジャーキーを掻き集めて献上するのよー」

「緊張感！ んなモン無えよ」

「買っておいたぞ」

「お前（誰）ってホント用意良いよな。……、……、……いや、どんだけ出てくんだよ止めろバカそれ以上出すな！ 普通にそんな量食えねえよ。ポケットどうなってるんだ」

「普通のポケットだ」

「普通のポケットにはそんな山のジャーキーは入らねえんだよ」

「——確かにそうだな……?」

「今気付いたのかよ……」

「しつこくまあ、頼りになるよな、恵！ お前のおかげで人が助かるし、俺らも助けられるよー！」

「……………急ごう」

上機嫌で歩みを進める悠仁を他所に、恵の顔はどこか浮かないままだった。「玉犬・白」の鼻を頼りに、錆びついた空間を進み、五人の搜索を続ける。歩き続ける事数分、やがて空間が鉄からコンクリートへと移り変わった頃、一向は、水を抜かれたプールの底へと抜け出した。

最初に異変を感じ取ったのは悠仁だった。

……腐敗臭がする。蠅はえの羽音が聞こえる。今までに嗅いだ事の無い臭気に、悠仁は嫌な予感がした。……そしてその嫌な予感は、当たってしまふのだった。

「は」

二つの肉塊と、上半身しかない坊主頭の男性。

それが、虎杖悠仁が最初に見た被害者だった。

二つの肉塊は、見るも無惨な状態だった。関節も、筋繊維も、骨も、何もかもを無視して、無理矢理に丸められている。顔面には表皮と眼球が無く、頭蓋骨が剥き出しになっている。しかし中途半端に皮を剥いだようで、上唇から下は残っていた。……おそ

らく、生きたまま丸められ、苦しんで死んだのだろう。口元は苦痛に歪み、血の涙を流し、所々から内臓がはみ出し、体の一部は糞尿に塗れていた。

マシな死に方をした上半身の方は、良く見ると両腕が無かった。酷い出血量だ。吐瀉物混じりの血反吐と鼻血、下半身へと伸びていたであろう内臓を垂らし、虚な目をして死んでいた。スプラッター映画でも、これほどグロテスクな物は無い。凄惨さに顔を顰めながら、ジョーカーは心の中で合掌した。

「惨い……」

「……三名死亡、で良いんだよな」

「——っ」

思わず遺体に駆け寄る悠仁。まだ原型がある方の遺体の身元を確認すると——『岡崎正』という名前が、胸ポケットに見え……悠仁は確信した。

——息子は!? 正は無事なんでしょうか!?

「……この遺体、持って帰る」

「えっ、でも……」

「あの人の息子だ。顔はそんなにやられてない。」

……遺体も無しに死にました、なんて、納得出来ねえだろ」

どうにかして遺体を連れ帰るかを思索する悠仁。しかし、おぶろうにも持ち上げよう

にも、腕が無いため不安定な体勢になると直感した。その後ろに駆け寄り、声を掛ける恵。その眉根は、常時よりも険しく寄せられていた。

「立て悠仁」

「ダメだ。悪い恵、何か縛るモン——」

「あと二人の生死を確認しなきゃならん。ソイツは置いてけ」

「来た道が無くなってるんだ。ここにまた辿り着ける保証は無えだろ」

「『後にしろ』じゃねえ、『置いてけ』つつつてんだ」

「——は?」

低い声で悠仁が怒る。立ち上がり、いつの間にか恵の胸倉を掴んでいた。

「どういう意味だよテムエ」

「そのままの意味だ。ただでさえ救う気のない奴を、死んでまで救うつもりは、俺にはな

い

「こんな酷え死に方無えだろうが……! せめて供養を……遺体だけでも母親にツ

」

「——ソイツは、無免許運転で女兒を撥ねてる。それも二度目の無免許運転でだ」

瞬間、悠仁は息を呑む。腹の底が煮え滾る感覚と、恵の言葉の重圧に、悠仁はどこか

吐気を催した。

「……なあ悠仁、お前は考えた事あるか？ 『自分が救った人間が将来人を殺したら』  
……って」

「んな事言つてたら誰も救えねえよ！ 将来なんて分かりっこない。俺が助けた人に  
……なんて、一々考えてられねえよ」

「——悠仁。俺は、『救われて欲しい奴』以外は、正直どうでも良い。せめて良い奴には  
酷え目にあつて欲しくはない。だがな、悪人の場合はどう足掻いても自業自得だとか  
思えないんだ、俺は」

「……恵が言う事は分かる。確かにコイツは犯罪者だけど、それでもつ、こんな……！」  
「当然の報いだ。沢山の人を助けたいつて言うお前の気持ちは知ってる。万人に『正し  
い死に方』をさせてやりたいお前の思いも知ってる。だが善人ならまだしも、悪人の死  
に方になんざ拘るな」

「名前呼ばねえ事に拘つてた奴がよく言うぜ。——ならさ、俺だつて犯罪者予備軍だろ。  
宿儺っていう、いつ爆発するか分かんねえ爆弾抱えてんだぞ。それが分からねえ恵じゃ  
ねえだろ。」

——ハツ、もういいや。この際だし聞いてやるよ。  
タワーに触れて

なあ恵。前からずつと思つてたけどさ、何でお前、俺を助けた？ 蓮なら分かるよ。  
一度言つた事は曲げねえような頑固頭だしな。けどお前が俺を救う義理は無えだろ。

こんな化け物生かすより、死なせた方がまだ人のためになるって、俺でも分かるんだぜ？ 俺を救って何がある？」

「お前は善人だ。俺にとつて救うべき人間なんだ。だから助けたいって先生に頼んだ。……俺はただ——」

「——善人だの悪人だのテメエごちやごちや言つてつけどさあ！ 要はテメエの身勝手なエゴじゃねえかよ!!」

——氣付けば恵も、悠仁の胸ぐらを掴んでいた。

「ンだと、テメエ……!」

「確かに罪を犯した奴は裁かれる！ 場合によつちや死刑にだつてなるだろーよ！ けどそれは、呪いとかから勝手に殺されて良い理由にはならねえんだよ！ 例えソイツが犯罪者でも、俺はつ……死ぬんなら、ちゃんと罪を、生きて償つてから死んで欲しかった！

何で怒つてんのか知らねえけどよ、テメエより俺の方が怒つてんだよ、恵……!」

——なあ！ 何で俺は助けたんだよ!!」

——その時、一発の銃声が、二人の鼓膜を貫いた。

ジョーカーのトカレフである。警砲のため撃たれたそれは、跳弾を避けるために故意に在らぬ方向へと飛んでいた。排莖された薬莖が、軽い音を立てて地を転がる。銃撃手



であるジョーカー自身は、呆れを含みつつ——目に見えて分かるほど怒っていた。

「いい加減にしろ。今は哲学を議論している場合じゃない。」

喧嘩をするのは大いに結構だが、帰ってからにしろ」

「……ああ、分かっているよ！」

「チツ………」

「ジョーカーの言うとおりよ！　　つたく、アンタらの辞書にTPOって言葉は——」

——その言葉が、最後まで紡がれる事は無かった。突如足元に現れた闇に足を掬われ、引き摺り込まれてしまう野薔薇。

「のぼっ——」

一番近くにおいて、一番早く異変に気付いたジョーカーが野薔薇の右手を掴むも、敢えなく共に飲み込まれ——二人は、跡形も無く消えた。ジョーカーと呼ぶ事を忘れて、悠仁が二人の名を呼ぶも、それが返ってくる事はなかった。

「……野……薔薇？　　蓮？」

「馬鹿な、敵は【玉犬・白】が——」

【玉犬・白】の最期は、呆気ない物となった。

恵が【白】を待機させていた所を見ると——首だけになった【白】『だったモノ』が壁に減り込み、穴という穴から血液を噴出しているのが視認出来た——視認出来てしまっ

た。そして「白」の死は——呪霊が限りなく近い場所に顕現している事の証左だった。息を詰まらせながら、恵はどうか、頭の中に鳴り響く警鐘に従い、悠仁と共に退却しようとした。

「——は——ッ、逃げるぞ悠仁！ 野薔薇とジョーカーの搜索は——」

もう、言葉を紡ぐ事すら不可能だった。

悠仁にとっては左、恵にとっては右。

そこに——『奴』がいた。

白磁のような肌。筋骨隆々。剥き出しの歯。四つの眼球が、まるで蛸足のような黒い部位に散りばめられている。まるで鬚まげのように留められた、背中に伸びる長い髪。胸の中心に何かがあるが、良く分からない。下半身は、蛹さなぎのような物体で覆われていた。

恵でさえ、ほとんど感じた事のない重圧。かつての杉沢第三高校の時よりも、格段にレベルが違う悪意の感触。冷や汗が止まらない。足の震えが治おさまらない。呼吸が出来ない。ジョーカーの《アルセーヌ》を初めて見た時の感覚に似ている。

一步でも動けば、死ぬ。

それがひしひしと、五感全てに伝わってきた。

(……この重圧……間違いない、特級だ……足が、動かねえ……)

(……ヤバい、ヤバい、ヤバいヤバい動け動け動け動け動け！ うわあああああああ

あああああああッ!!

頭で考えていた事を無意識に口にしていたらしい。悠仁は絶叫しながら左手で《屠坐魔》を振るい――

惨、という肉の音の後に。

破、という刃の音の前に。

悠仁は、屠坐魔と左手首から先を失っていた。

「……………え？」

#### 48.

革靴が彷徨する音が聞こえる。釘崎野薔薇の物だ。悠仁と恵を自分なりに宥めようとして、暗闇に足を引つ張られた直後の事だ。野薔薇は現在、どこかも分からない暗闇を、足任せに進んでいる。しかし、出口の光は見えず、それどころか壁にすら到達しない。背中に嫌な汗が流れるのを野薔薇は感じた。

――その時だった。呪いの気配を感じ取ったのは……否、感じ取らなければ、楽に逝けていたのかもしれない。

「呪い――つて、何よこの数……!?!」

その圧倒的個体数は、釘崎野薔薇の力量を上回るには充分すぎた。

ゲラゲラと嗤う能面の呪霊……それが無数に存在している。およそ百はいるだろう。野薔薇のアイは彼奴等を二級程度と判断した。現時点で野薔薇の階級は三級、実力は二級レベルの彼女でさえも、この数的不利には歯噛むしかなかった。

《芻霊呪法》は、一对多の戦闘を得意としない。術式発動には『金槌で』『釘を打ち』『対象に当てる』という一連の動作が必要だ。また《芻霊呪法》は、刻撃した釘を術者が操作出来るというような優れ物でもない。刻撃してしまえば一直線にしか飛ばないし、それゆえに軌道が分かりやすく、拳銃よりも避けられやすい。術者本人が上手く立ち回ればこの状況でも問題は無いが、生憎この数は、野薔薇の能力の範疇を超えていた。

暗闇を漂いながら、それらは一斉に野薔薇の方向を向いた。どう見ても対処できる数ではない。自然と金槌を握る力が強くなる。嫌な汗が、今度は額にも滲んだ。

だが、その視線達は直ぐに別の所に向けられる事になる。

その先にいたのは——野薔薇の手を握り、共に引き摺り込まれたジョーカーだった。足音を出来る限り殺しながら、野薔薇に駆け寄り安否を問う。

「無事か、野薔薇！」

「まあね。……無事でいられるかどうかは分かんないけど」

全方向を見渡せるよう、背中合わせの状態になる。一度ジョーカーは手袋を締め直した。

「状況を整理したい。野薔薇、釘は何本持ってきた？」

「結構沢山……五十本くらいかな。けど多分、数合わないや。そっちは？」

「マガジン五つ分。装弾数は八発だから、四十発……いや、さつき一発撃つたから三十九発か」

「それでこの数相手ねえ……生きて帰れるかな」

「スリルがある。勝てる戦いほどつまらない物はない」

「……アンタ、やっぱどつかブツ飛んでるわ」

「そう言うキミは珍しく弱気だな、野薔薇」

「こんな数相手にすんだから弱気にもなるっつーの。怪盗なら紳士らしく絶対守るとか言ってくれない訳エ？」

「フツ……そんな事言わなくても、キミなら分かっているだろう？」

「にひひ……まあね」

当然、野薔薇はおろか誰一人として死なせるつもりはない。仲間を目の前で二度も喪うなど、そんな残酷な事あつてはならない。今度も、ジョーカー切札の名に掛けて、仲間を最後まで護り抜く。殺させてなるものか。あの時のようには——

——我が唯一の好敵手明智吾郎を死なせてしまった、あの時のようには、決して。

さて、ジョーカーの前世でさえ、これほど大量の敵に一度に襲われた経験は、流石に

無い。だが、一対多数の戦い方は幾度となく熟こなしてきた。

右脇と腰裏のホルスターから、それぞれ得物を取り出しながら、ジョーカーはかつての記憶を思い出す。かつての世界で仲間と過ごした日本一周の旅。今までに経験した事のない、大量の敵に囲まれながらも切り抜けた、あの夏の壮絶ス克蘭ブルな戦いを――

「――背中は預けるぞ、野薔薇」

「任しときなさい。さあ、ブツ祓はらつてやんよ、雑魚共オ！」

滾る怒りと共に、ジョーカーは《剛巖じょうげん》とトカレフを、野薔薇は釘と金槌を握り締めた。

想像するのは、円卓に居座る六つの反逆の魂達。その一角、『裏・ペルソナ全書』にて作成した、ジョーカーの縛り④のギリギリ適用外にあるレベルのペルソナ。女帝のアルカナに割り振られた、女性の形なりをした龍。フランスに伝わる『ワイバーン』。右半身を蝙蝠こうもりに侵されてしまった、黒布を一枚だけ纏っただけの、その女の名は――

「――ヴィーヴル……《ベノンザッパ》」

体を蝕む『毒』と共に、翼を以つて、広範囲に及び複数体の仮面かまいたちを鎌鼬かまいたちにて撫で斬りにする。十数体に及びヒットし、何体かは一気に祓えたが、一撃では仕留められなかつ

た者——その内の一体が、苦しみ、足掻いて、地に落ちていくのが窺えた。

ジョーカーに攻撃して来たものは軽々と避けられ、一体、また一体と落ちて、塵と消えていく。蓮の前世では存在しなかった状態異常……『毒状態』だ。勿論呼んで字の如く、一定時間対象にダメージを与え続ける現象である。ヴィーヴルは『毒状態を付与するスキル』を持っていた。

——裏・ペルソナ全書は、並行世界の東京に潜む悪魔を元にリストアップされる……そう言ったのはラヴェンツアだった。蓮が「どういう意味だ」と問えば、「実は私にも良く分かりません」と返された。両方共に首を傾げる不可思議な事態になったのは言うまでもない。

そもそもこの裏・ペルソナ全書は、雨宮蓮の更なる強化のため、持てるペルソナの幅を広めようとして、ラヴェンツアがあれこれ錯誤していたら何か出来ちゃったと言うのだ。ラヴェンツアはこの裏・ペルソナ全書を、『二つの世界間の法則が変に入り混じって出来たバグのような物』と形容している。

詳しく説明するために、蓮がいた世界を『ペルソナ世界』、そしてこの世界の事を『呪術世界』と呼称する。例えるなら、ペルソナ世界の法則絵の具を呪術世界の法則絵の具に上手い具合混に組み合わせようとしたら、誤って加減分を間違えてしまい、『ペルソナ世界』×『呪術世界』×『どちらの世界にも当て嵌まらない並行世界』の要素を併せ持つ全書ダイクマターが出来上

がったのだと言う。

ラヴェンツァ曰く、呪術世界における全書を作ろうとすれば、そのページ数はあまりにも少なくなってしまうが、そのページに記録されるペルソナ達があまりにも強力過ぎて、現時点でのジョーカーの技量では扱いきれないと言うのだ。それでは本末転倒であるため、故に今回の作成にて、手加減を誤る必要があつたと弁解している。

何だそりやと思つたが、ラヴェンツァが唇を尖らせて涙目になっているのを見て、持てる《知恵の泉》並の語彙力及び知識と《慈母神》並の優しさを総動員して裏・ペルソナ全書を褒めちぎつた。「ええ、そうでしょうとも。えっへん」と上機嫌になつたのを見て、蓮はどうかメギドラオンの刑を免れたと胸を撫で下ろした。……まあ、当の本人は、蓮に格好良いところを見せたくて意地を張つただけだつたりするのだが。

それはそれとして、彼女は彼女で一般的な工具から神器を造り出すとすれば、つなので、『そういう物』だと蓮は個人的に無理やりに納得し、それ以上の詮索はしないよう努めようと決意した。

さて、これにて縛り③の、一分間のペルソナの使用禁止が適用される。一見デメリツトにしか見えないこの縛りは、しかしこの一分間、ジョーカーの更なる身体能力向上に補正を掛けている。

縛りの恩恵無しの場合、現時点でのジョーカーの身体能力は、全盛の約三分の一。レ



ベルとして数値化すると、四十手前程度だろう（ジョーカーでさえ自分の成長スピード早くないかと思つていたりするのは置いておく）。そして縛りが適用された場合、身体能力だけで言えば——全盛の二分の一に匹敵する。

圧倒的跳躍力によって、フヨフヨと漂う能面の一体に飛び乗った。リロードをしていないため、現在のトカレフの装弾数は七発。——そして破裂音と共に、その内の一発が消費された。周囲に点在する気配を察知し、消えていく足場<sup>能面</sup>を踏み台にして、残り六発を舞踏<sup>ロ、ド</sup>のように舞いながら撒き、命中させていく。

「……アイツ本格的に人間辞めてない？ 動きスマブラかよ」

——ま、こつちも負けるつもりないけどね。

そう呟いた野薔薇も、派手さではともかく、活躍では負けてはいない。手始めに刻撃していた四本の釘は、それぞれ能面の脳天、右頬骨、左下顎、額右側に着弾し——

「爆<sup>劔</sup>ぜ<sup>霊</sup>て死<sup>呪</sup>ね<sup>法</sup>」

——指を鳴らすと同時に爆発する呪力は、果たして周囲にいた呪霊達を巻き込み、闇に四つの淡く蒼い一等星を作り上げた。

戦いは続いていく。

虎杖悠仁と伏黒恵の安否を気にしながら、金槌を振るうその最中——釘崎野薔薇は、ジョーカーならばあるいは、あの二人の眼前に現れたであろう特級呪霊が相手でも、互

角に戦えただろうに……と思ひ、その思考を直ぐに止めた。

49.

至近距離——奴の、特級呪霊の射程距離内だ。もはや逃げる事は出来ない。ドス黒い殺気が二人を襲う。先に口を開けたのは悠仁だった。

「オイ宿儺ツ、俺が死んだらお前も死ぬんだろ!? それが嫌だったら協力しろよ! このままだと死ぬんだぞ俺ら……!」

「断る」

「あ!?!」

「オマエの中の俺が終わろうと、切り分けた魂はまだ十八もある……が、腹立たしい事にこの体の主導権は俺には無い。代わりたいたいなら代わるが良い。

——だがその後、真っ先にその餓鬼を殺す。

その次に、ジョーカーとかいう奇怪な男、そして女だ。特に女は活きが良い。アレが四肢を挽かれ涕泣し、命を乞いながら紊れる姿を着に——」

「テメエの言い分は分かったからさ、もう二度と喋らなくて良いぜ、塵野郎。」

チツ、相談する相手を間違えた……恵、ジョーカーと野薔薇を連れて領域から逃げろ……つつつ」

もう使い物にならなくなった、《屠坐魔》を収めていたホルスターのベルトを左手首に巻き、苦痛に顔を歪めながら止血を試みる。

「馬鹿か!? 死ぬぞ悠仁!」

「いや、多分死ぬことはない。まあ下手したら死ぬけど……見ろよ恵、アイツ、俺達の事完全に嘗めきつてる。さっきだって、俺達の事、殺そうと思えば殺せたんだ。今も、応急処置してんのにまるで打って来ねえしな。遊んでんだよ、俺達で。

……だから俺が囷になって、ここで食い止める。その間に、ジョーカーと野薔薇を助けて、脱出したら合図をくれ。合図と同時に宿儺に代わる。俺は宿儺の意思に関係無く代われつからな、問答無用で引き摺り出してやる……!」

「だが——もし万が一の事があれば、お前は——!」

「恵。」

冷や汗を流しながら、無理に笑って悠仁は言う。

「……頼む」

その顔は、どこかで諦めているような顔をしていた。

まるで、生贄に捧げられる前日の少年のような、そんな顔を……。

(……こういう事があるから……誰かを救うために仲間を犠牲にしなければならない事があるから、呪術師は嫌いだったんだ……!)

いつの間にか、拳を、爪が肉を食い破るほどに固く握りしめていた。

ここで一人だけ悠仁を置いていくのは、悠仁を見殺しにするのと同義だ。だがここで見捨てなければ、野薔薇とジョーカーの救出は不可能。ジョーカーでさえも、この領域の出入口の搜索は、彼の持てるペルソナを以ってしても無理な話だった。

ならば戦うか……無意味だ。伏黒恵の実力では、この特級呪霊の祓除は不可能ということもまた事実。無駄に犠牲を出すだけだ。恵の決死の奥の手を出せば祓えるだろうが、一度顕現すれば最後、その被害は避難区域500メートルを大幅に超えて暴れ回らう。人、呪霊、果ては顕現させた本人である術師に關係無く、全て破壊するまで止まらない化け物が、野に放たれる事態になってしまう。

ならば、自分よりも階級の高い術師に応援を要請する方が——つまり悠仁の囮作戦を採用する方が、よほど理に適っている。恵は、宿儺が素直に協力してくれるとは、先の問答では到底思えなかった。

けれど、それは——その選択は、本当に正しいのか。

恵が機械だったならば、あるいは心無い指揮官だったならば、真つ先にその選択をするだろう。だが恵は命令されないと動けないロボットでもなければ、作戦のために誰かの命を踏み躪れる悪鬼畜生でも無い。呪術師であり、男子高専生であり——友と笑い合う事を最近知ったばかりの、ただの少年である。

故に、見捨てるという選択を心が阻んだ。

だが現実はどうだ。目の前には、それを考えさせる余地も無い程の絶望が立っている。

見捨てず戦えば、最低でも二人死ぬ。

見捨てれば、悠仁の犠牲だけで済む。

いずれにしろ、誰かが死ぬ可能性は高い。

……まるで雁字搦がんじがらめの紐だ。

「悠仁、俺は………っ」

……結局恵が採用したのは、悠仁の案だった。

伏黒恵は見捨てるのだ。己の意思で——友を。

くしやりと歪んだ顔を見せまいとして、反対方向を振り向きながら、恵は弱々しい声で言う。

「……死ぬなよ、悠仁！」

「もち。虎杖悠仁嘗めんなよ」

交錯し、互いに反対の方向へと向かう二人。搜索を開始するその折、恵はある一点を見つめ、一旦足を止め、再び走り始めた——。

さて、特級呪霊はというと、自身を縛っていた足元の蛹のようなものを引き割き、そ

の健脚を悠仁に見せつけるようにして露わにし、悠仁はそれに皮肉で返した。

「ハッ、フンドシ一丁になって動きやすくなりましたっか。クソツタレが」

「アッ フフウ♡」

（さーてどうする……呪力操作なんて出来た試し無えしな……けどそれでもいい。今はとにかく時間をかせ——）

——その先の思考を、全身に感じる痛みが消し飛ばした。

「お、うッ……ぶえ、ッ?」

コンクリートの壁にクレーターを作って、躯体を地へ転がさせられる。あまりの衝撃に胃の中の物を戻しそうになるのを必死に堪えた。

その衝撃の正体を分析しようにも頭が回らない。無理に起きあがろうとすると全身が軋む。上手く起き上がれないのは、左手首から先が存在しないためだけではない。雷に打たれたかのような、全身が麻痺する感覚が襲う。その正体を悠仁は知らない。だが憶測はつく。それも、あまりにも残酷な憶測が——。

（——ただ呪力を飛ばしただけ……！ 術式じゃねえ！ 呪力のバリアを押し出しただけだ!! それ以上でもそれ以下でもない!! 破壊力も、スピードも！ 何もかも格が違う!!）

一生命としての格の差が、悠仁の心に一筋の絶望を孕ませた。

（クソ、早く立ち上が——）

……だが悠仁はまだ知らない。絶望よりも深くドス黒い、醜悪で残酷なモノを味わう事を。そしてソレが、今まさに自身を嬲らんとしている事を……。

「——イ、ヒツ♡」

「ぐ——か——……う、え、うううお、え、え、えッ!!」

再び、特級呪霊の呪力が悠仁を襲う。クレーターの瓦礫を貫通して地を転がされ俯せになる。数瞬間の気絶の後、胃の中の全てを、血液とをブレンドしながら吐き出す事で目が覚めた。窒息感と、胃袋が萎縮する感覚が相まって、更に嘔吐しようとして己の意思関係なく身体を試みる。細胞の隅々までが恐怖して、膝が笑って起き上がれなかった。

だが、それを特級呪霊が待つてやる理由は無い。胸の中心にある黒点を起点に、より強力で膨大な規模の呪力のバリアが、俯せのままの悠仁を襲う。危機管理能力に身を任せて一瞬で飛び起き、鼻血が出ているのも、左手での防御がままならないのも構わず、そのバリアに向けて両手を掲げ、どうにか食い止めようと踏ん張る。

だが……それをして何になるだろうか。

悠仁は呪力操作が出来ない。そもそも教わっていない。蓮に聞いた事はあるが、何だかよく意味が分からなかった。

左手の断面傷に加え、今度は右手までもが分解されていき、激痛により腕が震えた。





助けて、蓮!! 恵!! 野薔薇!! いや、違う!! 俺が助けるんだ!!

吐きそうだ!! 気持ち悪い!! こんなにつらいなら、最初から呪術師なんて——いや、考  
えるなそんな事!!

思い出せ!! 爺ちゃんの遺言!! 助けなきゃ!! 人を!! 沢山!! 守らなきゃ!! 蓮を!! 死んで  
も!! 何のために!?

——ここで!! こんな所で死んで!!

ここで死んで!! 死ねたとして!!

これは『正しい死』なのか!? ——違う!! 違う!?! 何が違う!?

もう嫌だ!! 楽になりたい!!

現実から目を逸らすな!! コイツを通せば全てがお陀仏になるんだぞ!!

——死なせてくれ!!

——嫌だ、死にたくない!!

「考えるなあああああああああああああああああ——!!!」

——次の瞬間、感じたのは、まるで、この世界に自分だけがいなくなったような感覚。  
足元の地面が無い。死ねたのかと思ったが、それは否だった。

直後に感じた背中への衝撃、共にやって来る窒息感が、今もなお、恥を晒しながら生きている事を実感させた。

……ああ、そうか。

俺は、こんなに弱かったのか……。

50.

「……このペースなら何とか行けそうね。つつても、釘のストックはこれ一本だけだけ。もっと持ってくれば良かったなあ……」

「オレも呪力はそうでもないが、弾は使い切ってしまったな。……悠仁と恵が心配だ」  
「なら、さっさと殲滅せんめつするに限るわね……!」

そう言い合ったのは、つい十秒ほど前の事だ。能面の呪霊はほぼ祓除を完了し、一息を吐かんと大きく深呼吸した野薔薇。ジョーカーが飛び込み、野薔薇も最後の一本を刻撃しようとした所——しかし突如、その足首を何者かに掴まれ、圧倒的臂力によつて為す術なく持ち上げられてしまった。

見ると、いつの間にも能面以外にも呪霊が発生している事が分かる。能面のそれよりは小規模だが、全長5メートル二足歩行の芋虫やら、巨大な一頭身のキノコやらと、やはり種類も数も多い。その芋虫の一体が、野薔薇の足を掴んだのだ。

その折に、地に頭を強く打ったのだろう。額に擦過傷と打撲による鬱血、及び少量の出血をしましてしまっている。脳震盪を起こしたのか、根性で保っていた意識と金槌とを落としてしまう野薔薇。ジョーカーが静止状態ならば気付けただろうが、風という雑多の中から音を聞き分けられるほど、ジョーカーの耳は人間離れしていない。

他者に向けられた殺意には、自身に向けられるそれよりは鈍感だったという事か。

「レディのこそ、ん………が………つ」

「野薔薇！」

「あ、ああああああア、ア、アン」

救出に向かうジョーカーだったが、一頭身のキノコらがそれを遮る。ペルソナを野薔薇の治療に充てるか、呪霊の祓除に充てるかで一瞬迷ったが、祓除及び救出を優先し、キノコらを《剛巖》にて辻斬りした後、巨大芋虫にたどり着いた。

刹那の内に円卓を思い浮かべる。皇帝のアルカナに割り振られた、裏・ペルソナ全書にて作成した内の一角。大和政権に恭順しなかった豪族達の呼称を元とする、源頼光に對抗したとされる妖怪の一種。二本角の鬼の貌かおに、青い甲殻かかに覆われた蜘蛛の胴体。日本を『魔界』へと変貌させようと目論む、その物ものノ怪けの名は――

「ツチグモ――!!」

毒を孕んだ鋭利なる爪から放たれるそのスキルは、果たして芋虫の野薔薇を掴んでい

た腕を引き裂き、野薔薇の救出に成功する。《ジオンガ》という電撃属性の——それこそ、この《ポイズンクロウ》よりも強力なスキルもあったのだが、いかんせん電撃という事もあり、感電による筋肉の収縮によって野薔薇が握り潰される……という事態を危惧した一瞬間の思考は正解だったようだ。

切斷された腕を始めに、紫苑色の生命と握力が消えていく。すり抜けていく野薔薇の体を、優しく蝶を包むように、頭と膝裏に手を添えてジョーカーは抱き寄せ着地。金槌も拾っておこうとサードアイを発動させたが、見ると柄が折れてしまっており、使い物にならなくなっていた。回収の考えを放棄し、キノコ頭の呪霊と相對する。

……縛りの存在が鬱陶しい事この上ない。一分間野薔薇に我慢してもらおうしか選択肢が存在しないのは、流石に酷だ。加えて乱入してきた更なる呪霊の処理は、野薔薇を抱えたままでは不可能だ。頭部を強打した怪我人を揺らせないとこのもあるが。

ジョーカーは久々に肝を冷やした。両手は塞がっている。ペルソナは一分間使えない。使えるようになったとして、まずは野薔薇の回復が最優先。そして野薔薇が気絶から回復するかどうかは本人次第。

危機一髪か、万事休すか。

そのスリルに、しかしジョーカーはニヒルな笑みを浮かべた。

——ジョーカーは戦闘中、笑みを絶やさないう心にかけている。ヒロイズムから来る

ものではない。そもそもジョーカーのその笑みは、ヒーローには似合わない程に歪んでいる。

怪盗として、切り札としての責務なのだ。どのような佳境にいたとしても、苦戦していても、決して笑みは消えない。

切り札が微笑まなければ、誰が勝利に微笑むのか。女神か？ 神か？ ——否だ。ジョーカーは神を嫌っている。唾棄していると言っても過言ではない。神の存在は信じても、その在り方や行動には一切の敬意を抱かない。

信じるべきは、仲間との絆。それだけでいい。それだけで、神をも超える力になるから。

(とは強がってみるものの……どうする？ 負傷者一人を抱えたまま戦っていれば、怪我が悪化してしまうな。発動した縛りも活かせないし、流星に手厳しいな。)

……四の五の言つてられないな。切り札を切るか……)

ジョーカーの『切り札を切る』という事はつまり、縛り④——自身の肉体レベルよりペルソナのレベル数が1つでも高いペルソナを召喚・スキルを発動した場合、以降七十二時間経過するまで、ペルソナを召喚できない——が適用されるという事だ。

一分間の縛束 縛り③が将棋で言うところの王手なら、七十二時間の首枷 縛り④は矢倉囲いだ。

矢倉囲いは、前面が特に堅い囲いの一つで、角が攻めにも守りにも適用できる事まで有

名だ。だが、横からの攻撃や端に詰められるとめっぼう弱い。居飛車を好む初心者向けの戦法だと、かつて???は習った事がある。リスクは負うがリターンも大きい。それが矢倉囲い縛り④だ。

だが現在、その矢倉囲いを崩されつつある。ここで切り札飛車を切らねば、もはや打つ手は無いと言っている。恵と悠仁との援護は難しくなるが、戦えなくなる訳ではないと腹を括り、潜入前にベルベットルームで二十万円も持って行きやがった切り札の顕現のため、ドミノマスクに手を伸ばし――

「大蛇」、オロチ【鶴】!!」

――影から出ずるバジリスクと凶鳥が、残るキノコ頭を屠っていく。「大蛇」はその強靱なる躯体をもって締め上げ、【鶴】は雷を伴いながらキノコ供を八つ裂きにしていく。見紛うものか、伏黒恵の《十種影法術》の式神達だった。

光差す方へと扉は開かれる。そこにいたのは、安心と信頼のうに頭、伏黒恵その人だった。

「恵!」

「脱出するぞ、ジョーカー! 野薔薇は俺の【蝦蟇】がまが連れて行く! 援護を頼む!」

【大蛇】と【鶴】を解除しつつ、再び【玉犬・黒】と、更に【蝦蟇】を顕現させる。巨大な蛙が野薔薇を舌で包み、口に含んだ。

「うえ……」

「えづくんじゃねえよ！ さっさと行くぞ！」

流石にジョーカーでも嫌悪感を醸し出させた。恵はそれに叱咤しながら、ジョーカーと共に、己が開いた扉を潜り抜けた。

腐食した排水管が血管のように巡っている。タイルが敷き詰められた道無き道を走る、二人と二匹と口内の一人。ジョーカーは恵に、ここにいない悠仁の安否を問うていた。

「悠仁は」

「今特級と戦ってる！ 宿儺に代わろうとしてるんだ！ 俺達が脱出しねえと宿儺に代

われねえ！」

「そうか……」

徐々に速度を落とすジョーカーを、足音で察知した恵。その真剣な眼差しを見て、恵は嫌な予感がした。

「恵、脱出後に【玉犬】を借りたい」

「……まさかお前」

「悠仁を——助けに行く」

彼は言う。

真つ直ぐに、愚直に。

澄んだような、濁つたような。

当然のように、強かに。

切り札としての責務を全うする事を。

「——テメエ、マジでイカれてんのか!」

自分では出来ない事を、平然と言つてのけた。

氣付けば、ジョーカーのコートの襟を掴んで逆上していた。その眉根は悲痛に歪んでいる。諦めた者と、諦めない者……その差を、恵は直視したくなかつたのかもしれない。もう口は止まらなかつた。

「何なんだよお前はっ! 今行つたら、お前でも悠仁の巻き添えを喰らうだけだ! いくらお前が強いつつても相手は特級呪霊なんだぞ! 命を無駄に落とすだけつてのが分かんねえのかよ!!」

特級呪霊には敵わない。人間兵器五条悟しか対抗手段は無い。

まるでそう言っているようだった。

——そもそも恵は最初から、誰も勝てると思つていなかった。

恵は、共に戦う者を過大評価しない。堅実に任務を遂行するため、自身や仲間の技量を最低限度で見積もる。例えばそれがジョ切ーカ札ーでも、五最条強悟でも……五条悟に至つて



は、ある種の信頼を置いているのでさほど関係無いが。

さて、術式や身体能力には『程度』と『限界』があると、恵は考える。身近な例だと、三日前、初めてジョーカーと稽古した折の事だ。ペルソナの二体同時召喚は……不可能だった。そこが、蓮の『限界』。いくらペルソナが強力とはいえ、特級相当には通じない。そう恵は考える。

故に止めるのだ。ジョーカーの行動は無謀だと。

「それに俺は……っ、託されたんだ。野薔薇とお前を、安全な所へ避難させろって！ 決死の覚悟でアイツが言っただぞ!？」

ああくそツ……何言いてえか纏まんねえっ！ とにかく、悠仁の帰還を外で……、っ

——。頼むから……!？」

「……恵」

「——俺に、お前まで見殺しにさせないでくれ……!？」

「恵」

……だが一つ、恵は思い違いをしている。

いつもの様に、不敵に笑ってジョーカーは言う。

「任せろ」

ジョーカーにとっては、無謀こそ逆転のチャンスなのだ。

その顔に、決して諦めなんて物は無かった。

51.

「……自惚うぬぼれてた」

そう呟いたのは、虎杖悠仁その人だった。その言葉に覇気は無い。生気も無い。

その目に宿るのは、深淵の如き絶望だけ。

胸に空洞が空いたような虚しさが、悠仁の感情を締め付ける。

「俺、強くなれたと思ってたんだ。死に時を選べるくらいには……強いと思ってた……」  
ボロボロになった右手を握る。やがてポタポタと落ちる水滴が傷に染みていく。

これまでの二週間、自分は何をしていたのだろう、と思った。

ジョーカー——蓮は必死で努力して、自分を助けようと奮闘しているのに、対して自分は何をしていた。呪力操作のコツ……とまでは行かずとも、呪術戦の基礎を教わっていたならば、多少はマシな状況を切り開けただろうに——己は果たして、何を為した。

「けど……違った……っ!」

宿儺の指を喰らい、《屠坐魔》を貰い、自分よりも弱い呪霊を葬って——それを自信として積み重ねてしまった。

弱い者いじめで得られる多幸感だったのだ。振り回したとてただ虚しいだけの力を

見せびらかしたいという、そこらにいる小学生低学年の思想と何も変わらなかった。

虎杖悠仁が今まで積み上げていた自信とは、所詮その程度の物でしかない。

ずっと目を背けてきた。考えないようにしていた。それを自覚してしまつたら、蓮や皆の隣に立てないような気がしたから。

けれど、この現実からは、もはや逃げる事は出来ない。

——俺は、弱い。

「ホントは、蓮と——皆と肩並べて戦う資格すら、無かつたんだ……ッ！」

背中を守ると誓つたのに。

その背中にすら、辿り着いていなかったのだ。

死に際になって、ようやくそれに気が付いた。

悠仁にとって、あまりにも遅過ぎる気付きだった。

「全ツツ然、弱過ぎる!!」

うああああ、死にたくねえ！ 嫌だ、嫌だよおっ……!!」

でも………おれ、しぬんだ。

双眸から溢れ出る恐怖が、拭う事も出来ない指の隙間を通り抜けて、悠仁の耳元で囁いた。

………思えば、『正しい死』にずっと甘えていたのかも知れない。

親しい人や、自分が知っている人が無惨に死ぬのを見たくなかった。せめて死ぬのなら、『正しく死』んで欲しかった。『正しい死』に導きたかったのだ。だから、ずっと『死なせてしまった後』の事を考えずにいられた。

——けれど今、自分がその『死』に直面して、それが甘えだという事に気がついた。『死』がこんなに嫌悪感を引き出すものだと思っていなかった。死に方に拘る事で、本質的な物からずっと目を背け続けていたのだ。そしてそのツケを払う時が来た。それ以上でもそれ以下でもない、『理不尽な死』という可能性を考慮しなかったツケを払う時が。

ああ、痛い。つらい。苦しい。もう無理だ。早く逃げたい。五条先生ならきつと何とかしてくれる。蓮ならきつと助けてくれる。

けど、今逃げたら、囹圄作戦が全部パアだ。恵の合図だってまだ無いのに。関係ない。今逃げないと、本当に死ぬ。——いや、関係ある。死にたくない。けど、友達が死ぬのは見たくない。思考がぐちゃぐちゃだ。考えが纏まらない。

ならどうする。いや——そんなのもう解ってる。けど足が動かない。手に力が入らない。

……呪術師に悔いの無い死など無い。その意味が、今ようやく分かった気がする。ならせめて、この死が無駄じゃないって思えるように……いや、違う。

右手の指と、左手の手首から先が無い。もう以前のようには、上手く握る事も出来ない。差し出された手を握り返す事も難しくなるだろう。

けれど、生きたい。

何のために戦うのかを、一度だけ無意識の内に己に問うた事があつた。以前なら、あまり上手く形容出来なかつただろう。けれど、今なら言える気がする。……いや、そもそも単純な事だつた。小つ恥ずかしくて、口に出来ないだけだつた。

——蓮と、皆と、この先ずっと、笑い合つていたい。

なら、蓮が言つてる事を思い出せ。己に問え。このままでは俺は、何も為し得ぬまま、『運命を円滑に進めるための歯車』のままで生を終える。そんなの、頭では許せても、心では許せない。

——諦めるのか？

地べたを這いつくばつても、泥水啜つても、雑草のように踏みつけられても——

——俺は、絶、対、諦、め、る、も、ん、か、だ。  
俺は、虎杖悠仁なんだ。

無い手と砕けた手で、両頬を叩いて気合を入れ直す。片方の鼻を押さえて、鼻血ごと垂らした鼻水を吹き飛ばした。覚悟の再形成などとうに済ませた。

涙はもう、流さない。

「フウ——ツ、うし、もう泣かねえ。こんな所で、こんな奴に殺されてられつか

よ……………あークツソ！ 考えたら腹ア立って来た!!」

ならば喰らわせろ。恥辱も後悔も、無念も憎悪も、そして湧き上がる、止め処ない怒りも。拳に乗せて、無い指を握りしめて、その一步を踏み出せ。

これは、生きるための戦いだ。虎杖悠仁が、また皆と一緒に笑い合うための戦いだ。負けれない。負けたくない。……負けるものか。

覚束おぼつかない足取りで、乱れ切った呼吸で、ぼろぼろの右手で、ぐちゃぐちゃな身体で、碎けた奥歯を食いしばって、虎杖悠仁が今持てる全霊の力を動員して、一步、前へ——!! 「う、おおおおオオオッ!」

渾身の一撃は、しかし軽々と受け止められる。呪霊はより笑みを深くして、反撃の右拳を握り——その右拳を、防御に回す事になった。

呪霊自身も驚くべき事だった。謂わゆる第六感に突き動かされた事による行動だったが、まさか存在存在しない左拳も動員して来るとは、思っても見なかったのだ。……否、もはやそれは問題ではない。

——止まらない。右が駄目なら左、左が駄目なら右。右、左、右、左……その応酬は、微弱ながら、しかし確実に速度を増していく。

悠仁自身の膂力に傷口が抉れ、激痛が襲っているのは確実。顔を顰め、目尻には水滴が溜まる。しかしその水滴は、絶望から来る物では無かった。もはや悠仁に絶望は無

かった。

この拳が二度と何かを掴めなくなろうと、この脚が我が躯体を支えられなくなろうと、この口が一切の呪詛を吐けなくなろうと、虎杖悠仁は厭いとわれない。呪霊の口から、段々と余裕が無くなっていく。

呪力操作は安定していない。一発一発の威力はまちまちで、もし宿儺がこの状況を見ていれば——悠仁には分からないが現に見ており、悠仁を鼻で嘲笑っている。だが、今の悠仁には、そんな事を気にする余裕など無い。

——今の悠仁の頭には、眼前の敵のニヤケ面をブン殴る事しかないのだから。

現在悠仁の心は、負の感情が大半を占めている。無意識下だし、呪力操作も覚束無い。とはいえ、今の悠仁は呪力を拳から放出している。それが出来ている。だが拳だけでは足りないのだ。喧嘩をこなしてきた経験が、悠仁のポテンシャル強化に拍車をかけた。親指の先から、踏ん張るための足と腰、そして最高威力を叩き出すためのバネとしての役割を果たす体幹。力を込めろ、殴り続けろ。

人間離れたラツシュのための肺活量を支えるための肺胞、気道。拡げろ、微弱な勝利を確実な物にするために。

微弱なる握力を、限界を超えて発揮するための下顎と上顎、何より奥歯。折れたって構わない。構わないから、進み続けろ。

そして鋼よりも硬く握られた拳。『左』は無いが、仮想の『左』を空想中に生み出して無理やり握れ。そして叩きつけるのだ。

かくして、まばらに強化された躯体が、段々と特級呪霊を追い詰めていき——そうして殴り続けるうちに、均衡は崩れた。悠仁のラツシユに、特級呪霊でさえも耐えられなくなつたのだ。体幹が崩れ、後方に仰け反つてしまい——その瞬間を、虎杖悠仁は見逃さなかつた。渾身の力を込めて、肚の底から湧き出る怒りを、彼奴の憎たらしい顔面に、右拳と共に叩き込む——！

「——ああああアアアア ツツ!!」

獣の如き発声と共に、果たして、気色悪いほどに真っ白いその歯を、何本かへし折つてやる事に成功した。

流石に斃れる事は無かつたが、それでも良かった。してやったりと、ジョーカーの真似をして、口の端を上げてみる。……が、その口は痛覚により苦悶に変わっていく。見ると、呪霊に叩きつけていた拳や手首は、表皮がさらにボロボロになり、筋肉が剥き出しになってしまつていた。出血も先程の比ではなかつた。

「あー、もおおお！ 殴つてる方がいってえし！」

——けど、つへへ、どうだよ特級呪霊！ そのニヤケ面に一発お見舞いしてやったぜ、この野郎！」



ぐちゃぐちゃになった右手で指差して、悠仁は彼奴を見遣る。

その顔は、どこか晴れやかだった。

倒れ伏した特級呪霊。ゆらゆらと立ち上がって、折れた歯を覆い隠すように手で押さえる。次の瞬間には、その全てが完治していた。額に浮き出る血管が、奴の苛立ちを想像させる。

——遊びは終わりだ。そう言わんばかりに悠仁を睥睨し——

「ウアオ————ンッッ!!」

——犬の遠吠えが、突如二人の耳に入り込んできた。

「玉犬の声……恵の合図だ……へへ、やっとかよ。」

「ざまーみろ、テメエら。」

仕事は終わった。そう言わんばかりに、悠仁は目を瞑る。

全く不本意だが、この後を呪いの王に託し、虎杖悠仁は表層意識から消えていった——。

「……つくづく、忌々しい小僧だ」

果たして、入れ替わりには成功したようだ。不快感を隠そうともせず、むしろくしやしなから反転術式で全身の傷を癒す。だが心中までは癒せない。

虎杖悠仁の目を介して、宿儻は先刻の情景を見ていた。鼻水まで垂らして泣きじゃく

るその姿を滑稽と思ひ嗤つたが、次の瞬間には絶望の表情は抜けていた。敵わぬ強敵を前にして、その心持が晴れやかだった事に、宿儺は何とも言えぬ不快感を抱いた。

両面宿儺にはその感情や感覚の解を持ち合わせていない。ただ、虎杖悠仁には分かる。千年生きた己と、齡僅か十五歳の餓鬼との差が、どうしても不愉快だった。

絶望という感情。それを見るためだけに、その愉悦に浸るためだけに、立ちほだかるもの全てを破壊したと言つても過言ではない。

だがこの体の主はどうだ。絶望を前にして、泣きじやくり、御託を並べ——そして最後には立ち向かった。最後まで生きる事を諦めなかった。どこにそんな勇気があったというのか。いつそれを宿したというのか。両面宿儺には分からなかった。

ならば、その勇気さえも粉々に消し飛ばしてくれよう。苛々しながら、宿儺は特級呪霊を諭しつつ、いかにすれば虎杖悠仁を後悔させられるかを考えていた。……当の特級呪霊は、宿儺に怯えるだけだった。

「——チツ、少し待て、今考えている。」

(伏黒達を追つた所で直前に代わられるのがオチか……。となると、奴等が一番困る構図は……特級呪霊を伏黒あの小僧の所に連れていく、か。これだな。ハッ、振り出しに戻してやる)」

下卑た笑みを浮かべつつ、右手の指を復元しながら宿儺は言う。

「おい、餓鬼共を殺しに行くぞ。ついて来い」

完全に治った右手の人差し指で、ボディランゲージを使いながらぶつくさと言い……そうしてハツと覚醒した特級呪霊は、宿儺の圧倒的恐怖による息切れから何とか抜け出し——両の掌に呪力を込めるに至った。眼前の存在の正体を知らぬとは雖も、愚かにも夢想してしまったのだ。

この両面宿儺という存在よりも、己の方が強いと。

果たして、その濃密な呪力のエネルギー塊は、王に向けて放たれた。——が。

「はア—— 莫迦が」

額に血管を浮かべ更に苛立ちながら、宿儺は一瞬で完治した左手でそれを受けた。

その背後にて巻き起こる爆発と粉塵。巻き込まれた宿儺だったが——

「あ、いかん。こっちも治してしまった」

「エ、エエエエエエエツツ!」

完全無疵の状態で、彼はそこに立っていた。屁でも無いというかのように、あつげらかと切断されていた左手首から先を治した事に、宿儺は「あーあ、やつちやった」と溜息を吐いた。どうやら宿儺は、高度な反転術式を操る事が出来るらしい。

人間の体を治す事は、呪霊の体を治す事と訳が違う。それも、失った部分をそのまま治すとなれば尚更の事。今のジョーカーでさえも、このような芸当は出来ない。『塞ぐ』

のと『再生させる』のとは、反転術式のレベルに差がありすぎるのだ。

それを宿儺は、至極当然のようにやってのけてしまった。

「散歩は嫌か？ ……まあ、元来呪いとは生まれた場所に住み着くモノだからな、良い良い。はは——」

特級呪霊は気付かなかった。先刻の行いが、自身の寿命を縮めるだけにしかならない事に。

特級呪霊は気付く。先程まで目の前にいたはずの両面宿儺がいない。逃げた？ 否、重圧は今もなお感じる。ならばどこに行った？

そうして宿儺を探すその刹那——特級呪霊は気付いてしまった。

——ならば、ここで死ね。

生まれたばかりであるはずの、己の死を。

52.

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ——」

錆びた鉄の匂いに噎せ返りそうになりながら、怪盗と黒犬が疾走する。手袋の赤い軌

跡が闇に浮かんで消えて行く。釘崎野薔薇は救出済み。後の安否を伏黒恵に託した。おそらく伊地知潔高の車へと避難、そして救援要請を頼んだ事だろう。……だが、一級以上の術師は軒並み高専にはいない。『望み薄』の希望は考えるな。

角を曲がり、闇を抜けると、拓けた場所にジョーカーは出た。

見覚えがある。あり過ぎる。釘崎野薔薇に手を伸ばし、そして自身も巻き込まれたコンクリート壁のプール。肝心の悠仁と特級呪霊は見えなかったが、壁の一面が崩壊しているのが見えた。巨大な穴だ。おそらく悠仁が戦った時に出来たものだろう。臆せず乗り越える一人と一匹。そして――

「ワウツ」

「――見つけた。ありがとう、玉犬」

そう言い撫でてやりつつ、目に写る少年の安否を確認するために、ジョーカーはその名を叫んだ。

巨大な下水路の橋の上、そこには、一人の少年がポケットに手を突っ込んで立っていた。

「悠仁ー！」

飛び降り、着地しながら少年・悠仁の様子を見るが――

「……………ン？ ……ツハハ、飛んで火に入るとは正にこの事か」

「……宿儺、か」

ジョーカーは恵が帳を解除している事を信じ、予め立ち上げておいたSNSで恵にコールし、直ぐに電話を切った。——直後、泥のように溶けていく【玉犬・黒】。ワンコールして直ぐに切ったのは、ジョーカーなりの、簡易的な緊急信号だった。

特級呪霊の姿は見当たらない。……否、宿儺の背後を見ると、低級の呪霊よりも格段に濃い紫苑色の焰が立っているのが分かる。おそらくそれだったものだ。呪霊は宿儺によつて祓われたのだろう。

「……とにかく、特級呪霊を祓ってくれた事は確かだ。ありがとう」

「は？ 礼……だと？」

宿儺の生において初めて、呆気にとられた。

「——く、はははははははは!! 小僧、俺に礼を言った人間は貴様が初めてだぞ！ 呪術師が呪いに礼などと、これほど滑稽な事があるか！」

腹を抱えて嗤う宿儺。戦闘以外で人間に笑わされたのは、これが初めての事だった。「実に愉快だったぞ、小僧。呪術師など辞め、芸人にでもなつたらどうだ」

「生憎、オレは呪術師である以前に怪盗だ。スリルが無いと怪盗は死んでしまうんでね。今の所、辞めるつもりはない」

「良く回る口だ。切り刻んでやれば、その口の勢いも止まるか？」

「さあ、どうか。刻まれた事がないんで分からないな」

軽口を叩き合いながら、しかしジョーカーは疑問に思った。

「……悠仁、どうした？ 何故代わらない？」

「ン？ ああ、あの小僧なら戻らんど。あの虫を葬るのに、何の縛りも無く代わった『ツケ』が来ている。俺と代わるのに少々手こずっているようだ。つまり今、この体の主導権は両面宿儺（俺）にある」

「わざわざ悠仁が代わるのを待つ……訳、ないよな」

「良く分かっていないか。……しかし、それも時間の問題だろうな」

嫌な予感がする。宿儺が悠仁のパーカーと制服を剥ぎ捨てて——

「そこで、今俺に出来る事を考えた」

「何を——」

静止を求めようとするが——言い終わらぬ内に、肉が抉れる不快感が聞こえた。

発生源など語るまでもない。両面宿儺の——虎杖悠仁の心臓部分を、宿儺がその鋭腕を以って抉ったのだ。夥おびただしい量の出血を前にして、ジョーカーは一瞬硬直し——宿儺がしている事の理解に数秒を要した。

「な……！」

「小僧を人質にする。俺は心臓こが無くても生きていられるが、小僧はそうもいかん。俺

と代わる事は死を意味する。更に——駄目押しだ」

そう言つて、持つていた両面宿儺の指を飲み込む。隠し持つていたのか、と蓮は直感した。両面宿儺の力は指三本分ほど取り戻されてしまったという事になる。全盛期の二十分の三がどれほどまでに強力なのか、ジョーカーには想像が付かなかつた。

「さて……準備はこれくらいで良いか。ああ、もう怯えて良いぞ。

——殺す。特に理由は無い。」

静寂が、二人を包んだ。

だがその静寂は、長くは続かなかつた。ジョーカーが口を開いたのだ。出来るだけ穏やかそうにして、腹の底が煮え滾る思いを必死に堪えて。

「……オレは、心のどこかで、お前に期待していたのかもしれない」

「お前が悠仁を助けてくれるなら、それでも良いと思つてた。何をしようが、悠仁や、その周りの人の弊害にならないのなら……誰も悲しませないのなら、どうでも良かったんだ」

「……それで?」

「……甘かつた。呪いなんて、結局どこまで行つても呪いなんだ。そんな事、最初から解つてた筈なんだけどな……」



もう限界だった。怒りは収まるところを知らない。

ジョーカーの技量では、心臓の再生は不可能。そもそも再生に見合うスキルを持つペルソナはいない。事前に加えていけば……否、たればの話は止せ。既に自分は『詰んで』いる。全ての希望的観測を排除せよ。

——敵を見据えろ。アレはもう、虎杖悠仁ではない。

「——両面宿儺。貴様は、祓弊すうべき呪悪いだ」

「——ハッ。せいぜい俺を興おこじさせてみる、怪盗とやら」

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .  
# 9   T h e   M o r t a l   C u r s e d   E n e m y

## #10

53.

夜の帳が消える。

雨の雫が波紋を作るように、夜から濁った空を生み出していく。暗雲は未だ絶えず、雨風は枯れる所を知らない。

そんな雨天を、英集少年院の裏口の門前にて傘もさささずに男と少年が話し合っている。少年は、頭部に包帯を巻いたまま眠る少女を抱き抱えている。伊地知潔高、伏黒恵、釘崎野薔薇である。

現在恵は、院内で起こった出来事を潔高に報告しつつ、車に野薔薇を乗せている。華を扱うように後部座席に乗せてやると、少しだけ安堵が募った。

釘崎野薔薇の治療は完了しているが、意識は未だに戻っていない。そこまで出来れば苦労はしないが、状態異常を治せるほどの利便性は、反転術式にもジョーカーのペルソナにも無かった。

「野薔薇の治療をお願いします。それと念のため、避難区域を500メートルから10キロに拡げてください。その後、伊地知さんは……居ないと思うけど、一応一級以上の

術師に援護要請を」

「努力いたします。伏黒君は？」

「俺は、悠仁とジョーカー……蓮が戻ってくるのを待ちます。悔しいですけど、せめて出迎えくらいはしないと。……アイツらに任せつきりつてのは、どうにも癪しゃくですから」

「分かりました。……真っ先にご友人の心配をするなんて、変わりましたね、伏黒君」

「……えっ、そうですか？」

「ええ。同年代のご友人は貴重ですよ。大切になさってください」

「そ……そう、ですね」

「では、私は釘崎さんを病院に送り届け——」

——と、潔高がそう言ったその時、恵のスマートフォンがワンコール分だけ振動して、直ぐにその反応が消えた。恵には思う所があり、それが緊急事態である事が分かっていた。

「今のは？」

「蓮です。きつと悠仁を見つけたんでしょう。悠仁の応急処置は、俺の方でやるときますんで」

「分かりました。くれぐれも、お気をつけて」

普段と変わらぬ仏頂面で恵が答えると、激励しつつ潔高は車を急発進させた。恵は車

を見えなくなるまで見送り、そして、目を逸らしていた少年院へと向き合った。

……恵は、潔高に初めて嘘を吐いた。

「フウ——来い、【玉犬】」

一度深呼吸の後、【玉犬・黒】を顕現させる。ジョーカーと共にいた【玉犬】は、ジョーカーからの緊急信号が来た時点で、術式を解除して消していた。膨れ上がった影が形を為していく。ほんの少しの嘔気を孕みながら、恵は少年院の戸を開こうと歩みを進める。

その口は固く結ばれ、今にも倒れそうなほどに顔色が悪い。それもその筈、今から恵がやろうとしている事は、恵らしい、理性的な行動ではないのだから。

『悠仁と蓮を待つ』……なんて、嘘だ。潔高は人が良い。それを知っている恵は、潔高の人の良さに付け入った。申し訳ないとは思ったし、後悔もしたが、むしろ二人を見捨てた事の方が大きかった。

恵の心境はぐちゃぐちゃだった。仲間を犠牲にした事、それを承諾した事、そして犠牲になる仲間が恵を恨まなかった事で。恵自身、どうして良いか分からなかった。だが、動かなければならないのは確かなのだ。

一歩進むごとに、足が重くなっていく。泥の中に居るかのように、鉛のように。

悔恨の鎖が、徐々に体を縛っていく。雁字搦めとなった体に鞭打ち前へと進む。

足が重いのは、体が死を恐れるため。知った事かと奥歯を噛み締め地を蹴った。耳元で囁く悪魔の声。『お前では不可能だ、諦めろ』と、徒に何か言っている。潜在的な恐怖が恵を襲う。滲む冷や汗に、どうしようもなく引き返したくなる。後悔と苦悩に押し潰される。あの二人の救出に行つて、仮に行けたとして——  
(……どんな顔して会えば良いんだよ)

——瞬間、少年院の棟の一部が、轟音と共に破裂した。

54.

その場に居れば、きつと誰もが失禁しながら逃げ出すか、気絶するか二つに一つを選択していただろう。それほどの重圧。

かつてジョーカーが屠つた神々を想起させるほどの絶望感。ジョーカーは、その神に匹敵する呪いを前にして、しかし何時に無く冷静だった。冷徹に、目の前の現象を睨んでいた。

「いかんな」

緊張状態が続いていた。数分か。数秒か。あるいは一瞬か。ジョーカーにとって永遠にも思えたそれは、両面宿儺の一声で打ち破られた。

「虫を倒した影響で領域が消滅しかけている。巻き込まれてしまうな……それにここは

窮屈だ。

——よし、外に出よう」

——瞬間、ジョーカーが見る景色が、地下水道のそれから鼠色の空に移り変わった。直後に嫌というほど味わう窒息感と背の痛み、そして浮遊感。考えずとも理解する、宿儺の怪力。咄嗟に呪力を纏った両腕で防御していなければ、全身が爆発四散していた。そう思わせるほどの脅力。これで全盛の二十分の三だというのだから未恐ろしい。

だがジョーカーは、これで確信に至った。

実力二十分の三の両面宿儺に対して、およそレベル四〇程度かつペルソナや縛りを有効活用するジョーカーで、ようやくトントンかそれよりちよつと下という事。宿儺の張り手に直撃した両腕は、未だにじんじんと痛むが折れてはいない。

それは宿儺にも感じたようだ。やや本気で放った——それこそ、亡骸と化したあの特級呪霊に放った物よりも強力な張り手は、しかしジョーカーに外傷を与えるには至らなかった。

だがそれだけで終わるつもりなど、両面宿儺は毛頭ない。まるで瞬間移動の如き高速で、空を飛ぶジョーカーの更に上を跳んでいた。両指を組んで握り合うダブルスレッズハンマーを型取りながら、ジョーカーの脳天へと肉薄する。

「なるほど。俺を祓うなどと、大口を叩くだけの実力はあるらしいなッ」

「——ッ、オンコット！」

インド一有名と言つても過言ではない叙事詩『ラーマーヤナ』における、ヴァラナと呼ばれる猿族の將軍であり、『戦車』のアルカナに割り振られた英雄、オンコット。不安定な体勢のまま召喚した猿の武將が握る片手剣は、『絶妙剣』という力スキルとなりて、こちらも宿儺の首に肉薄する……！

「ほう」

振われた剣は、しかし急速に体を捻られ避けられてしまう。だが体勢を崩す事には成功し、握られたダブルスレッズジハンマーが振われる事は無かった。

縛り③の適用。これよりジョーカーは一分間、ペルソナを発現する事は出来ない。召喚するのであればスキルは必ず当てなければならぬのだが、外してしまったのは痛手だった。

雨が降っている。暗雲は未だ晴れるところを知らない。

雨天の英集少年院の正門広場にて軽快に着地する宿儺。ジョーカーは、少年院屋上の縁ふち付近——宿儺を見下げるように、軽やかかつ華麗に着地した。

「俺を見下ろすか、怪盗」

「断つておくべきだったか？」

「いや何。馬鹿と煙は何とやらとは、よく言った物だと思っただけだ」

軽口を叩き合つた直後、宿儺が消える。頸うなじが粟立つのを感じる前に、ジョーカーは《剛巖》を前に構え、刃の腹をもう片方の手で支える。第六感はジョーカーの身体を十分に守つたようで、宿儺の顔と、呪力で強化された拳とが、腕に伝わる衝撃と、靴底が屋上の床を削る音と共に眼前に迫る。

「ぐ——！」

「は、これも耐えるか！ 良いぞ怪盗！ お前はあの虫特級よりも幾分か味わい甲斐がありそう、だっ！」

拳と刃の拮抗は、果たして拳の勝利に終わった。崩される体幹に追い討ちをかけるように、鳩尾に強烈な左の貫手が刺さる——のを、崩された勢いを利用して後方宙返りした事により緊急回避。その爪先は頬をほんのりと掠るだけで済んだ。

だが驚くべきはジョーカーの身体能力。呪力を以て強化している肉体は、後方宙返りにより空中を舞つているといふのに、更に行動を起こせる。かつての怪盗としてのスタイルを、ジョーカーは徐々に引き出しつつあった。

上体を捻り、宿儺に直面する。そのジョーカーの身体能力を見て、宿儺は若干目を見開いた。

「喰らえ——ッ」

横薙ぎの赤い閃光が屋上を疾る。近距離にて振われた《剛巖》は、しかし上体を反ら



した宿儺の鼻先スレスレを擦り、髪を数本失わせるだけに終わる。未来予知にも似る動体視力を持つ宿儺でさえ、至近距離の斬撃の回避は完璧には出来なかつた。今度はジョーカーが攻める番だ。

深い体勢となるように着地したため、アキレス腱の伸縮の用意は出来ている。着地から一秒も無い刹那、倒れ込むようにして地を蹴り、一気に距離を詰めつつ、逆手に構えた右の《剛巖》を振るう。

——一閃。

風を切る音が、体勢を整えた宿儺の呪力で固め放った左拳に直撃する。

だがジョーカーも、ただナイフを振るつた訳ではない。両面宿儺という生物は、前世にて倒してきた強敵や神々とは更に格が違う事を、二度の殴り合いで既に分かっている。

呪いには呪力を以て立ち向かうべし。既に呪力の籠っている呪具《剛巖》の刀身に、ジョーカーは更に呪力を纏わせる。いつかH○NTER×H○U○TERで読んだ技の一つである『周』を、ジョーカーは再現した。

H○NTER×H○U○TERにおける『周』とは、自分剛以外の物体を自身巖の一部と認識し、オーラ呪カを纏わせる応用技だ。オーラ呪カを纏わせた物体は、シャベルなら岩のように固い土さえもプリンを割く如く掘り進められるし、ナイフならばその切れ味が増すとい

う技術の事を指す。

呪具を扱う以上、それっぽい事を事前に教わってはいたものの、五条悟との稽古では使わなかった（と言うより寸前で止められるので意味がなかった（更に言えば昨日教わった））技術。実戦で使用した事が無かったため完全に博打だったが、どうにか成功したようだ。

更に鋭利になった《剛巖》が、宿儺の呪力のガードを削っていき、やがて皮膚へと到達する。跳躍から攻撃に至るまで、僅か三秒にも満たなかった。

自身の堅牢なる呪力が削られるのを直感した宿儺は、空けておいた右拳を放ち、ジョーカーの頭部へと迫る。

だがその間も、《剛巖》は左拳の指の腹を抉り、指を断たんとしている。右の毒手が到達するよりも先に、左の苦手が碎け散るだろう。だが宿儺には、現時点でのジョーカーを軽々と上回る程の驚異的な反転術式がある。左が碎けようが、治してしまえば問題にもならない。

しかし、その思惑と拳は《剛巖》が遮った。

《剛巖》の切れ味は、宿儺の予想を上回るレベルに達していた。

違和感を抱かせる左手を尻目に見ると、親指を除く全ての左手指が切断されているのが分かった。そしてそのまま振り抜いて、右手の指さえも切断しようと目論んでいる。

加えて、力と体重を込めていた左拳がその目論見に拍車をかけた。

「おっと」

側から見れば自分から当たりに行くようにして、ついに右手の指すらも切断されてしまった。右手指もが切断されたのを直感して、回避を併用しつつ得物を振り抜き、ナイフを順手に構え、宿儺を直視した。

……些か低く見積もり過ぎていたやもしれんな。

鼻を鳴らし、愉悦に口を歪めながらながらそう思い、宿儺は振り抜かれた得物の担い手を見た。

攻守が交代する。ジョーカーの着地から五秒、左手指の再生と共に、宿儺は先程よりも加速してジョーカーに迫る。僅か〇・五秒で再生が完了しており、掌の再形成は済ませた。受肉したあの夜の如きドス黒い呪力が孕んでいく。

——拙います！

ジョーカーの警鐘が危険を察知した。ペルソナが使えれば、オンコットの持つ《テトラカーン》という、物理的攻撃の一切を一度だけ反射出来るスキルが有効なのだが、生憎使用後から十秒程度しか経っていない。縛りを破る事は死に繋がる。加えて横幅の無い屋上の足場では、満足な回避は難しい。

「ギア、これはどうだ？」

——そして、地と空を扶る四つの鉤爪。振り下ろされた音速の斬撃の嵐が、コンクリートとガラスとを、瓦礫と砂へと破壊していく。この威力のそれは、人間の肉が耐えられるものではない事は一目瞭然であった。

「——っ、はあッ」

そこで、ジョーカーは『賭けに出た』。一か八かで宿儺に背を向け、正門広場とは別の運動場へと降り——二秒後、宿儺と同じ目線に至った。

空中で展開したワイヤーアンカーが宿儺の起つ棟のすぐ下の窓辺に突き刺さり、完全に着地し終わる前に巻き取りが始まったのだ。ジョーカーは間一髪、コートの裾の一部を折り取られるだけで済んだ。追い討ちは来ないらしかった。

「そう凌ぐか……まずまずだな」

振り向きながら宿儺が言う。

だが少年院は先の衝撃波により半壊してしまっていた。宿儺が距離を詰めるのも時間の問題だとジョーカーは考えつつも、しかし二者間で距離が空いたため、状況を整理する余裕が出来た。それは宿儺も感じたようで、顎に手を当て思考していた。

（——やはり強いな。）

決して傲っていた訳じゃないが……体術、筋力、敏捷性、そして反転術式……まだ五条先生よりは遅いけれど、どれを取っても特級品だ。縛り付きで呪力無しの体術だけ

なら、今の宿儺なら足元くらいに及ぶ程度の自信はあるが……いや、それよりも今はどうにかして悠仁を助ける方法を考えないと。

……一番手つ取り早いのは、宿儺に『心臓を失った状態では勝てない』と思わせる事か。奴は心臓がくとは言っていたものの、ダメージはあるはず……殆どそういう風には感じないが。

だがそれこそソつてきた奴に術式を使われたら、オレだつてどうなるか分からない。呪術全盛の平安時代で覇権を握った宿儺だ、どうせ術式もチートなんだろう。

なら、『悠仁の心臓をオレのペルソナで治す』か？ ……オレに出来るか？ 心臓が『傷ついた』訳じゃない。『欠損』しているんだ。縛りで強化されているとは言え、《中程度回復ディアラマ》を重ね掛けして治せるのか？

……いや、仮に治せるとしても、隙も時間もなさ過ぎる。戦闘不能から再起させるスキル、あるいは全回復させるスキルを持つペルソナは今いないし……その前に悠仁が帰ってくるだろうな。そもそも中途半端に治したら悠仁が危ない。やはり前者の手段で、宿儺にオレを認めてもらおうしか——

ジョーカーは、自身の思考に顔を歪め、己の得物を強く握った。舌打ちしたのは言うまでもない。

(違うだろ……！ 認めて『もらおう』んじゃない、認め『させる』んだ！ ヤツのカリス

マに惑わされるな……!」  
 (……妙だな)

ジョーカーが思案する中、やはり右指を一瞬で再生した宿儺は、眼前の人間をただ疑問に思っていた。

(奴のペルソナとかいう式神……ただの式神ではない。伝承の生物やら物ノ怪、あるいは英雄を従えているようだが、にしては特異性がさほど無い。従来のものでその性質を持ち合わせていないのか? ……いや、そもそもそれが無いのか? その割には、何やら奇妙な技を使うが……)

いや、それよりも奇妙……と言うよりは意味が分からないのはあの格好だ。叩いてみて分かった。アレは呪力で編まれたモノ……というよりは、奴にとつて『全身に呪力を纏った想像』<sup>イメージ</sup>と言えればいいか。……なるほど、アレは一種の防護服であり、肉弾戦となれば同時に鋒にも成り得るのか。だがそれなら、わざわざ服を編む必要もないだろうに。そもペルソナとあの格好に、何の関連性がある? いや、そもそも何故、奴は『怪盗に拘る』?

……分かった。平安の世でも、このような奇怪な呪術師に会った事は無かった。呪符を使うありきたりな式神ではない。術者本人の能力も高い。拳銃は今使つてはいないが、弾切れとは考えん方が良いな。小細工も搦手も躊躇いなく使う……その勝利に対す

る貪欲さは、鼠輩そはいながら目に見張る物がある。……そうか。奴の強みは、戦術の幅が広い事か。

——だが、何だこの違和感は？ まるで、ずっとそういう戦い方をして来たような熟練ぶりだ……あまりにも戦い慣れしすぎている。五条悟に匹敵し得るほどの実力を、コイツはどこに隠し持っていた？

およそ、仲間にも伝えていない力があるな。小僧を介し情報を得ている俺でさえも、奴の隠し事は見破れん。こと隠蔽において、奴は俺と同等……いや、ただ喋らただけか互いに。怪盗とは名ばかりと思っただけだが、見識を改める必要があるな。

しかし、考えれば考えるほど謎が深まるな……探りを入れてみるか？

「怪盗、お前のペルソナとやら、『本物』ではあるまい？」

意味を理解しかね、ジョーカーは宿讎に問う。

「……どういう意味だ？」

「いや何、ただ仮想怨霊を従える術式ではないという事は推察が行くからな。お前が先程召喚した……確かオンコットとか言ったな……アレはその出立ちからして恐らく、インド印国の伝承の生物か、あるいは物ノ怪なのだろう。何かしらの逸話があるのだろうか、にしては歯応えがないと思っただけな」

「……」

「だがより疑問なのは、お前のその出立ちだ」

「怪盗服が？」

「ああ。自身で考えた事は無かったか？ お前の術式が真に《ペルソナ》であるならば、

『その服の存在』はおかしいとな」

「……もしかして似合っていないのか？」

「阿呆かお前？ ……まあ、この際それはどうでも良い。真に問題なのは、その力を今までひた隠しにし続けてきたお前の魂胆だ。この小僧を庇う目的も理由もな。この小僧に、お前がそうするほどの価値はない。

——と、以前ならそう言っていただろう」

そのように、宿讎は一旦言の葉を紡ぐのを遮った。

「先程も今際の際にて怯えに怯え、ベラベラと戯言を吐かしていたのだが……お前の言葉を思い出したかと思えば、急に泣き止んだ。赤子の如くな。そして——その肚の内に、既に絶望はなく……あり得んはずの『勇氣』を孕んでいた」

「……勇氣、か」

「……絶望の境地に居ながら、不遜にも希望を抱くなど本気で狂っているとしか言えん。……ああ、不愉快だ。実に不愉快だった。お前が何かを吹き込んだのかとも思ったが、吹き込んだ所で希望に変わるような絶望では無かった。



小僧にとって、お前はよほど何物にも代え難い人間らしいが、故にこそ、殺す前にお前に一つ問うておきたい——」

——お前は一体何者だ、ジョーカー雨宮蓮。

55.

「爆発?! ——蓮!!」

少年院の入口へと赴こうとしていた恵は、突然の爆発音に耳を塞ぐ。それが何故に起こったかの推察はすぐに終わった。ジョーカーと呼ぶのを忘れ、恵は音の方向へと走り始めた。

足は重い。腿を思い切り殴り、歯を食い縛り走り続ける。

普段の恵であれば数秒と経たずたどり着ける道のりが、無限に続いているかのように思えた。——そしてその足は、恵が直視した光景によつて止まる事になる。

「——っ、」

たった十秒きりの戦争。

そうとしか恵は形容出来なかった。

あまりの光景に、恵は息を呑む事しか出来なかった。

化物が疾る。怪盗が耐える。

怪盜が駆ける。化物が嗤う。

応酬は二、三度。けれど、恵の目を奪うにはそれで充分だった。

ただ呆然と、しかし魅入られたように。

伏黒恵は、その刹那をずっと観ていた。

(これが、宿儺と蓮の実力なのか……?)

……圧倒的にレベルが違う。

その刹那の中で、恵は絶望を覚えていた。

——呪術師の成長曲線は、必ずしも緩やかではない。蓮は——ジョーカーはあつという間に恵を追い越した。蓮の急成長ぶりは、恵から見ても凄まじいものだった。彼が科した重すぎる縛りがその所以なのだが、恵はその事を知らない。ましてや、破れば死ぬ縛りなど組むはずがないと思っている。あまりにもリスキー過ぎるからだ。

万が一、破らなければならぬ場面に直面してしまったならば……それこそ人の生き死にが掛かっている状況に出会でくわしたならば、蓮はどうするとかのか。血の滲むような努力の賜物である事は恵も重々承知しているが、恵には、蓮が死に急いでいるようにしか見えなかった。

いや………多分そうではない。

類似する術式を持っている自分にも、蓮と同じような力があれば、義姉は——伏黒ふしくろ

津美紀は、昏睡状態にならずに済んだ。そうならないように『上手くやれた』。そんな気がしてならないのだ。

不平等な現実のみが、平等に与えられている。因果応報は全自動で罷り通る訳ではない。そんな事とつくに分かつてる。

けれど、蓮を見てみると、津美紀を守れなかった時のあの不甲斐なさを思い出す。どうする事も出来ない歯痒さが、鮮明にぶり返してくるようで……その力が、恵にはどうにも羨ましかった。

……そうして恵は、友人として孕んではならない感情を抱きながら、口元を悔しさに歪めた。

（余計な事は考えんな。……俺の弱さがそうさせたんだろ、目を逸らすな。

理解わかってただろ。いつかはこうなるって……悠仁宿願と戦う事になる時が来るって……）

蓮と出会ってから後悔だらけだ。悠仁に業を背負わせてからというもの、自責の念が絶えない。この先もずっと、決して永くはない友の『死』を目の当たりにしてからもずっと——死ぬまで絶える事は無いのだろう。自己犠牲精神に満ち溢れ、恵の所為ではないと言ってくる二人の存在が、より恵を追い詰めていった。

救いたいとは思っていた。だがいざという時には己の手で終わらせなければならぬとも思っていた。……そう思っていたのに。

勝てない。あんな化物両面宿儺に勝てるはずがない。戦う前から分かれてしまう。

——出来ない。俺に両面宿儺は殺せない。戦わずとも分かる圧倒的な実力差が、惠の意気を消沈させていく。

だが惠には、呪術師として大衆の安全を守る義務がある。最低限でも、惠はそれを果たさねばならない。

(……そうだ。いつだって俺は、救う奴と救わねえ奴を選んできた。

今回だってそうだ。いつもと同じように——俺は虎杖悠仁両面宿儺を——雨宮蓮ジョーカーを——)

——瞬間、惠の脳裏にフラッシュバックする、たった二週間の記憶。

悠仁への決意が綻んでいくのが、自分でも分かる。涙さえも出てしまいそうな、眩しい日々を鮮明に思い出してしまう。暗く孤独に生きるつもりだった人生を、どうしても邪魔されてしまう事に、何故か嬉しきを感じてしまう。

はつきり言う……今までの二週間は、居心地が良かった。

あの二人と一緒に過ごし始めてから、モノクロだった世界に色が付き始めた。

元からモノクロだった訳ではない。津美紀を守れず後悔したあの日から、目に映る物全てが無彩色だった。この人生は、呪いを祓い続けるための機械的な物でしかないと認識していた。

故に、今までは上手くやれていた。天秤に乗せる錘の取捨選択が、何の躊躇いもなく

出来ていた。差し伸べた手が何も掴めなくても、その何かが汚泥や馬糞に等しい物だったなら、特に何も思わなかった。

おかしくなったのは、あの二人と、そしてもう一人と邂逅してからだ。

任務をこなして、共に出掛けて、他愛もない世間話をして、自習をサボってテレビアニメを見て、共に同じカレーを食べて、授業を受けて、稽古で疲れた末に寝転がって、その様を見て、だらしがないと言って笑い合う。

——楽しかったのだ。同じ時間を共有出来る仲間がいる事が。その存在が、自身には勿体無いと思えるくらいには、嬉しかったのだ。

もしかしたら、憧れていたのかもしれない。もしくは、待ち焦がれていたのかもしれない。

自分のモノクロを彩ってくれる、そんな人を。

——そう。伏黒恵は、虎杖悠仁に、釘崎野薔薇に、雨宮蓮に、これ以上ないほどの友情を寄せていた。本人は自覚していないし、問われたとはぐらかすだろうが。

恵の虎杖悠仁に対する心構えは、完全に呪術師としてのそれを逸脱していた。

伏黒恵にとって、虎杖悠仁は人類の存亡を脅かす敵ではなく。

ただの一人の、そして初めての友だった。

そして、蓮もまた友の一人なのだ。



「ぬえ鶴」＋「がま蝦蟇」——行け、「せいていしらず不知井底」！」

翼を生やした「がま蝦蟇」が五匹の群れを成して、恵の周囲に頭れ、一斉に宿儺の背中へとその舌を伸ばす。通常の「がま蝦蟇」では事足りないがための策だった。

「——ん？ 話の途中だったのだが——」

翼を生やした蛙のその舌は、果たして宿儺の身体を拘束するに至った。それぞれ雁首、手首と足首を縛る形で、蛙達は空中にて踏ん張りを効かせる。

拡張術式とは、自身の生得術式の解釈を拡げること得られる、新たな術式効果のカタゴリーの事だ。《とくぐさのかげほうしげつ十種影法術》術師伏黒恵の拡張術式である「せいていしらず不知井底」は、「ぬえ鶴」と

「がま蝦蟇」の力を併用した式神。その特性及び縛り故に個々としての能力は低くなってしまうが、『破壊されても再度顕現できる』というメリットを持つ。それに、個々の能力が低いとは言っても、塵も積もれば山となるのだ。

「やれ、ジョーカー！」

「——、ッおおおっ！」

両者共に、伏黒恵の参戦に驚いたのは一瞬だった。ジョーカーは《こうげん剛巖》を握り直し、宿儺へと迫る。——しかし、数を募った「せいていしらず不知井底」でさえも、宿儺の拘束は充分では無かった。

耐えられず振り回されるか舌を引き千切られるかの片方を選ばされる「せいていしらず不知井底」の

群れ。それを切り抜けた先にてジョーカーを待つていたのは、振り抜かれつつある槍の如き鋭利なる左脚であつた。

視界が駿々と変わつていく。蹴り飛ばされた事と、何とか耐えられた事が理解出来た。直後に感じる背中の衝撃に咳き込みながら、ジョーカーは恵に支えられた事を知つた。恵の所まで蹴り飛ばされたらしい。

「生きてるか、ジョーカー?!」

「……死んでる」

「生きてんじやねーかよ！ ほら立て、来るぞ！」

「分かつてるッ」

そう唾棄しつつ立ち上がりながら、ジョーカーは言う。宿儺はと言うと、屋上からわざわざ広場へと降り立ち、こちら側へと威風堂々と歩んでいる。それが今の二人には、最早ありがたくもあつた。

「——恵、呼吸はオレに合わせろ」

「ハッ、馬鹿言え。」

——『お前が』『俺に』合わせんだよ、ジョーカー！

二人、走り出す。その背中を追う事は無い。むしろ追い越すように、追い越されないように、一気呵成に宿儺に詰め寄る。



ああは強がりつつも、恵は気分が高揚するのを感じていた。

ジョーカー……蓮の事は今も嫌いだ。その性根も、髪型いじりも気に入らない。心の奥底で、ジョーカーを嫉妬しているのは分かっている。きつと同族嫌悪なのかもしれない。

けれど、共に戦ってこれほど頼りになるのは、今までに五条悟を除き、誰一人としていなかった。その証明に、恵から不思議と笑みが溢れている。戦いの中に身を委ねる事に、これほど愉悦を感じた事は無かった。

——なあジョーカー、お前あの日言ったよな。『見てるだけで何もしないのは嫌だ』って。

「——そんなん、俺だって嫌だつーのツ！」

結ぶ掌印は、犬を模った。色濃く粟立つ影から出づる黒い犬が、宿讎へとその牙を伸ばすも、それは難なく躲される。単調な動きしか出来ない【玉犬】では仕方のない事だったが、破壊されなかっただけマシというもの。

だが、【玉犬】を出しただけでは終わらない。恵には、ジョーカーよりも五条悟に扱かれたキャリアがある。

悟曰く——式神使いは本体を叩け。叩かれるのが嫌なら強くなれ。

そう言われてから恵は、死に物狂いで術式に加え体術も磨いた。生意気なあのニヤケ

面に、一発入れるために。身寄りのない義姉と自分を引き取った事に感謝こそすれ、普段の態度は全くもって気に入らなかつたから。

しかしその積み上げてきた自信も、呪いの王である宿儺の前では無力に等しい。体術だけでは宿儺には勝てない。そこまで恵のレベルは高くはない。常識的に考えて、蓮の成長速度がおかしいのだ。

だが四の五の言っていていられるほどの贅沢が出来る程の余裕はない。体に染み込ませた経験を隅々まで捻り出せ。玉犬と交差するように、恵もまた、硬く握った拳を振り抜く。

(面白いな。どいつもこいつも、式神使いのクセに本人が向かってくるか！)

「良いぞ、どうやら現代も捨てた物ではないらしい！」

《十種影法術》は、その多様かつ強力な式神や、召喚の際の利便性が売りだ。

しかしながら、式神使いの大抵は、術師本人の能力自体は著しく低い傾向にある。本人が手を下さずとも式神が勝手にやってくれるためというのが主たる理由だ。故に『式神使いは本体を叩く』というのがセオリーなのだ。

だが、式神の能力に加えて本体の能力が高い場合——呪詛師にとつても呪霊にとつても、中々に厄介な相手になり得る。

恵の振り抜いた拳はしかし、虚空を殴る結果に終わる。だが、既に「玉犬」の体勢は

整った。孤影は空と地からそれぞれ攻撃を試みる。地の孤影は「玉犬」、空の孤影はジョーカーだった。

斜左上空から《剛巖》を振るい、宿儺の背後から猛牙を振るう。宿儺の身体能力を以てすれば回避はどうという事はない。だが避けたとて次ヒがある。そしてその次ジョーカーも。

攻撃が外れても、他の誰かがカバーする。回避されても、直様次がやって来る。付け焼き刃の連携にしては、宿儺から見ても中々に洗練されていた。

「——だが、まだまだだ」

恵の振るった拳を驚掴み、遠心力を利用してジョーカーの盾になるよう恵の体に弧を描かせて——

「もつと呪いを込めて打ってみろ」

その一言の瞬間、恵は顔面を裏拳にて殴り飛ばされた。

頬裏から唇にかけてに切り傷を負い、少しだけ血反吐を吐く恵。痛みを感じる暇もない。——しかし、苦悶の表情は浮かべない。何故ならその背後には、姿を眩ましていた切り札がいるからだ。

恵とスイッチしたジョーカーは、《剛巖》に更に呪力を纏わせ振るう。一閃、二閃を超え、それは更なる加速を始める。宿儺はそれらを振り払い避けけるも——

（——来た！）

ペルソナの再召喚リキャストに必要な一分間が経過したのを、ジョーカーは肌で感じ取った。

「恵、飛べ!!」

「——【鶴ねえ】!」

【玉犬】を解除、後に顕現させた凶鳥【鶴】に掴まり、空へと避難する恵。斯く言うジョーカーも攻撃を止め、ドミノマスクに手を添える。

呼び出すペルソナは、裏・ペルソナ全書で作成した内の一体。美麗なる女の半魚人。美しい歌声で人を惹きつけ航海船を難破させる鬼女。『恋愛』のアルカナと、現時点で唯一の回復スキルを持つ、その人魚の名は——

「——マーメイド、《嵐からの歌声》!」

(歌声? ——呪言じゆごんか)

そう考えた宿儺は、咄嗟に両耳を塞いだ。

マーメイドには、東西で内容は異なるものの、逸話がある。東洋のは、その肉を喰らうと不老不死を得るといふ物。西洋のは、先述の通り、歌で船乗りを惹きつけ難破させるといふ物で一貫している。災害を齎す鬼女として、西洋では船乗りから恐れられていた。

この《嵐からの歌声》とは、その西洋におけるマーメイドの逸話から来るスキルであり、宿儺の行動範囲を考慮して選択したスキルだ。(縛り③もあり問題無いほどに強化



喚を凶るが……呪力が練り辛くなつて来ているのを体感した。もうすぐ来る限界を知らんぷりして、無理やりに【大蛇】<sup>オロチ</sup>を顕現させる。

「畳み掛ける！ 【大蛇】！ 【鶴】！！」

宿儺の背後にポツンと存在する、滞空する【鶴】と恵の影から出る白蛇。雨混じりの汗を流して、恵は【鶴】から飛び降り攻撃へと転じる。

大口を開く【大蛇】。マーメイドを引つ込めたジョーカーも切り掛かつていく。隙は逃さない。迅速かつ一気に攻める――

「ハア……！」

――眼前の敵が、ニヤリと嗤った。

宿儺は何ともないかのように、未だ身体を縛る氷結を無理やり引き剥がした。――呪力の波動だ。ただの呪力放出によるもので、術式を一切使用していない。

「……貴様らには術式は使わんと決めていたが、気が変わった。ジョーカー、お前は些か強過ぎたな。俺をこうも昂らせず、油断している間に一息に仕留めていれば――」  
宿儺が右手指を少し振るつた。何でもないかのように、手遊び<sup>てすき</sup>のように、ただ振るつた。

――瞬間、宿儺の背後にいた【大蛇】が、ぱちゅつという音を立てて爆発した。

――ぞわッ

——絶句、後に悪寒が二人の全身を走る。同程度の身長である奴の体が、山のように巨大に見えた。その正体が宿儺の威光であり、宿儺に対する恐怖の表れでもある事を、二人は悟った。

「——絶望と後悔に塗れて逝く事も無かつたらうになアッ!!」

口を三日月のように歪め、右手の人差し指と中指をこちらに向けると同時——

『解』  
カ

「——つ、頼む【鶴】!!」

ジョーカーが【鶴】を呼ぶと同時に——無数の『何か』の群れが降る。

不可視の旋風つむじかぜとなりて放たれたそれらは、暴虐の限りを尽くさんと二人へ迫ってくる。決して遅くはないスピードで迫るそれに気付きはするものの、それ自体が何なのかは二人には分からない。

——故に。宿儺が構えた瞬間、ジョーカーは恵の肉壁となる事を決断し、両腕を眼前で組む。むしろその選択肢を取らない事が、ジョーカーには考えられなかった。

ジョーカーの言う事を聞いてくれたのか、あるいは【鶴】自身の思考によるものかどうかはともかくとして、【鶴】は主である恵の守護に当たる。恵の両肩を掴み後方の遙か彼方へと飛翔し始めた。今までにない程のスピードで翼をはためかせて、ジョーカーと宿儺から遠ざかっていく。

「【鵜】、何を——!?!」

恵を押しにかけて、呪力出力を最大にして防壁を成し、不可視の攻撃を受け止める。

ざくざくざくざくざく、という音がジョーカーの体から響いた。実に五発のそれを受け——ここで初めて、ジョーカーは宿儺の術式が『斬撃』である事に気付いた。

体に刻まれる五つの裂傷。左肩から反対の腰にかけて。左腕の前腕を縦断して。腹筋を横断して腹の中にあるモノを曝け出さずとして。左膝から下を失わせずとして。右半身の腕が影になる所以外を縦に全身にかけて。

ボド、ボダリ。聞こえてはいけない細い音が、ジョーカーの身体から絶え間なく聞こえる。激痛がジョーカーを襲う。痛め付けられる経験はあれど、切傷は負った経験は少なかった。ましてやこれほどの量と規模ならば尚更。

ジョーカー最大出力の呪力の防護壁でさえ、宿儺の術式を完璧に防ぐ事は出来なかった。表皮に至る程度の裂傷で済んで助かったとさえ思ってしまったのを、一体誰が責められようか。

「っ、く……!」

「ジョーカーッ! つく、戻れ【鵜】! 【鵜】!!」

だが、我慢出来ない痛みではない。この程度の傷なら、前世で幾度も負ってきた。まだ戦える事を確認し、宿儺へと睨む——



「せっつかく外に出たんだ。

広く——使おう！」

——よりも早く、コートの背を掴まれ——次の瞬間には、眼前には東京の街並みが広がっていた。

投げ飛ばされたのか！ と分かった時には、全てが遅過ぎた。【鶴】と恵を巻き込んで吹き飛んでいく身体は、どう捻った所で軌道を変更出来ない。血の軌跡を描きつつ、もみくちやになりながら落下していく。

「くそつ、【鶴】ツ、体勢を——」

整えられる訳もない。既に宿儺は我々の上空を往き、見下ろす形で次の攻撃を行った。槍の如き豪脚が、恵諸共、ジョーカーを貫かんと放たれた。満足な防御が出来るはずもなく、高度一〇〇メートルはあろう地点から、どこかのアパートのコンクリート製の屋上に身体を打ち付けられる。内部から決して立ててはならない音が耳小骨に響いた。

ジョーカーの下敷きとなり転がって屋根に倒れ伏す恵、まるで水切りの小石のように空に体を擲つ<sup>なげ</sup>ジョーカー。ペルソナの再召喚に必要な時間は、残り五十秒。逆転は——絶望的。

——死ねない、まだ死ねない。両面宿儺という呪いを祓うまでは、オレは死んではならない。だからこそ、どうにかして奴に——

「良い術式だな」

「——お、つがあつ!!」

今度こそ、ダブルスレッズハンマーがジョーカーへ直撃する。刈り取られそうになる意識をどうにか保つも、苦痛に悲鳴をあげる事さえ、呪いの王は許してはくれない。

アパートや倉庫を貫通して飛んでいく。何かに身体の衝撃が、肺の中の空気全てを吐き出させた。身を振って痛みからの解放を図るも、そのような芸当が出来る程の余裕はジョーカーには無かった。

「ちと縛りの組み方を誤ったらしいなア、ジョーカー——」

（まずい——術式が——防御——）

酸素の足りない脳でそう考えた時、既に体という体のあらゆる部位が刻まれていた。惨という音が連続して、気付いた時には全てが遅すぎた。

咄嗟に組んだ腕は、しかし右目だけしか守れなかった。筋をやられたのか、健をやられたのか。あるいは心をやられたのか。脳は体に行動を命じるが、もう動いてはくれない。かかった。

落ちて行くのがわかる。脱力して行くのを自覚させられる。内臓が揺れて吐気がする。

土砂、という音が、まるで他人事のように、遠い所で聞こえた。ここが都内のどこな

のか、ジョーカーにはもう分からない。

呼吸は既に止まっている。意識はあと数秒と経たず消える。……けれど、意識は朦朧とするのに、思考は逆に冴えていた。

土の匂いがする。鉄の匂いがする。仰向けになっている事が分かる。

汚く濁った空。重く降りかかる雨の群れ。

……嗚呼。

死ぬには、最悪な日だ。

砂利、という音が連続して聞こえる。おそらく宿儺だ。着地した宿儺は、こちらへと迫りながら淡々と語る。

「どうしたジョーカー、もう終わりか？ 拳銃はどうした？ 遠慮はするな、使っても構わんのだぞ？ それとも……」

——俺に挑む事がどういう事か、ようやく分絶望したかったか？

……手加減されていたのは分かっていた。勝てぬ敵と知っていた。けれど逃げたくは無かった。戦略的撤退ならばまだしも、虎杖悠仁を人質に取られていること状況を見過こせなかつた。

そもそも兩宮蓮の戦いは、虎杖悠仁を救う事を目的としているのだ。退く事は許されないし、退くつもりも無かった。悠仁を救うために強くなりたくないと願ったのだ。

だが、まだ足りない。思い付く限りの縛りを組んでも、攻撃手段を前世と何ら変わらない程度に増やしても、自身の技量を底上げしてもなお、宿儺には敵わない。

勝てるのか。二十本の指を取り込み力を完全に取り戻した宿儺に勝てるのか。ただでさえ今ポロポロなのに。

「……呪術を学んで二週間で、良くここまで戦ったと褒めておいてやろう。だが……底が見えたな、ジョーカー。残念だ」

砂利、という音が遠ざかっている。

平衡感覚はぐちゃぐちゃで、上下左右が覚束無い。

肺の中の空気全てを吐き出した。身体中の血管に鉛を入れられているかのように身体が重い。何も出来ず、ただの呼吸さえも出来ないまま、空だけを見ている。

血反吐を吐いた。だが更に嘔吐しそうなくらい、鉄の味がする。

喉が重い。指に力が入らない。得物を握ることに苦痛を感じる。

まだ一分は経っていない。ペルソナを用いた反転術式による治癒は出来ない。

……また守れないのか。また目の前で失うのか。

虎杖悠仁を救う事は、オレには出来ないのか。

そう思ってしまうくらい、この力量差はどうしようもないくらい大きい。  
けれど――

(諦め、たく……ない……!)

ここで諦めてしまうのは、今までのオレが赦さない。

執念だけで立ち上がろうと、痛む身体に鞭を打つ。

何かないのか。何か。何でも良い。逆転のきっかけを、何か――

――拳銃はどうした？ 遠慮はするな、使っても構わんのだぞ？

(………拳銃………弾?)

――何か、閃いたような気がした。

遠い記憶だ。

溢れ出す、懐かしくも苦い、『前』の記憶。

そして、オレの原点となった記憶……。

……そう、自分を一言で表すなら『無個性』が一番似合った。

勉強に精は出せなかったし、身繕いなんてどうでもよかった。さほど度胸がある訳でもなかったし、特段誰かに優しい訳でもなかった。不器用故に何を為そうとしても意味がなかった。

だから、規律を守る事に関しては人一倍努力した。何かに秀でている事も無かったから。それしか個性が無かったから。だから、常識に当て嵌めても正しいと思う事をし続けた。

——あの夜、自分の中の規律が揺らいだ。

夜、コンビニに買い物に行った帰り。スキンヘッドの男が、女性を無理やり車に引き連れようとしていた。男は酔っていた。女性は泣いていた。自分はそれを、ただ見ている。

——そして、止めなければと思った。

無視して通過しても良かった。逃げる事も出来た。ただ、それをしなかったのは、『そこで困っていたから』だ。利益とか損得とか、そんな事はどうでも良くて、ただ助けたかった。

道端に落ちているペットボトルを、何となく拾って正しくゴミ箱に捨ててやる程度の認識だった。

その日まで、『正しい事は正しい』『悪い事は悪い』と、そんな風にハッキリと言える時代に、自分は居ると思っていた。

……一人で倒れる怪我を負った男に訴えられた。男は相当な権力者だったようで、眼前だというのに女に口裏を合わせる事を脅迫した。

助けたはずの女に裏切られた。女はその男の言いなりだった。???は自分の常識と正義を疑った。

信じていたはずの警察は自分の言い分を聞かなかった。警察さえも、その男は顎で使うしかかった。

裁判はトントン拍子で進んだ。自分は傷害罪で前科持ちになった。証言する事も許されなかつた。

両親からは泣かれた。何故このような莫<sup>ば</sup>迦<sup>か</sup>な事をしたのかと。息子よりも顔も名前も知らない男を信じるらしかった。

友と思っていた者からは煙たがれた。たった一言「死ね」と書かれて連絡先を消された。

高校は退学になった。前科持ちがいると風紀が乱れると校長から言われた。

担任からお前がいるから俺が白い目で見られるんだと怒鳴られ、そして殴られた。

近所には既に噂に尾鰭が付いていた。少し考えれば嘘だと判るような事を、何も考え

ずに言葉の鋸で心を傷付ける。聞こえていると知ってか知らずしてか。

両親の喧嘩は絶えなかった。家では毎日のように怒号が鳴り響いた。その度に、自分の中の何かが擦り減っていくような音が聞こえた。

居場所なんて無かった。家に居る事が怖かったが、外に出る事の方がもつと怖かった。

誰も手を差し伸べてくれなかった。

誰も味方はいなかった。

家族すら味方になってくれなかった。

何もかもがどうでも良くなった。

……ああ、死にたい、と思った。

何もかもがどうでも良い。生きる意味も、存在意義も見出せず、ましてや立派な将来の夢なんてある筈も無く、ただ用意されていた道を歩む事さえも出来ず……それなら自分は……この世界には必要ないと思った。

包丁で喉や腹を突き刺そうとしたが、やってくるであろう苦痛に手が震えて出来なかった。

適当なビルを調べて飛び降り自殺でもしようかと考えたが、外に出て靴を履こうとした直前、母親の痼癬かんしゃくが鳴り響いて止めた。



「水中毒というものを試そうとした。この所ほとんど食べ物喉を通らなかつたためか、コップに水を注いで、少し飲んだ時点で吐いた。」

薬を適当に見繕つて、酒と一緒に飲むと死ぬと聞いた事があつた。実践してみたがやはり喉を通らず、シンクに胃液を全て嘔下する始末になつた。

洗剤を混ぜると発生する塩素系ガスによつて死のうとした。——だがこの時点で、???の心はもう死んでいた。最早ベッドから起つ気力など存在せず、また何をしても失敗すると心の中で思つていたので、遂には自殺する事も諦めた。

自殺する度胸が無かつたから、東京の知り合いが紹介する店に居候する事を承諾した。どこに行つても同じだと思つたので、何処かでひっそりと死ねばいいかと思つた。

外に出た。視線が針となつて突き刺さつた。父から投げ渡された伊達メガネを掛けて、近くの駅へと向かつた。

せめて人気のない所で死のう。そんな初めてのわがままを思いながら——

——どうした……見ているだけか？

——我が身大事さに、見殺しか？

——このままでは本当に死ぬぞ。それとも……

—— あれは間違っていたのか？

—— ……。

—— ……。

—— ……それは、お前の本心か？

—— 本場に仕方のない事か？

—— このふざけた運命を受け入れて、言われるがままに死ぬだけか？

—— 答えろ、???

—— 諦めるのか？

56.

—— ダアン、と空に音を響かせながら、一発の銃弾が宿儺の顛顛を掠った。どこから来たのか、正体は言うまでもないが、あえて言わせてもらう。発声源は、ジョーカーの握るトカレフからだった。

戦えるはずもないと踏んでいた宿儺は訝しんだ。というよりは、呆れていた。

「……まだ立つか、死に体。

つくづく貴様も貴様で阿呆だな。この實力差は歴然だと、骨の髄まで分かっているはずだ。貴様では俺には勝てん」

「……………」

「真の強者とは、己の弱さを知り、認め、克服する者の事であり——意地汚い今の貴様の事ではない。

——ああ、いつそ、諦めてしまおうというのはどうだ？ この小僧を救うのも、この俺を祓うなぐすのも。その方が——」

「——諦める？」

宿儺はタブーを犯した。？に言っではいけない言葉を言ってしまった。

『諦める』なんて言葉は、蓮の辞書には無い。

愚者の旅はまだ始まったばかり。ここですぐごと敗退を許容するのは、ジョーカーの心が許さない。

「……はは、お前は何も分かってないな、宿儺。

オレは、オレ自身が強いとは思ってない。仲間がいなければ、一人で立つ事すら出来なかつたひ弱な男だ。醜くて、泥臭くて、歪んでいて、打ちのめされて……それでも、ひたすら只管真っ直ぐに生きる。それがオレだ。

……ここで諦めてしまったなら、今までのオレが全部無駄になる。皆から得た物も——そして、お前から得た物も」

「俺から得た物……?」

「そうさ。ヒントをくれたのはお前だ。オレにとつては当たり前過ぎて、気付けなかった事だ。……自分の事は、存外自分では気付きにくいというのは本当らしいな」

——ジョーカーの術式は、『魂<sup>ペル</sup>靈<sup>ソナ</sup>召喚術』ではない。

いや、厳密にはペルソナは術式の副産物であり、術式を無意識のうちにペルソナの召喚のためだけに使っていたのだ。

ジョーカーは、生前の通り、複数のペルソナを仮面として装備し、召喚して操ることのできる術式だと思っていた。故にレプリカの拳銃でも銃弾を放るといった芸当は出来ないとも思っていた。

だがどうだ。先程苦し紛れに引いた引金により、空<sup>く</sup>つ<sup>ぼ</sup>にな<sup>つ</sup>た<sup>筈</sup>の<sup>弾</sup>倉<sup>か</sup>ら<sup>銃</sup>弾<sup>が</sup>放<sup>た</sup>れた。前世にて、怪盗として活動していた時に利用していた理屈と全く同じだ。

仮に偽物であっても、銃を向けられれば『撃たれる』と皆考える。

引金を引けば、弾は出る物と皆認知している。

宿讎はただ、向けられた銃のその弾倉に『弾丸が込められている』ものと勝手に認知していただけ。

その『認知』を利用し、操作し、呪力を消費し、発砲した。

そんなほんのちよびつとの奇蹟を、この世に体现してみせた。

——認知操作。それが、ジョーカーの真の術式なのだ。

ペルソナが使えるのは——おそらく、かつて一世を風靡した『心の怪盗団のリーダー《ジョーカー》』としての自己認知を、この世界の現実に昇華させたため。能力を、姿形を、結ばれた縁えんじによる、我が半身達を。

……否、昇華させたと言うよりは、『閉ざしていた心を開いた』という方が正しいか。ずつとついて来てくれていたのだ。ずつと自分の側にいた。死してなお、別世界にて転生してなお、縁が途絶える事はなかった。縁は確かに心にあった。ただ、術式じゆしを発動はつどうする機会が無かっただけ。その機会が、今年の六月——全てが始まった夜、杉三高校の渡り廊下で、運命のようにやって来た。奇しくも、生前と似たようなシチュエーションで。

術者は術式の有無を、齢四歳頃に自覚する。蓮も『それ』には気付いてはいた。この世界は何かおかしな物が跋扈はつごしていて、そしてそれらに対抗する力を自分は持っている。と。

だが世間体という物がある。この世界呪術廻戦はヒーロー超常なアカデミア日常の世界ではないのだ。そんな『個性』を持つている事が周知になってしまえば、悪事に利用される事態になる

のは想像に難くない。怪盗としての癖もあって、その存在をひた隠し続け——そうして  
いるうちに、その力の存在を忘れてしまっていた。

——故に、あの夜『思い出した』のだ。

——故に、あの刹那『賭けに出た』のだ。

故に、普段はただワイヤーをすぽーんと射出するだけのバングルが、勢い良く射出さ  
れコンクリートでも突き刺さる。

故に、《魂<sup>ベル</sup>靈<sup>ル</sup>召<sup>ソ</sup>喚<sup>ナ</sup>術》だけならば発現するのはおかしい怪盗服が顕れる。

この力のおかげで、前<sup>ベルソナ世界</sup>の世界とこ<sup>呪術世界</sup>の世界を繋げられた。二つの世界の仲介役としてベ  
ルベットルームがあり、ラヴエンツァがいる。だからこそ、この身に宿るベルソナ達も、  
認知操作で作り上げた偽物ではなく、確実に本物の己の半身と言える。

これで偽物だったなら、今度こそ蓮は？が信じられなくなるかもしれない。虚構に緘  
り続ける詰まらない男だと己を断じるだろう。

けど、きつと大丈夫。

例え偽物だったとしても、自分の存在が泡沫の夢だとしても、例えこの旅の果てに己  
が何も得られないとしても——

悠仁を救いたいというこの思いが、間違っている筈がないのだから。

——今なら、出来るはずだ。

根拠はない。だが、何故かそう思える自信があった。術式を完全に理解した今ならばと、ジョーカーは一度大きく息を吸い込み、吐き出して、目の前の敵を直視した。

「宿儺。さつきお前は、オレが何者なのかを問うたな」

「……………ああ」

「——ならば、お望み通りご覧に入れよう。

今オレが持てる、オレの全力を以て——」

——お前という存在を凌駕する!!

2018年7月4日——前日の事である。五条悟と雨宮蓮は、高専の運動場にて、術式を使いながら稽古をしていた。相変わらず悟はサングラスをしたままだったが、蓮の比ではないにしろ、額にはほんのり汗が滲んでいた。

「奥義? あるのか?」

「うん。ちよつと早い気もするけど、蓮って飲み込み早いし、多分すぐ使えるようになるんじゃないかって思ってたね。

——それは、術式を極めた者が会得できる、呪術戦の極致。生得領域に自身の術式を付与し、呪力を以て現実に展開する結界術の一種。それ故に、使える人は限られてる。

まあ僕は使えるけどね。だって僕『最強』だし。

でも呪力消費は多いわ、解除した後は術式を使いづらくなるわで、使い勝手は悪いかな。まあ僕はそんな事ないけど。だって僕——」

「先生の最強アピールはもう良いからちやんと説明してくれ」

「やだ……僕の生徒、冷たすぎ……？」

まあ気を取り直して……それを発動して相手を引き摺り込めれば、戦況は確実に有利になる。術式は必中となり、身体能力も向上する。術式の解釈次第では必殺にも成り得る、正に『奥義』。それが——

「——りよういきてんかい領域展開!!」

——ふと頭に浮かんだ掌印を結ぶ。

合わせた両の中指の上に人差し指を乗せ、薬指と小指を交差し、全てが完成する。死者の魂を祓い鎮めんがためにと組まれ——

——瞬間、世界はジョーカーを中心に破壊された。

否、それでは少し語弊がある。世界の破壊など出来っこないし、そもそもジョーカーはそれを望んではいない。



——世界は、ジョーカーを中心に創造されていく。瞬きの次の瞬間には、新たな世界が広がっていた。

宇宙から見れば一ミクロにも満たないものでしかないが、人の身で神の領域に達することの出来る、唯一の業。

必中必殺の最奥、呪術戦の極地。

それを、ジョーカーは成し遂げてみせた。

禁断の蔵は解き放たれた。

——今、神と悪魔とが世に出づる。

57.

「……魅せてくれたな、ジョーカー」

そう言ったのは、紛れもなく宿儺だった。

「貴様の執念、賞賛に値する。そして非礼を詫びよう。俺は貴様を侮り過ぎていた」

見慣れた東京の街並みは血のように紅く、巨大な骨やおどろおどろしく長い髪が枝垂れている。下に見える人の顔は苦痛と涙に塗れている。地上は、腰まで浸かってしまうくらいの量の透明な血が溢れている。

天へと向かうその巨大な骨の上、およそ胸骨と呼ぶべき部分。道のりの途中でしかない所に、宿儺とジョーカーは立っていた。見慣れた『渋谷107』は、その看板が外れ掛けている。殻クリフトの世界で見た、絶望と諦観に満ちた地獄狭谷だった。

「これが『答え』か?」

「ああ。……卑怯だと笑うか?」

「……笑わんさ。ちと意外には思ったがな。」

——輪廻転生の環より逸脱した存在、それが貴様なのだな」

ジョーカーがこうも簡単に領域を展開できたのは理由がある。



の能力が必殺でなければ、何か一つ自分にアドバンテージを付与出来る……！

「——良いな、ソレ。カッコいい。他には何があるんだ？」

「術式を付与した生得領域……つまり、心の中を現実を持つてくる訳だから、どんな能力なのかは人による。けど大抵、引き摺り込んだら勝ち、みたいな所はあるよ」

「オレの場合は……術式がペルソナなんだし、ペルソナの能力を補助するものになるのだろうか。もしかしたら複数体同時召喚も出来るかもしれない……でも、ペルソナ使うのに縛りを結構設けたし、やはり——」

——縛りから脱却したいかな。

今のジョーカーは、大量に組んだ全ての縛りから解放されている。だが同時に恩恵も受け取っている。今のジョーカーの技量は、ほとんど全盛期に等しい。だが今回は、あくまでも『レベル四〇のジョーカー』が縛りの恩恵を受け取ったケースだ。全盛期のジョーカーが恩恵を受け取ったなら……

……宿讎の認知を変える事は難しい。だが己は別だ。心の在り方は、本人次第でどうとも変わるのだ。多くの人は、その事を忘れているだけ。

一人一人が絆で繋がれば、世界は『無限』に広がっていく。終わりなどない。可能性は無限大で、不可能なんていくらでも乗り越えられる。

召喚するのは二体、不可能だった二体同時召喚さえも可能にしているのは、自分の認知を弄ったから。……否、そもそも不可能だと思っていただけだ。恵と稽古の折にも、本当は実現可能はずだったのだ。

(自由だ……オレの術式は、オレが思っている以上に自由なんだ。

なら、もつと自由に行こう。解放を望むんだ。何者にも縛られない、奴隷からの解放を。不可能を可能にし――

――世界さえも従えてみせよう)

一体は、先程召喚したツチグモ。使用するスキルは、与える攻撃のダメージを増幅させる《タルカジャ》。身体に熱が籠っていくのを、ジョーカーは感じた。

――そしてもう一体は、凜々しい顔立ちの、兜の代わりに烏帽子を被り、甲冑を身に纏う男性。平家物語にて、様々な伝説を残した悲劇のヒーロー。そして通帳から約二十万を奪って行きやがった、表・ペルソナ全書にて再契約した最強の切り札の一。

その軍神の名は――

「――翔ける、ヨシツネ」

幼名を牛若丸、あるいは遮那王。本名を――源義経。

現時点でのジョーカーの最強の切り札であり。

両面宿禰 呪いの王を裂く事のできる、最高の一手である。

「(ヨシツネ……源義経か!!)」  
みなもとのよしつね

ハハッ、見事だ、ジョーカー!!」

——否、まだだ。ジョーカーの認知操作は、この程度では終わらない。

ヨシツネのレベルは最大……:数値にして九九。圧倒的にジョーカーのレベル四〇(少  
年院内でレベルアップした)を上回っている。これに加えて縛り④——自身のレベル  
よりペルソナのレベル数が一つでも高いペルソナを召喚・スキルを発動した場合、以降  
七十二時間経過するまで、ペルソナを召喚できない——が適用される場合、ペルソナは  
『限界を超える』。

「……《チャージ》」

そう唱えた瞬間、蒼い力の奔流が全身へと巡り——血肉が湧き上がる感覚に充実して  
行くのをジョーカーは感じた。冷水を掛けたとて無駄な程に、熱は止まらない。

《チャージ》とは、次回攻撃時の物理攻撃及び物理スキルの威力が二倍になるスキル  
だ。これに加えて《ヒートライザ》《ランダムライザ》というスキルを発動させたかったが、  
生憎そのスキルを持っているペルソナはいなかった。だが——これで充分だ。

さて、今回は《領域展開・啓龕廟堂》けいこんぼうどうによってノーリスクで縛り④が適用されている。

再召喚に頭を悩ませる事もない。斯くのジョーカーのステータスは、数値的には凡そ九

〇程度にまで上昇しているが、レベルは四〇のままとして扱われる。

縛り④は、ペルソナの潜在能力を無理やり引き出すための縛りだ。その瞬間、ペルソナの能力は『限界を超え』、レベル九九のペルソナのステータスの総合的な数値は——現段階では実に、レベル二五五に至る。

「——行くぞ、呪いの王」

「——来い、怪盗」

源義経の逸話は、日本史の武将においてもトップクラスを誇る。幼少期の牛若丸時代から始まり、鞍馬寺にて天狗に武芸の師事を得た遮那王時代、壇ノ浦の戦い……そして頼朝に追われ生涯を終えるまでに、多数の伝説を残してきた。

——これは、壇ノ浦の戦いにおいて平教経たいのよつねに追い詰められた際に魅せた逸話。六メートル先の船に鎧を着たまま乗り移ったという、ヨシツネの身軽さを讃えた物理最強格のスキル——!!

《八艘跳び》!!

——それを例えるなら、空を駆ける一筋の流れ星。

否、既にそれは一筋ではなくなつた。あまりの速度にジョーカー自身、一瞬ヨシツネが八体に分裂したと錯覚してしまつている。その赫く黒い流星群は、一秒はおろか

○<sup>1</sup>・○<sup>1</sup>秒<sup>1</sup>さ<sup>1</sup>え<sup>1</sup>も<sup>1</sup>置<sup>1</sup>き<sup>1</sup>去<sup>1</sup>り<sup>1</sup>に<sup>1</sup>した。

不可視にして不可避の流星群。

全盛の宿儺でさえも勤に頼らなければ——否、勤に頼つても避けられるかどうか危うい程の、破格に強力なスキル。それが、《八艘跳び》。その効果は、一撃かつ八撃の斬撃を見舞うというもの。ヨシツネの疾さが限界と空間を超えて、全く同時に存在する八つの剣戟を引き起こす——！

「認めよう、ジヨーカー。今の素の俺では、これを突破する事は出来ん。平安の世にも、貴様のような強者<sup>つわもの</sup>は中々いなかった」

——故に、俺は最大の敬意を以て、貴様という『敵』を打ち破ろう。

「なあ、知っているか？ 我々は共に特級とやりに分類されるそうだ。

——俺と、虫<sup>オマエ</sup>がだぞ？」

時は数分前に遡る。両面宿儺と特級呪霊の対峙は、宿儺の圧倒的優勢に終結した。特級は手も足も出さず、また決定打はおろか一撃も与える事が出来なかった。

両手両足を切断後、その躯体全てをまるで模型のように扱われている事に、特級は怒り心頭に発していた。





獄より出づるは健啖なる調理場。

——さあ、俎板の鯉を演じるが良い。

現れる無数の牛頭ごず。そして御堂と、その奥から出る巨大に開かれた口。結界術ではない。宿儺の《領域展開：伏魔御厨子ふくまみづし》は、領域展開ではあるものの『対象を閉じ込めない』。

ただでさえ領域展開は、その難易度の高さ故に、一生で一回も実現する事なく生涯を終える術師も多いというのに、その更に先を宿儺は行った。

自身の生得領域を結界で閉じ込めず現実に具現化するという事は、空にキャンバスを描くが如き至難の所業。

人はそれを、『神業』と呼んだ。

御廚子とは『御廚子所』……古くの言葉で『台所』を意味する。

《伏魔御廚子》とは即ち、魔の伏す調理場。

美味なる死は——食材を卸す所から始まる。

「捌ハチ」

宿儺の術式である『斬撃』には、『解カイ』と『捌ハチ』の二種類が存在する。人間を細切りにする程度なら『解』でも充分可能だが、呪力で防御された場合、『解』の威力は当然下がる。

だが『捌』はただの斬撃ではない。その能力は、『呪力差や強度に応じて一太刀で卸す』というもの。どちらにせよ、宿儺の実力以上の者でない限り、まさに必殺と言えよう。

《伏魔御廚子》とは、その『捌』を絶え間無く浴びせるための領域展開。必中効果により、呪力を帯びない物体には『解』を、呪力を帯びたものには『捌』を。

更に『領域で対象を閉じ込めない』という縛りにより、『対象に逃げ道を与え』る事で、効果範囲を拡げている。その範囲は実に——二〇〇メートルにも及ぶ。

だが、宿儺が領域展開出来る事は、ジョーカーの計算内だった。

(オレに出来て宿儺に出来ないはずがない。景色が変わらないのは奇妙だが、おそらく《伏魔御廚子》とやらは、斬撃を広範囲に及び与える物理的なもの。——だからこそ、今回オレはヨシツネを選んだんだ……！)

ヨシツネには、物理・銃撃・火炎・氷結・疾風・電撃・念動・核熱・祝福・呪怨という十種の属性の内、弱点となる属性が一切無い。恒常的に発動している自動効果系スキルを含めると、『物理：無効』『火炎：耐性』『電撃：反射』『祝福：反射』『呪怨：吸収』に割り振られる。

——そう、物理無効という事は、《物理貫通》のスキルでも持つていない限り、斬撃やら打撃やら刺突やらによる物理的な攻撃の一切を無効化する。これは普段なら縛り⑤——ペルソナの耐性において、属性攻撃無効、吸収、反射は一切適用されない。この場合、以上3つの属性に対する恩恵は、全て『耐性』へと降格する——が適用されているが、それは《啓龕廟堂》が取り外してくれている。

だが宿儺とて、『捌』の絶対的切断力に疑いの余地は持たない。  
純粋な真つ向勝負。

絶対に断ち切る斬撃か、絶対に防ぎ切る耐性か。

二つの矛盾の勝者は、果たして——

ザザザザザザザン!!

バツバツバツバツバツバツバツ!!

斬撃の雨は、二者共にほぼ同時に降り注いだ。

実を言うと、現時点での総呪力量においては二人の間に殆ど差が無い。宿儺は、生前からの天賦によって。ジョーカーは、肉体レベルの向上やペルソナ、果ては怪盗服を着用する事で、呪力量が底上げされている。

……しかし。

術式の熟練度においては、宿儺の方に軍配が上がる。

「——、か、は」

宿儺の首まであと数ミリ。そこで突如加速を止めたヨシツネが——まるで賽のよう  
に細切れになり、水の音と肉の音と共に血に落ちて、蒼い炎となり消えて行った。つま  
り——ヨシツネは、破壊されたのだ。

その瞬間にジョーカーの全身を激痛が襲う。幾度も、切れ味の良すぎる包丁に微塵切  
りにされたような感覚。体の表層には、薄っすらと切傷が浮かぶ。ペルソナと己が一心  
同体であるが故のデイスアドバンテージ、『フィードバック』。ペルソナが傷付けば、己  
も傷付いてしまうのだ。

ペルソナの破壊についてのデイスアドバンテージである縛り⑧——ペルソナ合体時  
以外でペルソナが破壊・消滅した場合、そのペルソナは、二度と全書による再召喚を実

行出来ない——は、《啓龕廟堂》により適用されない。

だがそれとはお構い無しに、宿儺の『捌』は呪力を帯びたものに対して切断を強いる。それは対象が例え領域であつても例外では無い。

領域の『淵』——つまり範囲限界がどこまであつたのかは宿儺は知らないが、二〇〇メートルに及ぶ『捌』は、現在の立ち位置である巨大な胸骨諸共、自身の目に映る景色全てを破壊していく。そのついでなのだろうか、ジョーカーの肩から左腕、右手首から先と、右脚の膝から下を切断させるに至り——そして奇妙な事に、空間の一部に罅が  
入った。

瞬間、そこを硝子細工が破壊されていくように、次々と景色が消えていく。世界は崩壊を始め、元の現実世界へと再創造されていく。

隷属の解放には、未だ遠く。

ジョーカーの全力は、宿儺の全力によって悉くを叩き落とされた。

現実世界の砂塵が二人を覆う。泥は《伏魔御廚子》の余波で細切れになり、もはや砂といつても過言では無かつた。

領域を解除する宿儺。

いずれ死んだか、あるいは出血死するであろう敵を前に、しかし宿儺は惜別を感じていた。

まだ強くなれた。伸び代があった。伏黒恵とは別の期待があった。だがそれは、もはや叶えられなくなりつつある。砂塵の中、漠然と宿儺はそう考えていた。

そう——ここに来て両面宿儺は、ジョーカーを、雨宮蓮という男を侮ったのだ。

反転術式、領域展開。この二つの才能を、短い期間で発現させたとはいえ、所詮は青臭い餓鬼。もはや立っている事も不可能な程に傷付け、あるいは斬り落とした。為す術は残っていない……所か、生命を維持する事も不可能だ。そう考えた。考えてしまったのだ。故に——

「な——!?!」

——砂塵の中から現れ出でる、斃したはずのジョーカーに、反応が遅れてしまった。

左腕を肩から切断。右手首から先と、右脚の膝から下が無い。左眼はもはや、情報媒体としての役割を果たせない。胴体は切り傷だらけで、漆黒のコートは自身の血で紅く染まりつつある。激痛により、体を動かす事も躊躇われるはずだ。宿儺の生前の記憶にも、この状態になってまで戦う意志を見せた者はいなかった。

——もはや死体だというのにも関わらず。

倒れ込むように、なお進むように、ジョーカーは無い拳を握り締めて、宿儺に向かつて放っていたのだ。

放心から解放された宿儺。何か行動を起こそうとするも、もはや回避以外には何も選

択肢が無い事が一瞬で解った。ならばと、この身を退かせ——  
（——退く、だと？ この俺が？）

その退避を、一瞬躊躇してしまった。

虚を突かれ、術式を以てしても間に合わない程の距離にまで近づかれた。だが一步退けば、ジョーカーは地に落ち自滅するし、どの道この負傷ではもう助かりはしない。自分の勝利は確定している。

だが、眼前の強者の一撃を退くなど、宿讎のプライドが赦さなかった。退いてしまつたならば、何か決定的な物に敗北する予感がした。

そうか……『恥』だ。

この一撃を受けないのは、きつと宿讎の今後を狂わす物になる。

この強者の一撃を、全身全霊を以て迎え撃つ。

そして、その全身全霊を以てしても、回避以外に選択肢は無く——故に。腕に付いた蠅を払うように、いつもなら軽く遇らえていたはずのその拳を。両面宿讎は、受け入れた。

——顔面に、痛みが走った。

「く——」

呪力は籠っていない。そもそもジョーカーには、もう呪力は微塵も残されていないかつ



た。

彼の意地が、彼の体を突き動かした。こと意地において、宿儺ですらジョーカーには勝てなかった。

……しかし、意地を通せるのもここまでらしい事を、蓮は悟った。

どちらや、と、なまじ人が出してはいけない音を立てて、地へ落ちていく。

……もう動けない。左肩と右脚、右手首を中心に、全身から赤色の生命が零れ、地面へと落ちて行く。泥と血液の区別さえ付かない。今オレが倒れたこの地面は、本当に泥だったのだろうかと思ってしまった。

痛みさえも感じなくなってきた。

ペルソナを呼べるほど、もう呪力は残っていない。

その証左に……怪盗服が消えていた。

……守れなかった。結局オレは、また繰り返すのだ。雪辱と後悔と、涙と訣別を。

ああ、嫌だ。目の前が暗くなっていく……。

必死に悠仁<sup>宿儺</sup>へと手を伸ばす。けれど、この手は何かを掴む事すら叶わない。

守ると誓ったのに。命を賭けると己を縛ったのに。

それでも、勝てなかった。

後悔と共に、意識が消える刹那の闇の中で——宿儺が何かを言っているような気がし

たけれど――

……最期に感じたあの息苦しさと同じものを感じながら……雨宮蓮の瞳孔は機能を停止した。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t    u s    s t a r t    t h e    g a m e .  
# 1 0    U n v e i l i n g    M a u s o l e u m

## Menu↓Status

名前：雨宮 蓮（あまみや れん）

「諦めるのか？」

〈概要〉

当二次創作小説の主人公。東京都立呪術高等専門学校一年生。料理の腕はピカイチ。特にコーヒーとカレーが得意。中学卒業のお祝いにサイフォンとドリツプと豆を買ってもらった。カレーとコーヒーに至っては、家族やコーヒーメーカー、ファミレスのそれよりも美味しく作れる。良く食べるがその分動くので太らない体質。体脂肪率は10%。

雨宮蓮は——というよりは、雨宮蓮の中にいる人間は、元は死んだ人間であり、雨宮蓮の体に転生した人間である。前世で掛けていた大きめの黒縁伊達メガネは、今世では掛けていない。

生前から正義感が強く、困っている人を見捨てられない。それ故にトラブルによく巻き込まれ、不利益を被ることが多々ある。代表例としては、中学二年時、いじめの被害に遭っている女子生徒（当時一年生）を救助した際、主犯格に狙われ蓮自身もいじめの

被害に遭つたこと。

ちなみに救助した女子生徒が、悠仁曰くの、現在友人として付き合っている女の子である。

高専に入つてからは食堂を牛耳り、関係者の胃袋を掴んだ。虎杖悠仁曰く、蓮が作った料理を食べると元気が漲り、いつも以上の実力とウ○コが出せるらしい。

使用している呪具の名は《剛巖》ごうげん。生前蓮が使っていたシルバードガーによく似た短剣。特級呪具のような術式は無いが、二級程度のそこそこ貴重な物。

好きな物：義父のカレー、あつたかいコーヒー、キーピック

嫌いな物：冷めたコーヒー、警察、腐つた大人

特技：強奪（意味深）、脅迫（意味深）、処刑（意味深）、料理、大食い、怪盗団のマークを描くこと

苦手なこと：早寝早起き

得意教科：強いて言うなら家庭科

苦手教科：強いて言うなら数学

ストレス：理不尽と邪悪

〈人間パラメータ〉

知識：知恵の泉

度胸：ライオンハート

器用さ：超魔術

優しさ：慈母神

魅力：魔性の男

※なお、魅力のパラメータはカンストしているのにも関わらずステータス上昇中。

術式：《魂<sup>ペルソナ</sup>召喚術》

自身の半身である叛逆の魂、即ちペルソナを召喚する術式。

ペルソナとは、自身の叛逆の意思が具現化したもの。蓮は生前、この能力を利用して《心の怪盗団》として活動していた。祈本里香よりも出自<sup>分からない</sup>不明な存在。

ペルソナは便宜上、一貫して『仮想過呪怨霊』に分類される。仮想なのは、蓮のペルソナの名称が伝承や神話における生物や妖怪、英雄、神に因む者であるため。過呪なのは、蓮の命令に絶対遵守するものの、個々のペルソナに意思が存在しているため。その中でも、蓮の持つアルセーヌやヨシツネのように、他のペルソナとは一線を画す者は、『特級仮想過呪怨霊』となる。

ペルソナには、『物理・銃撃・火炎・氷結・疾風・電撃・念動・核熱・祝福・呪怨』の十種類の属性が存在しており、個体によって耐性の有無や優劣に差がある。『弱点・耐性無し』

—・耐性・無効・吸収・反射』の六種、耐性が存在する。基本的には、属性はそのま

ま適用されていたが、普段は縛り⑤によって効果が制限されている。《領域展開：啓龕けいがん廟堂びやうどう》によって取り外される。

また、宿讎の『捌ハチ』のような『耐性の効果を貫通し得る』術式と『属性無効・吸収・反射』がぶつかり合った場合、ペルソナのレベルや互いの術式の熟練度などの要素によって勝敗が決する。

ちなみに、ペルソナの所持可能枠は今世では元から十二枠空いている。お金が無いので、枠を持て余しているのである。

拡張術式：ワイルド

ペルソナを複数体使役できる能力。ペルソナは、原則として一人につき一体と決まっているが、愚者のアルカナを持つ蓮だけは、ペルソナを最大で12体使役できる。

拡張術式：コープ

雨宮蓮が絆を育む事によって得られる能力。ペルソナとは心の力。他者と触れ合う事によって育まれる心の強さが、そのままペルソナやジョーカーに反映される。

コープが高ければ高いほど、ペルソナ作成時に得られる経験値に補正がかかる。また、コープを進めると戦闘時や戦闘前に恩恵を得られる技術を覚える。本来ならば何の役にも立たない技術や恩恵でも、ジョーカーの術式があればその真価を發揮する。

真の術式：《認知操作》

雨宮蓮の本来の術式は『認知操作』。錯覚や思い込みを利用して、偽物のナイフや拳銃を本物と遜色なく扱えられるようにできる。また、自己認知を操って、ジョーカーとして活動していた頃と同様にペルソナを扱うことが出来るようになる。

ペルソナ能力は『心の怪盗団リーダー《ジョーカー》』としての自己認知を弄り顕現できるようにしただけであり、それ自体は——というよりは、雨宮蓮をジョーカー足らしめる要素の全ては、あくまで拡張術式に過ぎない。

### 領域展開

・《啓龕廟堂》  
けいがんびょうどう

術式を完璧に理解した蓮が編み出した領域。ジョーカーが大量に組んだ縛りを無効化しつつ、縛りによる恩恵を受ける事が出来る。

しかしそれはあくまで副次的な効果であり、本当の能力は『自己認知及び他己認知の改造相竄手による能力変化』。自身自分にアドバンテージ認知をを与える変える方変えが、相手にデイスアドバンテージ認知をを与える変えるよりも簡単なため、このような効果になった。

発動には『この領域はこういう能力だ』と認知させる必要がある。

『必中ではあるが必殺ではない』という縛りのため、ペルソナを召喚するような簡易さで発動できる。

合わせた両中指の上に人差し指を乗せ、薬指と小指を交差することで発動する。風景

は、渋谷と?????が融合しかけているセカイ。

英訳は『Unveiling Mausoleum』。

〈レベル〉

最初のレベルは1↓3（アルサーヌにやられた学校の蛸たち）＋（ポルポみたいな蛙の呪霊）↓4（イグアナ）。

6／18 廃ビルの時点で4↓5。

五条悟との稽古の後に縛りを8個設け36。

英集少年院の時点では、二週間ほど時間が経っているので39。釘崎野薔薇と共闘した後40。

※本作におけるレベルは、99を全盛期と同等としている。

〈雨宮蓮が科した縛り〉

縛り①：以下の縛りを一つでも破った場合、雨宮蓮は死ぬ。

縛り②：術式もしくは縛りの開示を行う場合、偽りなく情報を伝えなければならない。

縛り③：ペルソナのスキルを使用した場合、一分間ペルソナを召喚出来ない。

縛り④：自身のレベルよりペルソナのレベル数が1つでも高いペルソナを召喚・スキルを発動した場合、以降七十二時間経過するまで、ペルソナを召喚できない。

縛り⑤：ペルソナの耐性において、属性攻撃無効、吸収、反射は一切適用されない。こ



の場合、以上3つの属性に対する恩恵は、全て『耐性』へと降格する。

縛り⑥・過失であれペルソナ自身の意思であれ、雨宮蓮及びペルソナが『呪霊を視認・知覚できない者』を殺害してはならない。

縛り⑦：回復系のスキルを使用する際、雨宮蓮は《魔術の素養》等のコスト軽減の効果の一切を受けなくなる。また、雨宮蓮はペルソナの回復スキルを通さずに反転術式による治療が出来ない。

縛り⑧：ペルソナ合体時以外でペルソナが破壊・消滅した場合、そのペルソナは、二度と全書による再召喚を実行出来ない。

〈コピー〉

アルカナ：人名〔ランク〕

愚者：ラヴェンツァ〔1〕

魔術師：伏黒 恵〔2〕

???  
:???

女帝：釘崎 野薔薇〔3〕

皇帝：五条 悟〔5〕

??????  
:???



???  
??:??  
???

へこれまで登場したペルソナのステータス

・アルセーナ

蓮が覚醒した際に出現したペルソナ。よく喋る。初登場は「#1 I am tho  
u, thou art I」。

フランスの小説家であるモーリス・ルブランの作品群『アルセーナ・ルパンシリーズ』の主人公。豪邸に忍び込み貴重な品々を華麗に盗み出す、紳士にして冒険家。脱獄や変装の達人にして恋多き男であった。

前世でステータスをキワミ過ぎた結果、ぶつ壊れアルセーナになっていた。アガシオンになったが、その後直ぐに再召喚される。現在では十八万円かかる。

アルカナは『愚者』。

ステータス

レベル：99

力：99

魔：99

耐：99

速：99

運：99

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：|

氷結：弱点↓吸収

電撃：|

疾風：|

核熱：|

念動：|

祝福：弱点↓反射

呪怨：耐性

スキル

《マハエイガオン》

《ブレイブザッパ》

《不屈の闘志》

《魔術の素養》

《大天使の加護》

《アリ・ダンス》

《氷結吸収》

《祝福反射》

・ジャックランタン

e.  
イングラランドに伝わる鬼火の精霊。初登場は「#5 Form to be m

夜に現れては人を驚かせたり、道に迷わせたりするのだとか。墮落した人生を送った人間の魂が冥府に行く事を拒まれ、現世を彷徨っている姿だという。ヒーローが口癖。

アルカナは『魔術師』。

ステータス

レベル：4

力：3

魔：5

耐：3

速：4

運：3

属性耐性

物理：―

銃撃：―

火炎：吸収

氷結：弱点

電撃：―

疾風：弱点

核熱：―

念動：―

祝福：―

呪怨：―

スキル

《アギ》

《ラクンダ》

《コーチング》

・ピクシー

イングラランドに伝わる小さな森の妖精。

初登場は「#5

F o r  
m e  
t o  
b e

me.

人目を避けて生活するが、人間には友好的で、恩には恩で報いるらしい。怠け者には叱りつけたりと、道徳的な面もあるようだ。

アルカナは『恋愛』。

ステータス

レベル：4

力：2

魔：6

耐：4

速：6

運：3

属性耐性

物理：|

銃撃：弱点

火炎：|

氷結：弱点

電撃：耐性

疾風：―

核熱：―

念動：―

祝福：耐性

呪怨：弱点

スキル

《《ジオ》》

《《ディア》》

《《パトラ》》

《《タルカジャ》》

・ベリス

h<sub>1</sub>。 ソロモン72柱の1柱である、大柄な赤馬に跨る恐怖の王。初登場は「#7 O a t

錬金術に通じているらしく、二枚舌を使うので交渉は難儀だが、厳しく迫ると過去や未来の知識を授けてくれるという。

アルカナは『法王』。

合体によって作成したため、《《ガル》》と《《ラクンダ》》を持つ。



ステータス  
レベル：11  
力：13  
魔：7  
耐：10  
速：9  
運：4  
属性耐性  
物理：|  
銃撃：無効  
火炎：耐性  
氷結：弱点  
電撃：耐性  
疾風：|  
核熱：|  
念動：|  
祝福：|

呪怨：—

スキル

《スラツシユ》

《ガル》

《タルカジャ》

《ラクカジャ》

《ラクンダ》

《火炎見切り》

・エンジェル

神学における天使9階級において、第9位に位置する下級天使。初登場は「#7 0 a t h」。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教には、神の意思の代行者として記述されている。基本的には、白い翼を持った両性具有の人間の姿で描かれるようだ。基

アルカナは『正義』。

ステータス

レベル：11

力：7

魔：12

耐：5

速：10

運：6

属性耐性

物理：|

銃撃：弱点

火炎：|

氷結：|

電撃：耐性

疾風：|

核熱：|

念動：|

祝福：無効

呪怨：弱点

スキル

《コウハ》

《マカジャマ》

《ディア》

《バイスデイ》

《呪怨見切り》

・ヴィーヴル

フランスに伝わるドラゴンの一種。初登場は「#9 The Mortal Cur  
sed Enemy」。

財宝が眠る無人の城に住み着くとされる。伝承によると、普段は額に宝石をはめ込んだ美しい女性の姿をしており、水浴びの際は額の宝石を外し、この宝石を手にした者は様々な魔法を使うことができるとされ、宝石を奪おうとした人間が後を絶たなかったらしい。

アルカナは『女帝』。

ステータス

レベル：38

力：42

魔：41

耐：23

速：19

運：20

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：耐性↓無効

氷結：弱点

電撃：|

疾風：耐性

核熱：|

念動：|

祝福：無効

呪怨：耐性

スキル

《ベノンザッパ》

《アギラオ》

《マハラギオン》

《マハガル》

《ポズムデイ》

《火炎無効》

《炎上率up》

・ツチグモ

日本に伝わる妖怪の一種。初登場は「#9 The Mortal Cursed Enemy」。

大和政権に恭順しなかった豪族達の呼称が元となった妖怪。源頼光に対抗したときれる。日本を『魔界』へと変貌させようと目論んでいるらしい。

アルカナは「皇帝」。

ダストマとスクカジャと祝福耐性は本来覚ええない。

ステータス

レベル：37

力：46

魔：38

耐：49

速：18

運：19

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：|

氷結：弱点

電撃：耐性

疾風：|

核熱：|

念動：|

祝福：|↓耐性

呪怨：|

スキル

《《ポイズンクロー》》

《《ジオンガ》》

《《マハジオ》》

《《ダストマ》》

《タルカジャ》

《スクカジャ》

《祝福耐性》

・オンコット

叙事詩『ラーマーヤナ』における、ヴァラナと呼ばれる猿族の王子であり将軍。「#1  
 0 Unveiling Mausoleum」に初登場。

ラーヴァナとの間に起こった戦争では、数多の将軍を屠るも、敵の矢を目に受け盲となってしまう。

ステータス

レベル：38

力：41

魔：32

耐：49

速：23

運：17

属性耐性

物理：無効



銃撃：耐性

火炎：—

氷結：—

電撃：—

疾風：—

核熱：耐性

念動：弱点

祝福：—

呪怨：—

スキル

《《絶妙剣》》

《《暗夜剣》》

《《暴れまくり》》

《《タルカジャ》》

《《テトラカーン》》

《《物理ブースタ》》

・マーメイド

美麗なる女の半魚人。「#10 Unveiling Mausoleum」に初登場。

美しい歌声で人を惹きつけ航海船を難破させる鬼女。世界各地に伝承が残されている。ジユゴンという海獣が元になったという説がある。『恋愛』のアルカナに割り振られる。

ディアラマと電撃耐性は本来覚えない。

ステータス

レベル：38

力：33

魔：48

耐：40

速：27

運：15

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：弱点

氷結：耐性

電撃：弱点↓耐性

疾風：—

核熱：—

念動：—

祝福：—

呪怨：耐性

スキル

《嵐からの歌声》

《ブフーラ》

《ディアラマ》

《ドルミナー》

《マリンカリン》

《ラクカジャ》

《電撃耐性》

・ヨシツネ

幼名を牛若丸、あるいは遮那王。元服後の名は源義経。[#10 Unveilin

g Mausoleum」に初登場。

平家物語にて、様々な伝説を残した悲劇のヒーロー。源義経の逸話は、日本史の武将においてもトップクラスを誇る。幼少期の牛若丸時代から始まり、鞍馬寺にて天狗に武芸の師事を得た遮那王時代、壇ノ浦の戦い。そして頼朝に追われ生涯を終えるまでに、多数の伝説を残してきた。

アルカナは『塔』。

ステータス

レベル：99

力：99

魔：72

耐：99

速：89

運：86

属性耐性

物理：無効

銃撃：—

火炎：耐性

氷結：—

電撃：反射

疾風：—

核熱：—

念動：—

祝福：反射

呪怨：—↓吸収

スキル

《八艘跳び》

《チャージ》

《大天使の加護》

《魔術の素養》

《武道の心得》

《アリ・ダンス》

《呪怨吸収》

《勝利の雄叫び》

《雨宮蓮の前世》

現在アーカイブを閲覧できません。

〈話ごとのタイトルの意味〉

「#1 I am the house, the house art I」

「#2 Ryomen Sukuna」

「#3 Gleam of hope」

「#4 What I want to do」

「#5 For me to be me」

「#6 JJJ SANPO」

「Automatic punishment doll」

「Reversal technique」

「Ren's Special Leblanc Curry」

「#7 Oath」

「Tokarev T-33 and Pact」

「All out Attack」

「#8 Countdown to...」

「 # 9  
# 0  
U n e 呪  
v 啓  
e M  
i l o r t  
n 龕 a 胎  
g l  
M C  
a 廟 u  
u r s s 藏  
o l d  
e 堂 E  
u n e 天  
m y  
」

## # 1 1

キミのいなくなったモノクロの世界で

ぼくはのうのうと息をしている。

千寿菊のような、

睡蓮の花のような、

そんな笑顔を夢想してみる。

夏が来る。

キミと過ごしてみたかった、

春が終わる。

恋焦がれていた

青い春が消えていく。

1.

「――両面宿儺の領域展開を喰らって尚、生還したと？ 間違いないのだな？」  
「報告によるとその様です。ですが、俄にわかには信じられませんな。唐突に現れた術師が、こ



うも……」

「やはり術師としては幼くとも、《魂<sup>ペ</sup>靈<sup>ル</sup>召<sup>ソ</sup>喚<sup>ナ</sup>術》使いなだけはあるという事か。侮れんな」  
 「だが、この決定はいささか早急ではないか？ 明智吾郎との関連性も確認出来ない  
 と言うのに」

「否！ アレとの相関は、雨宮蓮自身が証明した！ 呪術を学んでたつた二週間の若造  
 が、反転術式はおろか領域展開さえも習得したのだぞ！ ……ツ、一体何なのだ、ペル  
 ソナ使いとはッ！ 本当に同じ人間なのか!？」

「確かにな。五条も、アレには苦戦を強いられていたと聞く。あの五条がだ。三本の力  
 しか取り戻していなかったとは言えど、宿儺から生還した雨宮が、五条に拮抗できる日  
 もそう遠くあるまい」

「ふむ……では、異論ありませんかな？」

「仕方あるまいて。奴がこれ以上力を付けければ、我々の玉座も危うくなる」

「また任務と称し殺すか？ かつての明智の様に……ギヒヒヒッ」

「その方が融通も効くだろう」

「しかしだ！ 明智の手を煩<sup>わづら</sup>わせるような者は、五条以外にはほとんど居なかったのだ  
 ぞ！ 仮にもし、奴が五条すら上回る力を付けてしまえば……！」

「だが今はこれ以上の策は無かるう。如何な理由で秘匿死刑を組んだところで、五条に

邪魔され終わるだけだろうて」

「では今後、雨宮の階級を『特級』として扱うという事で、よろしいですか？」

「……これで現代の特級術師は六人か。今や四人となったが」

「良い首輪を用意しておけ。特注のものをな」

## 2.

〈2018年7月6日〉

〈午前〉

「なーんて思ってたりますんのかなあのド腐れミカンども」

「えっ、はい？ 何がです？」

「いんや、こつちの話。でもさ伊地知イ……わざとでしょ」

「はっ、はひっ、と、仰いますと？」

その空気を一言で言い表すなら、陰鬱だった。

呪術高専にある検死室には、二人の男がいた。敷き詰められたタイルの上の椅子に座る男、五条悟。その横で、冷や汗を延々と垂らしながら謝罪を繰り返す背広を着た男、伊地知潔高。

なぜ陰鬱な空気なのかは、言うまでもなかった。

悟の視線の先、ベッドの上。人一人分程度の大きさの物に、布が掛けられていた。ちようど一七〇センチメートル程度の身長のもの。

それは、五条悟の受け持つ生徒の一人だった。昨日の任務で死亡した、ある男子生徒だった。その事実を再確認した潔高は、改めて自身の不甲斐なさに目を伏せ、冷め切った鋭利なるナイフの様な、あるいは煮え滾る熱湯の様な怒りが、その部屋全体を襲っている事態に恐怖していた。

「特級相当に成る可能性のある呪霊から被呪者を救出なんて、一年のする任務じゃない。大方上が仕組んだんだろうね、悠仁の抹殺を。」

最悪悠仁じゃなくても、任務の名目で生徒が死ねば、僕の嫌がらせになるからね。一石二鳥とか思ってるんじゃない？」

「わ、私の方でも再三忠告はしました。ですが、派遣の段階では本当に特級になるとは……」

「あー、ダルっ。そんな下らない事考える暇があんなら、もつと他の事に時間使った方が有意義だっつーの。本を読め本を」

ぎし、と椅子から嫌な音を立てながら、軽薄そうに悟は言う。軽薄と思っただのは伊地知の感想だ。……だがそれは、大きな間違いだった。

「犯人探しも面倒だしなあ。」

——いつそ上の連中、全員殺してしまおうか」

「ひ……………」

目隠しで見えないが、潔高には解る。あの目隠しの裏で血管が浮き出ており、それが今にも千切れんとしている事を。つまり、五条悟はガチギレしているのだ。

こうなった悟は手が付けられない。親友か、あるいはそれに準ずる程度には知った仲の者で無ければ止められない。潔高程度の信頼関係では歯が立たないのだ。

「珍しく感情的だな、五条。そんなに彼がお気に入りだったのか？」

だからこそ潔高にとって、彼女の存在と現れたタイミングは絶好のものだった。

ガラガラ、と音を立てて引戸式の扉が開けられる。力の調整を少し誤れば勢い良く開けられ跳ね返り自分の頬骨を痛めてしまうそれは、優しく開けられて、彼女の頬骨は守られた。

白衣を着る彼女の黒髪は、セミロングほどの長さなのに手入れが行き届いていない。顔立ちは整っているのに、目元の隈がそれを邪魔する。蓮がここにいたら、まともな生活は送っているのだろうかかと心配するほどだ。

だがそれを差し引いても、右目元の涙黒子と、薄化粧の青みがかかった薄いピンクの口紅に魅力を感じさせる。女性として申し分無いスペックを持つ彼女。だのにそういう相手がいけないのは、単にその業務の忙しさが故。

彼女の名は家入硝子<sup>いえいりしよこ</sup>。悟の同級生であり、悟が気を抜いて話せる、数少ない人物の一人である。医師の免許を持っており、普段は術師の治療や検死を執り行っている。

今や呪術高専の医療を代表する人物と言つても過言ではない。と言うのも、彼女もまた悟の同期らしい逸材であるからだ。

現代最強と名高い五条悟は、やろうとしないだけで出来る事は沢山あるが、出来ない事が意外と存在する。それは『反転術式の付与』だ。

六眼の使用には脳に負荷がかかる。その負荷の治療のため、反転術式を常に己に使用しているのが起因しているのか、他人に反転術式を付与し、治療してやる事が悟には出来ない。おそらくだが、自分の治療に専念している時に他人の治療は出来ないのだろう。

だが彼女、家入硝子は違った。

そもそも反転術式は、緻密な呪力操作により初めて為される技術だ。

その難易度は極めて高く、術師の内には一生かかっても成功出来ない者もいるという。ましてやその難易度のそれを他人に付与するというのは、想像を絶するほど難しい。

かつて五条悟が習得出来なかつた技術と言えば、その難しさが伝わるだろう。

それを硝子は、ぼぼぼぼーんと魔法の言葉で楽しい仲間が出来るかのように、手軽に



初夏の風が頬を撫ぜる。気温が上がり、蒸し暑くなってきたと言うのに、夏服の支給はまだ無い。いい加減衣替えの時期だろうと思う今日この頃、額に玉のように浮かんだ汗が、丁寧に手入れしている茶髪を少し湿らせた。

日陰を纏う屋根の下、五月蠅い蝉の声に顔を顰める。

高専本堂前の石段に座る、二人の少年少女。少年の方は伏黒恵、少女の方は釘崎野薔薇である。傷ついた二人の間には、しかし会話が長続き出来るほどの空気は流れていなかった。

二人はあまり会話を交わす機会が無い。と言うのも、この二者間には男が二人ほど挟まっており、その男達を中心に会話が展開されていくのだ。だが……その男二人のうち、一人は死に、一人は意識不明のまま眠っている。

「トーゼンでしょ。まだ会って二週間かそこらよ？ そんな男が死んで泣き喚くほど、私の涙は安くないから」

「……そうか」

故に、特段仲の悪くもなければ良くもない二人から会話が無くなるのは、必然と言えば必然だった。

……彼女の震える唇が、声を出す事を拒んでいるのも、理由の一つなのだろうか。

「……強いな、野薔薇」

「……それ皮肉？」

「……かもな」

「あッそ。流石、カモメに重油まぶして火イ点ける伏黒恵さんだわ」

「でも、今はその精神が……少し羨ましい」

項垂れて目を逸らしたのは、野薔薇の顔を見なくなかったと言うよりは、野薔薇に顔を見せたくなかったからだった。

眠れない夜に抱いた自虐。眠りたかった夜に抱いた感情。

心を蝕んでいく黒い色。

瞼を閉じればそこにいる二つの影。

もう、まともに顔を見れない二人。

心臓に穴が空いたような感覚。

出てくるのは懺悔だけ。

友情も、友愛も、二人に向けていた全部が、喪失という名の悲しみに溺れ死んでいく。

「……守れなかった」

「……………」

ずっと積もっている後悔を、恵は独り言のように独白する。

「気絶したら全部終わって……目の前で死なれて……俺は、何も出来なかった」



「男のクセに……終わったことにウジウジすんなよ、もやしつて呼ぶぞ」

「俺が、死なせたんだ。俺がッ……！ どうしようもなく弱い、から……」

「オイ」

制服の左肩部分を掴まれるのが分かった。力の籠らない、今だけは込める事さえ難しいその華奢な指が、恵の制服に皺を作った。はっとして、恵は野薔薇の方を、今日初めて向いた。

——震える唇のその真意を、恵は初めて直視した。

「それ以上言ったら……アンタ、マジで殴るからッ」

釘崎野薔薇は悔いている。それこそ、伏黒恵よりも己の弱さを恨んでいる。

戦いの場にすら立てなかったのだ。腐つても友と呼べる仲の者の背を守『ろうとす  
る』事すら出来なかった。

……油断、後に頭部を打ち気絶。回復した後になって思い出し、己の醜態に唇を噛んだ。

祓えた呪霊は、精々二級が良いところ。準二級以下の雑魚に遅れを取って、蓮に苦勞を背負わせた。

自分がした事と言えば、それだけ。

側から見れば、ただの戦犯だった。

お前がどうしようもなく弱いなら、私はそれ以下の雑魚だよ。  
負い目感じてるのがお前だけだと思ふなよ。

お前より、もつとずつと悔しいんだよ……!!

……惨めだよ。ああ、凄く惨めだよ……!!

なあ、恵……

……私って、何でこんなに弱いのかな。

「……………めん」

「うるさい！ 少しは察しろ、ばかっ！」

負い目と悔しさが溶けて、押し殺していた感情の栓が抜けて、野薔薇の双眸からぼろぼろと溢れ出る。

二人の間に、これ以上言葉は交わされなかった。

慰めも、

共感も、

暗涙も、

自嘲も、

野薔薇の傷心を癒す薬にはなり得ない。

目を覚さない二人の友人に遺された、最後の一人の同級生の、その涙を。

恵には、止める事が叶わない。

一人の人として欠如している自分に嫌気が差す。

いつそ消えてしまえば良いのにと、思ってしまうくらいには。

恵は、恵自身が嫌になっていた。

「……あー、その……取り込み中だったか、恵？」

——と、そこに助け舟を出したのは、一人の女性の声だった。

隣の野薔薇の物ではない。真正面から聞こえたのは、野薔薇のそれよりももつと勝気な雰囲気の女性の声。おそらく、野薔薇は知らない声。

俯いていた顔を上げそこにいたのは、やはり恵の先輩だった。縦長の袋を右手で背負い、頭を掻きながらこちらの顔色を伺っていた。

まず目に入ったのは、タイトスカートから伸びる強靱な太腿。ブーツと黒いタイツで覆われていても、その筋骨隆々さは、恵の能力を上回るほどの脚力がある事が一眼で分かる。

次に上半身。こう言つては何だが、恵は津美紀を見て、女性は自分の想像より華奢な生物なのだと思つていたが、彼女に限つてはそうでは無いらしい。胸部に存在する豊満な果実と、高専制服の上からでも分かる、鍛えられた筋肉に目を惹かれた。

そして顔部へと到達する。顔は可憐と言うよりは、美麗と言つたほうが語弊がないだ

ろう。そのつり目は長い睫毛にてより一層妖艶さが増している。前髪は眉のところできり揃えられており、後ろでまとめられたポニーテールは、髪の毛の一本一本が生糸のように美しい。紫色のフレームの眼鏡が印象深い。

「禪い……真希先輩」

「私を苗字で——呼んでねえ、だと？　マジでどうした恵、悩みでもあんのか？　一体どんな心境の……」

「真希、真希……」

そうやって真希を必死に呼ぶのは——一瞬野薔薇は目を疑ったが——見紛う事なく、『パンダ』だった。

上を見てもパンダ。下を見てもパンダ。二足歩行だがパンダ。人間の指のように二本指だがパンダ。言葉を喋っているがパンダ。

結論、パンダ。

目の前にいる生物とそれが人語を話している状況を理解出来ず、野薔薇はパンダがゲシュタルト崩壊してしまっていた。

「なんだよパンダ、今話し中……」

「いや、知らねーのか!?　マジで死んでるんですよ！　一年が一人！　だから暗いんすよ……」

「は——はっ、は・や・く・言・え・や！ これだと私ただの鬼畜じゃねーか！」  
 「実際そんな感じだぞ?!」

「おかか……」

「……誰、あの人達?」

ひよっこりと顔を出した「おかか」と喋る少年の存在も相俟って、野薔薇の涙はとつとつに止まってしまっていた。

全身は細身で、色素の薄い灰色のショートヘア。物憂げなその目にかかるかという所まで前髪を下ろしている。加えて、口元をすっぽりと覆うハイネックにフアスナーを付けた制服が、彼の不思議属性に拍車をかけていた。

「二年の先輩だよ。」

ポニーテールの人が、ぜんいんまき 禪院真希先輩。呪具使いだ。

口元を隠してるのが、いぬまきとけ 狗巻棘先輩。呪言師で、語彙がおにぎりの具しかない。

んで、パンダ先輩。

後は、おつこつゆうた 乙骨憂太先輩って言う、俺が手放して尊敬できる人が居るんだが、今は海外に

出張してる」

「アンタ、パンダをパンダで済ますつもり?」

野薔薇は訝しむが、当の本人ならぬ本パンが口を開くので、野薔薇は考えるのを止め

た。

「あー、おほん。さつきは悪かったな、真希に悪意があった訳じゃないんだ。許して！  
このとーりー！」

「こんぶ」

「にしても真希、後輩にはもうちよつと優しく接しないとだなー」

「……ふん、甘やかすだけが優しさかね」

「いやいや、そう言う真希だつて憂太の前じゃ——」

「うるせえ、いいから本題入れ！」

「あーっ、お尻蹴らないでー！」

真希がパンダを怒鳴りながら足蹴にする。タイキツクはスパアンという良い音を立てて、パンダの尻に炸裂した。お尻を摩りながら、パンダは続ける。

「じ、実はお前らに、京都姉妹校交流会に出てほしくてな。本当なら二年と三年とで取り行うんだが……」

「その三年のアホが停学喰らつてつから、人数が足りねえんだ」

「高菜」

「え、戦うの!? 術師同士で!？」

「ああ。言うなりや、殺す以外は何しても良い呪術合戦だ。」

……やるだろ？ 仲間、死んでんだもんな？」

『やるー！』

——俺私は、強くなるんだ。そのためなら何だつて……!!

喪失を胸に、怒りを原動力に。

今は亡き友を思い、一步、確実に前へ。

二人の心には、暗雲が立ち込めたまま。

後悔は、未だに心を蝕んでいる。

けれど——

止まない雨など、決して無く。

二人の挫折は、もう終わった。

「でも、シゴキも交流会も意味ないって思ったらソツコー辞めるから」

「同じく」

果敢に挑発する二人。その意気に迷いはない。二年生も、挑発で返した。

「これぐらい生意気があるとやり甲斐もあるわな」

「しゃけしゃけ」

パンダと棘が挑発に乗る所で、真希は一つ疑問を抱いていた。

「つてか確か、一年は四人だったよな。もう一人は？」

「……ちようど、お見舞いに行こうと思つてたんです」

「あー……そうか」

「ついでに話します。経緯とか、色々」

歩み始める恵を追うように、三人と一匹——否、四人が歩く。呪術高専には、当然ながら怪我人や遺体が運ばれてくる時がある。行き先は、運ばれた彼の眠る場所。即ち、病室である。

高専の病室は数こそ少ないが、総合病院には置かれていであろう機材が組み込まれている。分かりやすい例を挙げるならば、パルスオキシメーター生命維持管理装置だろう。

やがて五人は、都立高専病棟へと辿り着いた。彼が眠るのは一階の一〇一号室。たった一人だけしかない部屋の扉を開けると、同時に薬品の匂いが鼻腔を刺す。それに一瞬だけ顔を顰め、奥へと進んでいく。

そこには——点滴と共に生命維持管理装置を繋がれた、彼の姿があった。  
「……コイツが、もう一人の一年？」

「はい。意識不明で……もう、丸一日戻っていません」

恵は、封じたい己の記憶を紐解いていく——。



〈2018年7月5日〉

肌を打つ雨の冷たさに、恵は目を覚ました。

視界は不良。まだピントの合わない両眼を、重い体に鞭打ち立ち上がりながら擦り、状況を把握しようとする無理やり頭を回す。

目に入ったのは、コンクリートの地面だった。雨に染みて、より一層濃い鼠色となるアパートの屋上で、自分は気絶していたらしい。

(……っ、くそ、気を——ジョーカーは!?)

——そして、共闘していたはずの同級生を見失っている事に気付いた。

何秒気を失っていたのか。それを考える余地は無く、ふらふらと立ち上がって周囲を見渡す。そこでようやく、恵は自分の位置が普通よりも高い所にある事を覚えた。

だがここにはジョーカーはいない。戦闘において信を置く雨宮蓮は存在しない。虎杖悠仁及び両面宿儺のことも気がかりだが、恵は真つ先に、ジョーカーの搜索を開始しようとした。

——背中にいる凶大な気配が、恵にそれ以上の行動を起こさせなかったのだ。

(宿儺……!)

だがそれも束の間。ほとんど空の呪力を無理やり捻出して、振り向きざまに宿儺へと敵意を向ける。——だが。

「蓮……?!」

——制服姿となつてしまつた蓮と、その襟首を掴み引き摺る宿儺を見て、一瞬だけ魂が揺らいでしまう。

蓮を一瞬だけ見やる。ジョーカーへと変貌する際の怪盗服は着ておらず、その制服姿もどこか歪だ。注意深く見れば分かるのだが、右膝から下、左肩から先と右手首部分の制服が無い。……いや、そもそも制服全体が切傷だらけだつた。

なぜ、と思つたものの、その思考は宿儺の一声で遮られる。

「そら、土産だ。しつかり受け取れ」

「お——」

オイ待て、と叫ぼうとするよりも早く、宿儺は無造作に蓮を投げた。

胴体を抱えるようにして、どうにかキャッチできた事に安心する。ただがそれも一瞬だけだ。キツ、と鋭い目で再び宿儺を見る。何の意図があつてかは知らないが、いつでも式神を出せるよう手を開いた。

「そう焦るな。暴れたりはせん。期間を限定した縛りを組んだ。一分間人を傷つけない代わりに、体の自由を俺が奪う。そして一分経つたら、小僧は俺と代わつても良いという、な。

それまでの間、少し話をしよう、伏黒恵」

「……………何だ」

宿儺の提案に恵は乗るしかない。断つても良かったが、恵には今、断れるほどの余裕は無かった。

「伏黒恵、お前の術式は影を媒体としているな」

「だったら何だ」

「ふむ……………お前とジョーカーは『似ている』。お前には、ジョーカーに匹敵する力と才がある。故に分からんのだ。」

——お前あの時、何故逃げた？」

「……………逃げた？」

いつの事だろうか、と恵は逡巡するが、その様を見て宿儺は一つ溜息をついた。

「……………宝の持ち腐れだな。少しがっかりしたぞ、伏黒恵。」

話は終わった。もう良いぞ小僧、代わりたいな ——……………ら……………」

「は……………いや、まつ、待て、悠仁!! まだ心臓が——」

急ぎ宿儺に静止を求めるが、もう何もかもが遅い。

「ゆう、じ……………」

「……………恵」

第三、第四の目は閉じ。

刺青は消え。

意識は完全に、悠仁へと移り変わった。

つまり……もう、悠仁は助からない。

「俺、俺は……」

「良いんだ、恵」

言い淀む恵を、そう言つて遮る悠仁。痛みを堪えて、無理やり笑つてみせる。

「アイツに敵わないのは、俺達二人とも分かつてたろ。恵が囧に言ひ出したら、俺は必死で止めてたし、どっちにしろ、俺は囧になるつもりだったんだ。この結果は……残念だけど。」

今思えばさ、蓮に助けてもらうつて選択もあつたけど……俺が蓮に助けを求めなかつたのは……さ。蓮を守りたかつた、つてもあるんだけど……やつぱり……つ、蓮にカッコわりーとこ……見せられねえーつて……意地張つてさ……でも俺、蓮に、怪我させちまつて……蓮、死にかけててさあ……」

「悠仁、もう——」

「……話させてくれよ、恵。何言いたいかは……俺もよく、分かんないけど……ただな」

——俺は、この決断に……何にも後悔はしてねえ。

「悠仁……」

「ゲほ、ゴぼつ！ つはア、はあ……恵は、悪くねえよ。お前……は、正しい事をした。蓮だつて……きつとそう言う。野ばらと、れんを、たすけられるのは、おまえだけだったから……」

「——つ、もう、いいから」

「あまり、ひきずんなよ。おまえは、いろいろと、かんがえすぎる……から。………わ  
るい、もう、だめだ……」

な、めぐみ……のばらや、れんや、せんせいに……いつとい、て」  
ながいきしろよ……つて。

そう言つて、虎杖悠仁は地に伏して……二度と動く事はなかった。

涙と生命が、目の前の虎杖悠仁の抜け殻から流れ出ていく。

声も、呼吸も、もう聞こえない。

「……………、つ」

……冷たい雨が肌を打つ。

上を向いた。変わらず、曇天の空が広がっている。

ぐちゃぐちゃな空を、俺は見上げた。

……悔やむな。これは己が選んだ道だ。

目を逸らすな。これは己が背負う業だ。



「——んで、蓮は」

「意識が未だに戻ってない。報告を本気で信じるなら……と言うかあの惨状を見させられたら信じざるを得ないけど。」

彼の制服の損傷具合を見るに、左腕と右膝、右手首から先を切断、そして全身の裂傷……どう考えても致命傷だ。大量出血は免れないし、言っちゃ悪いが何故死んでいないのかが不思議だよ。

今生きてるのはおそらく、宿儺の反転術式だろうね。大方、切断した四肢をそのまま接合させたんだろうよ。両面宿儺は医学の知識も持ち合わせているらしい。面白いね、雨宮も宿儺も」

「……その、雨宮くんの体は……」

「特に異常も見られないし、今後も問題なく動けるだろう。直ぐに起きればリハビリも必要ない。後遺症も考えなくて良いと思うよ」

「宿儺はなぜ、蓮を生かしたんだ……?」

「さあね。……ペルソナ使いつてのは、私らの予想を超えていく化け物だからね。どこかに利用価値を見出したのかも。案外、雨宮も『器』なのかもね。虎杖の代わりに指食べさせたいのかな」

「……ペルソナ使い、か。良く言うよ。僕に本当の術式を看破みやぶられてるクセに、最期まで

隠し続けるんだからさ」

そう言う悟を、硝子は責める気にはなれなかった。

煙草を取り出そうとして、禁煙している事を思い出して躊躇う。だが大の大人が過去を語るには、酒と煙草が必要なのだ。

絶対禁煙であるはずの検死室で、硝子はマールボロを口に咥え、火をつけながら悟へと問うた。

「……正体を隠されてた事、まだ根に持つてるのか」

「当たり前だろ。それに、アイツは全部話してくれた訳じゃない。アイツはまだ隠してた。隠してたのに、最期まで伝えてくれなかった。」

三人で最強って言い合った仲なのにさ。疎外感じちやうよね」

「……胡散臭い男だったな。吾郎は」

「その胡散臭い男に惚れてた女が言う？」

「お前のそういうところ、本当にクスだ変わらないよな」

「知ってるよ。」

……蓮も、何か隠してる。幽ス○ソド○紋使いは引かれ合うとは言わないけどさ。でも、吾郎と蓮がペルソナ使いである事は、何か繋がってるんじゃないかって思ってしまうんだ。



現に、蓮の本当の術式の開示は、今までしてないし聞いてない。吾郎と同じに術式は《魂<sup>ペ</sup>靈<sup>ル</sup>召<sup>ソ</sup>喚<sup>ナ</sup>術》として登録されてるし、まあ怪しいったらないね」

「アイツが最期に言っていたらしい人物……今も探しているんだろう?」

「まあね。でも、それっぽいヤツはてんで見つからない」

「……はー、伊地知も苦勞してるな。友人の遺言の真意を確かめたいからって上司に使い走りにされて」

(それを聞かされて……何も言えるわけないじゃないですか)

潔高はそう思う他なかった。

潔高は、明智吾郎の存在をほとんど知らない。というのも、彼も高専卒業生であれど、吾郎は既に死亡していたためだ。悟は二学年上の先輩に当たり、吾郎は悟達が二年生の時に死んだ。

だが悟の吾郎に対する執着が、潔高の悟に対する認識にほんのりと変化を与えた。

——これほど寂しそうに郷愁の念を帯びる呪術師最強を見るのは、潔高は初めてだったのだ。

「雨宮に吾郎の事は話すのか?」

「んまあ蓮が吾郎レベルになったら、話すつもりでいるけどさ」

「……つまり雨宮がお前を超えたらって事か?」

「そのレベルでなくちゃ困るんだよ。同じペルソナ使いなら。

今だからこそ言えるけど……吾郎は、かつての僕より強かった。ううん、多分今の僕よりも強かった。

僕の想像を絶するような地獄でも、如何なる艱難辛苦かんなんしんくでさえも、吾郎は我が物顔で乗り越えてった。その境遇に腐る事なく、最期の一瞬までアイツは足掻いた。

——だから、アイツは僕にとって明智吾郎最強なんだよ」

「……………」

「蓮が強くなるのは本望だ。けど、誰が何と言おうと、僕の中の思い出を揺るがすつもりは毛頭ない。いくら蓮が力を付けようと、絶対に負けてなんかやんないし、まして『最強』を超えるなんて事はさせない。

——俺の『最強』は、明智吾郎で良いんだ。俺でも、蓮でもなく。」

過ぎ去った青春のように。

胡蝶の夢のように。

押し返す波のように。

いずれ去る嵐のように。

空へと消える煙草の煙のように。

悟の一時は、長く続かずに終わったのだ……。

「良いかい悟、呪術は非術師を護るためにある」

高専の教室の中、そう言ったのは、悟の左隣に座る夏油傑げとうすくゐる。悟の数少ない悪友であり、腹を割って話せる親友の一人である。

黒い高専の制服にボンタンのズボンを履いている彼は、髪を後ろで団子にして纏めているのだが、何故か左頬へと流れるようにして前髪を垂らしている。悟を諭している傑の表情は穏やかで、自信に満ち溢れていた。

「……それ正論？ 俺正論嫌いなんだよね。呪術カに理由や責任を乗せんのは雑魚のやる事だろ。ポジショントークで気持ち良くなつてんじゃねーよ、オ、ツエー！」

だがそれを、悟が真面目に聞くはずもなかった。髪を下ろし、真つ黒なレンズの丸眼鏡を掛ける悟は、不細工な顔で舌を出し、傑を煽っている。今も昔も、屑な性格は変わらなかった。

「下劣な言葉を吐かないでもらえるかな、悟？ ここには女性が居るんだからさ。デリカシーの欠如は君の人間性に対する疑念に繋がるよ。」

……あつごめん本当の事言っちゃった？」

——そして第三の声。悟から見て右隣にるのが、明智吾郎あけちごろうである。

高専の制服は、上着だけが上記二人とは異なり白い。冬服の白シャツのようであるが、歴とした制服であり、生地も悟らと同様のものを使用している。黒手袋を着用して

いるのだが、そのワケは未だに不明。恋人である硝子だけが知る、彼の秘密である。

悟を美男とするならば、吾郎は眉目秀麗。髪型に頓着がないのか、癖のある茶髪を肩まで伸ばしている。線の細く華奢な彼の優しげなその表情からは、全く想像出来ないほどの毒舌が悟へと炸裂する。

ちなみに吾郎のその右隣に硝子が座っている。シヨートヘアの、まだ隈のない彼女だった。

「あ、あん!? そう言う吾郎こそ、本音は『しょーこちゃんのダーリンとして許せなくい♡』だろ? キッツツツ!」

「にしても、君は現実が見えていないんじゃないかい、僕?」

「聞けよオイ」

「心外だな。悟はともかく、吾郎にそれを言われるなんて」

「オイ傑」

「アンチテーゼが無ければ、アウフヘーベンは起こらないんだよ、僕。君のそれは、結局は理想論だ。夢を見ずに現実を見なよ。非術師が全員善人つて訳でもあるまいし。

大事なのは『いかなる正義を貫くか』だよ。ヒーローなんて、そんな大層で下らないモノになれる訳が無いんだから。

……まあ、その自己中心を具現化したようなばっばーはともかくとしてね」

「あーはいはい、流石は《鳥》<sup>クロウ</sup>君でちゅね、ありがたいお説教をどーもどーも。

ってか思うんだけどさ、お前のあの服、どこにカラス要素があるワケ？ 真っ白けな怪盗が何処にいんだよ。漫画の読みすぎじゃね？ 悟くん正直サム〜い」

「私もサム〜い」

「世間知らずで礼儀知らずの腐れ脳ミソ共に言われたくは無いかな」

あはははははははは。と笑い合う三人。

ただし、目は笑っていない。

一斉に立ち上がる三人の戦闘体勢は整っていた。

ちなみに、悟がポジショントークがくと言っている内に、吾郎の隣に座っていた硝子は逃げた。

「——外で話そうか、二人とも」

「寂しんぼか？ クロウと行けよ」

「時間と力は有意義かつ効率的に使うべきだと思うんだよね。

だから——『一撃で』『二人纏めて』躡けてあげるよ」

高専の教室で、今まさに三人の戦争が起ころうとしていた。

「……」

そんな12年前の出来事を、悟は追憶してみる。

あの日常に帰りたいな、なんて、そんな事を思ってみる。  
もう叶わない日常を、望んでみる。

(……何が『三人で最強』だよ。俺を遺して逝きやがって)

煙草の煙が、目隠しで覆った目に染みた。

そんな言い訳が通じるほど、悟はもう子供ではないけれど。

ぼやける視界視力の流れに理由をつけるには、これしか思い浮かばなかった。

6.

〈2018年7月6日〉

〈昼〉

昼の渋谷を、奇妙な者が歩いている。

特に人目を引くのは、一人の男性だった。優しそうな、妖しそうな狐目の彼は、長い黒髪の一部を団子に纏めている。左頬へと垂らした前髪が、初夏の風に少しだけ揺れる。これだけ見れば印象の良いただの好青年だ。

時に、諸君らは袈裟けさをご存知だろうか。葬式や法事の際に仏教徒の住職が着る宗教的な着物の事だ。京都の駅などでは、法衣の入った大きな鞆を持つ住職も見受けられる事もある。

だがここは渋谷だ。東京に寺や神社が全く無い訳ではないが、渋谷のど真ん中で五条袈裟を着た先の男性は、若者の目には少々奇妙に映ったようだ。それに加えて、虚空に向かつてべらべらと独り言を言うのだから、何某かの精神疾患を疑われるのも無理は無かった。

「まあ、中途半端な当て馬じゃ意味が無いからね。それなりに収穫はあつたさ」

——額に横一文字にある傷も含めて、その男は、現代渋谷の風景には異様に映つた。やがて男は、とあるファミレスへと到達する。とは言つても、何の変哲も無いファミレスだ。昼餉はとつくに過ぎているため、席はやや空いていた。

自動ドアが開き、冷ややかな空気が肌を貫く。と同時に、店員から声をかけられた。

「いらつしやいませ、一名様でよろしかったですでしょうか？」

「はい、一名です」

至極当然のように、自分は一人である事と、連れがいない事を示した。独り言を呟いていた袈裟の男性は、まるで先の行動が嘘だったかのように、席へ誘導されて行つた。

薄寒い<sup>うすらさむ</sup>笑みを、能面のように貼り付けながら。

席に誘導され、男は再び、独り言を始めた。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n

# L  
l e  
l t  
  
H u  
a s  
z  
e s  
t  
a  
r  
t  
  
t  
h  
e  
  
g  
a  
m  
e.



## # 1 2

7.

「——つまり、キミ達の親玉の目的は『今の人間』と『呪い』の立場を『入れ替え』る事……といった所かな？」

ファミレスの席で、袈裟を着る男が独言する。

注文の一つも取らず、ただ坦々と空想に話しかける様は、しかし周囲の人々には関心を寄せるには至らなかつたようだ。皆友人やらと語り合っており、袈裟の男は意識どころか存在の認知すらされていなかった。

「……少し違うな」

——四人の『ナニカ』を除いて。

否、四体と呼ぶべきだろうか。袈裟の男の左隣の席に座る、巨大な蛸のキャラクター。ゆるキャラと言つても過言ではないほど、つぶらな瞳が可愛い。時折、ぷふうーぷふうーと呼吸を繰り返している。

その蛸たちの前に座る屈強なるそれは、左腕を布で覆い隠している。二メートルはあろうその身長、頂点、頭部を見ると、目からは『木』が空へと伸びている。口は剥き出

しで、体は全体に掛けて黒の紋様が張り巡らされていた。

袈裟の男の前に座る一ツ眼小僧のそれ。火山頭からは常に蒸気が発生している。フードの付いた斑柄のポンチョのような物を着るそれが、ずっと袈裟の男と会話していたのだ。

その火山頭の隣に座るのは四体目。その容姿は、一言で『まつくろくろすけ』と呼称出来る。黒手袋を着用しており、それは二の腕を掴んでいる。ストラックスの先の黒い革靴は、行儀という言葉を忘れたように机の上で組まれている。フードを深く被っているのにも関わらず布作面ふさくめんで顔を被っており、顔は分からない。

……いや、そもそも無いのかもしれない。良く見ると、手袋や靴下の隙間、頭巾の奥に見えるであろう『肌』が、どこにも見当たらないのだ。向こうの景色が見えるだけで、あるはずの肌がどこにも無かった。

「人間とは『嘘』だ。己の身から出る正の行動には、必ず負の感情が隠れている。」

だが憎悪、殺意から来る感情は、人間の持ち得る唯一の『真実』。そこから転じ生を受けた我らこそ——真の人間と呼ぶべき存在だ。

「贗物は、消えて然るべき……！」

「そう言い切る火山頭を、しかし袈裟の男は一蹴する。」

「でも現状、戦ったとしても負けるのは君達の方だろうか？」

「だから貴様に聞いているのだろうが。……で、我々はどうすれば呪術師に勝てる?」「うん……三つ、条件を満たせば勝てるよ。」

一つ、現代最強と名高い呪術師、五条悟を戦闘不能にする事。

二つ、五条悟を超える可能性のある呪術師、雨宮蓮も戦闘不能にする事。

三つ、両面宿儺……虎杖悠仁を仲間に引き入れる事」

それを聞いて、火山頭は訝しんだ。

「いや待て……五条悟はさて置くとして、宿儺の器である虎杖悠仁は死んだのだろうか? 雨宮蓮も、現時点で既に戦闘不能だ。後は五条悟をどうにかするだけなのではないか?」

「さあ、どうかな」

そう言う袈裟の男の表情は、愉楽に歪んでいた。

回答をはぐらかす男の思惑が、己の思惑通りである事に漏瑚が気付くまで、あと――

8.

「許可なく見上げるな。不愉快だ、小僧」

「なら降りてこい。思う存分見下してやつから」

血の泥の上に、少年は立っている。組み立てられた牛頭骨の山の上に、少年と瓜二つ

の男が座っている。少年の名は虎杖悠仁、男の名は両面宿儺。だが宿儺の服装は、少年の制服と異なっていた。

宿儺は現在、白い着物を着用している。右前に正しく着られるその着物は、袖と袂が男性用のそれよりも大きい。青い襟巻きを後ろに流している。組まれた足を見れば、黒い足袋と草履を履いていることが分かる。

二人の間では、火花さえも散るかというほどに空気が切迫している。それもそのはず、虎杖悠仁は眼前の両面宿儺によつて殺害されたのだから。

「……どこだ……あの世か？　まあどこでもいいや。死んだ後も teme と一緒なのは癪だけだ」

現在虎杖悠仁は、見覚えのない空間にて辺りを見渡していた。

まるでそこは地獄。天井に延々と掛かる巨大な肋骨の橋々は、生前に見た雨宮蓮の領域展開を想起させる。足元は血の泥で埋もれている。地面は、靴底から来る感触からして、土ほど柔らかくはないがコンクリートほど固くもない。

だがそれだけだ。それら以外には何も無い。悠仁はその光景を気色悪いと吐き捨てた。

「随分と殺気立っているなア、小僧」

「当たり前だろ！　蓮傷つけられた挙句 teme に殺されてんだぞー！」

「お前の腕も含め、雨宮蓮もあの後ちゃんと言してやったというのに。その恩を忘れたか？」

「傷つけてる時点で——赦せねえんだよッ!!」

落ちていた牛頭の骨を適当に掴み、宿儺へと投擲する。砲丸投げで世界記録を大いに超えるほどの膂力を持つ体は、一直線に宿儺へと向かう。

だがそれを宿儺がわざわざ受けてやる道理はない。浮遊するように宙を舞い回避、一本の肋骨の上へと着地するが、その肋骨の橋を、物凄い勢いで駆け上がってくる獣が見えた。

「歯ア食い縛れや!!」

「必要無い」

獣の意気を、化物は嘲笑う。悠仁の拳を、宿儺は難なく往なし躲す。悠仁にとっての生死を分けた大喧嘩は、宿儺にとっては鼠の小競り合いでしかない。

だからこそ、悠仁は宿儺の油断を突く。下方に往なされた右拳は、次なる一手のために引つ込めず、そのまま肋骨の橋へとブチ当てた。悠仁の怪力は、コンクリートさえも軽くブチ抜ける。

果たして肋骨の橋は、流石の宿儺のバランスをも崩した。

(最初から足場を……)

「バーカ！ 引つかかってやんのオツ！」

その隙を逃すほど悠仁は鈍感ではない。地を突く右拳を起点にして体を捻り、左踵にて一蹴する技——躰道たいどうにおける旋状蹴りを、宿儺へと見舞う。

だが宿儺のフィジカルであれば、この程度の攻撃ならば簡単に避けられる事を悠仁は見知っている。——だが、蹴りに体勢を崩している今、悠仁に出来る事はなく。

「……オマエは詰まらんな」

「お、うっ、つてあら〜〜?!」

吐き捨てた宿儺にげし、と足蹴にされて、ひゅ〜と地に落ちてしまう。

「へブっ！ ぶはあっ、ンのやぶおっ?! ……おぶっ！」

「何だ、良い腰掛けではないか」

着水、起き上がろうとするも降りてきた宿儺に足場にされドボン、そして椅子にされた事で三度目のぼちゃん。悠仁の今までの生の中で、一気に三度も溺れかけたのは初めてだった。それを意に介さず、宿儺は口を開く。

「ここはあの世ではない。俺の生得領域の中だ。心の中と置き換えても良い。つまりこうして会話出来ているという事は……我々はまだ死んでいないということだ。

さて小僧、お前が俺の出す条件を飲むのであれば、お前の心臓を治してやろう。雨宮蓮を治した時のようにな。

条件は二つだ。①・俺が『契鬨』<sup>けいかつ</sup>と唱えたとき、お前は俺に一分間体を明け渡す。②・この約束をお前は忘れる。

この二つを飲めば、お前の心臓は治すと約束しよう」

「お断りだね。何すんのかは知らんけど、今回でハッキリ分かった。テメエは『邪悪』だ。テメエの要求なんざ飲まねえし、そうまでして生き延びてえなら無条件で治せや、クソイキリ野郎」

「事情が変わったのだ。近々、面白いものが見れるぞ小僧」

「ハッ、さんざ息巻いといて結局日和ってんじゃねえかよ。死にたくねえならそう言えよ。……いや待て、それで蘇ったとして……………」

——テメエ、蓮で何するつもりだ!!」

「ほう」

宿儺は初めて悠仁の勘に少し感嘆した。

「勘だけは鋭いな、仔犬風情が」

だが、宿儺には蓮をどうしようというつもりはない。……いや、強敵として認めているので、より洗練された蓮と戦いたいとは思ってはいるが。勘違いしているのならそれでも構わない、むしろ都合だと、宿儺は続ける。

「蓮から鍛えられたんでな。(主に頭を) ……それはそうと質問に答えろ。」

……いや、もう答えなくて良いぜ。大方、蓮のペルソナを使って完全復活とか企んでんだろ？ 蓮のペルソナ能力は未知数だからな。どう使うのかは知らんけど、お決まりのパターンだもんなあ、敵の能力を利用して逆転つてのは。

——させねえよ。ここで俺と死ぬか、無条件で俺を治すか、その二択から選びやがれ」  
「……はー、うざ」

今度は溜息を吐いた。

「ならその一分間は、誰も傷つけんし殺さんと約束する」

「信用できるか！」

「するしない以前に、これを破れば罰を受けるのは俺の方だ。利害による縛りは、呪術における重要な因子の一つ。お前も身を以って知っているはずだ」

「んなこた知った事じゃねー！ 二度とテメエの好きには——」

「……はあ、ではこれはどうだ？ 『これから俺とお前で殺し合い、勝った方の要求を飲む』」

その言い草に、しかし悠仁は少し淀んだ。

あの雨宮蓮を終始圧倒していた両面宿儺と戦う。それがどういう事なのかが分からない悠仁ではない。蓮と戦う宿儺を、宿儺の目を通して見ていた悠仁が分からない道理はないのだ。



だが、今の悠仁は頭に血が上っている。怒髪天を衝くと言っても足りないほどだ。これ以上、友や罪の無い人々を、宿儺の好きにさせるつもりは無い。

一瞬体を浮かせ、その一瞬の内に宿儺の尻による呪縛から解き放たれた悠仁は、宿儺から距離を取った。四つん這いの状態から立ち上がりつつ――

『いいぜ』、ボコボコ――』

――散、という音と共に、悠仁の意識はここで途切れ。

ここで得た記憶は、悠仁の頭から永遠に失われた。

## 9.

「伊地知。僕はね、夢があるんだ」

そうして伊地知潔高に語るのは、五条悟。検死室で、虎杖悠仁の遺体の前で、悟は己が夢を語り始める。

「保身馬鹿、世襲馬鹿、高慢馬鹿、ただの馬鹿……腐ったミカンのバーゲンセールだよ、今の呪術界上層部は。」

――だから、リセットするんだ。

僕らの代で、呪術界の悪習を終わらせる。上層部の玉座を叩き落とし、古典的な封建制度を取り替える。

上の連中の塵殺なんて赤子を殺すより簡単だよ。でもそれだけじゃ、首がすぐ変わるだけで変革は起きない。そんなやり方じゃ、誰もついて来ないしね。——だから僕は、『教育』という手段を選んだんだ」

若人の教育。強く聡い仲間を増やし、呪術界に多様性をもたらす事。それが悟の目指す未来であり、吾郎への真の餞<sup>はなむけ</sup>。吾郎が生きるはずだった未来を、誰もがもつと楽に呼吸出来るように。

「恵も、野薔薇も、蓮も……二年生も。三年の秤<sup>はかり</sup>も。皆強くなる。これからの呪術界を引っ張っていく、その代表者なんだよ。そして……」

……悠仁もその一人だった……!!

「……話はどう良いだろう。ほら、さっさと出なよ。解剖するところも見てるつもりか?」  
「しっかり役立てろよ」

「役立てるとも。——誰に言ってるの」

そう言う硝子の背中で——

「うお、フル○ンじゃん!」

別の誰かの声が聞こえた。



虎杖悠仁、帰還。完全復活。

10.

男はレストランのウェイターだ。

男には義妹が四人おり、その四人の大学の学費を稼ぐため、日々バイトに精を出している。皆可愛い、自慢の義妹だ。その兄であるからこそ、男はバイトを辞めるわけにはいかなかった。それに何より、男は正義感が強かった。

だが――

(ああ……ヤバい、ここにいと——死ぬ!!!)

——そんな男でさえも抗えない、生存本能。人間がとうに捨てたはずの獣の感覚が、男の全神経をプッシュした。

足が震えているのが分かる。冷や汗が止めどなく溢れていくのが判る。あまりの恐怖に胃酸が込み上げてくるのが解る。

その怖気は、袈裟の男が座る五番テーブルにある。

男は詳細を知らない。そもそも男には、呪術の才能がある訳でもなければ、呪力を一定以上持っている訳でもない。だが、とても臆げにだが、嫌なモノの雰囲気くらいは掴める。

その感覚が男を生かし、後に四人の義妹に再び会うことが出来た。

「つまり、儂らでは五条悟には敵わぬと?」

「雨宮蓮もね。ヒラヒラ逃げられるか、最悪の場合、君達は消される。『殺す』よりも『封じ』の方が良いと思うよ」

「封じる? その手立てはあるのか?」

「——特級呪物、《獄門彊》を使うのさ」

「何と——持っているのか、あの忌み物を!!」

ポツポツ、と火山頭の溶岩が沸騰する。

「……漏瑚、興奮するな。暑くなる」

袈裟の男はそれを揶揄する。だが、漏瑚の勢いが収まる事は無い。

——そしてここが、ウエイターの男の限界だった。

「すみません店長、俺辞めます!!」

「は!? いやちよ、おい!」

財布と携帯といった貴重品は常にポケットに入れてある。服や鞆などはまた買えば良い。我慢の限界が来て、男は正面入口から制服姿のまま逃亡した。

店長と呼ばれた唇の厚い男が頭を掻き、舌打ちをする。逃げ出した男の意味不明な行動によるのもあるが、店員がバイトをばつくれると風評が広がってしまったえば、店の売上

に直結してしまうためだ。

「あーもー何だつてんだよ……、五番は注文取らねーし、バイトばつくれる奴が出て来やがるし……」

「店長、私注文聞きましようか？」

「いや……もういいよ……」

聞くくらいなら行けよ、と心中に罵声を留めながら、クーラーが付いているのにも関わらず、店内が外と何ら変わらない暑さになっている事に違和感を感じながらも、店長は男に注文を伺い――

「お客様、ご注文はいかがいたしますか――」

――それが店長の遺言となった。

一瞬にして男を男たらしめた要素が燃え尽き炭となつてなお、火は焰々と盛る。ウエイターの叫び声が伝播して、座っていた客達が次々と立ち上がり、逃れようと必死になるが……

「あーあ、あまり騒ぎは起こしてほしくないんだけど」

「こうすれば良からう」

……呆気なく燃え尽き、死んでいく。

命が焼き切れていく。

一体焼死した者共に、何の罪があるうか。老若男女も問わず、袈裟の男以外の人間の生命は、ここで焼け死んだ。女性のウエイターがやつとの思いで玄関に這いずり助けを乞うも……店内にて生きている人間はたった一人、袈裟の男のみとなってしまった。

「ケホツ……高い店にしないでよかつたよ」

焼き焦げる人体の臭いに噎せ返りそうになりながら、男は周囲の光景を何とも思わないかのように紡いだ。お構いなしに漏瑚は問い掛ける。

「夏油——儂は宿儺の指何本分の強さだ?」

「うーん、甘く見積もつても八、九本かな」

「充分だ!! 夏油、《獄門彊》を儂にくれ!!

菟集しゅうしゅうに加える……その代わりに」

——五条悟は、儂が殺す。

111.

高専医療棟、渡り廊下にて、悟と硝子が歩いている。悟はウキウキと上機嫌だが、硝子はどこかどんよりとしていた。

「いや、良かった良かった!」

「はあ……報告書、書き直さなきゃ」

「いや、報告書はそのままにしておいてくれる? 上層部に、悠仁が生き返った事を知ら

れたくない。記録上は、悠仁は死んだことにしといて」

「虎杖がつつり匿うの?」

「いや、交流会までには復学させるよ。でもまた狙われる前に、最低限力を付けさせたいからね」

その回答に、硝子は重ねるようにして続ける。

「……その心は——」

『若人から青春を取り上げるなんて、許されてない』

「……だろう?」

「あつはつは、大正解〜!」

学生時代からの付き合いだ。彼の性格の変わりようも間近で見してきた。これくらい、腐れ縁として何という事はない。だが——

「問題は雨宮か。起きたらどうするんだ? 虎杖隠したまま復学?」

「う〜ん、それが迷っててさ。最低でも、一時は硝子に預けたいんだよね」

「反転術式か」

「そそ。万が一という事もあるし、人体に詳しい硝子に医学教えてもらって、それで反転術式の精度も上がってくればな〜って。コツとか教えてあげてよ、論理的に」

「んなもん、ひゅーつとやってひょいっだろ」



「いや分かんねえよ」

「センス無えな〜」

くつくつと笑いながら硝子は言う。

悟は久々に、硝子が笑っている所を見た気がした。

「早く起きてくれないかなあ」

「……雨宮次第だろうな」

医者は万能の神ではない。治療に奇蹟は起こらない。病氣や怪我を治すのは、それらを背負った者自身だ。

覚醒するか、植物状態となるか、永遠に覚醒しないかは、蓮の体に託されている。硝子に出来るだけの処置は行つた。後は蓮の体と氣力を祈るだけ。神には、人を救わぬ神なんぞには、決して祈らない。

アスクレピオスは存在しないのだ。そして人は、アスクレピオスには成れない。そう——五条悟以上の化け物でもなければ、決して。

12.

〈2018年7月7日〉

〈午前〉

蝉の音が五月蠅い。病室の窓は開放されており、靡くカーテンが薄く影を作る。蝉の声の他には、ピツ、ピツ、ピツ、という規則的な電子音のみが、生命維持管理装置しか聞こえない。

病室には、未だ目の覚めない男が横たわっている。栄養剤の点滴と鼻カニューレでどうにか生き延びている、雨宮蓮。それを見守るのは、暗い紺色のパーカーを着る虎杖悠仁である。

なぜここにいいのか、などと聞くのは野暮だと思い、五条悟は病室のドアの少し隣に寄りかかりながら悠仁を待つ。悠仁の気が済むまで。

「……………蓮」

呼びかけても、返事は来ない。

……………蓮が眠ってから、二日が経過した。今はまだ健康体であるが、このまま目覚めないと、日が経つにつれて段々と筋肉や臓器の機能が低下していく。そうなれば、歩く走るなど到底不可能になり、自分で食事を取ることすらままならなくなってしまうだろう。

……………俺のせいだ。

蓮がこうした寝たきりの日々を過ごしているのは、他でもなく——虎杖悠仁のせいだ。己の弱さが、蓮を傷付けている。

拳に力が入る。行き場のない怒りが、噛んだ唇から赤く溢れる。

……そんな事をして、蓮は目覚めないと分かっているのに。

そもそも事の発端は、虎杖悠仁の弱さが今回の任務で明らかになったことにある。両面宿儺に頼らざるを得なかった己自身の不甲斐なさが、今こうして蓮を寝たきりにさせている。

まったく腹が立つ。何が『蓮の背中を守りたい』だ。実力の伴わない願望や夢は理想でしかないのに。

強くなれたと思っていた。己は強いと驕っていた。その結果がこれだ。

「……………」

積み重なった後悔は、確実に悠仁の精神と心を蝕んでいく。

親友を、他でもない自身の手で殺めかけた記憶は、いつまでも脳裏にへばりついていく。肚の奥底で、悪魔が悠仁を嘲笑う。

(珍しいな。あの悠仁がここまで落ち込むか)

その風景を、悟はどうということではなくただ傍観していた。教師の立場である悟が出来る事に、慰めは入っている。だが今の悠仁に声を掛けるのは、得策ではないと判断した。

(……大事な人を喪う事の恐ろしさを憶えているんだ。彼なりに今、現実と向き合っ

いる。

今回はギリどっちも生きてるから良かったけれど……)

本当に喪つてしまった時……蓮が万が一死んでしまった時、悠仁は一体どうなつてしまふのだろうか。

ただでさえ、悟自身も壊れかけたというのに。

……今でも忘れられないのだ。遺体を目の当たりにした時の感情と、硝子に吾郎の死を伝え遺体を運んだ時の……全てに絶望してしまつた硝子の目を。鼓膜を貫く、硝子の慟哭を。

(……………)

悟が『最強』を名乗るのは、たった一人の友人さえ救えない『最強』という、自身の過去の戒めと皮肉だ。

そして、決意でもある。二度と吾郎のように、誰一人として犬死させる事の無いように、能面に笑顔を貼り付けて悟は言うのだ。

大丈夫、僕『最強』だから、と。

「……先生はさ」

「ん？」

悠仁が背を向けたまま、唐突に悟へと問う。

「……人を助けられなかったことって、ある?」

「……あるよ。死ぬほど後悔したこともある。」

——代わりに自分が死ぬばよかった、とか」

息を呑む音が聞こえた。悟の言い分に、悠仁は驚かざるを得なかったのだ。あの最強を持つてしても救えなかった人がいることに。

「でもね」

一度、言葉を途切らせる。

「後悔や妄想を連ねても、返ってくるのは残響だけだった。いくら名前を呼んでも、いくら泣いても、死んだ人は生き返らない。蓮も、今は死んでるのと同じだと思いなよ。あの惨状は、キミ自身の能力不足が招いた結果なんだから」

「……っ」

「——悠仁の気持ちも良く分かる。確かに、遺された方は死ぬほどつらい。苦悩するし、眠れない夜を過ごす……あるいは任務で気を紛らわすか、その人の後を追いかけるか。」

……でもね、死んでいった仲間は、遺してしまった者に託すんだよ。『繋げる』、『打ち勝て』……ってね。

結局さ、何も始まらないんだよ。後悔してるだけじゃあね。」

血に塗れた青春は終わりを告げ、鳥は空高く飛び立って行った。

その内に秘めたる叛逆の魂を託して。

受け継がれる魂を胸に、悟は戦うのだ。

真つ当に生きる事さえも許されなかつた友を思つて……。

「先生」

目元を拭い、悠仁は起つた。

「俺、強くなりたい。蓮にも、宿儺にも負けなくらい。もう誰にも負けたくない。

『最強』を教えてくれ。」

悠仁は悩む。悔やむ。苦しむ。人生を呪われた報われぬ少年は、敗北を噛み締め、友の傷つくを直視し、未だ罪悪感が心を押し潰している。少年院での無力さを悠仁は呪い、憎む。

けれど、それももう終わりだ。

蓮の目覚めがいつになるかは分からない。けれど、決して目覚めない事はないはずだ。蓮はきつと目覚める。そう信じて、悠仁は泣くの止める。

彼の信じる、虎杖悠仁であるために。

—— 起ち上がる虎杖悠仁の眼には、焰が灯っていた。

「……真希先輩は、呪術師としてどんな人を助けたいですか」

「あー?」

高専グラウンドには、一年と二年が全員集合している。黒をベースとするジャージを着る伏黒恵は、紫のジャージに白い短パンとタイツを履いた禪院真希へと問うていた。

「んなモン知るか。私のおかげで誰が助かるーとどーでも良いっつーの」

「聞かなきゃ良かった……」

「ア、ア今なんつったコラ恵イ!」

声を荒げる真希を無視して、恵は目を細める。鍛錬に参加する前の事を思い出していた。

——いいの、謝らないで……息子が死んで悲しむのは、私だけですから……。

岡崎正の母は、涙ながらにそう言った。

ここに来る前に、恵は彼女の家を訪ねていた。ただ一切れの、息子だと判るそれを持って、謝罪していたのだ。その謝罪は、涙によって受け取られた。

私のおかげで誰が助かるうがどうでもいい……と真希は言う。

自己中心的な考え方だが、真希らしいと恵は思う。真希の叶えたい夢は、その言葉の裏に隠されているのだから。

掴みたい物は砂粒のよう。伸ばした手は未だ届かない。それほどの夢を、真希は抱

く。

ならば恵の考えは間違っているのか。悪人よりも善人を助ける事に心血を注ぐ事は過ちなのだろうか。……否である。

呪術師は正義の味方ローではない。救う人間のトリアージを、いざというときにはしなければならぬのだ。この思想が、恵は一層濃い。だからこそ、少年院のあの日、悠仁と蓮と野薔薇守るべき人間を選んだ。

だが、救えなかった人に家族がいた。救いたくないと思っていた者に、その救いたくなかった者を愛し慈しむ者がいた。だからこそ、恵は今迷っているのだ。

真に救うべき人間とは誰か。義姉である津美紀の次に救いたいと思うのは、やはり――

「クオラ恵！ 面接対策みたいなやりとりしてんじやねーよ！ ってかももう無理交代！

可愛いジャージを買いに行かせろおおおおお!!」

――と、ドップラー効果に則りながら聞こえてきたのは、いつもの制服を着る釘崎野薔薇の声だった。

そしてドップラー効果を発生させている張本人……否、張本パンは、パンダ先輩であつた。ジャイアントスイングで野薔薇をブン回すパンダ先輩が手を離し、野薔薇は宙を舞う……とは言い難く、宙に投げ出され地へとずどーんと落ちた。



「ツナツナー！」と言いなから投げ飛ばされる野薔薇を追う狗巻棘。落ちた野薔薇の状態を見て、「いくら」と呟き、パンダ先輩にサムズアップした。

「何してんですか……」

「受け身の練習！」

「こんぶ！」

「お前らは近接弱つちいからなー。まずは私らから一本取ってみる。話はそれからだ」

長物を己の体の一部かのように操り、構える。この動作に、真希は○。五秒すら要さない。

「言つときますけど、負けるつもりは無いですよ」

少し、弱腰の自分に意地を張ってみる。

真夏日の太陽が、恵達を燦々と照らしていた。

そんな中で、恵は……蓮がいればより良い鍛錬が出来ただろうか、柄にも無くそう思い、グラウンドへと降りる真希を追って行った。

#### 14.

所変わって地下。悟と悠仁は、巨大な4Kテレビの前で立っていた。高専の地下室であるそこは修行施設。そうとは知らずに、悠仁は悟の説明に傾聴していた。

「悠仁はね、近接に関しては頭一つ抜けてるけど、問題は呪力の制御だね」

「呪力つてーと、あれでしょ？ 何か超凄いパワー」

「アバウトだねえ〜！ まあ確かにそうだけど。」

てな訳で、あちらの二つの缶をご覧あれ！

そう勧められた方向を悠仁が見ると、台の上にオレンジジュースのアルミ缶が二つ置かれてるのが見えた。一体何をするのでろうかと思いついた所で——バゴンという音とギヤリリリリという音が重なり、アルミ缶は破壊された。

ただし、二つの破壊された時の状況は異なる。バゴンという音を立てた方の缶は、缶の中央部分を凹ませて中身のジュースを溢れさせた。一方のギヤリリリリという音を立てた方の缶は『振れた』。

「違いは分かる？」

「破壊され方が違うね。……言い方合ってるかな」

「そそ。右は、ただ呪力を放出し当てただけ。左は、僕の術式に呪力を流し込み、発動した呪術を使った。呪力を『電気』、術式を『家電製品』と置き換えると分かりやすいかな？」

「呪力電気がないと術式家電は使えないって訳ね。」

——ああ！ つまり今からチョベリグな術式を身につけるんだね!？」

「いや、悠仁は呪術使えないよ」

「へ!？」

ガーン、という音が聞こえてくるかのように、悠仁はあからさまにショックを受けた。「簡単な式神や結界術は別として、術式つてのは生まれながらに体に刻まれてるものなんだ。だから呪術師の実力は、才能が八割くらいを占める」

「はえ……はあ……」

意気消沈して文字通りペラペラに倒れる悠仁。ガツカリという雰囲気が見てとれる。

「あゝあ、霊丸とか卍解とか気功砲とかどどん波とか使いたかつたな……」

(……今は使えないけれど、その内悠仁の体には宿讎の術式が刻まれる。意気消沈してのも今のうちだよ)

パンと手を叩き、気付けさせる悟。しかしながら悠仁ははまだ「あゝ」となっている。「ほら起きな、出来ないことは無視しよう」

さつきも言ったけど、悠仁は肉弾戦はピカイチだからね。そこに呪力が合わされば、悠仁の体術は更に磨きが掛かるよ。下手な呪術より、こういう基礎でゴリ押しされた方が僕は怖いナー？」

「ハッ!! でも先生! 俺それなら出来るぜ!」

「いや起きろよ」

悟に励まされて復帰した悠仁は言う。ここはチョロいと言うべきか。

「少年院の時、結構コツは掴めた気がするんだよね。あん時は、確か……」

「ふーん……打つてみるかい？」

「もちー！」

そう言つて掌を広げる悟に対し、悠仁は自分の世界に没頭している。あの日の感覚を思い出しているのだ。

あの日、特級呪霊と相対した日。あの瞬間、虎杖悠仁は呪力を放出出来ていた。その時の感覚——敵を倒す事に集中して、それ以外には目が向かないようになっていた。

それと同じものを拳に乗せる。敵意か、あるいは——殺意を。

「フンッー！」

「——へえ」

果たしてその右拳は、赤い軌跡を宙へと残して悟の拳へと突き刺さる……と思いきや、悠仁はその拳に違和感を感じた。

拳を当てたという感触というか、実感が無いのだ。よく見ると、拳は掌の前で静止しているのが分かった。

「意外と飲み込みが早いな。それとも段違いの成長速度なのか。呪力操作はまだまだだし、呪力を練り上げるのも遅いけれど、今の時点でこれなら……『化ける』ぞ、この

子)

「いや、危なかった。術式使ってなかったら確実に骨にヒビいつてたよ。やるね、悠仁」

「へへん、まあね！ 『想像力の虎』は伊達じゃないってことよ！」

「ちよつとダサイね」

「言つてて俺も思った。何だよ『想像力の虎』って」

にへへと言い合いながら二人は笑う。

「蓮さ、よく推理小説を読んでんだよ。ルパンとかホームズとか。怪盗なのに探偵ものも読んでてさ。確かホームズの言葉だったかな。『見るんじやなく、良く観察することだ』……つて言つてたの、思い出したんだよね。」

良く観察すると、今まで見えてなかった物が見えてくる——これが、呪力なんだ」

(……なるほどね。蓮の影響もあるのか)

雨宮蓮の存在は、悠仁の性格や思想に少なからず影響を与えているようだ。悠仁の元々の観察眼が鋭いというのもあるのだろうが、蓮の存在が更にその鋭さに磨きを掛けるのだろう。

(ペルソナ使いの存在するのは、ヒトの潜在的な能力も引き出せるのかな。あるいは吾郎と蓮が特別なのか。……おそらく後者だろう。吾郎も蓮も、人を導くカリスマと実力

を持ち合わせている。

……やはり蓮、キミは——)

「ねー先生、修行せんのか？」

「……ああごめんごめん、ぼーつとしてた。

さてと、今見た限りだと、呪力の練り方は分かつてるのかな？」

「何となくね。こう……怒ったり、ぶん殴ってやるって思うと出来る感じがしたんだ。恵も常にブチ切れてる感じだったし」

「はつくちー！」

「何だそのくしやみ可愛いかよ」

「うんうん、当たらずとも遠からずだね。常に切れてるわけじゃないけどね」

呪力とは、負の感情から得られるエネルギー。負の感情を表に出したからこそ、微力ながらも呪力を拳に流し込めたのだ。だがそれでは、呪術師としては半人前だ。

必要な時、必要な分の呪力を練り上げられる者こそ、呪術師としての戦鬪的センスは比例して高い。

だからこそ危惧すべきは、呪力の無駄遣い。悠仁のキャパシティはどれほどかは、六

眼で確認できる。

「じゃあ今悠仁がやるべきは、呪力の生成をよりスムーズにする事と、呪力の無駄遣いをしないことだね。テレビっ子の君に打って付けかつ、とてもハードな修行をしようか」「へへ、何でも来てよ先生！ この調子だと、すぐクリアしちゃうかんね！」

——その数分後、悠仁は（主に顔面に）地獄を見るのである。

〈午前〉↓〈昼〉

高専グラウンドにて、四人が休息をとっている。所々に滲む汗を拭うが、拭ったそばから溢れてくる。しかも棘はこの真夏日だというのにネックウォーマーを着用しているの、他の皆よりも暑さが身に染みているはずだ。

ちなみに現在野薔薇はジャージを買うついでに道草を食いまくっていた。

「長物、結構さまになってたな」

「ありがとうございます」

一足先に木陰に入っていたパンダ先輩から労われる恵。そういえば蓮は今いないんだっけ、と思いつながら、緩くなつてしまったミネラルウォーターを飲み込む。階段で腰を下ろし、口を開く。

「……確かに、得物を持つつてのは賛成ですけど、俺の術式を活かすためには、両手は

パツと広げられるようにしておきたいんですね。

真希先輩は呪具2個以上持つのもザラですよ。その時はどうしてるんですか？」

「パンダに持たせてる」

「聞かなきゃ良かった part 2……」

バックバイセツプスをして  
上腕二頭筋を膨らませて筋肉アピールをしたいのだろうが、いかんせんパンダ先輩には筋肉が存在しないので力強さがいまいち伝わらなかつた。

「呪具を保管できる呪霊を飼ってる奴もいるよな」

「ツナ」

「それレアモンじゃねえか。飼い慣らすのに時間もかかるし、現実的じゃねえ。何より私が欲しいっつーの」

見つけたら真っ先に私に教えるよ、と真希。

じゃあカルパス一年分ね、とパンダ先輩。

二人が仲良く談話する中で、恵はあの日の事を思い出していた。

——お前あの時、何故逃げた？

未だに木霊するあの日の残響。己の心にしがみついて離れないあの声に、恵は思うのだ。

(……あの言い草だと、俺が特級相手に勝てるって言ってるのと同じだ。そういう意味



だったのか?)

心の影に潜むあの声を頼りに、恵は今一度自身の術式を見直してみる。

(俺の《十種影法術》は、影を媒体に式神を召喚する術式……今までは式神を調伏する事だけに意識を向けていた。そうじゃなく——)

——どこまでも深い、淵のない闇……そう、全てを飲み込んでしまえるような、孤独な影……。

深く、深く。

より、黒い色に消える。

どこまでも底の無い、まるで沼のような影。

そこから式神を出し入れ出来るのならば、もしもそれ以外も仕舞えるのなら——

「ツナマヨ」

「あん?」

自然と口が笑顔に綻ぶ。《十種影法術》が『影』を主体とする術式ならば、そこから連想するのだ。利用できる物は何でも利用せよ。手指から伝わる影の冷たさを、恵は心底喜んだ。

「先輩、何とかかなりそうです……!」

「いふあい……」

「あはは、ウケる」

「ご存知、呪骸《ツカモト》。蓮が行なっていた修行を、悠仁もまた受けているのだ。

4Kのテレビとブルーレイディスクレコーダーの前にて、悠仁は赤くなつた頬を摩りながらも、ツカモトを潰さん勢いで握りながら映画を見ている。

「あー何だっけそれ、主人公がもう死んじやつてて最後成仏するつてオチの映画？」

「いやさらつとネタバレしないぐぶえっ!!」

——と、悟が茶々を入れて新たな殴打痕を生成させる。悠仁の顔は真っ赤っかだ。

「んもー!!」と吠えながらツカモトを床に投げ飛ばすが、跳ね返りの衝撃を利用した見事なアツパーカットを喰らつてしまうのだった。

「こんなんを蓮はやつてたの!?!」

「やつてたよ、十日ほどで完璧にマスターしたけど。ほらほら、怒つても呪力は一定!」

ばんばんと拍手して悠仁を気付ける。座禅や懸垂、木人拳も十日でマスター出来る蓮の器用さを甘く見てはいけない。そう言えば、と思ひ立ち、悟はそのまま口を開く。

「悠仁、死んでる時に宿儺と何か話さなかつた？」

「えっ、何で？」

「蘇生するにあたって、何か条件や契約やらを言われなかったかい？」

「条件……あー、なんか言われた気するけど……思い出せねえんだよな」

「……そうか」

懸念を残しながら、地上へと通じる階段を登りつつ、

「ちよつと出掛けてくるね。修行は続けることー！」

と絞り出すように陽気に言うのと、

「うん、分かっぶおあつ!!」

余所見し油断した所をツカモトにブン殴られた。

直後、階段の下から悠仁の怒号が鳴り響いたのは言うまでもない。

16.

〈昼〉↓〈夕方〉↓〈放課後〉↓〈夜〉

夜の高速道路を、一台の黒塗のベンツが走っている。左を見ればコンクリート、右を見れば森。そんな夜道を、伊地知潔高は、五条悟を乗せてキリキリと運転している。

……若干胃を痛めながら。

「学長との会談までまだ少し時間がありますが、どうしますか？」

「……たまには先に着いてあげよう」

(珍しっ。この人ってこんな事思えるんだなあ。……普段から思ってたかれないかなあ!!)

そんな失礼なことを思いながら、更に胃が痛んでいくのを感じる潔高。エンジン音をBGMにした野郎二人きりのドライブを、悟は無感情で倦怠そうに流す。

やや半月から欠け始めた月を見て、月が綺麗ですねと言っておちよくってやろうか——と思った時だった。

「止めて」

「えっ、ここですか?」

「良いから」

急ブレーキの衝撃に、しかし悟はびくともしない。珍しく自分でドアを開けて外に出、潔高に言う。

「少し遅れる。先に行つてて」

「はっ? えっ……これ何か試されてるってわけじゃないですよ? 本当に先に行つたらビンタとかないですよね!」

「……僕のこと何だと思ってるの?」

「はっ、はひィッ!」

逃げ出すように車を飛ばす潔高を、その車ごと見えなくなるまで見送る。

車を降りたのは、悟の嗅覚が異変を感知したためだ。車に爆発物が仕掛けられているのではなく（そもそも潔高にそんな真似が出来るとは到底思えないが）、何かを感じたのだ。

嫌な気配だ。それも、生半可な気配ではない。だがこの気配には慣れていない。この界限にいれば、誰しもが通る道だ。当てられて失神する者と耐える者、何とも思わない者に別れるそれ。悟にとって一番後者に該当するそれ。

——そう、其れ即ち殺気である。

「キエエエエアアアツツ!!」

上空から奇襲してくるソレ。気配に気付いていた悟は難なくそれを回避するが、ソレが着地した後の道路は、巨大なクレーターが残っていた。破壊力においては超一流というわけだ。

一ツ眼小僧の火山頭。斑模様のポンチヨを着る漏瑚の口は、ちょうど——今宵のえんげつ偃月の如く湾曲していた。

「キミイ……何者?」

「シャアツ!」

悟の問いに、漏瑚は悟の真横から現れる爆発寸前の活火山で答えた。

——轟音、のちに爆発。次々と溢れ出るマグマの濁流は、完全に悟を覆ってしまった。マグマの温度は外に出た時点で最低でも八〇〇度を超える。人間の肉体では到底耐えられないはずもない。

「……ハア、存外に大した事は無かったな」

「誰が」

溜息を吐き、五条悟を始末し任務を終えその場から去ろうとする漏瑚を、五条悟自身が答えた。

「大した事無いって？」

悟の半径一メートルに付着したマグマが、自ら剥がれ落ちるかのようになり、下方の森へと流れて行く。だが当の本人は全くの無疵であり、余裕綽々と言った具合だった。

お互い、七メートル程度距離が空いている。だが二者は、この距離を詰めるのに〇・一秒も掛からない。

「フンツ、小童が」

「(……呪霊のくせに意思疎通がしっかり出来る。加えてこの呪力量……未登録の特級レベルか。おそろく、今の宿儺と蓮よりも強いね)」

あのさア、特級つて『特別な存在』だから特級なの。こうもポンポン出て来られると、調子狂っちゃうよ」

ニタリ、と漏瑚のたった一つの巨大な眼球が、上弦の月の如く湾曲する。

「矜持が傷ついたか、人間？」

「いいや、楽しくなってきた」

ニヒルな笑みを浮かべ、悟は返す。

今宵の文月は長くなりそうだ。わざわざこちらに舞い込んできてくれたのだから。

——さて、どこまで楽しませてくれるかな？

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen  
Let us start the game.  
#12 Rain, After Raining Away

## # 13

17.

ありのまま今起こった事を話したい。

虎杖悠仁は、五条悟にパーカーの襟を掴まれながらそう思った。

「呪術戦の極地、領域展開について教えてあげる」

そう言われた一瞬後、悠仁は高専で映画を観ていたと思っただけ、いつの間にか湖の上、にいた。

何を言っているのか分からないと思うが、悠仁にも何をされたのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなモノでは断じてない。もつと恐ろしいモノの片鱗を味わったのだ……。

「ほわーっっ!! ここのどこのお!!?」

「良いいリアクションをありがとうっつと」

事の発端は、悟が特級呪霊の漏瑚に襲われたことにある。襲撃者の漏瑚の実力を測った悟は、漏瑚をボコボコにした後、10秒と経たずに悠仁を戦場である湖畔に連れてきたのだ。



ちなみにどれくらいボコボコにしたかと言うと、漏瑚はもう心が折れてもおかしくない程度に圧倒的にタコ殴りにした。悟にはかすり傷一つすら付いていないのに対し、漏瑚は全身打撲、満身創痍。実力差はこれ以上無いほどに歴然だった。

だが漏瑚は先の戦闘を忘れたかのように、驚愕にその単眼を見開いていた。

「(宿讎の器!! 夏油の言う通り、やはり生きていたのか……)」

……何だそのガキは。盾か？」

「盾? いやいや、見学だよ。見学の、虎杖悠仁くんです☆」

「富士山じゃん!! 五条先生、あいつ頭が富士山だよ!!」

きゃんきゃんと喚く悠仁をゆっくり下ろしてやると、悠仁は自身が湖の上に立っている事に驚愕している。右足を上げてみるとほんのりと水が跳ね、下ろすと波紋を生んだため、本当に水上を直立しているのが分かる。

「何で水の上に立ててるんだ!! っつか先生、俺らさつきまで高専にいたよね!! ドク

コト!!」

「んー、飛んだの」

(あつ、説明する気無いな……)

悠仁はそう悟った。

「今この子に色々教えてる最中でき。ま、キミは気にせず戦ってよ」



気を圧倒するには充分だった。

(弱い……? 弱いつて、冗談でしょ先生……?)

コイツが弱いつて……今まで会った化物が可愛く思えるくらいなの、それほど格上の化物だぞ!!)

「——大丈夫、僕から離れないでね」

悠仁の不安を取り払うかのように、悟はそう囁く。

完全にブチ切れた漏瑚は、その怒りを呪力に変えて掌印を結ぶ。

「領域展開!!」

両の人差し指と中指を組み、薬指は頂点を合わせ、小指は大きく離す。口元に持つてきた手は——まるで轟々と燃え盛る曼珠沙華。

——そうして、世界は漏瑚によって塗り替えられる。

煮え滾る憤怒は地を抜き、  
溢れ出づる憎悪は世を蓋う。

「何——っだこれ!？」

そこを一言で表すのならば、『地獄』が一番よく似合う。

まるで活火山の中。周囲は溶岩と岩石で覆われ、一步動くことも許さず敵を蒸発させる。泡沫に弾けたマグマが悠仁の側を掠め、爆熱が悠仁のパーカーを襲い、少し焦がした。

——だが、漏瑚の必中必殺の奥義《領域展開：蓋棺鉄囲山》は、侵入者を焼失させる事は能わなかった。

(並の術師ならば、引き摺り込んだ時点で焼き切れるのだがな……)

「これが《領域展開》。自身の生得領域を、術式を付与して呪力で構築する奥義だよ。

少年院で君達が経験したのは、術式の付与されていない未完成の領域だ。ちゃんとした領域だったら、一年全員死んでたよ。

さて、領域を展開することで得られるメリットは主に二つ。一つは、環境要因による自身のステータス向上。心の中、つまり自分の得意に強制的に持つてくる訳だしね。ゲームの『バフ』みたいなモンだと思つてくれて構わないよ。

そして二つ目。領域内で発動した術式は——

——そう言いながら、真正面から飛来する巨岩を、悟は素手で難なく粉碎し塵とさせた。

「チツ」

『絶対に』当たるんだ」

「絶対なの!？」

「ずうえくつたい!」

でも安心して、対処法もいくつかあるよ。まず、さっき僕がやったみたいに『呪術で受ける』。

そして、まあこれは得策ではないけれど、『領域の外へ出る』。大抵ムリ。領域内は空間の作用が現実とは異なっているからね。壊そうと思つて壊せるモンじゃないんだよ、内側からはね。

後は——」

「貴様の術式、『無限』……それも、より濃い領域で中和してしまえば届くのだろうか？」

「うん、届くよ」

「ん？ 無限……？」

訝しむ悠仁を無視して、悟は楽観的に続ける。既に触れている漏瑚の逆鱗の上で、更にタップダンスを披露するかのような物言い。それが更に、漏瑚の怒りを呼んだ。

新たな人間としての矜持が、眼前の男を殺せと叫ぶ。

それを悟は、鼻で嘲笑う。

「さて、領域に対する最も有効な手段……それは、『自分も領域を展開することだ。同時に領域が展開された時、より洗練された方がその場を制する。まあ、相性とか呪力量にもよるけどね」

そう言いながら、悟は自身の視界を覆う黒い目隠しを外して行く。左手によつて徐々に降ろされるアイバンドは、彼の美貌を明らかにしていく。

「灰すら遣さんぞ、五条悟ウウウウウ!!」

だが、それを看過出来るほど、漏瑚は人間に優しくない。強く意気込み、その意気を手助けしてやるかのように、地獄が悟らへと襲い来る——!!

「——領域展開」

だが、その地獄さえも悟には届かない。

余った右手の中指を人差し指に絡め、掌印が完成する。病魔呪怨を祓うべく、今『最強』の真髓が解き放たれる――。

進化も無く、頽廃も無い、物質の存在を赦さぬ理想郷。

——この世界は、無限の『』で出来ている。

『無』『有』『永』『瞬』『空』『絶』『全』『一』『生』『死』。

種、生命、世界、宇宙……それら全てが帰依する根源。

そこには何もかもがあり、何もかもが無い。

ただ、永遠に、永劫に。

見渡す限りの空白が広がっている。

(……………何だ……………？ 僕の領域が押し負けたのか……………？ これが奴の領域……………？)

……………分かん。何も見えん……………何も感じん……………いや、何もかもが見える、全て感じる！ いつまでも情報が完結しない!!

故に……………何も……………出来ん……………)

だが、流石は特級呪霊と言ったところか。あるいは、悟が手加減しているのか。術師でもない者や低級の呪いであれば廃人と化すこの《無量空処》むりょうくうじょにおいて、漏瑚はまだ意識を保っていた。

がし、という感覚が無限に連なる。頭を掴まれたのか、それとも既に自分は殺されてしまったのか。それすらも分からない。——その感覚に対して、漏瑚は何も行動を起させない。

「( )は無下限の内側。『知覚』『伝達』……………生きるという行為に、無限回の作業を強制させる。君は見えているんじゃない。見えているように感じているだけさ。」

その証拠に……………ほら、僕に後ろを取られてるのに、君は何も出来ていない」



左脇に悠仁を抱えながら悟は言う。《無量空処》は、自身の手で触れる者に対しては無効化出来る。故に悠仁は廃人にならずに済んでいた。

「皮肉だね。何もかもを与えられた者は、何も出来ず緩やかに死んでいく……でも君には聞きたいこともあるから、これくらいで勘弁してあげるよ」

頭を握る力が強くなる。ぶちぶちぶちぶちという筋繊維が無理やり引きちぎられる音と共に、両者の領域は消滅した。

勝者など、語るまでもない。

さて、悠仁と頭だけとなった敗北者を連れ、悟は陸地へと上がる。木は冷たい闇を更に深くし、風の無い森は霧を生む。漏瑚を踏んづけている悟を見て、冷や汗を流しながら悠仁は直感する。

（これが、呪術師『最強』……生き物としての格が違う!!

……やっぱ凄えな、蓮は。こんな人を超えようとしてるんだ。——その背中に、俺も追いつきてえ……!!）

「さくて、誰に言われてここに来たのかナ？」

「誰が……言うかッ！」

頭だけとなった漏瑚だが、しかし意思疎通は出来るようだった。メカニズムが意味不明だが、人間の負の感情から生まれた存在である以上、生命としての限界が人間とは大

大きく異なるのだろう。

「良いのかな、そんなこと言っちゃってエー。」

ホラ言えよ、どうせキミは死ぬんだしき。キミのバックにいる奴も全員被<sup>被</sup>うし、ここで頑張っても結局無駄だと思うよ?」

「つてか、呪霊つて会話出来んだね。自然すぎてスルーしてたけど」

「あーまあ、コイツはレア——ん?」

悠仁と駄弁る悟だったが、霧の立ち込める森の中で、その第六感が——というより六眼が、悟に違和感を抱かせた。

悟の六眼は、微細な呪力の流れを読み取る事の出来る眼球だ。この六眼あつてこそ、原子レベルの緻密な呪力操作を要する《無下限呪術》を扱える。また対象の呪力の流れを読む事で、相手の術式の看破も可能だ。

だからこそ疑念が湧く。

「——この霧、呪力が混じつてる……?」

そしてこの霧は、漏瑚の術式によるものではない。

それが分かった瞬間——悠仁を襲う疾風<sup>はやて</sup>に、悟は一瞬だけ身を硬直した。

「おわあ——!?!」

(新しい気配が二体……いや、悠仁の救助が最優先か)

吹き荒れる大風に身を奪われ、呆気なく空中を舞う悠仁。一気に悟と距離を離され、あつという間に先の湖畔の上空三百メートルへと到達する。この高さから落ちれば、流石の悠仁も無事では済まない。

クリフジャンプという競技がある。崖から海へと飛び降り、技の美しさを競うというものだ。その最大高度は二十八メートルであり、その道のプロでさえも怪我をする程度の、関節の脱臼で済めば良いレベルだ。最悪の場合死亡するケースもあり得る。

であれば、凡そ三百メートルの高さから素人が水面に打ち付けられた者がどうなるか……想像に難くないだろう。

「ちよおおおおおおおお!!? せんせー!! たーしーけーてー!!」

「はいよ〜」

「お、う、っ!!」

救援信号を出した直後にやってきた悟による巨大なGの圧力に顔を青くした悠仁は、何とか嘔吐しようとするのを堪えるも、敢えなく虹色のGが口から溢れてしまう。およそ増殖するGもびつくりだ。

「おろろろろろ……」

「きいっつたね〜!」

空中を闊歩し、笑いながら元の場所へと戻っていく悟と、空から虹色の大汚雨を撒き

散らす悠仁。側から見ると中々にカオスな絵面である。

先の場所に到着したものの、漏瑚も加勢に来た二体も、姿はどこにも見えなかった。それが分かった瞬間、悠仁は土下座の体勢を取った。

「どーもすみませんでした私のせいで逃げられてしまいましたでもここに連れてきたのは先生ですよね？ ゆうじ」

「逃げられちゃった。一体が霧で気を取り、吹き飛ばした悠仁を僕が救助に行くことを計って奪取。逃げはもう一体に任せたか。」

にしても、気配を消す隠れるのが上手いねえ。火山頭よりもよっぽど不気味だ……)

このレベルの呪霊が徒党を組んでいるのか。ますます楽しくなってきたね。

悠仁……っていうか皆には、アレを倒せるくらいのレベルになって欲しいんだよね」

「アレにかあ……」

「目標は高い方が良いでしょう？ いや、連れてきて良かった〜！

ま、それはそれとして。設定を組んだ以上、あとは目標のアレを倒せるように、映画観て僕と組手して、を繰り返そうか！ 予定も繰り返しよう。一月後には、最低限キミを戦えるようにしてあげる」

「先生と組手かあ……一ヶ月後、俺生きてるかなあ」

起き上がり立ちながら、悠仁は手をこまねいた。

「それでなんだけど……修行してる最中に蓮が起きたとして、悠仁はどうしたい？ 僕も蓮と稽古の予定を組んでるから、一緒にやってくれたら助かるんだケド」

「それはむしろ大歓迎。早く強くなるに越した事ねえし。……でも、何で蓮の事聞いてきたの？」

「だって交流会でド派手にサブライズしたいじゃん？ 『自分はこの間に強くなつたんだぜ！』って具合で——」

「蓮の驚く顔が見たいだけでしょ？」

「当ったりイ〜！」

満面の笑みでサムズアップする悟。蓮をして『殴りたい、この笑顔』と言わせた男は伊達ではないということか。

「ところで先生！」

「はい、何でしょう悠仁くん！」

「……交流会って何？」

「……アレ、言っただけじゃなかったっけ？」

18.

「……なあ、ラヴェンツァ」

「ふんっ」

ふいっとそっぽを向く彼女は、見るからに怒っている。

ここはベルベットルーム。精神と時の狭間。現実の雨宮蓮を縛る牢獄の首領、ラヴェンツァは激怒していた。哀れで愚かな囚人を叱らねばと決意した。

だが蓮にも帰らねばならぬ現実がある。戦わねばならぬ理由がある。守らねばならぬ親友がいる。そして——親友を守れなかったがための、贖わねばならぬ罪がある。

それらを置いて眠るなど、到底蓮には出来ない。蓮も我慢の限界だった。

目を覚ましたのはおよそ五分ほど前だが、ここではその数分が一時間だったり、一時間が数分だったりする曖昧な場所。長居すべきではない牢獄なのだ。こうしている間に、刻一刻と時は過ぎていく。

「……なぜ怒ってるんだ？」

「なぜ？ それすらも分からないと？」

「いや……うん、ごめん、本当は分かって——」

「ええ、ええ。トリックスターの事をこの世界で一番良く分かっているのは、私だけですよ。貴方が分からない事も手取り足取り教えてあげられましょうとも。貴方がここまであんぼんたんだとは思ってもみませんでしたっ」

……選択肢を間違ったようだ。

「……………私は、貴方が傷付くのを見たくない」

ラヴェンツアはそう言うのと、囚人服の蓮からはまだ目を逸らしながらもこちらを向く。彼女の声が震えているのが分かる。

「貴方は前世で、充分に抗い、戦った。傷付いた分を幸せにならなければ、報われない。まだあなたは、傷ついた分の精算が出来ていません。」

何のために戦ったのか……死んでしまつては、その思いすらも無為になる。だから私は……力を司る者としての権威を放棄する代わりに、貴方に幸せになつて欲しい、第二の人生で今度こそ生き長らえて欲しいと、主人あるじに願つた。

貴方にこうして務めを果たしているのは、主人が私に課した制約……『自己責任』のため。もし貴方がペルソナ術式に目覚めた時、そのサポートをするのは私一人だけだと。例えどのような結末になつても、貴方の最期を見届けなければならぬ。その結末の回避のために、口を出してはならない。そしてその結末に、文句は言わないと」

「——それは、は」

「何という事をしたのか、ですか？」

それもある。だが、蓮にとつては『どうやって出来たのか』という疑問が大きい。

呪術における『縛り』を持つてすれば、人智を超えた存在であるイゴールとラヴェンツアならば可能だろう。ラヴェンツアはこう見えて、蓮ですら敵わないペルソナ使いな

のだ。

戦った事は無いが、蓮には解る。常套の手段——真つ向勝負ではまず齒が立たない。仲間と道具、ジョーカーの《ワイルド》の素養と、状態異常に有効な属性の攻撃をすることで与えられる《TECHNICAL》ダメージ、そしてペルソナの持つ《特性》という要素を持つてしてようやく勝てる相手だ。

……たつた一人でラヴェンツァを完封出来るジョーカーも世界を探せばいるだろうが、このジョーカーはそのようなゴリゴリの変態ではなかった。

閑話休題、そのような超常の存在の更に上位の主人イゴールとならば、力を犠牲にする『縛り』を組むことで人一人の転生は可能なのだろう。蓮がこうして第二の人生を送れているのがその証左なので、そうとしか言いようがない。

だからこそ疑問なのだ。その『縛り』を、『いつ』、『どうやって』組んだのか。

いつ、は大体察せる。雨宮蓮が???として最期を迎えた直後だろう。？の魂が完全に消えてしまう前に、呪術世界に移行させたのだ。

唐突だが、雨宮蓮の両親は直毛だ。両親のそのまた両親、つまり蓮の祖父母にあたる人達も直毛だ。その祖父母曰く、曾祖父母達も直毛だったらしい。

対して蓮は癖毛。蓮の家系図の人間に、癖毛の者はいない。であれば遺伝的に、蓮は直毛でなければおかしいのだが、DNA鑑定でも、蓮は正式に二人の血を受け継いでい



る。正真正銘、蓮は雨宮家の末裔だ。

この事から察するに、雨宮蓮の体が、???という人間の魂と意識に侵食された事により、直毛になるはずだった蓮の髪は癖毛となったのだ。

そして雨宮蓮の体は、徐々に???に侵され始める。

癖毛の次に、雨宮蓮の体には術式が刻み込まれた。齡四歳の頃である。当時幼稚園児だった雨宮蓮は、ある日突然呪霊を視認出来るようになった。

だが、当時の雨宮蓮の精神年齢は成人男性のそれと同等。むしろ怖いもの知らずの《ライオンハート》の持ち主だ。呪霊に一切の恐怖さえも抱かなかつた。そしてこれが、術式の発現???が雨宮蓮の体に与えた二つ目の影響だった。

——そこで蓮は、最悪の事態を想定してしまった。

——雨宮蓮は生まれた時、死んでいた。魂は抜け、ただの殻となってしまっていた。

——その死体に、???の魂が乗り移ったとしたら？

「……けれど、本当はオレじゃなく、雨宮蓮が生きるはずだった。オレの魂が入り込む余地も無かつた」

「貴方が気に病む必要はありません。本来の魂は、貴方という存在が乗り移る前に既に消滅していました。仮に貴方を転生させず、そして本来の雨宮蓮が真つ当に生きていたら、《雨宮蓮》は呪術師として活動する事もなかつたでしょう。」

でも、そうはならなかった。生後間もなく“雨宮蓮”は死に、貴方は“雨宮蓮”に成り変わった……いえ、私が成り変わらせた。——貴方を、生かすために”

どうやって、の部分も想像はつく。それは、別のペルソナ使いの可能性だ。

蓮が???だった時(蓮は忘れていたが)、過去のペルソナ使い達と蓮は出会っている。中には平行世界のペルソナ使いもいた。

ペルソナ使いが呪術世界に存在し、ラヴェンツアと契約を交わしたならば、蓮とは別の《ワイルド》がいたならば、元からペルソナ世界と呪術世界の間縁があつたということ。であれば、呪術世界の法則を知っているラヴェンツアが『縛り』を組めるのにも説明がつく。

力の放棄を条件に、イゴールに願つた。そして、イゴールは???に第二の人生を与えた。よりにもよつてこの呪術世界で。

であれば考えられるのは、おそらく過去に、蓮とは別のペルソナ使いが存在し、そしてその人物は、?と関わりの深いイゴールかラヴェンツアと契約を結び、《ワイルド》の素養を得た。——蓮はそう結論付けた。

だが——否、故に蓮は一つ見落としている。

雨宮蓮は、明智吾郎の存在をまだ知らない。

そして、なぜ明智吾郎が呪術世界に転生したのかも、まだ知らない。

だがラヴェンツァは、明智吾郎が呪術世界に居た事を知っている。現にラヴェンツァは、正式に《ワイルド》の素養を与える契約を吾郎と結んだ。

そしてラヴェンツァは、なぜ明智吾郎が呪術世界に転生したのかも知っている。

だがそれをラヴェンツァは話す事はない。ラヴェンツァが主人であるイゴールから許されているのは、精々ペルソナの強化などでの支援のみ。蓮の旅に口を出す権利を持つていない。

支援者でありながら、傍観者でもあるというジレンマを、ラヴェンツァではどうする事も出来ない。

だから、何も言えない。言つてやれない。

「——っ」

蓮は絶句した。一人の赤子の死体の上で、自分はのうのうと生きていると知ってしまった。お前の代わりにこんなにも良い人生を送っているのだと、そう見せつけているのだ。夢の中だというのに、胃の中の物が込み上げてくる。

「それほどのを私にさせたのは、貴方のせいですよ、マイ・トリックスター。享受すべき幸せの精算もせずに逝つてしまった貴方を想もううのは、当然のこと。

私は私のした事に後悔はありません。貴方がこの件で私を軽蔑したとしても、それでも構わない」

「……人一人の命と尊厳を踏み躪つてもか」  
「ええ」

ラヴェンツァは優しい。雨宮蓮の前世を知る唯一の人物だ。蓮の最期が、蓮自身満足  
のいくカタチではなかったことも、良く知っているのだ。

だが、呪いでしか蓮に奉仕出来ないほどに不器用だ。蓮にとって転生は、そして人生  
は、呪いある物になってしまった。

亡くなった本当の雨宮蓮の分を生きねばならない。そしてその人生で幸せになって  
はいけないと思う罪悪感と、前世で満足に生きることの出来なかった分幸せになりたい  
と願う本心との間からジレンマが生じた。

けれど、それでも???に生きて欲しいと、歪んだ愛を捧ぐため、ラヴェンツァは願うの  
だ。

「沢山傷付いて、それなのに報われないなんて……そんなの、ふざけている。

己の居場所を得んとすれば、己に固執してはならない。ときに他者のために己を投げ  
出す事で立つ瀬もある。そう信じ、貴方は進む。

必死で跳き、地獄の鎖に繋がれても抗い、定められた運命に足掻き、望むべき未来を  
悪神より奪い去る。愚者のアルカナに定められた旅人……それが貴方というトリック  
スター。

……でも、貴方の役目は、もう終わったの。怪盗としてのかつてのトリックスターは死に、今、『雨宮蓮としての貴方』がある。貴方が切り札ジョーカーである義務なんて、もうどこにも無いんです」

「ラヴェンツァ……」

「私のした事は、人として決して許されることではありません。でも、それでも良い。貴方が望む事を手助け出来るのであれば、この身この命など、いくらでも差し出しましょう。」

そして、貴方の同志達もまた、私と同じように、貴方のめいっばいの幸せを望んでいます。——だって、貴方が皆を導き支え、愛したように、彼らもまた、貴方の事を愛しているのですから」

「……………」

……見返りを求めていなかった、と言えば嘘になる。

元々は利害関係、取引し合うだけの間柄だった。だが彼らの為人ひととなりや過去、そして悲痛な現実を知って、どうしても見過みすごごせなかったのだ。人と関わる度に、過去の己と重ねてしまった。

だからこそ、『心の怪盗団』として、目の前の人を助けようと躍起になった。そうするうちに、???は取引し合う関係を昇華させ、『血盟の絆』を手にした。

その『血盟の絆』が、？に力を与え、そして貸してくれた。その絆は絶えることなく、今もなお蓮と繋がっている。

「もう立ち止まっても良いんです。ここには貴方を責める人も、嘲る人もいない。貴方はここにいて良いんです。」

……もう、逃げちゃいましょう？」

……だからこそ、？には分かる。ラヴェンツアの声は、???と絆を結んだ人達の声だ。同志達は、雨宮蓮となつた彼の安寧を求める。？を襲つた不幸を呪い、？に降り掛かつた運命を——悪神を憎むのだ……。

19.

〈2018年7月8日〉

油蟬が鳴いている。ただでさえ鬱陶しいくらいに暑苦しいのに、その上『五月蠅い』が加わるのだから、起きるやる気も起きなくなる。

ジャージ姿の禪院真希、狗巻棘、パンダ先輩は、寮から高専への道を辿りながら雑談していた。そんな中、パンダは一つ疑問を抱く。

「あり、一年ズどこ行つた？」

「飲み物買いに行かせてる」

「パシリ……」

「高菜……」

「大丈夫なのか？」

「何がだ？」

「姉妹校の学長との打ち合わせ、確か今日だっただろ？」

思うところがあり、真希は眉をひくつかせた。

「特級案件なのに一年を派遣する異常事態……悟と仲悪い上層部が仕組んだって話じゃん。京都の学長もモロその上層部だし、鉢合わせでもしたらさア、厄介な事になる事間違いないじゃん？」

「くんぶ？」

「でもターゲットだった虎杖悠仁は死んでる。恵達を今更どうこうするつもりも道理も無いだろ」

『教員』はな

含みのある言い方に、真希は怪訝な顔を浮かべる。

「……『真依』が来てるっての？」

「憶測、可能性の域を出ないけど。でも——アイツら、嫌がらせ大好きじゃん」

そんな不穏な空気も知らず、気分転換のために寄った高専校門付近の自動販売機に、

釘崎野薔薇のお眼鏡に適う種類のドリンクは無かった。

「蓮の淹れたコーヒー飲んでから、自販機のコーヒーに満足出来なくなっちゃったのよね。いつそ蓮のコーヒー商品化しないかしら」

「同感」

「マジで何飲もつかない。種類少な過ぎない？」

「こういう学校だしな。入れる業者も少なえし」

そう雑談していると——二人分の足音を恵の鼓膜は感じ取った。

見ると、入り口付近で二人の男女が立っている。一人は巨漢、もう一人は美人の二人だった。恵は巨漢の男を見た事は無いが、もう片方の女は知っていた。

ショートボブの美麗なる彼女は、ノースリーブのワンピース型の制服を身に纏っている。スカートから覗く透き通るような、まるでパリコレのモデルのように長い脚部に在する黒いガーターが、彼女の雰囲気より艶かしく映す。

豊満な双子山から流れる河の如きくびれは、彼女の女性としての美意識に拍車をかける。まさに、男性が理想とする女性の体型だった。

長く、それでいて整えられた睫毛を持つ吊り目は、どことなく恵の先輩である禪院真希を彷彿とさせる。潤った桜色の唇は悦に上がっている。その真意は、意中の相手に会えたためか。



まるで……シヨートヘアにした禪院真希のような人だった。

「ぜん……真依先輩」

「あら、名前で呼んでくれるなんて嬉しい」

「ぜんまい先輩？」

「禪院真依！ 失礼ね！」

彼女を知らぬ野薔薇をプリプリと怒る真依。一つ咳払いをして、恵は真依に問う。

「で、何しに来たんです？」

「姉妹校交流会の打ち合わせに着いて来たのよ。伏黒くんが心配だね」

「俺が？」

「ええ。聞いたわ、同級生が一人死んだって。辛かった？ それとも……そうでも無

かった？」

「……何が言いたいんです？」

「いいのよ、言いつらいこともあるでしょうし、私から言っただけあげる。」

宿儺の『器』なんて聴こえは良いけれど、要は半分呪いの化け物でしょう？ そんな

奴呪いが隣で不躰に呪術師を名乗るなんて……耐えられなかったでしょう？

「死んでせいせい——」

「禪院先輩」

意気を強くして、恵は真依の苗字を呼ぶ。

「……もう、苗字で呼ばないでつて——」

「口、閉じてくれませんか」

珍しくもなく、恵は苛立っている。そのことに気付いた真依は、動揺にその口を止めていた。ピリ、と肌がざわめいているのが分かる。

伏黒恵にとつて、今現在の地雷は虎杖悠仁と雨宮蓮に関する事柄。そうとも知らず真依は、平然とその地雷を踏み抜いた。呪術師としては当然の発言を、恵は否定したのだ。

「何も知らねえアンタが、アイツを知った風に言つてんじゃねえよ」

恵の鋭眼と放つ意気が、真依を貫かんと言わんばかりに、そう語つていた。

真依はたじろいだ。意中の相手の機嫌を損ねた事もあるが、たかが一人の人間……しかも呪いと同等の存在に固執する恵を、今まで一度も見ることが無かつたためでもあつた。

「まあ術式使わないあたり、まだ冷静よね〜恵は」

「はあ？ 何言つてんの？」

「あ、意味分かんない？」

——今ここで殺されなくてラッキーだったわねつつつてンのよ、阿婆擦れ。」

釘崎野薔薇にとつても、虎杖悠仁と雨宮蓮は地雷だ。

生憎、釘と鎚は手持ちに無く術式は使えない。だが、この女は赦さないと魂に刻んだ。取り敢えず身ぐるみ剥がす——と意気込んだ所で、隣の巨漢が前に出る。

——デカイ。身長は五条悟とほぼ同じか。猫背だったため明瞭な身長は分からなかったが、筋肉量から見ても只者では無いと二人は悟った。一言で言い著すのであれば、それらはもはやゴリラと言つても過言ではない程の隆々さであった。

額から左眼を通じ頬にかけて傷を負っており、髪を後ろで纏めている。頭部はさながらパイナップルのように思えたが、恵は口に出すのを止しておいた。

「無駄な話はそこまでだ、真依。キャットファイトは他所でやってろ。

俺はただ、コイツらが乙骨憂太の代わり足り得るのが知りたい。

伏黒……とか言つたな、そのの」

ずんずんと二人に歩みを進める姿は、さながら獲物を見定める虎が如く。着ていた制服を脱ぎ捨て、シャツも破いた。威圧感を惜しみなく全面的に出しながら——

「——どんな女がタイプだ？」

——葵は唐突にそう言い放つた。

「……………はい？」

恵と野薔薇は首を傾げ、真依は頭を押さえた。事情を知っている真依はともかく、初対面の二人であれば当然だ。

「返答次第ではここで半殺しにして、乙骨憂太……最低でも三年は引き摺り出す。噂の一年の特級はどこだ？ ソイツも引つ張り出してやろう」

「一年に特級なんていませんよ。何かの勘違いじゃないですか？（……まあ、特級でもおかしくない奴ならいるけど）」

「む？ 乙骨よりも年少で登録された奴がいると聞いていたが……まあ良い。

とにかくだ。性癖にはソイツの人格が表れる。女の趣味の詰まらん男は総じて詰まらん。俺は詰まらん奴が大嫌いだ」

「……いや、何で初対面のアンタと癖について語らないといけないんですか」

「そーよ、ムツツリにはハードル高いわよ」

「野薔薇も黙っててくれ頼むから」

「俺は三年の東堂とうどうあおい葵だ」

「ご丁寧にどうも東堂先輩。そのまま回れ右して帰って下さい」

「ちなみに俺は、タツパとケツがデカイ女がタイプです!!」

「うるつつせえし話聞かねえし、マジ何なんだよこの人……」

「男のタイプでも良いぞ!!」

（……はあ、うツツツぎ）

溜息を吐きながら恵は強くそう思った。悟とは別のベクトルで鬱陶しいと感じなが

らも、取り敢えず何か言わなければと思い……義姉の津美紀の笑顔を思い出していた。

——人を許せないのは悪い事じゃないよ。それも恵の優しさでしょう？

「……別に、タイプとかは無いです。その人に揺るがない人間性があれば、それ以上は何も求めません」

「さっすが恵！ 巨乳好きとか言ってたらかチ割ってたわ」

（……何を？）

野薔薇の『カチ割る』を聞き流そうと真顔で必死になる恵。

「……やっぱりな。お前は退屈だよ、伏黒」

「——っ!!」

そんな恵を、葵は失望に涙しながらラリアットした。

顔を両腕で庇っていないければ、間違はなく自分の顔面は潰されていた。そう思わせるほどの威力。腕からミシミシと嫌な音が伝導する。おそらく肉弾戦においては、雨宮蓮よりも格上。

吹き飛ばされた体をどうにか振り、足から着地する。ゆつくりとゴリラはこちらへとやってくる。

「雰囲気ですらに分かっていた……けれど人を見た目で判断する事は良くないからな。だからこそ許せん。お前は俺の期待を裏切ったんだ」

「……つつ、マジ思考回路イカれてんだろ、パイナップル頭が」

そう軽口を叩く恵だったが、しかし平静ではいらなかった。恵の頭の中で、東堂葵というキーワードが張り巡らされ、情報が捻出される。

「（東堂葵……去年のクリスマススイブに新宿と京都を襲った呪術テロ事件、『新宿京都百鬼夜行』……その京都側で、術式も使わずに、一級五体と特級一体を祓ったと言われるあの東堂か!!）

……アンタ、術式使わないんだってな」

「んあ？ それガセだぞ。特級には使った」

（一級には使ってねえって事じゃねえかよ化けモン……!）

そう思いながら、恵は臨戦体勢を取る。葵をゴリゴリの筋力タイプと判断した恵は、中距離からの攻勢に徹する事にした。模る『鳥』と『蛙』で、【鶴】と【蝦蟇】の要素を掛け合わせた【不知井底<sup>せいていしらす</sup>】を五体顕現させた。

「やる気が」

だが悲しいかな。

「まるで感じられん!!」

【不知井底】では東堂葵という男は止められない。巨体に見合わぬアジリティが、恵の反応を置き去りにした。

「薄いんだよ、体も、女の趣味も!!」

「なっ——くー!」

恵の腰を抱えるようにして、己の体の柔軟性を活かし、背中から砂利の地へと叩き付ける。葵の放ったジャーマンスूपレックスが、恵の後頭部を重点的に破壊せんとした。

だが恵も二級呪術師。これでくたばる程恵は柔ではない。クレーターとなった地から瞬発的に追撃を回避し、距離を取った。

即座に葵の追撃が来る。防戦一方となるばかりで、恵には反撃の僅かな機会さえも与えられない。やがてギリギリの均衡が崩れ、恵は大きく弾かれた。

（負けてられねえ……んだよッ、クソが!）ここで負けたら、アイツに顔向け出来ねえだろうが!）

しかしこの反発を利用し、恵は「不知井底」を解除。こちらも近距離戦を展開する事に術式と呪力を廻す。インファイトは恵の得意ではないが、得意とする式神ならば存在する。

（——やってやるよ）

良い加減、堪忍袋は限界だった。そのパイナップル頭と肝を冷やしてやると呪力を廻し——

「…………ふうむ、夜蛾はまだかのう」

都立高専の応接室にて、囁れた声でそう言ったのは、樂巖寺嘉伸<sup>がくがんじよしのぶ</sup>。京都府立呪術高等専門学校の学長を勤めている、呪術界における大ベテランだ。

白い着物と紫の袴に身を覆わしている。無骨な木製の杖を突いており、長すぎる眉と下顎の髭が伸びている。所々ピアスを開けているのもあって、まさにその容姿はまさに仙人と言うべきもの。実際には八十年代のだが、齢は百二十を超えているように見える。

「生い先短い年寄りの時間は高くつくぞ……」

その入り口付近で姿勢正しく直立するのは、付き添いの三輪霞<sup>みわかすみ</sup>。黒いパンツスーツにネクタイを締め、まるでOLのような雰囲気醸し出しているが、歴とした府立高専の二年生だ。その証左として、ジャケットのボタンが高専仕様の渦巻きを模ったようなボタンになっている。

人形のようにクリツとした目に、長い睫毛が更に彼女の魅力を引き出している。肩までかかるロングヘアで、左の額から右の眉に掛けて前髪を切り揃えている。化粧の類は見られないため、すっぴんでこの可憐さは、同年代の女子であれば嫉妬してしまうだろ



う。

真剣な面持ちで、夜蛾正道学長を待つ二人であつたが——しかし来訪して来たのは、全く別の人間であつた。

「夜蛾学長はしばらく来ないよ。嘘のスケジュールを教えるからネ！（伊地知を脅して☆）」

「……………ほう」

どすつと礼儀作法の『れ』の字も見せず上座のソファに座る。

「よつと。その節はどうも」

「……………はて、その節とは？」

「トボけんなよジジイ、虎杖悠仁の事だ。保守派筆頭のアンタも絡んでんだろ、ど——せ」

「全く、最近の若者は碌に敬語も使えんのかのう」

「最初から敬う気のない相手に敬語を使うつて無駄じゃん。最近の老害は主語がデカくつて、まいっちゃんぐだよホント」

「ちよつと、これは問題行動ですよ。然るべき所に報告させていただきます」

水を刺したのは霞であつた。だが本人に報告する気は毛頭無く、むしろ……

（ヤツベくくく！ 生の五条悟！ 生五条だ！ 本物！ 初めて見たあくくく！）

……ただのミーハーなだけであった。

「ご自由に。こつちも長話するつもりは無いからね」

「……そうですか（ウツワヤツベツ、しゃくべつちつた！　しゃべつちつた！　えへへ……）」

手を組み、本題に入る悟。

「昨晚、未登録の特級三体に襲われた」

「ほう……それは災難だったの」

「勘違いすんな。僕にとつちや街中でアンケート取られたレベルのハプニングだ」

（くうくうくう！　かつこよ……そんなセリフ私も言いてえくくく!!）

「ソイツらとは意思疎通が図れた。おそらく仲間はまだいるだろう。」

敵だけじゃない。三年の秤金次、乙骨憂太、そつちの東堂葵、そして第二のペルソナ使である雨宮蓮……。生徒のレベルも近年急激に上がっている。

加えて、去年の夏油傑が引き起こした『百鬼夜行』……そして唐突に現れた宿儺の器「……何が言いたいのかの?」

「分かんないかい?」

アンタらが下らない地位や伝統のために必死になつて堰き止めていた力の波が、もうどうしようもない所まで迫つて来てんだよ。この先は『特級』なんて物差しじゃ測れな

「よっ。」

「……少し、お喋りが——」

——瞬間、三人を——否、高専を並々ならぬ呪力の波動が襲う。

(やば——何——!?)

「何だ、この気配はっ!?!」

ビリビリと肌を刺激する凶悪なる気配が霞と嘉伸に迫り、霞はその重圧に崩れ落ちてしまう。嘉伸はどうか身を保っているが、隠せぬ恐怖心が冷や汗となつて流れる。そして悟は——これ以上なく愉快に笑う。

まるでその凶悪を、祝福しているかのように。

「つふふ、あつはっはっはっは!!」

「そうかあ、ふふ。やつと目が覚めたんだね……!」

「知っておるのか!?!」

嘉伸が激しい形相で問うが悟は無視し、それどころか懸念の表情を浮かべる。

「……ン? あー、これちよつとヤバいかもね。お爺ちゃん、お宅の生徒が何かやらかしてない?」

「何の話を……!」

「いや彼ね、低血圧だか何だかで、寝起きがすごい悪いの。それなのに、他校知らぬの生徒に友達ここが襲われてたら——怒るだろうねえ。そりやもう、すつごく。まあ最低でも高専ここ一帯は更地になるんじゃないかなあ、あつはつは！

——な、言つたら？ 痛い目見るつてさ」

21.

「……ラヴエンツァ」

——だが、そのような偽りの安寧を、蓮は享受しない。

「今のままでは確実に、オレにとつても、悠仁にとつても、ハッピーエンドには成り得ないんだ。むしろ今も、バッドエンドのままではない。

次はもつと上手くやる。だから……頼むよ。もう少しだけ、オレに戦をジョーカーでいさせてう事を許してく

れないか」

蓮も、前世の最期に納得はいつていない。やり直せるのならやり直したい。もつとあの世界で生きていたかった。

だがもう、前世の自分は死んでしまった。もう終わった。生き永らえる事はできなかった。残酷な事に、???のお話は、あそこでお終いなのだ。

そして蓮は、“雨宮蓮”という自分を、『今』を生きている。決して、その在り方を見

失う事はない。

雨宮蓮は、自分の幸福よりも、他の誰かの幸福を願う。誰かの不条理を救いたいと足掻く。己が受けるべきそれを差し置いて。

例えその道が茨の道であれど。

雨宮蓮が止まる事はない。

「……どうして」

ぼつり、とラヴェンツァは呟く。ぼたり、と瞼から哀しみが溢れていく。

「どうして、そこまで……」

そんなの、忘れていても分かる。

？がペルソナに目覚めたのは、悪神から意図的に与えられたからではあった。——だが、心の奥底にあったのは『願い』だったのだ。

最初は諦めていた。変態教師に、後に親友となる隣人を殺されてしまえば、次に殺されるのは自分だと。そう達観して、どうしようもなくなつて、現実から目を背けるように目を瞑った。

冤罪であれど前科持ちとなつた自分に生きる資格は無い。司法の判決に従つて、罪人として真つ暗な人生を送るのだと思つていた。

だが心の奥底にいたもう一人の自分は——本音の自分は違つた。諦めたくない、そ

う願った。

罪を犯したとしても、あの日、オレは間違ひなく正しい事をした。法律も友人も両親も、オレと親しかったはずの人達は、誰も認めはしなかったけれど。

けれど、誰かを救うことが間違ひな筈はない。

もしも、あの時のそれを悪だと云うのなら——

「オレがジ切ョリーカー札として生まれ、生きているからだ」

——オレはずっと、悪でいい。

己を縛る鎖も、己を阻む柵も、蓮にとつてどうということはない。

縛るなら、引き千切るまで。阻むなら、砕き進むまで。

ジリリリリ、とチャイムが鳴る。現実の蓮が目覚めようとしているようだ。それを察知して、ラヴェンツァは最後の一瞬だけ口ずさんだ。

「……私はあくまで傍観者。私も、同志達も、祈る事しか出来ないけれど……どうか。どうかせめて、今度は——」

前よりはもつと、ずっと、長生きくらいはしてください。

22.

高専病棟一〇一号室にて、けたたましくサイレンが鳴る。異常事態発生のアラートを

聞きつけやって来た、夜勤明けの家入硝子。舌打ちをしながら、ノックもせずに入る。ガラガラつと無造作に開ける硝子。しかし――

「……クソ、目エ覚めたならナスコールしろつての……まだお前は患者だろうが、雨宮あ……!」

パルスオキシメーターと鼻カニューレ、点滴の針の先……それらに繋がれているはずの彼は居なかった。

ではどこにいるのか。硝子には見当が付かず、真つ先に悟にコールした。……だがいつまで経つても電話に出る気配が無く、苛立ちは増すばかりであった。

だが、都立高専内にて二人だけ、彼の現在地を知る者がいる。

「一秒やる」

――ドス黒い憎悪を体現したような声が、恵と葵の鼓膜を貫く。

上方向。高専本堂の上階から声と重圧が降り掛かる。その重圧を、恵は頼もしく、そして懐かしく感じた。

そうして視認する、重圧の主。太陽と重なり影を生む彼が、葵に無慈悲に告げる。

「失せろ」

「ッ!?!」

葵自身も驚くべき事だったのだが、その声が聞こえた瞬間、追撃せんと突撃しようと

していた葵は、恵から数メートルほど距離を空けていた。

恵と葵の間に挟まるようにして、華麗に砂利の上に着地する黒い影。徐にその手を顔へと持つて来ると、

「マーメイド、《ディアラマ》」

人魚の名を呼び、彼女は吐息を恵に吹き掛ける。その吐息は優しく、温かく、それでいて朗らかで……そんな緑色のオーラが恵を覆つていく。果たしてたちまち、恵の頭部に負つた傷は跡形もなく消え去つた。

翻るコートに赫い手袋、そして純白に煌めくドミノマスク。そこから覗く黒い鋭眼。しかし静かに、彼は怒る。

——誰の友に手を出したと思つていいのか。貴様がどこの誰かは知らんが、その落とし前は付けさせると。

その様を見て、恵は心で再確認する。

ああ、そうだよな。これを見逃せる程、お前は気長じゃ無いもんな。

「遅えんだよ、ジョーカー……!」

「すまない、寝坊した。——だが、間に合つたな」

見紛うはずもない、我らの切り札。

ジョーカー、完全復活。





ガチャリ、とドアが開く音が響いた。視界に入る景色は、アパートのそれではなくビーチであった。海にはぶかぶかと、蛸のような呪霊が浮かんでいる。明らかにアパートの内装を無視したビーチには、パラソルの下でチェア転がり涼む一人の男。

雲の巨人著：芥見下々あぐたみげげという本を読む彼に、ドアを開けた本人である夏油傑は問い掛ける。

「随分と穏やかな領域だね」

「漏瑚はどうしたんだい、夏油？」

「瀕死。まあ、花御はなみと昊こうきよ？が助けに入ったから、問題無いと思うけどね」

「無責任だな、焚き付けたのは君だろう？」

「いやいや、行かない方が良いと……おや、噂をすれば」

そう言う夏油に呼応するようにドアが開く。果たしてそこにいたのは、筋骨隆々の植物《花御》と、全身に真っ黒な服を身に纏う布作面の《昊》、そして花御が抱えるのは、首だけとなった漏瑚であった。苦労のように、彼は漏瑚に声を掛ける。

「やあ漏瑚、花御、昊？。無事で何より」

「どこをどう見て言っている……!!」

「それで済んだだけマシだろ。」

ともあれ、分かつただろう？ 五条悟は然るべき時に然るべき場所で、こちらのアドバンテージを確立した上で封印する。決行はハロウィン真まつ只中の渋谷。いいね、《真人まひと》？」

そう呼ばれた彼は本を閉じ起き上がる。やがてその全貌が露わになる。

彼は、身体中が継ぎ接ぎだらけの人間と呼ぶべきのナニカであった。オッドアイで、右目は銀、左目は藍色。これらと呪霊である事を除けば、ただの好青年であった。

黒いローブに身を包む真人は――

「――うん、異論無いよ。」

狡猾に行こう。呪人間いらしく、人間呪いらしくね」

まるで子供のように、無邪気に嗤わらってそう言った。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen  
Let us start the game.  
#13 The Ace's Awakening

## #14

23.

手袋を締め直すジョーカー。その瞳は怒りに燃えている。燦々と照りつける太陽を背に、切り札は敵とする東堂葵を見やる。

「ジョーカー、あの人は敵っぽいけど敵じゃねえ。何っつーか、実力を測ってただけみたいな感じで……」

「それでオレが納得すると思うのか？」

「——いや、全く思ってたねえけど？」

あーあ、頭痛えし、どいつもこいつも話聞かねえしよ……寝るわ、俺。起こすなよ  
ジョーカー」

「ああ」

隣にて、ふらつく頭を立て直そうと膝立ちになつてゐる伏黒恵は、しかし懐かしむ様に、ニヒルに笑つてそう言い、立つのを止め、失神するように夢の世界へ落ちていった。  
ぶちのめせ、と言わんような笑みであった。

さて、腰裏に付けたポーチを弄るまさぐジョーカー。このポーチには、かつての怪盗の師お

手製の『四次元ポケット』なる物が入っている。

回復アイテムや装備品、お金、果ては食料まで収納可能だ。冷めたり寄ったり賞味期限も切れないので、前世では超絶優れ物として重宝した。玉犬に大量のジャーキーを与えられた（恵によって拒否）のも、この四次元ポケットがあったため。

今世では、ジョーカーの《認知操作》の術式が、普通ならばただの布切れである『四次元ポケット』の存在価値を向上させた。前世で置いてきてしまった物は持ち込めなかったのは残念だが、致し方あるまい。

閑話休題、ポーチから剛巖を抜き、逆手に持ち換えながらジョーカーは分析を開始する。

「（見るからに近距離のパワー型。術式が分からない以上、下手に攻めればこちらが危険だ。距離を取り続け……いや、牽制するのなら、逆にこちらから行くべきか。病み上がりだが、身体の調子は良い。問題無く動ける）」

お前、誰だ」

「（この覇気、呪力量、間違いなく特級クラス！　そしてこの男からひしひしと伝わる、全身の毛穴に針を突き立てられたかのようなこの刺激!!　コイツが噂に聞く、現代六人目の特級術師……!!　コイツならば……!!）」

京都校三年、東堂葵。お前は？」

「雨宮蓮。……だが、今はジョーカーだ」

退屈が『裏返る』。そんな予感が、東堂葵の身体中を支配した。

「二つ断っておく」

……風が吹いて砂が舞う。

「——これからお前に行く暴挙には、オレの八つ当たりも含んでいる」

「……八つ当たりの暴走で倒せるほど俺は弱くはないぞ、ジョーカー」

二人は構えない。自然体で大地に立っている。むしろ、構えない事こそが構えだと言わんばかりに。

（——ペルソナの再召喚可能<sup>リキヤスト</sup>まで残り40秒。それまで時間を稼ぎ、一気に潰す……）

（——まずは素材の味を知りイ、見定めてからア、丁寧に調理してやるおう!!）

思惑が交錯する。

開戦の合図はすぐそこに迫っている。

鳥肌が立つのを葵は感じる。魂が今か今かと熱く叫ぶ。

風が段々と止んで行き、完全なる静寂が訪れ——

瞬間、ありとあらゆる物が置き去りにされる。

静止した世界の中で、影と獣による鬨いのゴングが鳴った。

先手必勝は二人の思う所だったようだ。ジョーカーが右の剛巖を振り抜かんとして

いた所を、葵が左拳を重ねるように殴打することで阻止しかける。

これを読んでいたジョーカーは、スクリューを描きながら瞬間的に剛巖を手放し、葵の拳を包んだ。ダガーは葵の上体を反らせ、不安定な体幹を作らせ、木の幹に突き刺さった。

(器用が過ぎるだろうに！)

拮抗する拳を一気に、かつ瞬発的に押し込み、更にその身体を『崩す』。一瞬怯む葵の手首を両手で握り、ハンマー投げよろしく真横の高専本堂の骨組みへとブン投げた。

バギバギメギメギという、本堂の骨組みが折れる嫌な音と共に、葵の体が飛んで行く。ペルソナ使いであるジョーカーの身体能力は、装備しているペルソナのステータスに依存する。ペルソナのステータスは、『力』『魔』『耐』『速』『運』の五種存在し、その効果は以下の通りである。

『力』は《八艘跳び》のような物理・銃撃スキルや物理攻撃の威力を上昇させ、『魔』は《マハエイガオン》や《ディア》のような魔法系スキルの威力が上昇する。

『耐』はそのまま防御力であり、『速』は行動速度の遅速に関係し、『運』はクリティカルヒットや状態異常スキル、即死スキルの付与率を上昇させたり、それらの被弾率を下げるなどの因果律に関わる。

現在ジョーカーが装備しているのは鬼女《マーメイド》。『力』のステータスは数値に

して33。これほどの数値があれば、両手であれば体重80キロを超える葵をブン投げる事は可能だった。

『力』のステータスだけで見れば、『オンコット』や『ツチグモ』の方が高いが、非戦闘時のリラックスでできる時・場所・場合ならばまだしも、戦闘中に装備しているペルソナを変更するには、『召喚』↓『ペルソナチェンジ』↓『収納』という手順を踏まなければならぬ。

これでは縛り③を破る事になってしまうので、今回敢えなくジョーカーはブン投げる程度で終わった。

アベンジャーズの緑色の巨漢よろしく、めっためたに叩きつけたかったのはここだけの話。

さて、投げ飛ばされた葵を瞥見し、ジョーカーは剛巖を回収しようと視線を外そうとし——その瞬間、ジョーカーは顔面に両手を重ねざるを得なくなる。

「ぬウン!!」

「ぐうっ……い！」

間一髪、顔を破壊される事態にならずに済んだ。呪力を帯びたリアットは、同じく呪力を帯びた指の網により衝撃を緩和させられた。だが、緩和させられてなお有り余る威力が、ジョーカーの身体を城壁に勢いよく打ち付ける。



背中に伝わる痛みが、ジョーカーの肺の中の酸素を全て吐き出させ、呼吸を整える暇も与えずに、葵の剛健なる拳が追撃に迫る。

だがそれを、ジョーカーはワイヤーアンカーをすぐ上部にある屋根の茅負かやおいに突き刺し、葵にムーンサルトを見舞わせながら回避を試みる。タイミングがずれムーンサルトは決まらなかったが、回避には成功、屋根上へと着地する。

果たして、バゴオンという轟音と共に白い城壁に罅が入り、パラパラと破片が零れ落ちるのを見て、無理に防御していたらこちらが危なかったとジョーカーは確信した。

ワイヤーが収納される前に、丁度良いと剛巖の回収のため、トカレフを抜刀しつつ、屋根を駆けながら――

「フム、中々良いダガーだな」

パアン、と破裂音がして。

気が付くと、ジョーカーは眼前にて眠る恵を視認していた。

「は」

敵あてはどこへ行った、とサードアイを発動させながら探すが、彼奴は自身で破壊した壁の前――即ち、一步として動いていなかった。

ジョーカーには思う所があり、後ろを振り向くと、そこにはクヌギの木の幹が存在しており、更にはジョーカーの真後ろにあつたクヌギは少し傷が付いていた。

(……なるほどな)

葵の方を再び見遣りながら、ジョーカーは向かう。

「入れ替えたか」

「その通りだ」

傷の付いているクヌギは、葵へのフェイントに使った剛巖が突き刺さっていたもの。

その剛巖とジョーカーの位置を、葵は文字通り『入れ替えた』。それが葵の術式——名を《不義遊戯》。

(奴の術式は、何か二つの位置を入れ替える術式で間違いないな。生物と非生物の入れ替えが可能ならば、生物と生物……そして自分自身と他者との入れ替えも可能だろう。応用が効きやすいのが厄介だ)

「(申し分ないフィジカル、一切の躊躇無い攻防……そして反転術式！ 素晴らしい才能に満ち溢れている！

術式も良い！ 彼奴の術式は、おそらく呪霊を使役する術式なのだろう。《マーメイド》……つまりネームド名前があるという事は、おそらくは仮想怨霊、いや式神か？ もしや他にも式神を従えているのか？ そうだとしたら、キャパシティは如何程か……)

だがなジョーカー、生身による闘争を避け呪具に頼り切る……これは呪術師としてはマイナスポイントだ。

特に、俺のようなIQ53万の男が相手であれば、なッ！」

葵が剛巖をダーツのように、ジョーカーに向かい投擲する。巨漢故に手が大きいという、恵まれたフィジカルを持つ葵だからこそ出来る芸当。果たしてダガーは意趣返しにとジョーカーの軀体を――

「……はっ？ オイオイ、マジかよ」

貫く事は叶わなかった。

ジョーカーは、剛巖が到達する寸前で体を左にずらし、その勢いを殺す事なく体を反転させ、そのまま通り過ぎようとしていた剛巖の柄を左手で掴んだのだ。

——そんな事があり得るのか!? と、葵はそう思うしか無かった。

葵の策としては、ジョーカーに剛巖を避けさせた後のタイミングを見計らい、《不義遊戯》を発動、そして奇襲といった流れだった。これはジョーカーが《不義遊戯》の発動条件を把握していないという欠陥があつて成立する。

だがその策を、ジョーカーの動体視力と身体能力が阻止した。

人間が投擲されたダガーを避けるまではまだしも、避けたダガーを捉え掴むなど、誰が想定に入れられようか。葵は完全に術式発動の機会を見失ってしまった。

勿論、ジョーカーが剛巖を握る現在でも《不義遊戯》は使用可能だ。だが《不義遊戯》はあくまで、『物体同士の位置を入れ替える』術式。

入れ替えは、『三次元的な物体同士の座標』と、入れ替える物体同士を線分した際の中心点を点対照とする『体の向き』に適用される。

二つの物体は、高度や体勢、位置エネルギーなどを保ったまま入れ替える事になる。詰まるところ、このまま《不義遊戯》を発動させれば、ジョーカーの握り拳が葵の体に『埋まる』可能性が生まれるのだ。現状で無理やりかつ安全に《不義遊戯》を発動するのであれば、葵は剛巖の位置よりも高い所にいなければならぬ。

そのためだけに隙を作るのは得策ではないと判断した葵は、笑いながら冷や汗を一つ流しつつ、いかにジョーカーを出し抜くかを考えていた。

(もはや器用過ぎるとかいうレベルではない！ エグいな！ 差し当たり『超魔術』とでも呼ぶべきか?!)

そう直感している葵に、ジョーカーは背後にて剛巖を捨て、わざとらしく葵を左手の人差し指で誘う。左手を盾を構えるように、右手を葵から見えないように顔裏に。

「来い、肉達磨」

ペルソナの再召喚可能までの制限時間は残り20秒。葵はジョーカーに対し攻めあぐねている。葵の敗北へのロードは、刻一刻と迫っているというのに。

……隙が見えない。

否、隙は先程の剛巖を捨てた事で出来た。ジョーカーはこの一瞬で、《不義遊戯》の術

式効果についての粗方の憶測は付いている。初手で生物と非生物の入れ替えを行なったのは悪手であった。

《不義遊戯》の術式対象は、生物云々を問わない。対象に一定の呪力が込められていれば、《不義遊戯》にとつてそれは効果対象だ。その事実をジョーカーが読んでいる（と葵は思っている）からこそ、葵は攻めきれずにいる。

（ダガーを投擲したのは迂闊<sup>うかつ</sup>だった！ まさかジョーカーの身体性がこれほどとは……！）

ならばと、葵は術式の開示を試みる。術式の開示による『手の内を晒す』という縛りが、葵の《不義遊戯》の術式効果を更に高める——

「でもそれを、あのジョーカーくんが見逃すと思う？」

——瞬間、葵の隣で、愛しの高田ちゃん葵の推す高身長アイドル。自称永遠の十七歳♡がそう呟く。

夕暮れの教室。二人きり。葵の理想とするシチュエーションで、高田ちゃんは葵に不安感を醸し出させる。

「高田ちゃん……いや、俺もそうは思わん。今術式の開示を行なうのは、むしろ悪手だ。呼吸一つが、奴にとつて俺への隙足り得る」

「だよ。じゃあどうしよつか。そもそもジョーカーくんが、やたらめつたらにあの式

神を繰り出して来ないのはどうしてかな？」

「——おそらく、奴の縛りによるものだろう。回数か時間かはまだ分からんが、発動に制限を設けているのは間違いない。

奴は俺の術式を理解したつもりでいる。だがあくまで、理解した『つもり』なだけだ。つまり俺が取るべき行動は——」

（——術式を発動すると思わせる事！）

この間、僅か〇・一秒。

そして前傾姿勢となり、タツクルの用意を済ませる葵。

術師同士の戦闘は、裏の裏を搔く騙し合いにある。相手の真意に気付けなければ、それ即ち死。

呪力にて強化した身体。戦いというミュージックに、己の波長を合わせるように——一瞬で距離を詰める。

だがそこはジョーカーの想定の内。突進に対する最も有効な手段は、こちらもより深い位置での突進を繰り出す事。全身を更に深く沈めつつジョーカーは、リバーに向けて貫手を試みる——その寸前、葵はジョーカーの眼前で一つ拍手を行なった。

不意の猫騙しに、思わず両目を瞑ってしまふジョーカー。足を止め、瞬きの最中でありながらも背後へと貫手を手刀にして繰り出した。

だが不安定な体勢により繰り出されたそれに手応えは無かった。そしてこのジョーカーの行動に、葵は確信に近いものを抱いた。

（やはり、ジョーカーは素手での戦闘に慣れていない！ 挑発はあくまでハツタリ、本命はあの式神！ ダガーはまだ中途半端な呪力操作を補うための致し方ない処置か！

本当は近寄られたくないんだろ、ジョーカー!?!）

《不義遊戯》のフェイントに手応えを感じる葵。手を叩いたとて、術式を発動するとは限らないのだ。呪力で固められた葵の拳ならば、二級相当の呪霊であれば一撃で沈められる。ジョーカーに対しても、有効打たり得る威力だ。

——イケる。そう葵は直感し、ガラ空きになつたボディへとレフトブローを叩き込む……！

しかしこの時、葵は失念していた。

ジョーカーは自分もインファイトは出来ると言うブラフのため、剛巖を捨てたと葵は断じていたのだ。

（かかった）

ニヤリと笑うジョーカーに、葵は恐怖に近い物——畏怖を感じた。

確かにジョーカーの戦闘スタイルは、ダガーとハンドガンを主体とした体術を用いるもの。ペルソナは頻繁に使うものではなく、危機的状況を突破するための隠し切り札と

して使うか、あるいは回数か時間制限を課した縛りである可能性のどちらかを考慮し、後者であるときは葵は推察出来た。

葵と距離を置きたがるのは、ペルソナの再召喚までの時間を稼ぐためだと考えた。現にジョーカーは、葵をブン投げて遠くへと飛ばしたり、逆に飛ばされたり、無理にでも剛巖を取りに行こうとしていた。これらの行動も相まり、葵はそう勘違いをしてしまった。

そうして葵は、ジョーカーを近接戦闘が（出来なくはないが）したくない、典型的式神使いタイプだと推察したのだ。

その認識が改まるのは、これより一秒先……葵はその後の数秒で、ジョーカーという男の底力を思い知る事になる。

さて、ジョーカーの背後への右手刀の慣性はまだ生きている。まるで独楽のように回転させながら、左手での攻撃もジョーカーは試みた。不恰な拳はしかし、この間合いでは拳半分ほど届かない。

……だがジョーカーの本命は拳では無かった。

ヒュン、という風切り音に、葵は身を半歩無理やり退がらせ半身となり——瞬間、葵の眼前を何かが通り過ぎて行つたのを肌で感じた。

（避けていなければ、攻撃していれば！ 俺は確実に顔面に、ダガーを喰らっていた！）



くくくツツ、何という戦闘センス!! 凄まじい!!)

しかしジョーカーが出来るのは、せいぜい二手三手先(多くて五手)を読む程度。かつての好敵手や将棋の師が相手ならばこう上手くはいかない。

二手先はこれで終わり。だが残る三手目がある。揺らいだ体幹を整えようとする葵に、身体の回転を中断させ、左脚をバネに右肩による鉄山靠を見舞う。

間一髪防がれてしまったが、乱れた姿勢ではまともに受け身など取れるはずもなく――  
「ぐおおっ!?!」

呪力を伴って放たれる打撃は、いとも容易く葵を吹き飛ばすに至る。その先には、ワイヤーに掛けられ城壁に突き刺さった剛巖。死ぬ事は無いが、受ければ死ぬほど痛いのは確実。当たり所が悪ければ一時動けなくなるだろう。手を叩き《不義遊戯》を発動させ、壁に打たれる。

肺の中の空気が抜け出ていく感覚、窒息感。だがそれを感じるよりも早く、ジョーカーの追撃が迫る。

《不義遊戯》により入れ替わった葵と剛巖。後者のグリップを左手で掴み、その勢いのまま袈裟斬り。

「一体どこまで……!」

「答える義理はない」

そして四手目が終わる。

しかし、この四手目は不完全。謂わば偶然の産物だったのだ。

その袈裟を《不義遊戯》によって入れ替え躲す葵。ただ、躲すというにはあまりにも不恰好であった。壁に背を打ち付けた体勢から、急に背凭れの無い場所に入れ替わったのだ。躲したというよりは、倒れ躲せたが語弊がないだろう。

だがそれでも、葵の闘志はまだ潰えてはいない。カポエイラのマカーコという、低い体勢で地に手を付けたままの後方宙返りを繰り返す。爪先は剛巖のシヨルダーを蹴り上げる。

左手を明後日の方向へと大きく弾き着地。さらに転じ、小碎石の砂利を扶るように蹴り上げ、更に後方へ宙を舞う。この一瞬にして、石飛礫の群れには呪力が込められた。

仰け反りになったジョーカーに、回避はおろか行動という選択肢は存在しない。ワイヤーの巻き取りも未完了。ならばこちらも呪力にて身を堅めるしか他はない。

(……だからこそ惜しい。この戦闘センスに《黒閃》くろせんが加われば、ジョーカー男は『最強』に最も近い存在になれると言うのに！)

葵はそんなジョーカーに、何とも言えぬ口惜しさを感じながら手を叩く。

しかし。

葵は、葵の鼓膜は、葵の全ての細胞は、決してその言葉を聞き逃さなかった。

「……残念だが、Show, s Overだ」

終焉を言祝ぐ鐘の音のように、残酷にジョーカーは告げる。

ぞわぞわと、腹の奥底で毛蟲が踊っているかのような絶望感は、強敵ではなく『脅威』に對峙した時のそれに似ている。

蹴り飛ばした小碎石は、ジョーカーの途轍もない呪力放出によって全て弾かれてしまう。身体の周囲を包む靄もやのようなそれは、まるでジョーカーがこの世全ての憎悪を溜め込み、それが今にもはち切れそうになっているかのよう。

兎などの小動物であれば簡単に殺せてしまえるのではないかと錯覚してしまう、心の臓を突き刺さんばかりの鋭利なる視線。

辺りが、ジョーカーの呪力によって紅く染まっていく。時間も空間も、空も地も、何もかも全て。

平伏したくなる。白旗を挙げたい。それで命だけでも赦されるのなら、己は喜んで恥をかくだろう。葵は一瞬、そう思ってしまった。

（——そうじゃねエだろ!!）

己よりも上位の存在に、東堂葵という漢を証明すること。己を相手の魂に刻み込み、そして勝つ。それこそが、東堂葵をバトルジャンキー足らしめる志。

(ここ)で逃げるのは一般人のする事だ！  
俺が守る対象

勝ち筋薄い特攻であれども——漢ならば！ 例えそこがドブの中だろうが己の血の海の中だろうがツ!! 潔く前のめりに死ね!!)

己を鼓舞する。

ジョーカーは右手をドミノマスクへと移した。円卓に居座る人魚に掛かっていたスポットライトが消え、別の魂に焦点が当てられる。

——呼び起こすは原初の切り札。己と共に歩み、死せたとしても不死鳥の如く蘇る、まさに神出鬼没の大泥棒。遍く怪盗と泥棒の敬愛を受ける逢魔の略奪者。

「加減はしてやる」

マスクが砕け、切り札は切られん——

「嘗めんなツ、来いッツ!!」

正しく、その時であった。

「生まれえええ!!」

ここにいる三人の少年の誰の物でもない声が、ジョーカーと葵の鼓膜を貫き——体が、青年に言われた通り『止ま』ってしまふ。

耳鳴りが木霊し、脳内と耳小骨との間を反芻するのを二人は感じた。

飛び出してきた青年の名は狗卷棘。呪言師である棘は、言霊に呪力を乗せて相手を縛る。これにより、ジョーカーのペルソナ召喚は不発に終わった。

「何やってんのっ!!」

そして棘に『止まれ』と命令されてから間もなく、パンダ先輩からの殴打がジョーカーを襲う。本気ですらない呪力を伴わないそれは、ジョーカーにとっては子供の駄々程度の威力しかない。

「ふいー、ギリギリセーフか？」

「いくら、高菜」

「ああ。見たくない奴一名、見慣れない奴一名、合計二名のお客さんだ。特に見慣れない奴がヤバイぞ」

(……予想の斜め上のキャラが出て来た)

パンダ先輩の毛が粟立つのを直視した棘も、ジョーカーを警戒する。

だがその警戒は、葵によって遮られた。

「良い所で止めやがって、パンダ」

「ばかだろお前。お前ほんとばかだろ。あんなもん喰らってたらただじゃ済まなかったかもなんだぞ」

「しゃけしゃけ、筋子」

「で、お前は何？ どこ中の誰よ？」

「どうも、ジョーカーです」

「いや雨宮蓮だろ？」

「……なんだ、知ってたのか」

そう言うのと、つまらなさそうにしてジョーカーは雨宮蓮へと戻る。

水色の患者衣にスリッパという服装になった蓮は、普段の彼のようにポケットに手を突っ込もうとしたが、突っ込むポケットが無かったので、手は行き場を失ってしまった。

「高菜」

「アンタさつきから何なんだ、しゃけとか高菜とか」

「しゃけえ」

「しゃけ？」

「しゃけ！」

「たらく」

「いくら」

「ハンバーグ」

「ハンバーグ!？」

「……とげに新しい語彙を増やさんでくれ、れん」

「しゃけ」

「おかか!! たらこ昆布! おかか!」

「感染つてんぞ」

よつこらどっこいしょ、と言いながら眠る恵を抱え上げるパンダ先輩は、棘の語彙が増え、自身の『棘語』の翻訳精度が落ちることを懸念していた。

「フー……勝負はお預けとしよう、蓮」

「……できれば会いたくないんだがな」

「嫌でも会うことになるさ」

「ほら、さっさと帰った帰った」

「今帰るとも。収穫もあったしな。さて、上着どこだっけか……ああ、最後に聞いておきたい事がある、蓮」

蓮に問うのは、勿論。

「お前の女のタイプは何だ？」

「……巫山戯ているのか？」

「答えてくれ、蓮。どんな女がタイプなんだ？」

蓮にとって、こういう話は苦手だった。

仙台に住んでいた頃の蓮は、かなりモテた。選り取り見取りだったと言っても過言ではない。クリスマスに予定はあるかと聞かれた事は一度や二度の話ではないし、バレンタインチョコは毎年クラスの非モテ男子が血眼になるほど貰っていた。

尤も、それに鼻を高くせず、自身も友チョコを作り彼らに渡すのが、《慈母神》と呼ばれ崇められる雨宮蓮クオリティなのである。

同級生の非モテ男子達は、むしろ女子より蓮のチョコを欲しがっていたとは悠仁談である。悠仁も隣と一緒にチョコを食べていた。

前世の第二の母校では、傷害罪の前科持ちという情報がダダ漏れであり、それに尾鰭が付きに付きまくって、やれクスリをやってるだの、やれその筋に知り合いがいるだの、やれナイフを常に持っているだの、根も葉もない噂を流され、蓮の評判は最悪。校内にいた者で蓮の悪い噂を知らない者はいなかった。

しかし悲しいかな。『悪い男ほど良くモテる』のだ。

東京に来てから、《なくはない》程度の魅力が《魔性の男》の域に達した。その気になれば十股か、あるいはそれ以上出来ただろう。それは今世でも言える事である。

……これは蓮でさえも知り得ないのだが、東京に厄介払いされた時の高校でも、一定数のファンはいた。

だが蓮が不貞を働かなかったのは、ひとえに蓮が、前世で置いて来てしまった彼女を



愛しているからだった。

故に、彼女を裏切るような事は出来ないと考えた。死後転生してからというもの、色々な物に区切りを付けた蓮だったが、どうしても自分と親しくしてくれた人々や愛する者には、今の今まで、区切りが付かずにいた。

(……………どう答えるべきか)

蓮は付き合う人間の選択はすれど、外見で人を選ばない。美人だから接する、不細工だから遠ざけるといった行為をしない。関心がないと言えばそれまでだが、上っ面だけの安い情よりも、心からの信を蓮は求める。故にこそ、こういう質問にはかなり困った。前世は周囲への懐疑心もあつてか、信頼を置く人々の数は少なかつた。

その癖して信頼を置く人は何故か美男美女が多かつたが、今世ではそうではない……とも言い難いような気もする。

この手の話は、ナイシヨ♡(魔性の男スマイル(相手は堕ちる))と言つて今の今まではぐらかして来たが、この状況は正直に白状した方が良さそうだと蓮は断じる。

そこで蓮は妙案が浮かんだ。前世の恋人の性格や体型を言えば良いのではないかと。性格については、前世で交流のあつた人達には、一貫して『揺るがない信念がある』と言ふべきだろう。現実には襲われる不条理と戦い、悩みながらも、それでも懸命に抗つた。信念を貫こうとした。

魅力的な人達ばかりで、一つ違えば恋仲だったかもしれない良い女ばかりだった。だが蓮は、その中でもたった一人の女を愛した。

彼女のスタイルは、カップルという間柄を度外視してなお『良かった』と思う。かつて知り合った他の女性達と比較して――

「……自分の中に揺るがない信念を持つ、タツバとケツがデカイ女身長の高い安産型の人」

ぶっちゃけシタ時そう思った。

「言うのかよ」

「言わないと多分あの人帰らないだろ。というかアンタ、呪泉郷にでも行って来たのか？」

「いや、元からパンダだ」

「――ツツおおお……!!」

会話する一人と一パンだったが、それは葵の慟哭により掻き消された。

――瞬間、葵の脳内に溢れ出した存在しない記憶。

「雨宮くん……好きです！ 私と付き合ってください！」

あれはそう、五月の中旬。夏服になって直ぐの事だった。

花卉枯れた桜の木の下で、俺の恋する高田ちゃんは、俺ではなく、蓮に自身の想いを告白した。

初夏の風が、二人の頬を撫せて。

二人の関係を祝福するように、彼女のツインテールを優しく靡かせる。

「蓮……」

しかしだ。光が影を生む様に、風により凍える者がいるのだ。その風は、俺達に悲しみを呼んでしまった。

「……葵」

「とっ、東堂くん!?!」

「……面を貸せ、蓮!!」

「……良いだろう」

決闘だと。雌雄を決せねばならぬと、俺は叫んだ。

帰り道の土手、その橋の下。

漂う空気は最悪で、ピリピリと張り詰めているのを肌で実感できる。

「……行くぞ、蓮!!」

「来い」

二人のゴングが、鳴った。

互いの拳と腕が交差するように、両方の顔面へと突き刺さった――。

――お前、あの告白を断る気でいただろう。

――バレたか。やはり敵わないな、葵には。

――ほざくなよ……俺は怒っているんだ。

殴る。殴られる。蓮も負けじと俺を殴る。

頬が痛む。拳が痛む。何よりも、心が痛む。

――だが高田さんは、お前の……。

――良いんだ。高田ちゃんはお前を選んだ。言ってしまうえばそれだけだ。意中の相手が被ったところで、俺達の友情が碎けることはない。

心の涙が汗と血となり、制服のカッターシャツと拳へと塗れて、染みを作っていく。

――だがその代わりに、誓え。必ず彼女を幸せにする、とな……。

一つ、俺の左頬に突き刺さった蓮の拳が、俺の意気を完全に砕いた。

仰向けに倒れ伏した俺と、息も絶え絶えに立つ蓮。勝者は、もはや言うまでもなく――。

「……立てるか、葵？」

「ああ……」

口の中に広がる鉄の味、辺りに漂う汗の匂い。それを気にせず、手を差し伸べる蓮の

右手を、俺はしっかりと掴んだ。

お互いに傷だらけで、先程殴られた左頬が腫れているのを痛みで感じる。蓮も鼻血を出し、体中に青痣を残している。

そのせいもあつてか、蓮は手を差し出したは良いものの、俺を立たせる踏ん張りが効かなかつたらしい。重力に逆らえず、蓮も、雑草の生い茂る地へと仰向けに倒れた。

その姿がおかしくて。

俺達は互いの醜態を笑い合つた。

二人の影を、斜陽だけが優しく見守っていた……。

「悲しい時だけに泣くんじゃない……か」

「……………」

何を言っているのだ、と蓮は困惑した。

「どうやら俺達は『親友』のようだな……ツツ」

「は……………」

マジで何言つてんだ、と蓮は困惑する。

「嬉しいよ、蓮……………ようやく、この俺が認める友が見つかったのだから……」

「……………いや、うん……………もうそれでいいから帰ってくれ」

「何を言う!! 俺達の蜜月はまだ始まったばかりだ!!」

「不吉な風に言うな」

「さあ、あの夕日に向かって走るぞマイフレンド!!」

「まだ昼だぞ」

葵から計り知れぬ友情を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝ここに、契りを血盟の絆へと転生せしめたり。

絆は反逆の翼となりて、

魂のくびきを――

「いやちよつと待て」

「どうしたマイフレンド」

「展開が飛躍し過ぎている」

初期からコープマックスなどチートどころかもはや改造の域だ。蓮は改造厨ではない。  
い。

「むう、マイフレンドが言うのであれば仕方あるまい」

「……まあ、うん。そうしてくれ」

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『太陽』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

## 24.

同時刻、高専の自販機前。釘崎野薔薇は怒髪頂点の思いであった。必ずや、禪院真依に痛い目を見させると、半ば自暴自棄であった。

しかし野薔薇の本領は、釘と金槌があつてこそ発揮できる。手ぶらの野薔薇に対し、真依はリボルバーを装備していた。

そこに助け舟を出したのが、禪院真依の姉、禪院真希であった。——しかしながら、真希自身は、『自分は助け舟を出すことが出来た』とは言えなかった。

高専全体を覆った重圧は、三人の女達を留まらせるには充分であったのだ。

そこに、ゴリラの如き躯体を持つ偉丈夫と、彼と並ぶほどの実力を見せた癖毛の彼らがやってきた。後者に思うところがある野薔薇は、思わず彼の名を叫んだ。

「蓮だ!!」

「……ッへえ、コイツがね」

真希がそうぼやくと同時に、真依は二人から距離を置いた。

「帰るぞ、真依」

「冗談、私はこれからだつての」

「そんなことよりも高田ちゃんとの個握が大事だツツ!!」

「……はあ、もう! 勝手な人ね!」

プリプリと怒りながら、早足で葵を追いかける真依。

「交流会ではこうはいかないわよ、アンタたち!」

「何勝ち誇つとんのじゃゴルア! 制服置いてけや!!」

「よせ、今戦つて勝つても負けても損だぞ」

真希が、真依へと挑発する野薔薇を、持っていた木槍で諫める。

さて、野薔薇は葵と共にやってきた、黒髪で癖毛の青年へと向く。

はち切れんばかりの思いを表に出さまいと堪えながら、しかしどうしても、彼の竹馬



の友を死なせてしまったことを思い出す。

野薔薇の視界が少しずつぼやけていく。一度俯いた。……けれど、もう一度顔を上げる。

彼の顔を直視する。

「……言いたい事、色々あるけど、まず——」

涙を拭いながら、野薔薇は蓮へ手を掲げる。

元は虎杖悠仁と雨宮蓮との間で自然に身についたコミュニケーションツールであったが、それは恵や野薔薇との間でも使われていた。

「お帰り、バカ蓮！」

「……ああ。ただいま」

乾いた音が、高専に響いた。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen  
Let us start the game.  
#14 Welcome back.

## # 15

起きないとなあ

食べないとなあ

治さないとなあ

会いたいなあ

25.

〈2018年7月8日〉

〈昼〉

二人の男女が医務室にて、席に座っている。女が座る席の机には、ペンやらカルテやらが無造作に散らかっている。薬品の匂いが、男の鼻腔を突き刺す。

男は上裸だ。女は上裸の体に優しく触れている。ガラスを扱うかのように、あるいは艶髪を撫でるように。あるいは、恥部を愛撫するかのように。

ツ……、と肌を這う指先。やがてそれが離れ――

「ハイ、検診終わり」

——その手の持ち主は、ややぶつきらぼうに言い放った。

「後遺症無し。まあアレだけ派手に暴れてんに後遺症なんてある訳ないか」

男は我らが雨宮蓮、女は呪術師最高のヒーラー家入硝子であった。

東堂葵との鬨いと禪院真依の見送りを終え、まだ時はそれほど経ってはいない。同級生二人への積もる話や、二年の先輩方への挨拶もあつたが、それは突如現れた五条悟によつて阻まれる。

硝子のお怒りの電話を右から左に聞き流しながら、保健室に辿り着いた蓮。蓮が戸を開く前に硝子が戸を開き、一言「脱げ」と言われ、身ぐるみを剥がされるのだった。

ちなみに、三輪霞は悟とのセルフイーを撮れなかつた。

ほら、足元を見てごらん。これが霞の悔し泣き。

ほら、前を見てごらん。あれが霞の哀愁漂う丸背中。

「申し訳ないとは思っています」

「そういう時はな」

す、と手を蓮の額に差し出す。中指の爪を親指で抑え、

「あいてっ」

「もつとすまなそうな顔しろつての」

ぱちんっ、と強烈なデコピンをかました。

「で、要件は検診だけじゃないだろ？」

「はい。反転術式について、もっと知りたくて」

そう言つて体勢を立て直す蓮。おでこはひりひりと赤くなっている。

「まあとりあえずやつてみせなよ。話はそれからだ」

「はい」

言われるがまま、蓮は両手を胸前に持つていく。

かつて呪骸〔ツカモト〕を握り潰——もとい、呪力を込めようとしていた頃をイメージする。ただ呪力を込めるのではなく、癒しのエネルギーに変換するイメージを携えて。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

しかし、いざと意気を込めてみるも、一向に呪力が反転術式に至る様子はない。試行錯誤を繰り返し、まるでナルトが螺旋丸を習得する際の修行のように、やたらめったら

に手に呪力を込めていた。

「……なるほど、大体わかった。雨宮お前、『お前単体での反転術式が出来ない』な？」  
「……みたいです」

だが悲しいかな。蓮は結局、自力のみでの反転術式の発動には至らなかった。

かつての呪骸を用いた呪力操作訓練では、蓮は反転術式での操作訓練も独自で行っていた。ツカモトに呪力を込めると、それをツカモトは余す所なく吸い取っていく。

それこそ、ツカモトに殴られていない事で、呪力やら反転術式を放出出来ている証明であると思わせるほどに。

つまり蓮は、己自身も反転術式が出来ると思っていたのだ。己の半身であるペルソナに出来て、己が出来ない事はないという考えの下であったが、どうやら現実はそう甘くないらしい。

「これはあくまで私の推察だが、お前が反転術式で治癒出来るのは、ペルソナが治癒のための呪力をお前から貰い、介することによって反転術式へと変換するから。」

つまり、ペルソナの技量とお前の技量は比例しないんだろう」

そも、蓮の《認知操作》には明確なデメリットが存在する。それは、術式発動時のバ力にならない消費呪力量だ。

蓮の《認知操作》は、自己あるいは対象の認知を利用し、その認知を増幅させる術式

だ。この術式さえあれば、己の考え方一つで世界が変わる……と、聞こえは良いだろう。だが事はそう上手くはいかない。雨宮蓮がジョーカーとして戦うには、『蓮の頭の中のジョーカーを現実に投影する』という過程が必要だ。

その過程により結果を実現しているのが蓮の術式であるのだが、無から有を創るのは、古来より莫大な労力を要するものである。

数多の術式の内、蓮の《認知操作》に類似する術式に、《構築術式》と呼ばれるものが存在する。

無から有を生み出し、それを永遠に存在させる能力。脳内の骨子を己の呪力で構成、現実にて完成させ永続させるといふもの……それが《構築術式》だ。

だがジョーカーのそれは任意で解除が出来るが故に、《構築術式》ほどの呪力消費は起こらないが、それにほぼ匹敵するほどの呪力をジョーカー時の蓮は消費している。

その上で、回復スキルを使う時は《認知操作》を『反転術式を使う』ことに使用していたのを考慮してみたい。

つまり逆説的に、これまでの蓮は、ペルソナを召喚しながら回復スキルのための《反転術式》を練るために《認知操作》の術式を使う……という、無駄に普段以上の呪力を消費していたのだ。

呪力消費の要素を加味すると、現時点で蓮がジョーカーでいられるのは、非戦闘状態

であれば一日につき凡そ二時間。ペルソナを使った場合、最悪三〇分間を下回る。

加えてスキル使用の許容範囲は、《反転術式》に《認知操作》を使っている現状では、ジャックランタンの《アギ》炎属性単体弱攻撃25回、ピクシーの《ディア》単体小程度回復10回分だ。

味方全体の状態異常を治しつつ体力を全回復させる《メシアライザー》は、現時点では蓮は使えない。それどころか下位互換である《ディアラハン》単体全回復すらも使用できない。《ディアラマ》も、せいぜいが二、三回が限度だ。

だのに、あろうことか蓮は今《ディア》を使えるペルソナを連れていない。

ではなぜ《ディア》のスキルを持つているペルソナを用意していないのかというと、単純に御マネーが足りないからだ。

蓮の財布事情、諸行無常である。

縛り③の一分間のインターバルは、術式効果を高めるためというのもあるが、ジョーカーがガス欠を起こさないよう調整するためでもあったのだ。

蓮の膨大な呪力容量があるからこそ何とか成り立っているし、これからのジョーカーの成長を鑑みれば、おそらく戦闘可能時間は長くなっていくだろうが……この程度ではまだジョーカーは満足に至らない。

「歪な子だ。反転術式での治癒をペルソナにずつと任せきりになっていたんだらう。吾郎は治癒の際にペルソナを頼らなかつた……このままでは術式反転は到底出来ない吾郎のマネ

だろうな)

ともかく、どうやらお前は『反転術式Ⅱ治癒の力』と認知している節があるな。まずはその固定観念を捨ててみる」

「分かりました。……で、反転術式は具体的にどうやったら発動するんです？ コツは？」

「んなもん、ひゅーつとやってひよいつ、だろ」

「ひゅー？ ひよいつ？」

蓮の疑問に対し、返ってきたのは擬音語による説明。

感覚派でもあり理論派でもある蓮は、硝子の説明に戸惑いを隠せず。しかし言われたままにやってみる。

「……ひゅーつ、とやって、ひよいつ。ひゅーつとやってひよいつ……。」

……チンカラホイ」

「いやーん、雨宮さんのえつちー……って言つときや良いか？」

下らないギャグは置いといて。

「……出来ないんですけど」

「まあ時間の問題だろ。お前の言い分じゃ、ペルソナを介してなら反転術式は使用できてるんだ。ペルソナで治癒するときの感覚を思い出してみろ」



「うーん……難しいな」

「なら、実験台を用意するか」

「実験台……?」

そう言いながら、筆立てであったカッターナイフを手に取り、刃を出して――

「いって」

「なっ――バカっ、何考えてるんだ!!」

――己の利き手でない親指の腹を、何の躊躇いもなく、切った。

切り傷はそこまで浅くない。だが、血が蓮の予想以上に溢れ出ている。やがてそれは机へと広がり、血溜まりを作っていく。

「ほら、どーするよ」

「――っ、ペルソナ!」

硝子に言われるまで思考が止まっていた蓮は、一瞬にてジョーカーへと変貌を遂げ、マーメイドを呼び起こす。スキル選択の思考の余地など必要ない、早速《ディアラマ》を――

「待て、ただ闇雲に治癒するなよ。『どうやって』治癒するかを意識してみろ……」

――掛けんというところで、硝子はジョーカーに一つ念を押しした。

簡単に言ってくれると、焦りを孕みながらスキルを発動する。感覚を研ぎ澄ませ、ペ

ルソナが『どうやって』呪力を変換していくのかを、体で覚える――。

マーメイドの吹きかける優しい翠色の息が、親指に満遍なく行き渡って行き。やがて、傷は完全に、痕も残さずに消え去った。

「……はあっ」

「へえ」

溜息を吐きながら蓮へと戻ると、硝子は治癒の一部始終を見て感心していた。気苦労もあり、蓮は皮肉で返してみる。

「中々良い腕じゃないか」

「……あなたも、良い度胸をしている」

「褒めても血くらいしか出ないぞ?」

「止めてください、本当に」

蓮は血が嫌いだ。

魚を捌く時。肉を切る時。戦い傷つく時。自分の中でも、誰の中でも。溢れ出る血液が嫌いだ。嫌いだ。

いつだって、沢山の血が溢れていた。

血は、最期まで身近に溢れていた。

血を見るのは、今も嫌いだ。

「コツは掴めたか？」

「……とにかく、やってみます」

先に治癒した時に、丹田から溢れていた呪力の奔流が『裏返った』と感じた。用は、反転術式に『裏返せ』ば良いのだ。

問題は、どうやって『裏返す』か。それは先の治療で感覚を掴んだ。

呪力とはマイナスのエネルギー。マイナスとマイナスを掛け合せば、数学上はプラスへと変貌する。『足す』のではなく、『乗算』……というよりは、『融合』。

右手首を左手で押さえ、擬似的な血管をイメージ、接続する。二方向から流れてくる血液が、右の手のひらで展開される——！

(ひゅーっの濁流を、ひゅいに！)

「ふうん……」

赤い呪力とも、緑色の治癒スキルとも違う、純白の正のエネルギーが、蓮の掌を覆う。まるで暖かいゼラチンの中に手をつ突っ込んだような、むず痒い感覚が蓮を襲う。

だが、段々と反転術式を維持するのが難しくなってきた。脂汗が蓮の目に染み、蓮は目を擧める。

「そこまで。……うん、中々良い腕だ。五条よりもセンスあるぞ、雨宮」

「っは、はあっ……それはどうも」

「ただし、時間がかかりすぎ。そんでその程度の反転術式に呪力を無駄遣いしすぎ。この調子だと、ペルソナも反転術式に使う呪力を無駄に食ってるんじゃないか？　こんなんじゃない、まだ五条には及ばないぞ」

「……分かってます」

「うん、その意気だ」

そう言いつつ硝子が腕時計を見やると、時刻は午後の四時を回ったところ。終業の頃合いだ。

「何にせよ、良い時間で区切りも良い。今日はここまでだな」

「やり方はともあれ、良い経験になりました。またよろしくお願いします」

「ん、頑張れよ。私としても、五条のニヤケ面が歪むのを見てみたいからな」

それを聞くのは蓮にとって二人目だ。五条先生は恨みを売りつけるのが趣味なのだろうか、と蓮は思った。

まあ、あの腹の立つ笑みを崩してやりたいと思うのは、蓮とて同じこと。硝子からの激励を、蓮は快く受け取った。

硝子からの微かな信頼を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『運命』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

医務室の戸を開き、自室へと戻ろうとしたその時、蓮は硝子に呼び止められた。

「ああそれと、雨宮。一つ聞いておきたいことがある」

「はい？」

「『アキラ』という名前に聞き覚えはあるか？」

——それを聞いて、蓮は息が止まる思いをした。

聞き覚えなど、あるに決まっている。

なぜならば、その『アキラ』とは、雨宮蓮がまだ雨宮蓮でなかつた頃の名前だつたからだ。

「……いえ、知りません。」

その『アキラ』が、何か？」

と、蓮は前髪をいじりながら答える。硝子のことを信用していないわけではないが、親しくもない相手に対し己の秘密を話せるほど、蓮は無用心ではない。心の怪盗時代からの癖だった。

「……いや、知らないなら良いんだ。すまん、時間を取らせたな。」

ああ、そう言えば、五条がお前を探していたぞ。何か渡したいものがあるとか」

「どうも」

そう言つて、蓮は戸を締め切つた。

「何だよ……」

蓮の心配がなくなったのを見計らい、硝子は一つ、ため息を吐いた。

煙草は吸わない。吸う理由も無い。そもそも今は禁煙中だ。

けれど、ただ、無性に。

あまりにも明智吾郎と似過ぎる彼に。

酷く、酷く、腹が立つたのだ。

「……嘘つき」

26.

〈昼↓放課後〉

「はい蓮、これどーぞー！」

自室へと戻る最中、雨宮蓮は五条悟とエンカウントした。いつものゴムの目隠しを見て、蒸れないのだろうかと蓮は思った。

どうせ面倒臭いことになるので無視しようと蓮は思ったが、硝子の言伝を思い出して、やむなく事情を聞くことにした。

悟から差し出されたのは――

「制服と……学生証？」

「君の制服、宿儺との戦いでボロボロになっちゃったんだよね。だからこの際、デザインを一新しようと思ってるね。まあ制服の色がより濃い黒色になっただけなんだけど」

「ありがとう。だが、何が『この際』なんだ？」

「まあまあ聞きなよ。」

――実は！ 君が新たに特級術師に任命されましたら！！ いえいつ、パチパチと  
くく！！ やつたり、わくわく！！

悟がコミカルな絵柄になって拍手する。若干頭身が縮んだような気がするが、さておき蓮はと言うと。

「そうか」

温度差でインフルになるレベルで心底どうでもよさそうにしていた。

「えつリアクション薄っ。凄いことなんだよ?」

「称号なんて、後から与えられる評価に過ぎない。そんなハリボテに価値は無い。だからこそ興味も湧かない。」

ちなみに、どれくらい凄いんだ?」

「山で例えると、二級術師が飛驒山脈で、一級術師がロッキー山脈だとすると、特級はヒマラヤ山脈くらいかな。」

んで、君は序列で言うところ……えーと、世界でろく——」

「チヨ・オユーだな」

「今人外レベルの頭の回転見たんだけど」

「と言うことは、特級術師はオレ含め六人いるのか。誰がいるんだ?」

「ああいや、六人『いた』んだよ」

悟のその物言いに、蓮はしまったと思った。

「……殉職されているのか」

「うん。まあ多分君は興味無いだろうからその辺の説明は省くけど、『今も生存している現代の特級』は四人だよ。」

東京校二年の先輩《乙骨憂太》、今もどこかをほっぴり歩いてるであろう《九十九由基》、後は僕と君ね」



「どちらも聞いたことの無い人物だ。まあ蓮はこの界限を知つてまだ二週間のため、知らないのも無理は無いのだが。」

「学生で特級なのか」

「ちなみに僕もだったよ!」

「で、その乙骨先輩はどこに? サボタージュか?」

「いやいや、海外に出張中だよ。ちよつと野暮用でさ」

「ふうん」

「まあ何にせよ、君はこれで、君一人……あるいは仲間を率いて任務にあたる事が出来るようになった。ご指名の依頼も来るだろうけど、生徒の任務の斡旋は伊地知にやらせてるがやつてるよ。明日顔を見せに行つたら?」

「分かった。……しかし疑問が残るな」

「どしたの?」

「なぜ今、こうしてオレに白羽の矢が立ったのかだ。あまりにも急過ぎるし、突拍子もな  
い」

そう言う蓮に、悟の見えない眉がピクリと動いた。

「鋭いね。答えは簡単、『君に首輪を付けるため』さ。」

君のポテンシャルとペルソナは、僕から見てもあまりにも高い。それこそ、頭の硬い

ジジイどもがその重い腰を上げる程にね。だから特級という椅子を用意し、そこに居座らせようとしている。その程度で満足させようとしている」

「……嘗め腐っているな」

「だね。——だからこそ、僕ら大人がいる」

蓮は頭に手を置かれ、その後、無造作に撫でられる。

「安心しなよ。僕ら真つ当な大人は、君達の青春を奪いはしない。そして奪わせもしない。」

その仕草が、その物言いが……蓮のかつての義父を思い出させた。

「君に会わせたい人がいる。夜、一人で職員室に来なさい。君の制服は、そのために僕が新たに発注したんだからネ！」

会わせたい人、という言葉にもやつとしたが、それはこの夜に分かることと思ひ、スルーすることにした。

悠仁のことか、と思つたが、それは無いと蓮は判断した。

もとより虎杖悠仁は死んでいる。蓮が呪術師である理由も無くなつてしまった。悠仁とは十年もの長い付き合いの親友だった。遺体を直視してはいないが、したらしたで、心が折れそうだったのだ。だから、悠仁の遺体を見れずにいた。

「分かつた」

だが、その会わせたい人が本当に虎杖悠仁だったのだとしたら。蓮の構想にあった『虎杖悠仁救出計画』が、大きく破綻してしまうことになる。

27.

〈放課後↓夜〉

誰もいない高専の廊下を、ひたり、ひたり、という集中していなければ聞こえないような小さな音を立てて歩く者がいる。全身が真っ黒けなその者は、目を凝らさねばその輪郭すら拝めない。

不審者か、泥棒か。果たしてその正体とは、新たに漆黑に染まった高専の制服を着る、雨宮蓮であった。

やがて辿り着いた職員室の戸を三回ノックする。

「おっ、来たね〜」

職員室の中には、机の上にその長い足を乗せる、マナーのマの字も無い五条悟がいた。夜だというのに、どうやらコンビニのスイーツを食べていたらしい。口元には、ケーキのスポンジのカケラがくっついていた。

「会わせたい人って?」

「まあまあ、着いてきなよ」



『宿讎に勝つ』……それは、三日前の少年院で、限りなく不可能に近いと悟った。現状のジョーカーでは、まだ両面宿讎には敵わない。足元に髪の毛のみが及ぶ程度。

それでは悠仁は救えない。虎杖悠仁を救うには至らない。

蓮の救出計画は、まだ不完全。

遣る瀬無い。不甲斐ない。何もかもが、ジョーカーとしてまだ足りない。

けれど……それでも。

今はただ、悠仁が生きることが嬉しかった。

「でも、俺ッ……」

「……オレはお前を守れなかった。お前はオレを殺しかけた。お互い様なんだ、悠仁。

それに、オレ達はまだ生きてるよ」

悠仁とて、苦悩していなかった訳ではない。

このまま蓮が目覚めなければ……その先の未来を考える事すら嫌だった。

だから、もう充分に。

蓮と再び会えたこの奇跡に。

悠仁はもう、救われているのだ。

「うんッ…………」

虎杖悠仁、雨宮蓮、再会。

28.

「どう？　びつくりした？」

「……正直、まだ信じられない。だが、本当に良かった」

やるべき課題は山積み。見つめるべき先は程遠く。超えるべき壁は厚く高い。

だがそれでも、進むべき光は確かにある。そう思えた。

「……僕としても、良かったよ」

「？」

「六人の特級術師内に亡くなった者は二人って言ったよね。」

その二人、僕の親友なんだ」

「……!!」

「ああ、気落ちさせるつもりは無いよ。僕の中では、もう気持ちの整理はついてる。」

……でも、いや、だからこそかな。僕らが出来なかつた事、君らには沢山してもらいたくてさ。

青春しなよ、青少年！」

「とか言つて、自分も楽しみたいんだろ？」

「あつたりイ〜！」

サムズアツプする悟に、蓮は若干の苛立ちを感じた。

だが、同時にある思いを蓮に抱かせた。

(オレも、腹を括るべきか)

それがいつになるかは分からない。だが――

偽りの体を以つて、隠し続けるこの本心を。己が己たる、その所以を。己が仲間、吐露したいと思うのだ。

己の前世……ジ・オリジンを。

怪盗とは、全てを騙し闇に生きる者なれど。

友を騙したままでいられるほど、蓮は生粋の怪盗ではいられなかったのだ。それは、あまりにも申し訳が立たないから。

鉄面皮の決意は、今一度胸に刻まれた。

今度こそ、悠仁は絶対に死なせない……と。

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n

L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .

# 1 5   A m a n   w h o   n e v e r   c r i e s

## # 16

29.

——虎杖悠仁救出計画は、前提として『虎杖悠仁の中の両面宿儺』を、『虎杖悠仁ごとく殺す』必要があった。

だが、悠仁が今何事も無く生きていることで、計画は破綻してしまった。

虎杖悠仁に受肉した両面宿儺は、悠仁もろとも『死んでも蘇る』。それが今回きりのことなのか、あるいは幾度でも可能なのか。

……いや、おそらく蓮の勘が正しければ、死後も呪力が蘇生に必要な分残存しているのであれば、それが可能だろう。

悠仁は宿儺を受肉したことで、他の生命とは一線を画す存在と成った。呪霊とほぼ同じ体になったと言っている。頭を潰すか、呪力を空にさせてかつ呪力で殺すかでしょうか、おそらく両面宿儺は完全に殺せないのだろう。

だが後者はともかく前者の殺し方では、蓮ですらどうしようも無い。

核のような何かで滅却？ あるいは、封印でもするか？

否、それでは悠仁が救えない。宿儺奴隷からの開放が、雨宮蓮の今生の目標だ。それだけ



は出来ない。

宿儺を完全に殺す方法が何か無いものだろうか。

奴を殺した後の『その先』だけは、最初から判っているのに。

そのただけに、今ある命を燃やすと誓ったのに……。

なぜキミは戦うのだ

私はキミが恐ろしい

なぜ私は恐れるのだ

私もキミのように戦いたい

30.

〈2018年7月9日〉

〈放課後〉

本日は曇空也。

はじめじめと蒸し暑い夏の高専。立て付けの悪い窓が風に当てられる音をBGMに、雨宮蓮はある場所へと向かっていた。

教室の棟とは真反対の西方向にある、高専の職員室の隣にある事務室。そこで一人座り、パソコンへ文字を打ち込む一人の男性がいた。メガネの奥でパソコンと睨めっこをする、背広を着る痩せこけた彼の名を、蓮は窓口から呼んだ。

「伊地知さん」

「? ああ、雨宮くん。どうしました?」

伊地知潔高。呪術高専生の補助監督であり、五条悟に最も近い奴隸（比喩に非ず）その人である。

潔高は蓮を見るや否や、扉を開けて、窓口へと向かい蓮と対面する。

「オレの任務の幹旋をされてると聞いて」

「はい、しておりますよ。えー、と言っても、まだまだ数は少ないですが」

「意外だ。来てるんですね」

「今のあなたでは荷が重い案件もね……」

苦虫を噛み潰したような顔で、更に老けたような様相の彼は言う。

「どんな任務なんですか?」

「……平将門公、その特級仮想怨霊の祓除です」

——それを聞いて、蓮は驚愕した。

そして次に納得。最後に、武者震いを起こした。

平将門。武士でありながら桓武天皇の子孫であり、日本三大怨霊の一柱でもある人物だ。

平安の代、朝廷の要職を藤原氏が独占しやりたい放題であり、国司からの重税に民衆は苦しめられていた。そんな民衆を見て将門は憤慨し、朝敵となる。

朝廷の悪政に苦しめられていた民衆を味方に付け、関東八ヶ国（上総、下総、安房、上野、下野、武蔵、相模、常陸）を占領。快進撃を決める将門であったが、しかし平貞盛と俵藤太との戦いで討死し、晒し首となる。この一連の騒乱を平将門の乱と呼び、藤原純友の蜂起とを以って承平天慶の乱と呼ぶ。

その偉業と生き様故に、古来より多くの伝説として、その威厳は遺された。その逸話の一つであり、彼を怨霊たらしめるのが、将門塚のエピソードだ。

だが、晒し首となった将門の首は、何ヶ月経っても腐らず、目は見開いており、夜な『俺の体はどこだ、もう一戦するぞ』と叫んでいたという。

そして（諸説あるが）将門の首は故郷の東の国へと飛び、そして墜落したとされるのが、現在の東京の千代田区にある将門塚なのである。

「二級以上の術師全員に祓除任務が課せられているのですが、実害が出ていないため優先度は低く……つまり、急を要する任務というわけではありません。」

日本三大怨霊とはいえど、最近では東京の守護神というオカルト文化の影響が現れてお

りまして。領域に立ち入らない、あるいは領域に立ち入ってもお参りしてすぐに帰る等すれば、危険もないとのこと。

ですが、この任務に赴いた一級術師が三名、帰らぬ人となっております。充分な実力が付くまでは、この任務は受けられない方が良いでしょう」

「なるほど」

そう言いつつも、蓮は別のことを考えていた。

(……もしかしたら、アレが出来るかもしれないな……)

数秒の逡巡の後、蓮は一つの決断をする。

「その任務、今すぐじゃないけど受けます」

「はい、分かりました……って受ける!?!」

「今すぐじゃないです」

「いやつ、でも、あの平将門公ですよ!?! 日本三大怨霊ですよ!?!」

「だからこそ意味があるんじゃないですか」

「ダメダメダメ! 自殺行為です!」

「だから今すぐじゃないですって」

「ほら、これとか! この準二級案件! これならまだ達成可能かと!」

そう言われながら、慌てて渡されたタブレット端末を、危なげなく蓮はキャッチした。

「呪物回収……愛知県の中学校ですか」

「回収するだけなので実質三級案件ですが、任務発生から少し時間が経っており……、呪  
霊発生危険性が……」

「何で遅れたんですか？」

「五条さん曰く『下っ端の仕事』らしく、高専関係者以外は誰も受けないですよ……そ  
れも学生を中心に与えられる任務ですので尚更。その上、近場である京都校の面々は癖  
揃いで……」

「要するに面子が立たない、ということですね」

はい……としおらしく言う潔高。前世でも、このように気弱な大人は見たことがない  
な、と蓮は思った。

TUTORIAL!!

蓮が特級呪術師になった事により、蓮の実力云々に関わらず任務を受けることができ  
るようになりました。放課後のターンを利用し、東日本（北海道、東北、関東、中部地  
方）のどれか一地方に限り、一日最大三件の任務に赴くことができます。

任務には、蓮とコープを築いた高専生と同伴することができます。その際、報酬が減

ることはありません。ただし、虎杖は9月の姉妹校交流会が終わるまで、高専生と同伴はできません。

任務の難易度は、準二級から、二級、準一級、一級、特級の順に高くなっていきます。レベルに応じた任務を受けましょう。

任務を遂行すると、報酬でお金が貰えます。任務によっては、呪具やアイテムが手に入ることもあります。また、任務を遂行すると蓮の知名度が上がり、更なる難しい任務が追加されるでしょう。

ただし、任務後の夜のターンは疲労により、一切の外出やコープ活動が出来なくなります。注意して、計画的に任務を遂行しましょう。

「分かりました。この依頼、受けます」

「ああつ、でも雨宮くん、病み上がりでしたよね？」

「問題ありません。行けます」

そう言つてタブレットを返し、準備のため、寮の自室へと向かおうとする。

「雨宮くん」

だが、潔高に呼び止められた。

まだ何かあるのか、と思い振り向く。俯いた姿勢から、やがて潔高は口を開いた。

潔高には、雨宮蓮という少年がとても眩しかった。

潔高は呪術高専出身であれど、その身分は呪術管理官に落ち着いている。潔高には呪霊を祓える微量の力はあれど、いざ祓除しようとする足が竦んで動けなくなってしまうのだ。

人は助けたい。その責務を年端も行かぬ子供に負わせたくなどない。なのに、自分の力ではどうにもならない。分不相応な望みということは分かっている。

だから、自分よりも力を持つ雨宮蓮を、潔高はとても羨んだ。そしてそんな力を以つてしても勝てない両面宿儺をととても恐れ……友を亡くしかけた蓮を悼んだのだ。

「はこ」

「キミは……頑張り者ですね。」

ですが時々、キミが危うく見えます。生き急いでいると言いますか。

キミが何を思い、何を感じ、何のために戦うのか……それは聞きません。ですが——  
キミの周りには、頼るべき仲間や、大人がいます。それを努努、お忘れなく——

雨宮蓮は、恵まれている。ここ最近、ずっとそう感じる。

悠仁と出会い、恵と邂逅し、悟を師事し、野薔薇と高め合う。ラヴェンツアの支援を受け、硝子から学び、葵から絡まれ、そして潔高から応援される。

それだけでも、既に蓮は――

「そう簡単には死ねないんでね。もちろん頼らせてもらいますよ、伊地知さん」

「――ええ、存分に頼ってください」

――蓮はもう、幸せなのだ。

潔高のまごころを感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『顧問官』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

去つていく蓮を見送り、潔高は一つ伸びをした。

事務作業はまだ終わる所を知らない。だが、何となく、いつもより頑張れそうな気がする。自己満足の表れか、と一瞬自分を卑下したが、それでも、大人である己が言うべ



き事は言ったと、無理矢理に納得する。

伸びをする背骨から、歳を感じさせる嫌なクラック音が鳴った。

さて、一方蓮はと言うと。

「待ちなさいよ、蓮」

恵と野薔薇とに引き留められていた。

事務室の隣は、呪術資料室や理科実験室、家庭科準備室など、移動教室用の部屋が羅列している。その教室の一つの前で、二人は立っていた。

「任務行くんだろ。俺らも連れてけ」

「良いのか？」

「……何で悪いと思ったんだよ」

だって呪物回収の任務だから一人で十分だし、と言おうとした矢先……

「積もる話もあるしね」

……そう野薔薇が言って、断るに断れなくなってしまうた。

まあいいや、と思いい、蓮は構わないと言って、自室へと戻って行った。

31.

「蓮……すまなかった」

あな美しき紫幹翠葉、残映となり逢魔を知りぬ。

新幹線の座席で、向き合う三人。謝罪を切り出したのは、伏黒恵であった。

「悠仁のこと、守ってやれなかった」

そう言つて、声を震わせながら恵は頭を下げる。

「ごめん」

俯きながら謝罪の言葉を紡ぐのは、釘崎野薔薇であった。

「私、何も出来なかった」

唇を噛み締めて、野薔薇は双眸から溢れそうになる後悔を言葉で堪える。

悠仁の最も信を置く者、そして悠仁を最も信に置く者である雨宮蓮こそが、悠仁の喪失を一番悔しく感じていると、二人は思ったのだ。蓮は悠仁の幼馴染。付き合ってきた年月が二人とは全く違う。友を悼む気持ちは、誰よりも強いはずだと。

己の弱さが招いた、敗北と喪失。

謝つた所で悠仁は還つてこない。

拒絶されても構わない、罵ってくれても構わない。

だからどうか、赦さないでほしい……と。

「悠仁はまだ生きてる」

けれど、蓮はその謝罪を受け取る。そして赦すのだ。

「ここが、それを知っている」

蓮の拳が指し示すのは、己の心。

悠仁は（本当の意味でも）まだ死んでいない。仮に死んでいたとて、蓮は同じ事を言うだろう。

人は二度死ぬ。一度目は、その生命を全うして。二度目は、誰からも忘れ去られて。心の中に刻んだ悠仁の笑顔が消えない限り――

「――オレ達が潰えない限り、悠仁は永遠に死ぬ事はない」

二人の目と心とを真つ直ぐに射抜き、蓮は静かに諭す。

恵と野薔薇には、それが何よりも痛かった。

「……慰めのつもりか」

「なら一つ問う」

腕と脚を組み直し、正面から二人を向き合う。

「諦めるのか？」

何に対して、とは問わずとも、二人は分かっていた。

「……嫌だ」

釘崎野薔薇は一度挫折を味わった。

己の弱さは己が一番よくわかっている。だがそんなことより、蓮に申し訳が立たな

い。

友を眼前で喪わせたのだ。悔しきや苦しきなんか、野薔薇には計り知れない。

……蓮は、私の醜態をどう思っただろうか。

失望しただろうか。軽蔑するだろうか。それともほくそ笑むだろうか。

……否、蓮はそんな事はしない。たつた二週間の付き合いだ、それだけは分かる。

虎杖悠仁は死んだ。もういない。そして釘崎野薔薇は、その屍を超えなければならぬ。その屍を脳裏に、ずっと留めていくのだから。

重い。あの日から、鎚も釘もうまく握れない。だが、そんな弱音なんか死んでも吐きたくなんかない。

だから。

だからこそ、私は……！

「諦めたくない！」

目元に溜まった水を拭う。

釘のように真つ直ぐに、そして鋼のように美しく。

薔薇のように強かに、そして棘のようにより強く。

もう折れないと、誓うのだ。

「……俺も」

伏黒恵は、一度運命から見逃された。

敗北し、死んでいた方がマシだった。口にすることは出来ないが、本気で恵はそう思った。悠仁の代わりに、自分が死んでいれば良かった、と。

挙句の果てに、その敵から欠点をアドバイスされたなんて、恥以外の何物でもない。蓮に謝ったところで悠仁は戻らない。なら、せめて悠仁が遺した最後の希望だけは守りたい。

そんな事を言える資格なんか、どこにもないのは分かつてる。

けれど……

「もつと強くなりたい……!」

それを言い訳にして、惰性のまま生きていたくなかない……!

「……それでいい」

二人と向き合い、蓮は満足気に言う。

「オレだって、結局宿儺に敵わなかった。三日寝込んでいたらしいし、オレの容体は、宿儺に治されなければもつと酷かった。最悪死んでいただろう」

手を握り、新たに蓮は誓う。

「だからこそ——もし次があるのなら、オレは今度こそ、アイツを倒したい」

雨宮蓮は、苦渋を味わった。

何のために生まれたのか、何のために生きるのか。その意味すら失いかけた。友を喪うことの辛さは、蓮は身に染みている。

「……強いな、お前」

「……その強さは、オレ一人のものじゃない。

まだオレには、守るべき仲間がいて、祓うべき敵がいて、帰るべき場所がある。

——だからまだ、オレは戦えるんだ」

だから、もう喪わない。

もう誰からも、オレの宝物を奪われてなるものか。

オレの道の邪魔をする者は、一人残らず蹴散らすまでだ。

断崖絶壁の麓すら見ぬ愚者の旅。その幕を下ろすにはまだ早い。

「それに、ヤツには借りがある。オレは借りは必ず倍以上にして返す主義でね」

「何だそりゃ」

「初めて聞いたわ」

「初めて言ったしな」

そう言うのと三人は吹き出し、笑い合った。

友の死を乗り越えて、少年少女は前へと向かう。

挫折は終わっていた。だが苦悩だけはどうしても消えなかった。

これからも、ずっと苦しんで行くのだろう。

——だが、もう迷いは無い。

我々は、我々の進むべき道を、悠仁の思いと共に歩んでいくのだ。  
瞼の裏に彼の笑顔がある限り、我々はどこまでも足掻いていける。  
そして再び出会えた時、いっぱい思い出を語ってやろう……。

二人からの信頼を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、広がりゆく絆に気付きたり。

其の絆は光となりて、

更なる真を掴みたり。

今こそ汝、『愚者』とともに歩む者らに、

遥かなる星を見ゆるべし……。

『間もなく、名古屋、名古屋でございます』

「……もう着くわ」

「ああ」

新幹線のアナウンスが流れ、野薔薇が反応した。

「シゴトの時間だ」

32.

〈2018年7月9日〉

〈放課後↓夜〉

時刻は午後八時を過ぎ。夜が更け始める頃合いだ。念には念をと、管理官が帳を下ろしてくれたお陰で、任務遂行に支障は無い。

名古屋のとある中学校。その運動場入口に並ぶはジョーカーへと変身した雨宮蓮、伏黒恵、釘崎野薔薇である。道中、現地の管理官による案内を経て、三人は体育館横校門前にたどり着いた。アスファルトと砂の境を歩み侵入する。

地図上から見て体育館は西。だが目的地は中学校南東の運動場倉庫。そこにある呪物回収が本日の任務だ。呪霊を祓う祓除任務ではない。

……はずなのだが。

「絶対いるよな、呪い」

「いるわね」



「いるな」

呪いの気配を、それはもうバリバリに感じるのである。何かオーラが漂っているのがある。報酬金と内容が見合っていないのである。グラウンドに出てみると、やはりというか何というか。

「運が良いのか悪リイのか……」

「まあ、鍛錬にはなるだろう」

「にしたって、京都の奴らの尻拭いをする羽目になるなんてね」

「はあ、面倒くせえ……」

と、駄弁っていると、三人は違和感に気付く。

「おいでなすったわね……つてえー」

間違いない。この違和感は、呪霊の気配によるもの。ジョーカーはナイフを携え、恵は臨戦体制を取り、野薔薇は金槌と釘を握り、敵を見遣る――が。

「いやデカすぎんだろ……?!」

そう、異様にデカいのだ。蓮がペルソナに覚醒した時のイグアナよりも、はるかにデカい。後者よりも一回り大きい体格だ。

三階建ての校舎から少し頭がはみ出るくらい。おそらく三メートル……いや、四メートルは超えようか。校舎の裏から、ぬうつとその巨体が現れる。それは端的に、巨大な

ミルワームのようであった。ただし、全体的に毛むくじやらで、その中腹からは二本の白磁肌の手が伸びている。よく見ると、その手は大量の小さな手で形成されていることが分かった。

いや、そもそもアレは髪の毛で出来たように見える大量の呪霊の塊。アレはただの呪霊ではない。複数……それも大量の呪霊が『融合して』出来た集合体だ。恐怖症の人が見れば、吐き出してしまいかもしれない。實力にして、およそ二級は下らないだろう。

「呪物回収任務って何だよ……」

「ああ。それってハネクリボー？」

「何言ってるんだお前」

「これもう祓除任務で良いわよね？ 《窓》 仕事しろや！」

「後できつちりシゴト分の給料は貰わないとな」

「お前今日情緒どうした」

「あー、アンタたしか金欠だったわね」

「おかげでペルソナを調整出来なくて困り果てる」

「お前だけ金でペルソナが買えるのズルいよな。俺だつて式神買ってえよ」

「飼いたいの間違いだろ」

「ぶふっ」

野薔薇が吹き出し、恵が呆れ、ジョーカーは不敵に嗤う。いつもの戦闘前の緩やかな雰囲気があるところであった。

だがここは仕事場。すぐに切り替えた三人は、己の倍以上もある巨体を見遣った。

三人に気付いた彼奴は、その無駄に長い腕を伸ばし、校舎をよじ登って移動してくる。あまりの質量により、握られた部分のコンクリートとガラスが罅割れ崩れる。

「散開しろー！」

ただ、それをぼーっと見ている者はここにはいない。ジョーカーらは三方向に走り出し、各々の得意へと持ち込もうとしている。まず先陣を切ったのは、ジョーカーによるペルソナ攻撃だった。

「オンコットー！」

仮面が蒼き炎を発して、猿将軍《オンコット》を象った。ジョーカーが選択したスキルは――

「――《テトラカーン》！」

そう唱えると、ジョーカーは緑色の硝子球体に包まれる。呪霊が狙うのはもちろん、無防備なジョーカー。芋虫の振り掲げる拳は、まさに隕星のごとく、大質量を伴って振り落とされる――！

「ジョーカー、避けるー!!」

「問題ない」

「うしきざんもいじちんやわだえるよい!!」

空気さえも圧縮してしまいそうな拳が、オンコット諸共ジョーカーを押し潰して——  
甲高い反射音が響いた。

「いたこたすろいけすてぞ!!!」

《テトラカーン》。オンコットの技量が上がった際、習得したスキル。その効果は、味方一体に物理反射効果を一度だけ付与するというもの。——そう、隕星のごとき衝撃は全て呪霊へと帰り、ダメージを与えたのだ。

その結果、衝撃によりばらばらと腕部分が崩壊する。穢らわしい白磁の肌の姿をした呪霊の群れは、その余波で祓われてしまった。

「チートかよ……!!!」

「野薔薇!」

「おう、任せんしやいっ!」

翻り、野薔薇へと駆けたジョーカーが、野薔薇へと行動権を移した。バトンタッチによる力の受け渡しと増幅は、ジョーカーの認知操作がそれを促していた。

さて、何故か湧いてくる力に疑問を抱きつつ、野薔薇は二本の釘と鎚を握りしめた。呪力をふんだんに込めた《芻霊呪法》ならば、速度はともかく、威力だけなら銃弾にも

勝る——

「うげつ」

——が。そこは呪霊の猿知恵と言ったところ。二本の釘が進む先は芋虫の下半身の部分であったが、何と一時的に融合を『解く』ことで、野薔薇の釘が直撃するのを避けたのだ。流石の野薔薇も、この回避方法には少しビビった。

「……それならー！」

そうして用意したのは、六本の新たな釘。甲<sup>カン</sup>、という金属音を連続させて、それらを芋虫の足元へと連刻した。しかし先ほどと同様に、芋虫はそれらを再び体を『解く』ことで回避する。——だが、野薔薇の目的はそこにあつた。

「ごだめでめいきんきそならこさいない!!!」

意味の無い言葉の羅列を叫びながら、芋虫は体勢を崩してしまふ。

簡単な話だった。あれだけの大質量を支える下半身を丸ごと解いてしまえば、支えるものは何もない。加えて、ジョーカーがテトラカーンで祓った腕型の呪霊の喪失は、さらに芋虫の体勢を無様に崩す。

だが、もう彼奴は体裁を気にしていない。倒れ込むようにして、今度は体全体を使った圧縮を試みる——

「決めろ、恵ー！」

「ああ」

——しかし。それよりも早く、恵へと行動権が移った。

《十種影法術》における式神が破壊された時、その式神を二度と顕現させる事は出来ない。だが、破壊された式神の力は、別の対応した式神に受け継がれる。

【玉犬・白】は死んだ。だがその魂は、片割れの【黒】が受け継いでいる——!!

【玉犬・渾こん】!!

『グルルオオオオツツ!!』

二足歩行の狼男。腹は白く、毛並みは黒く、そしてその瞳は紅く鋭く。そして額には、六芒星にも似た紋様が彫り込まれている。【渾】の鋭牙と利爪は、いかなる硬派なる鱗や鎧をも切り裂く。果たしてその爪は、崩れ落ちたその芋虫の顔面を二、四、六、八等分へと分断させる……!!

「困め!」

HOLD UP!

「さて、どう料理してやろうか」

「ンなもん決まってるでしょ」

「……とつとと済ませてえ」

「なら、やるべきは一択だな」

フ、と笑い、指揮を担うジョーカーが命を下す。

「総攻撃タイムだ」

「待アつてました!」

「ブツ潰す」

縦横無尽に皆が皆、思い思いに敵を斬り、殴り、抉っていく——!

Never show your face again…

嘲笑。一人の暗影が闇夜に嗤い、次なる獲物を探し歩む。

彼奴の無様な死に様を、恵は瞥見すらしない。

33.

「アレが雨宮蓮……新たな特級術師にして、明智吾郎の後金か。

まだまだ発展途上だが、だからこそ成長性は計り知れないな。やはりペルソナ使いは、どいつもこいつも面白い」

愛知県名古屋市の、とある中学校。その屋上にて、二人の人外が佇んでいた。一人は頭に継ぎ接ぎのある五条袈裟を着る男、もう一人は闇夜に紛れ輪郭を失いつつある黒尽く

めの男。夏油傑と呼ばれる男と昊？であった。

「さて、観察はどうだったかな、昊？」

今回の二人の目的は既に達せられている。袈裟の男が昊？に問うたのは、そもそも昊？が、夏油にジョーカーを一目見たいと珍しく口にしたからだった。

「……………キラ」

「？」

「——クルス、アキラ……!!」

無いはずの目が血走っているのが分かる。無いはずの歯茎が怒りに剥き出しになっているのを感じる。怒りに打ち震える昊？の、なお抑え足りぬ呪力がその証左だった。

「……………なるほど、やはりそうか……………」

深く、深く笑みを浮かべる。何よりも誰よりも、その存在に喜ぶかのように。

「また会える日を楽しみにしているよ、あきら 暁」

愛おしく、煩わしく、蓮の前世の本名を口にして、二人は闇に消えた。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen

Let us start the game.

#16 Empty Lie



## # 17

力を求めるのを正義と云うのなら

正義を弱者に振り翳すのを善しとするのなら

力を求める事すら赦されない者は

果たして 生まれた時から悪なのか

34.

〈2018年7月17日〉

〈昼〉

先日の任務から一週間が経つ。梅雨の明けた暑い晴空の下、高専のグラウンドに二人一組の男女が、トレーニングウェア姿で屯っている。片方は我らが雨宮蓮、もう片方は頼れる姉御肌の禪院真希であった。

「うーし、来たな」

グラウンドと校舎を繋ぐ石段を降りる蓮を見て、真希はそう語りかけた。砂が運動用のシューズを貫通するほどに熱くなっているのが分かった。

真希の服装は、紫色を基調とした特に何の装飾もない長袖のジャージと、白のショートパンツ。そして太陽に艶かく照らされる黒のレギンス。彼女は右手に木槍を、左手に竹刀を持っていた。

片や蓮はというと、もはや地味さを隠そうともしていない黒色統一の長袖のジャージ。ただ上着だけは脱いで脇に抱えており、その下から現れるやはり黒いシャツ。そこから覗く鎖骨に汗が伝ってシミを作り、なぜか目が離せない。伸びてきた髪から垣間見えるうなじから色気が止まらない。

「お前が雨宮蓮だな」

「そういう貴女は、禪院真希さん」

(……なんか調子狂うな)

そう言つて真希は頭を掻いた。真希はこういうノリをやや苦手としていた。真希は世俗に疎かった。

「まー長つたらしい前座もいらねえな」

そう言うとき真希は、蓮に向かって何かを投擲した。

「うわ」

それは一振りの、子供用の短い竹刀であつた。使い古されてなお手入れの行き届いた、ささくれの見えぬ一尺の竹の刀。ちょうど、蓮の得意とする得物であつた。

蟬の音が五月蠅い。汗が玉となり吹き出てくるのを、蓮は上着を捨てながら手で拭いながら――

「来な。一本取ってみろ」

「では、遠慮なく」

――蓮はジョーカーへと成り、その瞬間が稽古開始の合図となった。

先手を取ったのは真希であった。杖にしていた木槍を瞬時に右腰付近にて水平に構え、石突手前三寸を右手で支える、左前半身構えを取る。

剣道とは違い、槍術の型は右手足を軸とする構え。一尺に満たぬ短刀と、穂先合わせで十尺もある槍とでは、決定的にリーチに差がある。ジョーカーは稽古前から、自身が不利な状況にあることを、理性的に推測していた。

一突。ただの突撃。しかし踏み込みは浅く、ただの小手調べに過ぎない。それはジョーカーは右に躲し、左手を得物に添えてその一突きを受け流す。だがそれだけでは終わらない。

受け流した槍を地へ押さえ、さらにダメ押しに左足で踏み付け自由を殺す。そしてその左足をバネに、ジョーカーは真希の頭上空を跳ねていく。そのあまりの身体性に、真希は目が離せなかった。

(うおっ)

だがこれで、真希には枷がなくなつた。押さえつけられていた槍を、視線上に映る空のジョーカーに向けて横薙ぎに振るう。真希の背中を適当に襲うつもりだつたジョーカーは、頭上が地面となる体勢のまま、薙がれた槍を振り払う。

まるで宙を舞う蜂のように、ジョーカーは真希の頭上から真希を襲う。

(曲芸師かよ！　だが、そんだけ！)

一度真希は身を退き、穂先を地へと突き刺した。棒高跳びの要領で、真希もまた宙を舞う。だがジョーカーのように、まるで無重力空間にいるかのようなフワフワとした動きではなかつた。全体重と全スピードを上乗せした破壊力を伴う木槍を、無防備のジョーカーへと見舞う――！

これは流石のジョーカーも、受ける他に対処が出来なかつた。

「くっ」

「まだまだ！」

なんとか木剣で凌ぐも、ジョーカーは叩き落とされる。それに追い撃ちをかけるように、真希は更なる一手を試みるのに対して、砂上を転がって着地したジョーカーは、真希から視線を外してしまう。

苦渋に顔を顰めつつ、拙い、と思うのも束の間。どうにか四つ這いになって正面を見たジョーカーの後頭部を、何か硬い物がかなりの力で突つつき、ジョーカーは無様に倒

れ込んでしまった。

「くおっ!？」

「ほい、私の勝ち」

その正体は、ジョーカーの真後ろにいた真希の木槍であった。どうやらこの一本は、取り逃してしまったようだ。

これが仮に真剣勝負であれば、ジョーカーは死んでいたという事実が、ジョーカーの唇を悔しさに歪ませた。

「……なるほどな」

「?」

「お前のそれ、自己流だろ。しかも見よう見まねの」

その通りである。

ジョーカーの戦鬪流儀は、テレビドラマの殺陣やアニメを参考としている。ジョーカーが「あつ、これ良いな」と思ったものを、見境なく頭にインプット・シミュレーションしているのだ。痛々しい高校生活を送ったものだと、ジョーカーは自虐的になった。

さて、真希はそんなジョーカーの自虐も露知らず、頭を搔きながら再度ジョーカーへと語る。口の中が少しシャリシャリするのを、女性の前だからと我慢してジョーカーは立った。

「何となくそんな感じはしてたんだよな……」

「自己流だと何か問題が？」

「ありまくりだ。」

剣術、槍術、棍術……あらゆる『武術』には、必ずと言っていいほど何かしらの『型』がある。『型』つてのは、相手が『どこ』を『どうやって』打ちに来るかを想定し、その『解』を体に染み込ませるためのものだ。

基礎の『型』を修練し、自分なりの発展を作ることを『型破り』つつんだ。これは謂わゆる守破離の『破』に当たる。お前のは、行き当たりばつたりの詰め合わせ……これは『形無し』。

『型破り』には更なる発展の追求、つまりあらゆる状況のシミュレーションを無限に作れるが、『形無し』にはそれが出来ない。何たって、ただ闇雲に剣振るっただけなんだからな」

「ふむ……」

「もつとも、フェイントのためにあえて型を無くす奴もたまにはいるが、お前のは、もう一から十までずーっと形無しなんだよ。多分お前、その短剣も雰囲気振ってるだろ」

「まあ、そうだな」

「それで厄介なのは、形無しなのに、お前がある程度『完成』しちゃったことだな。」

雰囲気で得物振ってるお前なら、何百回やつても私が勝つぞ?」

「む……」

真希のその言い草に、ジョーカーはかつちーんと来た。

(けど筋は悪くねえ。……コイツ、マジの『戦いの中で強くなる』パターンのヤツか? すごいな、マジに主人公じゃねーか。)

……コイツを利用すれば、きつと私は夢に早く近付ける)

禪院真希には夢がある。たった一つの、人生を賭けて叶えたい夢が。その夢に近づいためならば、真希は命すら惜しくない。

「ちよつと聞け、蓮」

「?」

「お前、これからきつと伸びるぞ。その短剣だけじゃねえ、刀やら槍やら、あとは私のとつておきも使えたら、えげつねエ実力が付くと思うぜ?」

——取引だ。私はお前に、私の持てる技術を教えてやる。その代わり、お前は私の特訓に協力しろ」

「貴女の目的は?」

「『強くなる』以外に何があんだよ?」

「それもそうか」

ジョーカーとしても、願ったり叶ったりであった。

正直な話、前世でも、仲間の得物を振るってみたいと考えていたのだ。特に刀はサムライソウル、大和男の憧れだ。怪盗服のビジュアルに合おうが合うまいが、馬鹿野郎そんな事より刀だと、ジョーカーは常日頃考えていた。

「真希」

「何だ？」

「ご指導よろしくお願いします」

「……お、おう。何か、改まって言われると、ちよつと小っ恥ずかしいな。」

まあ、よろしくな、蓮」

そう言って差し出した真希の手を、ジョーカーは優しく、しかし固く握り返した。  
真希からの仄かな友情を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たな契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『女教皇』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。



自由へと至る、更なる力と成らん……。

「でも百回やつてもくの下りは頭に來たから、もう一本だ、真希」

「真面目なのか生意気なのかよく分かんねー……けど、ハングリーなヤツは嫌いじゃないぜ」

「あと今のオレはジョーカーだ」

「いちいちめんどくせー、なっ！」

気合十分。しかし技術はまだまだ発展途上。

その後何度も勝負をけしか勝けたが、結局蓮は一本も取れなかった。

この舌は 言葉を発せず

この口は 意味を持たず

この咽喉は ただ一つの

この想いすら 伝えられない

35.

〈2018年7月18日〉

〈放課後〉

本日の空は雲八割也。しかし雨が降る様子は無い。明日には晴れているだろう。曇天の夕が包む高専の砂道を歩き、寮に向かうのは、我らが雨宮蓮である。

本日の午後のカリキュラムは呪術実習。一年生二年生合同の二人一組ツーマンセルでの被除任務だった。

もちろん呪術実習と言っても、高専が幹旋した任務である。任務達成による報酬金ももちろんある。

本来一級術師以上の担任教師と同伴により実施される科目であるが、今回の合同実務演習に至ったのは、恵の存在が大きい。と言うのも、来る姉妹校交流会においての団体戦のために、一年生が授業の合間を練って考えた結果、恵の『一、二年の交流が必要だ』という意見が出たのだ。

恵の提案に、悟と蓮の特級術師という立場が作用する事で、二年担任もこれを承諾。この案が、後に都立高専のチームワーク発展……相互理解の第一歩となる。

呪術高専は、学校でありながら職場でもある。そしてその生徒も、呪術師の一員。合

同の任務という面目で、午後の授業は全面的に実習となったのだ。

「高菜」

「棘さん。さつきはどうも」

そして蓮の相棒は、ハイネットクにした制服で口を覆う狗卷棘であった。

蓮が寮へと向かう道中にある教室棟の横には花壇がある。その世話係をしているのが、この狗卷棘なのだ。

現在棘は、植えていた紫のトレニアと朱のランタナに水をやっていいる。そこをたまたま蓮が目撃したという状況だ。まるで花に語りかけるように、優しい目をしていた。

「くんぶ？」

「えー……『今帰る所?』?」

「しゃけ」

「えー……『合ってるよ』?」

「しゃけしゃけ」

棘の反応を見ながら、蓮は会話する。

(やっぱり慣れないな、この人のおにぎり語……早く慣れないと)

実の所、蓮は棘が苦手だ。嫌いではないし、好きになろうとしているのだが、コミュニケーションが取りづらいせいか、どうにも苦手意識が若干あった。

先の呪術実習でも、蓮は棘とろくすっぽコミユニケーションが取れず、アイコンタクトさえままならなかった。何とか呪霊は祓除出来たからよかったものの、この先それでは危険だと、蓮自身そう思っていた。

(手伝おう)

そう思った矢先、蓮はすぐそばにあった水飲み場にある、もう一つの無骨なじょうろを発見する。緑色の何の変哲もないじょうろに水を汲み、棘の隣で撒いてやることにした。すると――

「ツナマヨッ」

「っ!？」

危うく落としそうになったじょうろを抱えて、蓮は安堵した。

今、確か棘の声が、重なって、本当に伝えたい事が分かったような気がする。

「今、棘さん普通に……」

「いくらっ」

「あれ……?？」

おかしい、一瞬棘の声が重なったような気がしたのだが……。

(聞き間違いだったのか?)

その日は、特に何かを話す訳でもなく、淡々と手伝いをして解散した。

〈放課後↓夜〉

「ああ、棘先輩のおにぎり語か」

「何か知らないか？」

そう話し合うのは、将棋を指し合う伏黒恵と雨宮蓮である。恵は電子ゲームの類を持つていない（というか興味も無い）ようなのだが、ボードゲームは悟に教えられたらしく、ただ相談するというのも詰まらないと思つた蓮は、スマホの将棋アプリで一緒に遊んでいた。

相談しているのは、勿論夕方の棘についてだ。

棘の話したおにぎり語が、突然本来の意味を持つ言葉と重複して聞こえたのだ。

「それは前兆だな」

「前兆？」

「ああ。実は俺もそうだった。先輩方も、棘先輩と会話したての頃はそんなだったらしい。そこから自然と言葉が分かっていくって感じだな」

「そうなのか」

「ああ」

「恵」

「何だ？」

「三十一手先でお前の詰みだ」

「それ言いたいだけだろ」

その後、三回中二回、蓮は白星を挙げた。

37.

〈2018年7月19日〉

〈放課後〉

本日は晴天也。昨日と同じ帰り道で、雨宮蓮は狗巻棘と再会した。棘は昨日と同じように、花々に水をやっていった。

「棘さん。手伝いますよ」

「ありがとツナマヨ」

そう言いながら、蓮は水飲み場のじょうろを手を持つ。そしてその最中も、蓮は棘の言葉に違和感を感じていた。

(これが前兆か)

蓮だけではなく、恵や真希らもなったと言われる、棘の言葉を理解しつつある『前兆』。

それ即ち、棘の事を知ろうと仲良くなっているという証拠だと、蓮は考えた。

だが、蓮はこの程度で満足する男ではない。蓮は、棘のより深い所に踏み込み、棘をより理解しようとして試みる。

「棘さんは……」

「？」

「おにぎりの具でじゃなくて、普通に喋りたいって思ったことはありませんか？」

昨日、聞こうとしても聞けなかった……聞くのは野暮だと思った事を問うてみる。

帰ってきたのは、数秒の、しかし意味のある静寂。そして――

「――ゆかり」

先ほどのように声は重ならない。

だが、その目が全てを物語っていた。

伏せられた目と、泣きそうな俯いた顔が。

『あるよ』と、そう言っていた。

「じゃあ、オレ手伝いますよ」

俯く顔が、勢いよく蓮の方に向けられる。

「何しろオレ、特級ですから。呪いに当てられても、死なない限りは治せますし」

「……しおむすびっ？」

おそらく、「どうしてそこまで？」と言っていると蓮は考えた。  
「決まってるじゃないですか。」

オレの作るカレーを、あなたに『美味しい』って言ってほしいんですよ」  
少しキザな事を言つて、微笑んでみる。

蓮は正義の味方を自称しない。そんなものに成りたいと思つたことはない。だが彼を知る者は皆、口々に彼を正義の味方と呼ぶのだ。

だつて、誰かを救う事が、悪なはずがないのだから。

「ツナマヨ」

「ありがとう……だな」

「しゃけー！」

西に困っている人あらば助け、東に悪人あらば成敗する。

南に歩きタバコする人がいれば注意し、北でイタズラされてる猫がいれば見捨てない。  
い。

怪盗の師匠が言つていた、彼の人としての持論。

それは今も、蓮の信念に根付いている。

そういうものに、蓮もなりたいのだと。

先輩だろうが何だろうが関係なく。



困っている人を助けたいのだと……。  
棘からの感謝を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『塔』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .  
# 1 7    W i s d o m   o f   o u r   p r e d e c e s s o r s

## # 18

猿真似をするだけの人形を

魂心込めて縫った所で

所詮は人の生り損ない

行尸走肉の化身でしかない

38.

〈2018年7月23日〉

〈放課後〉

蝋燭の火が揺れる。盛夏真つ只中の呪術高专本堂は、冷暖房の設備は無いが、風通しは良く、涼しさを感じさせる。

そんな本堂に居座る一人の男が、自分の身長はあろうかというほどの大きさのぬいぐるみの真正面で座っている。パンダの縫いぐるみは左腕を突き出しており、二の腕の中間あたりを男は刺繍している。というよりは、修理しているのだろう。

男の名は夜蛾正道。東京都立呪術高等専門学校の学長を務める、呪骸を操る術師とし

て一級品の人物である。縫いぐるみの方は、言わずと知れたパンダ先輩である。実はパンダ先輩は、ただのパンダではなく、正道が作った呪骸の最高傑作だったのだ。

さて、なぜパンダ先輩の修理もとい治療を行なっているのかというと、それは昨年のクリスマススイブにまで遡る。2017年12月24日、新宿京都百鬼夜行事件において、パンダ先輩は当時、術師として戦った。しかし、主犯の夏油傑により深傷を負わされ、左腕を切断されてしまったのだ。

そして本日、ようやくその傷が完治した。綿を詰め終わり、傷口は完全に縫合された。糸を鋏で切ってやった正道は、パンダ先輩の安否を問うた。

「終わったぞ」

「おう」

「問題はないか？」

「……うん、ばっちりだ！」

「そうか」

そう言ってパンダ先輩は左腕を振り回し、ポーリングする。

「ありがとな、まさみち」

「ああ」

正道に礼を言ったパンダ先輩は、用事があるのだろうか、本堂の出入口へと向かう。

——と、ここで二人は、その扉が開きかけている事に気がついた。  
「失礼します」

癪毛の紅顔を持つ彼。来訪者の名は雨宮蓮。いつもの鉄面皮を携えながら、蓮は正道を訪ねに来ていた。

「あれ？ れん、まさみちに何か用か？」

「はい。《傀儡操術》についてもっと知りたくて」

「あー、確かにまさみちの術式とお前のは親和性高そーだしな。頑張れよ」  
「どうも」

そう言つて、パンダ先輩はすれ違うように帰つていった。おそらく、おやつカルパスを食べに行くのだろう。

さて、蓮は正道に対面した。

「君か」

「はい。ご指導よろしくお願ひします」  
そう言つて蓮は礼をした。

「……君と私の術式は、確かに似ている。似ているが、それだけだ。私の道理を君に伝えるところで、君が得するとは思えないが」

夜蛾正道との協力関係を結ぶためには、結構な度胸が必要そうだ。《大胆不敵》程の度

胸があれば、物怖じせずに会話出来るかもしれないが……。

だが既に、蓮の度胸は更に上の《ライオンハート》だ。もはや怖い物は無い。正道の意気の後退りすることなく、蓮は口出しする。

「いえ、確実に得をします」

「なぜそう言える？」

「夜蛾先生が、パンダ先輩をどうやって生んだのか。そこに、オレのペルソナが進化する因子がありそうな気がするんです」

最初から気になっていた。

パンダ先輩の出生は謎が多い。生みの親が夜蛾正道であることと、他の呪骸とは違い自己意識を持つこと以外に情報が無いくらいに。

《傀儡操術》とは、その名の通り呪骸を操る能力。呪骸を『作る』能力ではない。にも関わらずパンダ先輩は、その《傀儡操術》という親元を離れている、独立した呪骸だ。そこに蓮は、ペルソナの進化を見出したのだ。

蓮という親元を離れたペルソナがあれば、戦略はさらに広がるはずだと。

「……アレは、突然変異で生まれた呪骸だ。私にも作り方は分からない。私はどうやって、パンダを作ったのかを知らない」

「いえ、あなたは理解している」

強面の正道に怯むことなく、蓮は言い切る。

「ほう。なぜそう言える？」

「呪術師とは、研究者だ。試行錯誤と失敗を繰り返し、その先にある成長を目指す人こそが、卓越した技術と知識を伴って生き残つて来た。

努力と辻褃の無い成功なんてあり得ません。そしてそのたった一度の成功例を、記録しない訳がない。その成功例の因果を、研究しない訳がない。あなたは、どうやって作つたのかも、パンダ先輩が何者なのかも知っている。

パンダ先輩は、偶然の産物ではなく、計画的に作られた呪骸ではないですか？」  
——この生徒は、危険だ。

正道の警鐘が頭の中で鳴り響く。まるでそっくりだ。

明智吾郎も、その理論を掴んでいた。……それも、夜蛾正道が、パンダという成功例を生む前から。

その狂気に似たものを……雨宮蓮から感じる。

「だつたらどうする」

「単刀直入に言います。オレに、呪骸の理論を教えてください」

「なぜ私の技術を欲する。君はペルソナという呪霊を従える訳であつて、呪骸を従える訳ではない。

今の君は少し、我武者羅というより矢鱈に生き急いでいるように見える。それでは、亡くなった虎杖も浮かばれんだろう。違うか？」

「それでも、二度と誰かを目の前で喪うのは御免被る」

その蓮の目が、正道の体を貫いた。

(……………)

このように真つ直ぐな目をした者は、こちらがどんなに断つても決して引き下がらない。二十余年、教師として勤めてきた正道の観察眼が、それをよく知っている。

……思えば、状況はあの夏と同じだ。明智吾郎に先立たれ、夏油傑と別れた後の悟は、それでもなお、自らの思う道を往く事を決意した。その時の目も、この少年と同じような、真つ直ぐに芯の通った目をしていた。

「……そこまで云うのなら、良いだろう」

だからだろうか。正道にしては珍しく、いつの間にか、雨宮蓮に加担していた。

「呪骸とは、人形に『核』<sup>コア</sup>となる呪力を込めることで作られるモノだ。もちろん人形でなくとも、たとえばそれが生物としての形を保っているのならば、呪骸として転用できる。

無論人形でなくとも、例えば符に、ある程度の呪力を込めれば、それは『呪符』となる。攻撃に転じるもよし、防壁として使うもよしだ。呪骸ほどの使い勝手の良さは無いが、あつて困るということもない。

君の核はペルソナだろう。では媒体は何にする？」

「オレの目的は、ペルソナがオレ以外の人でも使えるようにすることです。だから——」  
前々から思っていた事だ。

《ワイルド》の特性を活かすには、その語源に因んだものがない、と。

「——カード。そう、ペルソナを基にしたカードを作る」

「……ほう、やってみたまえ」

そう言われ、蓮はジョーカーに変身する。

円卓の中には、アルセーヌを中心に、更なるペルソナが追加された。その数はアルセーヌを含め10体。その中から、元はキリスト教の偶像信仰対象の一つであり、やがてその身を悪魔に墮とされた、星形に人の顔面が付いたペルソナにスポットライトを当て、ドミノマスクを外した。

（キウンを基に『核』を構成。それをトランプのカードのように広げ、呪力を以て独立させる……！）

そして、そのドミノマスクは蒼炎に包まれる。

呪力の波動が蠟燭の炎を揺らし掻き消す。肌を貫くような刺激が、正道にも伝わって来た。

——熱い。手が燃えているようだ。痛みとは生命の危険信号であるが、それを我慢す



るのは簡単なことではない。継続する激痛に、ジョーカーは悲鳴を上げたくなる。

だがそれを、ジョーカーの中の紳士性が阻んだ。人前で格好悪い真似は出来ないと、奥歯が砕けてしまうのではないかというくらいに噛み締めて、超高熱を発するドミノマスクを握り続ける。

「くっ……い！」

イメージしろ。限界を知らぬ、新しい自分を。昨日より強くなった、未来という己自身を。

キウンというもう一人の己の魂で、己の更なる境地へ進め。

蒼炎はジョーカーの輝くドミノマスクから手首を伝い、全身を焼き蝕んと肉を喰らう。

——だが。

——ジョーカーは、その炎を恐れない。

凧ぎそうになる力の奔流を抑え込み、魂と怒りを込めて——

「はああ——!!」

ペルソナは、更なる領域へと到達する——!

手元に収束する力の奔流。溢れんばかりの呪力の流動。それこそが、ジョーカーの実験を成功へと至らしめる証左であった。

「出来た……！」

果たして、それは一枚のカードへと変貌する。その出来栄えに、息切れしつつ、ジョーカーは思わず微笑んだ。

裏面は、ベルベットルームに似た、顔の右半分を白く左半分を黒くペイントしたものに、蒼い蝶のデザインがその周囲を囲むようにして飛んでいる。

表面にしてみると、そこには、星形の悪魔がいた。まるでトレーディングカードゲームのような風貌のそれ。まさしく、ジョーカーのイメージそのままであった。

「……見事だ」

「ありがとうございます」

正道の賛辞を受け取り、ジョーカーは蓮へと戻る。正直、カード化に成功したはいいが、呪力許容量マックスのほとんどを持って行かれてしまったので、大いに疲れた。それでも意地で、へたり込むことはなかったが。

——カード化は、一日に一度が限界だろう。この調子だと、戦鬪行為にも影響を及ぼす。それでいて、おそらく自分よりも格上のペルソナのカード化は出来ない……カード

化に必要となる呪力が足りないのだ。いつそ縛りに組み込もう。

そう思いつつ、蓮は四次元ポケットにカードを仕舞う。それでもなお、蓮の持つキウンのカードは消えることは無かった。

(……ああ。やはり、この子は危険だ……)

夜蛾正道は、蓮の本来の術式を悟を通して既に知っている。だからこそ未恐ろしい。この少年がもしも味方でなく敵だったならばと思うと、身の毛がよだつ。

大量の呪力と自信さえあれば、何もかもが実現可能だ。上層部にペルソナ使いがただの《呪霊操術》と似て非なり、そしてそれ以上の『何力不吉ナ何者力』を孕むことが出来るというだけの認識しかないからこそ、封印されていないだけだ。

公になれば、誰もがその力を欲する。ただのペルソナですら、呪術界にとっては不可解極まりないのに。

「また来い。私程度で良いのなら、君の欲する技術を教えよう」

だが、夜蛾正道は上層部の人間でもなければ、マッドサイエンティストでもない。ただの一人の呪術師であり、ただの一人の教師なのだ。生徒を守らない先達など、居ない方が良い。

邪険に扱うことも出来ないまま、正道は蓮にぶつきらぼうに言い放った。

「——はい」

正道からの仄かな憐憫を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『月』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

(しかし吾郎……蓮……お前達は、一体何者なんだ……?)

正道の疑問は空へ散る。

疑問に気付かぬ蓮がそれに答える事はない。

礼を言つて、蓮は本堂を去った。

ぼくは にんげん？

ぼくは ぼけもの？

ぼくは なにももの？

39.

〈2018年7月24日〉

〈放課後〉

本日は曇りのち晴れの日。東京の原宿は、本日も人集りでごった返している。ヒートアイランド現象真つ只中の原宿は、多種多様な格好と人種の人々が、ある者はインスタグラムのために自撮りし、ある者は彼氏に買ったばかりの洋服を紙袋に入れて持たせている。行く者来る者、笑顔の絶えぬ土地であった。

原宿駅西口の目の前は竹下通りを一步進んだ所にある薬局で、我らが雨宮蓮は絆創膏やら目薬やらを購入し終えた所。そしてその隣にある猫カフェに入ろうか入るまいかと悩んでいた。

蓮は猫派だ。猫を愛し、猫に愛されているカリスマの男だ。猫じゃらし、ちやおちゅーるは常にカバンの中に入っているほどに、蓮は猫が好きであった。

というのも、蓮の前世による所が大きい。アキラが冤罪で苦しんでいた頃、その心を

支えてくれたのは黒い愛猫もとい相棒であった。

黄色い首輪に白い靴下を履いた、蒼穹を思わせる綺麗な瞳の黒猫で、口癖は『猫じゃねーし!』だった。身も蓋もない話ではあるが、その黒猫は人の言葉を理解し、話すことが出来た。説明が長くなるので、出会いだとかなぜ喋るのかだとかの詳細は割愛させていただきます。

そんな訳で、恵とは相容れることが出来なさそうなことを考えながら真剣に悩んでいると、何やら女性の黄色い悲鳴が聞こえてきた。

主に、きゃー、だとか、嘘みたーい、だとか、何でー?、だとか。

……何でー?って、何でー?

蓮もまた一人の人間。騒ぎが起これば見に行きたくなるのが人の性。薬局を出て、更に奥の方——黄色い悲鳴の方へと歩みを進める。

「タステケ」

そこには、なぜかパンダの着ぐるみが立っていた。

猫は猫でも、熊猫であったか。こりゃ一本取られた、と蓮は現実逃避した。

(何やってるんだあの人……)

口調が悪くなるのを誰が責められようか。そもそもそれを見紛う事など出来ようか。正しく蓮の先輩に当たる、突然変異呪骸のパンダ先輩であった。嘘みたーい、何でー?

の歓声は、おそらく着ぐるみのためのチャックやら隙間やらが見えないためであろう。

パンダ先輩は——およそ十組は居ようか——JKとJD達に囲まれ、インスタの餌食になっている。一緒に自撮りする者、ハグして撮ってもらう者など、作者も書いていて凄く妬ましいものとい羨ましいと思うシチュエーションであった。

タステケ、が何かは知らないが、おそらく助けてと言ったのだろう。トラブルを起すのも面倒くさいし、この女性陣を掻き分けるとなると、相応の優しさと魅力が必要になりそうだ。おそらく優しさは《人情家》、魅力は《注目株》ほどあれば、救出できるかもしれないが……。

だが蓮の優しさは《慈母神》、魅力は《魔性の男》もある。蓮は自分が結構モテる事を知っているし、何ならそれを武器にすら出来る。今こそ蓮の秘技《鎖骨から威光》を発動させる時だ……！

「すみません、ちょっと退いてくれませんか？ オレの連れなんです」

蓮の服装は至ってシンプルだ。黒いTシャツが見えるよう、白シャツのフロントを開け、袖を捲っている。紺のジーパンに革のベルト、カジュアルなブラウンのブーツを着用している。左肩には、これまた猫一匹は入りそうな革のバッグを。

だが今は白シャツを脱いで右手で背負い、左肩にあつた鞆を手でしつかりと持ちつつ、暑そうにして黒シャツで仰ぐ。そうすることで、蓮のシャツから覗く鎖骨は、汗の

筋で色気が増している。あつという間に女性陣全員の目を釘付けにした。

後にその女性陣は語る。

鎖骨が光ってた、と。

さて、頬を赤らめる女性陣には目もくれずに、パンダに手招きして来させクールに去る。

ついでにその去り際に、シヤフ度とニヒルな笑みで、

「じゃあね」

と一言。その直後に、バタバタつと倒れる音が聞こえた。

熱中症かなあ、怖いなあとスツとぼけることにする。

さて、女性陣の侵攻を見事に躲し、二人は人目の薄い路地裏で屯していた。

「いやー助かった。ありがとな、れん」

「そんなことよりパンダ先輩、あなた個性強すぎませんか？」

「何だ唐突に照れるだろ」

「いえ褒めてないです」

「がーん!!」

オーバーリアクションに蓮は頭を悩ませるばかり。

「というか、何しに原宿に来たんですか？」



「まさみちが小遣いくれたからな。一人でおやつ買いに行こうと思って。この格好でも原宿なら怪しまれねーだろ、みたいに軽い気持ちで」

「そして逆ナンされてたよ」

「えへ」

「えへじゃない」

「てへ」

「てへでもない」

「A p e x」

「N a t i v e に話さない」

「こつちも」<sup>ネイティブ</sup>流暢ネイティブにトク喋トクったではないか。

「全く、その個性は一体どこから降って来るのやら……」

「個性の塊みたいな人間に言われてもなあ」

「オレなんて『二次創作オリ主特有の万能型チート最強』くらいしか個性が無いのに」

「ポジティブ過ぎて逆に清々しいな」

「こんな個性いらないますよ。もっと『努力と機転で成り上がる王道漫画主人公』みたいな個性が欲しかったです」

「それ何かとお前に当てはまってねーか？」

「あとアホ毛」

「お前360度どこから見てもアホ毛あるじゃねーか。

にしても、珍しいよな。一年ズ曰く『完璧超人』のお前が個性で悩むとか」

「むしろ個性で悩まない人間はいません。……それにオレは、完璧ではないです。目指してはいますが」

「雨宮蓮……というより、雨宮蓮を模るアキラという人間は、『個性』という言葉に呪われている。

前世でペルソナに目醒める以前……アキラがまだロボットだった頃、名前も忘れた元友人に云われた事だ。高校一年生の夏休み明けの日だっただろうか。

——お前って、何が好きなの？

アキラは、何も云えなかった。分からなかったのだ。

己の嗜好も、嫌悪も。愛も憎も。何も。

そこでアキラは気付いたのだ。

自分の中には、何も無い……と。

そうしてアキラは、親の言いなりとなつている自分に疑問を持ち始め、自らとは何かを知ろうとして——その秋に、事件が起こったのだ。

その日からだろうか。個性という言葉が嫌いになったのは。

「まー俺から言わしたら、個性ってのは『降って来るモン』じゃなくて『作られるモン』なんだよな」

「……というと？」

「端的に詰まるところ、各々の『個性』って『自分をどうやって引き出せるか』なんだよ」  
一重表現である。作文だと減点だ。

「刺激の無い人生に個性は生まれえない。そして個性を引き出すには、自分自身を理解して認めることが肝要なんだ。まー個性が生まれえないなんて、義務感で生きてる奴とかじゃねーとそうそう無いけどな」

「……」

「どーした？」

「いえ、耳が痛いなど」

「鼓膜破れたか？」

「物理的に痛いわけじゃないです」

「じゃー何だよ」

「その、説得力があつて凹むなつて。もっと早くに気付いていれば良かったのにつて思つて……」

「……ん？」

黒猫の言葉が止まるのを、熊猫は訝しむ。

「『個性』を……『引き出す』……」

「どした？」

蓮の嫌う『個性』。それは、ペルソナ。

なら、ペルソナという『名前（読）のある個性（知）』を、最大限に引き出すためにはどうすれば良いのだろう。

個性に必要なもの。無くては有り得ぬ大切なもの。それは――

「――『名前』……そう、名前だ！」

ありがとうございます、パンダ先輩！ 良い事を思い付きました」

「へ、へー……まあ、何かよくわかんねーけど、力になれたんなら良かったわ」

真名の解放。それは、相手への認知操作。ペルソナという名ばかりの魂を、相手に認  
知させる事こそが、ペルソナの『個性』をより引き出させる条件……！

「また話、聞かせてください」

「おう。俺の自論哲学で良いんならな」

パンダ先輩からの仄かな友情を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『剛毅』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

去つて行く蓮を見送るパンダ先輩。やがてその姿が見えなくなると、腹の底から一つため息を吐いた。

「『個性』……ね」

パンダ先輩の眩きを、誰も耳にする事はない。

「俺の『個性』って、一体どこから来たんだろうな」

己は一体、何者なのか。

それが分かる時が来るのだろうか。

愛を知らぬ獣物は、今はまだ悩むだけ……。

星の光さえ届かない深い影の中でさえ

キミの笑顔を思い出してしまふのは

キミが僕の星でいてくれたせいだ

キミの輝きが まだ瞼の裏に残っている

40.

〈2018年7月25日〉

〈放課後〉

「蓮、予定あるか」

夕焼けの差す教室、帰りのホームルームが終わった後。伸びをする彼にそう問うのは、うに頭の伏黒恵。対して問われたのは我らが雨宮蓮である。

本日は一日中座学のカリキュラムであり、蓮の体力は万全と同じ。鍛錬のために、恵に付き合うのも良いだろう。

「いや、特に予定は無い」

「なら、少し組み手に付き合ってくれ」

「分かった」

恵は、度々こうやって蓮を組手に誘う。勝率は今の所恵の方が優勢だ。積み上げたキャリアは伊達ではないということか。

「場所はどこが良い？」

「ん……グラウンドだな。五条先生に許可は取ってある」

「ありがとう」

だが蓮とて、今日は恵を誘うつもりだったのだ。

「ちようど、見せたいものもある——」

——現時点での、蓮の全力を。

41.

さて、蓮達は教室を出て、呪術高专グラウンドに制服姿で参上した。まだ明るい日差しが、二人を優しく包んでいる。砂埃が舞って、恵は目を顰めた。

炭酸をメメントス……もといメントスで抜いておいたコーラを飲んで、蓮は四次元ポケットのポーチに仕舞う。ポイ捨てダメ、絶対。

「やろうか」

「ああ」

——そうして、二人は呪力を解放する。

あれから……悠仁の死から三週間が経つ。蓮も恵も野薔薇も、それぞれの思いを抱き、成長してきた。なればこそ、この戦いには簡単には負けられない。

先手を取ったのは、ドミノマスクに手を添えるジョーカーであつた。円卓の中の九柱のうちの一柱。

『正義』のアルカナに類する天使。天使階級第五位、中級第二位の力天使。『神の美德』『高潔』等の名前の意味を持つ、イエス昇天の際に付き添つた、その天使の名は——

「——ヴァーチャー、『認知スキル』《高尚なる奇跡》」

そうして現れる、半透明のポリゴンのような天使の祝福がジョーカーを包む。

【拡張術式：認知スキル】。昨日、パンダ先輩のアドバイスで得た、強制的に『その名前に由来する効果のスキル』を作るもの。ペルソナはあくまで『もう一人の自分自身』でしかないが、縛りを科し、真名を明かす事により、ペルソナの範疇を超えた力を限定的に引き出す事に成功した。

ペルソナは最大で八個のスキルを習得出来るが、アクセサリー装備品の認知を利用しない限り、それ以上は覚えられない。だが認知スキルとして——今の所使えるのは下位のペルソナだけだが——九個目のスキルを習得出来る。

ヴァーチャーの認知スキルは、その逸話に関する。イエス昇天の付き添いとしての逸話とは別のもの……ヴァーチャーがアダムとイヴの息子・カインを産む際の産婆として



活躍したというもの。イヴの出産にその力を与えたもうた《高尚なる奇跡》という認知スキルが、ジョーカーの肉体を猛々タルカジャしく、荒々コンセントレイトしく強化させる。

恵の目には、陽炎のように揺らめくオーラを纏ったように見えた。

（肌がヒリつく……何かヤベエのは間違いねえ。ならその効果時間が切れるまで、ここは距離を取らせるか！）

恵が策を巡らす間、ジョーカーポーチから、真希から借りた、三尺さぶ八寸はちの竹刀を抜き掛け——巨大蛙が一匹、ジョーカーの胴体に絡みついた。

【蝦蟇】

（不意を突かれたか……！）

ジョーカーがペルソナのスキルを使用する際、彼には一瞬だけ隙が出来る。何度も何度も、ジョーカーのその癖を間近で見ってきた恵だからこそ分かる、ジョーカーを唯一打破出来る可能性。【蝦蟇】はジョーカーの体を大振りで振り回し吹き飛ばさんとしている。

だが、張本人の表情は余裕綽々だ。【蝦蟇】の舌がジョーカーの体を縛っているものの、掌を自由に動かさせてる状況が、ジョーカーの顔に笑みを作らせる。縛り一分間の縛束③が解除されるまで、あと四十五秒。

（お前は縛りでペルソナを使えねえ！ なら、今ここで叩き落としてやる!!）

ポーチからとあるカードを一枚取り出す。おどろおどろしい星形の悪魔が描かれているそれは、先々日の夜蛾正道からの教授を得て完成させたもの。試作品ではあるが、威力はおよそ申し分ないはずだ。

この試作段階では、使つて仕舞えばそれで終わりの、今はたった一回切りの奥の手。それこそが、ペルソナを乖離カギトヒして使用する方法だ。メリットとデメリットをバランスよく組む事で、蓮は「拡張術式：乖離」の確立に確実性を持たせる事に成功した。

デメリットその一、「乖離」は一日に一度しか出来ない。

その二、自分より格上のペルソナは「乖離」出来ない。

その三、「乖離」を行つたその日はいかなる戦闘行為をしてはならない。

その四、自動効果系——例えば《物理無効》や《魔術の素養》など戦闘時に恒常的に発動するスキルや、《マハタルカオート》などの戦闘開始時に自動的に掛かるスキルなどを使えない。

その五、乖離したペルソナのスキルを使用したり、その他の要因でカードが破壊された場合、縛り⑧が適用され、カード化したペルソナを二度と再召喚出来ない。

以上五つが、「乖離」において雨宮蓮が守らねばならない条件である。

——だがその際、蓮はメリットも追加した。縛り③の存在を疎く思っていた蓮は、リスクの大きさを天秤にかけ、そのメリットを追加して尚お釣りが来るものを組んだ。

何せ「乖離」は、一つしくじれば永遠にそのペルソナを召喚出来ないのだ。その上、蓮の預かり知らぬ所で仲間に勝手にカードを使われては、その事を認知出来ない蓮は縛り①の回避の為に、永遠にペルソナが使えない事態に陥ると、蓮は考えた。

蓮としては「乖離」したペルソナの威力を高めるため、仕方ない事だがあまり組みたくなかつたメリット。

それは――

「――ペ、ル、ソ、ナ！」

「何?！」

――「乖離」したペルソナのスキルは呪力を払えば誰にでも使え、雨宮蓮及び使用者は縛り③に抵触しない……だ。

隠し持っていたキウンのカードを手で砕き、近くて遠いもう一人の自分を呼び覚ます。《タルカジャ》と《コンセントレイト》攻撃力上昇によって普段より更に溢れ出る呪力の波動は、恵の「蝦蟇」では耐え切れない。

やがて砕いたカードから出づる蒼い力の奔流は、一つの悪魔を模る。キウンへと命じた攻撃は《サイオ》。相手に中程度の念動属性ダメージを与え、恵の心を揺さぶる。縞瑪瑙の呪力の波動は、キウンの五芒星の体を以って恵の精神へと向かう――!

だが恵とて、それを傍観している訳にはいかない。【蝦蟇】には退却を命じて、己も新

たな切り札を展開する。

「【玉犬・渾】！」

その鋭利なる爪と牙を以つて、縞瑪瑙の奇怪な攻撃をどうにか切り裂いてみせる——  
「っ！」

だがキウンの攻撃は、咄嗟の判断で展開した【玉犬・渾】では阻むことは能わなかった。

ジョーカーのペルソナのスキルの対処法は少ない。無効化するか、あるいは避けるか。宿難ほどの鋭利な爪があれば、それは無理やり叶うだろうが、【渾】はまだその領域に達していない。

【渾】が壁になったから良いものの、その余波でさえ恵の精神に揺さぶりを掛け、肉体的ダメージをより増幅させる。今の攻撃で、【渾】はこれ以上の戦闘行為は危険になった。

「やる」

「お前こそ、いつの間にかこんな切り札隠してやがったんだ」

だがそれはジョーカーの奥の手を失わせた事に繋がる。加えてまだジョーカーには三十秒ほどの縛りが科せられている。《コンセントレイト》が切れた以上、ジョーカーに残るのは《タルカジャ》効果を唯一活かせる体術のみ。対する恵は呪力にまだ余裕があ

る。軽口を叩きながら、恵は影から、二つの新たなる影を呼び起こす。

【鶴】……！】

まず、凶鳥【鶴】にジョーカーを襲わせる。【鶴】は翼を広げれば、ウイングスパンは四メートルほどにもなる。その巨体は、ジョーカーの視界から恵を隠すのは簡単だ。その鉤爪で、ジョーカーの体を切り刻まんと【鶴】は暴れる。

それをジョーカーは、真正面から——真正面だけを見て迎え撃つ。残り二十五秒。

【鶴】が作った隙は、恵の影操作による隙をカバーした。恵が取り出したのは、普段はジョーカーが使っていないような一尺ほどの竹刀であった。

状況は二対一。恵の優勢ではあるが、ジョーカーならばここからいくらでもひっくり返せる。

——故にこそ、恵の戦略は実にシンプルかつ効果的なものとなる。

(防戦一方だな……！)

恵と【鶴】による隙を生じさせぬスイッチの応酬。それが、対ジョーカーにおいての有効打。

恵が斬り掛かれれば、【鶴】はジョーカーの背後を襲い。

——残り二十秒。

【鶴】が突撃すれば、恵はジョーカーの側面から奇襲を図る。

——残り十五秒。

流石のジョーカーも、この連携には為す術がない。

——残り十秒。

そうして、ジョーカーの均衡は崩れる。

——残り五秒。

「オオッ！」

「くっ——!？」

——恵の一尺竹刀が、ジョーカーの未だ至らぬ構えを大きく反らした。

「畳み掛ける！」

恵に指示を得るまでも無く。

その体に雷を伴いて、【鶴】はジョーカーの体へと突っ掛かった。

「っ、あああ、あ、っ！」

これには思わず、ジョーカーも悲鳴を上げる。バチバチとジョーカーの体へと行き渡る紫電が、プスプスと嫌な音を立ててジョーカーの全身が吐き出す黒煙となる。

アンペアは落としてある。死には至らない。——だが、これでチエツクだ。この短刀を首に翳してやれば、それで恵の一本に——

「恵、オレには特技がある」

「……………」

——なるはずだった。それはジョーカーの鶴の一声により阻まれた。

この瞬間——ジョーカーがヴァーチャーを召喚してから一分が経過した。

そもジョーカーは、恵が【鶴】を繰り出すのを狙っていた。【鶴】を狙ってヴァーチャーというペルソナを召喚したのだ。

ヴァーチャーの耐性における弱点は『疾風』と『呪怨』、『物理無効』は『物理耐性』へと降格しているが、ヴァーチャーに《ミドルグロウ》二分の一非戦闘経験取得というスキルを修得させ、レベルアップさせていると、とあるスキルを覚えたのだ。

電撃属性の被ダメージを半減する、『電撃耐性』というスキルを。

恵があと一秒早ければ、勝ちに充分に狙えた。

ただ、ジョーカー——否、蓮の予測が一步上手であった。

「モノマネだ」

両手でマスクを翳し、二方向に展開する。恵の《十種影法術》における式神の同時召喚を、ジョーカーも物にしていた。ラヴェンツァに名付け親になってもらった、この力の名は——

「——ミックススレイド！」

『ヒホー！』

一方は、なぜかプリクラのキャラにもなっている氷の妖精・ジャックフロスト。

もう一方は、およそシヤア・アズナブルを意識したのではないかという衣装に身を包む、ジャックフロスト達の羨望の眼差しを一身に集める、フロストエース。

この二柱が揃った時、敵も味方も、極寒地獄の一端を見る事になる……！

「《えいゆうとおいら》！」

「何だそりゃあああああ?!」

ヒーローと一緒になら、おいらは何も怖くないよ！

そう言わんばかりに張り切るフロスト達。不思議な魔力であつという間に、恵は【鶴】諸共氷漬けになってしまう。

ヒーローは必ず勝つ！という意思を感じるが、敵を氷漬けのオブジェにして砕き割るヒーローがお茶の間に出て来れば、子供達は泣き叫ぶのではないだろうか。

勝敗は決した。ジョーカーは運へと戻り、氷漬けとなった恵を解放してやる。

「くそ、合体技かよ……！」

「ああ。お前から着想を得たんだ」

「——やられた、完敗だ！」

歯を食いしばって敗北を噛み締めながらそう言って、季節外れの白い息を吐きながら、恵は地べたに寝転がった。



「蓮、今は勝ち譲つといてやる。首洗つて待つてろ」

「ああ。だがオレも、うかうかはしていられない。そう簡単には追いつかせないぞ」  
そう言いながら、蓮は恵を立たせてやる。

夕焼け、逢魔時の二人。蓮は恵との絆がより深まるのを感じながら、食堂へと向かう事にした。

「恵、今日は何食べたい？」

「生姜焼き」

「了解」

蓮はおろか恵自身でさえも、恵の膨らんでいくジエラシーに気付かないまま……。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .  
# 1 8    T h e   G a m e   G o e s   O n . . .

## #19

唐突だが皆さんは、『人を殺せるボタン』が目の前にあつたら、それを押したいと思うだろうか。

例えば、口煩い教師だとか、テロリスト、嫌いな友達、戦争犯罪者、パワハラ上司、あるいは関係の冷めきつた親……それらの人々を、ボタンを押すだけで殺せるとしたら？  
僕は……『僕が嫌いと思う人』のためには多分押せないと思う。

でも『僕の事を嫌いな人』のためならば、何の躊躇いもなく、そのボタンを押す。  
死んで仕舞えば良い人なんてのは、人々によつてその数が変わるけれど、やはり一定数いるものだ。

けれど、僕には自信も度胸も無いから、

死んで欲しいとは思つても、

殺したいとは思えなかったのだ。

あの人に、あの人達呪いに、友達出会うまでは。

——この物語は、吉野順平という、人以下で、猿並みですらない、呪いにすら成り切れない、そんな中途半端な僕が生まれ変わる物語だ。

惰性のまま生きてきた意味の無い人生に、これから意味を見出すような。

誰かの願いに感化され、受け売りだらけの人生から脱却を目指すような。

奪い取られた青春を奪い返し、誰かを傷つける躊躇を失くしていくような。

そんな賤しい僕でも、誰かのために生きて良いと、僕自身を好きになれるような。

バッドエンドを赤く塗り潰す、原作至上主義者からは非難を喰らうような。

ハッピーエンドを黒く塗りたくる、二次創作ならではの歪さを表面化するような。

生きる尸しかばねだった僕が、三人と出会って、良くも悪くも生まれ直すような。

そんな『もしも』を書き記した、僕の尽物つぎものがたり語だ。

# 1.

〈2018年8月20日〉

——最悪の日だ。こんなに居心地の悪い映画は初めてだ。

僕、吉野順平よしのじゅんぺいは、今流れている映像以外の騒音に目を聳めた。

本日は月曜日だ。昨今、ようよう短くなりゆく夏休みの終わりの日……即ち、始業式の日だ。そんな日に限って、僕は学校を休んで映画を見に行っていた。タイトルは『ミズ人間3』という、スプラッタでドギツイ描写がてんこ盛りな映画だ。

『ミミズ人間』とは、読んで字の如く人間をミミズのように手術したものだ。『3』に

においては、囚人の再犯率や職員の離職率が高い刑務所での、囚人への教育——というか調教のため、B級映画を真似て『ミミズ人間』を作る……という自虐も含めた、マニアから人気のある作品だ。

だが『ミミズ人間3』は、『ミミズ人間シリーズ』で最新作とはいえ三年前に上映を終了しているため、今上映されているのはリバイバル映画だ。

そんな映画を朝っぱらから観る暴挙に出ることが出来たのは、僕が世間一般的に云う、引きこもりに値する人間であるからだ。

その原因は、なんて事はない。どこの学校にもあるであろう『いじめ』によるものだった。

暴力は当たり前。虫を無理やり食わされそうになり、無様に吐き出し嘲笑されたりもした。右顔に受けた消えない傷は、この忌まわしい過去を思い出す度に疼いてしまう。

引つ込み思案で、オタクで、陰キャ。

性格の終わってる不良達クソ野郎からしたら、僕は格好の的だった。

そんな学校生活が嫌で、二年に上がれるほど出席日数が足りた頃に、僕は学校に行かなくなった。

「ダメだわーあのブス。全然やらせてくんねーんだもん」

「クソじゃん、はは」

(学校サボって映画来るなよ……僕もだけど)

その原因を作った不良達が、前の席で駄弁っている。三人の男子学生だ。二人は喋り、一人は携帯で誰かと話している。どいつもこいつも、『つばき』という自分が可愛いと勘違いしているブスとやる事しか頭にないようだ。

あまりにも大声で話すものだから、映画の内容が頭に入らない。……まあ、内容なんてこの映画においてはほとんど意味を為さないものではあるが。

内容が、無いよう。

(くっだらない)

何にせよ、お金が無駄になった。居心地の悪い場所に長居する理由も無い。もう帰ろう——と思った矢先。

「キミ達」

高身長でロングヘアの、ポンチヨのような黒服を着た誰かが、その三人の背後にいつの間にか立っていた。

その手が、一番右の男に触れて。

「マナーは守ろうね」

「あ、え、っつ?」

まるで断末魔のような声がして、三人は黙りこくった。

それも、映画の本編全てが終わるまで。

否——終わってからも、永遠に。

(おかしいな)

やがて映画が終わっても、三人は席を立とうとしない……というより、身動き一つ取らないので、僕は気になって、恐る恐るその方向へと向かつて見て——

「うっ……………!?!」

——あまりの凄惨さに、僕は吐き気を催してしまった。

(何だ、これ……)

僕は、その三人の体に……否、遺体に絶句するしか無かった。

三人は、まるで粘土細工のように、頭部が異形となつて死んでいた。目の付近がありえないほどに飛び出ていたり、顔の一部をもぎ取られたかのように凹ませていたり、どう見ても普通の死に方をしていなかった。鉄とアンモニアが混ざつた嫌な匂いがする。

気味が悪い。こんなの、人の所業ではない。こんな事を、人が出来て良いはずがない。けれどそれ以上に。自分でも、人としてどうかと思うほどに。

ざまあ見ろ、と思つてしまった。

(……………あの人は)

気付けば僕は走り出していた。映画館を出て、あの人を探していた。走った。今までにないくらい、体育の授業や運動会の日以上に。それほどまでに、あの人に会いたかった。

どれくらい走っただろうか。知らない街の、知らない道の、知らない路地裏に入つてやがて、その人を見つけて、僕は言った。

「あの！ アレをやったのって、あなたですか!？」

息切れしながらそう問う。

雨の匂いがある。もうすぐ降ってきそうな雲色だ。

水色の長い髪を揺らせて、皮膚の繋ぎ目が気になる彼は言う。

「やったのが俺なら、どうする？ 責めるかい？」

それほど、彼らはキミにとって特別だった？」

特別。

特別とは、僕が大切に思う人に云うべき言葉で、僕を大切にしてくれる人に語るべき愛の事だ。

(あの三人が、特別、だと)

——ふざけるな。

あの汚辱の日々を、あの屈辱の毎日を。

あんな奴らを、特別扱いにしてたまるものか！

「……僕にも、同じ事が出来ますか」

雨、逃げ出した後。

暗雲は、誰の空にも立ち込んでいく。

2.

〈2018年8月21日〉

〈昼〉

昨日の雨が嘘だったかのように、本日の空は真っ青な晴天。残暑厳しい気怠い暑さが、僕の額に汗を滲ませる。シャツは汗に暗めの斑点を作らせ、気持ち悪く肌へばりつく。その襟を利き手にて仰ぎながら、どうにか暑さを誤魔化し続ける。

ある人——便宜上『人』と呼ぶ事にする——と会って話した帰り道を、僕、吉野順平は歩いていた。

話とは言っても、彼の秘密基地に誘われて、特技を披露してもらったり、僕に誰かを復讐するだけの力をくれたりと、それだけだった。

「暑い……」



蝉の声が五月蠅い。行きは良い良い帰りは怖い、茹だる帰り道は誰も居ない。子供の影すらない。

それはそうだろう。なぜなら今日は、全国的に始業式の日だ。そうでない所もある——現に僕の高校は前日が始業式だった——が、どうせこの暑さでは、外出しようという気すら蒸発してしまう。

あゝ、エアコンの効いた部屋が恋しい。さつさと帰ろう。この暑さでは溶けてしま  
う。

ただでさえ引きこもりの身でやる事も無いのに、ずっと外にいる意味も無い。

あゝ、体、溶ける……。

「よう、吉野」

「——つ、……外村先生」

……そんな事を考えて、現実逃避していたのに。

「フ——学校サボってどこに行ってたんだあ？」

目の前の脂肪の塊は外村。髭の剃り残しの目立つ、ガリ勉刈り上げの髪型をした男性で、僕の担任の先生だ。ハンカチで汗を拭っているが、短い手足が届かないところから  
も滲んでいて、ニヤケ面も相俟って穢らわしい印象を受ける。

こんなでも教職に就けているのが、僕には不思議でならなかった。僕にとって正直、

二番目くらいに会いたくない人間だ。

教職のくせに、礼節も知らぬかのように、僕の家の段差に居座っている。およそ人  
道を教える立場の人間に外村は相応しくない。

「フ——、聞いたか？ 佐山と西村と本田、亡くなったんだ。」

お前、アイツらと仲良かっただろ？」

「……はっ。」

だのに——どこまでも、この男は……！

「友達いないお前に良く構ってやってたろう」

フラツシユバックする、痛みと辱めの記憶。あの三人から受けた傷。

「フ——、今から一緒に、線香だけでも上げに行こう」

仲良し？ 僕と、あんなゴミ共が？

——ふざけるな。あんな奴ら、死んで当然の人間の屑どもだった。

——ふざけるな。担任の癖に。何も知らないのか。何で僕が学校に行かなくなった  
のかも。何で僕が行きたくないのかも。ふざけるな。ふざけるな……！

「教師って学校卒業して学校勤めるから、およそ社会ってモンを経験しなすよね  
……。」

——だから、アンタみたいなでつかい糞ガキが出来上がるんでしょうね……！」

「あ？ 何ぶつぶつ言ってるんだ？ 引きこもって頭おかしくなったかあ？」

——おかしいのは、アンタの頭だ……!!

もう、我慢の限界だった。歯茎が折れそうなほどに噛み締めた。前髪で外界を隔てる右目と、目の前を歩くため仕方なく開いている左目で、目の前のブタを直視する。右手で掌印を組み、あの人に教えてもらったこの力を、己の恨みの念を込めて——

「そこまでにしておけ」

——バツ、と振り向いた。

霧散して行く力の奔流。僕の後ろの少し先には、夏なのに真っ黒い服に身を包んだ、一人の青少年が、ポケットに手をつ込みながら立っていた。

ハイネックの、見た事のない制服に身を包んでいる。身長は一七〇センチよりも少し高めで裾が燕尾服のように長い、黒髪癖毛の好青年だ。脚が長い。鉄面皮なのが勿体ないほどに整っている顔立ちには、どことなく……怒りの感情を浮かべていた。

一言発したかと思えば、やがてこちらへとやって来る。だがそれを、仮にも教師である外村が見逃すわけはなかった。首に手を回しながら、僕は静観する。

「吉野順平、キミに話がある」

「なっ、何だお前は!! 今俺とこいつが話しているだろうが！ だいたい一体どこの——」

「貴殿にはお引取り願おう。やれ、悠仁」

「あいよー!」

パチン、と指を鳴らすと、いつの間にか外村の背後に回っていた、彼と似た制服——  
パーカー付いてるけど——を纏う悠仁と呼ばれる青少年が——

「いやっ、ちよ、何すん——おうっ!」

まっ、待つて! ズボン持つてかないでえええ!!」

外村のズボンを一息にずり下ろし、法定速度ギリギリの車並みのスピードで持ち逃げしていった。羅生門の下人もびっくりだろう。

辱めに顔を紅潮させ、たゆんだゆんと腹から嬉しいはずなのに嬉しくない擬音をさせながら、悠仁の後を追いかけて行くのを心の中でほくそ笑んだ。

どうせなら美人がその胸メロソからその擬音を発してほしかったと、下卑た戯事を考えてみる。

やがて外村のその姿が見えなくなると、

「お帰り」

「うい、ただいま」

「えっ早!?! もう一周して来たの!?!」

「えっ、何で二周しないといかんの?」

「語弊が生じてる!？」

なぜか好青年の方向から、悠仁は一瞬で戻って来た。外村に隠れてあまり見えてなかったのだが、悠仁はツーブロックの髪型である他に、両の目元に傷が付いているのが分かる。お人好しそうな雰囲気に見合わず、先のズボン剥奪もさることながら、身体性は活発らしい。というよりはやんちゃなのだろう。

というか――

「えっ誰!？」

「オレだ」

「お前だったのか」

「ツッコむ気にもなれないよ……」

片方にいた癬毛の好青年が、何やらおかしいな服装に身を包んでいる。

まず目に入ったのは、目元を覆う白いドミノマスクだ。そして下を見て行くと、少ししゃがんで仕舞えば地面に着いてしまうほどに裾の長い黒コート、赤い手袋、黒ズボン、ヒールのある黒ブーツ。まるで稀代の怪盗紳士アルサーヌ・ルパンを彷彿とさせるかのような服装であった。

「もう、一体何!？」というか誰!？ 誰なの!？ 怖いよ!？」

「やっぱ視えてるな」

「ああ」

悠仁からの問いに答えた好青年が蒼炎に包まれたかと思えば、先ほどの真っ黒い制服姿へと戻った。

何だ？ 理解出来ない。何者なんだ？ 意味不明だ。

とうかそもそも誰この人達!?

「吉野順平、キミに話がある」

「ひっ……………」

「ぶぶー、怖がられてやんの〜」

「……………ぶすー」

「可愛さでイメージアップするにはもう遅いと思うぞ〜」

まあでも、話があるつてのは本当なんだよ。取り敢えずちよつと付き合ってくんね  
?」

「あの、あなた方は一体……………というか、何であの人のズボンを？ 僕と話がしたいなら、僕を引っ張って行けば良かったんじゃないやあ……………」

「だって、なあ？」

「キミ、あの人の事嫌いだろ？」

「……………つ、何で……………？」

「何となく。……あ、違った？」

「いや……違わない」

その言葉を聞いて、僕は無性に嬉しくなった。僕の事を分かってくれているのだと。単純に思われてしまうかもしれないけれど、それがどうしても嬉しかった。

「あっち行こうや。色々聞きたい事あるし」

「う……うん」

だから、何となく、悠仁と呼ばれる青少年に、僕はほいほいといつて行つた。

それが、僕の運命を決定付ける瞬間だったとは、露も知らずに。

### 3.

夕焼けの空が、都会とも田舎とも言いがたい僕の街を照らしている。だが何やら、ゆら……と地面が揺れた気がした。川の土手の石段に、僕ら三人は屯っていた。

「——揺れたな。」

「うん。多分震度2くらいかな？」

癖毛の好青年……雨宮蓮が颯めつ面でそう言って、僕は同調した。一方、虎杖悠仁はというと、電話で誰かにコールしているのだが、一向に繋がらないようだ。ついには痺れを切らして、電話するのを諦めた。

「どうだった？」

「ダメだわ。伊地知さん全然繋がんねー。まだ蠅頭追ってんのか……？」

「ってか、コーユーーことって俺達だけで馬鹿正直に聞いていいもんなんかな？」

「現場の判断だ。仕方ないと思うぞ」

「……ん、だな。仕方ない仕方ない」

「どういう仕事をしてるのかを言っても仕方ないな」

「何で順平を追いかけ回してたのかを言っても仕方ねーよな」

『はっはっはっは』

「あ、あの、聞きたい事って……？」

若干尻込みと警戒をしながら、僕は二人に問う。

何せどこからどう見ても怪しいのだ。急に現れては事情聴取のために引き連れられているのだし。それも少年に。

お巡りさんだったらまだ分かる。僕は警察は好きでも嫌いでもないし、出会いたいと思わないが、わざわざ反発してまでトラブルを引き起こそうとも思わない。仕方なく事情聴取に協力するだろう。

けれど相手は同い年かそれくらいの少年だ。それも、あの人から聞いた特徴を兼ね備えている。警戒しない方がおかしい。



（うずまきを模したボタン……まさか、こんな僕と同一年くらいの人が呪術師なのか？  
あの人は、仲良くなった方が良いと言っていたけれど……というか呪術師は、あの人達にとつて敵だよな……？）

「なあ」

「んっ？ 何か？」

「お前が行った映画館で人死にが出たんだよ。何か知らねえ？」

「えと、何か……つて何か？」

「あー、やつべ、やつば蠅頭ようとう持つて来りや良かったな……」

「蠅頭とは——」

よく分からない単語で悠仁が言い淀んでいると、蓮が隣でメモ帳に何かをすらすらと描いている。十秒もしない内に、それを僕に見せてくれた。

「こういうった形状の気味の悪いモノだ」

「ぶふうっ！」

「蓮つてマジ絵心ねーな！ つはははは！」

十秒で描けるのかと期待した僕が浅はかだった。思わず吹き出してしまったではないか。

何だこれ。スーパーマリオのクリボーみたいなバランスの悪い頭には、これまたぐる

ぐる巻きに描かれた目ん玉二つ。上顎と下顎の区別のつかない歯並び。まるでキノコの柄のような胴体。そこから生える手と足のような何か。

僕も絵は上手い方ではないが、蓮の絵はもつと酷いと思った。爛々と絵を見せる蓮の真顔が、あまりにもシユールだったのが印象深い。

後に聞いたのだが、蠅頭とは、人を呪えるほどの力すらない最低級の呪いの総称なのだそうだ。

自分の首に手を回しながら、僕は蓮の質問に答える。

「で、映画館で視なかつたか？」

「い、いや……視てないよ。そういうのがはつきり視えるようになったの、最近なんだ」

「——そうか、分かつた。」

「おーん、じゃあもう聞く事ねーや！」

「え？ もう終わり？」

「終わり終わり。一応俺らの上司……？ みたいな人が来るまで、待つといてくんない？」

「ここは大人しく頷いていた方が良さそうだ。」

あの人の言葉の通り、蓮と悠仁と仲良くなるため、僕なりに会話を試みる事にした。

「二人は、映画館に調査に行ったの？」

「そうだ。詳しいことは話せないが……」

「ああ、やっぱりそうだよね。ごめ——」

「——映画館で通報があった後、オレ達は現場に直行した。引率の人と共に……」

「いや言うんかいっ!？」

どっ、と僕らの空気が笑いに包まれる。

「あれはそう、雨の降る日の出来事だった……」

「……」

「雨の降る日の出来事だった……」

「あつ、回想に入るんだね?」

では、僕の一人称視点は一旦お預けだ。

#### 4.

〈2018年8月20日〉

〈放課後〉

神奈川県川崎市は雨模様。じめじめとした湿気と夏の猛暑で鬱陶しい。土砂降りという程でもない雨の中のとある映画館では、人集りが発生していた。その大半は、物見遊山に携帯で写真や動画を撮るばかりの人間であった。

雨音に掻き消されてよく聞こえないが、救急車のサイレンも聞こえてくる。雨合羽を着た警官達は、本部へと報告したり、人集りに離れるように注意したりと、職務を全うしているようだ。

その雨の中、目立つ三人の男がその映画館の前に居た。キープアウトと書かれた危険表示バリケードテープが、映画館入り口に蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

男三人の内、二人は何者かを我々は知っている。一人は我々が雨宮蓮、もう一人はここ最近出番の無かった虎杖悠仁である。そしてその二人の前に佇むのは、金髪を七三分けに掻き上げている、七海建人<sup>ななみけんと</sup>であった。

建人の出立ちは、テンプルの無いサングラスさえ無ければ、どこにでもいるような窠<sup>やっ</sup>れかけのサラリーマンそのものであった。色素の薄い肌も相俟って、何某かの病に罹っているのではないかとの印象を受ける。

しかしそのサングラスを支えられるほどに鼻が高いのは、彼がデンマークの祖父を持つクォーターであるが故。

明るいグレーのスーツを着こなす彼は、青いシャツがスーツに映えている。斑模様ネクタイは、どこにそのデザインの物が売っていたのかと問い詰めたいほどに似合っている。

「行きますよ」

「応ー！」

「はい」

鼻にかかった良い声を二人に掛ける。

建人との出会いは、数刻前に遡る。ちょうど本日の昼前の出来事であった。雨宮蓮と虎杖悠仁は、師・五条悟の出張により、本日受けるはずだった任務の引率を肩代わりしてくれる後輩を紹介された。

「回想の回想!? 聞いた事ないよ!?!」

「今オレが作ったからな」

「構成の練り方が下手くそ過ぎない……?」

以下、回想之回想。

「という訳で、脱サラ呪術師の七海建人くんデウス！」

「その言い方止めてください」

悟の方は仲良さげに建人の肩を組むのだが、建人の方は、顔には出さずに、しかし嫌そうにして腕を組み棘を吐いた。悟が難なく肩を組めるといふ事は、それだけ建人の身長が悟に近いという事でもあった。

「呪術師って変な奴多いんだけど、七海コイツは元サラリーマンなだけあってしつかりしてんだよね」

「その変な奴筆頭のあなたには言われたくないでしょうね」

(グラサン……?) 呪術師って、目元隠してる人多いなあ。何か理由でもあんのかな?)

「目元を隠す事とは、視線を隠す事だ。呪霊相手に視線を悟らせないように、ああいったサングラスを掛けている術師は多いようだ」

「ナチュラルに心読むなよ蓮」

「オレの場合は仮面にペルソナを仕舞っているからなんだが」

「初めて聞いたけど別に聞いてないんだけど」

「というか、まずは挨拶からでしょう。初めまして、虎杖悠仁くん、雨宮蓮くん」

「アツはい。初め、まして……」

「よろしく願います」

蓮は早くも順応しているようだが、悠仁はイマイチ、建人との距離を測れずにいた。

「七海さんは、なぜ最初から呪術師ではなくサラリーマンを？」

「……いいでしょう、質問にお答えします。」

私が高専で学び気付いた事は、呪術師はクソという事です！」

「はい？」

割とマジと書いて本気の形相で建人は言う。悠仁は素つ頓狂な声を上げた。

「そして社会に出て気付いた事は、労働はクソという事です！」

「そーなの!？」

「分かる」

「蓮分かるんだ……」

コンビニでアルバイトをしていた蓮は、時折現れる迷惑極まりない客の対応にも苦難した。目の笑っていない能面の笑顔を貼り付けながら、心の中で  
 ゴー・○○○○・ユアセルフと中指を立てながら叫んだのは言うまでもない。

「同じクソならより適性のあるクソを。出戻った理由なんてそんなモンです」

「暗いねえ」

「ねー」

「虎杖くんも雨宮くんも、私と五条さんが同じ考えとは思わないでください。私はこの人を信用しているし信頼しています」

「ふふん♪」

上機嫌にキメ顔をする五条悟。ああブン殴りてえと無条件で思わせるその態度は、一体どこの誰が植え付けたのだろうかと蓮はふと疑問に思った。

「ですが尊敬はしてません!!」

「あ、あん、!?」

「上のやり口は嫌いですが、私はあくまで規定側。」

要するに私は、あなた方二人を、まだ術師とは認めていない」

「……………」

「両面宿儺という爆弾<sup>呪物</sup>、常に危険に晒されている特級という爆弾<sup>称号</sup>……それを抱えていても尚、己は有用であるという事の証明に尽力してください。それが、爆弾<sup>責任</sup>を背負うという事です」

——そうだ。我々二人は子供であれど、社会を知らない訳ではない。むしろ、呪術師という公にならないだけの社会人だ。責任を金と引き換えに背負う人間だ。

ならば、責任を果たせる事を、目の前の社会人に見せつけるしかないのだ。

「……自分の役に立たなき加減は、最近身に染みてる。どれだけ役立たずなのか、自分でもよく分かつてる。」

言われなくても、認めさせてやつから。もーちよい待っててよ」

そう言つて悠仁は、ムカつくくらい清々しくキメ顔でそう言つた。

「ムカつくつてどーゆー意味だよ!」

「黙秘権を行使する」



「ムツキー!!」

「あはは」

対する七海建人の答えは――

「いえ、私ではなく上に言つてください」

「あつハイ……」

「ぶっちゃけ私はどうでもいい!!」

「ハイハイ分かつたつてば!」

清々しいまでの責任逃れを感じた。

此レニテ回想之回想終ワリ。

さて、場面は映画館内に移り変わる。

冷房の付いていない、そもそも隅々まで掃除の行き届いていないタイル張りの道を進みながら、蓮はジョーカーへと変身する。

悠仁は蒼炎に包まれる蓮を見て、カーペットに引火しないか心配だなあ、と結構呑気していた。その隣で、建人のサングラスに隠れた目を尖らせたの知らぬまま。

「シゴトの時間だ」

「うし、ちやつちやつとやつちまおうぜ、ジョーカー」

「……ジョーカー？」

「オレのこの姿での名だ」

「歳上には敬語を使いなさい、ジョーカーくん」

「問題点そこ?!」

なんならちやつかり建人もジョーカー呼びしている。おそらく本能で、この姿のまま「雨宮くん」と呼んでしまったら「オレはジョーカーだ」と口酸っぱく訂正される事に気付いたのだろう。面倒臭い事は先に済ませるのが、建人の社会人としての掟であった。

そして三人は、現場であるシアター席へと辿り着いた。

赤い座席が、血液によって更に赤黒く染まっているのが分かる。ヘモグロビンが酸素を失っていることで血液が固まり、赤褐色に変色している。この様子だと、事件発生からは数刻程度しか時間が経っていないだろう。つまり、事件発生からそう遅くはない。

「さて二人とも、視えますか？」

「ああ」

「え？ 何が？」

「呪力の残穢です」

「ちよつと待って……つすうー、いやあ全然視え——」

「それは『視ようとしな』からです」

「あの、台詞言わせ——」

「どうやら相当強力な呪霊のようだ。ここまではつきりと濃い残穢は見た事が無い」

「いやちよ——」

「ふむ、どうやらジョーカーくんは目が良いんですね」

「五条先生には劣るさ」

「その目は大事にしなさい。職業柄、失明する術師は少ないのだから」

「久々の出番なのにこの扱いはないでしょ!？」

「何してるんです、早く目を凝らして視てみなさい」

「理不尽っ!」

哀れなり悠仁。

さて、早速悠仁は、両目に呪力を込めるようにして目を凝らす。呪力で眼球を強化すれば、術師は普段以上の視覚を得、普段は見えない呪力の残穢も見破る事が出来るようになる。数秒ののち、悠仁は何やら靴跡のようなものを発見する事に成功した。

残穢とは、術式を行使した後その辺りに漂う呪力の残り香。その残り香が少なければ少ないほど、敵は相当な手練れであるという意味を表す。

だがジョーカーは、この残穢が何やら不自然に思えてならなかった。

「おー、視える視える!」

「当然です。視る前に気配で見破ってこそ一人前なのですから」  
「ぐにに……」

「その点で言えば、ジョーカーくんの年齢で、彼ほど気配に聡い同い年の術師はほぼ類を見ないと言っていていいでしょう」

「褒められた」

「いな」

「だからこそ、過信してつけ上がり油断しないように」

「下げられた……」

「ありやま……」

そうアドバイスを残して、建人はすたこらさつさと我先に残穢を追う。ジョーカーに続き悠仁も後を追う。その途中、悠仁は建人に問い質した。

「あのー、ちよつと厳し過ぎない？ もつとこう、褒めて伸ばすとかさあ？」

「褒めも貶しもしません。事実在即し己を律する……それが私です。」

「社会も同様であると勘違いしていた時期もありましたが……いえ、この話はいいでしょう」

（ほっ、あぶね。長話になるとこだった……）

「……何やら聞きたそうな顔ですな虎杖くん。よろしい、では話を――」

「いえつ、結構つス！ それよりほら、呪霊祓いに行こーよ！」

「……では、追いましよう」

「気張つてこーぜ！」

「いえ、そこそこで済むならそこそこで」

「あひやつ……」

気合十分と己に喝を入れる悠仁は肩透かしを食らった。

どうやら何か、己とは根本的に敵に対する姿勢が違うらしいことを悠仁は悟る。

さて、建人の背中を追う二人は、最上階の非常口へと辿り着く。蝶番さえ錆び立て付けの悪くなったドアをゆっくりと開け、三人は屋上へ出る。

「監視カメラには、何も映ってなかったのか？」

「ええ。呪霊が一般人には視認できないように、カメラも呪霊を映さない。おそらく、呪霊の仕業でしょう。それも術式持ちの。」

被害者以外には、少年が一人居ただけでした。その少年の身元特定は警察——」

——不意に話を中断し、建人とジョーカーは気配のする左側を見ず、警戒態勢を取る。

実の所、ジョーカーは気配を悟れるほどの実力は無い。しかしこの雨音という雑音の中、ジョーカーの地獄耳は確かに捉えたのだ。ペタペタと、およそ素手や素足で地を徘徊する音を……！

見ると、そこには四足歩行の……

(何だ、コレは)

……分からない。犬のような四足歩行で、その実、犬と呼べるほどの特徴は無い。

いや実際、尾骶骨の部分からは一定量の毛が束で生えているが、それだけだ。体付きを見て、到底犬やら猫やらの筋肉とは一致しない。左腕に何かを付けているが、サードアイを行使する暇もなく、ジョーカーは新たな気配に気が付いた。

頭部からは髪の毛が生えており、剥き出しの歯は人間のそれに酷似している。目は羊のように、ほぼ360度見渡せる構造位置に存在しているが、ギョロギョロと焦点が合っていないようにも見えた。

「お、お、つ、お、べんどつ」

(——呪い!)

「悠仁、後ろだ」

「あん?」

ジョーカーに止められて、悠仁は振り向く。

「い、い、い、せんぎ、い」

「お、お、ね、えぢゃ」

今度は四足歩行ではなく、二本足で立つそれが二人。

一人は先程悠仁達が登ってきた階段のすぐ横にて、大理石のように白い肌で、人間の手を合わせながら何かを言う。目と口と呼ぶべき部分は、人間のそれとは90度回転して点在している。まるで漫画『不安の種』に出てくるオチヨナンさんを連想させた。

片やもう一人は、紫苑色の躯体を反らし、髪を後頭部と呼ぶべき部分で結っており、目の部分が耳に、耳の部分が目に存在していた。歯軋りを五月蠅く繰り返している。

「あなた達はそちらの二体を。勝てないと思つたら——」

「——いいや、勝つよ！」

「こちらの心配は無用だ」

そう言つて、拳を鳴らして構える悠仁、ポーチを弄り高専の倉庫から拝借した刀を正眼にて構えるジョーカー。二人の表情には、敗北の恐れも、勝利への懸念も無い。

だが建人は、それを黙って見ていられるほど、無責任な大人ではなかつた。背中に仕込んでいた、布に覆われる肉切り包丁型の呪具を抜き、建人は臨戦態勢となる。

「私は大人です。大人は、子供を守る義務がある。キミ達はいくつか死線を超えてきたが、それで大人になった訳ではない。

枕元の抜け毛が増えていたり、お気に入りのお惣菜パンがコンビニから姿を消したり  
……。

——そう云う小さな絶望の積み重ねが、人を大人にするのです。」

軀の中で鳴り響くバト・レ・カンタービレ。雨の中だろうが関係ない。それに身を委ねるように、三人は一齐に標的へと向かう。

手始めに、建人は語り始める。

「私の術式は、対象に強制的に弱点を作り出すもの。対象を長さで線分した時、七対三の比率の点で攻撃を与える事が出来ればクリティカルヒットです。名を《十劃<sup>とおかくしゅほう</sup>呪法》と言います。

……聞いていますか二人とも？」

「はっ? つくー!」

「えっ、俺達に言ってたのおおっ、うおおおお!?」

大理石の敵とスクラム勝負は悠仁の負け。野球コートに吹き飛ばされて、悠仁という球は見事ホームランを達成した。

片やジョーカーも、説明を聞きながらの戦闘はやはり厳しいものがあるようで、紫色の敵の攻撃を往なす事に精一杯だった。

「いつでえ……そーゆーのってバラしても良いモンなの?」

「バレても問題のない術式、問題のない相手、あるいは相手にミスリードを——」

（いや呪いに集中してえんだけど!? 話聞してる余裕無えんだけど!?）

「——メリットはあります。『手の内を晒す』という縛りが、術式効果を向上させるので



す」

そう言つて建人は——見るからに先程以上の呪力を纏う。ジョーカーもそれを、尻目ながらに観察していた。

四足歩行の敵がやってくる。馬鹿正直に突撃してくる。常人であればそのタツクルに内臓を破裂させてしまうそれを——

「こんな風」

——瞬間、建人の世界は静止する。『そこそこ』高めた集中力が、建人自身の体内時間を遅らせていく。

その程度の瞬間さえあれば、建人にとって、その手足を七対三で撫でるのはいとも容易い——！

「フンッ」

斬、という音が一息に聞こえ。

瞬、という音が後からやって来て。

いつの間にか、敵はその手足を七対三に分たれていて。

鈍と罵つた布巻きの肉切り包丁の峰には、血が数滴垂れており、煩わしく振り払つた。一級術師としての、ベテランの風格がそこにあつた。

(凄え……)

「私からは以上です。

ああそれと、虎杖くん後ろ」

「はいっ？　ってうおっ!!？」

感心しているのも束の間、敵の唐突な攻撃に対処出来ず、悠仁は体勢を崩し、ずぶ濡れの人工芝生に体をつっ込んでしまった。

「余所見は感心しませんね」

「話し掛けたのだあーれ!!？」

ああもうばっちいなと愚痴を吐きながら、渋々悠仁は立ち上がる。

その向こうでは、大理石色の敵が、あまりにも無視されているのに耐えられなかったのか、大声で怒り始める。

だがそれは、今の悠仁にとっては威嚇足り得ない。

「フウ……」

戦い方は、この地獄の一ヶ月間で身に染みている。呪力操作も、矯正された喧嘩道も、全て悠仁の体が覚えている。

師に教わった事を思い出せ。蓮との組み手を思い出せ。

——あの刑務所での苦渋を思い出せ。

「!!」

二つの青い負のエネルギーが、悠仁の拳に集まっていく。

——悠仁の呪力は、遅れてやって来るね。

そう言ったのは、師である五条悟本人だった。稽古をつけて貰ってはいたものの、一本も取れずに苛立ちを覚え始めた頃の事だった。

何でも自分の呪力は、己の体の瞬発力に追い付いていないらしい。その上、呪力を一点に留める技術も未熟故に、拳の軌跡に残りがちになるのだが、逆にそれが、変則的な呪力の流れを作っているとの事だ。

例えば、拳に100%の呪力を込めたとしよう。ジョーカー含む他の術師は、それを敵に100%ぶつける。至極当然の事実だ。

だが悠仁が拳を振り抜き相手に叩きつける時、それは拳<sup>防御のために捻出している分</sup>全体の10%以下でしかない。本命は二度目。『拳が当たった』と認識した直後に、100%の呪力分<sup>攻撃のため捻出した</sup>がやって来るのだ。

だが一打目の攻撃も、それはそれで有効打。これでも十分、呪霊にとつての攻撃足り得る。

一度の打撃に際し、悠仁は二度の衝撃を強制的に与える事が出来る技を、悠仁は一ヶ月で編み出した。

其の技の名は——

「——《けいていけん逕庭拳》！」

果たしてその拳は、敵の左胸、ちようど心臓部分へと突き刺さり——その刹那、二度目の呪力によって、その胸と背中を貫通する。

これこそが、一ヶ月の修行の成果。ジョーカーでさえ真似出来ない、虎杖悠仁だけの武器。戦略が命中し、悠仁は微笑む。

（素の力が人間離れしている……初撃は少ない呪力によるものだが、それでも並の術師の120%の威力が成立している。そして二撃目に、それ以上の呪力の衝撃。やられる側は想像以上に嫌でしょうね。

100%の体術と、100%の呪力が合わされば……やはりあの人が連れて来ただけはある。

さて……)

ジョーカーとて、悠仁の血の滲むような修行期間中に何もしていなかった訳ではない。コープやら修行やらを進め、以前のジョーカーからは考えられないような、新たな武器を手に入れている。

（真希との稽古の成果だ）

手に握る、銘の無いただの日本刀に赤黒い呪力を込めていく。以前の恵との組み手では、ただやたらめったらに叩きつけるだけしか出来なかったが、此度はそうは問屋が卸

さない。

霞の構えのまま、刀全体を呪力で覆っていくその刹那——建人はジョーカーの背中に、赤黒い悪魔を幻視した。

その覇気に気圧されて、紫苑色の敵は後退り、退避を決意して——

「甘いな」

——その逃避の隙をジョーカーは逃がさない。呪力でより鋭利になった刀を振り下ろし、左腕を斬り飛ばした。だがまだジョーカーの攻撃は終わらない。後方バック宙返りの後に、トカレフをその左脚に一発見舞う——！

（見事な身体性と成長性だ。刀を握ったのは少し前とあの人は言っていたようですが、それでよくここまで立ち回れる。そして極め付けにトドメの銃撃。こちら側に一切の隙を与えないその戦法が、まるで——）

H O L D   U P !

その建人の思惑も知らぬまま、二人はもう二人の敵を囲む。アイコンタクトを取るまでもなく、二人は同時に猛攻を——

5.

「という事があった」

「……」

呪術師とは、斯くも厳しい世界なのか。

それに比べ、僕は何と自堕落な生活を送っているのか。

羨ましい。妬ましい。

誰かのためにそこまで出来る、そこまで怒れるその人間性は、今の僕では発露出来ない。

それほどの力を誰かに使いたいと思う気持ちだが、僕には足りない。

そんな、正義の味方のような仕事が出来たらなら。

少しばかりでも、そんな勇気が持てたらなら。

僕は、居場所を奪われずに済んだらどうか。

「な、順平、あの映画館で何観てたの？」

「……いや、昔の映画のリバイバル上映だから、言っても分かんないと思うよ？」

「いーからいーから」

「……『ミミズ人間3』」

「うわでた」

「アレ超詰まんねーよな！ そのせいで何度殴られた事かつ！」

「殴られたの!？」

「オレは目ん玉をひん剥かれ、睡眠も瞬きも許されないまま二十四時間……」

「ルドウイコ療法!? ってか別の映画じゃん!」

「でもさ、2はちよつと面白かったんだよな!」

「ああ、それはオレも観れたな」

「そつ——そうなんだよ!」

ははは、と笑いながら語り合う。

いつ以来だろうか。居場所を奪われてから、誰かと楽しい会話をした事なんて。

あの人の言う通り、やっぱり呪術師この人とは気が合うのかもしれない。

「でも最初、何で面白いのか分かんなかったからわざわざ3回観たよ。グロ描写も一番

キツかったなあ……」

「そこまでする熱意やべーな」

「……ねえ、虎杖くんも雨宮くんも、映画好きなの?」

「オレは大体、一ヶ月に一、二回くらいの頻度で観に行くな」

「俺もこの間、蓮と一緒に観に行つたわ。漫画の実写映画でな、俺その漫画好きだったん

だけだよ……」

「ああ、アレね……」

「漂白だな」

「和訳した!？」

僕もあの映画は観に行つた。アクションやCGは凄いと思つたが、いかんせん演技が微妙だった事を覚えている。正直五百円くらい返して欲しいと思つた。

「やっぱ実写映画はアレしか勝たん!」

「ヴァガボンドソードハートか」

「今度は英訳!？」

あの映画はカッコよかつた。原作を上手くかつ無理なく現実に落とし込んでいたし、何より殺陣の完成度も高かつた。正直もう五百円プラスして払いたいと思つた。

「やっぱ映画観るなら映画館だな。最近はお家映画だったから、余計にそう思うわー」

「オンデマンドも便利だけど、やっぱり直接映画館に行つて観る方が良いよね」

「オススメの映画あつたら連れてつてよ。連絡先交換しよーぜ」

「えっ!？」

「オレも、そこまで映画に詳しいわけじゃないから頼む」

「ええっ!？」

「えーつと、友達追加つてどうやんの?」

「悠仁は本当に携帯機器に疎いな」

まさかまさかだ。



先ほど会ったばかりの、それこそ映画の話しかしていないのに……一気に二人も友人が出来てしまった。尻込んでしまうような勢いで、あつという間にSNSの友達追加が終わった。

現実味を帯びないまま、僕の携帯の画面に、新規連絡先追加を表すNEW!の文字があった。母親とシネマ公式の二つしか無かったSNSに、二人も。

正直、困惑した。僕程度の人間に、友達が出来るとは思っていなかったのだ。高校でも狭いコミュニティで交友していたけれど……それすらも奪われてから、僕はずっと独りだった。

だからこそ、困惑以上にずっと、嬉しかったのだ。

「あれー、順平?」

と、感情に浸るのも束の間、後ろから僕に声を掛ける女性の声があった。僕を呼ぶ女性なんてただ一人だけだ。

「母さん!」

「こんなトコで何してんのー? その子達、友達?」

「さつき会ったばかりだよ」

「さつき会ったばかりかの友達でーす!」

僕の母にして唯一の肉親、吉野<sup>なま</sup>凧。

母親に対しこう語るのもなんだが、僕の母親は結構な美人だと思う。垂れ目の二重瞼は、額を魅せるかのように前髪を風いだショートボブで、より鮮明に見える。V字型の長いTシャツとジーパンというファッションだが、人つ子一人を産み落としたにしてはスリムなスタイルが良く映える。

左手には、買い物帰りだろうか、ネギの覗くビニル袋。そしてその右手には……

「母さんっ!」

「ん? ……ああ、ごめんごめん。アンタの前では吸わない約束だった」

……嫌な記憶を蘇らせる、煙草が握られていた。

迷惑を掛けているのは分かっている。母も自由に吸いたいだろうけれど、どうしても……右額の傷が疼くのだ。

「友達は何て子?」

「俺、虎杖悠仁っス!」

「雨宮蓮です」

「お母さん、ネギ似合わないっスね!」

「おっ、分かるう? ネギ似合わないオンナ目指してんのよ」

「どういう事……?」

「どうだ悠仁、オレ、ネギ似合うか?」

「似合わねー!」

「めっちゃ似合ってたねー!」

「そのネギはどっから出て来たの!?!」

悠仁と母の謎理論と、いつの間にかネギを持っていた蓮の唐突な真顔のボケに、僕はツッコまざるを得なかった。でないとならぬと収集がつかない。何だこのカオスな空間。

……蓮はネギを持ったままセーラーームーンのポーズを決めるな。母さんも真似しな  
いでくれ。

「悠仁くんも蓮くんも、晩飯食べてかない?」

「ちよ、ちよつと、迷惑だろ!」

「あ、ん? アタシのメシがメーワクう?」

そんなやりとりをしていると、ズギューンと、平穏な日常に似つかわしくない銃声が聞こえた。

出所はどこだろうと周囲を見回す……までもなく。

その直後にぐごごご……と唸る様な音が聞こえた。

正しく、悠仁の腹の虫の音だった。

「……嫌いなモンある? アレルギーは?」

「無いっす!」

「オレ、手伝いますよ」

「いーのいーの！ お客人なんだから！」

## 6.

母に促されるまま、僕は帰路を辿り始めた。

夕焼けが一層濃くなり、蟋蟀こおろぎの鳴く夜が近づいてくる。住宅街まで着いたら、もう少しで僕の家だ。

一方通行の道路を、会話を弾ませながら歩いていると、目の前から一人のセーラー服の女子中学生が歩いて来た。

おそらく部活帰りの子だろう。地元の中学生……それもソフトテニス部か。スポーツウェアを着て、白を基調としたヨネックスのラケットバッグを背負っている。170センチほどか、自身の身長半分程度はあろうかという大きなバッグを、通学鞆諸共よく背負えるものだと感じしていると――

「ああああー！」

その子が、僕らを指差して、ドラクエで適当に名前を決める時のように驚いている。何事ぞ、と思っていると、その子がずんずん近づいてくるではないか。

遠くだったのであまりはつきりと分からなかったのだが、その子は別嬪であった。長

い睫毛と二重瞼は、彼女の魅力を引き立てる。艶のある黒髪はセミロングで、左顛顚部  
分をピンで留めており、歩みを進める度にきめ細やかに揺れる。

今日は知らない人によく会う日だなあ。と考えていると、その子は蓮の目の前にて落  
ち着いた。

「雨宮先輩じゃないですか!?!」  
あのみや

「概ねその通りであつて非常に惜しい気がするが、しかし人を常日頃『冷やし中華始めました』と歌っている有名なピン芸人のような名前で呼ぶな。オレの名前は  
あのみや  
雨宮だ」

「失敬、噛みました」

「人の名前を噛むな」

「噛みまみた!」

「だめだこりゃ」

そうは言いつつも、蓮はこのやり取りを楽しそうにしている。周囲が困惑するのも気にせず、二人は二人だけの空間で笑い合っている。まるで、知己の間柄というより――

「――久しぶりですね、蓮先輩!」

「ああ。久しぶり、瞳」

「お知り合いの子?」

「はい。中学の時の後輩です」

「初めまして、松岡瞳まつおかひとみです」

そう言つて瞳さんは一礼した。とても礼儀正しい子だと認識した。

松岡瞳という名を、僕は聞いた事は無い。ただ、悠仁には聞き覚えがあつたようだ。

「あれ、瞳!」

「あつ、虎杖先輩。ちーつす」

「俺だけ挨拶が雑?!」

あーつ、そう言やあ瞳、神奈川に引つ越すつて言つてたな!」

「はい。あの、その節は先輩方にどうもご迷惑を……」

「良いんだ。ただ、困つてる人を見過ごす事は出来なかつただけだ」

「俺達が好きでやつた事だしさ。あんま気に止む必要ねーつて」

「俺達が（私の事を）好きでやつた……!?!」

「途轍もない誤解を生んでる気がするんだけど」

「はっはっは、元気があつて非常によろしい」

僕と母が一言言つと、松岡さんは僕らを見つめて蓮達に問うた。

「あの、そちらの方々は? 先輩方のご友人ですか?」

「あつ、えつと、僕は吉野順平って言います」

「さつき会ったダチ公な！」

「さつき会った人を友達と呼べるとは、流石は虎杖先輩……コミュニケーションお化けですね」

「んで、その母の吉野風です！」

「母!? お、お若いですね……！」

「やだもうつ、おばさん感激っ！」

褒め言葉に頬に手を当て、体をくねくねつと畝らせて喜ぶ母。それを静観する僕。母さんってこんな性格だったわけ……いや、こんな性格だったような気がする。むしろ今までは、僕に遠慮して、己の内を晒せなかったのかもしれない。

「んー、ご飯食べさせてあげたい所なんだけど、具材足りるかなあ」

「会う人会う人にご飯食べさせるね母さん……」

「なら、オレの方からも出しますよ」

「えーっ！ 悪いよ！」

「良いんです。腐らせてしまうよりかは」

そう言いながら、後ろに右手を回し――

「よほど良い」

「いやだからその食材はどっから出て来たの?!」

——沢山の食材をエコバッグに入れてあるまま取り出した。パンパンに詰まっているのが見て分かるが、器用な事に、食材の何某かがはみ出すような事はなかった。

だが思わずツッコんでしまった僕は悪くない。

「四次元ポケットだ」

「何でもそう言えば解決すると思っただけ!?!」

「半分冗談だ」

「半分!?! 何それ!?! 二十二世紀でも無いのにドラえもんの秘密道具が作られてるって

コト!?! オーバーテクノロジーなんだけど!?!」

「良いツツコミですな順平さん。私の次に上手です」

「キミはどっちかを議論するまでもなくポケ担当だよね!?!」

「さー、上がって上がって!」

「あの、本当に良いんですか? 私ほぼ部外者なのに」

「いいのいいの! さーっ、今日はぱーつとやっちゃおうか!」

母にそう言われて客人の三人は、連れられて僕の家に向かう。

瞳さんはスマホを取り出し、どこかへとSNSで連絡を取っている。おそらく親御さんに断りを入れるのだろう。……なぜか蓮と悠仁とでセルフイーを撮っている。証明写真のつもりなのだろうが、あれは証明写真として成り立って良いのだろうか。



……あれ、何か蓮に関して見落としていないだろうか？

よく思い出そう。蓮の持つエコバッグは整頓されていて、ぎゅうぎゅう詰めなのに中身が潰れないようになってる。硬いものを底に、柔らかいものを上に置くのであれば

「——つて、さっきのネギどこ行ったの!？」

ツツコんだ僕を、蓮はただ楽しそうに妖しく笑うだけ。

けれどその目は、何か思い詰めているかのように、全く笑っていないかった。

その直後、SNSから何かメッセージが飛ばされてきたけれど、それを見る暇も無く、僕はあの四人の後をについて行った。

## 7.

スパイスの香りだ。食欲を唆らせる、芳醇な香り。何だかいつになく、激しくお腹が空いている。

腹が減るのは生きている証。嬉しかろうが寂しかろうが、楽しかろうが悔しかろうが、生命あるものは腹が減る。

僕は食が細く、一般的に見て僕の体型は、健康的と呼ばれる基準を満たしていない。引きこもりになってから、少食はより顕著になった。

だのに。

さつきからお腹が空いて堪らない。腹の虫が鳴いている。飢餓状態一歩手前だ。何かものを口に入れないと死にそうだ。

特にこのスパイス漂う先にある、美味なるものが食べたい。

テーブル席に座る僕を含めた四人、全く同じ考えだった。

「やっぱ蓮の料理つつつたらカレーだよな〜」

「良い匂いですね……」

「主婦として負けている気がする……結局台所も占拠されちゃったし……」

「ねえ、蓮って前世が主夫だったりとかしない？」

「よく分かったな」

「えっ、本当に主夫だったの？」

「冗談だ」

「分かりづらいよ!」

「本当は喫茶店の店主だ」

「割と近いね!?!」

悠仁が蓮の料理を語り、瞳さんが香りに恍惚な表情を浮かべ、母が落ち込み、僕が問い、キッチンに立つ蓮がボケる。

「……うん、思った通りの味が出た」

蓮はそんな家庭的な事を口にして、小皿に移したルウを嗜む。それだけで、もう僕の涎は溢れ出る。汚らしいと熟知しているが、飲み込んでも飲み込んでも唾液が止まらない。

「さあ、出来たよ」

『おお〜！』

僕の心情を語っていたら、いつの間にか出来上がっていたようだ。

レエドルでルウを掛けて。

ゴロゴロと野菜のダンス。

コロコロとお肉も混ざる。

隠し味は何でしょう。

ライスと手を合わせていただきます。

「あむ」

一口目を口にした瞬間、僕の脳に雷が走った。

そう、一口。たった一口。

それだけで僕は、艶やかな米と香ばしいスパイスによる最高の調和を思い知らされた。

「おっ——」

美味しい——その一言を言うくらいなら、更に口に掻き込みたい。

いや、失礼だとは分かつている。ご飯を作ってもらっている分際で、「美味しい」の一言も言えないのかと。

だがそれでも、醜態を晒してでも、恥を捨ててでも、この料理を口にしたい。

目の前のこれはただのカレーではない。カレーの形をした奇跡だ。カレーという名の神だ。

だからこそ、僕はこの奇跡に感謝しなければならない。

言うべきなのだ。たった一言を。たった一口我慢するだけで良い。

この出逢いと、このカレーを形作る全てと、これを形作ってくれた蓮に。

「美味しい!!」

「それは良かった」

ああ、阿呆らしい。

一体僕は、何に悩んでいたんだろう。

カレーの辛味が、虐められていた過去だとか、右目上に出来た傷だとか、奪われた居場所に馳せる思いだとか、そんなものを全て僕の頭から吹き飛ばした。

「やっぱ蓮のカレーが一番だわ！」

「おいひいれふ！」

「んぐまつ!? えっこのレシピ、蓮くんが編み出したの!？」

「いえ、義父さんから教わったんです」

「へー、お前の父ちゃん料理上手いのな！ 初めて知ったわ」

いつ以来だろう、大人数と囲んで食事するのは。

小学、中学と進んでいく内に狭まって行つて、高校で誰一人としていなくなつてしまつたのだ。

やがて蓮も席に着き、五人での食事が始まる……。

8.

「——でね!? たかしくんが自信満々にさあ、『これは外来種の幼虫だー！ 毒があるかもしれない!』つて言うからさ、俺箸で摘んでみたらさ、なんと糸こんにやくだったんスよー！」

「たはーははははっ！」

「糸こんつ、糸こんだつてっ！」

「母さん、呑み過ぎだよ」

「虎杖先輩、モノボケおねしやー！」

「松岡さん場酔いしてない？」

「ウイルソーンっ！ 許してくれウイルソーンっ！」

「ぶふっ！ 悠仁それ、キャストアウェイだろ！」

「せいかい」

「えーそれ映画ネタ？ 分かんない」

「蓮何かやってみる？」

「手品でもしようか」

「おーやれやれー！」

そんなこんなで夜も更けて、皆ハイテンションになっていた。母は既に缶ビールの三本目を開けて、顔を真っ赤にしている。松岡さんも空気に当てられてか、少しおかしなテンションになっている。悠仁がボケて、僕がツツコみ、蓮が芸を披露する。

この数刻の間に分かったのだが、蓮は手先がとても器用なようだ。カレーを作る時も、その包丁捌きに見蕩れてしまったのを覚えている。

悠仁が「やはり見事な包丁捌きだな」と言っていた気がしたのだが、悠仁自身は頬を押さえて、「いやー全然前世何も言っていないよー？」とめちやくちやに誤魔化していたのが記憶に新しい。

さて、蓮の手品は一体何なのだろう、と興味深く観察していると、急に蓮が苦しみ出

した。

「づつ、うつ、ぐぐぐぐぐ……」

「おっ」

「れ、蓮先輩？」

「むぐぐぐぐ……！」

そして右手首を左手で押さえて突き出し、松岡さんの目の前で片膝立ちになった。

硬く握り締められた拳の中身から飛び出してきたのは――

「っぽん」

――一輪の花、であった。

「わあー！」

「今はこれが精一杯……」

そして、その一輪を松岡さんの手に渡してやると。

「わ、わ、わあ……！」

あらゆる国の旗を、花の茎に結んでいた糸で紡いで繋ぎ、掲げていく。

まるで世界は自分のもので、その気になれば、いつだってどこにだって神出鬼没の大泥棒になれる……そう言っているかのように、彼はロマンチックであった。

「カリオスト口来たー！」

「あらま〜!」

蓮の器用さと魅力は、あつという間に僕ら四人を魅了してしまった。

その後も、細かすぎて伝わらない悠仁のモノマネや、蓮の器用な手品を楽しんだ。

だが得てして、楽しい時間とは早く過ぎ去るものだ。

楽しかった食事は終わり、現在は午後八時を過ぎた頃。ソファには先に、蓮と松岡さんが座っている。お互いの近況を話し合っているようだ。机上では、母・風がぐつりと眠っている。僕は母の背中に、毛布を掛けてやった。

「順平の母ちゃん、良い人だな」

「……………うん。本当に」

二年に上がる前。僕は母に、学校に行きたくないことを相談した。前髪が、右目を完全に覆ってしまえるほどに伸ばした頃のことだった。

「——良いんじゃない? 行かなくても」

「……………えっ?」

母は、僕を否定しなかった。

父と離婚し、シングルマザーとなった母に、迷惑は掛けなくなかった。だからこそ、僕は母に、いじめられていることを相談しなかった。……………けれど、もう色々と限界だったのだ。



何のために学校に行つて、何のために殴られて、何のために生きているのか。それを考える事が、とうに億劫になつていて。

吉野順平の心に罅が入つて、血は止まらなくなつていた。

「アンタくらしいの年頃の子は、何でも重く考え過ぎるからね。学校なんて、小さな水槽に過ぎないよ。」

水槽なんていくらでもある。何なら海だつてあるんだ。どの水に棲むかは、アンタで好きに選びな。

……今アタシ良い事言つた？ ふふつ、さつすが風さんだわ♪」

母は、こんな息子を受け入れてくれた。

駄々なんか、いくら捏ねたかなんて覚えていない。そんな僕でも、それでも良いと母は言つた。

砕けそうだった心を、母は救つてくれたのだ。母には頭が上がらない。大人になつた時、精一杯母に楽しませてやりたいとアバウトに思っているくらい、僕は母に恩義を感じていた。

「悠仁のお母さんは、どんな人？」

「うゝん、俺会つたことねーからさ。正直覚えてねーんだよな。父ちゃんの方は薄つすら記憶あんだけど……俺には、爺ちゃんが親みたいなもんだつたし」

「そっか……」

ブツ、ブツ、と悠仁の携帯が連続してバイブレーションする。おそらく昼に言っていた伊地知とやらから電話が来たのだろう。悠仁は断りを入れて電話に出た。

そして僕も、どんな映画を見ようかと、検索のために携帯を弄ろうとして――  
(あれ、蓮からメッセージが来てる)

ここですよやく、僕は蓮からのSNS通知に気が付いた。

蓮からのメッセージは、ただ一言、シンプルに。

『嘘吐き』と。

「――っ!? ちょっと蓮、これ!?!」

血の気が引く思いがした。何に関してかの嘘かは言わずとも分かった。

何故嘘がバレたんだ。いつ綻びを出した。

いや。

いつから蓮は、見抜いていたんだ。

「どうしたんですか順平さん?」

「い、いや、ごめん。珍しい映画を見つけたものだから、ちよつと蓮に相談しようと思つて」

「え、なんでですか?」

「その、ちよつとエグいからさー」

「ああ……」

そう言つて、何とか松岡さんを誤魔化している間に、蓮はさらに僕にメッセージを飛ばす。

『このままでは少なくとも風さんは死ぬ』

『メッセージで良い、正直に話してくれ』

『オレはキミ達を守りたいんだ』

しぬ。シヌ。死ぬ。

……死ぬ？ 何故？

そんな言葉と疑問詞が、頭の中を埋め尽くした。冷や汗まで出てきてしまっている。動悸が急激に早まる。荒ぶる呼吸を抑えられない。

蓮の質問には答えられなかった。

恐ろしかった。鉄面皮の下で、蓮はずっとこちらの出方を伺っていたのだ。

『何で』

『いつから』

もはや言葉になっていない文字を送る。キーボードを打つ指が震えている。

『生命あるものには癖がある』

『人においては、嘘を吐く時こそ、癖は十全に  
発揮される』

『順平にも、嘘を吐く時に癖があつた』

『オレはそれを見破つただけだ』

『だからオレは、順平が正直に話してくれるの  
をずっと待っていた』

怖い。

怖い。怖い。怖い。

気持ち悪い、気持ち悪い！

何だ。何なんだ。

僕は 何て生き物と 出会ってしまったんだ

『最初からな』

動悸が治らない。吐き気がする。あの三人の穢らわしい遺体を見た時以上に、この雨  
宮蓮という好青年が『気持ち悪い』。

その返信が来た瞬間、吐き気を抑え切れず、僕はトイレに駆け込んだ。鍵を閉めるの  
も億劫で、堪らず僕は、胃の中にあつた、美味しかったはずの蓮のカレーを全て便器に  
戻してしまう。

恐ろしかった。何もかもを見透かされているかのようだった。怖くて怖くて堪らなかった。

「げほっ、げほっ、……っづ、はっ」

無理に吐き出した胃液に器官が軋む。胃酸で喉が焼ける。

あの人達よりも、不良グループの奴らよりも。

蓮の方がよっぽど怖い。

本当に、得体が知れない。

「大丈夫か」

「……!!」

後ろからテノールの声が聞こえた。

振り向けなかった。振り向くだけの勇気がなかった。彼の顔を見るだけの希望は持ち合わせていなかった。

「それで、話す気にはなかったのか」

「……何なんだよ、キミは。」

人の心を見透かして、何でもかんでも分かったような気です！ 正義の味方気取って

！

何さ、探偵にでもなったつもりかよ!？」

痲癩を起こして喚く。みっともないのは分かっている。

だが蓮の言葉は、ひどく無感情に聞こえた。

「オレは悪党だ。美学のためならどんな罪も犯すような……そんな奴が探偵にも正義の味方にも成れる訳が無い。」

——お前の知っている事を教えてくれ。オレはただ、目の前の友達を助けたいだけなんだ」

僕がどれだけ拒否しても、蓮は僕の手を取る。

どれだけ嫌がっても、蓮は僕と同じ目線で聞く。

それがまるで、劣等感を刺激されているようで、とても嫌だった。

吉野順平から見た雨宮蓮の第一印象は、完璧超人だった。

学校に一人はいる、勉強もスポーツもルックスも性格も何もかも最優。非の打ち所がない羨望の対象。雨宮蓮は正しくそれだった。

だからこそ、僕は完璧が恐ろしい。

完璧とは、そこにあるだけで議論の余地が失くなる、畏怖の対象だからだ。完璧が一度『黒』だと言えば、それは間違いなく『黒』であり、それは揺るぎないものとなってしまう。

僕にとっては、不良グループの筆頭がその『完璧』であり、そして蓮はそれ以上の『完

壁』だった。

「……一つ聞かせて。

蓮の云う美学って、何？」

僕は初めてこの日、蓮を真正面に見て問うた。

蓮は、直ぐに答えた。

「『星』だ」

「……星？」

「そうだ。

フレデリック・ラングブリッジの『不滅の詩』は知ってるか？」

知っている……というよりは、読んだ事がある。この『不滅の詩』は、週間少年ジャンプを嗜む者に、聞き覚えはあるかもしれない。

二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。

一人は泥を見た。一人は星を見た。

この二文からなる、あまりにも短く、そして力強い希望の詩。

「オレは——譬え泥に塗れても、『星』を見ていたい」

蓮は、譬え囚人となったとて、星を見る囚人でいたいのだと云う。

その時、蓮の目が、まるで夜空に浮かぶ星のように一瞬煌めいたような気がした。そ

れが目を覆う涙によるものなのか、はたまた別の要因なのかは、今の僕の預かり知る所ではなかった。

二人の囚人、という所から、蓮とは真逆の志を持つ者がいたのだろう。一瞬悠仁の事かと思つたが、根明の悠仁が泥を見る人間とは思えず、疑念を払拭した。

この時、僕の蓮に対する印象がガラッと変わった。

蓮は僕が会つてきた人間の中で『完璧』に近い。けれど完全な『完璧』ではないのだ。『完璧』という名の『星』を目指す、一人の人間であつたのだ。

「ごめん。今は話せない。松岡さんがいるから。

でも、必ず話す」

立ち上がつて、やはり僕は蓮を見て言う。

「正直に言おう。今さつきまでのお前のように、腐つた現状を甘んじて受け入れている奴がオレは嫌いだ。

だからこそ、現状を打破しようと一步を踏み出したお前を、オレは心から尊敬する。この騒動が終わつたら、高専に招待するよ。今のお前なら、入学するに相応しい。

……さ、行こう。皆心配してるからな」

「……うん！」

何を観ようか。今となつては、とても悩ましい。



久しぶりに、名作の映画を観るのも悪くない。  
けれど、やはり。

どうせなら、ハッピーエンドの映画がいいな。

そんな事を思いながら、新たに紡いだ絆に誘われて、僕は一歩踏み出した。

翌日。  
 僕の母は、  
 下半身母のが無くよなうななつたな状態なで死んでいた。

PERSONA 5 in Justus Kaisei  
 Let's start the game.  
 #19 Juvenile fish and Retribution

# # 2 0

水槽の海月こそ この世の何より美しい

何も考えず 穢れなき軀で

箱庭の海を彷徨し

自分しかいない世界に 逃れられるから

9.

〈2018年8月23日〉

〈午後〉

「闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓えー。

おっ、出来た出来た」

そう言つて嬉々と語るのは、右手で掌印を結ぶ真人だった。

今にも降りそうな曇天の空の下、真人は、吉野順平が通う里桜高校の屋上にて帳を下ろしていた。側には二つの影があり、その影とは、継ぎ接ぎの目立つ夏油傑と昊？であつた。

夏油はいつものような五条袈裟ではなく、まるで高専関係者が着るような真つ黒な服装で、深々とフードを被っていた。昊？も相変わらず、真つ黒な服装を身に纏っている。「すまないね真人。残穢を残す訳にはいかなくてね」

「いやいいよ。帳の練習にもなるし」

「帳の効果は？」

「内からは出られず、外からは入れる……あくまで呪力の弱い人間はね。」

にしてもあの《指》、高専に回収させて良かったの？ 貴重な物なんじゃなかった？」「良いんだ。少年院の方は虎杖悠仁が取り込んでしまったから、気にしなくて良いよ。」

さて、住宅地で事前通知も無しに帳を下ろしたんだ。すぐに《窓》から彼らに連絡が行くだろう」

「チャンスは一度切り、か。ま、その方がスリルあつて好きだね。」

夏油は俺の計画が成功するのを——」

「無駄だよ」

真人の声を遮り、夏油は語る。

夏油は知っている。

あの男が何者で、どんな逸話を魅せて来たのかを、良く知っている。

この程度の困難など、雨宮蓮……否、クルスアキラならば簡単に乗り越えていくのだろ

う。

いや、そうでなくては困るのだ。

ヒトは《混沌》<sup>Chaos</sup>によつて進化し、乱世を乗り越えて来た。《律法》<sup>Law</sup>による規則が人々に齎すものは停滞しかない。《中立》<sup>Neutral</sup>などもつての外。

ヒトの進化には、現状の犠牲による《混沌》<sup>Chaos</sup>が必要だ。

そしてペルソナ使い達は、その心の内海に秘めたる可能性を、予想だにしない形で超えていく。

だからこそ夏油は、ペルソナ使いとその仲間期待しているのだ。

「雨宮蓮がいる限り、キミの計画は確実に失敗に終わる」

「そんなのやってみなきゃ分からないだろー?」

「理解<sup>わか</sup>るとも」

そう言いながら、夏油は去つて行く。確信にも近い笑みを浮かべながら。

「真人<sup>後始末</sup>を頼んだよ、昊?」

「……」

夏油の頼みに昊?は無言で答える。

やがて完全に夏油の気配がなくなつたあと、真人は愚痴を漏らした。それもそのはず、真人は自身の組んだ計画が崩れるとは露も思っていないからだ。

「ちえつ、何でそこまで雨宮蓮を特別視するのかな。特級であるのは周知の事実だけれど、それでも五条悟ほどじゃないだろうに」

「……直に汝も、身を以て理解する」

「もー、昊？までそんな事言うのー？」

「てゆーかキミの言うクルスナントカつて人間は、結局見つかつたの？」

昊？は答えない。布作面に隠れた双眼は、学校でも、真人にも向けられていない。

「あの蟻は我が潰す」

「パーカーのフロントチャックを解放し、風の随まにまに裾を翻している。

「その為だけに、我はこの世に産まれ落ちたのだから」

SINCE 1797という数字が背中にプリントアウトされた黒いパーカー。

それがまるで、我々の良く知るあの切り札の背中に似ていた。

昊？の意図の分からぬ真人は、溜息を吐くばかり。

10.

黒い服は、適当に母の筆筒にあつたものを引き摺り出して羽織つた。

昨日、母が死んだ。

その緊急事態が、順平の頭の中を埋め尽くした。

死因は、下半身が丸ごと食い千切られていたからだった。

警察に扮装した高専関係者が来る前、真人という呪い曰く、先日も食事に使ったテールの上に、呪霊達を引き寄せる『呪物』なるものが置かれていたとの事だった。

そして、こんな事をするのは金と暇を持って余したような人間だけだとも。

それを聞いた瞬間、頭が真っ白になった。

分かつていた事だった。言われていた事だった。計画していた事だった。

それでも、母の死に様を目の当たりにするのは、あまりにも凄惨で言葉にならなかった。

だから、順平は今日、久しぶりに学校に來た。始業式の翌日か翌々日は、文学や運動で好成绩を残した生徒の表彰のため、全校集会がある。狙うならそこしかない、順平は考えたのだ。

目的はただ一つ。

犯人であろう人物を、穢すために。

フラフラと家から出て。

腐った目で世界を見て。

失う物すらもはや無く。

何もかもがどうでも良く。

尸人しびとのような足取りで、行き慣れていた道を歩く。

——順平の術式は「毒」だね。

その道のりの中で、順平は師であり理解者でもある、自身を《真人》と名乗った《呪い》との対話を思い出していた。

——そう、僕は「毒」だ。

毒は毒らしく、昏く、そして狡く。

じわじわと翳って穢してやる……。

と、順平は、建前上の理由をつらつら並べてみた。

さて、そうしている内に、順平は行きたくも無かつたはずの里桜高校へと辿り着いた。里桜高校正門近くの体育館にて行われていたはずの全校集会は、生徒のほぼ全員がぐったりと力なく横たわって、気絶を強制されている。

ただ二人、とある生徒と教師を除いて。

「大丈夫か!? おい!?!」

教師の名は外村。昨日、順平の自宅へと無断で訪問していた、肥満体型の男性だった。髭の剃り残しが気になる彼は、次々と倒れていく生徒達を前に、パニックを隠せずにした。

教職として、生徒の体調不良等が原因による昏倒時の対応は、外村も理解していた。



だが、理解していても正しく行動出来ない要因がある。

何せ、あまりにも集团的に気絶しているのだ。自分以外のほぼ全員が。

外村は、倒れた生徒を揺すり、安否を確認し続ける事しか出来なかった。

「死にはしませんよ」

変な汗を垂らす外村に、いつの間にか入館していた順平は語りかけた。

「吉野!?! お前、無事なのか!?

いや、み、皆が……!」

「いえ、大丈夫ですよ。麻酔と同じ成分の毒を注入して眠らせました。後遺症とか、そういうのは考えなくても良いと思います。多分」

その言い分に、外村はギョツとする。嫌な予感と予想を、外れて欲しいと願いながら、外村は恐る恐る順平へと問うた。

「……何でそんなことが分かるんだ」

「はっ、決まってるでしょ」

——だが。そんな外村の願いを、順平は嘲笑う。

「皆を眠らせたの、僕だもん」

言つてほしくなかったたであろう言葉を、わざわざ声高に言い聞かせるように。

隠していた右目の前髪を掻き上げて、外村へと見せる。

右額に付けられた、忌まわしい疵痕を。

煙草のような、熱せられた物体を押し付けられた傷痕。痛々しく残る、決して消えない屈辱を。

「……！ お前、その傷は……!?!」

「そこでお得意の見てないフリでもしてろ」

そう吐き捨てて、外村を視界から外した。

順平の目的は外村ではない。犯人が誰なのかなど、名探偵めいて推理するまでもない。

壇上へと上がり、あえて麻酔を注入しなかった男子生徒へと対面する。

「吉野……」

男子生徒の名は伊藤翔太。茶髪のショートヘアの好青年に見えるボンボンだ。

先程、読書感想文コンクールの表彰にて、最優秀賞を受賞させるよう仕向けた人物であり。

里桜高校全校生徒から羨望の眼差しを一身に受ける優等生であり。

その実は、邪智暴虐に満ちた猫被りの小悪党である。

そして、順平の全てを狂わせた元凶でもあった。

「一つ質問する。アレを僕の家に置いたのはお前か？」

「あ、アレ？ 何言っ——」

——質問に答えなかったので、腹を蹴り飛ばした。

鳩尾へのクリーンヒットは、伊藤の膝を強制的に折らせた。その光景は、まるで伊藤が順平に屈服しているかのようにも見えた。

「い、ぼっ!？」

「質問に質問で返すなよ。」

殺されたいなら話は別だけど」

腹を抱えて、伊藤は必死で胃の中の物を堪える。

「で?。」

「……つぐ、アレって何だよ!？ 意味分かんねえよ!」

「何とか落ち着いた伊藤は、なけなしの根性で続けて叫ぶ。

涙を目尻に浮かべながら喚く様は、順平にとってはチワワの小さな吠え立てにしか見えなかった。

「何の話してんだよ!？ 頭おかしいんじゃないのかテメエ!」

「……はあ」

今度は踵落として、伊藤の端正な顔を地べたへと押し潰す。バキ、と何かが折れるような音が聞こえたが、順平はそれを無視した。

「ぶっ!!」

「誰が口答えしていいって言った? 今自分が、僕より高位の立場にあると、本気でそう思ってるのか?

そういう考え無しな所、本ツ当気色悪いよ」

何とか顔を横に向け、伊藤は咳き込む。

からんからんと、何か小さくて硬い物が地を跳ねる音が聞こえた。今まで与えて来た側だったはずの痛みを、今自分が一身に受けているこの事態が、伊藤に初めての恐怖を感じさせた。

「ごん、だごどしてっ、でべえ、え……い」

「赦されないぞ……って?」

真性の馬鹿かよ。お前がして来た事に比べれば、こんなはまだ序の口ですらない。そうされるだけの事を、お前らはして来たんだしね。

……今更そんな脅しが、僕に通用すると思つた?

赦す赦さないは、もう問題じゃないんだよ」

「っ、ぎゃ」

しゃがみ、毛根ごと伊藤の髪を握って起こし向かい合う。血に塗れ、鼻と歯が折れ不細工になった伊藤の面に、しかし順平は眉一つすら動かさず、その言葉にならない声に

答えた。

「泣いて謝ろうが、失禁して震えようが、関係ない」

僕から何もかもを奪ったお前は――

「潰してやる 徹底的に」

膝が震えている。息が出来ない。痛みに涙腺が緩む。伊藤にとつて、初めての事だった。

故に、必死に喉から恥を搾り出した。現状を変えるための、今まで背負ったことの無い声を。

「ごめ……なさい……」

「で？」

順平は、そんな上っ面だけの言葉には靡かない。

今まで伊藤がしてきたことは、全て順平にのみ危害が行くものだった。だから何も言わなかった。何も抵抗しなかった。出来るだけ我慢した。

だが順平とて、限度がある。

正しく、己以外の人に向けられた悪意こそがそれ。

伊藤はその限度を超えた外道である。

故に。

「だから 何」

目の前の塵だけは、決して赦す事は無い。

ガシャン、という金具の音が聞こえた。

「——順平!!」

「……やあ」

それは先程順平自身が、体育館に入館する際に立てた音と同じ音であった。

体育館の正門側入り口にいたのは、昨日邂逅し、そして友となった虎杖悠仁であった。

高専の拠点から長距離を走って来たはずなのだが、息の一つも上がっていない所を見るに、彼はゴリラか何かなのだろう。

順平の思惑をよそに、悠仁はここに来る前に、上司である七海建人からの言葉と、先日の建人と蓮との映画館での祓除任務を思い出していた。

8月20日、映画館での戦闘は、建人の鶴の一声により中断させられた。

敵を倒すまであと一歩だった。ホールドアップ状態から気が抜けた二人は、建人へと集まり、その如何を問うた。

その問いに、建人はある一枚の写真で答えた。スマホに映し出された写真とは、先に建人が倒していた四足歩行型の敵の左腕であった。左手首には、腕時計がされていたのをよく覚えている。

だが同時に、二人は建人の差し出した写真が、あまりにもあり得ない物である事を本  
能で理解した。

なぜなら呪霊とは、呪物呪力の込められていないでないレンズを通して見たり撮影したりしても、その姿を視  
認出来ないからだ。

建人のスマホが特別製なのではない。

自分達の目がおかしくなった訳でもない。

嫌な予感、的中してしまった。

——三人が戦っていたのは、人間であつた。

否、もはや元人間と呼ぶべきだろう。解剖を行った家入硝子曰く、その元人間達は、呪  
術によつて『脳の構造を身体ごと改造されていた』。元人間達は呪力が漲っていた事も  
あり、硝子はこれらの存在を『実体のある呪霊』と呼称するしかなかった。

最後に悠仁と蓮に、死因は体を弄られた事によるショック死であると付け足し、硝子  
は慰めた。気落ちしないようにと、硝子なりの優しさだったのでだろう。

だが悠仁と蓮は、硝子からの慰めを素直に受け取れなかった。

その後、三人は二手に別れ、蓮と悠仁で犯行現場にいた少年・吉野順平の調査を、実  
行犯の特定は建人が命懸けで執り行った。建人は真人と戦い、間一髪でどうにか切り抜  
けた。先日の小さな地震は、その戦いの余波であつた。

建人は、真人がいかに醜悪で外道なのかを戦いを以って思い知らされた。

あの継ぎ接ぎの呪霊は人間を——人間の魂を自在に操る。そしてその所業を『愉しんでいる』。その軽薄さが、呪術師最強の五条悟にどうも似通うのだ。放置していれば、人類に大きな大災害を齎すだろう。

だがそれでも、建人は少年二人を巻き込む事は出来ない。

子供を守るのは大人の義務。未来を紡ぎ生ききる若人をわざわざ死地に送り込むなど言語道断。

呪術師はクソだ。いずれ虎杖悠仁も雨宮蓮も、この職の暗い部分を見る事になるだろう。

だがそれは今でなくていい。人を殺すなんて真似を、今体験させる必要は決して無い。

だが悠仁も蓮も、それに納得しなかった。納得出来なかったのだ。

一々そんな事を理由に、目の前の現実から逃げたくなんかない。

結局、ただそれだけの話なのだ。

さて順平は、なぜここが分かったのか、などと思う事は無い。

微笑みながら雛壇から下り、順平は悠仁へと語りかける。

「安心してよ。今までの恨みの分、二、三回くらい思いつきり蹴ったけど、皆に麻醉成分



を注入した事以外に、術式や呪力は使ってない」

「……ならこつからは、本気同士の戦いっつー訳だな」

「うん。蓮は？」

「あいにく、腹痛が治ってねえらしい」

「そつか。……そうだよね」

本当に、蓮には頭が上がらない。それだけ確認出来れば充分だ。

順平は、ここにいない蓮に感謝しながら、更に笑みを深くしていく。

掌印を組んで、闇を孕んで。

拳を握って、呪いを込めて。

「始めようか、悠仁」

「おうよ。まごころ込めてブン殴ってやる」

「はは。それはちよつと——」

呪力、解放。

悠仁は拳に呪力を込め、順平は海月の式神を召喚する。

互いに体制は整った。

「勘弁願いたいなあッ！」

喧嘩、開戦。

11.

窓ガラスが割れる。里桜高校三階の教室棟では、二人の青年が殴る蹴るの喧嘩をしていた。尤もその喧嘩は、常人には止められぬほどの激烈さを有していたが。

転がるように退避する青年は吉野順平、そこに更なる追撃を叩き込もうとするのは虎杖悠仁であった。

「うらアッ！」

「おりづき【澱月】！」

互いに互いのボルテージを高め合っていく。悠仁の青い呪力の拳は、柔らかな海月の式神によって阻まれた。

順平の全身を覆うように巨大化した海月には、ダメージが入っているようには思えない。悠仁の目からも、それは明らかであった。

柔らかいということは、ダイヤモンドよりも壊れないのだ。

(クラゲの式神！ 打撃一辺倒の俺とは相性が悪いな！)

(【澱月】なら悠仁の拳を止められる。ダメージもそこまで無いみたい)

吉野順平の術式は「毒」。真人曰く、順平は呪力で生成した毒を、式神【澱月】の触手から分泌する。そして毒の種類は、映画などで得た知識で補える。順平はこの日は

ど、B級映画マニアで良かったと思つた事はない。

真人によつて発現したこの術式を、なぜ目醒めて間もない順平が操れるのかと問われれば、それこそ真人が原因である事に他ならない。

真人は順平に、呪力や式神の扱い方を教えられるほど、呪術というものを理解していたのだ。

(なら【澱月】で、悠仁が僕を叩けなくなるようにしてやればー！)

先に動いたのは順平の【澱月】だった。廊下中四方八方に張り巡らせた触手で、悠仁の行動を制限しつつ牽制。

触手らは、悠仁に対する防御網の役割を担うだけではない。実は窓ガラスを密かに突き破らせており、悠仁の影から、外と教室内から拘束させるようとしていた。

だがそれに怯む悠仁ではない。今持てる最大出力の呪力を両拳に込めて、悠仁は突然地べたをブン殴つた！

更にそこに《逕庭拳》を繰り出す事で、三階の床を完全にブチ破る——！  
「わっ!?!」

これは完全に順平の予想外だった。いくら何でも悠仁とて常識の範疇にあり、流石に学校を破壊するはずはないと、というか出来るはずはないと、勝手に思っていたのが間違いだつた。

悠仁と順平の踏み締めていた足場は崩れ去り、順平は「澗月」の防御網から脱出させられてしまう。空中で順平が出来る事と言えば、「澗月」を解除する事くらい。

だが場数をこなして来た悠仁にとって、この瞬間はまたとない好機であった。

崩れ落ちる床だった天井を足場にして、悠仁は順平へと急接近する——！

（——かかった！）

だが、その勢いを込めた拳を、外からの触手が絡め取った。

「くっ?!」

先はこの瞬間、順平に出来るのは「澗月」を解除する事のみと記述した。

だが、別に解除したとは書いていない。

外へと張り巡らせていた数本の触手で、悠仁の拳を中心に、その身体を雁字搦めに捉えていく。「澗月」本体も呼び、更に絡ませていく事で、あつという間に悠仁を触手で埋め尽くした。

「チエックメイト。

霊長振ってる人間の感情や心は、全て『魂の代謝』……まやかした。まやかして作ったルールで僕を縛るな。

……僕には帰ってやる事がある。邪魔しないでよ」

酷く雑なセリフだ。こんな文言、真人が言っていた事の受け売りに過ぎない……順平

はそう思った。

こんな事を言つたとて、浮かばれるのは己自身だけだ。

死した母は蘇らず、ただ己の復讐心だけが満たされるだけだ。

けれどそれでいい。

聞く耳持たぬ隠者には、灰色の空がお似合いだ。

だが、そんな深海のように昏い空から、連れ戻そうと悠仁は足掻く。

【澱月】の触手の隙間を縫って、順平の喪服に似たその服の襟を掴んだ。そして空いた方の左拳で順平へと迫る。

「順平が何言いてえのか全ツ然分かんねーよ！ 動機も、何も！

俺に出来ンのはな、順平！

お前をブン殴って、目エ覚まさせてやる事だけだッ！」

「くっ——」

叫ぶ。怒る。殴る。

だがこれも、【澱月】によつて阻まれる。衝撃は確実に【澱月】を蝕んでいるはずなのだ、そのような風体は一向に見せない。

順平は、【澱月】の打撃への耐性が著しく高い事を知っていた。ジョーカーのペルソナのように、本体である自身にフィードバックがある訳でもない。打撃ダメージが入らな

いという点で言えば、ジョーカーのペルソナより優れている。

悠仁とて、その異様な耐性には気付いている。だからこそ厄介だ。かつての《呪具：屠坐魔》のような短剣でもあれば話は別だった。一応短剣でも戦えるように修行しているが、ジョーカーほど上手く扱える訳ではなかった。

このまま【澱月】を叩いてもジリ貧だ。

なればこそ、悠仁は標的を変える。

（式神使いは「本体」を叩け！ 五条先生に教わった通りに！）

吹っ飛ばされた順平に追撃ちをかけるためには、まず【澱月】が邪魔だ。

——悠仁が装備出来る武器は二つ。一つは、ジョーカーの初期装備である《短剣》カテゴリ。もう一つは《本》だ。今装備（というか万が一のために胸当てとして使用）しているのは《柔道技術図解論理》。図を用いた丁寧な説明により、悠仁は更なる格闘術を習得した。

戦闘時に出す事はないし、何なら休憩中や非戦闘時にしか読めない。そもそも漫画本以外に読んだ事のある本が教科書しかない悠仁にとって、図や絵の無い本は興味の埒外。だが格闘術の参考書ともなれば話は変わる。

自己流の喧嘩空手道に加え、本から得た知識が、悠仁の元々高い格闘センスに拍車をかける——！

いや、直接ブン殴るために装備してゐるんじゃないよ？

右半身となり、【澱月】の触手部分を左手で掴む。足掛けは必要ない。掴んで仕舞えばこちらのもの。掴んだ触手に更に右手で背負い込み、全身を以て順平とは逆方向に投げ付ける。

「どおっっせいー！」

柔道・一本背負投。

これにより、順平を守るものは何もなくなくなった。唯一の式神である【澱月】とは距離が遠く、操作精度がやや落ちている。更に【澱月】自身、怯んでいて悠仁に手が出せない。

一旦【澱月】を引っ込めるしか、事態収束の方法は無いだろう。

だが敢えて、順平は引っ込めなかった。——否、むしろ順平は、悠仁へと向かって行く。

式神をやられた術師に出来る事は『逃亡』か『投降』、最悪『死亡』しかない。式神に頼り続け、自己の研鑽を怠った者の罰と言えよう。

それは順平として例外ではなく、何より順平の喧嘩相手は腐っても虎杖悠仁だ。フィジカルで勝てるはずもない相手というのは、火を見るより明らかであった。

だが、自棄になった訳ではない。

なぜなら、順平は、ブツ、飛ばされるのために前に出たのだから。

足音を耳にしていた悠仁は、背負投の振り向き様に左拳で順平の顔面を狙う——！

「うぐっ！」

勘でしかない下手くそな防御が、不幸中の幸いだった。本気ではなかったとは到底思えないほどの威力。ゴムボールのように地を転がされながら、手を使って立てなくなるほどに腕が痺れる。

だが、それだけだ。

そして、これでいい。

順平にとって、一瞬でも近づけたという事実が重要なのだ。悠仁のパーカーのフードに、【濺月】の触手を引っ掛ける事が出来た。吹っ飛ばされながら、順平は叫ぶ。

「戻って来い、【濺月】!!」

「ぐおぬっ!?!」

踊り場でもうにか立つ。——腕の痺れは今は捨て置け。

悠仁がやっていたように呪力を練る。——思い起こすは苦渋の日々。

右拳で、右腕で。

ジェットコースターのように急接近してくる悠仁の顔面を、順平はリアットでブチ

抜く——！



「ざいっ!!」

空中で三回転後宇宙を決め、仰向けで這いつくばった。

悠仁はこの時だけ、体操の競技でオリンピック選手を目指せるとぼんやりと考えた。

「ごめんね」

そんな迷惑を順平は無視して、【澱月】の爪で悠仁の胸部を刺す。【澱月】は触手に爪を生やし、刺突と毒の注入を同時に行う事が出来る。

さく、と胸を貫く。

悲鳴は上がらない。

胸から赤い生命が溢れる。

痛みに悶える事も出来ない。

瞳孔が開き、呼吸が浅くなる。

あつという間に赤色は致死量を超えた。

終わった。

一つの生命を、終えさせた。

それだけだ。

悪運は、ここで尽きるだけ。

友を手にかけたとて思う事は無い。

——そして、これから。  
順平の運命が動き出す。

まず、ごめん。映画館で人死にが出た事、知ってた。

でもこれだけは信じて。アレは僕がやったんじゃない。僕が映画館を出た後に出会った呪いの仕業なんだ。

あの人……いや、あの呪いは『人間の魂』を弄る事が出来るんだって。姿形も何もかも。そしてその呪いは、それで人が死ぬ事を何とも思っていない。

最初は、その呪いに僕を認められて、嬉しかったんだと思う。僕を否定して来なかったのは、母さん以外には誰もいなかったし。

だから、僕はその弱みに漬け込んだんだ。

僕が馬鹿だった。少し考えれば分かる事だったのに、そいつに“力”を貰って、良い気になってたんだ。

蓮、お願いだ。

母さんと僕を、どうか助けてほしい。

「真人さん」

1  
2.

任せろ。

階段から降りる真人の足を止めたのは、彼岸を向かぬ吉野順平であった。

正直、真人は少し驚いていた。それは宿讎の器の脆弱性にでもあり、そして吉野順平のポテンシャルにでもあった。

まあ、人間程度のポテンシャルなんてたかが知れてると、直ぐに頭の外に放り出したが。

「あの『指』、あなたが仕組んだんでしょう？」

「うん、そうだよ。」

そんな事より予想外だったよー。まさかキミがここまで『出来るヤツ』だとはね。

ね、キミなら特別に、俺達の仲間にしてあげる。俺の命令には絶対に従ってもらうけれど、今すぐ死ぬか、俺達と一緒に来るか……どっちがいい？　ってか、二つに一つだと思っけど」

もちろん、五条悟を封印するハロウインが終わればどっちみち順平は殺される。

呪いの総大将を務める真人が掲げる最終目的。それは『呪いが人間に成り代わっている世界』を作る事だ。

そしてそこに、吉野順平という不純物は要らない。呪いとして他を蹂躪する事こそが、新たな人間となる道の第一歩なのだから。

呪いという贖物が、ヒトという種を絶滅させるための聖戦には、志を同じくする呪い

が必要だ。その一角こそが、災厄の呪物《両面宿儺》。

呪術全盛の平安の世にて、史上最悪とまで言わしめた実力者だが、その性格の悪辣さも真人は知っていた。だからこそ器に、宿儺有利の縛りを組ませる事を、今回の作戦における旨としたのだ。

だがその両面宿儺の器は、呆気なく目の前のガキによって斃されてしまった。正直ガワがこんなのでは、中身の宿儺への期待も薄まるといふもの。

ならばせめてもの収穫として、馬鹿なガキを引き入れなければならなかった。真人の中には、大きな落胆と少しの焦りがあつたのだ。

馬鹿なガキが死ぬ所ほど、面白いものはない。

だが、虎杖悠仁というガキには死なれては困るといふのに。

吉野順平が、全てを台無しにしてしまった。

これは、その腹いせでもある。

だが、順平は怯まない。

それどころか、一度は尊敬の念すら抱いた真人に、そして何より真人を尊敬してしまっていた自分に、怒りを感じていた。

己の能力不足のせいで、母も友も巻き添えを喰らってしまった。そんな事態を引き起こした原因も、本人である自分自身も、どちらも許せなかった。

——順平は怒る。誰がこの怒りを諫められようか。

本来ならば、吉野順平にそんな余裕は無い。母を殺された悼みと憎しみで、周りが見えなくなっていただろう。

だが、予想だにしなかった『三人目』の存在が、吉野順平にバタフライ・エフェクトを引き起こした。

吉野順平は、不確定な未来を進む。

他の誰のためでもなく、自分自身のため。

尸だった己が、真人と悠仁と蓮と出会って変わった己のため。

悪運の尽きた、己の尽物語を歩むために。

——【澱月】は確実に虎杖悠仁の胸を貫いた。

赤い生命は胸から溢れ、今は止まっている。

友を手にかけてたと思ふ事は無い。

なぜなら。

【澱月】が貫いたのは胸部の浅層よりも浅い、高専の制服のみ。爪はその皮膚にすら届いていないのだ。

故に、順平は真人に振り向く。

「……教えてやる。『服従か死か』の選択肢には、三つ目がある事を。」

それは——」

その瞳に、叛逆の意志を灯して——！

「——グソくらえだ!!」

順平の傍をすり抜けて、人影が真人の腰のベルトを掴んだ。そしてその体を、無理やり真人の左脇に押し込み、右腕は真人の体の正面を通って右腰を支え、思い切り地へと背を打ち付けさせた。

影の正体など語るまでもない。

「うオラアツ！」

柔道・帯落。

武道に精通しているはずもない真人は受身を取れず、背中を大きく打ち付け痛み悶える。果たして真人は、そのまま地を仰向けで這いつくばる事しか出来ない。

悶えている隙を見て、倒れ伏し、死していたはずの虎杖悠仁は、順平の左肩へと並んだ。

「(っ痛、……痛い？ は？ 何で?)」

ゲホッ、……つくそ、何だよお前、死体なら死んでろよ」

「あーもー、制服超赤えんですけど。穴開いてっし。まったく、死んだフリも疲れるな」

「迫真の演技だったよ悠仁。ブロードウェイでデビューしたら？ 死体役で」

「へん、御免だね。」

「つてかマジで痛かったんだからなああのラリアット！」

「はは、まあいいじゃん。命があつてナンボだよ」

「そう言いながら、悠仁はズボンのポケットから何かを弄っている。二人が揚々と駄弁るその光景を見て、真人は違和感を拭えずにいた。

（何なんだよ、コイツらの余裕は。まるで——）

『まるで自分がそこいらの雑魚と変わりないと思われてるみたい、か？』

——と、真人の思惑に被せるようにして、新たな声が聞こえた。

その声は、虎杖悠仁が横にして構えるスマホから放出している。見ると、そこにはベッドで病衣の上半身だけを晒してこちらを見る、瘵毛の紅顔がいた。

『やあ。病室から失礼する』

「……君がああの雨宮蓮か」

『いかにも。死ぬほどひどい腹痛でな、今日はそちらに行けそうにないんだ。だがお前の醜態を見る限りは、二人だけでも大丈夫そうだな。』

オレが持たせた血糊も、有効活用出来たようで良かったよ』



蓮は真人の無様を嗤い、悠仁と順平の成功を祝う。その余裕綽々といった態度を見させられ、真人はこの時、自分が何もかも掌の上で踊らされていたのだと瞬時に理解した。「何で俺の作戦がバレた？」

『そもそもアレを作戦というのは、あらゆる策士に失礼だ。お前のアレは、兎戯に過ぎない茶番劇だよ。』

意外だったのは、事前に伝えられたお前の軽薄そうな性格に対し、事前準備をするような行動を取っていたことだ』

「は？ ……いや、そんなのはあり得ない。だって——」  
『<sup>証拠</sup>残穢は残さなかつたはずだ……とでも？』

あれで証拠を隠滅したと言うには、それこそあらゆる清掃業の人々に失礼だ。あいにくオレは綺麗好きでね、どんな汚れも一切見逃さないさ。

例えそれが、どんなに微弱な残穢でもな』

——事の発端は、昨日の夕、吉野宅に入る前までに遡る。

雨宮蓮は最初から吉野順平を疑っていた。そして順平が嘘をついている事も分かっていた。……だが夕暮れ、吉野宅に到着するまでは決定打に欠けていたのだ。状況証拠が無かつた、と言い換えてもいい。

だが玄関先の門で、決定打となる証拠を得たのだ。それこそが、『映画館でも見た人型

の足跡』……即ち、『呪力の残穢』であった。

尤もその残穢は、映画館の時のようにはつきりと残されていた訳ではない。ジョーカーとして目<sup>サードアイ</sup>を凝<sup>アイ</sup>らさねば見えないほどの、掻き消したような跡だけがあった。だが、それで充分だった。

例え新品でどれほどに高性能な消しゴムでも、必ずと言っていいほど『鉛筆で書いた跡』が残る。砂場の足跡を消そうとしても、足跡を埋めた『砂を平<sup>なら</sup>した跡』が残る。

それを見た蓮は、瞬時に順平と主犯であろう呪霊との関係を看破し、SNSで『嘘吐き』と宣ったのだ。

(まあ俺<sup>僕</sup>は見抜けなかったんだけど……)

だがそんなもの、五条悟の《六眼》をもってしてようやく楽々に見破れるレベルだ。怪盗業を営んでいた蓮のような《鷹<sup>サードアイ</sup>の目》を持たぬ二人には仕方ない。

『そこからは簡単だ。文明<sup>ス</sup>の利器<sup>マ</sup>を利用<sup>ホ</sup>し、二人と上司達に報告。迎えと影武者を超越し、悠仁とオレが帰ったように見せかけ、オレは吉野宅に残り、呪物に寄つて来た呪霊を祓除した。実際に車に乗ったのは、悠仁とオレの制服を着た吉野凧だったという寸法さ。

その翌早朝よりも早い時間帯、オレはあるペルソナを吉野凧に擬態させ、屋根裏に隠れた』

「……」

『ペルソナの名は《ドツペルゲンガー》。その《認知スキル》で吉野風のそっくりさんを作り出した。順平とお前が見たのは、吉野風に擬態したオレのペルソナだ。

尤もお前を完璧に騙すために、ドツペルゲンガーにも怪我を負わせる必要があったんでね。腹が裂けそうな痛みは何度か死にかけたが、どうやらその甲斐はあったようだな』

「……………」

『そして先程、順平に悠仁を殺すふりをさせ、油断しまくっているお前はそれに気付かず、今に至るといふ訳だ』

「……………は、なるほどね」

真人にしては珍しく、自嘲気味に吐き捨て立つ。それもそうだ。自身が組み立てた作戦を、こうもあっさり崩されて仕舞えば、取り付く島もない。もはや清々しさまで感じていた。

「(あーあ、計画が台無しだ。夏油が雨宮蓮について酸っぱく言っていたのはこういうことか……………けれどまだ、挽回出来ない訳じゃない)」

「まーでも、君がいないんだったら、コイツらなんか屁でもないな」

『…………フ、ククク』

「ケヒヒヒ……」

「あつ、何勝手に出てきてんだてめえ！」

蓮が嗤い、悠仁が台本に無い頬宿儺の登場に怒る。

「何が可笑しい」

『可笑しいさ。その屁でもない相手に、お前はなぜ一杯食わせられているのかな？』

……焦り逸る真人は気付けない。この時自らが、とんでもなく大きなミスをしている事。

今、蓮と会話出来ているこの状況が、あまりにも道理に敵っていない事を。

ここで読者諸君らには、《帳》の効果を思い出してほしい。

《帳》の効果は二つある。一つは『呪力を以つて夜を生み出し、呪霊を炙り出す』。もう一つの効果は『帳の中では通信機器の一切が使用出来ない』だ。

真人は見落としてしまった。蓮との会話に必死だった。二人を欺く策を練るのに集中していた。

だからこそ、頭から離れてしまったのだ。

帳の中で、携帯など使えるはずもない事を。

ましてやテレビ通話など、出来るはずもない事を。

ジョーカーの掌の上で、未だに踊らされている事を。

『現実から目を逸らし、己の失態は知らんぷり。無様な敗北を喫した愚か者には、罵声と嘲笑による石打がお似合いだろうさ。』

尤も愚か者には、なぜ石を投げられるのかも甚だ理解出来ないだろうがな』

「……じゃ好きなだけ笑ってれば？ 君がそこで踏ん返り返つてる内に、俺はコイツらを——」

コツン。

真人は後頭部に鉄の感触を受けた。

その鉄が、一体何なのかを把握しようとした。

「あ？」

『故にここそお前にオレは』

——ダアン、という銃声が跳ねる。

真人は脳天を貫かれ。

鮮血と脳漿のうしやうを撒き散らし。

硝煙の匂いを埋め尽くし。

携帯の蓮はブラックアウトし。

倒れる真人の背後には、新たな影が立っていた。

「ぐたばれ」という言葉をプレゼントしよう」

暗影の奥、闇の中。

勝鬨のトカレフを携えて。

ジョーカーは、不敵に嗤っていた。

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n

L e t     u s     s t a r t     t h e     g a m e .

# 2 0     Y o u     t r y     t o     r u n     m e     t h r o u g h ?

## # 2 1

13.

真人は焦っていた。このままでは己は、如何に動いても動かずとも死ぬと、焦燥に駆られていた。

三対一という不利な状況に加え、おそらく己よりも強いであろう特級術師の存在が、更に拍車を掛けていた。

だが、自身が呪いである事が幸いし、かろうじて命を繋いでいた。真人が人間であれば、撃たれた時点で死んでいた。

真人は通常の手段では死なない。それは呪いとしての特性ゆえのものではない。真人は『魂の形』を如何様にも変化させられるのだ。それを『保持』し、不変のものとして、己にかかるダメージを無効化する事も出来るのだ。

たかが銃撃ならば、真人の術式と呪力による防御があればどうという事はない。これは実際に、そこら辺にいた警官が携帯していた拳銃・S A K U R A M 3 6 0 J で実験し、得た結論だった。警官がどうなったかなど、語るまでもない。

「やつりー！ 作戦、上手くいったな！」

「ああ。これも、順平が全てを話してくれたお陰だ」

だがジョーカーの攻撃は通った。叛逆の魂たるもう一人の自分を知り、それを引き出す事の出来るジョーカーは、呪力と術式で守られている真人を、『その魂ごと』攻撃する事が出来る。

これが普段の銃弾であれば効果は半減していたが、節約のためマガジンから弾を抜いていたので、その銃弾はジョーカーの呪力そのものとなり、十全にダメージを与えられた。

だがそれを知らぬ真人は、幾度も逡巡していた。あまりにも不可解だった。理解と激痛に苦しんだ。

既に頭部の修復は完了している。だがそれが何になる。

三人に囲まれ、内一人は特級術師。

絶望的状况は、どう足掻いても覆せない。

(クソ……クソ、クソ!!)

……雨宮、蓮!!)

「礼を言うのは僕だ。この恩は一生掛けて返すよ」

「律儀だナー」

「はは。」



さて、あとはコイツを完全に——」

だが真人は忘れていた。己は独りではないという事を。

頼れ、信じられる仲間達がいる事を。

生来、人は厄災を恐れてきた。

人は大地の憤怒を恐れた。

人は大自然の暴食を恐れた。

人は大海の嫉妬を恐れた。

人は大空の傲慢を恐れた。

そして人は、他ならぬ“人”の底知れぬ強欲を恐れた。

光明が差す。

暗き大空より出でし傲慢。夏油が念の為連れていた最後の切り札。リーサルウエポン

そして真人の、誇らしく頼もしい仲間の一人だ。

「退け!!」

「なっ!?!」

真つ黒の服に布作面を被る昊?。学校の天井を破壊し尽くし、荒れ狂うハリケーンの目となって、一直線にジョーカーへと向かう。

ジョーカーはというと、残る人間二人を押し除け、昊?から距離を取らせていた。昊

？から滲み醸すその膨大な呪力を、ジョーカーは自身の気配察知能力にて敏感に感知していたのだ。

そして、その膨大過ぎる呪力ゆえに、二人を巻き込めないという事も。

一人と三体がいる二回の踊り場に昊？は降り立つ。狙うは怪盗、ただ一体。

溢れ出す傲慢の余波は、仲間も敵も見境なく吹き荒ぶ。目の前の敵に、視線と意識が奪われていた。

「クルスアキラアアアアアアアア!!」

「な———!?!」

だからだろうか……否、故にこそ。

昊？は己の内なる衝動に絆され、自身が知る彼の名を、咽喉が掻き切れんばかりに叫んだ。

ジョーカーの顔面を掴んだ。果たして、校庭側にいた悠仁らとは真反対の、狭い中庭方向に体ごと押し付けられ、瓦礫と崩れ行くコンクリート壁と共に吹き飛ばされた。

それを隙と見た真人もまた、啞然とし、棒立ちとならざるを得ない虎杖悠仁へと襲いかかる。狙うは心臓、当たれば即死。深い嗤いを浮かべて、真人は己の術式を解放する。

「悠仁———っ!!」

「《無為転変》」

術式の細部を知っている吉野順平は、近寄らせまいと悠仁を庇おうとした。互いの距離はほぼ同じ。しかし悲しいかな。身体能力は、真人に軍配が上がる。

順平の奮闘虚しく、悠仁はその血糊に赤く染まった胸部を、真人に触れられてしまった。

真人の術式は《無為転変》<sup>むいてんぺん</sup>。人の魂のカタチを無理矢理に操る事が出来る術式だ。真人は、『肉体の形は魂の形に引つ張られる』という持論の元に、あらゆる生命のカタチを好き勝手に改造できるのだ。

真人の狙いは、両面宿儺に虎杖悠仁が不利になる縛りを設けさせ、自身の仲間を引き入れる事。その第一段階である、宿儺との対話を――

「俺の魂に触れるか」

「――!!」

瞬間。真人の世界は、両面宿儺の世界によって塗り潰された。

血のように生緩い感触。骨のように硬い地。積み重なった牛頭の山。

その頂点に、王はいた。

「だが、先は良い演目だった。お前の醜態は存分に笑えたぞ?」

宿儺はどこことなく上機嫌だ。対話に臨むなら今しかない。

……だが、体が動かない。動く事を、彼は赦してはくれない。

それもそうだ。今の真人の状況は、アポイントメントも無くノックもせず、土足でテリトリーに踏み入ったのと同義。宿讎による無礼千万極まりない不屈きの罰を受けていないこの状況がおかしいのだ。

「今の俺はすこぶる気分が良い。」

故に此度は赦そう。

だが次は無い」

——そのカリスマが、その重力が、その存在が。

あらゆる『他』に呼吸を赦さない。

「分を弁えろ 痴れ者が」

はつとなり、真人は現実引き戻される。無事で呼吸出来ている事に安堵している自分がいる。

誰が咎められようか。たかが指三本程度の實力しかないものにも関わらず、身じろぎ一つでもすれば、其れ即ち死と思わせるプレッシャー。それからの解放が、どのような形であれどいかに救いであつたか。

「離れろおお!!」

だがその安堵は、戦場において隙を晒す行為。

戦いにおいて経験の浅い順平とて、それを見逃す事はない。真人の術式発動を警戒し、順平は己の術式を発動し、悠仁から彼奴を引き剥がす。

果たして油断しまくっている真人は、順平の式神〔澱月〕の触手を避けられず、横薙ぎのそれに体を任せ、校庭へと吹き飛ばされる。

「大丈夫、悠仁!?!」

「モーマンタイ! アイツ追うぞ!」

「でも、蓮は?!」

「ジョーカーなら大丈夫!」

戦闘体勢に切り替えた悠仁は、彼の切り札の如く、不敵な笑みを浮かべて言う。

「アイツが負けるトコ、想像出来ねえよ!」

「……それもそうだね!」

そう言い合つて、ジョーカーを信じる二人。そこに迷いという名の棘みは無い。吹き飛ばした真人を追い、窓から飛び去って行く。

《帳》の中なのに、雨が降っている。

悠仁達のいる校庭とは反対方面の中庭。

その地面は赤い砂で埋まっている。

空と地に佇む二頭の黒い影。

ジョーカーはしかし、力無く。

地にてぐつたりと後方に倒れ掛けている。

そこから立ち上がる事など到底出来ない。

その目は空を見遣ることは出来ても、

その口は何かを伝えることは出来ても、

その手は得物の現代日本刀を手放すほどに、

その体から力抜け落ち、

その命は、今枯れ果てようとしている。

「……………ぼおッ」

あまりにも多くの氷柱が、ジョーカーの全身に突き刺さり、貫き、抉り、地に深く突き刺さっていた。

ジョーカーの、これまでの総てを嘲笑うかのように。

(悠仁……順平……、……逃げろ……)

その思いは、雨音に掻き消され。

赤い砂は、ジョーカーの流れる血と反吐によつて滲みを増し。  
切り札の死に体を、あの二人はまだ知らない。

ああ 苦しい 楽しい  
この気持ちこそ 何と呼ぼう

14.

真人は悦び、楽しんでいた。呪いの王、両面宿儺に出会えたこの奇跡が、真人の神経全てに恐怖という名の悦びを与えた。

およそ今の我々よりも弱い。にも関わらず、平伏したくなるほどのカリスマ。そして  
昊？が目の敵にしている雨宮蓮を死の淵にまで追いやつた、正に鬼神のごとき神格が、  
真人に武者震いを起こさせる。

さて、真人は順平の式神〔澱月〕により、校庭の砂場へと不時着する。着用していた  
ポンチヨのような黒服が砂に塗れ、不快感を覚えさせる。

だが砂を払う暇もなく、黒雨より飛来する二つの影が追撃を試みる。

「うおおおっ！」

二つの影の正体は虎杖悠仁と吉野順平。先手を取ったのは虎杖悠仁の方であった。錐揉み回転による遠心力を伴う剛脚は、確実に真人の頭を蹴り潰さんと振るわれる。

だが悠仁は回転に時間をかけ過ぎた。悠仁の殺意を感じ取った真人は咄嗟に横転し、危機一髪回避に成功する。呪力の籠ったその足は、瞬間的に里桜高校全体を震わせるに至り、震度2はあろうその足は、真人がいた所に砂埃と小さなクレーターを作った。

素直に避けて良かったと真人は思った。

横転の後、真人は悠仁の武器がその強靱な体躯のみである事を悟る。であればわざわざ接近させる真似はさすまいとして、大きく跳躍し、真人は己の魂を弄る。

一瞬の間の後、真人は爆発するかのようにその体を大きなウニの棘皮の如く尖らせた。放射線状に伸びるそれは、見事に悠仁の奴頭をブチ抜く――

「セイツー！」

――のを、吉野順平は許さなかった。順平は海月の式神【澱月】を展開し、その鋭利な触手で棘を粉碎しながら悠仁の盾を担う。

【澱月】は殴打のような攻撃には強いが、斬撃や刺突など武器を用いる攻撃にはめっぽう弱い。だが、それは悠仁を助けられない理由にはならない。果たして【澱月】は、幸運な事に、その表皮のみを数箇所薄く撫でられるだけに留まった。



(ダメか。良い案だと思っただけど)

一方真人は、通称『うに花火とけとげ作戦』を愚策だったと吐き捨てていた。何せ消費する呪力はいくせに、敵の在分が分からず精度も落ちる上、避けられて末端から叩き壊されて行くのだ。

故に、いつまでもとげとげしている理由もない——が。

(なら、至近距離で——)

盾だ。それこそ、盾付シールド属展開式籠手ドガントレットの如く、相手を颯り殺せるような剣山を展開できる物がいい。虎杖悠仁と吉野順平はこちらの出方を伺いつつ、棘の先々を破壊している。無駄な消耗は避けつつ、隙を与えるか。

真人はうに花火状態から一瞬で戻りつつ、着地と同時にその前腕をおよそ二センチ程度の厚みを保ちつつ大きく広げ、棘の密度をより大きくする。至近距離でのニードルシールド展開は、二人を近寄らせないためにはするのではない。

(棘——!?)

実際、追撃を試みていた順平は、そのニードルシールドに刺さらないために急停止してしまっている。人間誰しも、痛いのは嫌なのだ。そこを突けば、確実に一人は殺れる。真人は本気でそう思っていた。

だからこそ、この一瞬が逆に悠仁にとっての隙となるとも思わずに。

「そー来ると思つたぜ」

悠仁はその真人の予想を軽々と超えて行く。

何と、そのニードルシールドに臆する事なく、それにより自らが傷付いてしまう事も厭わず、拳を盾に突き出して来たのだ。

「甘<sup>あめ</sup>エンだよ」

果たしてやはり、悠仁の下段からの左拳はその鋭利な剣山に突き刺さつてしまう。血が拳を砕くように吹き出し、悠仁はその痛みを歯を食い縛る事で堪える。

通常呪術師の体術は、拳や脚部を呪力で覆う事で鉾と防具を兼ね備える。だが悠仁の場合、《逕庭拳》発動の際だけは、彼の呪力コントロールが未熟であるために、体の中で掌部分を一番無防備にしてしまう。

だがそのリスクを天秤に掛けても悠仁は征くのだ。

守るべきを——為すべきことを為すために。

「《逕庭拳》!!」

《逕庭拳》の極意は二撃必殺。槍の如く盾を貫く呪力の拳は、真人の左腕棘盾をその腕ごと砕いた!

順平を狙っていた真人は、その左腕の崩壊による激痛に驚愕し、順平から視線を逃してしまふ。

(中々イカれてるよこっちも！ しかも——)

真人の肉体は魂の形に引つ張られる。つまり肉体が傷つくという事は、『真人の魂が傷付いている』事の証左。ジョーカーと似たように、両面宿儺という魂を肚の内に取り込んでいる……つまり、無意識的に魂の輪郭を知覚している悠仁の攻撃は、ジョーカーからの攻撃と同意義となる。

《逕庭拳》に次ぐ悠仁の上段からの追撃を、自身の体を小学生低学年程度まで縮める事で無理やり回避する。悠仁の拳は空振り一振、そのまま校庭へと突き刺さり、水蒸気爆発が如くの砂埃を立ち上げた。

(うひゃー、アレに当たるのだけはごめんだな。大人しくしてもらおうか)

「ゲホツ、口の中がしやりしやりする……」

「わりわり。それよか、気付いたか順平？ アイツは形を変える時——」

「——呪力の溜めがあるね！」

「分かってんな、行くぜ！」

ぺっぺっ、と口に含んでしまった砂埃を吐き出しながら、湿った髪を邪魔に思いながら、順平は『澱月』を顕現。その一方で、幼児から戻った真人は口から砂ではない別の何かを吐き出していた。

「お、え」

一寸程度はあろうか。しわしわになつてゐる何かの数、三つ。それを真人は自身の『原型の手で触れた』。

真人は縛りにより、元の形の手でなければ、『無為転変』を発動出来ないのだ。このままではジリ貧になると察した真人は、すかさずのその三つの何かに術式を施した。

みるみる内に肥大化し、一定の形を取つたそれらは――

「改造人間……!?!」

「短髪のカギを殺せ」

あの雨の映画館にて、七海建人と虎杖悠仁、そしてジョーカーが戦つた『元人間』……それもその身長から見ると、まだ子供のそれと同じだ。

命令に従うままに、三人は一斉に悠仁を襲う。

「糞野郎がアツ!!」

憎まれ口を叩きながらも、それでも悠仁にはこの三人を殺せない。こんなのは、正しい死に方ではない。だから、逃げる事しか出来ない。

真人と順平から逃げるように、空中渡り廊下の天井で振り払い続ける。だがそれにも耐えきれなくなつて、改造人間の一人の首根を掴んだ。掴めるほどに首は太くなく、そして軽かつた。まるで幼稚園児を握つてゐるかのようだつた。

「アソ ぼお よ」

「——っ……………!!」

握り潰せば祓える。

ブン殴れば動かなくなる。

苦しませずに、一息に殺してやるのが、正解だ。

生命として、もう終わっているんだ。

コイツらは敵だ。やらなきゃ、やられるんだ。

頭では分かっている。

分かっているのに……………!!

——お前は強いから人を助ける。

「……………っ、くそ、くそおツ!!」

でも……………信念（呪い）がそれを許さない……………!!

やらねばならぬ事を躊躇って、横から来るもう二人に対処が遅れる。バランスを崩し、三人に、その躯体からは考えられぬほど物凄い力で押さえ付けられてしまう。

悠仁の腹部にて、喉を掻き切ろうと爪を尖らせる改造人間。

もはや意識も言葉も失ったはずの、その歪な形の口から、一つ。

「おね がい」

「!?!」

呪霊の言葉に意味なんか無い。そう五条悟から教わった。ジョーカーからも念入りに言われた。

耳を貸すな、聞くな。聞いたならば、相手の思惑に足を取られ——

「ころして」

口からの涎が 泣けぬ彼の涙のように溢れる

「……—つ!!」

一方で、順平は真人と一対一で——それも順平側が不利な状況で苦戦を強いられていた。

腕を大太刀の如く研磨させて横薙ぎにすれば、それだけで校舎は真つ二つになる。順平は間一髪で避けているだけだ。【澱月】で庇って仕舞えば、自分は攻撃手段を失う事がわかつているから。

だが、相手は腐つても特級呪霊。たかだか一日二日訓練しただけの下級術師相当の実

力しか持たぬ順平が敵う道理は無い。

間一髪で避けているのが、それこそ間違ひ。立ちあがろうとした所を、肥大化した右手によつて【澱月】ごと校舎の壁に叩きつけられ、そのまま拘束されてしまふ。

「ぐうっ！」

「やつぱり思つた通りだよ。お前もアイツも、人間殺せないだろ。

はゝあ、こんな事なら最初からこうすれば良かったよ」

上から目線で、知つたような口を利く。ほぼ同じ目線で、順平は睨む事しかないままだつた。

「ホントはさ、踊り場あそこでキミを改造人間にして襲わせようと思つてたんだよね。友達思ひのアイツなら泣いちやうかな？ それとも怒る？

だから面白いよね。現実と理想の擦り合わせが出来てないバカなガキはさ」

「違ふ……」

——吉野順平は、ジョーカーと虎杖悠仁から多くの物を貰つた。

彼らは友となつてくれた。話を聞いてくれた。一緒に笑つてくれた。

それを貶されて、黙つていられる筈は無い。

「視野が狭いのはアンタの方だ。自分の持つてる世界こそが全てと勘違いしてるくらい、薄くて浅い世界しか見えてない。

人が人を恐れるから生まれたのが自分だつて？

笑わせんなよ、クソガキ

「あ、？」

手は動く。そして【澱月】の触手も動く。左で捕まっている【澱月】の左触手と自分の右手で、真人に中指をドンと立ててやる。不敵な笑みも添えてやれば、真人はこめかみをひくひくさせている。それが更に、順平の笑いを誘った。

「イキんのも大概にしろよ、お前。自分の状況分かつてる？ 何勝ち誇つてるワケ？」

そんなに死にたいなら、お望み通りブツ殺して——」

七海建人曰く、真人は『五条悟と同じ』らしい。子供のような無邪気さで人を殺せるし、その欲求に際限はない。

そしてジョーカーに曰く、だからこそ短気で、思考を読み易く、そして次の手を予想しやすい。それこそ、録画として撮ったものをビデオ通話のように思わせるほどに、苛立った真人は手玉に取りやすいのだ。

だから真人は、また気付かない。

【澱月】の左の触手が、今どこで何をしているのかなど。

くらつ、と世界が回る。

「……………ありえ……………」



平衡感覚が急激に失われる。真つ直ぐに立てない。

そういうえば、<sup>うなじ</sup>頸の所が何か熱い気がする。

回らない頭を全回転させながら、左手でふるふると何かを掴んで引つ張る。見ると、それは――

「――そんなんだから、簡単に背中を取られるんだよ、バーカ」

爪だ。地面から生えている爪。水色の海月のような肉の先端についてる、毒を分泌する爪。地面を掘り続けて真人の頸に突き立てた、【澱月】の右触手の爪であつた！

「あ……？」

（何ら この……くらくらすう、きもひいい……の）」

「知らないかもしれないけどさ」

やがて膝に手をつく真人に、順平は無理やり大右腕を振り払いながら、静かに語る。

「毒って、日常に溢れてるんだよ。」

コンビニで買えるくらい、お得にね」

診断：顔の紅潮、頭痛、意識混濁。呪霊の場合、解毒に掛かる時間は一分も要さないが、普段よりも時間がかかる。あまりにも大き過ぎる隙を生じさせた。

――そう、真人の足元が覚束無い要因は、順平が術式で作り出した『アルコール』による酔いと、急性アルコール中毒によるものだった。

(まずい……じゅつしき、を、たもて……)

「オオ、ラアツ！」

「げぼあつ！」

そして真人に最悪な事に、ここで上空から飛来する虎杖悠仁の追撃が刺さった。涎を撒き散らしながら、後頭部を蹴られた事も認識出来ずに、ただ呆然と這いつくばる。

H O L D    U P !

「悠仁、大丈夫……?」

「……今は、アイツに集中しろ」

「……うん」

順平は悠仁にその安否を問うた。だが返って来たのは、普段の彼からは考えられぬような、暗めの返答。

……おそらく、あの三人を手にかけて来たのだろう。

もう、そんな地獄は終わりにしよう。

「さあ、お仕置きの時間だ……!」

「ブツ潰してやる……!」

宵闇の空へと舞い上がる影二つ。持てる総ての力を込める。

この外道に殺された人々の思いを継いで、二人の猛攻は加速して行く――！

MY SCENARIO IS ABSOLUTE

右目を押さえ付けて、少し格好を付けてみる。

真人から大量の血飛沫が上がった。

だがその痛みも、真人にとっては一種の快樂に過ぎない。

悠仁達には理解出来ないだろう。死闘を愉しむという感覚を味わい続けていたなど。正気の沙汰ではないと思うだろう。

だが、この呪術の世界は。

頭のネジがトんでいる者こそを祝福する。

頭脳戦は大敗。

呪力も体力も消耗している。

酔いから覚められたのは僥倖に過ぎず。

追撃が来れば終わり。

なのに、なぜだろう。

(ああ、そうか)

その事実には、昂る自分がいるのはなぜだろう。

(これが、この気持ちこそが)

生まれたがっている。

新たな自分の可能性が、殻を破ろうともがいている。

溢れ出る血液が、苦痛という名の脳内物質を更に分泌させる。

——『死』か!!)

魂が、大きく鼓動する。

そのタブーに触れてみる。

この気持ちを具現化するために。

この世界を 犯すために

「領域展開」

「な———!?!」

掌印を二つ、口内で結ぶ。

両方とも人差し指と小指を合わせた。片方の手は人差し指と中指を折り曲げ、もう片方は人差し指と中指を絡める。

そう。真人の成長は、いかなる邪魔をも凌駕する。

悠仁が『それ』に気付くも、もう遅い。

真人という呪いの真骨頂を。

この世界の全てが祝福しているかのように。

全てのピースが嵌るように。

死というインスピレーションが頭を溶かし、犯したことで。

真人は今、頂に行き着いたのだ。

「順平————っっ!!」

悠仁が手を伸ばすも、真人が顕現している手が阻んだ

わざわざ苦勞して救った命を引き摺り込む

虎杖悠仁と雨宮蓮を、無力感という絶望で押し潰すために

真人は

更に

高く

ト  
ぶ

——ヒトとは死ぬために生まれ、

故に生きるからこそヒトは醜い。

奇跡は一度 二度は無く  
 篡奪者さんだつらの 死しせるは必然  
 後の祭 螻蛄ろうこの門渡り  
 七つ罪にて 遣やれ獄ごくの塔とう

15.

昊？は己の出自に関する記憶がほとんどない。物心ついた頃から、己の身は????と共にあつたし、欲求という欲求も、誰かを呪うための理由も無かつた。そもそも昊？は、己が呪いであるという自覚が薄かつた。

だが、己の記憶——否、その奥底にある感情を構成する数少ない一つに、〃クルスアキラ〃という言葉と、その人物の姿形があつた。逆に言えば、それ以外に昊？には何も無かつた。

故に昊？は〃クルスアキラ〃に拘つた。〃クルスアキラ〃に会えば、己がどうやって

生まれたのが分かると、そう直感した。

己は人が大空からの厄災を恐れる故に生まれた存在であると、夏油や真人らに言い聞かされてきた昊？は、しかし、その在り方に疑念を抱いていたのだ。

そして、7月の下旬にあの切り札に邂逅した時——昊？は得も言われぬ感情に包まれた。

理由は分からない。だが心で理解した事がある。

この《蟻》だけは絶対に潰す。その仲間も、家族も、恋人も、子孫も、何もかもを奪い尽くす。魂の跡形も遺さぬよう縊り殺す。そうでなければ気が済まない。

だが、目の前の見窄らしい姿は何だ。

思わずして、昊？は地に降り立ち叫ぶ。

「立て!!」

赦されない。赦されて良い筈が無い。

「貴様の『罪』はこの程度の『罰』では贖えぬ!!」

たかが蟻如きが人を殺せぬように、

?が人に殺されて良いはずが無い。

「立てクルスアキラ!!!」

その理を崩した者が、こんなにも弱い訳がない。



それこそが、昊？が抱いた傲慢の罪とは知らぬままに。

全ての憎悪を込めた声で、昊？は叫ぶ。

「……聞きたい、事は……色々あるが……」

絶え絶えの声で、昊？へと敵意を向ける。しかしそれは、普段のジョーカーのそれより遥かに弱々しかった。氷柱の冷たさが、もはや底を突いた体力を更に奪っていく。

ジョーカーは見誤った。七海建人の曰くを信じ、敵は一体であると思い込んでいた。それが唐突な二体目の対応を遅らせ、更に最悪なことに弱点属性である氷結による攻撃を受け、瀕死となっている。だがそれも、『食いしばり』というスキルをペルソナが覚えていなければ、本当に危なかった。

『食いしばり』。それは、ペルソナ使いの中でもジョーカーのみが有する事の出来る、他のスキルとは一線を画す特殊なスキルだ。このスキルがあるか無いかで、ジョーカーの生存率は大幅に変化する。

その効果は、『一戦闘中に一度だけ、ジョーカーの死を一歩手前で防ぐ』事が出来るのだ。

更にはこれよりも上位互換であるスキルも存在するが、それは現在共にあるペルソナでは、アルセーナをおいて他に有する者はいない。そんな特別なスキルを序盤からほとんど覚えられる訳はないのだ。

血反吐を大量に吐きながら、氷柱をどうにかして抜こうとするも、力が入らずに苦しむだけだった。

「その苗字は捨てた……。オレの、本当の名は——」

クルスアキラという人間はもう存在しない。過去も、現在も、未来も、永遠に。クルスの苗字でかつてを生きる事は出来なかった。己を見捨てた家の名を継いでやる道理は無かったから。

故に、婿入りして苗字を変えた。結婚式など呼ぶわけがなかった。子供の顔を見せる事などあり得なかった。

……いや、子供に関しては、蓮自身も言えた義理ではない……。

かつてのアキラも、親としての責務を果たせなかった、失格者なのだから……。

「——ゴグマゴグ!!」

だが、それを会話などする理由はない。敵と話し合う義理も無い。

仮面が蒼く燃え砕かれ、かつてのイギリス・アルビオンの時代に生きた巨人《ゴグマゴグ》を呼び起こす。その怪力を天変地異に見立てた物理スキル《アースクエイク》は、ジョーカーに突き刺さった氷柱の足を砕き、体の自由をもたらす。

虚を突かれた梟？は回避に間に合わず、隆起する地殻をその身に受けた。

自由を受けるジョーカーだったが、あまりにも血を流しすぎている。ジョーカーのそ

の立ち姿はふらふらで、刀を杖にしなければ立つこともままならない。少し指で押して仕舞えば倒れそうなほどに覚束ない。当然だ。身体中穴だらけの重傷と激痛は、ジョーカーの意識を刈り取るにはあまりにも容易い。

だがジョーカーは倒れない。宿儺に負けたあの日から、もう二度と負けないと誓ったのだ。

ジョーカーが今立っているのは、彼の宿儺をも上回る堅き意地が故に。

故に昊？は、その意地ごとジョーカーを刈り取らねば、永遠に勝つことは無い。

「……そこまで死に急ぎたいか。ならば良いだろう」

そう言つて昊？は、どこからともなくサッカーボール程度の大きさの球体を取り出し、帳に発生した雨雲に放り投げた。乱気流……否、それどころでないほどの真つ黒な嵐を凝縮したようなそれ。先もジョーカーはこれにやられたのだ。

「《色即是空》【冰壺】」

昊？の術式は《色即是空》。昊？の生まれである『空からの厄災』を象徴する術式だ。

これにより、昊？は気圧を操る事が出来るようになる。漏瑚を助けるために悟の気を引いた霧も、今滝のように降り掛かる雨も、《色即是空》が生み出した代物。

そして【冰壺】とは、その《色即是空》が生み出した拡張術式。

降り注ぐ雨すらも、瞬きのうちに、鋭利で通常ではありえないほど大きな氷柱と化する

ほど、超低気圧の絶対零度。

そしてジョーカーには、もうこれを避けられるほどの体力は残っていないかった。虫の息であるジョーカーには、為すすべは無く――

「フンッ」

――それ故に、彼が辿り着かなければ、本当に危なかつた。

鈍の鉦を振るい、空からの氷柱の悉くを叩き落とす。昊?の【氷壺】は、発動限界時間を五秒とし、再発動可能条件を停止から三十秒の経過としている。それもあつてか、飛来する冷たい死神の針の雨からの傷はほとんど見られなかつた。

「独断専行、命令無視。本来なら懲罰ものですが、キミの怪我に免じ説教だけで許しましょう。」

さつさと回復して立ち上がってください」

ぶつきらばうにその男、七海建人は言う。先の猛攻に息を切らす様子は見えないのは、彼が一級術師としての実力者である所以。

「あり、が……………」

「礼は後。早く反転術式を」

「……………りよ……………いき」

「――まさか反転術式による治癒に縛りを？」

全くキミは……」

呆れ返る建人と、ずり落ちて力なくへたり込むジョーカー。

領域を展開せずともペルソナで治癒出来るが、身体中に風穴が空いている重体を治癒するには、《小回復ディア》や《中回復ディアラマ》などの格式の低い治癒スキルでは治し切れない。唯一完全回復スキル《大回復ディアラハン》を持つペルソナも、縛りであと五十秒は使えない。それなら、領域を展開して縛りから解放する方が早い。

自分で組んだ縛りとはいえ、普段から反転術式で治癒できないのは痛手だ。いつそ縛りを無くしてみるかと考えたが……否、強くなるための処置だ。ジョーカーの目的は両面宿儺を置いて他にない。それを忘れてはならない。

長いため息を吐く建人。サングラスが僅かな光で反射する。その慧眼の目元には、限が色濃く浮かんでいた。

「朝の六時出勤なんて日は、今日限りにして欲しいですね」

その途端、建人は鉈を空中に放り投げた。

スーツ姿が目立つ彼。その間にジャケットを脱ぎ捨て、青いシャツを腕まで捲る。サスペンダーと背中に仕込んだホルスターが目新しい。ネクタイを己の右手に巻き、空いた左手で鉈をキャッチする。

——その瞬間、建人を包む呪力量が跳ね上がった。

七海建人一級術師は、かつて証券会社に勤めるサラリーマンであった。しかしそのあまりの激務と労働基準法を無視した毎日のようなサービス残業に、心を荒ませてしまったのだ。

これは、その時代の名残。

七海建人は残業を嫌う。

故にこそ、残業する羽目になった時、普段以上の力を以って早急な対処を行うのだ。

普段の力を七〇〜八〇％に留め、八時間を一日の労働時間と定める事で、八時間以上勤務する際に、普段以上のコンディションを強制的に付与出来る縛りを建人は組んだ。

先程、後輩である猪野琢真いのたくま二級術師を、建人が独自の調査でヤマを張った配置に着かせ、一級術師への推薦を餌に戦闘させている。その際、建人自身は一切の戦闘行為を行なっていないため――

「――三十秒。それ以上は負かりません」

今の建人の実力は、優に普段の一五〇％を超える。

「疾く失せよ」

「イエスと答える馬鹿がどこにいますか」

軽口を叩きながら、建人は己の使命を全うせんと疾る。

呉？としてそれを黙って見ている訳は無い。先述の通り、《色即是空》は気圧を操るが、

大量の呪力を使って作った「冰壺」は今リキャストタイムの消化のため凍結中。故に昊？が出来るのは体術のみ。

だが体術とは言っても、昊？のそれは少々特殊だ。

集中力を高めた建人は、『体術の極意』の発生を期待しつつ、一瞬の間に昊？の懐に潜り込む。

ネクタイで縛った右拳を突き出し、そのままボディへと叩き込もうとするが、それを見越していた昊？は、半身を逸らす事で紙一重で回避する。

建人から見て右側に避けた昊？は、すかさず左手で建人の頭部を掴もうと試みるも、右拳の勢いそのまま体を回転させた建人は、左手の鉋で、昊？前腕の比が丁度7:3である、突き出された左手首を叩く……が。

(手応えが無い……?)

すかつ、と空振ってしまった感覚。勢いを殺さずに回転したまま通り抜け、即座に着地と分析を開始しつつ、更なる特攻を仕掛ける。分析といっても建人は、先の「冰壺」という拡張術式を見極めていたため、昊？の術式が何なのかに対する推理はすぐに終わった。

(——呪力で構成されている肉体を霧……いや、粒子の集合体と認識する事で、奴の呪術で無理やり肉体を乖離させ回避。その後切断させた手首を接着させる事で呪力消費を

抑えたか。はつきり言って、神業ですね)

否、建人の考察は半分正解で半分間違いだ。

昊？がなぜその身を洋服で包んでいるのかと問われれば、それは己が課した縛り故。昊？は、『常に己がこの世に存在する証明をしていなければならぬ』のだ。

なぜならその気になれば昊？は、自身に《色即是空》を永久的に施し、呪力体である自身の肉体を霧散させて、物理的に被う事の出来ない唯一の呪霊となれるのだ。これを利用して、霧や雨と同化して姿を隠す事や、確実に戦闘から脱出する事も可能だ。

しかし、その縛りはあくまでも術師達や呪詛師など、呪いが見える者のみに適用される上に、昊？自身のプライドが、そんな下水道にいるような溝鼠程度の根性を許さなかったが故の、この縛りなのだ。

だがその縛りと引き換えに、昊？は負傷しやすい腕と脚を《色即是空》が用意した気で補える現象を可能としたのだ。服の中に人型の形を保った台風を飼っているようなもの。それはそれで神業である事に間違いはないのだが。

そう、昊？の生まれ持った特技は、六眼無しの神業級の緻密な呪力操作であるのだ。

やがて昊？は《色即是空》を建人に差し向け、荒れ狂う暴風にて強制的に距離を置かせた。近接戦は昊？の得意とする所だが、さすがは一級術師と言った所。昊？の嫌がる胴体へや頭部への攻撃を継続していたために、遂に昊？は痺れを切らしたのだ。



「……蟻風情が」

「その蟻にあなたは敗れるのです」

「口の回る！」

昊？の術式には、どうしても空気中に水分が必要だ。昊？は普段、「氷壺」を使用する事で、空中の水分や雨、霧などを瞬く間に氷結させる事で攻撃するという、回りくどい手段を取る。

だが一方のこれは、全盛期のジョーカーのために取っておいた切り札。先の【氷壺】よりもその球は小さい。およそハンドボール程度だろうか。建人は新たなカードに、警戒の体勢を取り、背後のジョーカーを庇う。

しかし、その行為が何になろうか。

『それ』から感じる呪力エネルギーは、「氷壺」のそれなど比較にならないくらいに高いというのに。

「終いだ」

(来る——否、避け——!?)

——瞬間。

——裂けた。

——何もかも。

太鼓を乱雑に叩く音のような。

古くから恐れられている二柱の神の一柱のよう。

建人は――

「――《色即是空》【雲にのたちいろず耀】」

目の前に、雷神を幻視した。

閃光。後、鼓膜が割れるほどの爆音。建人を一筋の光が貫く。

見えたのはそれくらい。

あまりの激痛に、逆に体が痛覚を麻痺させるくらいに、建人の意識は、たった一瞬で朦朧となる。

そうか。雷霆が、昊？の掛け声で疾ったのか。

なら、鉦を構えていたのは間違いだったな。

なぜなら、最悪な事に、左手に持っていた鉦が避雷針の役割を果たしてしまったのだから。

生きて思考できている以上、致命傷は避けられたのは分かる。

ただ、左半身の感覚が無い。

見ると。

まあ、案の定と言うべきか。

嫌な予感的中していた。

鉄の匂いすら掻き消す、肉の焼け焦げた匂いが充満し、

その部分のシャツも肉も原型を留めておらず、

千切れ、刎ね飛ばされ、融解し、

建人のあらゆる『左』は 死んでいた

(———っ!!!)

脳が、左半身の事実上の欠損を認知してしまった。それ故に訪れる激痛に、建人は悲鳴を堪えるのに精一杯だった。

——そう。呉?のもう一つの切り札【雲のたちいらす耀】は、電撃による攻撃を旨とする拡張術式だった。

【氷壺】より大量の呪力と術式を込め、更にそれを【氷壺】よりも小さく凝縮する事で電子を活性化。敵との間にプラズマを発生させる事で電撃の通り道を作り、そして雷霆を放出する事で、敵を一瞬の内に葬り去るといふ、【氷壺】の完全上位互換である。

ただ、この【雲耀】は呪術的に【氷壺】と同一視されるため、【氷壺】のリキャストの消化が終わるまで【雲耀】もまた使えなかったのだ。

莫大な電気エネルギーによる電離が起こり、空気中の酸素がオゾンとなつてゐる。これを防げる人間がいるとしたら、それこそ五条悟の無限を置いて他にいないだろう。

故に勝利を確信した昊？は、建人に取引を持ちかける。

「蟻、後ろのソレを差し出せ。さすれば苦しませず殺してやる」

「……………なに、を」

呪具として愛用してゐるあの鉈は、幸いにも、刃に卷いた呪布が焦げただけで、まだ得物として振るえるだろう。炭となつた左手の指が何本か掛かつて残つてゐるのが気になるが、致し方なし。

即座に余つた右手で得物を握ろうとする――

だがそれを、今度は一陣の烈風が阻む。

先の「雲耀」ほどではなく、建人が万全であれば回避は余裕だつたろう。

だがもはや、建人にはそれすらをも避ける体力が無いのだ。

「ぐうッ！」

「二度言わすな」

「……………つ、く」

右肩から先を 一陣の風が奪つていった

(……………( )まで、か)

両腕を欠損。左目の視力は、先の電撃で無意味と化した。

鉈は握れない。へたり込む状態からも立てない。

もはや建人は、詰んでいた。

「……答えぬのならば、選べ。」

電撃で心臓麻痺か、氷結で壊死か？」

——七海建人は、呪術師である事を一度諦めた人間だった。

唯一慕える先輩と、唯一親友と恃んだ同級生を喪くしてから、七海建人の心には罅が入っていた。

生きる事に気力を使いたく無かった。死に際の想像に興味を持てなくなった。死生観など、とうに終わっていた。

白黒の世界の背景画。

それが、七海建人の人生だった。

新人は社会に絶望しすぐに辞めて行く。それもそうだ。こちらは真摯でありたいのに、上は自分の利益のみを追求する。客の不利益など知らん振り。その現実と理想の擦り合わせが出来ずに、嫌になって辞めて行く。

だが建人は辞めなかった。それは何故か。

——金だ。

金さえあれば、何不自由ない生活を送れる。金が貯まれば、どこか物価の低い国に移り住み、呪術師として絶望した時のような事も考えず、老後を送れる。

朝から晩まで、金の事ばかり考えていた。

金。

だから働いた。必死で働いた。

金。

呪いのないどこかに行きたかった。

金、金、金金金……。

——お疲れですか？

と、いつの間にか建人は、行きつけのパン屋に足を運んでいた。このカスクートは美味しいのだ。ここに来る以前の記憶が薄いのは、社内泊をしたためだろうか。彼女——店員に指摘されるほど、どうやら隈も酷いみたいだ。

——あなたこそ、疲れが溜まっているようですね。

——あ、分かっちゃいます？　なんか最近、疲れが取れないんですね。眠りも浅い

し。

そう言つて腕を回す店員。その方に……蠅頭が乗っていた。それこそ、放置していても、体調を少し崩させる程度の呪いしかもたらさないほど微弱で、祓う必要もないくら

いに懦弱だった。

—— 一步、前へ出て貰えますか。

—— え？ はい……。

そう言つて横薙ぎに腕を振るう。たったそれだけで、彼女を苦しめていた蠅頭は跡形も無く消え去つた。

何が起こつたのか分からず、店員は建人が難いだ方を、何かあるのかと思ひ向いた。だがそこには何もなく、頭にクエスチョンマークを浮かべている。

—— 肩、どうですか。

—— はい？ ……えつ、あれ!? 軽い!

—— 違和感が残るようでしたら病院へ。

—— そう言い残して、建人はカスクートを手に店を後にする。

一銭にもならぬ無駄な行為だった。そう思ひながら会社へ向かつていると。

—— あの！ ありがとう!!

快活な彼女によく似合う大きな声で、彼女は建人に礼を言った。

それに建人は一瞬足を止め、振り返つてみる。

—— また！ 来てくださいねー!

その大きな声に。

その大振りに振るう手に。

その向日葵のような真つ直ぐな笑顔に。

何か、建人は、救われたような気がしたのだ。

少しだけ、微笑んで、会社の方とは違う道を行く。

うざったらしい先輩の電話番号をコールしながら。

……そう。やり甲斐とは無縁の人生だと思っていた。

それを、ただ一言の「ありがとう」が救ってくれた。

その人は、建人を救ったとは思っていないだろう。何せただのパン屋の店員だ。日常に仄かな彩りを与えても、人の世界そのものを彩ってしまえるほどの力は無いと、そう思っているだろう。

けれど、けれども。

七海建人という男にとって、その「ありがとう」こそが、本当に得難く、そして有難いものだったのだ。

「——お断りします。あなたにやる物は、何も無い。」

「……ならば——」

その最期の言葉に、昊？は【雲にのたちいらす耀】で答える。今までに無いほどの膨大な呪力を、その凝縮された大嵐に通わせて、雷が目の前の蟻を貫こうとしている。



感謝されるほどの事をしてきたとは思えなかった。

だがそう思えないのは、『その一言』を貰った事がなかったからだ。感謝されるほどの事は、何度だっけてしていたのだ。

ならば、それ以上に勝る幸福などない。

悔いは、無い——。

「両方で死ぬ」

まるで神の怒りのように。

その怒りを代弁するかのよう。

あるいは己が神の怒りそのものであると言わんばかりに。

閃光と氷河が、建人の視界全てを覆って——

「領域展開」

禁断の蔵は解き放たれた。

——錠前も鍵も、鎖諸共投げ捨てて。

だが、建人が走馬灯を巡らせるにはまだ早い。

世界が、宿讎のそれとはまた違う血の色に染まる。足場は巨大な骨となり、地上は悲痛と畏怖の表情に塗れる人々が、助けを乞いながら消えていく。

昊？は目の前に広がる世界に、なぜか“懐かしさ”を感じていた。

「……すまない。ゆっくり休んでくれ」

昊？が【氷壺】で放った氷河よりも【雲耀】で放った雷撃よりも疾く、建人を抱き抱え昊？の背後へと降り立つ。切断された両腕も、感電し尽くした内臓も、まるで何事も無かったかのように反転術式を施せば、建人は規則正しく息を吹き返し、死んだように眠った。

家入硝子女医から、反転術式による治癒を鍛えてもらったおかげだ。でなければ、ジョーカーは建人を救えなかっただろう。

「……そうだ。それでこそ」

「黙れ」

全くもって腹が立つ。

敵も、己も。

仲間を守るために強くなったはずだ。誰も死なせないために必死で学んだはずだ。

……それなのに。

建人を死に体にかけておいて、一体何が切り札か……!!

「呪霊、貴様は——」

はらわた腑が煮え繰り返るような憤怒が、赤黒い怒りを模すようにジョーカーの身を包む。後

ろの此奴に思い知らさねば気が済まない。奴の一挙手一投足が、ジョーカーの逆鱗に触れる行為であると。

死ぬ事に恐怖は無い。既に一度死んだ身だ。死ぬ覚悟など、既に前世で終えている。

ただ、前世からずっと怖くて耐えられない物も、ジョーカーとてある。

死ぬ事よりも恐ろしいのは。

「——本気でオレを怒らせた!!!」

何も出来ないまま、仲間を目の前で失う事だ。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t    t h e    s t a r t    t h e    g a m e .  
# 2 1    T h i n k    A g a i n . . .

## # 2 2

16.

「順平！ 順平!!」

桜里高校の校庭に、半径三メートルはあろう巨大な黒球がぼつんと存在している。その正体を、虎杖悠仁は知っていた。知っていながら、順平が巻き込まれるのを止められなかった。

油断していたというのものもある。だがそれ以上に、建人から『真人は発展途上の呪霊である』と言い聞かされていた事も起因していた。無意識のうちに侮っていたのだ。まさかこの短期間で、真人が領域展開を習得するなど……そんな有り得ないほどの才能を持ち合わせているとは、露も思っていなかった。

だから、一手遅れてしまったのだ。

(クソ、クソッ！ こんなクソな結末あつてたまるかよ!!)

諦める事など到底出来ない。

鉄のように硬いその領域の『殻』の、一点突破を試みる。

軋む拳と吹き出す血を、歯を食いしばって堪えながら。

順平の無事を、祈りながら。

一方で真人は、己の勝利への確信に酔いしれていた。

「知らないだろうから教えてあげるよ、順平」

真つ暗な部屋に閉じ込められたような感覚に陥る吉野順平。否、真つ暗というのは少々語弊があるか。光源がないのに二者の姿が見えるくらいには明るい。

足元を見ると、二人が立っていたのは不可視の鏡面の上で。その奥には、まるで蜘蛛の巣のように張り巡らされた『手』の数々。

嫌な予感しかない順平は、決死の時間稼ぎのために、真人の言葉を聞くしかなかった。

「これは『領域展開』。必中必殺の呪術の頂。才能のあるヤツしか届かない極地ってヤツさ。俺も届いたのは、今さっきだけだ。

感謝するよ順平。キミのおかげで、俺はまた一步前へ進めた」

真人の感謝は本物だ。この状況が、もはや順平ではどうする事も出来ない事態にまで陥っている証左でもあった。

「……『無為転変』が、僕に確実に刺さるって事か」

「花丸大正解♡」

態とらしく和かに、真人はその両手から更なる小さな手を複製して花丸を模る。全く

もって腹立たしい。順平に出来ることはもはや何も無いと分かっているその行動を、順平自身が理解出来ているからこそ。

「……ちく、しょう」

唇を噛み締めて、行き場のない怒りと悔しさを、赤く吐露する。

今、順平に出来るのは、悠仁を信じて待つ事だけだった。

残り少ない余命に、心を絶望で満たしながら。

「順平つてさあ、それなりに頭は良いんだろうけど……キミが馬鹿にしてきた奴らの次の次くらいには馬鹿だから。

——だから、死ぬんだよ」

心に渦巻く黒い感情に、何か大切なことを忘れている事も気付かないまま……。

17.

かつて、クルスアキラは地獄を見た。

人を人として扱わぬ天国の覇者を見た。

生態系の枠組みから外れた神秘を見た。

決してヒトの辿り着けぬ、神と見えた<sup>まみ</sup>。

宿讎のそれと似る、本能に語り掛けてくるような恐怖。

全ての生物に植え付けられている、上位存在に対する根源的恐怖。

(……似ている)

目の前のそれから、『底知れぬ畏怖』をジョーカーは感じた。

人を人と思わぬ者は、人の中であれ少なからずいる。

性の捌け口、金の成る木、無限に湧き出るATM、権威に縋るハイエナ、政界入りを

果たすための人柱……誰が人をどう思うかは、人それぞれだ。

だが神の場合は、そもそも認識が違うのだ。

神は、己以外の悉くを愛する自分を愛している。

全ての生命とは、己の作りしモノの一種に過ぎず。

人とは、自然というシステムの中の最高傑作でしかなく。

その気になれば軽やかに淘汰できるような——

「烏漕がましい」

人に曰くの、『蟻』だ。

「貴様の怒りが、何だと云うのだ」

蟻は『人』を畏るるが故に。

「嗚呼、実に烏漕がましいぞ、クルスアキラ」

蟻は人を上位と覚ゆ。



「貴様のような愚かな蟻は」

故に、蟻に曰くの『人』とは。

「——我が直々に踏み潰してくれる」

人に曰くの——正しく『神』に等しかろう。

地獄に、血の雨が降っている。

雨とは、人が古来より抱いてきた厄災の象徴だ。遙か昔、ありとあらゆる古文書にて、形を変えて描かれる『洪水伝説』が主だった例として存在するからこそ、昊？は昊？足り得るのだろう。

昊？が呪力を解放する。——瞬間、あらゆる場所で竜巻——否、雷電を伴う暴風雨が上がる。下で苦しむ認知存在の人間達は風の前の塵。昊？という尋常ならざる呪力総量と緻密な呪力操作技術があれば、このような大道芸なら寝ていても出来る。

昊？の周囲に浮上する二つの球、吹き荒ぶ澁谷の街並み。昊？のコンデイションは、いつになく万全だった。

領域を展開された以上、昊？に出来ることは『自身の領域でジョーカーの領域を塗り潰す』か、『領域諸共ジョーカーをぶちのめす』かの、二つに一つ。領域から脱出という手段も取れなくはないが、そんな愚鈍な真似は昊？のプライドが許さない。

「何を言おうが、オレの答えは変わらない」

——ただし、相手がジョーカーでなければ。

「——蟻の底力を嘗めるなよ、呪い風情が」

塗り潰しにかかる呪力量があまりにも多いのと、ジョーカーの領域が呪術的に『塗り潰しにくい』というのがあって、昊？は、自身も領域を展開することによる圧倒に踏み出せずにいた。

そもそもだ。領域展開とは『術者自身の生得領域を術式を付与して現世に展開する結界術』で、呪術全盛期の平安では、呪術師呪詛師共に、誰しもが当たり前前に使っていた技術だ。

ではなぜ現代の呪術師のほとんどが、領域を展開出来ないのだろうか。

その理由としては、『昔の領域展開と現代の領域展開ではその意味合いに違いがあり』、『その意味合いの差異にハードルを上げる要因がある』からだ。そしてその要因こそが、領域の特性である『必中必殺』のうち『必殺』の有無によるものだった。

五条悟の《無量空処》は、領域内に連れ込んだ者の『視覚・伝達』を阻害し、ありとあらゆる思考や行動を不可能とさせるもの。例として、目の前のりんごを『りりりりりりりりり』としか認識出来なくさせるのだ。そしてそうなった者の行き着く先は、廃人となって死を待つのみ。

故に『必中かつ必殺』の領域。

だが神童であり努力の天才であり最強でもある五条悟ですら、領域展開の確立には十年以上の歳月を要した。幼い頃から呪術師としての英才教育を経てきた五条悟ですら、そうなのだ。現代術師には、その頭に刷り込まれた『必殺技』のイメージを崩せない以上、一生かかっても出来ない者が多いのも当然だろう。

その一方でジョーカーの《啓龕廟堂》は、領域内にいる対象者に、『対象者の認知を元に何か一つの効果を強制する』というもの。ジョーカーは『縛りからの解放』を主に使用する。これは敵に使用する事も出来るが、自分自身だけを対象、あるいは両者を対象者とする事も出来る。その難易度としては、自分のみへ両者へ相手のみ、の順だ。

そういう意味では、《啓龕廟堂》には簡単な対処法がある。ジョーカーの領域を『必殺』だと認知しなければいいだけなのだ。それさえ出来れば、まず領域の効果で死ぬようなことはなくなるのだから。

故に《啓龕廟堂》は、『必中であるが必殺ではない』領域。

だからこそジョーカーの領域は、それが大きなアドバンテージを持つ。

この世界における呪術は、共通して、『等価交換』を原則としている。

例えば、ジョーカーが自身に大量の縛りを設ける事で、自分の体力や実力の底上げに成功している。特に縛り①死に至る病は、『自身の命』を対価に『レベルの大幅向上』もさることながら、拡張術式の確立成功に大きく貢献していたりもする。

そしてその『等価交換』の原則は、何も術式効果だけでなく、帳や領域などの、基礎的な結界術などにも適用できる。

現に真人が降ろした帳には、『外からは簡単に入れる』が『呪力のない者は内側から出られなくなる』帳を作り上げる事に成功している。呪術的な足し引きが成立しているからこそ、このような芸当も出来るのだ。

では、『必中であるが必殺ではない』ジョーカーのような領域は、どのような特性を保持しているのか。それこそが、『領域展開自体の難易度が低い』、『領域同士の押し合いに強い』という特性だ。

これはジョーカー自身も知り得ない事だが——その特性を『易々と』打ち破れる者は、現時点では、押し合いが関係ない結界で閉じないタイプの両面宿儺と、熟練された術式による領域をぼんぼん展開できる五条悟において他にない。

それほどに、ジョーカーの領域は厄介なのだ。

隙を考慮しない上で全力でかかれれば、昊？とて、どうにか押し潰せるであろうが。

さて、恵との模擬戦の後、ジョーカーは新たにペルソナを合体・作成し、自身が所有するペルソナは、合計で八柱へと減っている。アルセーヌはもちろんのこと、吉野風を救うために認知スキルを使った『悪魔』のアルカナ・ドツペルゲンガーを含めて、だ。

まるで鳥が羽ばたくように、両手で弧を描きながら、互いに反対の目元を覆い——

「愛でよ奏でよ、アナーヒター、ブリジット」

「ウフフ……」

「アハハ……」

そして呼び出すのは『恋愛』のアルカナを持つ、流水纏いしアナーヒターと、『節制』のアルカナを持つ、焰吹き上がる壺抱えしブリジット。『清浄』と『高貴なる者』の字あざなを持つ、眉目秀麗……否、妖艶なる二柱の女神。

相反すれど、六花と劫火の女神達ならば——ミ合ツクス体レイド技に選ばれるには申し分ない。

——呪力がペルソナを介して、別の物質に変換されていく。

奴が空を驕るのなら。

こちらは星を傲るまで。

——真の地獄を、傲るまで。

「《ヘルヘイム》……」

ジョーカーが嗤う。昊？が軋る。

その黒達を、翼の如く靡なびかせる。

片方は、灼熱と紅蓮の大地を。

もう片方は、雷いかづち纏いし大嵐を。

二人の佇まいは、まるで――

この世の終わりを、想起させた。

二つの天変地異は混ざり合い、ぶつかり合う。

然して、先ほどまで手も足も出なかつたのが嘘のように、二大地獄の体現である《ヘルヘイム》は徐々にテンペストを押し潰していく。《啓龍廟堂》がジョーカーの縛りを、その恩恵を残したまま取り除いてくれているおかげだ。

「この程度か？」

「……嘗めるな貴様アアツ！」

やられる訳にはいかぬと、更に昊？は「雲耀」と「冰壺」も用いて、真っ向から立ち向かう。テンペストとは別に、虚を突こうと試みる。

バチバチバチバチ、ガチガチガチガチ、という耳を劈く嫌な音の連鎖。雷霆と冰霆が、ジョーカーの編み出したペルソナの力ごと、ジョーカーを貫く――前に、ジョーカーの体を女神達が庇う。

アナーヒターが「冰壺」の、ブリジットが「雲耀」の前に仁王立ちする体勢となった。

馬鹿なヤツだと、好機だと、昊？はなんの躊躇いも無く放ち――瞬間、四つの属性が絡み合った事による呪力反応の爆発に、周囲は爆炎と煙に包まれる。轟々と鼓膜を劈く爆音が、その呪力反応の爆発が正しく爆弾の如き威力だったことを示していた。

昊？とて、これに巻き込まれればただでは済まない。ジョーカーとてそれは同じ事である。ならば一旦身を退き、事の顛末を見守ろうとして――

「――、やはりな」

――予想通りの展開が待っていた。

爆炎の陽炎で、粉塵による影が揺らめいている。

何の影かなど、想像に難くない。普通の人間なら、あんな爆発が起きれば、その身は焼け死ぬ。いや、焼け死ぬどころの問題ではない。そのあまりの温度に、肉体は一瞬で融解してしまうはずだ。

あの爆炎の中にいてなお、肉体を保つどころか無傷だなどと、あり得るはずがない。

――この男を、除いて。

「悪いが、お前の対策はもう終わってる」

――ジョーカーが刀を振えば、爆炎と粉塵が掻き消える。

いつものように、頼もしく。

不敵に嗤うジョーカーが、無疵のまま立っていた。

昊？はペルソナの存在は知っていても、裏・全書の存在は知らない。ペルソナには極端な弱点と極端な長点がある事を知っていても、ペルソナ一体一体が、何に弱く何に強いのかを知らない。

裏・全書にて作成した二柱のペルソナ——アナーヒターが氷結属性の攻撃を吸収し、ジョーカーに還元出来る事も、ブリジットに電撃属性の攻撃に耐性を与えるスキルを覚えさせた事も、当然知らない。

先に襲つてきた電撃を耐えれば、氷結による攻撃でダメージを中和でき、そして土壇場でそれを成したことも、また知らない。

故に無知とは罪なのだ。

「カウ、《ヒートライザ》」

その無知に故に、罰を受ける事になるとも知り得ないのだから。

核融合炉を背負う三本足の白い火鳥、中国古来より伝わる『太陽』の化身カウ。ジョーカーが所有するペルソナの中で、ジョーカーや味方を補助する事に特化したペルソナ。その太陽のエネルギーで、ジョーカーに熱を与える。

ヒートライザで、ジョーカーのあらゆる身体性が上昇する。攻撃力上昇 防御力上昇強靱にして堅固にして命中率回避率上昇鋭敏なる肉体を得たジョーカーならば、呪力抜きの体術だけの勝負なら、五条悟に追隨できる。

(やはり、宿儺よりは格下か)

そう率直に思いつつ、霞の構えを取る。

——台図は要らなかつた。



一瞬、そして一閃。左袈裟は簡単に右に避けられるのは分かっている。

これが諸刃の剣であれば、叩き潰すために全ての力を振り絞って振る、その振り下ろしを突かれるだろう。故に、諸刃の剣は一撃必殺を念頭に置かねばならないのだ。

だが刀は違う。刀は折れず、曲がらず、よく斬れるというように、『切り付ける』ことを目的とした刀剣だ。とは言え、力加減を間違えれば刃毀れもするし、最悪折れてしまう。逆に言えば、丁寧に使えば何度でも相手を断ち斬れるし、刃毀れすらもする事はない。

そして握る両手のうち、右手は謂わゆるハンドル、左手は謂わゆるエンジンだ。エンジンを調整すれば、ハンドルは切りやすくも切りにくくもなるというもの。刀とは、そういう技術的な要素も必要な武器なのだ。

袈裟から、右一閃。胴を狙った剣先は、その刃を右手で止められた。ダメージが無いはずがないのに、何の躊躇いもなく握りしめている。呪霊特有の紫苑色の血液が手指から吹き出さない事に嫌な予感がして、迫り来る左手を避けるために、円卓のスポットライトを回してペルソナを召喚する。

「ペリー！」

イランに伝わる妖精あるいは天女、女教皇・ペリ。昊？とジョーカーとの間に展開された踊り子の彼女が手を翳せば、そこに純白の呪力が集結していく。ほどなくして一つ

の光線が、昊？の心臓を貫く――

「ッ」

——そのすんでの所で、刀を離して光線の回避に全力を注いだ。果たして《コウガ》祝福属性中攻撃は、昊？の背後にあつた天へ向かう巨大な肋骨の一本を破壊する事しかできず、霧散する。

だが昊？のその焦りようから、ジョーカーは手段を選ばず、ペリの《コウガ》による祝福属性の攻撃を続行する。

ジョーカーは戦いに『正々堂々』というような騎士道精神めいたものは持ち合わせない。徹底的に相手の嫌がる事をしまくって、その戦い方に相手が怒り始める所を叩く……そうして怯んだ所を総攻撃でフィニッシュが、ジョーカーの頭にある戦いのシナリオでありハウツーだ。

だからこそ、昊？は回避しなければならぬこの状況に、徐々に焦りと怒りとが織り混ぜた感情を孕み始める。

ちなみにペルソナが有する祝福属性攻撃の全ては、反転術式を介する事によつて発動する。反転術式による攻撃は、呪力で肉体が出来ている呪霊とは相反する物質。故に対呪霊に最も効果的な攻撃手段であるのだが、ジョーカーがこれを知る事はいぞ無かつた。

閑話休題、昊？の焦りようからして、祝福属性が効果的だと見たジョーカーは、ペリに《コウガ》を連発させつつ、文字通り骨を骨子とした天上に至る地獄の架け橋を駆け抜けていく。

対する昊？は《色即是空》で、不可視のブースターやスラスターを体に装着して空中浮遊する事が出来、現にそうやってペリの《コウガ》を避け続けている。このままでは呪力を無駄に消費するだけだと悟ったジョーカーは、更なる一手を用いる事にした。

「なら、《マハコウガ》！」

ペルソナの魔法——云うならば呪法攻撃スキルには、『マハ』が頭に付くものとそうでもないものがある。これはサンスクリット語で、『多くの』といった意味を持つ。

所で、ジョーカーの銃によるエイムは下手ではない。下手ではないのだが、かの高名なガンマン・次元大介のようなファンタジーじみたエイム力も持っていない。当たる時は当たるし、外す時は外すのだ。

察しの良い諸君ならばお分かりだろう。

下手な鉄砲でも回数を重ねれば当たるのだ。

「フハハハハッ！」

さあ、この関門をどう切り抜ける。

そう言わんばかりに、ジョーカーは嗤う。

砲門を増やした《コウガ》——否、ペリの《マハコウガ》が火を吹く——!

「——ッ!!」

だが昊?とて特級呪霊。いかに先ほどよりも高密度の祝福属性攻撃とはいえ、こんなものに当たるほど特級の名は伊達ではない。下から嘖き上げてくる即死級の光線をどうにか避け続ける。

そしてたつた今、【雲耀】と【冰壺】のリキャストタイムの消化が終わった。

「失せよ!!」

苛々しながら叫ぶ。昊?の最大瞬間呪力出力を以って降り注ぐのは、へきれき霹靂とひさめ氷雨。ペルソナがその担い手と痛覚を共有している事を知っている、ジョーカーを狙う余裕のない昊?は、ペリを【雲耀】と【冰壺】で貫き消し飛ばす——

「戻れ、ペリ!」

——よりも早く、ジョーカーは昊?の上を取っていた。

この時、ジョーカーの声に反応せずペリを攻撃出来ていれば、昊?はジョーカーに勝っていただろう。ペリを破壊されたその激痛に怯み、一気に詰められていただろう。

だが、そうはならなかった。昊?は心臓を刀で貫かれ、不意に浮力を失い仰向けに不時着してしまう。勝敗はもはや、決したと言っても過言では無かった。

刀を引き抜き、今度は首元に刃を当てがうが、それ以上先には進まない。トドメを刺

す事よりも、ジョーカーは気になっていている事があつたのだ。

「答えろ。なぜオレの前の名を知っている」

返答は、沈黙によつて行われる。

だがそれは、ジョーカーの求める答えではない。故に、尋問ではなく拷問の手を取る事にした。

まずは視界を奪わんと、予告もなくその布作面ごと眼部を刀で切り飛ばし――

「な――に？」

見えたのは、*“穴”*であつた。

昊？の頭部の中央……そこには大きく、*“穴”*が空いていた。その穴はフードの裏の黒を貫通して見せていた。目、鼻、口……容姿を語る上で外せないものが、その穴によつて欠落してしまつていた。

否、そもそもこの昊？の頭は、頭というには角張りすぎている。まるで線対称の結晶体のような頭だ。顔の部位など付けようがないほどに、頭部として整形されている。

――そしてその衝撃の隙を、ジョーカーは突かれる。

「《色即是空・極ごくの番ばん》【靄あひ】!!」

拘束された昊？に出来る事といえ、このくらいしかない。

【氷壺】の作成に際し込めた莫大な呪力を、《色即是空》で一氣に解放して極小にして

極大の乱気流を相手にぶつける、領域展開とはまた別の奥義《極の番》。【雲耀】でも出来るが、今回は比較的作成コストの低い【冰壺】を選んだ。

閑話休題、ジョーカーが最後に装備したペリは、疾風に対する耐性が無く、故にジョーカーは腹部にて吹き荒ぶ業風に吹き飛ばされてしまう。少くない衝撃と苦痛に顔を顰めながら、しかし斃れる訳にはいかずギリギリで踏ん張る。鳩尾に深く突き刺さったそれに、ジョーカーは一瞬、呼吸の仕方を忘れてしまう。

「貴様は……貴様だけは必ず潰す」

昊？は悟る。

ジョーカーに領域を展開させたままでは、勝てないと。

「我が名は昊？。『宇宙』へと至りて、貴様の遍くを否定し、奪取する者……！」

なら、呪力の大部分を消費する事になってしまいが——致し方あるまい。

掌印を結ぶ。合掌のようできて少し違う。片方の手を少しずらし、指横を互いの指横で挟む事で完成する。

福音は何者にも齎される。その福音の示す先が、いかなる末路を辿ろうと、神からの祝福には違いない。人々を救うメッセージに他ならない。

だが得てして祝福とは、相応の呪い足り得るのだ。福音に込められたその祝福が、全人類の救済などと云うように、重ければ重いほどに。

——最大の救済が『死』であるように。

「領域展開——」

18.

吉野順平は今、己の人生を一から振り返っていた。

思えば、後悔ばかりの人生だった。

母が父と離婚してからというものの、順平は母の負担にならぬよう努めていた。我儘を言う事はなくなり、自己主張をあまりしなくなっていた。

地元では最も偏差値の高い県立高校を選んだのも、高校卒業後は就職すると決めていたのも、全ては母を思つてのこと。

だが高校に入ってから、その全てが水泡に帰した。

一年の夏にいじめを受けてから、全てが狂い始めた。全て……全て、伊藤と、その取り巻きと、外村と……学校のせいだ。よくある事だ。利益や名声を求るがゆえに、それ以外を蔑ろにすることなど、学校だけでなく社会においても、分かりやすいほどに存在する。

けれど、僕が何をした。ただ趣味を分かち合える人と集まっていただけじゃないか。

ただ友達と語り合っていただけじゃないか。

ただ、生きていただけじゃないか。

それすらも許されないのか、僕は。

(……はは、ろくな思い出が無いや。こんななら、映画以外にも趣味を持つとくんだった)

浮かぶのは自嘲。そして後悔。

そして最後に、出会った三人の人間と一体の呪いの顔。

一般人には波瀾万丈すぎる人生だったが――

(けれどまあ……最後くらいは楽しかったな)

その永遠とも言える孤独を、蓮達は取り払ってくれた。

吐き出してしまったが、あのカレーは美味かった。また食べたいと思えたのは、今生においてはそのカレーくらいだろう。思い起こして仕舞えばつらくなるだけだとかっているのに、まるで走馬灯のように脳裏に過ぎ去っていく。

昨夜――作戦決行前の、虎杖悠仁と松岡瞳が帰った後。吉野凧が眠り、実質的に吉野順平と雨宮蓮だけになった晩。

――蓮は、怖くないの？ 死んじやうかもしれないのに……。

そういう風に問うたのは、自信も紛れもない、吉野順平自身だった。



吉野順平は怖かった。自分を救うための作戦が上手くいく保証はない。雨宮蓮は自分で自分の半身を大きく傷つける羽目になり、呪力と生命力が失われればゲームオーバーで、そうなれば母の凧は死に、その息子たる自分も死ぬと分かっていた。

順平は、呪術をよく知らない。だからこそ蓮に頼るしかないのだが、蓮の生命力を甘く見るほど樂觀的でもなかったのだ。いかに呪術界において実力者であるとはいえ、蓮とて人間。深刻なダメージを受ければ、普通に死ぬのだ。

かと言って、何か別の作戦が思いつく訳でもない。この偽装作戦に変わる確実な手段は、順平の頭は閃かなかった。だからこそ不安なのだ。自分のために死ぬくらいなら、いつそこで迎え撃った方がいいと。

——なら、聞く。

だが蓮からの返答はシンプルだった。暗に「それがどうした」と言っているように聞こえたのは、間違いではないのだろう。この作戦を蓮から聞いた時、順平は自身の耳を疑った。そして気がついたのだ。

雨宮蓮は、自身の命を軽視している。

まるでいつ自分が死んでも構わないというように、常に腹を括っているようで、しかしそれを表に出す事はなく、あつけらかんと言つてのけるのだ。

吉野順平は、友に恐怖する。

得体が知れないのだ。今までに会ったことのないような、ナチュラルボーンの正義の味方を張っている英雄は、友達から見れば破綻者だ。誰かを救うために自分の命を軽く捨てられるのは、ヒーローになりたいと思うのは、そういう奴のことなのだ。

だから怖かった。母を喪う事はつらい。だが友に助けられて、その友は死に、自分だけが生き残る方がもつとつらい。

自分のために命を賭してくれるのは、嬉しくもあり、そして自分にはそれほどの価値はないと思ってしまう。

だが蓮は、たった一言で全てを覆してしまった。

——諦めるのか？

だからこそ、吉野順平は雨宮蓮を誇りに思うのだ。

そんな心の強さに、憧れてやまないのだ。

「……身構えてどうするの、今更？」

嗤いながら問う真人。

だが意に介さず、笑って紡ぐ。

「死ぬ時まで、蓮の……ジョーカーの友達でいたいだけだ」

真人がくつつちゃべつてくれる時間で、「澱月」の展開は終了する。

「最後の一瞬まで、諦めたくないから。」

これは、吉野順平の憑き物を落とすための戦付物語いだ。

真つ当な呪術師でない吉野順平にとって、死に際の覚悟など出来るはずもなく。

だからこそ、生の渴望こそが順平の心の原動力となる。

だって、初めてはつきりと思えたんだよ。

皆と一緒に生きていたい……って。

「キツシヨ」

不快感を隠そうともせず、しかし真人は順平を罵倒するしかなかった。圧倒的優位に立っているはずなのに、順平の顔色が絶望に染まらない事に懷疑心を持たざるを得なかったのだ。

人の本質は『悪』だ。それ故に『人の呪い』である自分は生まれ、『人と同じように悪を成す』のだ。それは、ガワだけとはいえ共に会話していた順平もわかっているはずなのだ。

有象無象に、そして中途半端に『悪』も成せず、惰性のままに他を貪っている『人』に意味はなく。故に我々呪いが人に成り変わるのだと。

だが、もう順平はその領域にはいない。

気付いたのだ。ジョーカーと真人は表裏一体である事に。それでいて、ジョーカーと真人の間に、決定的な格差がある事に。

ジョーカーは、真人は、同様に『悪』だ。目的のためならば手段を選ばない悪だ。しかしジョーカーは悪であつて邪悪ではない。真人には無いものを持つて、悪を成しているからだ。

二人の格の差。それこそが、美学だ。

ジョーカーの美学——星。星のように気高く、誰かの心に光を灯すような、遙か遠くにいても輝いている一等星。

星を目指し泥濘に克つ愚者に、

隠者は心を奪われたのだ。

彼のようになりたいたい、憧れたのだ。

なら、ここでは死ねない。

その星に手を伸ばしても、今は届かない。高望みだと嘲笑う者もいるだろう。

けれど——

そんなの、やってみなくちゃ分からないだろ!!

手を伸ばす。真人は人に、順平は星に。

諦めよ嘯く悪魔と、もう揺るがない不屈の魂。

……しかし。

順平がこの《自閉円頓裏》で出来る事は無く。

その拳と【澱月】の爪は、真人に届く前に――

「死んじゃえよ、お前――！」

真人の《自閉円頓裏》が、順平を無惨に殺さんと――

「オオオオヲオ、ラァァァア!!」

――発動するその寸前。

順平にとっての福音が、その天井を破って舞い降りた。

「順平――！」

「――悠仁――！」

孔の空いた拳、塗れる血。――少年は意に介さない。

何が出来るかは分からない。――諦める理由はいらない。

虎杖悠仁、見参。――さあ、真っ直ぐにブツ飛ばす!!

(何で、入れる――)

領域展開の『殻』は、『内側』からは強く、『外側』からは弱い。当然だ。領域展開と

は、相手を自身の生得領域に『閉じ込める』ためのもの。呪術の原則『等価交換』に則れば、内側の硬度を上げる度に、外側の硬度は下がるのは当然のこと。

なぜなら、侵入者にメリツトが無いからだ。わざわざ底なし沼に飛び込むような愚かな行為なのだ。

ほんの少しのアドバンテージとして、侵入時の結界が崩壊して、それが直るまでの間は、『必中』の効果を与えられないというのがあるが、それもほぼ一瞬程度だ。領域展開を出来るほどの実力者がその一瞬を警戒しない訳もないため、隙とは言えない。

現にもう領域は直ってしまい、『必中』の効果が適用され始めている。そう。

虎杖悠仁と吉野順平に『必中必殺』である《無為転変》の効果を適用したという事は、真人は、悠仁に巢食う『禁忌』に触れざるを得なくなつたという事……！

「言つたはずだぞ」

不躰者を、見下す王。

呪いの王の御前にて、

土足で踏み入るその蛮行。

その不敬は万死に値する。

「次は無いと」

——懺。

それが、真人が《自閉円頓裏》で聞き取れた、最後の肉の音だった。ただかたか軽く指を振るっただけだった。

それだけで、真人の心臓に至るまでの肉を切断した。それだけで、真人にとって充分に致命傷足り得たのだ。

そう、宿讎の興味は真人にも、ましてや吉野順平にも無い。

誰が死に、誰が死のうと、宿讎の知る所ではない。

雨宮蓮か伏黒恵以外の人間など——

心底どうでもいい……。

——世界が崩壊していく。手を取り合って構成していた絆を砕かれ、真人は苦痛に喘ぐ。あつという間に、順平が見慣れた里桜高校の校庭へと舞い戻ってきた。

(何だ、何が起こったんだ?)

吉野順平は、両面宿儺を『すぐくつよい』だとか『めつちや自己中』といった、アバウトに聞かされた分しか知らない。虎杖悠仁が宿儺の指を集めている事や、宿儺を受肉してしまつたために死刑を受けている事は知らない。

だが、先ほど真人の《自閉円頓裏》に悠仁が踏み入つた事で、真人は宿儺の逆鱗に触れたという事は分かつた。そして、その気になれば宿儺は日本中の全てを破壊出来るほどの実力の持ち主である事も。

(——あ、隙——、——!!)

そこまで理解出来た順平には、もはや躊躇いなど一片もなく。

呪力の削られている真人を斃すには、今が絶好の機会だ。

——しかし。

空を裂く雷霆の余波が、里桜高校全体を大きく震わせた。見ると、帳が掻き消え満点の青空が、その全容を表していた。

そのあまりの衝撃に、さしもの虎杖悠仁ですら体勢を崩してしまい——

(——搾り出せ、最後の呪力を!!)

それは、真人にとって逃げの好機。真人はまるで気球のように己の体を大きく膨らま



せた。全長はおよそ四メートルはあろうといった具合に、二人に祓除のチャンスを与えたのだ。

体勢を立て直した二人。先手を打ったのは順平が展開したままにしていた【澱月】だった。その伸縮自在の触手の爪が、真人の腹部を貫き。

——パァン、と破裂した。

「ばいばあい」

声の方向を見ると、そこには排水溝に体を振じ込んで逃げつつある、真人の口だけがあった。あの気球真人は、本体を逃すためのブラフ。危機的状况を脱し、気が楽になっていた順平は、まんまとそれに騙されたのだ。

「楽しかったヨ～～」

「あ、アツ!!」

悠仁がその剛拳で排水溝ごと真人を潰そうとするも、時すでに遅し。もう真人はそこにはおらず、故に二人にできるのは、真人を排水溝にて追いかけ、トドメを刺すこと。

——しかし。

（あ、れ？）

「順平!?! おい、順平!」

順平は、どうやらここまではらしかった。【澱月】が霧散し、その場に倒れ伏してしまう。

起き上がれない。手に力が入らない。

気を張り詰める死地を脱した事で、緊張が一気に緩和したのだ。加えて、普段激しい運動をしないが故の、純粋な体力の限界が来ていたのだ。

悠仁の安否を確認する声が遠くなっていく。

その日、順平がその呼び掛けに答える事はなかった。

19.

ジョーカーのペルソナには、「合体事故」という概念がある。

ジョーカーのペルソナは、別々のペルソナを掛け合わせ、別の存在に昇格させたものがほとんどを占める。最初から最後まで共にあったのは《アルセーヌ》において他にないほど、ジョーカーは「ペルソナ合体」を愛用する。

【ペルソナ合体】で作られるペルソナは、所持しているペルソナの組み合わせや、ペルソナ一柱一柱に定められているアルカナといった法則など、様々な事象が絡み合う事で、多種多様に変化する。

更に合体先のペルソナは、合体元となるペルソナのスキルや特性を継承する事が出来る。それを利用する事で、かつてヒーラー要員として連れていた《マーメイド》の弱点であった電撃属性に耐性を付けることに成功した。

「ペルソナ合体」を活用すれば、ジョーカーのペルソナは、アタッカーやタンク、ヒーラーもバフアーマーも、ありとあらゆる戦法を充実させる事ができる。

「領域展開——」

「——祓え賜え」

しかし時偶<sup>ときたま</sup>、ジョーカーはおろか、「ペルソナ合体」を行う本人であるラヴェンツァですら予測出来ない現象が起こる事がある。それが「合体事故」である。

【合体事故】とは、合体先のペルソナが別のペルソナとして転生してしまった事態を指す。

何かしらのトラブルを起こさない限り、その合体先のペルソナそのものが別のペルソナに転生する事はない。

だが、ラヴェンツァがその『何かしらのトラブル』をしてしまった時、合体先のペルソナは『予定していたものと全く別物で』かつ『ジョーカーが扱えないほどにレベルが高くなったり』、『本来ならば覚ええないような強力なスキルを覚えたり』、『未登録のペルソナになる事もあれば登録済みのペルソナになる事もあったり』と、全くの予想外の事態を引き起こしてしまう。

故に、「合体事故」なのだ。

そしてジョーカーは今回、良い方向に「合体事故」を起こせたようだ。

奴が、神の如くに物を云うなら。

こちらも神で、事を為すまで。

「ハチマン——」

曇天の雨が割れ、太陽の如き肉を持つ一柱の神が舞い降りる。軍神として広く日本に伝わる古き神であり、ジョーカーが保有する八柱のペルソナの最後の一柱であるハチマンは、契約者たるジョーカーの指示により、その人差し指を空へと手向ける。

認知スキルの制限は今はない。残存呪力の許す限り、何度でも打つことができる。だがジョーカーには、次を考える事はなかった。ここで昊？を祓いきる事だけを考えて。

ハチマン……八幡神はちまんのかみとは、元々を辿れば素戔嗚スサノヲである。そしてスサノヲとは、日本最古の雷神と言っても過言ではないほどの実力の持ち主だ。

雷神の威厳という名の恐怖を称える認知スキル。《ヒートライザ》、縛り③、④、⑩の効果が相乗し、ハチマンのステータスが爆発的に向上する。数値化した場合、そのレベルは二〇九。

かつてのヨシツネよりは低いが——昊？を祓うには申し分無い。

「『霹靂神』」  
はたがみ

——それを例えるなら、風を払い荒れ狂う稲光。

閃光が駆ける。

七海建人が受けた【雲耀】のそれよりも特大の雷霆。

正しく一筋の神の怒りは、容易く昊？の体を射抜き——

そして、そこが今のジョーカーの——雨宮蓮の限界だった。

「……………くそ、こんな時に……………」

怪盗服が消え、漆黒の制服へと元通りになってしまう。膝を突き、変な汗を全身に流す蓮。見ると、かつて雨宮蓮がクルスアキラだった頃に見た地獄は掻き消えてしまっている。

世界は跡形も崩れ去り、元の中庭へと風景が変わる。遠くには、眠ったままの七海建人。そして蓮と建人を挟んだ中間に——昊？は、膝を突いて死に掛けていた。

なぜ祓えていない——蓮の頭の中は、その事で一杯だった。

呪力を練れない今、蓮にはもう、どうする事も出来なかった。せめて出来るのは、相手を睨みつける事くらいだ。

見ると、昊？の頭上で球体が一つ展開され……………そして力尽きるように霧散した。昊？はせめてもの抵抗に、【雲耀】を犠牲にした《極の番・藪》による擬似防護壁を展開していたのだ。科戸風しなとかぜが雷の威力を削っていなければ、昊？は本当に危なかった。

昊？の着る衣服は破け、顔が全て露出している。パーカーはその余波で燃え盛っており、着用していた手袋とストラップスはそれぞれ散り散りに炭となっていく。昊？の肉体

の証明が出来なくなり、遂に四肢が掻き消え、土砂に崩れ落ちる。

昊？の祓除まで後一步。

なのに、体が動かない。

——吉野順平とその母の風を救う作戦は、何一つ滞りなく成功した。真人を騙すためにペルソナ・ドツペルゲンガーを展開し続け、見事彼奴を欺くに至った。

しかしジョーカーは、その作戦のために、呪力総量の大部分を消費してしまっており、更に体力の低下も相俟って、昊？戦の前に完全に回復することは出来なかったのだ。

ジョーカーは普段、ペルソナの召喚やスキル使用に掛かる呪力を節約するために、長時間ペルソナを展開することはない。いつぞやで解説したが、ペルソナの展開やスキル及び反転術式には、大量の呪力を消費するためだ。

尤もスキルは一度発動させるだけならさほど問題はないし、補助系のスキルならば一度発動させてしまえば効果は持続するのだが。しかしスキルのグレードが上がってくるとそうも言ってはいられない。

特に拡張術式である認知スキルは、ペルソナの潜在能力を強制的に引き出すためにジョーカー自身が編み出したスキルだ。であればそれ相応に呪力を消費するのは道理。

ドツペルゲンガーの認知スキル「百貌」……ドツペルゲンガーこそ低級のペルソナであったが、その認知スキルの維持のためにジョーカーを苦しめたのだ。高位のペル

ソナであるハチマンであれば、その認知スキル発動にはジョーカーの呪力の大部分を喰らうのは道理だ。ましてやスキルの維持など、到底出来るはずもない。

更には領域展開も相俟って、ジョーカーの戦闘継続力はもう底を突いてしまった。

「……認めよう」

だが、その甲斐はあつた。

ハチマンの認知スキル「霹靂神」は、その余波で真人が貼った帳をも破壊してみせた。

雨が降った後は、青い空が待っている。

見上げた大空は、青く澄み切っている。三千世界の傲慢をも照らし、晴らさせてしまえるような——蒼い、蒼い空であつた。

【雲耀】が無ければ、あるいは無い真人ならば、その一撃で祓除されてしまっていただろう。呉？は運良く生き残ったが、しかしそれでもなお、「霹靂神」は呉？を死に体になせるに至った。真人では確実に耐えられない……そういう確信を呉？に残した。

「此度は退いてやる……!!」

「——っ、待て……!」

故に、恥も外聞も捨てて、呉？は自身に《色即是空》を施し『霧散する』。ちまちま作つた【雲耀】【冰壺】、そして人々が恐れる事で生ずる呪力など、呉？のほぼ全てを無為に

してまでも生き残る最後の切り札。

後に残るのは、昊？が着ていた洋服の残り滓だけ。

追いかける事もままならず……そしてガス欠の雨宮蓮に出来るのは、七海建人の無事を確認して、気を失う事だけだった。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t    u s    s t a r t    t h e    g a m e .  
# 2 2    B l o o m i n g    V i l l a i n



## # 2 3

20.

神奈川県のごく地下排水溝で、二匹の溝鼠が走る。鼠達はその小さな体で、自分よりも強大な存在を感じ取ったのだ。果たしてその予感は的中し、次いで布がコンクリートに擦れる音が不規則に響く。

果たしてその音の持ち主とは、先のジョーカーとの戦いにて重傷を負わされた昊？その人だった。彼のイメージカラーとも言える黒色はしかし今は身につけておらず、襤褸となり嫌な異臭を漂わせている、黒とも黄土色ともとれる色のシャツを身につけている。

昊？の決死の大脱出劇は、溝を這いずり回つても生き延びるといふ恥を捨てた意思の下、どうにか成功したようだ。

「……………っ、クルス、アキラあ……!!」

しかし身につけているのはそれだけだ。手袋はおろか布作面など落ちている可能性はゼロに近いだろう。幾何学的な頭部は、顔面に空いた大きな穴を隠すための何かしらの布すらもないため露出している。シャツは、角張った肩のラインが目立っている。

「……や。お互い、ボロボロだね」

ちよつと臭うよ、と言いなながら素足でびつこを引いてくるは、こちらも虎杖悠仁と吉野順平との接戦に苦しめられた真人であつた。小脇に抱えるは、どこからか持つて来た黒に統一された衣類。

「キミの服、実物じゃないとダメなのめんどいね」

「……………」

「あつ」

衣類達は真人の追い風に誘われて、昊？の方へと向かう。着ていた襪褌シャツを弾き飛ばして、風を巧みに操ることで、よく知る昊？の外観へと元通りとなつた。

「……感謝して欲しくてやつてるわけじゃないけど、かといって何も言わないのもどうかと思うよー？」

「ならば、これを期に認識を改めよ。」

我は汝らを仲間と思つた事も、思う事も無い。汝らも所詮、蟻の集いに過ぎぬ」

「キミの言うクルスナントカつてヤツも？」

「そうだ」

「んじゃ、何でアレに拘るの？」

「……………我は、アレの全てを殺すための菌車に過ぎん」

答えになつてないんだよナ、と頭を搔きながら思ったが、口にするのはやめた。どうせまともな返答もないだろうと、昊？を見て思ったのだ。

真人は、雨宮蓮という男に感服した。

真人からしてみれば、雨宮蓮とは『叛逆の魂』という「心の代謝」たる怒りの感情から生まれた力を使うだけの、五条悟のコネで特級に成つただけの、ただの成金野郎だと思つていた。

しかしどうだ。自分の作戦は全て筒抜けで、終始掌の上で転がされ続けた。宿儺との対話もままならず、吉野順平を仲間に取り込む事もあるいは殺す事も出来なかつた。継ぎ接ぎ頭の男が言つていた事は、話を盛りまくつただけの世迷言だと思つていたので。

蓋を開けてみれば、まるで稀代の明智小五郎めいた推理ぶり。怪盗よりも探偵業に転職してはどうかかと思うくらいだった。もはや策が破られていく事に、憤る所か清々しさまで感じるほどであった。

まあ、だからといって殺人欲求が減るわけではないのだが。

次は殺す。宿儺の器たる虎杖悠仁も、気紛れで用意した駒たる吉野順平も。そして最後に、彼らを率いた切り札たる雨宮蓮を。

閑話休題、己の思惑は今は頭の中にあればいいと昊？は悟り、真人を置いて歩み始める。

昊？はあの戦いで、多くのものを得た。それが昊？の経験となり智慧となる。ジョーカーにはこのままでは勝てないことは勿論、自分が生まれた本当の理由も。

そして何より——

「……『宇宙』へと至るには、これしきでは足りぬというのか」

真人は、その言葉の意味をついぞ理解し得なかった。

21.

「人に、心なんかない……」

「——ツ、順平、お前まだ——」

「無いんだよツ!! だってツ、それじゃあ——僕も母さんも、人の心に殺されたって言うのかよ……!!」

もしも、あの時蓮がいなかったら。

「順平ってさあ、それなりに頭は良いんだらうけど……キミが馬鹿にしてる奴らの、その次くらいには馬鹿だから。」

だから、死ぬんだよ」

もしも、母を喪っていたら。

「——宿儻アアアアアアッ!!!」



今がいつなのかを知りたいのもあって、僕……吉野順平は、力の入らない腕と寝起きで回らない頭を無理やり動かしてナースコールを探す。カレンダーを見れば、今日が8月24日だと云う事がわかった。

「おはよう」

「っ!？」

しかしそれは、すぐ隣に座っていた長身の男の声に遮られる。

白銀の髪をアイバンドで固定した、全身黒一色の衣服を纏う彼の、その声の方向に振り向く。出来るだけ距離を取ろうと下がりつつ、今は最後の希望たるナースコールを探りで探す。

「大丈夫そうだね、吉野順平くん。お目当てはこれかな？」

そう言いながら不審者は、導線の伸び切ったナースコールで手遊びする。名前も意図もバレている……ならば、悟られる事なく呪力を練り上げるしか、事態脱出の方法はないか。

「安心して。僕は敵じゃないよ」

怪しさ満点の見た目をしている人からそう言われて、はいそうですかと返せるほど、僕は馬鹿ではない。が、この光景があまりにも現実味が無さすぎて、逆に僕の頭が馬鹿になったのではないかと疑い始めた。

判断するには、外見的な情報では足りない。せめて、相手の目的を知らねば。僕は勇気を振り絞って、目の前のバドミントンのシャトル頭に話しかけた。

「……あの、あなたは？」

「僕は悟、五条悟。さとるであってシャトルじゃないよ。蓮と悠仁の所属する、都立呪術高専一年の担任をしてる。

早速だけど、今のキミの状況を教えておきたくてね」

からからと笑いながら、五条悟という人は続ける。ちやつかり心を読んてくるのは心臓に悪いのでやめてほしい。

「さて、吉野順平くん。キミには、呪術師になってもらう。それも将来的には、特級を除いて最高位である『一級』術師にね」

「拒否権は……無いですよね」

「ウン、無いね。」

順平くん、キミは——いや、キミ達は少しやり過ぎたんだよね」

話を聞くに、この作戦の遂行に際し、敵側を欺くためとはいえ、呪術規定八条『秘匿』の項を破った雨宮蓮、吉野順平には、それ相応の罰が与えられる事になった。

上層部は呪術規定の中で特にこれを厳戒しており、首謀者である雨宮蓮及び一般人に危害を加えた吉野順平を呪詛師と認定し、即刻の死刑判決を下した。まあ、半分——否、

大半は蓮や悟に対する嫌がらせの意味合いがあったのだが。

だがこれに異論を唱えた者がいた。五条悟は勿論のこと、京都校三年一級術師の東堂葵、そして何と判決を下された雨宮蓮自身も、蓮と順平に対しての減刑を要求したのだ。それが――

「――呪術高专在学期間の4年間。それがキミに与えられたタイムリミットだ。その間に、キミは一級術師にならなくっちゃあいけない。もしキミが4年間で自身の有用性を証明出来ない場合――」

「僕は、呪詛師ってヤツに認定されて、処刑されるってワケですよね」

「そーゆーこと」

そしてこれは後から知った事なのだが、蓮自身は、年内に、日本三大怨霊であり特級仮想怨霊でもある《平将門公》《菅原道真公》《崇徳天皇陛下》の内、《平将門公》か《菅原道真公》のどちらか一体を無力化する事を条件に仮釈放されている。

ここに崇徳天皇陛下が含まれないのは三つ理由がある。

一つは、上層部として呪術界を率いる御三家――禪院家、加茂家、五条家は、天皇陛下を代々護衛する立場にあり、天皇を害する事が出来ないよう無意識的に縛られているのだ。

それは他者に命令しての被除も含まれており、実力主義的な家柄の禪院家ですらも手



を出せない。

故に御三家は、現代社会の義務教育にて『崇徳天皇陛下』の名を極力排除する事で、崇徳天皇陛下を存じない者達を増やすように努め、対策している。

そして二つ目は、天皇陛下をゲームや小説のキャラクターとして登場させるのはあまりに畏れ多いという認識が、クリエイター達に強く残っているためだ。

しばしばRPGなどで出現する三大怨霊の内でも、崇徳天皇陛下の名前が使われる事は片手の指で数えられるほどに少ない。天皇という称号は、一番扱いに困る存在でもあるのだ。サブカルチャー面での対策は、呪術界の介入がなくとも既に終わっているという訳だ。

最後の三つ目。それは、崇徳天皇陛下に恐怖する者を減らし、崇敬する者を増やそうという対策が功を成しているためだ。

事の始まりは、明治天皇陛下が白峯社——現・白峯神社を建てられ、崇徳天皇陛下を還御された時から始まる。

その白峯神社では、鎮魂のために毎月二十一日に御廟祭を開いており、崇徳天皇陛下についての解説を行なっている。それにより、崇敬とは行かずとも同情する者が増えるようになったため、負の感情が溜まりにくいというのがある。

以上の点から、崇徳天皇陛下の仮想怨霊化の可能性は極めて低いのだ。

残る二柱の特級仮想怨霊も、過去に出現した事案を比較してみると分かるのだが、近年は『ゲームや漫画の元になったキャラ』というような認知に恐怖心が薄れている者が多いため、若干の弱体化を受けているようだ。

とはいえ、頭の沸いた主に禪院家の術師達を振り返り討ちどころか帰らぬ人にしてしまえるほどには脅威的なのだが。

蓮としては、手を焼いている特級仮想怨霊の中でも最大級に強力な日本三大怨霊を祓ってやれば、それほどの逸材をみすみす手放す不利益と規律を天秤に掛けることになるジレンマを突いただけに過ぎない。

また、上層部の中には『特級』よりも『一級』の方をこそ呪術界を率いていく存在であると認識する者が少なくなき、故に吉野順平が一級術師になれば、上層部は一級という是非とも懐柔したい存在を手放す事になる。

特級術師たる雨宮蓮は勿論のこと、彼に推薦された吉野順平が一級に成った場合の利益を考えれば、条件を付けさせてでも生存首輪を付けていたさせた方が理であり利であると、老人達は考えたのだ。

尤も最初は片意地に処刑だと騒ぎ立てていたが、蓮の一言でその首輪を外した瞬間、自分達の首が文字通り飛ぶ事を直感したためなのだが。

それもそうだ。特級の称号を冠されるのは、単体で国家を転覆できるほどの実力の持

ち主だけだ。そんな奴から脅されて首肯しないなど、命知らずにも程がある。

「けどね、蓮は言つてたよ」

「？」

「キミなら、4年もいらぬ。1年以内に一級に成り得るだろう……つてね」

「えっ……？」

五条悟曰く、呪術師がその級位を上げるためには、他の呪術師二名以上からの推薦を受ける必要がある。吉野順平が一級術師になりたいのであれば、最低でも一級以上の術師二名の推薦が必須だ。

その後は、推薦した二人以外の術師同伴で一級相当の任務をこなし、適性ありと判断されたら、晴れて『準一級』術師だ。

そして準一級術師が単独で一級任務をこなせば、一級術師に昇級できる。

しかしこの昇級に、雨宮蓮と五条悟は一切協力出来ない。

高専に所属する一級以上の術師は、都立高専であればその生徒を、京都府立高専であればその生徒を推薦する事が出来ない。単に、身内鼻肩は許さないという話だ。

だからこそ僕は、稽古をつけてもらうならともかく、昇級審査に関しては、雨宮蓮と五条悟の力を借りずに、僕一人の力でどうにかしなければならぬのだ。

もちろん、正式な呪術師ではない僕には、この二人と七海建人以外の一級術師に縁な

どない。厳しい戦いになるのは確実だ。

けれど、蓮はこんな僕に『一級になれる』と言ってくれたのだ。

なら、その期待を裏切りたくない。その期待に応えたい。

キミという星に、一步でも近付きたい。

「吉野順平、キミには選択肢がある。

今すぐ死ぬか、四年間死ぬほど頑張るか。好きな方を——」

「いえ、もう決めてます」

蓮が僕を救ってくれたその理由が、何か打算的な意図があつたのかは分からない。

だが、救ってくれた恩人である事に変わりはないのだ。

「拾ったこの命は、拾わせてくれた人のために使います」

死ぬ事は怖い。恐れは無くなることはないだろう。

だが、蓮からの不屈の魂が、いつだって僕に勇気をくれる。

なら、何を恐れる事があるうか。

「だ、そうですよ」

「え——」

悟がそう問い掛けると、空いていた病室のドアの陰から、五体満足で無事である僕の実母・吉野凧が立っていた。

「やっほ」

「母さん!?! 聞いてたの!?!」

「まね。アンタが起きる前に、色々まね」

「なら、僕の今やりたい事も聞いていたのだろう。 凧は悟の隣に椅子を置いて座って、更に紡ぐ。」

「それは、親としてしてやれる最終確認。そして、子が巣を旅立つ表明を聞くための覚悟の形成であつた。」

「なりたいでしょ? 呪術師に」

「うん」

「危ない仕事なんでしょ?」

「うん」

「腹は決まってるの?」

「——うん」

「ならよし」

吉野凧は自身の事を、善い母親であるとは思っていない。養育費は貰つてはいるものの、夫と別れた後は息子に構つてやる事は少なくなつてしまった。それは引き籠もつてからも同じで、パートで家を空ける事も多かつたのだ。

寂しかっただろう。

故に映画に縋ったのだろう。

学校に居場所がなかったのだろう。

故に映画の中に逃げ道を作ったのだろう。

想像も出来ないほど、辛かったのだろう。

母親として、何をしてやれただろう。

順平は優しいから、我儘を言わない。我儘を言ったとて、聞いてやれるほどの余裕は無いから。それを言い訳にしたくはないけれど、自分がしっかりと順平を見てやれば、呪いとやらに唆される事も無かっただろう。鬱憤を見極めれただろう。

ダメな母親だと自嘲する。母よりも息子を見極めた蓮に頭が上がらない。育ち切った息子に、母親としてしてやれる最後の仕事の一つ残っている。

旅立つ息子を見送るために贈る言葉は一つ。

親と子が、再び会うためのお呪い<sup>まじな</sup>。

「行っておいで、順平。」

「行つて来ます、母さん。」

そうして風は、母親としての仕事を終えた。

……かに思えた。

「……って、ちよつと待つてくたさいな五条さん」

「ん？ どうしました？」

「ウチの子は4年間通うんですか？ 3年間でなく？」

「いえ、4年間ですよ」

「えっ……いや、僕ちやんとギリギリまでは出席して——」

「うん。ギリギリアウトだったんだよネ、キミ」

一氣に体調が悪くなった気がする順平。冷や汗が止まらない。震えて止まない。

「……………マジ？」

「大マジ。」

ま、チャンスが増えたと思えば、さ？」

はっはっは、とカラカラ笑う悟をよそに、順平は溜息を一つ吐いた。

……まあともかく。斯くして吉野順平は、めでたく転校と留年が決まったのであった。

「じゅくんくペくいく!?」

「ヒエツ……」

無事に、とはいかなそうだったが。

どうやら母親として、もう一仕事しなければならぬらしい事を、凧は声を荒げつつ、内

心で喜ぶのだった。

この両の掌が

この星を包んでしまえるくらい

もつとずつと 大きければいいのに

22.

蛍光灯が、仄暗くも確かに部屋を照らしている。肉の腐った匂いが充満している。金属製の手すりを掴んで雨宮蓮が見下ろす先には、人一人は入れそうな袋が等間隔で置かれている。正しく、遺体収納袋であった。その中には、己が奪いかけた命もあった。

——いや、奪ってしまったという方が正確か。

呪術高専の離れには、死体安置所がある。

そこは、被害者を安置させるための場所だけでなく。

呪術師が己の所業を再確認するための場所でもある。

そう。雨宮蓮は、己が罪を背負うためにここに来たのだ。



己の美学に反した行いを、忘れないために。

「ここに居ましたか」

「……七海さん」

一つしかない入口から入って来たのは、サングラスとジャケットを脱いだ七海建人であつた。鉦を背負うためのサスペンダーは、今日は非番なのか付けていない。

革靴を鳴らし終えて、蓮の隣にて、建人もまた命だったもの達を見遣る。

「……怒らないのか」

「命の恩人を叱るほど私は恥知らずではありません。確かに、キミの行動が目にも余るのは事実ですが……キミ一人の責任だと思つていませんか」

「……ああ」

蓮は、順平とその母の救助作戦の概要を建人に伝えていなかった。蓮はあまり、呪術高専の大人達をあまり信用出来ていない。日々修行している悟はともかくとして、その他の大人とのコープの進みが遅いのは、蓮自身が、彼らに懐疑的だったためだ。

蓮は、高専関係者の大人達が、自分に何かしらの情報を隠している事を察していた。それが一体何なのかはさすがに分からないが、蓮に疑心を持たせるには十分過ぎるほど、高専の人々は怪しかった。

だから蓮は、自分と悠仁と順平による作戦を立てたのだ。それも、建人抜きによる作

戦を。

嬉しい誤算は、建人に作戦を勸付かれた事。大誤算は、相手が『真人とやらの思惑が破られるのを前提とした、呪霊二体による作戦だった』事と、『最低でも昊？か真人のどちらかを祓い切れなかった』事だ。

蓮は固く閉ざしていた口を開いた。出てきたのは、懺悔の言葉だった。

「悠仁に……人を殺めさせてしまった」

「キミのせいだと言うつもりですか」

「それ以外に何がある。呪いは祓えていないままで、助けられたのは数多の被害者から二人だけだ。逃げられてしまった以上、被害の拡大は確実。

オレの詰めが、甘かったせいだ」

いつもそうだ。詰めが甘いと、よく言われていた。最後の太詰めで勝利を確信し、その油断により窮地に立たされる。前世でも、そのせいで取り返しの付かない事態を引き起こしてしまったのだ。どうしてもこの性格が治らない。

こんな事になるならを何度も何度も繰り返し、なのにずっと学ばない。魂レベルで慢心が刻まれているのかと蓮は自嘲する。だって、美学たる『星』のような高貴さを、蓮は守れていないのだから。

「言いたいことは分かっている。

オレは正義の味方じゃない」

「……そうです。キミは呪術師だ」

「そして怪盗で……悪党だ」

美学に反した己の罪は、己で雪がねばならない。

いずれ、そういう事をさせなければならぬ事も、薄々分かつていた。

悠仁が十字架を背負ってしまったのは、余裕をぶっこいていた己のせいだ。

なら、悠仁に降りかかる罰という名の火の粉は、オレが払い被うべきなのだ。

だから、死に方は惨たらしくてもいい。

ただ、誰かを守ればそれでいい。

泥に塗れても前へと進めるように、前のめりに死ぬるのなら、雨宮蓮に悔いは無い。

その死に様が、最期まで美学に準じ生きた証になるのだから。

かつてでは、クルスアキラは、結局何も守り切れなかった。

だが、別世界の今を生きている以上、それを悔いてもどうにもならないのだ。

今、蓮がジョーカーとして出来る事はただ一つ。

「まだ、止まるわけにはいかない。最後、行き着く先に行き着いた時が……それが、オレの責任の終わりだ」

苦痛に溢れた未来なのか、はたまた苦節を乗り越えた未来なのか。

どちらにせよ、もうジョーカーは止まらない。

犠牲は増える。そしてジョーカーが救える命は、掌で掴める程度だけだ。

「オレはもう、誰にも負ける訳にはいかない……!!」

亡くし、そして亡くすだろう命を背負って戦う。

それが、ジョーカーに出来るただ一つの償いだ。

建人にそう告げて、蓮は出口へと向かう。

「呪術師として言うのなら、その答えは零点です。

キミはあまりにも、呪術師としては優しすぎる。それではいつか、壊れる時が来るでしょう。特級とはいえども、キミは人間で、子供だ。……その責は、キミにはまだ早すぎる。

そして、完璧に物事が進むなど、馬鹿げた理想も良い所です。そんな理想では、結局に何もかもを取りこぼしてしまう。

キミの手が掴める他の誰かの手は、やはり二人分だけです。それ以上を望んでいる今のキミの事を、思い上がりと言うのです」

「……」

そう、オレは完璧などではない。完璧を目指すだけの、ただの一人の人間でしかないのだ。

理想を抱くことの危うさは、クルスアキラ時代で散々分からせられている。そんな陳腐な理想を抱いたまま溺れて死ぬなど、滑稽極まりない。ひっくり返せない事態に陥つてしまえば、それまでの話でしかないのに。

菌を食い縛つて、悔しくて、しかしその言葉を必死に受け入れる。

「——ただ、一人の人として言うのなら、百点です」

はつとなり、蓮は出口から建人へと視線を移す。

サングラスを外した建人のその目は、慈愛に満ちていた。

まるでそれは、子に諭す父親の眼差しのようにだった。

息子の門出を祝うような、そんな暖かい眼差しだった。

「これは私のエゴですが……その生き方を、どうか忘れないでいて欲しい」

「……忘れませんよ、オレは。」

忘れないために、戦います」

決意を新たに、鬨りを心の隅に。

数えきれないほど味わった、雨宮蓮の挫折は終わった。

建人からの微かな信頼を感じる……。

我は汝、汝は我。

汝、ここに新たなる契りを得たり。

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり。

我、『法王』のペルソナの生誕に祝福の風を得たり。

自由へと至る、更なる力と成らん……。

### 23.

かつて虎杖悠仁が辛酸を舐めた場所としては、英集少年院の他に都立高専地下視聴覚室がある。

前者は言わずもがな、後者は拙い呪力操作技術の修行のために夜蛾正道学長作の《呪骸：ツカモト》にブン殴られ続けた苦い思い出が蘇るのだ。もう暫く二度とあの人形を視界に入れたく無いと思えるほど、悠仁はその場所を嫌いになりかけていた。

尤も変装すれば、外食はおろか未成年が入ってはいけないような店まで入れるのだが。

さて、部屋に入った悠仁が得た最初の情報は、鍋の湯を沸かす音であった。見ると、ここには蓋で覆った土鍋がコンロの上にて熱々に熱せられていた。そこから漂って来るのは、鶏ガラの出汁から来る柔らかい匂いだった。

「うつつ」

「ん」

「今日のメシは？」

「肉団子鍋。もうすぐ出来るぞ」

「やっり」

仄かに笑って喜び、先に座って仕込みをしていた蓮とは対面となるようにソファに座る。現在の時刻は午後七時半を少し過ぎた所で、外は暑かったのだろう、制服を脱いでパーカーの袖を捲った。

「ナナミン七海建人引つ叩きますよに会って来た」

「そう、か」

悠仁は頭を掻いて、蓮は言葉に詰まる。

蓮の腹は既に決まっている。しかし、悠仁に対しては少なからず負い目があった。思わず、蓮は悠仁に問うた。

「……大丈夫か、悠仁」

「大丈夫……じゃ、ねえ……な……」

手にさ……まだ、残ってんだわ。感触……」

「……すまない」

「でもや」

一言区切つて、悠仁は続き綴る。

「こーゆー仕事なんだから、いずれあーゆー事もしなきゃなんねえと思つてたし。正直予想も覚悟もしてたけど……やっぱ、命を奪うのは嫌だった。

でも、だからつて目を背けちゃいけねえんだよ。それだけは分かる」

「悠仁……」

「情けねえよ……あそこで祓えなかつたのは、俺の失敗で、実力不足で……敗北だ。俺のせいで、死人はこれからも増え続ける。俺の中の『正しい死』が、揺らいじまつてんだ」

「っ、それは——」

「でも。それでも俺は、祓い続けるよ。ここで立ち止まつたら、死んだヤツも殺しちまつたヤツも報われねえし、ここで退いちまつたら、俺は俺を許せねえ。

生き方は決めてる。死に方はお前に任せる。

俺は、俺の役目を果たすよ」

「……そうか」

——分かんねえよ！ けど、分かんだよ！！

——カッコいいか？ 誇らしいか？ 今のお前は、小つせエころ夢見たお前かよ？

——カッコ悪いなら、間違つてんだよ！！



その目は、いつか見た真つ直ぐな少年のそれに似ていて。

かつての親友と、悠仁を重ねてしまった。

「なら、オレから言う事は何も無い。

……成長したな、悠仁」

「こんな成長の仕方は嫌だったけどな」

「違うない」

そう言いながら、互いに卑屈な笑いを浮かべ合う。と、

「やっほ」

「順平！ 面談通ったんだな！」

「ま、ここを通さないと話にならないしね。でもめちやくちや緊張したよ……あの学長

怖すぎるって」

「話せば分かるが、良い人だぞ」

「えっ蓮話すの？」

「修行付けてもらってる時にな」

「勇気あるなあ」

来訪せしは吉野順平。おそらく、あの学長面談をパスして来たのだろう。制服はまだ届いていないため、シンプルな私服でやって来た。荷解きをやっていたようで、額に汗

が滲んでいる。

「にしても良い匂いだね！」

「悠仁リクエストの鍋だ」

「夏なのにな？」

「夏だからこそ乙なんだよ。蓮、メは勿論おじやだよな!？」

「メはうどんだ」

「ええ〜〜!？」

そう言いながら、順平は悠仁の隣に座る。鍋の完成は間近で、一体何鍋なのだろうと興味を湧いたが、それよりも順平には、蓮に対して気になる事があった。

「あのさ、蓮。聞きたい事あるんだけど……」

「どうした？」

一瞬順平は、蓮の知られたく無い秘密を暴いてしまうような気がして、それが原因で今の関係が崩れてしまうような気がして、躊躇してしまう。

だが、その恐怖よりも、興味が勝ってしまった。

「……『クルスアキラ』って、誰？」

聞いた瞬間、しまった、と思った。

蓮にとって聞いて欲しくない事物だったのだろう。

一瞬で、蓮の雰囲気が変わってしまった。

それも、悪い意味で。

「やはり、話さなければいけないか」

覚悟したかのように、あるいは諦めたかのように、蓮は固く閉じていた口を開く。聞きたい。けど、聞きたくない。それを知ってしまった瞬間、彼を見る目が変わってしまうような気がした。だが、順平にはそれを拒否する事は出来なかった。

やがて、蓮のその口から全容が放たれて――

「クルスアキラとは――」

「っだああああ！　ごめん、やっぱいいい！」

だが、順平にその名前の重さを背負う勇氣は無かった。いずれは知らなければならぬのに、順平は知らないままにいる事の幸せを選んでしまったのだ。自分から聞いておいて、自分が情けなかった。

「そうか」

「ごめん、ほんつとごめん！」

「いいえ」

そして何より、蓮も順平がそう言うてくれてありがたかった。蓮は、己のオリジンを語る事に躊躇はない。だが語ってしまった後の反応を考えると、どうしても勇氣という

感情が欠落してしまうのだ。

嫌われて、裏切られたらどうしよう、と、そう思わざるを得ないのだ。頭がその事で一杯になってしまふのだ。

蓮も、蓮自身が情けなくて仕様がなかった。

と、そのタイミングで誰かが視聴覚室の戸を開き、階段を下つて来た。黒一色の教師用の制服に身を包む、五条悟であつた。

「お疲れサマンサ〜！ おつ、良い匂いだね〜！」

「ちーつす」

「来たか」

「皆食べてないの？」

「先生が来るまで待つてました」

「律儀だね〜。先に食べてても良かったのに」

「……よし、良い頃だね」

そう言いつつ悟もソファに座ると、ちょうど蓮の鍋の仕込みが終わつたようだ。受け皿、お箸。ポン酢、ゴマだれ。後は空かせた腹を用意すれば、食べる準備は万端だ。

鍋蓋を取つてみると――

「おおお〜美味そお〜！」

湯気という神秘のヴェールをたくし上げれば、まさにそれは極楽浄土の体現であった。

肉団子をメインに、斜め切りにした白ネギと白菜、一口サイズにカットした木綿豆腐、花形の人参、エリンギを、鶏ガラの出汁で味を染ませている。悠仁の腹の虫は悲鳴を上げていた。

「では」

『いっただきまーす』

合掌を合唱して、皆次々に具を取り合っついていく。四人分の量が入っていたはずなのだが、もう既に三分の一が失われている。予備を作っておいて良かったと、蓮は思った。

「うんめエ〜！」

「クラーガンガン効かせた部屋で食べる鍋……何とも贅沢だねー！」

「肉団子が特に美味しいよ」

「それは良かった」

「あつ、これ前にテレビでやってたやつ？」

「ああ。その日の夕飯にやってみたんだが、結構美味くてな」

「にしても、やっぱり一仕事終わった後のメシが一番美味エな！」

「オレも食べるか」

「白菜ポン酢に合うなア」

「おつ、じゃあ僕も。ポン酢取って悠仁」

「はいよー」

「ゴゝマゝだゝれゝ」

「いや蓮、そんな棒読みで言われても……」

「あくでもゴマだれも捨て難いなあ。よし、混ぜちやお！」

「マジで言ってるんの先生!？」

「味覚がバグってる……」

「まあこの人、コーヒーにバカみたいに砂糖入れるからな」

「どんくらい?」

「一カップに角砂糖十個」

「砂糖飲んでるレベルじゃん」

「マジでバグってた……」

「皆酷くない?」

失った物が多い。だが確実に、得た物もあつた。

勝ち取った薄氷の上の平和を感受して、ポン酢につけた白菜と肉団子を含み、蓮は一つ呟く。

「格別な味だ」

こうして、吉野順平の付物語は幕を下ろし。

本来ならあり得ない、新たな物語が始まるのだった。

星は未だ遠く。

隷属の解放は未だ至らず。

しかし、確実に。

僕らは大切な一步を踏み締めたのだ。

遙か遠くに飛ばされた星々が集う日は近い。

その再会が吉兆となるか、凶兆となるか。

それは、まだ誰にも分からない。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t   u s   s t a r t   t h e   g a m e .  
# 2 3    " W h a t   T h e n "    a n d    " W h a t   N o w "

# Menu↓Status; Episode of Junction venile fish and Retribution

〈雨宮蓮が得たコープアビリティ〉

・真希流の基礎篇

禪院真希（女教皇）とのコープを進める事で得たアビリティ。これにより、雨宮蓮は短剣に加え、刀や直剣など刀剣カテゴリの武器を装備できるようになる。

・あやふやおにぎり翻訳

狗巻棘（塔）とのコープを進める事で得たアビリティ。これにより、雨宮蓮は断片的にだが棘のおにぎり語を文章化する事ができるようになり、読者に伝えられるようになる。

新たな拡張術式

拡張術式：コープアビリティ

他者とのコープを進める事で得られる特殊能力。日常生活や戦闘前、戦闘時などに恩



恵を得られる。

拡張術式：認知スキル

ペルソナの潜在能力を強制的に引き出すためのスキル。ペルソナの認知を利用して、本来なら覚える事の出来ない九個目のスキルを作り出す。

一日に三回までしか使えない。また、使用回数に制限があるが、1日分の時間を置く事で認知スキル一回分のストックをしておく事ができる。

パンダ（剛毅）とのコープを進める事で得たアビリティ兼拡張術式。

拡張術式：乖離<sup>カード化</sup>

謂わゆる、装備しているペルソナの仮面を取り外し、確立する能力。取り外されたペルソナはカードになり、一定量の呪力を込めれば、雨宮蓮以外の誰でも使用可能。ただし、乖離は一日一回しか出来ない。

夜蛾正道（月）のコープを進める事で得たアビリティ兼拡張術式。

拡張術式：ミックススレイド

特定のペルソナを組み合わせ、同時に召喚する事で発動出来る、謂わゆる合体技。盤面を大きく覆す力があるが、召喚したペルソナは、スキル発動後百二十時間が経過するまで召喚出来なくなる。

魔術師のコープランクが3になると使用可能になるアビリティ兼拡張術式。

〈雨宮蓮が科した新たな縛り〉

縛り⑨：ペルソナの乖離カード化を行う場合、一日に一度のみ乖離カード化できる。スキルを使用する際、自動効果系のスキルは発動できない。乖離したペルソナのスキルを使用した後や、何らかの要因でカードが破壊された場合、そのカードごとペルソナは消滅し、縛り⑧の対象となる。

その代わり、カード化したペルソナは、縛り③の対象にならない。

縛り⑩：ペルソナを召喚し、認知スキルを使用した場合、認知スキルの再使用には、認知スキルを使用したペルソナに限り、再召喚するまで使用できない。

また、それが以前に認知スキルを使用したペルソナであるか否かに関わらず、雨宮蓮は認知スキルを一日に三回しか使用できない。持続的に発動する認知スキルの場合、雨宮蓮がスキルの解除を命令してから時間制限を科せられる。

その代わり、認知スキルは、二十四時間認知スキルを使用しない事で一回分、合計三回分まで使用可能回数をストックできる。

縛り⑪：ペルソナの複数同時召喚を行なった場合、以降百二十時間経過するまで同時召喚したペルソナを召喚できない。また、この縛りは縛り③、④に重複して効果する。

〈コピー〉

アルカナ：人名〔ランク〕

愚者：ラヴェンツァ+都立呪術高専一年生〔3〕

魔術師：伏黒 恵〔5〕

女教皇：禪院 真希〔4〕

女帝：釘崎 野薔薇〔5〕

皇帝：五条 悟〔6〕

法王：七海 建人〔1〕

???  
：  
???

戰車：虎杖 悠仁〔6〕

???  
：  
???

隱者：吉野 順平〔1〕

運命：家入 硝子〔4〕

剛毅：パンダ〔4〕

?????????????  
：  
?????????????

塔：狗卷 棘〔4〕

???  
:  
???

月：夜蛾 正道〔3〕

太陽：東堂 葵〔4〕

???  
:  
???

顧問官：伊地知潔高〔5〕

???  
:  
???

〈現在判明している雨宮蓮の前世〉

雨宮蓮は普通の人間ではない。輪廻転生を経た、二回目の人生を送っている転生者だ。

雨宮蓮の前世の名は“クルスアキラ”。

前世にてクルスアキラはペルソナ“アルセーヌ”を覚醒させており、その力を用いて“心の怪盗団”のリーダー“ジョーカー”として活動していた。

前世では妻子がいるらしいが……？

これ以上アーカイブを閲覧できません。

〈本小説のオリジナルキャラクター〉

・昊?  
こうきよ

基本ぼーつとしてる。何を考えているか分からない。

人を殺める思想としては、『呪霊として生まれたから』。何もかもが空っぽな特級仮想怨霊。

だが目標はある。それは『クルスアキラと会うこと』。一目見た時、激しい憎しみを抱き、そして昊?の目標がクルスアキラを殺す事になる。

その容姿は、一言で『まっくろくろすけ』と呼称出来る。黒手袋を着用。黒い革靴を履いている。フードを深く被っているのにも関わらず布作面ふさくめんで顔を被っており、顔は分からない。

良く見ると、手袋や靴下の隙間に見えるであろう『肌』が、どこにも見当たらないのだ。向こうの景色が見えるだけで、あるはずの肌がどこにも無かった。

だが実体がない訳ではない。『常に自分の存在を証明できるものを着用しなければならぬ』という縛りを組んでいるため、素っ裸になることは出来ない。

布作面の下の顔は、巨大な“穴”が後頭部まで貫通している。頭部は人のそれをしておらず、まるで幾何学的な結晶体のような三角錐のそれになっている。

伏線のためにぜひ覚えておいて欲しいワード『宇宙へと至る』

術式：《色即是空》  
しきそくぜくくう

気圧を操れる。普段は疾風属性の鎌鼬（相手はサイコロステーキ先輩となり死ぬ）を使う。見えないので避けられた事がない。縛り『攻撃時は複数の属性を同時に使えない』がある。

こいつやべーなって思ったたら『雲そのものを圧縮し固定した結晶』である黒い球体二つを使い放電する。あらかじめ作っておき、普段は体内で保管しているが、戦闘中は身の回りに浮遊させる。作るのに手間がかかる。台風10個分くらいの呪力エネルギー。低気圧は色即是空で用意する。

それが無くなっても弱い訳ではない。体術は特級品。触れた相手の体内気圧を無理やり操作して内部から破裂させることも出来る。

自分自身に色即是空を行うと、霧状の呪力となつて空中に霧散してしまう。これを利用したギリギリにして唯一の逃亡方法を編み出している。呉？と証明出来る物を予めどこかに置いておく、あるいは味方に持たせる事で安全を保証できる。呉？自身の圧倒的な呪力量と緻密な呪力操作により可能な技術。

【雲耀】：にのたちいらす螺旋丸のような、超小型の台風を凝縮した昊？お手製の呪具。電撃属性。

常に放電できるが、使用後はリキャストのために30秒を要する縛りを組んだ。即死技だが、蓮のレベル40程度のペルソナ（電撃耐性持ち）は別で、一発直撃してもちよーギリギリ耐えてくれる。60レベルの弱点持ちペルソナでは即死するほど高威力。  
にのうちいらす

【氷壺】：雲耀と同じだが、氷壺は氷を飛ばす。氷結属性。その他は雲耀と同じ。  
極の番：【靄】

雲耀あるいは氷壺の破壊を縛りに、特大級の疾風属性の広範囲攻撃を行う。

領域展開：???

まつおか ひとみ  
・松岡 瞳

神奈川県のとあるテニス部のエース。普段はセミロングヘアだが、試合中はポニーテールと帽子で挑む。全国大会レベルの猛者で、東京の有名高校から推薦が来ているほどの実力者。本作のオリジナルキャラクター。

蓮と悠仁と同じ中学に通っていたのだが、同じテニス部の上級生女子からのいじめを蓮に救われるも、教師達の責任逃れのために夏の大会前に転校させられ、宮城県から神奈川県に移住する羽目に。

まあ全国大会でぼっこにしたし、ぼっこにした理由はそのいじめの腹いせのためですら無いのだが、それはまた別のお話。

まあそうなるだろうなレベルの見た目も良いし見なくても良いネタバレコープ解放時はランク6から開始となる

へこれまでに登場したペルソナのステータス

・キウン

ジョーカーのカード化のために犠牲になった、哀れな表全書のペルソナ。蓮の過去篇があるとしてもおそらく出番は無い。#18「The Game Goes On:」で初登場。よくデカラビアに似てると言われるが、本人(?)はあまり好く思っていない。

アルカナは見たまんま調べれば分かるだろうが：すまない、私には興味がないんでね。詳しい事はアークエンジェル達かグーグルにでも聞いてみるんだな。誰か知っているんじゃないか？ 神はこれを爪楊枝に使っていると噂を聞いた事がある。私はそんなところは見た事ないがね。『星』。

ステータス

レベル：39

力：25

魔：31

耐：29



速：27

運：23

属性耐性

物理：|

銃撃：無効

火炎：|

氷結：|

電撃：|

疾風：|

核熱：弱点

念動：無効

祝福：|

呪怨：|

スキル

《マカジャマ》

《サイオ》

《忘却率UP》

《素早さの心得》

《マカジャマオン》

認知スキル

《不滅なる者》

味方一体に、一回の戦闘につき一度だけ戦闘不能状態を耐え、HPの半分を回復する効果を付与する。このスキルは、『食いしぼり』や『不屈の闘志』などのスキルと重複して効果する。

キウンはかつて、「不滅なる者」という意味を持った神の一柱であった。これはその名を冠した認知スキルである。

・ヴァーチャー

神学に基づく天使のヒエラルキーにおいて、第五位『力天使』に数えられる中級天使。名は『高潔』を意味する。スマブラXの亜空の使者のラスボスに似ていると云うのはタブーだ。

#18 「The Game Goes On...」で初登場。

アルカナは『正義』。

ステータス

レベル：38

スキル	呪怨：弱点	祝福：無効	念動：	核熱：	疾風：弱点	電撃： ↓耐性	氷結：	火炎：	銃撃：	物理：	属性耐性	運：20	速：30	耐：27	魔：42	力：22
-----	-------	-------	-----	-----	-------	---------	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------

《マハンマ》

《メデイラマ》

《石化針》

《ラクカジャ》

《ミドルグロウ》

《ジオンガ》

《電撃耐性》

認知スキル

《高尚なる奇跡》

味方一体に攻撃力上昇と次に繰り出す魔法攻撃スキルの威力を倍にする効果を与える。  
る。

ヴァーチャーがアダムとイヴの息子・カインを産む際の産婆としてイヴに力を与えた時の逸話を基にした認知スキルである。

・ジャックフロスト

ATLUSの看板悪魔ともいえる、氷の妖精。アイルランドの伝承に伝わる。なぜかプリクラのキャラクターとなり、JK達からはまんまプリクラ君と呼ばれていた。#1

8 「The Game Goes On...」で初登場。

しかしその愛らしさからは想像できないが、笑顔のまま氷冠地獄を振り撒くやベーや  
つである。かわいいね。

アルカナは『魔術師』。

ステータス

レベル：20

力：13

魔：24

耐：18

速：20

運：18

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：弱点

氷結：無効

電撃：|

疾風：|

核熱：―

念動：―

祝福：―

呪怨：―

スキル

《ブフ》

《氷結ガードキル》

《バイスデイ》

《ラクカジャ》

《タルカジャ》

《マハブフ》

《ラクンダ》

《凍結率UP》

認知スキル

《ジャックブフーラ》

敵単体に中威力の氷結属性攻撃。3ターンの間、防御力を低下させる効果を付与する。

ジャックフロストの意味は“霜男”。その姿は地域によって異なるが、共通しているのは『怒らせると相手を氷漬けにして命を奪う』というもの。このスキルは、その認知をより強めたスキル。

ミックスレイド

《えいゆうとおいら》

敵全体に中威力の氷結属性攻撃。中確率で凍結付与。

ジャックフロストとフロストエースを連れている事で使用可能。

・フロストエース

ATLUSの看板悪魔ともいえる氷の妖精が、とある赤い彗星のような悪魔に憧れ、修行した姿。別世界ではジャックフロスト達の救世主と呼ばれるが、結構いっぱいいるらしい。#18「The Game Goes On…」で初登場。

やはりコイツも笑顔で氷冠地獄を振り撒く。かわいいね。

アルカナは『皇帝』。

ステータス

レベル：43

力：21

魔：42

耐：24

速：32

運：25

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：耐性

氷結：反射

電撃：|

疾風：|

核熱：|

念動：|

祝福：無効

呪怨：弱点

スキル

《ブフーラ》

《氷結ブースタ》



《バイステイ》

《マハブフーラ》

《コウガ》

《氷結ハイブースタ》

《ラクンダ》

《凍結率UP》

認知スキル

《復讐の氷拳》

敵単体に大威力の氷結属性攻撃。3ターンの間、防御力と命中・回避率を低下させる効果を付与する。

フロストエースへと成った事で、より洗練された氷結属性攻撃を与えられるようになった。

ミックスレイド

《えいゆうとおいら》

敵全体に中威力の氷結属性攻撃。中確率で凍結付与。

ジャックフロストとフロストエースを連れている事で使用可能。

・ドツペルゲンガー

自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種。あるいは、自分とそっくりの姿をした分身とも言われる。ドツペルゲンガーに遭遇する事は、自身の死の前兆と同義に等しい。

#20「You try to run me through?」で地の文だけで登場。吉野風に変身し、風の窮地を救った。

アルカナは『隠者』。

ステータス

レベル：46

力：35

魔：26

耐：24

速：29

運：23

属性耐性

物理：反射

銃撃：反射

火炎：—

氷結：—

電撃：―

疾風：―

核熱：―

念動：―

祝福：弱点

呪怨：弱点

スキル

《サイオ》

《会心波》

《マカジヤマオン》

《マハサイオ》

《呪怨見切り》

《メガトンプレス》

《マリнкаリン》

認知スキル

《百貌》

対象となる味方を一人選択し、3ターンの間ドツペルゲンガーを選んだ対象に変化さ

せる。その対象をドツペルゲンガーで庇う事で、強制的に主人公に被ダメージを受けさせるスキル。主人公にはラクカジャの効果が強制的に付与される。

ドツペルゲンガーの『酷似した人物』の認知を利用して変身し、ジョーカーにタゲを取らせる。死の前兆を遠ざける役目を果たすドツペルゲンガーとは、これまたなんとも。

#### ・ゴグマゴグ

古代ブリテンの伝承に登場する巨人で、ブリテン島がまだ『アルピオン』と呼ばれていた時代に群れを成して生息していたという。その名は「仇なす者」を意味する。#21「Think Again…」に登場。

アルカナは『剛毅』。

ステータス

レベル：47

力：52

魔：20

耐：50

速：31

運：36

属性耐性

物理：耐性↓無効

銃撃：―

火炎：弱点

氷結：無効

電撃：―

疾風：―

核熱：―

念動：無効

祝福：―

呪怨：弱点

スキル

《マハフレイラ》

《タルカジャ》

《アースクエイク》

《カウンタ》

《物理無効》

《フレイダイン》

《中治癒促進》

《金剛発破》

認知スキル

《仇なす者の鉄鎚》

3ターンの間、主人公が受けた全ての攻撃に対し、力依存のステータスでカウンターする。物理属性攻撃。

・アナーヒター

善の最高神アフラ・マズダーの娘ともされる河の女神。その名は「清浄」を意味し、水がもたらす湿潤や豊穡を司る。男女の生殖機能を整え、子を産んだ母に母乳をもたらすという。

また、領土を拡大する軍神としても強大な力を持ち、名だたる英傑たちばかりでなく、邪竜アジ・ダハーカすらも彼女の助力を請おうとした。

女神サラスヴァティーと同じ起源を持つと推察されている。#22「Bloom in g Villain」に初登場。

水神らしく、全裸に水をまとった姿を見せる。

アルカナは『恋愛』。

祝福：無効	念動：	核熱：	疾風：	電撃：	氷結：吸収	火炎：弱点	銃撃：	物理：	属性耐性	運：43	速：32	耐：33	魔：49	力：23	レベル：46	ステータス
-------	-----	-----	-----	-----	-------	-------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	--------	-------

呪怨：ー

スキル

《ヘルスプラッシュ》

《ディアラマ》

《ラクンダ》

《三分の魔脈》

《ブフダイン》

《氷結ハイブースタ》

《アムリタドロップ》

《凍結率UP》

認知スキル

《ヘルストリーム》

敵単体到大威力の氷結属性攻撃。3ターンの間、味方の攻撃力と防御力を上昇させる。

アナーヒターはただの女神ではない。時に河を司る女神として、時に軍神として、その活躍は幅広い。そんな彼女の威厳を讃えた認知スキル。

ミックススレイド



《ヘルヘイム》

アナーヒターとブリジットを連れていることで発動可能。敵全体に火炎属性及び氷結属性の全体中攻撃。相手の耐性を貫通する。中確率で火傷状態か凍結状態を付与できる。

・ブリジット

ケルト神話の火の女神。工芸や学問、詩や治療などを司る神でもある。その姿は、火鉢を象徴する魔法のカップを携えた姿で描かれる。

ブリジットという名前自体が『女神』と同義語として使われるほどに権威があった女神で、民衆の厚い信奉を得ていたとされる。#22「Blooming Villain」に初登場。

アルカナは『節制』。

ステータス

レベル：48

力：21

魔：51

耐：29

速：32

運：46

属性耐性

物理：—

銃撃：—

火炎：無効

氷結：弱点

電撃：—

疾風：—

核熱：—

念動：—

祝福：無効

呪怨：—

スキル

《アギラオ》

《ディアラマ》

《バイスデイ》

《マハブフーラ》

《マハラギオン》

《メデイラマ》

《ヒートアップ》

《小治癒促進》

認知スキル

《神聖なる祝福》

味方一体のHPをHP上限を超えて回復し、攻撃力を上昇させる。

ブリジットが司る内の「治療」と「火」を祝福とし、その認知をより強めた認知スキル。

ミックススレイド

《ヘルヘイム》

アナーヒターとブリジットを連れていることで発動可能。敵全体に火炎属性及び氷結属性の全体中攻撃。相手の耐性を貫通する。中確率で火傷状態か凍結状態を付与でききる。

・カウ

火鳥<sup>かう</sup> 中国に伝わる、太陽の中に棲むとされるカラスで、その足は3本ある。ATL

USのカウは背中に核融合炉を背負っている。

太古の中国には十個の太陽があり、一個ずつ順に天空を旅していたとされるが、ある時十個の太陽が一度に空に現れ、地上は灼熱の焦土となったという。これをゲイという男が九個射落としたが、それらは太陽に棲むカウに他ならなかった。

#22「Blooming Villain」に初登場。

アルカナは『太陽』。

ステータス

レベル：47

力：21

魔：42

耐：24

速：32

運：25

属性耐性

物理：—

銃撃：弱点

火炎：耐性

氷結：弱点

電撃：―

疾風：―

核熱：無効

念動：―

祝福：―

呪怨：―

スキル

《フレイラ》

《ファイアブレス》

《テルモピュライ》

《コンセントレイト》

《マハフレイラ》

《防核の壁》

《テトラカーン》

《核熱ブースタ》

認知スキル

《日輪失墜》

敵全体に中威力の火炎属性攻撃。相手に3ターンの間、防御力を低下させる。この効果はいかなるスキルでも解除は出来ない。

かつて撃ち落とされたカウだが、それでも太陽の化身であることに変わりはない。太陽に近付き過ぎた者の結末など、語るまでもないだろう。

・ペリ

ペルシアの、白い鳩のような翼を持つ妖精あるいは精霊。美しい女性の姿で描かれる。ジャコウなどのかぐわしい香りを食べて生き、その血は固まると宝石になるといわれる。

魔術を使うことにも長けており、変身や空中飛行、予言などをすることが出来る。英雄や勇者たちを自らの魔術で助ける話がよく知られ、時にはその妻になったとも伝えられる。#22「Blooming Villain」に初登場。

夜一さんやハリベルみたいな褐色好きの同士はぜひとも画像検索してほしい。ペリも良い褐色だぞ！

アルカナは『女教皇』。

ステータス

レベル：47

力：43

《マハラギオン》

スキル

呪怨：弱点

祝福：無効

念動：—

核熱：—

疾風：—

電撃：—

氷結：弱点

火炎：無効

銃撃：—

物理：—

属性耐性

運：47

速：36

耐：40

魔：52

《ディアラマ》

《メパトラ》

《アギダイン》

《マハコウガ》

《火炎ガードキル》

《氷結見切り》

《エナジードロップ》

認知スキル

《ブラッディ・ジュエル》

敵全体に中威力の祝福属性攻撃。低確率で相手に即死効果を付与する。HPではなくMPを消費する事で発動可能。

血液が凝固した事で形成されるペリの宝石。それに秘められた魔力を解放し、祝福の皮を被った呪いを周囲に振り撒く。ペリは天女である以前に女だ。女を怒らせると怖いというのは、全世界の共通認識である。

・ハチマン

武家の守護神とされた神。日本の八百万の神の中でも広く信仰される。総本宮である大分県の宇佐神宮の縁起では、応神天皇陛下が八幡神ということになっている。源氏



一族の守護神であつたため、鎌倉時代の頃から広く武家の守護神となつた。

#22 「Blooming Villain」に初登場。

アルカナは『太陽』。

ステータス

レベル：79

力：79

魔：52

耐：63

速：66

運：72

属性耐性

物理：|

銃撃：|

火炎：|

氷結：|

電撃：無効

疾風：無効

核熱：―

念動：―

祝福：無効

呪怨：弱点

スキル

《ジオダイン》

《三分の活泉》

《電撃ブースタ》

《魔術の素養》

《マハジオダイン》

《電撃ハイブースタ》

《真理の雷》

《感電率UP》

認知スキル

《霹靂神》

ハチマンの認知スキル。敵単体に電撃属性の特大攻撃。相手の耐性を貫通する。中  
確率で麻痺状態を付与できる。

八幡神は元々を迎ればスサノヲに行き着く。そしてそのスサノヲは、日本最古の雷神  
と言つても過言ではない存在だ。これはそんな雷神としての認知をより強めた認知ス  
キルである。

〈話ごとのタイトルの意味〉

「#11 Haze」

「#12 Rain, After Running Away」

「#13 The Ace, Awakening」

「#14 Welcome back」

「#15 A man who never cries」

「#16 Empty Lie」

「#17 Wisdom of our predecessor」

「#18 The Game Goes On」

「#19 Juvenile fish and Retribution」

「#20 You try to run me through?」

「#21 Thank you, again」

「#22 Blonking villain」

「#23 What? Then? and? What now?」

## # 24

〈2018年8月15日〉

〈昼〉

空は晴れ。鱗雲の点々とする真夏の暑い日。我らが主人公・雨宮蓮は、今日も今日とて自己鍛錬に暇を惜しまない。本日は反転術式の鍛錬のため、家入女医のいる保健室へと赴いていた。

「失礼しま——」

何事もなくノックし、返事があつたので戸を開けた。

そこにいたのは、普段の白衣とは異なる、全身を黒色に統一したスーツを身に纏つた家入硝子であつた。そこで蓮は、一つの結論に至つた。

「何だ、雨宮か。五条だつたらぶん殴れたのに」

「（危なかつた……）」

家入さん、これからお盆参りですか？」

「ああ。……そう言や、お前、慰霊墓地の場所知つてるか？」

「いえ」

「ならちようどいい。来な」

本日8月15日は、一般的には終戦記念日として知らされている。8月6日と9日の惨事の後、大日本帝国が無条件降伏を受け入れた日であり、二度と戦争の悲劇を繰り返さないという平和を祈る日でもある。

硝子がこの日にお盆参りにすると予定していたのは、単に今年は自分の休暇がこの日しか取れなかったためだ。

友であり、恋人でもあった男の冥福を祈るために。

保健室を出て、硝子に着いていく。制服を着ているので、お盆参りの服装としては問題はないだろう。

呪術高専の裏口から、裏山へと続く山道を二人は歩く。

蝉が鳴き、木陰の隙を縫い、光差す。木々は陽光に喜び、その青さをより深く増している。

二十分ほど歩いた頃だっただろう。やがて山中には相応しく無い、精巧な墓石の羅列が見えて来た。その数も十基や二十基程度ではない。ある区画から、ずっと墓石が続いている。あまり手入れは行き届いていないようで、すっかり苔が生むしまっている。

「墓がこんな……」

「ここで眠ってるのは全部、親や親戚がないか、あるいは縁を切った呪術関係者達だつ

た。無縁仏つてやつだな。ちなみに、ここにいる新参のほとんどが、五条のスカウトだ」  
「縁を切ったって……」

「呪術規定の九条『隠匿』に則ったのとは関係無しに、その人それぞれに事情がある。聡  
いお前なら察せるだろ。」

さて……つと」

「お疲れ様です」

「はいよ」

そう語っていると、向こうから降ってくる二人の女性と、一人の男性の姿があった。  
三人の服もまた、黒一色で統一されている。

長い髪を編んで下げたカチューシャが似合う女性と、後髪をシニヨンキャップで纏め  
た女性、そしてダブルフオーマルスーツを着た鼻と背の高いクオーターの男性——後日  
再会する七海建人だ——が、硝子に挨拶をして降りて行った。

おおよそ硝子の知り合いなのだろう。蓮も軽く会釈するだけに留まり、硝子の後を追っ  
た。

さて、墓石群が見えてから更に十分ほど歩き、墓地を抜けて獣道を行くと、蓮でも見  
知った顔がいた。百八十センチを優に超える男性達の中で、蓮が知っているとなれば、  
絞り込みは簡単だ。

「五条先生」

「や」

いつもの黒服を纏い、本日はサングラスを掛けている五条悟その人であった。

「アイツは？」

「さつき帰ったよ」

「あつそ。」

……つたく、ようやくお盆休みが取れたよ」

「そりや僥倖。良い事じゃないの」

悟の返答にぶつきらぼうに返し文句を言うと、硝子は悟の隣へと立った。その更に横に蓮が立つと、見えたのは一基の墓石。しかしそれは……あまりにも、不出来で不細工なものだった。そこら辺の石を厳選した即席の墓石には、誰が埋まっているのかを示す名前すらも彫られていない。

「見窄らしいだろ。私のお手製だからな」

「この墓に名前が彫られてないのは、上層部の老害どもの干渉を防ぐためだ。ここで眠ってるヤツには、安心して眠ってほしいんだ。遺体を明け渡したらどんな事されるかも分からないし、最悪返ってこないかもだしね」

茹だる夏の梢から差ししていた日の光すら、この場所では届かない。誰かを隠し埋める

のなら、この場所は打つてつけだ。

本来なら然るべき場所に申請し、然るべき方法で葬儀を行わねばならない。例えそれはいかに凶悪な犯罪者であつても、火葬され、納骨される。遺体の引き取り手がない呪術師や呪術関連者でも、なおのこと。

しかしそれすらもさせて貰えない。つまりそれは――

（――上層部にとつて忌むべき存在、あるいは研究・解明したい存在……そんな奴がここに眠っているのか）

一体誰なのだろうか。いや、想像はつく。

「……前に話した、友人か？」

「うん」

ならばここには、五条悟の友人であり、特級術師でもあつた二人が眠っているのだろう。

なるほど、それなら術式や呪力などの研究には持つてこいだろう。そして、あの腐った蜜柑の詰め合わせである上層部が、遺体を大事にするわけがないというのも納得がいく。

ただ、蓮は何か違和感が拭えなかつた。

「あれから12年、か」



天内理子護衛抹消任務。

矛盾しているように見えるこの任務は、五条悟の人生において唯一失敗を喫したものだ。いや、失敗せざるを得ない任務であり、その事については何も後悔はない。

ただ一つ……明智吾郎を死なせてしまった事以外には。

「残酷だねえ、時の流れってのは」

「まったくだ。」

……まだ、『アキラ』は見つからないのか？」

「十二年間手がかりナシ。まったく、やんなっちゃうよ」

「……そうか」

既に悟の隠蔽工作は終わっている。

呪術界隈で明智吾郎の名前を出さないよう、裏で手回しは済ませた。謂わゆる高名な小説作品に準えて、『名前を呼んではいけないあの人』のように、常識を変えたのだ。さすがに上層部には根付かなかったが。

『アキラ』とは誰だ？」

「……アイツの遺言だね。僕が聞いた訳じゃないんだけど」

ここまで悟が吾郎の名前を蓮にひた隠しにするのは、蓮に対する試練を兼ねた、『アキラ』への果し状だ。悟は薄々蓮が『アキラ』ではないかと疑っていた。

間違ひならそれでも構わない。また根気強く探すだけだ。が、蓮が明智吾郎の情報を掴み、そしてその詳細についてを知りたがる時、戦いの火蓋は切られるだろう。

「早く見つかるといいな」

「そうだね」

吾郎が最期になつてまで呼んだ人物という事は、

吾郎が心の底から認めている人物に他ならない。

ソイツなら、——お前なら。

お前がいたなら、吾郎は死なずに済んだんじゃないのか。

肝心な時にそこに居なかった、お前を——

「本当に」

どうしても、ブン殴りたくて仕方がないのだ。

〈2018年8月26日〉

〈昼〉

本日は快晴也。

七海建人は呪術連に所属する呪術師ではあるが、その拠点はやはり、母校たる都立呪術高专である。今日は先の里桜高校襲撃事件における始末書の提出のため、高专を訪れ

ていた。

苦い思い出もあるが、やはり母校は落ち着く。

事務室に赴き、後輩である伊地知潔高に提出した後は、建人の数少ない楽しみである食事の時間だ。本日の昼食はどうしようかと、建人にしては珍しく悩んでいた。

建人は一級術師であり、またその仕事ぶりを評価され、週に四、五回は祓除任務があったりする。前職よりかはマシではあるが、ブラックな労働環境にその身を置いている。そうになると、中々パン屋に行く時間が取れないのだ。建人は、パンを好んでいた。

建人として人の子、パンはなるべく焼きたてを食べたいのだが、時短のため致し方あるまいとしてコンビニのそれで割り切っていた。だが、毎日毎日同じものを食べていれば飽きが来る。食べ飽きて仕舞えば、楽しめるものも楽しめない。久々に建人は、舌に刺激を求めていた。

食べ歩きするほど急いでいる訳ではないが、かといって時間を無駄に費やすのもいただけない。——なら、食堂に行けば良いじゃないか。

そう思い立った、まさにその時であった。

「ん……う！」

濃厚なスパイスが、建人の鼻腔を刺激する。芳醇な香りを齎すクミンやコリアンダーが、建人の食欲を増進させる。

そういえば、久しく食堂を利用していなかったな。

ならばと思つた建人は、小銭入れの中身を確認する。中には五百円玉が一枚と、百円玉が二、三枚、十円と五円がちらほら程度あることが確認出来た。これほどあれば足りるだろう。

残暑厳しい夏の終わりに食べるカレーも悪くない。ネクタイを緩めながら、建人は食堂の戸を開こうとした。

……のだが、ノブに手を掛ける前に戸が建人側に開き、気配を察知していた建人は、危なげなく出てくる者を回避する。高専所属の生徒達であつた。禪院真希と釘崎野薔薇だつた。私服姿で紙包を手にながら、建人にあいさつをして去つていく二人。建人も二人からのあいさつを返して、戸を開いた。

まず聞こえて来たのは、油が跳ねる音だつた。

じゅわああ、と音を立てて何かを揚げているのは、我らが主人公・雨宮蓮その人だつた。今日は主夫モードらしく、緑色のエプロンを着て、菜箸で何かを転がしている。

見ると、調理場の真横にあるカウンター席。その上に置かれた大皿には、キッチンペーパーに油を吸い取らせたような形跡がある。カレーの匂いからして、蓮が何を作っているのか、およその察しはつく。

「あ、七海さん。どうも」

「こんにちは、雨宮くん。あのカレーパンは、まさかキミが？」

「はい。ようやく形の良い物が出来てきたんです。

食べますか？」

「では、一つ」

どうやら、彼はお手製のカレーパンをも作れるらしい。その器用さと知識に感嘆しながら、財布に手を伸ばした。

「いくらですか？」

「いや、お金を取るつもりは無いですよ……？」

もうすぐできるので、座って下さい」

そう言われたなら、ご厚意に預かるとしよう。すぐ近くのカウンター席に着いた。

「順平くんの死刑を条件付きで取り下げさせたのは、本当ですか？」

話題を切り出すには、いささか厳しい内容だったか。

しかし切り出したからには、引き返す事は出来ない。

「いけない事ですか」

「いえ、その行いに別段文句があるわけではありません。問題なのは、それに伴ってキミ自身が不利な条件を押し付けられている事です」

……そう、尊敬する先輩もそうだった。

戸籍上存在しないその先輩は、生活を保証される代わりに呪術師に縛られた。それだけならまだよかった。

だが、自分が知った時には、何もかもが遅かった。けれど、目の前の少年ならまだ間に合う。

「自己犠牲は結構な事です。呪術師は謂わば自己犠牲精神によつて成り立っている職業だ。

でも、だからつて自分の身を蔑ろにして良い理由にはならないんですよ。

——キミのその自己犠牲は、いずれキミ『以外』を蝕むでしょう」

尊敬する先輩が死んだ時、都立高専は酷く落ち込んだ。どんよりとした雰囲気は、一年以上続いた。それ故に建人の調子を崩し、高専と呪術師を辞める理由の一端になっていた。

先輩の事情を知った時は、もっと苦しんだ。

この少年には、同じ末路を辿つて欲しくない。

「……でも、こう言つてもキミは聞かないのでしょうね」

「よくお分かりで」

だが、それに約諾するほど蓮は従順ではない。

「あいにく、オレはこれ以外の生き方を知らないんです。

だって……認めたくないじゃないですか。

自分が助けられる人間には、限界があるのは分かっている。けど、オレは強欲なんです。どうせだったら、完全無欠のハツピーエンドつてのを目指したい。

オレの手の届く範囲以上を、求めてしまう」

正義の味方になろうとは思わない。

ただ、ヒーローにはなりたいと思う。

それこそ、世界を丸ごと欺き盗むような、トリックスターに。

雨宮蓮は、「悪の敵」を目指すのだ。

「だったら、たくさん食べて強くならないと。

……そろそろかな」

ナイロンターナーと菜箸で、中のパンを器用に取り上げ、油を切る。さくさくとした黄金色の衣は、間違いなくそれが絶品である事の証左である。不躰にも、建人は喉が鳴った。

どうぞ、と差し出されるのは、耐油紙に包まれるカレーパン。真心を込めた逸品だ。

「いただきます」

手を合わせたら食事の時間だ。早速包みを取り剥がす。

そこそこな熱さのそれを我慢して、ふーふーと冷まして、一口。

瞬間、建人の脳内に溢れ出した——存在する記憶。

「あげるよ。お昼、まだだっただろ？」

十二年前、都内某所、卯月は中旬。疲労感と柔らかな日差しが眠気を誘う今日日。ベ  
ンチに座つて一息吐いた。

任務後の腹ごしらえにと、先輩が近場にあつたパン屋から何か買つて来てくれたよう  
だ。名を明智吾郎。雨宮蓮の前身となる、先代のペルソナ使いの特級術師だった。

白い高専の制服を身に纏つて、黒い手袋を着用する彼が手にしていたのは、三つの包  
みが入ったビニール袋だった。その中から一つを彼は差し出して来た。

今日は呪術実習と先輩への挨拶を兼ねた、一年二年交流学習会が開かれている。建人  
はこの明智吾郎と家入硝子（車で睡眠中）に挨拶をしに来ていたのだ。一年は二人、二  
年は四人で、もう片方の一年・灰原雄は五条悟と夏油傑に着いている。

二つではなく三つパンを買つて来たのは、硝子の分も含めたのだろう。

「良いんですか？」

「こういう日くらい、先輩面させてよ」

そう言うのと彼は隣に座つて、手袋をしていない右手で包みを剥がしていく。それを見  
て建人も做う。中に眠っていたのは、出来立てほやほやのカレーパンだった。

さく、という食感の後、口の中に広がるスパイスの香り。食欲を掻き立てる辛味は、二



口目を軽々しく魅惑的に誘う。

「うん、美味しい。やっぱり、パンは焼き立てに限るね。

まあカレーパンは『焼く』というより『揚げる』の方が正しいけど」

「先輩も好きなんですか、カレーパン」

「どうなのかな。僕自身、食事に拘りとか好き嫌いとかはあまり無くてね。少食だし。ただ……」

事実、そうだった。建人の記憶の中の吾郎は、一食一食の食事が他の人よりも極端に少なかったし、何ならリングゴ一つで済ませてしまうような人だった。

視線をパンの中身に落とし込む。何かを憂うような、懐かしむような、そんな顔でそれを見る。

「……カレーは、嫌いじゃない。

ああそうだ、これより美味しいカレーを作る人がいるんだ。コーヒーに合うように緻密に計算されているカレーだね、とても美味しいんだよ」

カレーの味が物足りなかったのか、建人にそう薦める吾郎。

今思えば、この時、吾郎は『アキラ』の事を思い出していたのだろう。「いつか皆に紹介してあげたいな」

再び逢える理想を、願っていたのだろう。

もう逢えない現実を、疎んでいたのだろうか。

「七海さん？」

はつとなり、建人の意識が現実世界へと引き戻された。

「口に合いませんでした？」

「いえ……」

正直、思い出に浸っていて味わえなかった。

すぐに二口目を口に運ぶ。

あの時に食べたカレーよりも美味しい。

あの時に食べた。パンの衣よりサクサクだ。

けれど、なぜか——

「とても、美味しいです」

そう言って、ぶきつちよに笑って見せた。

あまり、好きになれない味だった。

言えない、言えないな。

あなたのいないカレーパンを、

嫌いになったよなんて。

けれど今は、今だけは、

どこか懐かしいその味を、  
苦い味にする思い出と共に、  
建人はもう一口、噛み締めた。

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n  
L e t     u s     s t a r t     t h e     g a m e .  
# 2 4     J U J U     S A N P O 2

## # 25

1.

〈深夜〉

肌寒さが肌を刺し、目を顰めながら起床すると、我らが主人公・雨宮蓮の服装が、部屋着から囚人服へと変わっていた。

蓮はベルベットルームにはペルソナの調整にちよくちよく通っているのだが、招き入れられるのは久しぶりの事だ。まだぼやける視界を目を拭って覚まし、鉄格子の奥にいる彼女に目を向ける。

「おめでとうございませす、トリックスター。破滅の波を一つ乗り越えられました」

ラヴェンツァ、部屋的主人代理。スカートの裾を掴む形式的な礼を行い、更に告げる。「しかし油断は出来ませせん。更なる大きな破滅が、すぐそこまで迫つて来ています。この波を越えられない限り、世界は混沌に満ちてしまふでしょう」

そうだ。波を乗り越えたとはいえ、『止めた』訳ではないのだ。

あの特級呪霊達を祓われない限り、この破滅の波が止まる事は無い。

だが、蓮には何よりも気になって仕方がない存在がいた。それは――

「ラヴェンツァ、一つ聞きたい。

あの呪霊は、一体何者だ？」

あの三つの属性を操る呪い……こうきよ昊？。特に「雨宮蓮」も「グルスアキラ」とヤツとは接点が無いはずなのに、ヤツは「グルスアキラ」という名を知っていた。

馬鹿な、と思った。この呪術世界には、その名を知る者は『絶対に』いないはずだったのだ。知っている者は全員前世に置いてきてしまった。唯一の線としては、自身のライバルである明智吾郎のみであるが、そう都合良く吾郎がこの世界に転生するとは思えない。……いや、そもそも輪廻転生という意味不明な現象を、そう簡単に起こされては堪らない。

そも多元宇宙論に則れば、人が思いつく限り無限に並行世界が有り、生まれるのだ。無限に連なる宇宙の中でピンポイントで同一世界に転生する（あるいは出来る）なんて確率を、誰が計算出来ようか。仮に出来たとしても、ありえないほどに低い確率なのも間違いのないのだ。

故にこそ蓮は、昊？の本質を見抜けず<sub>、</sub>にいた。

「……お答え出来ません」

「……そうか」

しかし返答は、沈黙に最も近いもので済まされた。

少しの落胆、後に自分へと叱咤。彼女はあくまで蓮の旅の補佐をする立場の存在であり、旅の未来を告げる事は許されていない。この旅路を称賛こそすれ、口出しをする権利はラヴェンツァには無いのだ。

ラヴェンツァとて、そうしたいのは山々というに、その思いを弄んだのと同じ行為をしてみました。辛い思いを、踏み躪ってしまった。

「すまない、楽な道を選ぼうとした。

この答えは、自力で見つけないと意味が無い」

そう言って謝ると、ラヴェンツァはより一層悲しそうな顔をする。……だめだな、彼女の悲しむ所は見たくないのに。自分の都合を優先してしまった。

「さて、今宵お越し頂いたのは、新たな処刑の準備が出来た事を伝えるため。

三体以上のペルソナを合体させて行う、『集団ギロチンの刑』です。裏全書のペルソナ用に、改良を施しました。どうぞお役立ててください。

——破滅の未来の先にある幸福を祈っています」

幸福……か。

雨宮蓮にとって、『幸福』とは『隷属からの自由』だ。

その『自由』を得るまでは、まだ雨宮蓮は止まれない。

サイレンの音と共に、強制的に意識が浮上していく——

2.

〈2018年9月4日〉

〈午前〉

晴れ渡る空、森の上。夏空は未だ絶えず、蝉は忙しく羽を鳴らしている。飛行機雲が真つ青なキャンパスに色を浮かべているな、と、伏黒恵は物憂げに空を見ていた。長い黒髪は、額の球汗に少しへばり付いている。

何せ夏服に変わる事もなかった高専の制服では、真夏日はクソが付くほど暑苦しいのだ。少し風が頬を撫ぜれば、それだけでも気の持ちようは軽くなる。

……のだが、都立呪術高専の一、二年が揃っている中で、釘崎野薔薇だけはそうも言っていない。はいられなかった。

「えーっ!? 何で皆手ぶらなの!?!」

「のばらも何だその荷物」

都立高専大通りにてそう叫ぶのは、東京校一年紅一点の野薔薇（旅行バージョン）。いつもの制服姿に加え、キャリーバッグと観光雑誌を手にしている姿は、正しく今から旅行行つてきますと言わんばかりだ。

その姿に呆れたのはパンダ先輩だ。いつも通りパンダ先輩だった。野薔薇の知る限

りで、蓮を除いた東京校一、二年の面々が揃っていた。

「だって、京都『で』姉妹校と交流会を……」

「京都『の』姉妹校と交流会だ。京都に行くとは言っていないぞ」

「はああああ!!」

「交流会は前年度で勝った方が翌年の主催地になるんだよ」

「何で勝つてんだよ!」

「おれら出てねえーって!」

「去年は憂太が人数合わせで参加してたんだ。それにあの時は『里香』の解呪前だったしな。圧勝だったんだとよ」

「ザッケンナー! 許さんぞ乙骨憂太ああああ!!!」

「元氣多いね……」

「野薔薇らしいな」

哀れ也や、乙骨憂太。

と、そこに遅ばせながらやって来たのは二人。一人は我らが主人公・雨宮蓮。もう一人は新人呪術師・吉野順平であった。順平は、交流会という本番に向けてと大勢の初対面に、やや緊張気味に肩を強張らせている。

蓮が口を開けば、返すのは恵であった。



「今日はどうしたんだ、野薔薇」

「交流会、京都でやると思ってたんだとよ」

「おのれこの恨みはらさしておくべきか！」

「……ああ〜」

「しおむすび」

「うーす、れん」

「おはようございます、先輩方」

「所で……誰だそいつ？」

そう問いかけたのは禪院真希。呪具を入れているジッパー付きの薙刀袋を手に、交流会に向けて意気を高めているようだ。

新たな制服を身に纏う吉野順平。デフォルトのままの恵の制服と比べれば、襟部分は学ランのそののように短くなっているのが分かる。フアスナー型学ラン風のデザインで、襟には二つ高専のボタンが留められている。フアスナーの付いた制服を着用する者は順平以外におらず、彼一人だけ異彩を放っている。

軽度にあがり症を拗らせている順平は、声を裏返させて自己紹介をしてしまう。少しだけ恥ずかしく思うのであった。

「よ、吉野順平です、よろしくお願ひします！」

「先日の任務で術式が開花し、それをオレがスカウトした。最低限戦えるようには鍛えたから、安心して良い」

「ふーん……」

じと——、と、やはり野薔薇の偏見に塗れた慧眼が順平を突き刺し、更に順平は肩を強張らせる。

（うつわ冴えねえ〜、頼りなさそう……やつとの思いで出来た彼女をサークルの先輩に寝取られてそうなくらいに甲斐性無さそう。つーか前髪が馬鹿ダセエ、切るかまとめるか何かしろや）

（え、何でこんな凝視して来るの!? 怖いんだけど!?)

「……はあ」

野薔薇の評価はわりかし低めに収まったようで、一つ溜息を吐いた。

「えー……と……?」

「……釘崎野薔薇」

「はい?」

「私の名前。二度も言わせんなハゲ」

（は、はげ!? コワツ……!?)

「あー、伏黒恵だ。野薔薇が失礼ですまん」

「いやいや、そんな。よろしくねっ、釘崎さん、伏黒くん」

「恵で良い」

「二年の先輩は、左から順に禪院真希先輩、狗巻棘先輩、パンダ先輩だ。」

真希さんは呪具使いだ。オレも真希さんに呪具の扱いを師事してもらっている」

「よろしくお願いします!」

「……おう。」

(……あゝ、この絶妙なもやし感、最初の頃の憂太を相手してるみてえ)」

「棘先輩は呪言師で、普段はおにぎりの具で会話している」

「すじこ」

「えっ……と……よろしくお願いします?」

「惜しいな、今のは『凄いだろ』だ」

「たかな〜」

「えっと、これは?」

「『まだまだだなく』だ」

「ハードル高くない?」

「頑張れ。」

そして、あそこのパンダはパンダ先輩だ」

「パンダだ、よろしく頼む」

「はい！」

……えつ、パンダ先輩の説明これだけ？」

「ああ。で、皆には今日プレゼントがあるんだが——」

と、そこまで言い掛けた所で、蓮の地獄耳がバラバラの足音を捉えた。

見ると、高専の入り口である石段を登って、見知らぬ顔の多い面々が勢揃いしている。蓮の反応からして、皆の目もそちらを向いた。

「あら、お出迎え？ 気色わ——」

「マイ・バディ——!!」

その中から一人、蓮に向かって飛び出してくる者があつた。頭を後頭部で纏めた、恵日くのパイナップル頭。彼の師により付けられた、左目の傷が目立つ、筋骨隆々の偉丈夫にして、京都校三年唯一の一級術師。

名を東堂葵。蓮を見るや否や、その喜びに身を任せ、その手を力強く握つて来た。蓮も葵と久々に顔を合わせたので、葵ほどでは無いにしろ、この再会を喜ばしく思つていた。

何せ8月6日から9日にかけての合宿以来の再会だ。1ヶ月ぶりの再会ともあれば、蓮とて普通に嬉しい。まあ、6日以前にはちよくちよく誘われて会つていたのだが。

「久しいなマイ・バディ!! 福岡分校の強化合宿以来か!？」

「ああ。葵も息災のようで安心したよ」

「うむ、今日は全身全霊でお相手しよう!!」

「フツ、臨む所だ」

互いに不敵に笑い合うのを遠目で見るは、京都校の面々。熟練の二、三年が勢揃いだ。その堂々とした佇まいが、弱冠ながらも彼らが歴戦の戦士である事を指し示していた。

「うわあ、東堂くんとまともに喋ってるとか、凄い通り越してこわく……」

知らない顔の一人はまるでジ○リの魔女。プラチナブロンドの長髪をツインテールにまとめているが、そのどちらもが頭上に来るようにまとめられており、箒や黒一色のワンピース型の制服もあってか、より一層『魔女』の要素が引き立てられている。

そばかすを無くし髪を下ろせば、その低身長ぶりも合わさってまるで西洋人形かと思間違えるほどだ。何しろ彼女は日米のハーフ。日本人離れした鼻の高く碧眼の紅顔で、更にピアスもしているのだから、ややとつきにくい印象を受ける。惜しむらくは、彼女の背がもう少し高ければ、魔性と言わしめる存在に格上げされているだろう。

名を西宮桃<sup>にしみやもも</sup>。府立呪術高専三年、二級術師。

「熱苦し。バックじゃないの?」

それには同感、と心の片隅で野薔薇は思った。

禪院真依三級術師は、セックスアピールは今日は控えめだ。勝負服としてなのか、あるいは夏服から冬服へと変えたのか、ノースリーブでスリットスカートワンピース型の制服が、腰のラインが目立つ学ランとサルエルパンツのそれに変わっていた。

「あの人が噂の特級さんなんですかね？」

……チエキ貰えるかな？」

三輪霞三級術師は、服装こそ変わらないが、今日は大一番の勝負事ということもあり、なけなしの生活費を叩いて買った愛刀を、戦闘用のベルトを巻いて帯刀している。威圧感とカッコ良さを兼ね備えた逸品だ。オーダーメイドなので、やはり結構お金が掛かったが。

真依と同じ二年生同士でも敬語を使うほどに礼儀正しい彼女は、平常運転で特級術師のチエキを欲しがっている。

それもそのはず、彼女が最後に東京校に来た7月某日は、謎の膨大な呪力反応に気圧されて、五条悟とのチエキを撮りそびれたのだ。今日こそは、と別のベクトルで彼女は気張っている。

チエキは事務所を通してくれ、と蓮は念じておくことにした。

「チエキが何なのかは知らんが、交流会が終わってからにしておくんた、三輪」

世間知らず風の発言をした者の顔を、蓮は知らなかった。

平安時代からタイムスリップして来たのだろうか、と思わせる出立ちだ。狩衣かりぎぬを意識した制服に身を包む、蓮と同じくらいの身長を持つ、伏目の男子生徒。中別へアの房をへアカフスで纏まとめてている。

名を加茂憲紀かものりとし。府立呪術高専三年、準一級術師。

呪術御三家の内的一家である加茂家。彼はその跡取り候補の有力者だ。準一級術師という肩書からも、彼が相当な実力を持つ術師なのは分かるだろう。

「察するに、アレが乙骨の代わりと言うわけか。中々面倒そうだな」

「ああつメカだ！ 喋るメカだ!!」

「ガウエインか？」

「サイバトロンの金属生命体じゃない？」

「ジークフリードだろそこは」

「ガンダムファイトオオ！ レディイイ、ゴー！」

「アレイオン」

「ゆかり俺にたら力を貸せ、こカルビガンダム、こんぶ！」

（……ナゼ俺にだけこんな反応ヲ？）

彼を除き、上から野薔薇、蓮、順平、恵、パンダ先輩、真希、棘である。この都立高専生、本当に仲が良い。

閑話休題、最後には木造の傀儡。ミノフスキー粒子は搭載していないが、呪力による遠隔操作で動く呪骸だ。機械的な男性のヴォイスから、一応その中身が男性である事が分かる。

一応の処置として、その呪骸には高専の制服が着せられているようだが、変形機構のためか、袖が無くなっている。首には灰色のネックウオーマーが巻かれている。

名を究<sup>アルティメット</sup>極メカ丸。府立呪術高専二年、準一級術師。一体どんな武装があるのだろう、と蓮は目を輝かせた。

いつの時代も、銃と刀とロボットは男の子の浪漫なのだ。メカ丸の言葉に返すように、憲紀が口を開く。

「そうだね。この交流会、骨が折れそうだ」

（そのまま折れて死ねば良いのに）

「何か言ったか、真依」

「ベツツに」

「はーい、内輪で喧嘩しないの」

と、手を叩きながら席団を最後に登り終えた巫女服の女性の顔には、痛々しく右頬から流れる傷跡がある。長く艶やかな黒髪をハーフアップにし、白色のリボンでまとめている若い女性だ。



名を庵歌姫いおりうたひめ。京都校引率、準一級術師。蓮は一瞬、傷跡があるのが勿体無いと思ったが、その傷跡は彼女が生き残り得た勲章なのだと考えを改め、先の考えで彼女を侮辱した己を恥じた。

「で？ あのバカは？」

「さとするは遅刻だ」

「バアカが時間通りに来るワケねーよ」

「誰もバカが五条先生とは言ってませんよ」

「バカなのは否定出来ないわよ」

「しゃけ」

この信用の無さに、しかし誰も間違いでないのが何とも擁護できない。

「皆ー、おつまたー！」

（うわあ、五条悟）

と、そこに走ってやって来たのは、バカ目隠しの最強・五条悟。歌姫と霞で反応が違うのは、彼の性格を知る者と知らぬ者との差が故。

ただし、何やら巨大な箱を乗せた台車付きのようだ。その上には、何やら珍妙なピンク色の人形が複数あり、まるでブドゥー人形を彷彿とさせる。

仮にこれが本当にブドゥー人形なら、悟のお土産のセンスを疑うが。

「はい、京都校の皆には海外出張のお土産！ とある部族の御守りみたいな人形らしいよ！」

ああ、歌姫の分は無いよ？」

「いらねーよー！」

「そして東京校の皆にはこちら！」

What <sup>箱</sup> <sup>の</sup> <sup>中</sup> <sup>身</sup> <sup>は</sup> <sup>何</sup> <sup>だ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>な</sup> box? と問わんばかりにハイテンションで台車

を指し示す190センチ成人済み男性の姿か、これが。家入硝子から二十八歳児と陰口を叩かれるのも致し方ないな、と蓮は思った。

そしてその箱の蓋が一人でに開き――

「はい、おっぱっぴー！」

「故人の虎杖悠仁くんですー！」

死んだはずの悠仁が、おっぱっぴーしながら現れた。

所で、読者諸君は『死んだと思つた友達と再会した』ら、まずはどんな反応をするだろうか。もう会えないと思つていた友達に会えて嬉し涙？ あるいは泣きすぎて嗚咽

? 最悪、嘔吐するかもしれない。それを切っ掛けに地球温暖化まで解決するかも。人

(あるいは地球) それぞれだ。

だがその反応は、状況を整理し終わった後の反応と言えよう。虎杖悠仁という名の太

陽を失っていた二人は、現実離れた目の前の光景に耐えられず、SAN値チェック／1D3でどうにか成功した……が。

「……………」

「……………」

『……………』

しかしその現実はどう反応すれば良いのか分からない二人は、脳の回転をショートさせている。

引き攣った顔で、何も言えなかった。

というかおっぱっぴーって何でだよ。

(んええええッ!?)

全ツ然、嬉しそうじゃない!!?)

当たり前である。

事の発端は、悟の悪ノリにより始まった。「どうせならサプライズでお披露目したいよネ!」と気分屋の悟に乗せられて、あれやこれやとびっくり箱の中に入れてしまったのだ。

この光景を見ていた七海建人曰く、「生きているだけでサプライズでしょう」との事。重ね重ね、当たり前である。

箱の中身は何と死したはずの宿儺の器。それに驚きを隠せないのは、高専生二人だけではなかった。

「これは……!?!」

「あつ、楽巖寺学ちよ〜〜♪」

生徒達を監督していた、都立呪術高専学長の夜蛾正道もそうだったのだが。

その隣にいる府立呪術高専学長・楽巖寺嘉伸は、特に顕著だった。

嘉伸は、五条悟と雨宮蓮の嫌う保守派筆頭の上層部であり、虎杖悠仁と吉野順平の処刑、及び雨宮蓮の実質死刑宣告に賛成していた者の一人でもある。

故に、虎杖悠仁の生存の衝撃は大きく、命の脳を揺さぶる。

所で読者諸君らは、日本の死刑制度に詳しいだろうか。ご存知でない方に一つ説明しておきたい。それは、『死刑執行後に囚人が生き返った場合の囚人の扱いについて』だ。もちろん、そんな奇跡に等しい事象が起こる事は極々稀にしか起こらない。確実性があり、尚且つ囚人にできるだけ苦痛を与えないような処刑法が確立された現代なら殊更。

だが、その極々稀を引き当てた人物が、なんと日本は江戸時代で文献が残っている。

詳しくは省くが、その後の死刑囚の扱いについて、中央政府は『死刑は執行されたため、再び執行する理由はない。戸籍を回復させよ』と達しがあつたそうだ。

つまり、このケースによって死を免れた虎杖悠仁は、上層部が再度死刑を求刑しない限り、もう死刑を執行される事はない。

呪術界もまた、日本の法律に従う他は無いのだ。やむを得ない事情で殺人を許される事があっても、罪をきちんと償えばそこまでで罰は終わりというスタンスは変わらないし、変えられない。

それこそ、上層部が最悪の手段である『暗殺』にでも手を染めなければ。

それが分かりきっている悟は煽り、嘉伸は睨む。

「いやあ、ご無沙汰ですねエ〜！

びつくりしておつ死んじやったらどーしよーかなーって、心配したんですよオ〜〜  
??」

「……糞餓鬼が……!!」

熟練の威圧はしかし、最強相手じゃ分が悪い。

ちなみに府立高専生達はお土産に、二年都立高専生はバカ目隠しに夢中というか傍観していた。

「オイ」

「はひ」

「何か言う事あんだろーがよ」

唐突に野薔薇に箱を蹴られて、気の抜けた返事しか出来ない悠仁。  
見ると――

「あ」

野薔薇の目尻には、涙が溜まっていた。

虎杖悠仁は一つ、間違いを犯した。

虎杖悠仁が祖父の倭助から『これだけはやるな』と念を押されていた二つの家訓のうち一つを破ってしまったのだ。一つは、飯を粗末にする事。もう一つは、女の子を泣かす事だ。

間違いを犯したなら、やることは一つ。

『真摯に向き合って、謝って、許しを乞う』。いつの時代もそれだけだ。

「……生きてる事、黙っててすみませんでした」

「ぶあか!!」

「ぶおツヘツ!?!」

綺麗なボディーブロー。効果はばつぐんだ。相手の悠仁は倒れた。アレは防御せねば蓮とてタダでは済まないだろう。

さて、恵の隣にやってきて、蓮は言祝ぐ。

「喜んでくれたか?」

「……ああ、はは。

最ツ高だな」

呆れたように恵は笑う。

鼻を嚼る音が聞こえたのは気のせいだろう。

ともあれ。

虎杖悠仁、合流。

東京校一年、完全復活。

3.

「あのくう……」

さて、場面変わって都立高専生控室玄関前。皆々は思い思いに競技開始時間を待っていた。

……ただ一人、虎杖悠仁を除いて。

「これ見方によつてはかなりハードなイジメなのでは？」

「うるせえ、しばらくそーしてろ」

「ど、どんまい悠仁」

「俺の支えは順平だけだぜ……」

悠仁、涙そうそう。鬼籍学生さんは、在校生による陰湿を通り越したイジメを受けていた。石床の上で正座させられながら遺影額を持たされている姿に、吉野順平は苦笑いをせざるを得ない。

「まあまあ、事情は説明されてたろ？ 勘弁してやれ」

「えっ、パンダが喋った？」

「しゃけしゃけ」

「何でおにぎり??」

「棘先輩は、言霊を増幅させる【呪言】を使えるんだ。安全を考慮して、普段は語彙をおにぎりの具で絞ってんだよ。パンダ先輩はどこからどうみてもパンダ先輩だろ」

「そういうもんか？」

「そういうもんだ」

「1ヶ月は食い繋げるな？」

「綿しかねえよ」

「じゃあ3日か」

「それが妥当だな?????」

「あれ、おれ今生命の危機?」

ワタはワタでも腑はらわたはないので、もちろん栄養は無いし、何ならそのままの状態で排泄



されるので食べる意味は皆無なのだが、悠仁と恵は何やらちゃんちゃらおかしい会話を繰り広げている。

そこに横槍を入れて。パンダ先輩を救ったのは、鋭い目付きと言葉遣いで悠仁に迫る禪院真希であった。

「つうか悠仁、アレ返せよ」

「アレ？」

「屠坐魔だよ、屠坐魔。バカ五条から借りただろ？」

五条先生に  
借りたままで  
そういや壊してた  
「あー……ああ……アア……」

……ゴ、ゴジョーセンセーガモツテルヨ」

「チツ、あんのバカ目隠しが……」

「ぶっわくつちよいしよいしいよい!!」

「ウワつきつたねえ!!」

「んで、よ。お前ら二人何が出来るワケ？」

「殴る、蹴る！」

「僕は、毒を持った式神が使えます。体術はそれなり程度ですけど」

「間に合ってるんだよなア……」

体術は呪具を巧みに操る真希や肉体派のパンダ先輩が、式神は禪院家相伝の『十種影

法術” 持ちの恵と “魂<sup>ペ</sup>靈<sup>ル</sup>召<sup>ソ</sup>喚<sup>ナ</sup>術” を操る蓮が担っている。

「確かに体術はまだ心許ないですが、順平の式神が抽出する毒はオレのペルソナよりもバリエーションがあります。順平の術式の解釈次第では、大いに化ける可能性も秘めている」

「悠仁が死んでる間、何してたかは知りませんが——東京校京都校全員呪力無しで戦ったら、悠仁が勝ちます」

「へえ……」

東堂葵と直接戦った蓮と恵ならば、説得力もある。動かし方次第ではジョーカーになり得るかもしれぬ、と真希は思った。

……のだが。

「は、聞き捨てならんな恵。オレが勝つが？」

「いやこの流れだと俺が勝つに決まってるだろ」

「力押しだけじゃオレは倒せん」

「技掛けたくて仕方ねえってのが見え透いてんだわ」

「は？」

「あ？」

「喧嘩すんな」

「何か今日の蓮、血の気多くない？」

「楽しみにしてたからな」

「本音は？」

「早く戦いたい」

「アンタそんなバトルジャンキーだったっけ？」

……いや、結構そうかも」

なぜか食つてかかる蓮に、真希は少し引いた。

さて、野薔薇には蓮に対して、ある思い当たる節伏黒があつた。それは、隠された（と  
いうか拝む機会が無い）蓮の性格あるいは性癖、『パーサーカー』。

事の始まりは、英集少年院にてタツグを組んだ折の事だ。野薔薇は蓮——ジョーカー  
の戦いぶりをみて、彼をスマブラのキャラクターと言ひ表したのだ。

いつだったか、ジョーカーはその通りに『大乱闘スマッシュブラザーズ』という祭典  
に選手として出た事があり、その時にだろうか、蓮は戦いにおいて愉悦を知つたのだ。

強者と戦い、そして勝つ快楽を知つたのだ。理不尽を打ち破る爽快を知つたのだ。

その経験があつたからこそ、夏の日のスクランブルで戦い抜けられたのだ。

確かに苦戦する場面も多々あつたが、それでも楽しい夏休みと言えた。無双するのつ  
てこんな感じかあ、という爽快感を、蓮は今でも忘れられていない。

現に蓮は、格下相手に転生チートで無双するような真似は好かないが、格上相手を出し抜き勝つのは悪くないと思っっているのだ。

まあ今生では、五条悟然り、両面宿儺然り、そうは問屋が卸さなさそうだが——彼らに勝った時のカタルシスは、今までのそれとはやはり比べ物にならないだろう事は想像出来る。

(けどまあ、一人新人に近いヤツが入ろーが、人数で見ればアドもあるし、そこに特級術師進がいるんだ……)

閑話休題、真希は手で押さえた口が愉悅に歪む。真希の直感は、この勝負を完全に貰ったものと訴えていた。

「ういーす、蓮いるー?」

と、真希の打算に被さるるように、控室の玄関口と顔の口を五条悟が開いてきた。長身の彼には玄関は低いらしく、頭を少しかがめて入る。

蓮を探しているようだが、特段急いでいるような顔色はしていない。どうせ何かしら用事を忘れていたのだろう。要件は何だろうと、蓮は小さく溜息を吐く——

「おっ、いたいた」

「五条先生? どうしてここに?」

「いや、蓮遅いなーって思ってたね」

「はア？ 何言ってるんだ、選手で出るだろ？」

「え？ 蓮は団体戦出ないよ？」

——その刹那、一瞬で空気が凍りついた。

レンは あたまが まっしろに なった！

『はああアアア!?!』

「な、なぜだ？ オレ何か恨まれるような事したか?！」

「その方が面白そうだから……嘘嘘、八割冗談だよ」

割とガチ目に睨み付けてやるのだが、悟はケラケラ笑って悪びれもせず、のらりくり言い訳を始める。

「本当の事言うと、憂太が去年暴れすぎちゃってねエ。それでルールが変わって、僕らの代までは『制限無し』で、去年までは『特級は一人まで』だったんだけど、今年からは『前半後半のどちらかに限り』になっちゃった」

ちなみに前半後半の条件は、悟が府立学長を説得してどうにか漕ぎつけたものだ。悟がいなければ蓮は出場すら出来なかったのだが、そんな事は今の蓮は知った事では無い。

「まあ後半の部には出すから、ね？」

そう言われたその瞬間、蓮は白目を剥きながら後ろに倒れてしまう。最後のひとひら

がポトリと落ちていく。蓮の魂が抜けていった音がした。

悠仁が慌てて抱え込み、その安否を必死に問うているが、笑いを堪えられていない。いつぞやの日から、そこら辺のギャグセンスはまるで成長していないようだ。

「……………るさん……………」

「どうした、蓮！ 何!?!」

「許さんぞ乙骨憂太ああ……………!!!」

悲痛の叫びが部屋に響く。

哀れ也、乙骨憂太。

#### 4.

〈午前↓昼↓午後〉

とまあ、蓮が拗ねたりしている内に、あつという間に試合の時間がやって来たのであった。

現在の時刻はおよそ一時半の少し前。補給したエネルギーの発揮と、ウォーミングアップには最適の時間帯だ。

ふと吉野順平が周りを見渡せば、皆が皆、難なく会話出来るくらいには軽くストレッツチなどをして体を温めている。戦いに行く者としてのコンディションは順調に上がっ

ているようだ。

「悠仁」

「んー？」

と、悠仁を尻目に見た所、声を掛けているのは頭に頭の伏黒恵だった。今日もとげ具合は絶好調だが、茶化す雰囲気のように思えなかつた。

「大丈夫か？」

「ん？ あー、まあ蓮抜けちつたのは痛えけど、まー何とかなるべ」

「いや、そういう意味もあるが、そうじゃねー」

「……何かあつたんだろ？」

こういう鋭い所があるから、伏黒恵という男は油断ならない。その事を、虎杖悠仁はすっかり忘れていた。苦笑いして問いに答える。

「……あー、まあな。うん。」

「……わり。正直な話、死んでた時にちよつとあつてな。まだちつとばかり引き摺つてる」

「……」

「けど、大丈夫。」

「——もう腹は括つてんだわ、色々と」

「……なら、いい」

不満はあるが、納得はしたらしい。横切りながら、恵は続いて綴る。

「俺も今日、割と負けたくないしな」

「割とって何よ割とって、私らこの前ぶち転がされてんのよ？ 気張れつつーの！

さーて、コテンパンに圧勝よ！ 真希さんのために！」

「そーゆーの止めろ、野薔薇」

「やったろーじゃん、まきのために！」

「そーゆーの止めろ、パンダ」

「めんたいこー」

「えつと、『頑張ろう』ですかね？」

「あー、ニュアンスはあってるわな。こりゃ『気張って行こー』だ」

「しおく」

各々の気合いは充分なようだ。悠仁は、己の頬が緩むのが自分で分かった。久々の級友達との会話は、悠仁の心に光をもたらし続けてくれた。

さて、姉妹校交流会初日の前半戦は団体戦だ。その名も『チキチキ！呪霊討伐猛レーヌ！』夜蛾正道学長命名である。

悟をシバきながらの学長曰く、本試合は指定された境内の中に放たれた二級呪霊を、



先に祓除したチームの勝利となる。

一時半を試合開始、制限時間は日没の六時まで。二級の他にも三級以下の呪霊も複数体放たれている。二級を祓えず勝敗が決さない場合、三級以下の討伐数が多いチームを勝利とする。

妨害行為もアリだが、死亡事故や再起不能となるような重傷を負わせてはならないのは言うまでも無い。

以上が本試合のルールであり、それ以外に決まり事は無い。何をやっても良い、呪術合戦だ。

試合会場である区画面積は約二十万平米。東京ドームがおよそ四個分のそれに当たる。しかも本校舎と三つの演習場を含めてこの広さだ。実力だけでなく空間把握能力、及びチームワークが試される勝負になるだろう。

だからこそ東京校の面々は、チームワークでも京都校の連中に負けない自信があった。

さて、そうこうしている内に、高専中に建てられているアナウンスのためのメガホンから、バカ目隠し五条悟の声が聞こえて来た。この男、顔だけでなく声も良いのでもっとムカつく。

『はい、開始一分前となりましたー！　ここで雨宮蓮君からありがたいお言葉ですー！』

『とつとと勝ってください』

『はい、スポーツマンシップもクソもない身内最良をありがとうございます！』

『続きまして歌姫先生！』

『えっ!?! 私も!?!』

えー……と、そのー、あー……まあ、ある程度の、そのー、助け合いー、というか……』

『はい時間でーす』

『ちよ、ごじよ——』

『スタアアアアアツツトオウ!!』

キイイイイイイン

と、嫌なハウリング音を皮切りに、歌姫の予定外の激励を無視して二校のチームが動き始める。

『五条、アンタねえ!』

『オレは寝るぞ』

『ちよつ、雨宮!?! 学校行事なんだからってか毛布どこから取り出したのよ!?!』

『はいはい、終わったら起こすよ』

『アンタ仮にも担任でしょうが五条!』

『ぐー……』

『ああもう、どいつもこいつも!!』

人の話を——』ブツツ

急にアナウンスが途切れたのは、おそらく悟の仕業であろう。段取りの悪さと行き当たりばったりな性格が、二者間で全くと言って良いほどマッチしていない。恵は呆れざるを得なかった。

「何やってんだか……」

「はは！ 変わんねーな、ホント！」

——んじゃまあ、ショー・タイムと行きますか！」

若干、ぐだぐだな所がありながらも。

懊惱廻る、姉妹校交流会前半戦の火蓋が切られる——！

「つて、何で悠仁が仕切ってんだよ」

「あべしっ!？」

「つーかその台詞れんのじゃね？」

「えー、パクったの？」

「うわサイテー」

「うめ、おほか……」

「あれ、俺味方いなくね？」

…はてさて、この交流会、どうなる事やら。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen  
 Let us start the game.  
 #25 A strange tale goes around around around

## # 2 6

5.

「宿儺の器、虎杖悠仁は殺せ」

そう口にした嘎れた声の正体は、京都府立呪術高等専門学校学長・楽巖寺嘉伸であった。未だ残暑厳しい九月の山奥の一角、京都生控室に、何やら不穏な空気が漂い始めている。学生の面々は、一人を除き、嫌な顔をする者、どうでもいい者、任務と割り切る者の顔が並ぶ。

「アレは人間などでは無い。呪いと思つて構わん。殺した後は、事故としてこちらが処理しよう。幸い、不穏分子たる特級術師・雨宮蓮は、団体戦には参加せん。縊るのは――」

バキイツ、と轟音を立てて襖が二枚、二つ折りになって10メートル吹っ飛んだ。その音を立てた者の正体は、雨宮蓮の親友であり京都校の切り札、東堂葵が、怒りに任せ襖を思い切り殴り飛ばした音であった。

「俺の目の前で……親友の知り人を殺そうなどとツ、よく言えたなクソジジイ……!!」

青筋が浮かぶ。自身の学長が呪術界の保守派である事は知っていた。宿儺の器であ

る虎杖悠仁を忌んでいる事も知っていた。だが、親友たる雨宮蓮の竹馬の友に虎杖悠仁がいる事は、先ほど蓮に聞かされたばかりの出来事であった。

葵の怒りは有頂天、腑はとうに煮えたぎっている。形式上同業の仲間故、手を出していいだけだ。

だからこそ、この怒りの行き場はどこにもない。鼻を鳴らし、不愉快さを隠す事もなく、葵は廊下へと出ていく。

「戻れ東堂、学長がまだ話されている」

「知ったことか。十一時から高田ちゃんがゲスト出演する散歩番組が始まんぞ、今から蓮と一緒に見んだよ」

「録画でもしてあとで見ればいいだろう、二度言わすな」

「リアタイと録画両方見んだよツツ!!」

ツツコミどころそこかよ。

バラバラな京都校生一同はそう思った。

「……………先輩、録画しといてくれる?」

「真依?」

「良いぞ」

「よし」

「真依ちゃん?？」

隠れファン隠れられてないの禪院真依はひとしおにガッツポーズを決める。女子二人からの奇抜なものを見るような目も気にせず。

さて、葵は不屈者達への嫌悪感を滲ませながら口を開く。

「おい、おいほれ老耄……それとお前ら。よく聞け。虎杖悠仁に手を出せば、パ雨宮蓮デイが黙っていないのは当然、俺も高専から離反し、バディ側に付く腹積りだ。そんな時や、敵としてお前らを殺すぞ。

大体、女の趣味が悪い時点でお前らにはどうに失望してるつてのに……それを承知の上で、俺に親友の友を殺せだア?

——笑わせんなよ」

ピリ……と肌が粟立つのを、面々は感じ取っていた。

葵は、普段の発言こそアレだが、歴とした一級術師なのだ。なぜなら、彼の師は特級術師が一柱、九十九由基その人なのだから。実力は折り紙つきで、京都校で東堂葵を倒せる者は、長年のベテランである楽巖寺嘉伸を置いて他に無い。準一級では、足止め程度なら可能だろうが……それ以上を期待するのは残酷というものだ。

そして、それが分かっているからこそ。葵からの殺意に、面々は身じろぐ。だが空気を読めない加茂憲紀は、お構い無しに葵へと告げるのだ——呪術師として。

「分からんな。呪術師として半端者どころか、ほぼ呪霊である彼奴を、初対面のお前が何故庇う？　呪詛師に堕ちても構わんと言っているのと同義だぞ」

「だからそう言つてんだよ。なぜなら、蓮なら絶対にそうするからだ」

だからこそ、葵はお構い無しに憲紀へと告げるのだ——雨宮蓮の親友として。

「親友の預かり知らぬ所で、下らん謀略に親友の知人を巻き込むな。人として忘れちゃならん事も忘れたか」

「ほう。さてはお主——」

だが楽巖寺嘉伸は、葵の『甘え』を許さない。使命を忘れさせない。己が一体何のために存在しているのかの意義を、骨身に染ませるように告げるのだ。

「呪術師を嘗めとるな」

七十余年。術師としてはおよそ六十年。五体満足に支障無し。嘉伸は術師として長寿の域にいる達人だ。その言葉一つで、腹の奥底に重みが乗る。だからこそ、葵は腹立たしいのだ。

「その言葉、そっくりそのまま返すぞジジイ。」

確かに俺達は呪術師だ。だがそれ以前に学生でもある。

——学生の青春に勝る仕事などあるものか」

そう言つて、葵は学生寮のリビングへと足を運ぶ。全ては身長と尻がデカイ女のため



に、何より友のために。……まあこの時蓮は意氣消沈しており、観客室で不貞寝しているのだが。

「呪術師にそんな事が許されると？」

——それこそ下らん戯言だろうに」

「まあまあ加茂先輩……」

「東堂くんらしいというか、何とというか」

「で？ あの人は放つておくとして、どうするの？」

加茂憲紀が蔑み、三輪霞が宥め、西宮桃が呆れ、禪院真依が問い掛ける。

「無論、我々は虎杖を狙う」

（えー……嫌だなあ）

「待つて加茂くん。東堂くんいなくて大丈夫なの？」

「放つておけ。今回の作戦に際し、東堂の助力は無いものと考えたとしても、所詮虎杖は新米の術師だ。我々だけでも彼奴を屠るには充分……いや、むしろ過剰と言えよう。最後に、私の《赤血操術》でトドメを刺す」

（イヤ——本当に充分だろうか）

だが、究極メカ丸は訝しんだ。

（聞いた事がある……虎杖悠仁と雨宮蓮は同郷の輩でありながら、互いに切磋琢磨する

関係であるト。虎杖はともかく、雨宮は規格外……それも《魂靈召喚術》の使い手だ。虎杖の死を匿っていたのなら、虎杖自身が死んでいた時期二、雨宮が何も施さなかった筈は無イ……。

先程の反応——東京校の面々のサプライズでハ、雨宮と五条悟だけが驚くそぶりすらもしていなかった事ヲ、もつと俺達は危惧すべきなのではないカ……？)

嫌な予感とは、往々にして当たってしまうのが定石だ。メカ丸の準一級としての勘が、脳内に警鐘を響かせる。

「おい——」

「ね、真希は私に殺らせて」

「その発言、東堂と同レベルだよ」

「……」

さて、憲紀のその発言に、同列に扱うなど真依はプリプリ怒る。

コミュ障のきらいがあるメカ丸は、主張を口にするタイミングを失ってしまうのだつた。

6.

時刻は昼頃。五条悟がスタートを宣言してから四ヶ月くらいお待たせして申し訳ご

ございませんでした。

閑話休題、両校の客舎一斉に——スタートを切りました。良いスタートですね。これは好レースが期待できそうです。晴れ渡る東京都立呪術高専境内は、安心設計の暗森あんしんに囲まれております。それぞれの思惑が交差するJリーグランプリ・姉妹校交流会。一番人氣である雨宮蓮選手は本日欠場と、中々痛手を受けました都立高専生。しかし皆絶望の表情は見えません。日の差さぬ森の中を快調に、何の迷いもなく進んでいきます。それでは実況を終了しこれから描写に専念致します。お相手は筆者の茶目っ気でした。

「ねーパンダ先輩。ボス呪霊ってどこにいんのかな?」

「んー、まあおそらく、おれ達と京都校の中間地点のどこかって所だろうが……じつとしている訳は無いわな」

「あー、まあ仮にも呪霊だもんなあ」

さて、赤いパーカーがトレードマークの虎杖悠仁がパンダ柄がトレードマークのパンダ先輩にそう問い掛けた裏で、少し遅れて並走する吉野順平は、この試合における作戦について軽く脳内でおさらいしていた。

——前提として、本大会の姉妹校交流会前半戦において求められる能力は、速攻と探索力、そしてチームワークが挙げられる。

先ずは速攻力。蓮が抜けたため、東京校の機動力と攻撃力のあるエースストライカー

的存在は、呪言師の狗卷棘や十種影法術師の伏黒恵しか挙げられない反面、京都校は一級と準一級の宝庫だ。しかも一級の東堂葵は、登録されているとは言え特級呪霊にも勝り出来るほどの実力者でもある。準一級の加茂憲紀は加茂家の次期当主として最低限の素質である《赤血操術》の術式を持っているし、同じく究極メカ丸は単純な火力だけでは大人の術師に劣らないほどだ。モタモタしているとあつという間にゲームセットになる。

次に探索力。これは申し分ないと言える。恵の玉犬は鼻が効くし、パンダは突然変異呪骸が故、他者より呪霊探知能力がずば抜けている。対して京都校には、空から偵察できただけの西宮桃のみ。制空権を得ていると言えれば聞こえは良いが、森の中にいる呪霊を一々探すのは途方もない労力だろう。

そして最後にチームワーク。正直言って、京都校側のチームワークはボロカスだった。スタート時に東堂葵はメンバーから離れているし、真依と憲紀はいがみ合っている。『協力し合おう』という気概が微塵程度しかないのだ。

その反面、東京校の面々は、悠仁と順平を除き良好と言える。これはただ単に、悠仁は死んでいて二年生と過ごせなかったし、順平は出会って間が無さすぎるといふのがある。——が、それを踏まえた上での信頼関係は、生半な出来事では崩せない。一年と二年の交流会は無駄ではなかったのだ。

よって、東京校が立てたプランは——『二手に分かれ探索』し、『棘の呪言による短期決戦』を狙うものとなった。

「蓮が抜けたのは痛えが、やる事は変わんねえな。」

悠仁、東堂の足止めしくじんなよ！」

「押忍！」

そして、虎杖悠仁に課せられた使命は『リベロ』だった。悠仁は今回の前半団体戦に際し、呪霊を祓う必要が無い。

悠仁の役目はただ一つ、『一級術師である東堂葵の足止め』。ゴリマッチョにはゴリマッチョをぶつけるのが一番という安直な考えだが、葵の術式の特性上、悠仁が一番適しているのもまた事実なのだ。

「さっき話した通り、私らは索敵能力の高えパンダ班と恵班に別れるぞ！」

「しゃけー！」

——と、ここで【玉犬・黒】とパンダ先輩が何かを感じ取ったようだ。

前方100メートル地点に、微弱な呪力。伏黒恵が目を凝らして見ると、それは赤い蜘蛛の呪霊であった。

……ただし、いつぞやに釘崎野薔薇が蓮——もとい、ジョーカーと共にビルで見たものよりも遥かに小さい。真希以外なら素手であつても祓えるだろう程度のそれ。

「雑魚だな」

「ワウツ」

動物達がそう言いながら、薙刀を構えた禪院真希は土と雑草の入り混じった悪路以下の地を蹴る。全ては己が昇級のため、そして行く行くは己が野望のため。それを知っているからこそ、皆はしやしやり出る事なく顛末を見守る。

横一閃。たったそれだけで、それなりに硬いはずの外殻を命ごと刈り取っただろう。

「ワンツ！」

「真希さんストッパー！」

真横から飛来する肉の塊が、木々を薙ぎ倒し、生態系を破壊しながら、突如として東京校の面々の目の前に踊り出なければ。

無論、蜘蛛の呪霊ゴトキに見る影は無い。先の衝撃波を耐える術を、三級程度の呪霊は持ち得なかった。弱肉強食の呪術界では、弱さこそ悪なのだ。恨むのならば己の実力不足を恨むが良い。

尤も今となつては、恨む事すらも出来ないが。

流石に相手が悪過ぎたのだ——一級術師・東堂葵が相手であれば。

「よオし——」

さて、突然の半裸の不審者である葵の襲来に、しかし東京校側は誰一人として……否、

吉野順平は少し驚いているが、彼を除けば誰も驚いていない。むしろ想定内といえよう。蓮と戦えない事に不満はあれど、だからといってこの戦いそのものから降りる事は無いのだ。

だからこそ悠仁は、葵が台詞を言い終わる前に飛び膝蹴りを喰らわせられる……！

「どりゃっ！」

「ぶふっ！」

「散開しろ！」

『応！』

そして悠仁が囹を務めていくからこそ、司令塔である真希は安心して悠仁を見殺しにする判断が出来る。なぜなら二名ほどは、悠仁を見殺しにしたとて簡単に死ぬようなタマではない事を、身を以って知っているのだ。

二手に別れる。パンダ先輩には野薔薇、棘を。恵には真希と順平を付けさせた。両班ともに獣道通り越した悪道を進む。目指すは勝利の栄光ただ一つ。

さて、膝蹴りからの空中一回転で地へ着陸し、悠仁はファイティングポーズを取る。見ると、眼前の変態の顔面はただ赤くなっているだけで、鼻血の一滴も出していない。げ、と悠仁が尻込むのも束の間、葵は嗤い顔で悠仁に問う。

「お前が虎杖悠仁か」

「マジ？ 鼻血すら出ねえのかよ。つつーか俺の名前を……」

……ああ、そうだけど？ アンタ誰？」

「俺の名は東堂葵。お前の事はバディから良く聞いている」

「バディ?!」

箱の中にいたせいで、ドッキリを仕掛けた五条悟以外の外界の声が聞き取りづらかつたのだろう。その単語にクエスチョンマークが悠仁の頭に浮かぶ。

誰だろう。東京校の面々——特に恵や野薔薇は、やや京都側の生徒に嫌悪感を抱く顔をしていたような気がする。二年の先輩も、良い顔もしなければ悪い顔もしていなかった。初対面の順平を除き、東堂葵の友達に成り得そうなのは……と考えたところで、悠仁に一人の顔が浮かんだ。

「もしかして蓮のこと？ アンタ、蓮の友達か?!」

「そうだ！ もしや、お前も？」

「そう、俺も俺も！」

どうやら、京都校にも顔が知れているらしい。悠仁は友の交友関係の広さに、葵は蓮の特殊な旧友に感心しつつ、しかしながらどうしても譲れない所を、腕を組みながら互いに語り合う。

「まあ一番の親友は俺だけだな！」



あ、あテメエ今何つった?!

嗚呼なんてこった。パンナコッタ、メンチを切る羽目になってしまった。

コイツらの頭の中では、『自分こそが蓮の一番の親友だ』というのが、当然のように渦巻いているのだろう。何ともまあ、頭の中がハッピーで埋め尽くされている男達である。

「まあいい、後できつちり『理解わからせる』としよう。

それはそれとして、だ。虎杖、一つ聞きたい」

「あん?」

「お前、どんな女がタイプだ?」

「はい?」

頭がハッピーではなくクエスチョンマークで埋め尽くされる悠仁。

「いや、何でさ。俺とあなた今戦闘中よ?」

「気にするな、品定めというヤツさ。……何でオネエ言葉なんだ」

それはそれとして、だ。悠仁はとんと女に無頓着が故に、唸りながら身体を敵らせている。

「俺馬鹿だからよく分かんねえけどよオツ、馬鹿だからよく分かんねえわ……ううーん、悩むわあ……」

「……」

蓮から勉強を教えてもらっている身とはいえども、地頭はそこまで良くはなっていない。機転の速さは生来のもので、そこには蓮は一切関与していない。

だがふと見てみると、そこには何かを待ち侘びるような顔の葵。そんな期待する目で見られると、何か言わねばという気持ちになるではないか。捻り出した自身の答えを、自信無さげに悠仁は口にする。

「強いてだぞ？　強いて言うなら……ジエニファア！　ローレンスみてーな、ケツとタツ、パが、デケ、エ子かなあ」

「————お、おおおツツツ!!!」

瞬間、葵の脳内に溢れ出した——

「虎杖……いや、悠仁ッ！　やはりお前もか……ッ!!」

——存在しない記憶。

「新連載のやつ結構おもしろぞ」

「ほほう、どんなだ」

「後で貸すつてばさ」

入学して間もなく、桜は未だ枯れず。しかし邂逅を果たした頃から、まるで生まれる前からその名前と顔を知っていたかのように、俺達三人は馬が合った。昼休憩の最中、屋上に無断で侵入した悠仁と俺は、飯を食いながら今週のジャンプを読んでいた。

だが、そんな一際の休息も、予鈴のチャイムという邪魔が入った。授業開始五分前を告げる鐘の音と、それには似つかわしく無い重い鉄の音が聞こえる。ギギギ……と音を立てて、屋上の扉が開いたのだ。その音を立てた者の正体とは、やはり我らが主人公・雨宮蓮その人だった。

当たりをつけて二人を探していた蓮は、呆れるように微笑みながら口を開いた。

「やっぱり居た。葵、悠仁。もう授業始まるぞ」

「うわっ、やっべー！」

「ふむ、この状況正しく『5限目サボらねえ?』と言う場面だな?」

「授業サボるなよ、この青春バカ」

「見た目不良に言われたくはないな」

「んだとお!?!」

「ほらほら、置いてくぞ」

「フツ、俺が一番乗りだツ！」

「うおつ、フライングずりーぞ！」

「走るな走るな」

そして、放課後になって、いつも通り三人で帰ろうと言うところだった。唐突に口を開いた俺に、二人は驚いたような顔をする。

「蓮、悠仁。俺、高田ちゃんに告ろうと思う」

「おお」

「は!? 止めとけよ、俺お前慰めんの嫌だぞ！」

「何でフラれる前提なんだよ……?」

「いやいや、何でもまずオーケー貰えると思ってんだよ」

「彼のアンサリバンは、ヘレンケラーにこう説いた。『出る前に負けることを考えるバカがいるか』……とな」

「いやそれ言ったの猪木だろーが！」

「なあー、蓮も止めてくれよ」

「目的に向かい一途に走る者を止める権利はオレには無いよ。オレには、その勇気を応援する事しか出来ないさ」

「流星は蓮ツ！ どこぞの脳筋とは違う回答をくれるな！」

「どおあるうえぐうあ、ん脳筋だところあああ!？」

「ははは」

そして——意を決し、高田ちゃんに愛を告げた……のだが。

「ごめんなさい、アタシ好きな人いるの」

と、無様にも無惨にも、ラブレターを破らレターのであった……。

いや、正直、ビビったよ。相思相愛とまでは行かないにしろ、そこいらの貧弱軟弱虚弱情弱な男よりは魅力がある方だと自覚はしていた。そのはずだったのに、結果は惨敗。見るも無惨な敗戦を喫したのだ、俺は……。

「方に一つ……いや、億に一つの可能性として、好きな人が俺というパターンは……」

「ある訳ねえだろ、断り文句の常套句だぞ」

「残念だったな、葵」

不器用にも、二人は慰めてくれる。

「つたく、しゃーねーな……ホラ立てよ、葵」

傷心している今だけは。

「ラーメンくらい、奢ってやるよ」

この男友達が、とても頼もしかったのを覚えている。

「ゴチになります」

「オイ、蓮の分まで奢るとは言ってるぞーぞー!」

「甲斐性が無いな」

「ぬぁにいーっ!!? ああ分かったよお前の分まで奢ってやろうじゃねえのよ!」

「はは、言質は取ったからな?」

二人が背中を叩いてくれている。

その存在に、その有り難みに、あの時も今も俺は涙したのだ……。

「地元じゃ負け知らず……か。

やはりどうやら俺達は『親友』のようだな……ツツ」

「んんんん??? さつき会ったばっかだぞ???」

頭がハツピーどころかラツキーでこんなにちはベイバーな葵には、その声は届かない。困惑する悠仁をよそに、葵はただただ感涙に打ち震えているのだった。

だがそれよりも、悠仁にとっても葵にとっても、先ず解決せねばならない問題が一つあった。

「まあ何でも良いけどよ、とにかく、聞き捨てなんねえ言葉が聞こえたつてのは変わんねーんだよな」

「ああ、そういうえばそうだな……悠仁。親友同士とはいえ、雌雄を決せねばならん事が出来た……」

ゆらりゆらりと大勢を整え、ふしゅうううと獣の如き呼吸を整え、メラメラと燃える闘志を満々に――

『蓮の一番の親友は俺だツツ!!』

ゴングが鳴る。同時、クロスカウンターが決まる――!

さて、体格差は、悠仁が圧倒的に不利。葵の身長は190を超えているのに対し、悠仁は170より少し上程度。身長が高いということは、それだけ腕や足が長いということ。日本人は平均して足が短めな傾向にあるが、東堂葵においてそれは無い。悠仁がクロスカウンターでも葵を殴る事ができたのは、彼自身の初動の早さ及び俊敏性が起因していた。

威力もさして変わらない。両者から見て右側を狙った互いの拳の衝撃に同じ距離を吹っ飛ばされて、そのまま地べたへ倒れ込む――

『ううんだるああつっ!!』

――とところを踏ん張り、更にもう一発クロスカウンター!!

今度は頬所の話ではない。互いに相手の鼻元を狙った左拳。リーチの長い葵が有利にも関わらず、悠仁は出鼻を挫くために飛び上がったの猛攻。出遅れた葵は、しかし意

地だけを頼りに悠仁の鼻元を打ち砕く。

「んぶえあつ！」

「んぶおふつ！」

どちらがどのように喘いだかも分からぬまま、さしも頑丈さだけが取り柄と言える悠仁でさえも、流石にあまりの激痛に涙が浮かぶ。——が、互いにまだ倒れる訳にはいかない。思い切り鼻から酸素を吐き出して、溜まっていた鼻血を一気に噴出する。

こんな出血量も勢いもエヴァでしか見た事がないが、まさか体感する側になるとは悠仁は夢にも思わなかった。

しかし見ると、葵はさほどに痛がっている様子はなく、鼻を押さえて少量の血を噴き出すだけに終わっている。

何故だ。この差は何だ。握力に自信はあるし、何なら葵と同じく呪力で拳を固めている。だのにどうして、ここまで威力に差が出るのだろうか。

戦闘の最中、考え込む悠仁。『蓮の親友』という大事なポジション争いに——しかし、無粋者が現れた。

「あ——ツ!？」

虎杖悠仁の野生的な勘。あるいは、射手の優柔不断。弾、という銃声に、悠仁は一瞬でその音の方向を向いた。初弾を外した禪院真依は、続きりボルバーの引き金を引く。



どこでも良いから当たれ、と漠然に思いながら、逃げる悠仁を片手で狙う禪院真依。

更にそこに追い打ちをかけるのは、どこからともなく飛来してくる一本の矢。しかし、挙動がおかしい。あらぬ方向に飛んでいったと思えば、空中で屈折し、真つ直ぐに悠仁の脳天を狙ってくるではないか。

「うおおお危ねエ白羽取りイイイイ!」

だが、流石は悠仁の動体視力。ギリギリで頭への直撃を首で避けつつも、しつかりと矢を両手で押さえていた。更には悠仁の動体視力が、その鏃に見知らぬ人の血液の存在を訴えかけた。

——それがどうなるってんだよ!

銃弾を避けつつ、矢の勢いを殺せない事に文句を言いながら、どうにか真依の死角へと到着する——

「オイオイ、ちよつと待ってってッ!」

「シン・陰流《簡易領域》 抜刀!!」

——が、そこにいるのは、刀を構えた三輪霞。

シン・陰流《簡易領域》 抜刀。術式を持たない呪術師に残された、領域展開に対する技術。領域の必中効果を無効化する、たった一つの冴えたやり方。一門相伝の技術であり、門下生しかその秘匿を享受する事を許されない、弱者の領域。

それを応用し発展させたのが「抜刀」。半径2.21メートルの円の中に入った者や物をフルオートで迎撃する技。《簡易領域》において、この「抜刀」よりも速い技は存在しない。

——だが、虎杖悠仁の反応速度は「抜刀」を凌駕していた。

霞の「円」に入った感覚はない。そんなものを感じられるほど、まだ悠仁は呪力の機微に聴くない。だが人の気配がした。だから避けた。ただそれだけの事。三輪霞が誇る最速の横一闪を、悠仁は後方宙返りによって危なげなく回避する。

（嘘っ!? 躊躇ったとはいえ「抜刀」が掠りもしない!? 何て反射神経なのっ、ヘコむう!）

「あいでっ!」

だが、悠仁の悪運もここまでだった。矢の勢いは留まるところを知らず、悠仁は大木に勢いよく背中を打ち付けられる羽目になってしまったのだ。それでも尚矢の勢いが止まらない。

やむを得ず、脳天を貫こうとしている鏃を首だけで避け、木に突き立てさせる。

——が。そのすぐ横で究極メカ丸が、掌にある大型呪力放出大砲式機構ウルトラキャノン《大祓砲》をいつでも発射可能にしていた。更にはそのすぐ上空で西宮桃が佇み、そして続々と、葵を除く京都高専生が集まって来たようだ。

悠仁に悪寒走る。

「(あつるえー……これ、俺殺されそうになつてる的な感じのパティーンのやつじゃね? っつて、いやじゃあえつちよやつべっ——)」

ちよっ——ちよおつとタンマアアアツ!!」

——だが、大声を出して両手を広げる事で、悠仁は一旦降伏のサインを出す。その誠意が伝わったのか、ほんの少しだけ、ほんのちよっぴりだけ、京都校の生徒の戦意を削ぐ事に何とか成功したようだった。

危なかった。あのままビームを打たれ喰らつていけば、いくら頑丈な悠仁とはいえ、普通に死ぬ。それは嫌だ。蓮に何も返せていない以上、まだ己は死ぬわけにはいかない。恥知らずと思われても良いと、悠仁は命乞いに必死だった。

「いやいやちよつと待つてくれよ! 俺アンタらに何かした!?! 確かに京都の学長に出すための、ちよつとお高いお菓子こつそり食べちゃったけども!」

「何、それは本当か!?!」

「うっそぴよん☆」

「……………」

ミルキーのペコちゃんのように舌を出して冗談めかしく悠仁は宣う。皆ちよつとイラつとした。怒りに声を震えさせながら、憲紀は悠仁へと問う。

「……余裕そうだな？ 虎杖悠仁」

「そりやまーね。割とこーゆー人数不利な死線は通つて来てるよ（中坊の時のヤンキー相手だけど……）。でも流石に銃突きつけられたのは初めてだけでもな」

（……何、こいつ。自分が不利な状況だつてのが分かつてないの？）

冷や汗を垂らしながら、悠仁は無い頭をフル回転して考察を張り巡らせる。座学の成績こそあまり芳しく無いが、戦闘において機転を働かせる事は得意だ。

故にこそ、余裕の笑顔を絶やしてはならない。それは己の不利を予見させ、京都生側に逆に自信を持たせる事態を引き寄せるから。

そうして生まれたわずかな時間、悠仁の前頭葉は、動揺を引き出す一手を思い付くことに成功した。

「その平安時代の術式、血液操作でしょ？」

「——っ」

「おつ当たりい。鏃に血い付いてたし、変な挙動するしで怪しき満点だったんだよね〜」  
そう言いながら、悠仁は指差し確認の後指を鳴らした。対照的に、憲紀は苦悶の表情を一瞬ちらつかせてしまった——それが命取り足り得ることを知っていながら。

呪術師にとって、『術式の開示』という縛りは、相手が『己の術式を完璧には理解していない事』を前提とする縛りだ。そしてそれは、よほど自身の腕に自信がある者、短期

決戦を臨む者に有利に働く効果を持つ。

ただし、『術式の開示』を行った上で敵を取り逃してしまった場合や、あるいは己の術式が大きく広まってしまった場合、対策されてしまえば、縛りによるブーストがあった所でジリ貧になるのは確定事項。しかも、縛りとしてあまり効果を発揮出来なくなるという点も、デメリットとなってしまう。

この瞬間、加茂憲紀は虎杖悠仁に対するアドバンテージを失ってしまったのだ。

(くそ、しまった。反応が顔に出た……！)

「で、リボルバーの女の子が……銃弾に特殊な術式が付与されてるか、弾数をすり替え出来るのどっちかかな。まあ何にせよ、銃撃メインって感じ。」

刀の長髪の人は、見た感じと先生からの授業とを照らし合わせると……『簡易領域』使いつばいね。……まあ『簡易領域』が何なのかは知らんけど」

(見抜かれてる……見た目アホっぽいのに！これがギャップ萌え!?言いたいだけ)

「箒の魔女っ子は、浮遊の術式で箒は仕込み刀のパターンか、箒自体に術式を付与してるかのどっちかで間違いなさそう。魔女宅好きなん？」

「嫌いじゃないけど、私ナウシカの方が好き」

「おつ奇遇。可愛いよな、テト。俺の方は、あー、強いて言うならカリオストロなんだけどさ。」

んで、ロボットの人？ は……見るからに手からビームとか出そうな見た目してるよな。アイアンマン意識した？ かつけーよな」

「分かってくれるか。まア、この体のモデルは別にいるがナ」

「男の子にロボット嫌いな奴はいねーからな、理解<sup>わか</sup>るよ。」

東堂つて奴は、まだちよつと分かんねーな……けどゴリゴリの近接タイプなのは間違いないのは分かるわ。近付かないことを意識してりや大丈夫なんだろうけど……（でも俺も近接タイプなんだよなあ……）……ま、ゆーて気掛かりはそれくらいだろ。

……つてな感じなんだけど、どよ？ 俺の推理は当たってるかな、平安時代くん」

「答える義理は無い」

「おーこわ」

そう言いながら、悠仁はニヒルに嗤って続ける。

「つまり、アンタらの敗因は三つ！

一つ、武器見せすぎ！ 二つ、切り札的存在である東堂との意思疎通が出来てない！」  
さて、その姿を見ていた後方彼氏ツラの葵は、逆に——否、更に悠仁に入れ込んでいく。

己ほどでは無いにしろ、凄まじい頭の回転と機転の連続。先ずはちよつとした冗談により、場を和ませる事で戦闘意欲をほぐす。そこから徐々に不安を煽るような展開に持

ち込み、最終的に全てをひっくり返して逆転する……『不確定要素』として満点の立ち回り方だった。

磨けば光る原石。

問題は、磨き方を知らない事だけ。

だからこそ、己という研磨剤で磨き上げたいと思うのだ。

「そして三つ、俺を嘗めすぎ。有象無象の蹴散らし方は、中学で履修済みなんだわ。

足りねえんだよ。あと百人は連れて来いや!!」

さて、この姉妹校交流会に先んじて、悠仁は理論的に書かれた空手道の参考書《K A R A T E 〱弱いキミはもういない〱》を運から手渡されているのだが、総ページ数約二百五十ページの読了にはなんと五日も掛かった。悠仁にとってみれば、まず頭が弱い人にも優しくあれと言いたくなるほどのページ数であった。

だが五日も掛けた甲斐はあった。悠仁はこの本から、力の効率的な伝え方を、最適な技の形を、そして状況や場面における最適な戦いの型を知った。

だからこそ、悠仁が選んだのは、無形。

四方八方を障害物に囲まれ、ましてや同じ地に立つ者は三輪霞以外には居ない。今、空手の知識を活かすには場所が悪すぎる。

だからそれでいい。むしろ、それがいい。

悠仁は空手家としては初心者未満、技だけを知っているような素人だ。

だが身体能力においては、いかなる空手家をも上回っている。呪力なしで、13ポンドのボウリング玉ほどの重さがある鉄球を、ピッチャー投げで遠投30メートルサッカーゴールに阻まれたためもつと伸びる可能性大に到達出来るほどの筋力と握力、何より腕を振るうスピード。そしてその外見からは想像できない八〇キロの体重（身長一七三センチかつ体脂肪率は一桁）が、悠仁の身体にはある。

それさえあれば、威勢の良い脅迫には事足りる。

なぜならば。

握力×体重×スピード＝破壊力なのだから。

（お前らがどーせ誰かからの命令に従ってんのは想像付くよ。

けどさ、それでもさ。最終的にや、俺を殺そうとしてんだろ？ そうするって、腹は

括ったんだろ？）

——なら、殺し返されても文句は言えねエだろ？

なんて事はない、ただの拳。空手における、小指側で叩きつける技・鉄槌。それを呪力抜きで、丁度背後にあった半径一メートルはあろう大木にぶつけ——へし折った。

『!!』

轟。後、バギバギバギバギ!! という衝撃による空気振動。中腹からその大木を拳一



つで薙ぎ倒す——呪力の一切も無く。呪力ありきならばまだしも、そんな芸当は東堂葵でも出来るかどうか。兎角、ただの人間にはオーバースペック過ぎる事は目に見えていた。

その瞳が、その笑顔が、まるで狂気に満ちたものに見える。

場数を踏んでいない、準一級よりも階級が下の術師達は、目の前の光景に恐怖心を抱く。メカ丸は、やはりあの時に意見を述べておけば良かったと若干後悔した。

「お前からキア——俺がバケモンつて認識で殺しに来たんだろうけど、予想が大当たりで良かったな？」

「っ……………」

「規格外雨宮蓮らは、虎杖悠仁を『化物』ではないと……………ただの人間だと宣う。そりやそうだな。なぜなら彼らこそ真の『化物』、羅刹の類だ。なるほど、であれば宿儺の器であるだけの虎杖悠仁には、彼ら羅刹からすれば斯様な評価が適しかろう。

だが虎杖悠仁は、己が『化物』と呼ばれることに、今や感謝すらしていた。

剥き出しの本性、鋭利に研がれゆくこの心が——『化物』が顕在化していく。

宿儺の器として覚醒してから借りている、返す予定の無い赫い呪力が。

豪炎のように、紅蓮のように。

悠仁の拳に覆い被さっていく——。

そこにいた者は皆 悠仁の背後に

双頭の羅刹を 垣間見た

「ほらどうしたよ、ケツ振りながら逃げ回れよウサギども。

でねエと——怖い虎さんに喰われっぞオ?!

彼らは……今、虎杖悠仁をただの化物としか思えなかった。  
化物未満

京都校の面々が、獅子に対する脱兎と成るまで、一秒も要らなかった。脱兎を追うつもりのない悠仁は、静寂に包まれた森で一つ大きく溜息を吐く。そっちが最初に怖がらせて来たんだぞう、このやろう、と思いつつながら。

人を傷つけずに勝利する事が出来るというのが、『化物』という言葉の良い所だと分かっていた悠仁の一幕。しかも自分の中には宿儻がいるのだ。これほど奴の存在に感謝した事も、そして今後する事もない。

普段ならこうはいかないが、今はぐーすか寝ているので、蓋をほんの少し開けただけでは宿儻に体に乗っ取られるような事は無かった。

（ふー。意識して怖い人演じるって、なかなかむずいな。BLACK LAGOON 読

んでて良かったわ。……まあ、宿讎の気配をほんのちよびつと浴びせたつてのもあるんだろーけど。つーかそれが一番の理由だろうけど。

でも……怖がられんのか、やっぱへこむなあ)

複雑な心境を抱えながら、しかし確かに聞こえた一人分の足音を聞き逃さなかった。

悠仁の取つた脅しには、ただ一つ……己と同等以上の『化物』や『規格外』には通じないという難点があった。東堂葵も、漏れなくその一人であった。

「見事なブラフだった、マイフレンド悠仁」

「それ売れない芸人っぽいから止めて?」

一級術師は伊達ではない。東堂葵のメンタルは、悠仁の脅迫では揺るがせない。――

乙骨憂太、五条悟……そして、両宮蓮のそれで無ければ。拍手をしながら、葵は更に続ける。

「さあ、続けようマイフレンド」

「おうよ」

――中断されたラウンドの続きを。体はまだ、闘争と競争を求めている……!

互いに互いの構えを持ち、先手を取つたのは悠仁であった。幼少の頃、祖父からちよつとだけ習つた空手に、本から得た知識が合わさる。左拳を前に、右拳は相手の正中線を狙えるように。踵を落とさず、足のバネは準備完了。だが、この構えに流派など

ない。腰を落としたやや前傾の姿勢は、空手の姿勢としては正しくないからだ。

だがそれでいい。術師として先輩である葵相手に、付け焼き刃の空手理論は通じない。実戦の年季が違うのだから当然だ。

だからこそ、喧嘩空手という、悠仁は新たに謂わゆる虎杖流を即席で作り上げた。若干古武術の技術も合わさっているが、細えことはいいんだよと割り切り——そして、懐に一気に踏み込む。

腰を入れる拳には時間が要る。軽くジャブをレバーに向けて三打。右左右の超速攻——だがこれを葵、半身と悠仁の拳を逸らし一番力が入る三打目だけを避け、その回転のまま後方回し蹴り。頭部を狙った踵はしかし、悠仁も、拳を押さえられた勢いを利用した即宙により難なく回避。

片手を地に突きそこからバク宙を二連でかます悠仁だが、葵がそれをただ見ているだけなはずもない。悠仁の着地と同時に、丸太のような剛脚によるドロップキックを見舞う。成人男性ですらまともに喰らえば死の可能性すら有り得るそれを、悠仁はその足首を右脇に抱える事で凌ぐ。だがそれだけでは終わらない。

「ぬうつ」

「むんぬおりゃあ!!」

更にそこから不安定なジャイアントスイングをも成立させるのが悠仁の規格外な所

だ。一回転、二回転の後手を離し、狙っていた付近の楠で頭をカチ割ってやろうと考えていたのだが、そうは問屋が卸さない。何と葵はその楠を天井に手を合わせ、そこから重力を無視して悠仁の腑を狙い槍と化す。

これはさすがに拙いと思つたか、悠仁は腕を交差させてその足槍を防ぎ——切れない！！

「は——ぐ、うううっ!？」

吹っ飛ばされた!! 意識が体から消えそうになるのを必死で堪えながら、分析をどうにか完了する——が、それを考えたところで、悠仁とて吹っ飛び続ける己の体をどうすることも出来ない。地へ足が突かないまま、悠仁は木々を薙ぎ倒す一本の釘に成り下がった。

楠を貫通する度に酸素が抜けていく。受け身という名の磔となったのは、楠を三本は環境破壊してからだっただろう。どうにか立て直そうと、横隔膜に無理やり命令を下したところで——悠仁は反射的にその場に蹲った。ベギヤアツ!! という嫌な音を立てて、悠仁の頭頂部を今度は大鉈が通り過ぎる。

ずずうん、という大木が倒れる際の地鳴りが高専に響き、そこから一秒も経たず退避しながら振り向くと、成程、先の鉈の正体は、東堂葵の剛脚であった。

フィジカルでもスピードでも、己は東堂葵には負けていない。そのはずなのに、なぜ

こども機敏に、かつ豪快に、彼奴は動けるのだ……そう思った矢先の事であった。「ちつがああああああうツツツ!!」

——地鳴りよりも大きな声で、葵は悠仁の実力へと怒るのだった。

7.

西宮桃の場合。

(何アレ……)

西宮桃は愛用の箒を繰りながら、虎杖悠仁の異常性に慄いていた。

ヤバイ。

そうとしか言いようがなかった。

(聞いてた話と全然違うじゃん！ 強いじゃん！ 話が通じる東堂くんじゃん！ 可愛いくない、可愛くない！)

一目見て理解する、遠い存在。己がいくら研鑽を積もうが鍛錬をこなそうがいかなる修行に耐えようが、「まるで意味がない」という一言で一蹴してしまえる生き物。

同じ世界にいながら、まるで別次元からやってきたような。そんな怪物。

仮にもし、寿命を勘定に入れない事を条件に、西宮桃が必ずその“域”に達する事が出来たとしても。

その「域」に達するのに、己は何百年掛かるのだろうか——そう思わせてしまえる者の、その一片を垣間見ただけ。それだけで、充分に諦める要因足り得ると思わせられた。時間にして一分と経たない内に、相当な距離を稼げただろうか。

少なくとも、虎杖悠仁がこちらを追ってくる気配はないと安堵し、そう言えば今は姉妹校交流会中だった事を思い出して、本来の自分の役目である偵察行為を開始する。

「はあ……でもなあ」

だが、ふとした瞬間に思い出してしまう。

次、アレに会った時。果たして自分は、真つ直ぐに立つて彼の目を見返す事が出来るだろうか、と。

怯え。全ての生命が持つ生存本能。西宮桃は、コンプレックスとする低身長が故に、『嘗められては終わりだ』という怯えがあった。だから、左耳にピアスを二個開けたし、チョーカーだって付けている。

一見ちびっ子だが、よく見ると一筋縄ではいかない女。まずはそれを目指したのだ。嘗められないように。怯えないように。

だが先の虎杖悠仁の反応で、己は一体どんな感情を抱いた？

虎杖悠仁は敵だ。宿讎の器という呪いだ。だから嘗めさせないように、皆のサポートをしたはずだった。殺せる——その一歩手前まで追い詰めたはずだった。それがいつ

の間にか懐柔されて、絆されて……ひっくり返された。

そして、彼奴の『肚の底』の一部と見えて……。

「……」

あの時、私は……。

『殺さないで』と、思ったのか？

「ツ……………ほんとに……………可愛くない」

果たして、それは誰に向けて発した言葉か。

言の葉は紡がねば伝わらない。だが、伝える相手がいなければ元も子もない。もはや誰に告げたなど、言うのは無粋というもの。

長年付き添った箒の柄を握り締める。強く……硬く。でも、ただ掌が痛いだけで、苛立ちは増すばかり。

情けない。己が、全く情けない。二級術師は名ばかりか。ただでさえ、自分一人で一杯なのに。こんな自分では、親友のしがらみは剥がせない。思い切り、一度鼻を齧る。がんばれ、私。今日も可愛い。

そうやって、いつものように己を奮い立たせ——

「キエエエエエツ!!」

「えっ——きやああっ!？」



見事に空回りして、文字通り箒ごと空回ってしまった。

墜落——体の痺れ——衝撃。この現象が当てはまるのは、おそらく伏黒恵が有する《十種影技術》の【鶴】。【鶴】の呪力の特性である『雷』……それを伴う突撃に先程直撃してしまったのだろう。京都側の偵察力を潰しに来たのだ——そう思った頃にはもう遅い。華奢な桃の体は高度60メートル地点から落下し、地面へと不時着し、肉体が爆発四散した。辺りには西宮桃だったものが散りばめられる——

「いつてて……もう、踏んだり蹴ったりっ！」

——なんてグロテスクな状況になるにはまだ早い。【鶴】の全力の雷撃は、ジョーカーとなつた蓮を苦しめるのだ。流石に交流会に死人を出すわけにはいかないという、恵の配慮が<sup>手加減</sup>滲み出していた。さすが恵、イケメン。

しかも体当たり自体は【鶴】の思考だ。桃が真下にあつた檜の群れの一本に引つ掛かるように計算し尽くされている。さすが【鶴】、イケ式神。

——だが、後の事は恵も【鶴】も知つた事ではない。

「にくしくみくやくちやくくん♡」

更に追い討ちを嚇けるように……悪魔が二匹。パンダ系悪魔、金槌系悪魔が召喚された。毎度お馴染みパンダ先輩と、女の子がしてはいけない笑顔をしている釘崎野薔薇である。

ターゲットだったはずの虎杖悠仁は確かに怖かった。

「あくそくびくまくしよおおおおおおお!?」

けれども、コイツらも別のベクトルで怖い。

箒を握る手がふるふる震える。ぼくわるいスライムじゃないよ、とでも言えば見逃してくれるだろうか。だが、そんなのはちよっぴりだけ残ったちっぴけな矜持が許さなかった。桃も野薔薇と同じく、友達思いの優しい少女なのだが……

(……もうヤダあ……)

桃は涙目ながら、そう思ってしまう事を、今だけは許して欲しかった。

8.

加茂憲紀の場合。

(見誤ったのか、私が)

完璧ではないとは言え、順調ではあつたはずだ。一度は死人として生を終えた、術師としても若く青い存在だったはずだ。生き延び、もはやその肉体が呪霊のそれと遜色ないほどに特異性を持ち合わせた、たかが人語を理解する『呪い』のはずだった。

なのに。

何故、今、自分は森を駆けているんだ。

何故。——何故!!

(今、任務を放棄して逃亡しているこの状況に!!)

何故私は今、安堵しているんだ!!)

心では納得したくない事実には、やがて憲紀は足を止めてしまった。

いつの間にか、弓を握るその手から、よりもよつて己の爪で、大切な己の血が流れているのにも気が付かずに。

加茂憲紀は、呪術界の御三家の内の一家《加茂家》の表向きは嫡男であり、次期当主を約束された人物である。秩序と血統を重んじる家系であり、その加茂家次期当主として最低条件の『相伝の術式を引き継いだ男児』である、唯一無二の存在なのだ。

そして虎杖悠仁の暗殺は、加茂家嫡男として、呪術界の秩序を代表する者として、遂に行せねばならない使命。下された死刑判決を捻じ曲げたという前例があつてはならない。それがいかに残酷な審判であれども。

加茂家は、常に中立でなくてはならないのだ。例えそれが身内でも。例えそれが、妾の母親でも。

戻ろう。葵が彼奴と戦っているだろう。暗殺は容易い。メカ丸にも連絡を入れれば、次は、次こそは殺せる。——そう思つた矢先であつた。

「ど——もッ」

「……ガラが悪いね、伏黒くん」

黒い【玉犬】に先導されながら、ポケットに手を突っ込み、誠実な普段の彼からは想像も出来ないような声音で挨拶をする伏黒恵が茂みから現れた。その人相には闇が掛かっているように見える。不機嫌さを隠そうともせず、いつもより低い声で恵は憲紀に問う。

「加茂さん、アンタら——悠仁殺す気でしょ」

その恵の問いを聞いて、憲紀は嘲笑うように返答する。狐目の憲紀には似つかわしくない狸の真似事。

しかし狸は、誰にも己の肚の裡を明かさぬからこそ狸なのだ。憲紀はやはり人間ではない。恵にはすぐに見破られてしまう。

「殺す理由が無いね」

「ありまくりでしょ。上層部も、上層部にズブズブの加茂家も」

「さてさて。もし私が『はいそうです』と言った所で、キミには一切関係は無いんじゃないかい？」

「それこそ、ありまくるんですよ、加茂さん」

それを聞いて、憲紀は思った。——ああ、今年の一年は豊作だ。それが喜ばしいかどうかは、さておいて……と。

恵が練る呪力が、憲紀の肌を貫く。まるで全身を縫い針で突き刺されたかのような宿讎の器ほどの迫力はない。だが、憲紀にとって充分に脅威足り得る。

いつの間にか、この後輩は己と並ぶ存在になっていた。追い抜かれるのも、もう時間の問題だ。ただ、今だけは、先輩としての矜持を示さねばなるまい。憲紀は左手の弓に右手で矢を番えた。

だが恵にとって、先輩だの後輩だの、術師だの呪いだの、もうどうでもよかった。

「アイツは俺の友達です——だから」

この交流会が始まってから、恵は終始不機嫌だった。もう既に呪術師としての価値観が薄まっている恵にとって、呪術の総本山にて活動する凝り固まった観念を持つ京都校の連中の横暴。恵の堪忍袋は、とっくに限界だった。

どいつもこいつも、悠仁を知ったような口で悪だ呪いだと言いやがる……。

「殺すぞテメエ」

ウンザリなんだよ、良い加減。

9.

三輪霞の場合。

「あのお、虎杖さんって凄く迫力ありますよね」

「あん？　そうかあ？　はちやめちや元気なヤツつて印象しかねえよ、私は。今んとこ」  
「えーっ、嘘でしょ!?　本当に怖かったんですから!」

さて、二人は雑談を交わしながら、浅瀬の川で対峙する。一人は呪具使いの禪院真希、一人は簡易領域使いの三輪霞であった。

真希の薙刀は、人を傷付ける事が無いよう、刃を布でぐるぐる巻きにしてあった。霞の刀はどうする事もできないので、寸止めですりかすしかない。

「ふーん、アイツがね」

「あの一、その件について、薄々勘付いていると思うんですけど……」  
「悠仁の暗殺についてだろ?」

「はい……」

鼻を鳴らす真希には、申し訳が立たない。そう思いながらも、霞は己の心中を吐露する事にした。

「言い訳にしかありませんけど……私、最初から虎杖さんを殺したいとは思ってないです。私は皆みたい、生まれた頃から呪術師だったりとかじゃないので、術師としての心構えだったりとかっていうのが、まだ未熟で……だから、虎杖さんにだって、宿儺の器になってしまった理由があるはずだって思うと——躊躇が前に出てました。」

私が刀を握るのは、人を殺すためじゃない。呪いを祓って、他の人を活かすため

……つて、思い出したんです」

「ふーん……そう言うお前も、並々ならぬ事情があるみてーだな？」

「まあ、生々しい話ですけどね。」

「お金欲しいんですよ。ウチ貧乏なんで。弟も二人いますし」

「タフだなあ、お前。お前みたいなヤツ、好ききだぜ。真依も見習えつてえの」

「あはは……」

真希は笑いながら、霞の発言について思うところがあつた……否、共感していた。

この姉妹校交流会は、ただの交流会ではない（楽巖寺嘉伸の陰謀はともかくとして）。

二級以上の術師が高専生徒を昇級させるに相応しいかを見定める、オーデイションの場も兼ねているというのが、この交流会の裏の目的だ。尤も裏の目的とは言っても、隠すつもりは微塵もないのだが。

呪術界は基本的に縦社会で、横——つまり、同期との繋がりが限りなく薄い（そも、術師の母数が少ないのだから当然なのだが）。入学生が一学年に一人しかいない状況も少なくない。

だからこそ、上昇志向のある術師にとって、昇級審査は貴重なチャンスだ。学生術師は、まだ磨かれていない宝石の原石……交流会での立ち回りを機に、ベテラン達の目に留まらせる事が出来れば、それを縁に昇級に繋がる可能性がぐんと上がる。

真希も霞も、それによる昇級を狙っているのだ。

「なあアンタ、名前は？」

「三輪霞です、三級やつてます！」

「どーも。私は禪院真希。真依の姉ちゃんだ。真依、元気してるか？」

「ええ！ 私、迷惑かけてばかりなのに、仲良くしていただいて……本当に有難いです！」

「……お前、良いヤツ過ぎないか？」

「えええ!? 照れるなあ……」

えへへ、と言いながら頬を赤らめる霞。

「でも、勝ち譲りません！」

「そりゃ私もだ」

譲れない思いを刃に込めて、真希は薙刀を、霞は刀を正眼に構える――。

10.

そして、吉野順平の場合。

「さて、と――」

腰に手を当てて、一人ポツンと佇むのは、この高専において一番の新参者・吉野順平。



格好を付けながら、順平は直面したくない現実から必死に意識を振り解こうとしていた。格好が付かない状況からは逃げられず、遂に順平は一つの事実に到達した。

「これ僕、完全に迷子だよな」

なんとも言えない状況に、しかし順平はそんなにパニックにはならず、頭の中は冴え切っている。冷静に客観視できる程には、順平の心は落ち着いていた。

事は、伏黒恵が虎杖悠仁暗殺の陰謀を文字通り嗅ぎつけた事に始まる。

おそらくパンダ先輩も、悠仁の周囲に京都校生が集まっている緊急事態に気が付いているであろう事を、同行していた禪院真希と順平に伝えつつ、しかし唐突に悠仁から離れていく五つの反応を追うために、「鶴」とやらを展開したのだった。

ここまでは良かったのだ。だがその先が問題であった。途中で別れ、恵から指示された場所に全速力で移動していたのだが、都会育ちには不慣れな地形かつ、行っても行っても同じような風景ばかりが続く事も相俟って、順平は完全に自分の位置が分からなくなってしまうのだ。

「参ったなあ。誰か——出来れば呪霊狩つてる棘先輩に合流出来たら良いんだけど……電話出るかな。ああいやでも、コミュニケーションどうすれば……」

考えれば考えるほどドツボに嵌る。しどろもどろしている間にも、大事な試合時間はどんどん過ぎていく。

「僕のデビュー戦、前途多難だなあ……はあ」

悩むのを一旦やめて、取り敢えず自分も自分で呪霊を探す旅に出よう。そう思った矢先の事であった。

ドンッ、という衝撃を肩に受けて少し蹠<sup>よ</sup>跟<sup>ろ</sup>めく。見ると、ああ綺麗な人だなあ、という印象を受けるショートカットの美人が、こちらを睨<sup>にら</sup>んでいた。見覚えなんてあるわけもなく、身長はほんの少しだけ其方が高いか、と思つた所だった。

「あつ、すみません」

「チツ、ちゃんと前見てなさいよ。危ないでしょ」

（えっコワツ、ガラ悪う……）

反射的に謝つた順平にもたらされたのは、舌打ちと罵声であった。

ひえっ、と怖気付く順平。それを気にせず気に病まず、美人さんは向こうへ振り返りそのまま歩き去つていくようだった。

何だろうなあ。呪術界に入門してから出会つた女の子は、全員気が強い気がするなあと、順平が思つた――

「ん？」

その刹那、何か違和感を覚える男女二人。ふと振り向き、見るとそこにいたのは、互いに見覚えの無い面持ちをした人だった。――そう、東京校高専生よりも、もつと見覚

えが無い。

目と目が合う瞬間、二人は盛大なミスに気が付いた。

「あつ」

つまりこの状況は、端的に云うと――

♪ある日 森の中 敵さんに 出会った♪

――である。

「うつつつ………げえつ」

（ええー、そんな溜める事ある？ 傷付くなあ……）

その眉目秀麗な顔立ちからは想像したくないほど、真依は顔を嫌悪感に染めて順平を見遣る。順平はその強過ぎる視線に当てられて、かつて高校でオタクだ何だと罵られた経験の思い出し、完全に萎縮してしまった。

「はあ………つたく、ダルいんですけど。ねえ、アンタ降参してくれない？ 私、あんまり戦いたくないのよね。痛いのがだし」

「（降参『する』んじやなくて『させる』なんだ……）

あー、えつと、それはできないです。僕、一級術師にならないといけないんで」

「………はあ。アンタもそういうタチってワケね」

「？ ええ、まあ」

真依には思う所があつたようだが、順平には預かり知らぬ所。呪力を練りつつ、順平はいつでも式神を召喚できるように掌印を組み、ゴングが鳴る――

「じゃあ、お相手よろしくお願ひします！」

「私は別にしたくないんですケド」

「いえつ、僕がしたいんです！」

「キモッ」

――その瞬間、真依のその一言にK・O・してしまった。

中学の頃、意中の相手にそう言われたトラウマが蘇り、横になってガチ泣きを始める順平。

誰が咎められようか。好きな人から嫌われていたという事実は、心にあまりにも深い傷を残す。そしてそれは未来永劫、消える事のない傷痕となりトラウマとなる。世を探せば、意中の君の罵声に興奮する変態もいるのだろうが、生憎残念ながら順平はそんなアブノーマルな性癖は持ち合わせていない。

順平は、男として完全に自信を失っていた弱者側の人間だったのだ。

そうとは知らないナチュラルボーン煽りストの真依からの罵声。女の人から話しかけられる機会もめつきり減つてからの久々の会話がこれだ。

もはや、勝敗は決したようなものだった。

「ううっ、グスツ、えぐっ、ううう……」

（えっ何コイツ、メンタルクツソ弱っ）

「うっ、おろろろろ……」

「うわうっわッ、きいっつたなっ?! 何してんのよアンタ……ッあーもう! 面倒くさいわね!」

まさか嘔吐までするとは思っても見なかった真依は、遂には搾りかす程度の罪悪感に駆られ、順平の背中をさすってあげている。

順平の顔を見ると、鼻水と吐瀉物と涙に塗れていて、もはや『酷い』というレベルでは言い表せないほどにぐっちやぐちやになつていた。流石の真依も、この顔面には自身の顔色も青くなつたようだ。貰いゲロしないか、真依はそれだけが気掛かりだった。

「ず、ずびばせん……ちよっど、ドラウマ、が……」

「あー……うん……私も、ちよっと言い過ぎたかも」

「いえ、メンタルよわい僕がわるいので……うっぷ」

この時、二人は思った。

どうしてこうなつた……と。

「あくらら、なくにしてんの順平、あつはつはつは！」

「止めなさいよ趣味悪いわね。……にしても、真依が誰かに優しくするなんて本当珍しい。しかも男の子に」

「あつはつは、いやあ青春だねえ。まあ、初陣でおもら——」

「それ以上言うとか口を縫い合わすわよ」

「あはは、ムリムリ〜！ 歌姫弱いもおくん♡」

（ブツ殺してえ……無理だけどさあ!! こんのクソ五条!!）

都立高専視聴覚室にて。軽い面持ちで言の葉を紡いだのは、我らが最強・五条悟。ゴムバンドの目隠しで蒸れて汗疹とかになれば良いのにこの黙つてればイケメンめと、今日も庵歌姫は祈っている。返答したのも、歌姫本人であるのだが。

「おや、動きがあつたみたいだね」

さて、そんな二人の声とは別の、落ち着いた雰囲気女性の声が聞こえてきた。見ると、悟の後方座席に座っていた者の声のようだった。

第一印象として、『なんだコイツ』と、見た者は皆そう思うだろう。何せその美しい銀髪を、前髪と後髪で三つ編みにしているのだから。

三つ編みのお下げならまだ分かる。ツインテールの三つ編みも、学級委員長ほくて最高だろう。だがなぜ、前髪だけをちやめちやに伸ばして三つ編みを作っているのだ

と、見る者皆に思わせる。豊満な胸元まである銀髪で、彼女の顔は真横からしか窺えなかった。

まあそんな奇抜なヘアスタイルには決して似つかわしくない——というか似つかわしい人を見てみたい——美貌の持ち主であるのだが。

名を冥冥<sup>めいめい</sup>。一級術師の実力者であり、悟や硝子、歌姫が学生時代の時から付き合っている、数少ない人物でもある。そして、三度の飯より金が好きな守銭奴であった。

可愛く言うと、お金に関して彼女はけちんぼなのだ。

もし結婚して子供が産まれても、彼女はデュエマのパックなんて絶対に買ってくれない系お母さんになるのだろう。

さて、視聴覚室の六つのモニターに映るのは、両高専の生徒達の姿。戦い、話し、そしてなぜか相手を慰めている姿が、リアルタイムで映っている。

この所業を成し遂げている者こそ、何を隠そう冥冥その人であるのだ。

そのモニターの一つに、禪院真希と三輪霞が戦っている場面が映っている。良く見ると、薙刀の柄を折り投擲する事で霞の初撃を封じ、合気道の要領で、なんと霞の愛刀を奪い取ったのだ。これには悟もおお、と感嘆した。

「フフ、中々面白い子じゃないか。さつさと二級にでも上げてやれば良いのに」

「僕もそう思ってるんだけどさ、上……特に禪院家が邪魔してるっほくてねエ。

「くくるたい 軀倶留隊のヤツらよりも動けるのにさ」

「金の関わらないしがらみは理解出来ないね」

「え〜？ うつそだあ〜」

「……………フフ、さてね」

ちなみに軀倶留隊とは、術式を持たない禪院の家系の者の事であり、実力至上主義の禪院家では嘲笑される立場にある不遇な人々の集団だ。真希は高専入学以前、この軀倶留隊で稽古をしていた経歴がある。尤も、稽古などと名ばかりの、虐待に近いあまりにも惨いものであったが。

それはさておき、悟はその目隠しの裏から、ある違和感を覚えていた。

「そう言えばさ、さつきからちよいちよい悠仁の場面切れるね。《カメラ》バグってんじゃない？」

「まさか。動物は気紛れなんだよ。烏達との視界共有は、私自身目が疲れるしね」

「え〜本当かな〜？ ぶっちゃけ冥さんってどっち側？」

「どちらでもないさ。私は常に金の味方だよ」

「相変わらずの守銭奴ねエ〜？ いくら積んだんだか！」

あつはつは、と悟は主犯格である髭ジジイ・楽巖寺嘉伸の方を見て笑う。おっと、主犯格とは別の髭面強面教師・夜蛾正道学長がこちらを睨んでいる。この描写は一旦やめ



にしよう。

「それより、例の件についてだけれど——」

「いんや、金額は上げない」

「それは残念……フフ、冗談さ。特級とはいえ学生身分では、百万は簡単に出来る金額ではないしね」

「ペルソナ使いだったら尚更ね。それにしても全く、ペルソナをお金で買うだなんて、どおゆるー経済の回し方してんだか。お金で買える叛逆の魂って何？」

「さあ？」

これは雨宮蓮も明智吾郎も知らない。いや、知ろうとしないだけだ。その行き先は唯  
一ラヴェンツアだけが知っている。……いや、彼女が彼女『達』だった頃、蓮……アキ  
ラは一度だけ聞いた事があった。あったが——「知らない方が良い事もある」と返され、  
チキンハートだったあの頃のアキラはあの時心底震え上がったのを鮮明に覚えている。

「んん………何の話だ」

「あれま、起こしちゃった？」

テノールボイスがガラガラになってしまっている、満足に寝られなかったのか、不機嫌さを隠そうともしない我が主人公・雨宮蓮が起床したようだ。四ヶ月前から始まったお昼寝は、何故か三十分程度しか眠れていないような気がしてならない。

「いやね、この勝負どうなるかなあって、冥さんと話してたわけよ」

「知れた事だろ……東京校ウチが勝つよ。オレが居ようが居るまいが」

「……つぶ、あつはつぶはつぶは！ 確かにね！」

「ちよつと、それ私京都校らの前で言う？」

何を今更当然の事を、と言わんばかり。目脂を拭いながら、寝起きでピントの合わない視界をクリアリングしていく。

（なるほど、彼が……ねえ。……前は失敗したけれど、今回はどうにか誑し込められないかな。私が五条くんから止められているのは、《彼》についての情報だけだし。彼を高専から引き抜いて、光源氏というのも悪くない。憂憂には悪いけど、そうなった時は我慢してもらおう。

ああ……欲しいなあ、ペルソナ使い。彼が居れば、一体どれだけの金が入ってくるんだらう——)

舌舐めずりしたい下心を抑えて、冥冥は気付かれぬよう熱い視線を蓮に向ける。

……が、蓮は（もはや形骸化しつつあるが）怪盗であるが故に、他人からの視線に敏感だ。うなじが栗立つのを感じて背後を見れば、頬杖を突きながらこちらを見てくる冥冥に、何だこの前衛的なヘアスタイルはと場違いな感想を抱えて、真正面のモニターにすぐ視線を返した。

そして蓮も、モニターの異変に気付く。悟が気付いた事に、蓮が気付かない理由はない。というか、悠仁と順平の活躍は一瞬でも見ておきたいなあ、と思っていたが故に気付けたのが大きい。

「——ああ、そういうことか。」

「うん、そゆこと」

はあ、と蓮は一つ溜息を吐いた。

「虎杖悠仁はお前らには殺せない」

と、蓮は嘉伸に聞こえるようにわざと大きな声で言う。ニンマリと笑う悟、意味が分からない歌姫、意図を理解し顔を顰める夜蛾正道、妖艶な笑みを浮かべる冥冥、すつとぼける主犯の嘉伸。

「はてさて、どういう意味かの」

「そのふやけた禿頭でじっくり考えろ。……ふあ、あゝ」

一瞬、ほんの一瞬だけ、嘉伸の矜持が蓮に牙を剥いた。

だがそんなちっぽけな矜持に靡くほど、蓮の心は弱くない。

その程度の悪意で、オレの悪意が崩せるものか。

オレが信じる虎杖悠仁が、お前如きに殺せるものか。

オレの親友が、そう簡単に死ぬものか。

「生い先短い人生、精々励め。

じゃ、オレはもう少し寝る。お休み……」

そう嘲笑しながら、欠伸と共に蓮は毛布を再び被る。

規則正しい寝息が恨めしくなるほど、観客室に緊張が張り巡らされてしまった事に、ただ一人、悟はくつつくと笑っているのだった。

PERSONA5 in Jujutsu Kaisen

Let us start the game.

#26 VIVID VICE

## #27

嘘吐き

あんたなんか 大つ嫌い

そうやって 私も

嘘を吐く

12.

ある日森の中敵さんに出会った禪院真依は、しかし敵さんの吉野順平が有するトラウマスイッチを意図せずに押ししてしまい、介抱に明け暮れていた。

初めての介抱に戸惑う真依、吐いてスツキリつやつやするも心中は苦いままの順平。だが、感情とはやがて薄まり移ろうもの。数分も同じ事をしていけば、飽きと呆れとに塗れた溜息も、吐きたくなくなるだろうて。まして真依ならば尚更に。

「(あーあ。何かもうやる気なくなつた……元々やる気無かつたけど。もういいや。適当に済ませて切り抜けましょ)」

ねえ、もう泣き止んだ？」

「はい……落ち着いてきました」

ずびびびび、と鼻を嚙りながら答える順平。唯一目視できる左眼は涙でふやけてしま  
い、拭つても拭つても違和感は晴れない。だがそれでも、恩に対しては礼を言うのが常  
道というもの。どうか立ち上がり、順平は深々と頭を下げた。

「お見苦しいところをどうもすみません……」

「はあ。もういい？ 私行くから」

「あのつ、色々迷惑かけるので、すみません」

「良いつてば、そういうの……え？」

去ろうとした真依だったが、更に声を掛けられる。

ああもう、面倒だなあ——そう思った瞬間の事であった。

ヒユウ、と風を切る音が聞こえた。

同時、秘めていたはずの愛銃が無くなっていた。

見間違いにしかなかった。だが出来なかった。——順平の隣にいつの間にか展開され  
ていた海月の式神が、その触手を以つてして、順平の掌に真依の愛銃たるコルトパイソ  
ン357マグナムを手渡していたのだから。

「恩を仇で返すのは嫌なんですけど……すみません、これも勝負なので」

「ッ……やってくれたわね」

真依しかその場所を知り得ないシリランダまさぐを弄っても、頼もしいはずの硬さと膨らみはやはり無い。……やられた、吉野順平のあのトラウマ状態を見て、互いに完全に敵意は削がれたと、完璧に油断していた……そう思ったところで後の祭り。

だが誰が咎められようか。慟哭を通り越して嘔吐までしている者の姿を見て、一般常識を持ち合わせる人が取る行動は二つしかない。——即ち、『無視』か『介抱』だ。

そして真依は、吉野順平が『特級呪霊を退けた』事を知らない。その豪運と、退けるに至った道筋を知らない。だから真依は油断してしまったのだ——なぜなら順平の今の立場は『入学したての新米術師』なのだから。それ故に、真依の中にほんのりだが存在する、母性的なものが働いたのだろう。

……まあ、実際のところ順平の嗚咽と嘔吐は演技ではないのだが。

「すつごいや、本物の銃って初めて見た。空想と実物とじゃ重さが違うなあ……！」

あつこれ、もしかしてCITY HUNTERの冴羽？が使ってるヤツじゃ無いですか!？」

だが、それら嗚咽と嘔吐を起点として攻撃に繋がられるのではと思いついたのは、紛れもない事実だ。

現に真依の攻撃手段を封じ、王手一步手前まで流れを持つて行く事ができた。それどころか、拳銃の物色に時間を割けていられる余裕も生まれている。……いや、その行為

事態は減点対象なのだが――

「かつこいいい……い」

だつて仕方ないよね。

銃は男のロマンだもん。

(ジロジロ見てんじゃないわよこのピーーッ!!)

あーもう、こんな事に使いたくは無かつたけど……い！)

目を輝かせる順平とは裏腹に、順平の不意打ちにより真依は唯一の攻撃手段を失ってしまった事になるのだ。

真依は《構築術式》により、文字通り呪力を用いて物体を構築する事ができる。基本骨子と構成材質を解明し再現する事で、空想を現実昇華させる、浪漫溢れる術式だ。

だが現代の衰退した呪術界において、《構築術式》は『ハズレ』の部類に入る。その大きな理由は、消費呪力量の燃費があまりにも悪過ぎる事に由来するからだ。これが蓮ほどの呪力の持ち主であれば何ともなかつたが、特に鍛えていない真依のあまりにも少ない呪力総量では、日に一度だけ、銃弾程度の小さな物体しか構築出来ない。

だからこそ真依の戦闘スタイルは、呪具に依存せざるを得ない形になってしまうのだ。

切り札は、姉である禪院真希のために取っておきたかつた。いや、仮に切り札を用い



て銃を取り返したとて、此奴に勝てる可能性は——勝機は限りなく薄い。

だが、そもそも姉との対戦のためには、今使うしか道は無い……！

頭の中に浮かべるのは、散々家庭科の授業で掴み、手にし、時に刺さって痛い思いをした一本の針——ぱたつ、という音にすらならない音と共に鼻血が噴き出る。

術式の回転にかかる負荷は、真依にとって大き過ぎる代償。耐えられないワケでは無いが、目を顰めるほどには頭を痛める。文句の一つでも言つてやりたいが、そうすると集中が切れるので真依は我慢した。

やつとの事で、3センチもない細い縫い針を、右手の人差し指と中指の間に『構築』出来た。狙うはもちろん顔面、それも右目だ。

「つっー」

だが順平は、蓮と悠仁と共に切磋琢磨し合う仲だ。微々たるものではあるが確かに培った勘——即ち真依が近づく気配に、順平はそこまで鈍感ではない。目を庇い、手首の長掌筋腱に突き刺さった縫い針……そこから感じる細い痛みにも、順平は顔を顰める。

その瞬間を、真依は決して見逃さなかった。

術師として活動する気の無い真依とて、基礎的な体力や、己よりも体格の良い者への対策は練つてあるのだ。何とか順平へと近づき、更に針を深く突き立てんと両手で抑える。流石にこれは順平も弱音を吐いてしまい、右手の力は更に緩んでしまった。

これを機と見た真依は順平の右手首を思い切り捻る事で、完全に右手の握力を失わせる。呻き声を無視しCCCを決め切り、遂に己の手に頼もしい重みが戻ってくる。この間わずか五秒の出来事であった。

だが順平とて、されるがままでは終わらない。

「い、つたたた【澱月】！」

真依がその手の中にある重みに頼もしさを感じるのも束の間、さて置き順平は【澱月】の触手を、何本か真依に蔓延らせる。本格的な拘束を目的とするそれら——が、真依の呪弾六発に撃ち抜かれた。

罅が開かない——そう思い立った順平は、針を引き抜きながら真依の死角を駆け始める。幸いにもこの森林は深く、茂みも広範囲に点在している。【澱月】に何かしらを仕込ませるには十分過ぎる立地だ。

だがそれは真依とて同じ事。スピードローダーでリロードを済ませば、順平へと銃口を向ける。……が、そこには——否、どこにも順平と海月の式神の姿は見えなかった。（式神使いが一瞬で消え去るなんて、そんなの出来っこない）

だからまだ近くにいるはず。そう思いながら、真依は体勢を低くして警戒しながら、なるべく音を立てず近くにあつた——というかすぐその吉野順平の吐瀉物に塗れているクヌギの木に寄りかかる。その姿はまさしく、敵組織に潜入した女スパイのそれで

あった。

真依は、己が不利な状況に陥っている事を察していた。それは、真依のリロードに掛かった数秒間の隙に由来するものだった。

(物音を立てるな、呼吸と鼓動を最小限に……よし。)

さつき見えた海月の式神……アレの触手には『爪』があった。なら、ソイツを使つての戦い方は二通り。一つは、あの触手でこつちの行動を牽制して、本体の術式で一気に叩き込むタイプ。もう一つは、式神の『爪』が術式を持っていて、ソイツの攻撃を主体とするタイプ。

どつちでもいい。重要なのは、アイツは私が近づいた途端に式神を展開した事。という事は、アイツも海月も、接近しなければ使えない術式なんじゃない？

なら私が今すべきは索敵と、近寄せない事ね……)

一息吐きたくなるのを堪え、鼻血を拭い、真依は目と耳を凝らし始める――。

13.

「順平の術式、《毒》なものには違いないけど、それだけじゃないね」

2018年8月30日、放課後。軽くそう言うのは、普段から着ている黒一色のブルカブカなジャージの上着を脱いで長袖のシャツだけとなり、薄らと己の筋肉をアピールす

る五条悟その人。本日はサングラスを着用している。呪術高専本堂にて、三人は稽古、外野一人が回復及び解毒等のサポートできるよう待機していた。

「そつ、そつれ、つて、……うつぶ」

「れーろーん!! エチケツトー!!!」

その言葉の真意を測りかね、問おうとして嘔吐しそうになる順平に、組手の相手をしていた悠仁が叫び、すぐ横で観戦していた我らが主人公・雨宮蓮が、どこからともなくエチケツト袋を取り出し順平の口元で開く。この間わずか二秒の出来事であった。

順平の慢性的な運動不足を解消するために、順平自ら蓮を誘って稽古をつけてもらうという尊ぶべき思いは、全てビニール袋に吐き出されてしまった。

「あー大丈夫、順平?」

「だいじよばない……」

「ま、続けるね」

順平の嘔吐を無視して、悟は続ける。

曰く、順平の術式は、『毒の生成』というには少し異なるらしい。正確には『生成した毒に式神として生物の形を与える』術式。式神である【澱月】とは、順平の『毒』を共有し、抽出するための『原点の媒体』という事になる。

現在順平は、やたらめつたらに毒性成分を生成して【澱月】に溜め込ませている。そ

れらを【澱月】が体内で整頓し、必要に応じて触手の爪で抽出する、というプロセスを踏んでいる。【澱月】とは器用貧乏の式神……謂わゆる『毒の武器庫』

それ故に、武器庫としての役割の域を出ない、微量の毒しか一度に抽出出来ない【澱月】には、一点突破の破壊力を持たない。それに気付かなかった本来の歴史を辿った吉野順平は、猛毒である宿儺の指すらも難なく取り込む虎杖悠仁の耐毒性を前に敗北した。

吉野順平が、もしきちんと術師として鍛錬を積んでいたのだとしたら、斯様な結末にはならなかった。冷静に考えれば、武器庫でしかない【澱月】を攻撃に転じさせるはずもなかった。

「順平。正直言つて、キミの【澱月】じゃ悠仁の耐毒性を突破出来ない——」

この稽古でハッキリと判明した、【澱月】の弱点。

残酷にも、これだけは変わらない事実なのだ。

そして、時は戻り交流会。順平は、真依が辿り着いたクヌギの細く別れた枝に捕まり、様子を伺っていた。真依との間には凡そ十メートルはあるだろう。高所という有利を、みすみす手放す愚行はしない。

だが、順平はここに来て、真依に襲撃するのをためらっていた。

真依がりロードに掛かった数秒。それだけあれば、ある程度の静音状態のままの移動

は〔澱月〕がいれば簡単だ。物音どころか呼吸音さえも殺している現状は、作戦を考えるには充分な時間を与えていた。

(これからの行動は3パターン。①攻撃。②監視を兼ねながら待機。③逃げる。……うん、3は無しで。ただそうなると、①の実行には作戦が要るな。

風が吹いてるから、体育館みたいに睡眠ガスで眠らせるのは難しい。〔澱月〕で直接刺せばいいけど、多分無理だな。今、この人は素敵に全神経を集中させているはずだ。さつきは弾のリロードに目を向けていたから何とかなつたけど、〔澱月〕は完全に無音で動けるわけじゃないし、多分バレる。

……じゃあ、突撃しかないじゃん)

ただ、今足りないのは作戦実行に際する『決意』。己の力による『もしかしたら』に、順平は頭を悩ませていた。

(……やるしかないんだ。誰を……殺すことになってても)

今順平は、非術師の時に妄想した、『人を殺せるボタン』を思い出していた。

そしてあの時は、己を嫌う人間には躊躇い無く押すが、己が嫌う人間には押せないと思っていたのだ。この考えは今も変わっていない。己が嫌いでも好きでもない人になど押せるはずもない。

順平は、目の前の禪院真依を、嫌いにはなれなかった。嫌いになりたくなかった。む

しろ、自分を介抱してくれた恩人を傷付けたいなんて誰が思うだろう。傷付けたくない。

でも、勝たなければこちらの命に関わる。

倒さなければ勝てない。

でも、この善人を襲いたくない。

でも、の羅列がループして、ようやく一つの結論に辿り着く。

……でも、そんな世迷言を自由に吐けるほど、僕は強くない。

(この人にも何か事情があるのかもしれない。

でも、僕だつて譲れないものはある……!)

吉野順平という男は生粋の呪術師ではない。順平のこの考え方は、一般人から見れば心優しい青年に見えても、呪術師から見れば軟弱者でしかない。

故に、一瞬だけ強く目を瞑る。思い出せ。弱気になった時、不安でどうしようもない時、それだけで心を奮い立たせるたった一言を。

諦めるのか？

(いや、嫌だ！ 諦めたくない!!)

——信頼を裏切るくらいなら、いつそこで死んじまえ!!)

目を見開き、歯を食い縛り、掌印を組み、腹を括り、丹田から力の奔流を全身に受け流していく。

軟弱者の吉野順平はもういない——五条悟に、雨宮蓮に、何より過去の己に、今の己を見せつけろ。

——瞬間、真依の視線は上を向いた。呪力の反応に気付かれた。目と目が合った。——刹那、開けた空間の方へと大きく跳躍した順平も、真依の方を向く。【澱月】を伴って、順平は、己の瞬間最大出力を有する現時点で最高の攻撃手段を思い出す。

「よく狙え吉野順平!!」

今日の前にいるのは「僕らの敵」だ!!)

ツあああああ——!!!

銃を向けられる。世界がゆっくりになる。気付の絶叫の声が遠のく。頭の中で、先日  
の稽古から貰った五条悟の声が木霊した……。

「順平。正直言つて、キミの【澱月】じゃ悠仁の耐毒性を突破出来ない。」

——それなら、【澱月】以外に式神を使えるようになればいいんだよ!」

「え? そんなこと出来るんですか?」

「普通は無理。でも、キミなら出来る。キミの術式が特殊なせいかな。キミの【澱月】は、



『貯蔵庫』とキミの術式の『原点』を担っている。キミのは、(恵の術式とは似て非なる)『進化する式神』なんだよ」

「進化するって言ったって、何もイメージ湧きませんよ……」

弱気な己を追い出して、イメージするのは最強と肩を並べる己。

それに呼応するように、ボコボコと「澱月」の体が沸騰水のように膨張と収縮を繰り返し——質量保存の法則を無視して、どんどん縮こまっていく。

沸騰は収まりつつある。「澱月」だった小さな塊に触れると、海月の触感とは異なる、鱗のようなザラザラとした手触り。その感触に、順平はニヒルな笑みを浮かべる。

「自信持ちなよ。キミは、蓮の弟子じゃなか」

ならば、やってみせよう。トリックスターには成れずともいい。ただ、蓮の期待には応えたい。蓮の審美眼が腐っていると絶対には言わせたくない。

吉野順平を信じる、雨宮蓮という男がいるのだから。

さて、新たに得た力は、掌に収まる程度の大きさしかない、小さな魚の形を成した。けれど、それでいい。むしろそれがいい。

何も考えず揺蕩うだけの海月が、自らの力で『生きる事』を覚えた証なのだから——

「劈つんげけ、【朔夜さくや】!!」

澱あかつきを溜め込んだ黒い月は、濾過を経て、真まつ新つな夜を産み堕すとす。  
 暁あかつきを浴び、やがて望月へ至る道筋の第一歩を、順平は威勢良く踏み出した。

雨宮蓮、虎杖悠仁、五条悟……その三人との稽古で会得した新たな力の一つ。呪術師・吉野順平一つの到達点にして通過点でもある、式神【朔夜さくや】。

まるで☒のように小さく、手で簡単に折れてしまいそうな雰囲気醸醸している。全長は十センチ程度で、銃を模る掌印の指先で待機している。口先とも言える部位は非常に鋭利で、全体の三センチをこの針のような口先が占める。その風貌はまさしく、ダーツのそれによく似ている。

目的はただ一つ——目の前の敵を穿つため。

目標はただ一つ——目の前の敵に勝つため。

毒の抽出に向いた、現時点での順平の最高火力である。

「チツ——!」

「行け——!」

交錯する視線と射線。爆発させるのは火薬か呪力かの違いだけだ。

マグナムと〔朔夜〕の速度に大した差は無い。

例えば、ジョーカーの有するトカレフの弾の初速は約400m/sなのに対し、真依のマグナムは約550m/s。仮にジョーカーと真依が同時に撃ち合った時、最初に斃れるのは僅差でジョーカーだと言え、その脅威は分かりやすいだろうか。銃の性能ではマグナムはトカレフに勝る。

だがそれは〔朔夜〕にも言える事。

〔朔夜〕は、式神としての自由自在で縦横無尽な操作性を犠牲にし、更には途中での屈折も出来ず、攻撃に失敗した場合は〔澱月〕へと退化して、順平の重心から半径一メートル付近にまで戻らないと、再度の進化も不可能とする《縛り》を組んだ。

これにより、順平が指先で指定した一直線にだけ超高速で進み続けられる、爆発的な超推進力を生む事に成功した。

その速度は——初見の悠仁の反応を敗るレベルに到達している。

全くの同時、二つの呪弾は放たれた。鳴り響くはずの銃声は、しかしまだ、どちらの鼓膜にも到達していない。

順平と真依との間は最短で十メートル。脳天を貫くには〇・〇一秒あれば充分だ。

ギヤリリリイッ!!という不快な金属音が〇・〇〇五秒の空間に突き刺さる。二つの呪弾がぶつかり合って、互いに身体の正中線を大きく外れる軌道に変更させられてし

まった——が、呪弾同士の衝突を視認したところで、二人の反応速度は脳に回避命令を下せない。

——順平と真依の互いは、まるで相似するかのように、左頬に熱を感じた。

「いっ……たああっ!?!」

地に落ち、尻餅を突く順平。人は痛みに慣れるようには出来ていない。ましてや、呪術師という非日常へと入門して間も無い順平ならば尚更。涙さえ浮かべて、両手で熱源を押さえてしまう。

だが真依は違う。さして真面目に鍛錬を積んでいるとは言えないが、それでも一年間の経験は、決して真依を裏切っていない。二人の傷は擦過傷……擦り傷に等しいものだ。互いに血液こそ一筋垂れているが、この程度で悲鳴を上げるほど真依は弱くない。

「つつ……!」

勝った。

真依は、そう直感した。

誰がどう見ても、勝敗の白星は、撃ち合って尚立っている真依のもの。最後に立っている者こそが勝者だ。集中力を極限まで高めたため疲労が半端無いが、勝てば官軍。呪術師としてのやる気は微塵も無いが、どうせやるなら勝ちたいのが禪院真依という人間のサガだった。

怯み、尻餅を突く順平を気絶させようと、今一度右手の拳銃を握り締め――

(……あ、れ)

――ぐにやり、と傾いた。

世界が揺れている。あまりの振動に視界が歪み、真依は立っていらなくなる。やがて膝を突き、左掌を突き、そして愛銃を握る右掌も突いてしまう。地震が収まらない。脂汗が宙を舞う。遂には頭痛までしてきたような気がして――

(……違、う?)

これは、己の周囲が震えているのではなく。

〔朔夜〕は、口先に毒を溜め込んでおき、発射のタイミングで毒を抽出し始める習性がある。軌道が逸れた所で変わらない。僕の勝利条件は、貴女への『擦り傷』で充分だった

震えているのは、己の視界か……!

「一手だけ、僕が『上』です」

血液が流れる左頬を、右手親指で拭い取り、順平は立ち上がる。

慣れない痛みを堪えながら、彼は不敵に笑って見せた。

「ッ……!」

この瞬間、勝敗は入れ替わり、禪院真依の主導権は順平に移った。

右手で掌印を組み直すのを見せられて、真依はマグナムを、今度は両手で持ち上げようと目論む……だが悲しいかな、今の真依は《目眩》を引き起こす成分を含んだ《毒》を盛られている。

先程から感じていた頭痛はより痛みを増していき、未だ安定しない視界は真依の平衡感覚を中途半端に低下させ、吐き気さえも催させる。加えて握力や臂力は死にかけており、マグナムを持ち上げる事は出来ても、射撃の反動を受け止める力は無い。

もはや真依に為す術は無く。

『詰み』と言わせるに語弊が無いほどに、自分の運命は閉ざされていた。

トドメを刺される。だがせめて、目は閉じたくはなかった。息も絶え絶えになりながらも、しかし睨み付けてくる真依を見て、順平は思わず苦笑いしてしまう。

そんなになっても、やっぱり気は強いんだなあ……と。

だがそう思ったのも束の間、真依の視線が下を向いてしまう。本格的に毒が彼女を飲み始めたのだ。

順平は、己の毒が簡単に人を殺せてしまう力である事を知っている。

知っているからこそ、より早く仕留められるように、そして不用意に人を呪わないために、解放と制御の力を得たのだ。

「——見てあげて、【蛾眉】」

宵闇は、光を束ね、弓を張る。

まるで灯火に寄る蛾の触覚のように。

あるいは灯火に垣間見える傾国の眉のように。

その躯体は、完璧な曲線を完成させる。

……ただし、美しいのはそこまでだが。

手繰り寄せた【朔夜】が、またも質量保存を無視して沸騰し、今度は肥大化した。コーティングされた鉄球のように滑らかな真球のようできて、しかし出っ張りな眼球と、鰓と口に値する部分以外は、満遍なく『何某かの液体が入っている事が見受けられる透明な棘』が張り巡らされている。順平の掌に感じた触感はまだでゴムボールであり、それはどこからどう見ても目ん玉ひん剥いている針千本だった。

——ただし、この地球上の全人類は、全長一メートル弱もある針千本など見た事も聞いた事も無いだろうが。

さすがの真依も、コイツには正直ちよつとビビった。ビジュアルとその大きさ故に。だつてひん剥いてる眼球、五センチくらいあるんだもん。

さて、ビビる真依の横で、順平は【蛾眉】が突き立てる一際大きな針を、千切るようにかつ中身が溢れないように器用に手折った。中身はやはり得体の知れない液体だった。液体自体の色はコーラのように黒いのだが……いかんせん匂いがキツイ。

なんだこれ？ 洗剤……イソジン？ ヨウ素液を仰いで嗅いだ時のような……こいつはくせえだとか、そんなチャチなモンじゃあ断じて形容できない臭さが、二人の鼻腔いっぱいに充満する。

「今回は『これ』なんだね。はい、じゃあ飲ませますね」

「え、飲む……!?!」

「いやつちよ、ちよつとま——んむつ!?!」

——順平は、何の躊躇もなくソレを突き出した。ギョツとして一瞬拒否反応が出る真依だったが、無理やり口内に流し込まれ……ごつくんと飲み込んでしまった。

瞬間、口内を石鹼特有の塩素の匂いが充満してしまい、えずいてしまうのを堪えるので精一杯になった。元々の吐き気に拍車がかかったような気がした。

【蛾眉】とは、順平が新たに得たもう一つの式神だ。隠していた手札は、【朔夜】だけではなかった。

五条悟は【澱月】を『武器庫』と例えたが、【蛾眉】は言うなれば『医師を兼ねた薬局』だ。

【蛾眉】は、対象が受けている毒の種類や構造を、外見での症状による情報だけで瞬時に理解し、それに適合する自身の毒から編み出した『中和剤』を選出し、対象の毒素を吸収・分解し死滅させる事が出来る。これは『蛾眉』による攻撃を一切行わない』とい



う縛りの下に成り立っている。

さて、我々人類はこの行為を『解毒』と呼ぶのだが、呪術師にとつて解毒は難解極まるものという認識がある。それこそ、反転術式による『治癒』よりもだ。

それは毒物の特定と除去という、ただ治癒するだけよりも高度な技術が求められているためだ。

反転術式のアウトプットにおいて右に出る者がいない家入硝子や、五条悟に次ぐ異能を有する乙骨憂太でも、反転術式による『解毒』という行為は困難を極めるといえば、その難しさが分かるだろうか。

だからこそ硝子は、医師としての試験を（年齢をちよろまかして）パスして必死に勉強して克服した。

だが驚くべきことに、これを苦としない人物が、この世には二人存在しているのだ。

その内の一人こそが、我らが主人公・雨宮蓮である。

蓮のペルソナには《単体状態異常全回復アムリタドロップ》と《全体状態異常全回復アムリタシャワー》というスキルが存在

している。この二つは反転術式を用いるスキルで、かかる呪力のコストこそ今は高いものの、蓮は確実に解毒に成功する。蓮よりもペルソナが凄いとすべきか。硝子曰く

「本格的にヒーラーやらない？」

他にも《メシアライザー》とかいう、味方の体力を全回復しておきながら状態異常も

回復するとしてもないスキルがあるのだが、それはまた別のお話。

閑話休題、そしてもう一人こそが——この吉野順平である。

順平は反転術式を修得していない。故に順平のこの行為は、『解毒』というよりは『中和』の方が正しい。毒を以て毒を制するスタイルの【蛾眉】は、アナフィラキシーショックを起こしてしまう可能性も少なからずある。順平の『中和』は、中和対象を死に至らしめる危険性を含んでいる。

だが順平には、真依を追撃する意思は微塵も無かった。それに気が付いた真依は、はつとなつて、ふと頭痛も吐き気も眩暈も無く——真依の毒は、完全に抜け切っているのを感じた。

この毒だった呪力は、様々な手段でやがて体外へと排泄される。よつてこの後、真依は厠で悲鳴を上げる事態にまで発展するのだが……彼女のプライバシーのためこれ以上は語るまい。

さて、順平は傷付けてしまった責任を負うために、安否の確認をする。

「えつと、何かまだ異常があれば言ってください。解毒させるの初めてなので……大丈夫ですか？」

「ッ」

何気なく口にした言葉が、真依のプライドを引き裂いている事を知らぬままに。

「……良いわよね、男って」

「え、何ですか急に。LGBTの話題ですか？」

「違うわよ。どっちかというところ、フェミニズムのやつ」

(……変わらなくない?)

順平の安直な思考など意に介さず、真依は続ける。

「知ってる? 呪術界の『女』は、生まれた時から不利なのよ。それが、歴史のある家系なら尚更ね。男尊女卑は当たり前、成り上がろうと考える事すら許されない。嘲られ、罵られ、嘲られる立場にある……ずっと昔から」

卑下と、己の惨めさが顕になって、それがみつともなくて自嘲する。行き場の無い怒りの行き先を見つけてしまった真依は、心の裡から溢れてくるものを止められない。

だがそれを、順平は黙って聞いていた。

「アンタらには分かんないでしょうね。虐げられるやつの気持ちなんか……私が、どんな気持ちで今まで生きてきたか! でも、私にはそういう生き方しかないのよ……死ぬまで、ずっと!!」

吐き出した恨み言は、いつまでも幼子の頃のまま。

思い出してしまうのは母の言葉。姉に対する憎悪の言葉。仮にも娘に対する罵声は、今でも根強く、真依の心に残っている。

姉を言い表すのなら、破天荒が良く似合った。時代遅れと言える、禪院家での『女』を毛嫌いし、男に混ざって術師としての鍛錬を積み続けた。

どんなに打ちのめされようと、どんなに虐げられようと。

幾度でも立ち上がって、妹の真依に心配を掛けぬようにと不敵に笑った。

その姉が、たった一度だけ泣いているのを遠目で見た事がある。

「アンタなんか産まなきゃよかった……だつてさ」

「……………」

実の母親にそう言われて、真希は泣いた。

ただっ広いだけが取り柄の家の片隅で、一晩中泣き続けた。

常に強く気張っていたはずの姉の涙を見て、真依も泣いた。

ああ、この家に味方は一人もいないのだと――

私達は、生まれた時から独りなのだ、そう思ったのだ。

普通に生きたいと思う事も許されない、そういう家に生まれた。そういう星の下生まれ。そういう生涯を辿る可しと、神が斯く在る可しと望まれたかのような運命の渦に巻き込まれた。

だから、恵まれている人々が妬ましい。

毒を吐いて気を紛らわせても、過去の涙を紛らわせる事は出来ない。

だから、諦める事にした。

立ち上がる行為を無駄と嗤い、抗う事すらも止め、ただただ権力に従僕して——そうやって、真依は叛逆の意思を捨てた。

確かに心に芽吹きかけていた、叛逆の精神を放棄した。

そうする事が、カシコク生きるための秘訣だと悟ったから……。

「アンタみたいなヤツ、大嫌い……」

絞り出すように発した呪詛は、どこにも力なんて無く。

禪院真希と禪院真依は、生まれながらに呪われている。

「僕も、貴女と同じですよ」

「え……、……ッ!?!」

だが順平もまた、斯様な運命を辿ってきた者の一人だった。

真依よりも虐げられた年月は圧倒的に短いが、ともあれ、受けた傷は同じもの。決して消えない傷跡を、心と体に遺している。

だが順平は、あえて隠している古傷を曝け出す。己の恥と悔恨が詰まった、過去の遺物を。

真依は目を見張った。己の心と女の部分に有る傷は、これから先決して癒える事は無い。けれど、だからこそ気になった。吉野順平のその傷は、自分と同じ性質を持つ傷だ

と、一目見て理解出来たから……。

その深い傷を受けて、尚立ち上がれる順平の気概に、初恋にも似た疑問を抱いたから——。

「確かに僕は女じゃないけど……居場所が無くて虐げられる人の気持ちは、人一倍分かるつもりです。痛いのも、みじめなものも。」

他人と自分の境遇を比べて、何で誰も助けてくれないんだって、何でアイツらだけが良い思いをしてるんだって思つて。そうやって誰かを恨むしかなくて……それが情けなくて、でも自分の力じゃどうしようもなくて、何もかも嫌になつて……死にたくなるのも。

——けど、虫ケラ同然の僕を、或る怪盗が救つてくれたんです」

「かい、とう……？」

「……いや、奪<sup>と</sup>つてくれたが正しいかな」

順平はそう紡ぎながら、真依の手を取つて更に告げる。

「その人がいなくなつたら、僕は多分、呪詛師として誰彼構わず殺しまくつてたかもしれま  
せん。……いや、何もかも中途半端なあの頃なら、僕を処分するのは容易いから……捕  
縛されて、処刑されてたかも。」

だから僕は、とてもラッキーだったんだと思います。あの人は、僕の心にあつたはず

の劣等感を、全て奪い去って行つた」

まるでそれは、ヒーローに助けられた事を誇る稚児のようである。

それでいてどこか好戦的な、負けたくないという感情を含んだ目。

真依は、その瞳に釘付けだった。

「あなたも、怪盗を頼ってください」

「怪盗……?」

「怪盗つてのは、星のように煌めく物に目が無いんです。それを見て、知ってしまった瞬間、絶対に盗み出したいと思つてしまい、そして本当に盗んでしまう。——なぜなら、『狙つた獲物は必ず奪う』が、彼の美学だから。」

僕は、あの人の美学に憧れてるんです」

さて、初恋は実らないと宣つたのは、一体誰だったか。

「僕では残念だけど、貴女に力添えは出来ません……はつきり言つて僕はまだまだで、自分の身を守るので精一杯だから。」

でも、絶対に諦めないでください。

貴女を救ってくれる人が、必ずいるから……!」

嗚呼、認めたくはないけれど。

全く以つて、その通りだと思ふ。

早まる鼓動にケチをつけるには、それくらいしか思い浮かばない。

「ねえ、何でそこまでしてくれるの？ アンタ一体、何が目当て？」

「何がって……僕がそうしたいからですけど」

「えっ？」

「えっ？」

「普通そこは体とかを求めるモンじゃないの？」

「僕を頭真っピンクのお猿さんか何かと思ってます？」

「違うの？」

「違いますよ!? 偏見エグいな!」

若干の呆れを含みながら、順平は立ち上がって語るのだ。

「はあ……僕はっ、と。都立高専一年の吉野順平で——」

あの日、命を拾わせてくれた日に決めた、これからの己の生き様を。

「——あなたの味方のつもりです。」

星のように気高い美学とその精神の下に、

吉野順平は手を差し伸べる手助けをする。

「……何でアンタが照れてんのよ」

「いやっ、僕の友達はこれ以上にキザな事言うんで……うわあ恥ずかしいっ……! 何



でこんな事すらすら言えるんだよ蓮は……!!

……あつでも味方つてのは本当ですから! じゃあ僕はこれでっ!!」

……さて、小っ恥ずかしいセリフを吐いて、しかも真依の手を握っていたというところでもないハプニングに、今度は逆に順平が顔を赤く染めてしまう。あまりにも恥ずかし過ぎて、瞬く間にぴゅーつとどこかへと走り去ってしまった。

ちようどあそこの方角へ進み続けると、いずれ都立呪術高専の別館に出るだろう。今はまだ頼りないその背中を見届けて、真依はただ独り言ちる。

「……変なヤツ」

だが、悪いヤツではなさそうだ……と。

膝を抱えて、物思いに耽ってみる。

木漏れ日が暖かい。風を受け、その枝を揺らして光を浴びようともがいている。土を触ると、さざれ石が混ざっているというのにも関わらず、ふんわりとした柔らかな触感が手を包む。木々達の多重奏に耳を傾けて、ほんの僅かな数秒だけ目を閉じる。

……ああ、なんだ。

世界は割と、悪くない物でできていたのね。

「いるんでしょ」

「うげっ」

真依の世界を語るには、この人物は欠かせない。近付いて来ていたのは、姉・禪院真希であった。ガサツで乱暴なのに、どことなく気高さを感じる足音は、かつて聞いていたそれと変わっていなかった。

「何で分かったんだよ」

「……何となく」

「はっ、似たり寄ったりだな」

吐き捨てるように言つて、先刻合気で奪つておいた三輪霞の刀を置いて、真依の隣で胡座をかく。ただ真希は距離を測りかねているようで、二人の間には不可侵の空間が存在していた——まるで亀裂した心のように。

だがこの地球には、元に戻ろうとする力がある。真希が座り込んでから数分後、先に痺れを切らしたのは真依の方だった。

「アンタさ」

「あん？」

「好きな人いる？」

「ブツフォオ!？」

色恋に疎い真希は思い切り吹き出す。見るからに焦りを見せて真依に問い詰める真希だったが、先の順平の焦りように似通っていて、真依の笑みを誘うだけだった。

「なん、な、なんつ、いきなり何を!？」

「やっぱいるのね」

「いやっ、別にっ!? 別にそういう奴は別にいい!？」

「ってか、お前はどうかなんだよお前は!」

「そう言つて荒ぶる真希に、真依は。」

「……さあ?」

「に、濁すなよ! ずりーぞ、私には聞いといてさあ!」

「ふふ」

「そうやって、笑つて返した。」

姉と会話したのはいつぶりだろうか。遠い過去ののような気がする。けれど奇妙な事に、まるでいつものように——それこそ昨日も一昨日もこんな会話をしたような気がしてならない。

屈託の無い笑みが浮かんでるのに、真依も真希も気付いていなかった。家を出てから、喧嘩していた事など忘れたかのように……。

「冴えない男に縁があるのかもね、私達」

「ゆ、憂太は今関係ねえだろ!」

「ベツつにいい? 誰も乙骨くんの事話してないんですけどオ?」

「いつ、この……生意気な妹めえ……っ!!」

ああ、やっぱり。

口には絶対出さないけれど。

絆されているのを重々承知して、独白しよう。

約束を破られて、

もう一緒にはいられなくなって、

やりたくない術師をずっと続けて、

腐った世界で生きていかなきゃいけないくて、

結局、家と姉に振り回される人生を送って、

それでもまだ、私は姉を嫌いにはなりきれないのかもしれない。

亀裂していた心は、少なからず塑性を含み。

——それでも確かに、二人の心は重なっていた。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen

Let us start the game.

#27 Promise

# # 2 8

燦々 狂ったように踊ろうや  
淡々 手を叩いて遊ぼうや

14.

違う。

高専の敷地内全体に響くような大声で否定された虎杖悠仁は、困惑と怒りを抱きながら、諸悪の根源たる東堂葵へと殴りかかっていた。

「違うって何が違えんだよッ！」

「違うとも、大いに!!」

徒手空拳は互いに得意とする所。先手を取ったのは、二回りほど悠仁よりも体格が良  
い葵であった。ファイティングポーズから繰り出される目にも止まらぬようなジャブ  
は、しかし悠仁の動体視力があれば躲すのは容易い。

懐に潜り込みながら、鉄板のような腹筋へと正拳を叩き込む――が。

(硬っって!?)

鉄どころか鋼でも殴りつけたかと言わんばかりの痛みと痺れが、悠仁の拳を覆う。よもや除夜の鐘を鳴らす撞木であるはずの己の拳を伝わって、己自身が鐘のように震える事になろうとは。ごいゝゝんという擬音がよく似合っている様になっていた。

だがこれで悠仁には隙が生じた。葵の丸太のような腕から繰り出される肘鉄が、悠仁の両肩へ——突き刺さらなかった。

「ぬうっ!？」

悠仁の得意とする体術を大いに活かした正拳突きは、常人の速度を大きく上回るそれで繰り出される上に、呪力操作がまちまちな悠仁の拳は『二度』突き刺さる。

遅れてやってきた呪力に後退りさせられて、葵の肘鉄は空を切る。——だが、悠仁はこれで終わらない。

悠仁が読んだ参考書には、豆知識程度のトピックではあったが、テコンドーと空手の違いとテコンドーの最強技についてアバウトに書かれていた。その名も 1080 degree spin kick。

空中三回転蹴りによる三々四連撃技は——何と悠仁は勢い余って、一回余分に回転してしまった。

(空手とテコンドーの合わせ技か！)

さらっと人間離れした1440度の六連撃技は、しかし葵は肘鉄をそのまま面前に

持つていくことで、その全てを前腕でギリギリ防ぐ。脚力は腕力の三〜四倍だ。もしもこれを全て頭部に受けてしまつていたらと思うと、葵は冷や汗が垂れそうになつた。

だが葵は現実には防いでいる。今度はこちらのターンだと意気込んだのも束の間、以前に読んだ柔道の本に書いてあつた《大外刈り》を咄嗟に思い出した悠仁は、掴むための服が無い事態に、瞬きの刹那だけ思考した。

体格差がある以上、普通の大外刈りでは葵は崩せない。

ならば、普通の大外刈りを少しだけいじつてやればいい。

右手は葵の左手首を、左手は葵の側頭部を。軸足はちゃんと地に足つけて、残る左足で葵の腰を思い切り引き付けた。

呪力無しの単純な体術だけならば五条悟に勝るとも劣らないセンスを持つ悠仁は、体格差という不利を埋められるほどの膂力こそが己の武器であつた。

手首を握る右手と、腰に引つ掛けた足を引つ張り、側頭部を掴む左手を押し込んでやれば、まるで舞を踊る天女のように、綺麗に地へと沈んでいく。

悠仁にとってこの瞬間こそが勝負どころだ。咄嗟に右手で拳を握り、もう一度、今度は脳天に向けて拳を振り上げる。

(顔面ガラ空き、行くぜ久々！)

「(何て綺麗に崩してくれるんだ——だが!!)」

ぬうん!!」

だが、葵も葵で柔軟なゴリラだ。倒れゆく体を無理やり起こして、悠仁の拳が加速する寸前に合わせた。つまり、腕力が遅れてくる逕庭拳が発生するのを防いだのだ……!

「な——!?!」

「お前に食って欲しいところは、そこ、じゃない!」

そう言いながら、脳天をぶち抜いてやろうと振りかぶった悠仁の拳を、何ともないように、遂には押し返し立ち上がってしまう。

後方一メートルへと退避し距離を置く悠仁だったが、先手を取り得た葵が出したの  
は、手ではなく口であった。

「悠仁よ。我々人間は『目より先に手が肥える事は無い』。どの分野・系統を問わず、  
人や達人は皆『目を肥やささない限り、良い作品を作る手は生まれない』と説く」

「だから、さつきから何が——」

「お前のその『遅れてくる打撃』」

「《逕庭拳》 つつーんだ」

「なるほど。では、その《逕庭拳》は確かにトリッキーだ。並の術師ならば、何が起こつたか分かるまい。威力も申し分無いと言える。二級程度なら難なく祓えるだろう。」

だがな悠仁。それは、並の術師や二級程度『になら』だ。五条悟や雨宮蓮、俺の師、あ



るいはその他特級呪霊には通用しないだろう」

「……………」

そう言われた瞬間、悠仁の脳裏に里桜高校での戦いがフラッシュバックした。

真人と呼ばれる継ぎ接ぎ柄の呪霊。昊？と呼ばれる雨宮蓮を苦しめたまっくらくろすけの呪霊。肚の底から声が聞こえてくるような——愉悦に歪む嗜虐的な笑み。

改めて、悠仁は葵の方を向いた。ただし、今これからは、ただただ無意識に『見る』のではなく『観る』、あるいは『視る』ように。

そうして観えたのは——葵の全身から溢れている発勁。常に纏わせている呪力のオーラ。

（そうか、これが——こいつの言っている『違い』か）

「そうだ、悠仁。見えたか？ 気付いたか？ 感じたか？ これが、本来あるべき呪術師の戦い方だ。」

丹田を起点に、腹、心臓を回って、腕から拳や脚から爪先へ——そうして全身に至り、呪力を余すところ無く澄み渡らせるのが、体術戦のセオリー。お前は呪力を『部分的に流している』ために、『逕庭拳』が発生するのさ」

「部分的に、流す……………」

「俺達は忘れていたのさ。当たり前前すぎるが故に、その当たり前前を見つめ直さねば見え

て来ないものを。

「いいか悠仁——俺達は、全身全霊でこの世界に存在しているんだ。」

「——!!」

悠仁は何となくだが、理解出来たような気がした。

元々悠仁は頭が良いほうではない。小難しく一から十まで解説されたところで、悠仁の頭は拒否反応を起こしてしまう。容量の限界だ。それ故に転校前の化学基礎の中間テストにて、m o o の計算で躓き、蓮の教えがあつても赤点ギリギリだった事もある。

これは単に蓮が「悠仁ならこれくらい余裕だろう」という考えが裏目に出ているのもあるが。

閑話休題、悠仁は論理的な事はあまり得意ではない。蓮のように事細やかに説明してくれる教師に感謝すれど、もう少し単純に教えてくれないかなど、心の中で強請ったりもしている。

少年院での敗北は、論理的に呪力操作について聞いただけで、体の感覚として呪力に慣れていかなかったため。

悠仁に限らず、誰しも手本が必要なのだ。その手本からヒントやコツを見出せるかは、その人の観察力次第。見様見真似を己のスタイルに組み込み込み昇華することで、人々は学習という名の進化を目指す。

「ありがとう、葵」

悠仁は論理的な事は苦手だ。だから体で覚え、何事も感覚で会得する。生来からそうして生き抜いてきた。悠仁は基礎を会得した『後』が強く、敵にとつては怖い。

都立高専一年生を『成長性に秀でた者』と『応用力に秀でた者』とに二分化する中で、手札をより多くする事が出来る前者を、雨宮蓮と吉野順平と伏黒恵とするならば。

既存の数少ない手札を駆使して抗う力では、虎杖悠仁と釘崎野薔薇が秀でている。

術式や呪具や式神を持たずに、体術のみで成り上がっていく悠仁ならではの工夫の凝らし方を前に、特級呪霊でさえも一筋縄ではいかなくなる。なまじ知恵があるからこそ、配られた手札がいかにか悪かろうとも、卓越した精神と度胸を以て、その悪辣な手札を用いて活路を見出す。

虎杖悠仁はそういう男であり――

「俺、もつと強くなれるよ」

人々はそれを『天才』と呼ぶ。

「――その意気や良しッ、ブラザーッ!!」

青い海、暗い底。

暗雲立ち込める山、その頂点である雲の上。

風が凧ぎ、水面にて蝶が羽ばたき波紋を生む。

そういう世界に、我々は立っているのだ。

それを理解出来た悠仁には――

『腕にだけ』ではなく、『全身に』力が迸っていた!!

(そうだ、それで良い!!)

俺がお前を、全力で導く!!)

桜が舞い散り、青葉が茂り、夕暮れの土手を三人で歩む帰り道。

青春の日々を追いながら、一級品の稽古が始まろうとする――その悠仁の脳裏で。

(でも俺は、本当に《逕庭拳》を捨てなくちゃいけないのか……?)

偶然の産物とはいえ、悠仁自身で編み出した唯一無二のこの技を。

ろくすっぽ活かせず、輝かせないままにしておくのは勿体無いと思ってしまったのだ。

逕庭拳の最期は、果たして今か、それとも――。

PERSONA 5 in Jujutsu Kaisen

Let us start the game.

#28 Lead to Load

## # 2 9

ああ 私 ずっと

地に縛られて 動けずに

15.

釘を打つ音が森中に響いている。乱雑に、規則性もなく、ただ無闇矢鱈に鳴る鉄の音は、しかし、釘崎野薔薇の標的とするものには掠りもしない。

「つ、くそ……安定しないな！」

それは野薔薇のエイミングが劣悪だからというワケではない……と、普段の彼女ならば言えていただろう。しかし野薔薇は何をどち狂ったのか、釘の頭と呼ばれる平な部分にもう一本の釘の先を充てがって、刻撃と同時に【簪】を発生させている。

射線は安定するはずもなく、速度もまちまち。当然、相対する西宮桃には当たらない。余裕綽々で、迫る釘の連続を全て避け切る。

野薔薇は先程まで同行していたパンダ先輩と二手に別れなければならなかった。伏黒恵の【鶴】の援護もあつて、京都高専の目であり耳である桃を墜落させ、二人がかり

で追い詰めるまでは良かった。

しかし、思わぬ伏兵がパンダ先輩の胸を文字通り射抜いた。姉妹校交流会のルール上、それが致命傷たり得る事はならなかったが、必然的にパンダ先輩対伏兵、釘崎野薔薇対西宮桃の構図が成り立っていたのだ。

「ねえ、釘崎さん……だっけ。」

釘崎さんはさ、この呪術界が実力主義って本気で思ってる？」

「そうなんじゃないのオ？ アンタんとこの担任も準一級だしさ」

「……それは『男に限った話』」

やっぱり、という諦めにも似た感情を含む溜め息を吐き、目を顰めながら桃は続ける。「呪術界は基本的に男社会。それも御三家の家系ともなれば、その思想は顕著に、より強く、より醜くなっていく。」

呪術師は女ってだけで低い目で見られるってのに、古臭い風習が残り続けてる御三家に生まれた女の子は、もつと悲惨な目に遭う。御三家の女に求められるのは「完璧」程度じゃない……そして真依ちゃんはそういう家に生まれて、これまでの人生をずうっと虐げられてきた。

アンタみたいな何も知らない人に、私の友達を悪く言わせはしないし、きっちり訂正してもらう。

安心して、ちゃあんと可愛く矯正してあげるから。」

非術師の普通の家系とは違い、真希と真依には、家に居場所が無いのだ……。

さて、西宮桃は、家とは、ただの建物としての家屋というだけではなく、心休まる安寧の場所という意味もあるはずだと考えている。これは西宮桃の家にて生まれ育った故の認識であり、少なくとも、術師として高専に入学する前までは、そう思っただけで疑わなかった——今にして思う『理想』だった。

帰れば家族がいて、暖かく出迎えてくれて、リビングにはのどかな空気が包んでいて、自分の部屋で勉強そつちのけでスマホをいじって、たまに電話して……そういう精神的に安らぐようなもののはずなのに。

それなのに……あの二人の家元は、その安寧を享受させてはくれない。常に虐げ、時に口に出す事すらも恐ろしいような事をさせられる。そんな家に誰が居たいと思えるだろうか。

だったらせめて、この高専生時代だけでも、安寧を享受してほしい。四年間だけでも、高専が『帰ったら安心できる場所』であって欲しい。

そう思う西宮桃は、真依が嫌がる事はしないし言わない。それが桃の友に対する優しさであり……そして、桃個人で出来る事の限界でもあった。

その限界と現実を何も知らない野薔薇を、桃は怒った。あるいは、真依に共感してほ

しかつたのかもしれない。知つたような口で真依を非難する野薔薇に、無性に腹が立つたのだ。

「——なんだよ、ちゃあんと友達のために怒れんじゃん。血も涙もねえやつらだと思つてた。」

でもまあ、こつちも色々言いたい事あんだよ」

だが野薔薇は、そんな些事に構う事なく続きを告げる。

「そもそもさ、アイツは何で家出て行かなかつたワケ？ 家柄捨ててどこぞの男とでも駆け落ちてりや良かっただろ。そうじゃなくても、もつとやり方があつただろ」

「相手は御三家、私達の想像を遥かに超えてくる、どうしようもないくらいの実力者揃い。真依ちゃんだつて逃げたいはず。でもそれをしてしまえば、待つているのはより酷い仕打ちだけ……それでも、私だつて助けられるなら助けたいよ……！」

西宮桃は二級術師だ。高専三年生というのもあり、桃自身の経験もそれなりに年季は入つている自覚はある。

西宮桃の生得術式は《付喪操術》つくもそうじゆつ。西宮桃が『長年大切にしている無生物』を対象とし、その存在を意のままに操る事の出来る術式だ。術式を付与された物体は、術者の意思の下、まるでそれが本当に『生きているかのように』振る舞う。

桃の術式対象は箒だ——箒『しか』ない。これは桃が、『術式対象を箒にのみ限定する』



縛りを組んでいるためだ。それ故に桃の箒は強力な『浮力』と『速度』を得た。

それでも、桃は二級術師にしか成れていない。

二級とは、特段秀でて強いワケでも、何かしら突出した能力を持つワケでもない程度の実力しか認められていない事の証。桃とて、その程度の実力に収まるつもりは毛頭無い。誰よりも下に見られる事を嫌うからこそ、桃の箒は浮力を得たし、二級に上り詰めるほどに努力もした。

それでも、『まだ』二級。東堂葵、加茂憲紀、究極メカ丸、庵歌姫……一級や準一級には遠く及ばない。否、及べない事を、桃は心のどこかで察していた。

現存する術師の人数と階級を比較した時、準一級と一級術師は全体の一割もない。七割ほどが二級術師で、残り二割を三級と四級が占める結果となる。

なぜこのように偏ってしまっているのか。その一番の要因は『才能』の一言に尽きる。命のやり取りなど意にも介さないほどに大切な信念を持ち得つつ、類稀なる才能を發揮し、自己の研鑽に余念を持たず勝ち抜ける。故にこそ術師であり、その上澄を一級と呼ぶ。

しかしそれに託けて生き急いだり、上層部の嫌がらせに遭つたり、呪術師という仕事の残酷さに絶望したりして燻っている者を二級と呼ぶ。

桃には信念はあれど、術式オビの研鑽に限界をきたしている。術式対象を箒に限定してし

まった以上、解釈が広がる余地はもう無いと思つてゐる。開花させた才能を、これ以上煌めかせることは出来ないと察してゐる。

自分では後輩を助ける事は出来ないと諦めてしまつてゐる。

だからこそ、野薔薇は桃が気に入らなかつた。

「そ、だよ」

「……は？」

「そんなんで何もかも諦めてるのが気に入らねー。お前もアイツも。『女は侮蔑される立場でしかない』『相手は御三家』『敵いっこない強敵』つてベラベラ喋つてっけどさ。

要するに、お前らが現実から逃げてるだけだろ、それ」

「——あ、？」

自分でも、今まで出した事もないような低い声を出した事に驚き。

その声を出させた本人に対して、腑が煮え返つていた。

「逃げ場は現実にはかない。現実から逃げた所で、そこにテメエの場所は無えんだよ」

だが野薔薇もそれは同じ事。

野薔薇にとつて桃の第二印象は、気に入らないの一言に尽きる。二級と一級との間に高い壁が聳え立っている事など分かりきつた事。

だが、それがどうした。

(蓮なら、たとえアイツと同一性別で、同じ境遇で、同じ術式持つても……いや、そもそも術式すら持つてなくても——蓮なら絶対、諦めない。蓮なら絶対、泥水啜って血反吐吐いても這い上がる。何せ真希さんがそうなんだ。女とか御三家とか、そんなモンは関係ね……アイツがするべきだったのは——)

力は無くとも、真依とて磨けば光る原石のはず。それを捨てるのにも、過程というものがあろう。

逃げちゃダメだ、という事を呪詛のように繰り返していた、とあるアニメの主人公がいたけれど、野薔薇はそうは思わなかった。その主人公には、今思えば真依の境遇に似通うものがある。きっかけは成り行きで、嫌々に戦いながら、それでも少年が得たものは確かにあった。『戦う』という行為が、運良く良い方向に向いていたからこそ得られたものでもあった。

しかしながら、その少年には、『逃げる』という選択肢もあつた。逃げちゃダメだとは、結局のところ、彼を取り巻く醜悪な環境が少年に強い虐げに過ぎなかった。

今にして思う……その少年は洗脳されていたのかもしれない。戦う事が自身の存在意義だと、錯覚していたのかもしれない。

性根の腐ったゴミ溜めで産声を上げた双子の姉妹に与えられた運命は、さぞ過酷だった事だろう。心の奥底にある諦観により、全てのことの意味を見出せずにいるのだろ

う。

それでも出来る事はあるはずだ。鳥籠の中から逃げ出すために、その勇氣ある一步を踏み出して、誰かに助けを求めて、叫んでも良かったはずなのに。

そんな事すらも諦めているのが、釘崎野薔薇には気に食わない。

「要するに、テメエの自意識の問題だろーが……テメエらみたいに『私は悪くない』『悪いのは私以外の全て』って口数揃えて最初から諦めてんのが、クソムカつくんだよッ！」  
「ッ、うるさい……！ アンタに何が——」

「私は蓮や真希さんの生き方に惚れてる！ テメエらみたいな傷の舐め合いしてるだけのみじめな生き方なんかじゃなく、腐った現実でも真つ直ぐに在るような、そんな生き方が大好きだ!!」

誇らしくねえ事ばっかの人生なんかやってたって、ただ息が詰まるだけだっつーの！  
クソみたいな現実でも仕方ないって言い聞かせて、どんどん腐っていくだけなんか死んでもゴメンだね!!

——そんな現実、私がブツ壊してやる!!」

蓮と過ごした時の中で、野薔薇は《芻霊呪法》に新たな可能性を見出したが……しかしそれは、あまりにも発想が突飛過ぎるものだった。

何せ釘を『銃』に見立てて威力の向上を図ろうというのだ。側から見ても容易でない

……否、むしろ不可能と言える拡張術式を編み出そうとしていた。

諦めず、修練と実験を積み重ねるも、当然その悉くが失敗に終わった。皮が破れて血が滲み、金槌の柄に血が染みている。血マメなど何個出来て潰れたかも覚えていない。

だが、マメが破れて再生される毎に、より固く強い皮膚へと再生していくように。

野薔薇もまた、数え切れない失敗を経て、とある一つの結論へと辿り着いたのだ——それも、良い方向の結論に。

懸念は、理論の構築が終わったのが、この姉妹校交流会当日の朝だったという事と、発動のために掛かる時間は普段の倍以上になるといふ事。

二本、釘を宙に放り——連結するように固定する。一本目の釘の頭に、二本目の釘の先を繋げるように。しかし完全に接着はしないように、一本一本を独立させながら。

野薔薇は普段から、釘を刻撃する時は、空中にて呪力で固定するような真似は（出来るが）しない。同じく《芻霊呪法》を使う師であり祖母である者から教わり、そして完全に癖として確立させたためだ。

《芻霊呪法》の初心者から脱却するには、どんな状況でも、どんな状態でも、真つ直ぐに釘を打たねばならない……これに関しては、野薔薇も完全に同意していた。打ち損ねた者に残される未来は、容易に想像出来るから。

だが野薔薇は今、敢えて初心者の時代へと戻っていた。

戻っているからこそ、野薔薇の新しい力が確立したのだから儲け物というものだろう。

かつて野薔薇は、アニメや漫画等のサブカルチャーからインスピレーションを得ている蓮を『拗らせている』と評した事があつたが、まさか野薔薇の氣に食わない人物トッペンには入ろう人からインスピレーションを得るとは、野薔薇自身も思つてもみなかっただろう。

『呪いの代表』として日本中にその名を轟かせた藁人形と五寸釘を用いる《芻霊呪法》。その伝統的な技である【簪】及び【共鳴り】は、名実共に高威力なのは相違なく、そして今の今までこの二つで戦い続けてきた野薔薇は、《芻霊呪法》の技はこの二つしかないと思ひ込んでいた。

これは、野薔薇がその固定観念を打ち砕いた証。古臭い考えを一新し、更なる発展先を研究し続ける、野薔薇のストイックな求道者精神の現れである。

『釘の超高速射出』。

ただそれだけに特化と進化を遂げた、其の技の名は――

「《芻霊呪法》【かんぬき門】!!」

釘を刻撃するのと同時に【簪】を発生させて、まるで銃の火薬のように爆発させる。安定力と指向性は呪力が補填してくれている。金槌がコックハンマーを、呪力がバレルを、後ろの釘が火薬を、前の釘が銃弾を担っている。

最大級の呪力、技術力、想像力、創造力、集中力が要求される、非常に難易度の高い技。

一か八かの土壇場で、野薔薇はそれを成し遂げたのだ。

その苦勞の甲斐あって、【門】による釘の最高速度の到達点は、およそ400m/s。野薔薇が敵視する真依のマグナム弾よりは遅いが、音速を超えているのだ。低級の呪霊や術師ならば、まず回避は出来ない。《付喪操術》に加えて呪力で強化された桃の箒でも、そんな速度を出せる出力は無く——とも、間一髪直撃を免れ、箒の穂先を十何本か切断するだけに終わった。

（本ツ当可愛くないこの女!!）

当たったら普通に死ぬっつーの!!）

桃は奇跡的な回避に冷や汗を流した。箒を除けばどこにも傷は出来ていない。だが、次も【門】を避けられる道理は無い。

故に桃が取った行動は、野薔薇から距離を置く事だった。

それ自体は間違いではない。【門】は、指向性を持たせて釘に圧力を与えるための呪力

の捻出や角度の調整などに、最短でも三〜五秒は掛かる。そうでなくとも、普通の刻撃ですら一秒は要る。加えて野薔薇自身は術師の中でも非力であり、呪力による強化があつても射程距離は長くない。

だが桃の《付喪操術》は違う。呪力で強化した箒から発せられる、台風にも似た風圧と、それに付随する鎌鼬があれば、野薔薇を遠距離からも仕留められる。そう。

【門】だけ見れば、桃の対処は正しい。

ここでの桃の問題は、《芻霊呪法》には【簪】と【門】以外にもう一つ切り札があるのを知らなかつた事だ。

桃が距離を置こうと自身に背を向けた瞬間、野薔薇は走り出していった。尻目に見つつ振り返った桃は追ってきたのだと考えたが、野薔薇の目下の目標は桃ではない。むしろ野薔薇の足では、桃の箒に追い付くことは難しいだろう。

先程まで桃が滞空していた場所に辿り着き、しやがみ込んで何かを探している。何をしているんだ、と思つたのも束の間、野薔薇は目標のブツを入手できた。

それは、桃の箒に付いている一本の藁であつた。

野薔薇が一瞬目に草を掻き分けた所に落ちていた、【門】が抉り取つた穂先の藁。野薔薇の狙いはまさしくこの一本だつたのだ。



制服のフロントボタンを外して、内ポケットにしまっている藁人形を一騎取り出して、箒の藁を差し込み——そうして準備は整った。

「私は、綺麗にオシヤレしてる私が大好きだ！

強くあろうと努める私が好きだ!!

皆と一緒にいたいと願う、そんな私が大大好きだ!!!

——私は『釘崎野薔薇』なんだよ!!!」

芻霊呪法【共鳴り】——藁人形に釘を突き立て、桃の箒は一時的に『死んでいく』。

何が起こったのかを理解する間もなく、箒は浮力を失い、桃は自身の桃のような桃誤字に非ずから地面に落ちこちてしまう。5メートル地点から落下したが、腰はひりひりと痛むものの折れてはいない。苦痛に顔が歪む——が、その顔は別の要因に歪められてしまう。

「はっ——!?!」

振り返ると、もう3メートルも無い距離に野薔薇がいた。ここまでが全て、野薔薇の狙い通りである。桃は【門】で箒を狙われた時点で既に詰んでいたのだ。

だがその目の焰はまだ消えていない。相棒ともいえる箒を両手で握りしめて、震える下半身に鞭を打ち、立ち上がり様に大きく振りかぶった。

だがそれを、野薔薇は深く懐に潜り込む事で回避する。

(このトンカチで叩けば殺しちゃう……癩だけどそれはダメだ)

「でも!! ——その性根、一発プチ込んで叩き直してやる!」

ぴこん、と素つ頓狂な音を鳴らして、ポーチから“それ”を取り出した。

黄色の柄、赤い殴打部分。英語でPlastic squeaky circus carnival clown hammer with whistleという無

駄に長つたらしい正式名称がある、玩具用の安全なハンマー。通称を——

「ピコピコハンマー!?!」

「うおらアアアアアアッ!!」

今までお礼と言わんばかりに、それを桃の下顎に叩き込む。最小限の痛みで脳を揺さぶり、吹き飛ばされて、桃は仰向けに倒れていく。

ぴこーん、という気の抜ける音の後。

どさ、という音が木霊して、勝敗は決した。

「……………ふう——」

極度の集中状態から解放されて、肩で息をする女が一人。

振り上げた体勢のまま、釘崎野薔薇は己の成長と勝利に、しかし素直には喜ぶ事は出来なかった。

仰向けに倒れ動かない桃を見て、野薔薇はなぜか、あの誇らしい先輩の憎たらしい妹

の顔を思い出していた。勝利の美酒に酔いたいはずなのに、なぜか。

嫌いなはずなのに、どうなろうと構わないヤツのはずなのに……なぜかモヤモヤが止まらない。

「……………あー、くそー！」

釘崎野薔薇は禪院真依の在り方が嫌いだ。……だが、真依のその境遇を思い返せば、憎悪すべきは呪術界だというのも分かっていった。厭うべきは、腐っている現実だと。

こんな時、雨宮蓮ならどうする。目の前に広がっているクソみたいな現実を、雨宮蓮はどう生きる。

励ますのか、無視するのか。

手を差し伸べるのか、手を払い除けるのか。

そう思った時には、野薔薇は手帳に数字の羅列を書き留めて、その頁を破り、桃の着るワンピース型の制服、その胸辺りに被せた。脳を揺さぶられて間もなく、数秒の目眩の後、桃は手探りでその紙を手を取った。

数字の羅列に規則性はない。……が、ゼロから始まるその文字列に、桃は既視感を抱いた。家族への連絡や友人との会話のため三日に一度は見るそれは、まさしく――

「――これ、私の電話番号。何か困ったら掛ける。

……まあ私が出る事とかたかが知れてるけど、一応ね」

それを聞いて、桃は一気に思考がクリアになる。疑念という名の感情は、桃の口を勝手に動かした。

「……なん、で……う？」

「だつてさ——」

正直、野薔薇自身も、なぜこのような奇行に出たのか分からなかった。ただ、気が付けば手が動いていた。本能的なものだったのだと思う。……と、そこまで思考が行ったところで、野薔薇は気が付いた。

西宮桃は、かつての釘崎野薔薇なのだ。

親友であり、憧れの人でもあった『沙織ちゃん』を助けられなかった、幼く、力も無い釘崎野薔薇と同じなのだ。西宮桃にとつての『沙織ちゃん』が、禪院真依なのだ。

その姿を、かつての自分と重ねてしまった。

故にこれは、かつての自分への戒めであり——

「そういう生き様の方が、よっぽど素敵でしょ？」

——野薔薇なりの、『沙織ちゃん』への贖いでもあるのだ。

辛いね、頑張ったね……そんな言葉で繕っていても、結局何も変わらない。苦しんでいる人に必要なのは、一時凌ぎにしかならない慰めではないのだから。

大切なのは、人に手を差し伸べた『後』を、一緒に考える事。

それが、ハツキリと口に出して言える『友達』の在り方だと、野薔薇は思うから……。  
去っていく野薔薇に、桃は罵倒も感謝も言えず。  
ただ、双眸から溢れ出す熱いものを堪えるのに必死だった……。

P E R S O N A 5    i n    J u j u t s u    K a i s e n  
L e t    B l o c k h e a d    F i g h t  
# 2 9    B l o c k h e a d    F i g h t

## #30

疾く 疾く

流れゆく愛

溶く 溶く

濁り澱む赫

16.

都立高専別館の役割はもう終わっている。

元々呪術高専の歴史は古く、呪術全盛期の平安時代、貴族達がお抱えの呪術師の育成の場として建設したのが始まりだ。その時代には高専ではなく、呪術大学という名前が文献で残っている。

尤も、その大学があつたのは京都にのみであつた。

読者諸君らは、東京は元々クソが付くほど田舎だつたというのはご存知だろうか。江戸と呼ばれるよりも前、東京は作物を育てる事すら向かない酷い土地だつた。泥にまみ

れ、葦と荻が生え遊び、馬で見通そうとしても先が見えないとあった。東京が街として機能し始めたのは、徳川幕府が成立した江戸時代からだった。

そして政権と人が東京に移る事で、江戸の街にも呪いが発生し始め、ようやく都立高専の基盤となる建物が建設されたのだ。それこそが、伏黒恵と加茂憲紀が今戦っている都立高専別館なのである。

飄、という風を切る音が恵の両耳を過ぎ去っていく。一步間違えば人の命を奪えるその鋭利な鎌を、しかし恵は難なく首を捻るだけで避ける……が、矢の勢いは止まらず、それどころか通常ではあり得ないほど旋回し、再び恵の頭部を狙って発射される。

物理法則を完全に無視した挙動を見せる二本の鎌に、しかし恵は後方から狙われているのにも関わらず、尻目に見るところか意にすら介していない。——なぜなら、恵が召喚していた「不知井底」が、その舌で矢を巻き取ってしまうからだ。

さて、主人に害を成そうとする脅威は除かねばならぬと、「蝦蟇」はその舌で二本あつた矢を一息に叩き折る。今度は恵はその鎌を一瞥し、見るとそこには血液が微量に付着しているのが分かる。しかしそれは恵のものではない。恵は憲紀に、かすり傷の一つもつけられていない。

答えは、憲紀の血液だった。

（加茂家相伝の《赤血操術》……相変わらず血筋大好きな加茂家にぴったりだな）

## 《赤血操術》。

文字通り、自身に流れる血液を操作する術式。操作できるのはベクトルだけでなく、血中の成分比すらも自由自在だ。憲紀が血と液体で思いつく事の全てを、《赤血操術》は叶えてくれる。血液を大量に消費しない限り、強力な術式だ。

「キミが同時に召喚出来る式神は二体だろうか？　出し惜しみされるのは、あまり良い気はしないね」

「相手に良い気をさせないのが、戦いの基本ですよ」

「はは、手厳しいね——！」

そしてその操作性は、体外に放出されたとして、ある程度は失われぬ。先の血染めの鎌に術式を使用する事によって、憲紀はその手間暇を費やすのと引き換えに、通常の弓矢ではあり得ない爆発的な破壊力と、物理法則を完全に無視した追尾性を付与する事に成功している。

だが、その血染めの鎌も最後の一本を使い果たした。廊下の天井を狙ったその一本に身構える恵だったが、急激な旋回を見せる事なく、そのまま天井に突き刺さる——事すらもなく、なんと突き刺さるはずだった天井を貫通し、屋根裏の骨組みを破壊するに至る。

これにより、恵の頭上から木片が降りかかり視界が遮られる——所で、ブラフか、と



思ったその瞬間であった。

凡そ五メートルはあつたはずの己との距離を、憲紀は一瞬で詰め寄つてきたのだ。だが頸に感じた悪寒に従つた咄嗟の防御により、恵は鳩尾をその両腕とトンファアのような用具で守る事が出来た。

肝が冷えた恵の目には、憲紀のその俊敏性が奇妙に映つた。

「気を抜くなよ」

だがその奇妙さの検証を待つてくれるほど憲紀は優しくはない。目の前から消えるように恵の側面に移動し、そのまま再び掌底を叩き込む。狙うはその右肋骨だ――

「ぐっ!？」

「へえ」

――が、これを恵、間一髪でまたもトンファアで防いだ。両腕から伝わる半端じやない痛みと痺れに加え、先程までとは別人のような接近戦闘術とその立ち回り、そして憲紀の術式からして、恵はある一つの答えを導き出した。

「ドーピングか」

「俗な言い方はやめて欲しいね……【赤鱗躍動】せきりんやくどうという名があるのだから」

憲紀の糸のような右目が皮膚ごと充血し見開かれる。それは正しく、憲紀が今までよりも格段にパワーアップした事の証左だった。

それに恵は、数少ない貴重な呪具の一つを失ってしまった。比較的安物であったとはいえ、真希さんに怒られる。報告するの嫌だなあ、と思っていると、突然に憲紀から問い掛けられた。

「時に、キミは虎杖悠仁をどう思う?」

「友達」

至極当然の回答を恵はしたつもりだったのだが、憲紀には好意的には映らなかつたようだ。一種の諦観を含んだ溜め息を吐かれつつ、憲紀は続ける。

「さて……キミと私は同類だと思っただがね」

「寝言は寝てから言うもんですよ」

「それはキミにも当てはまるだろう? 虎杖はその身に呪いを宿している。規定違反だ。残酷な事だが、彼は存在すら許されないんだ。それを分かっているながら庇うのかい?」

「何が言いてエンだよ。あのジジイの言いなりにでも成り下がったんですか、加茂さん」「まさか。私は私なりの律と節に従うまでさ。古いだけで意味の無い習慣は必要ないが、虎杖の死は必要だと思っっているよ。」

故に、これは加茂家次期当主としての私なりの判断だ」

虎杖悠仁の性根は、伝聞かつ嫌々ながら東堂葵から聞かされている。特級術師・雨宮

蓮の親友を自称しているに過ぎない葵の言葉を信じるのもどうかとは思つたが。

だが残酷ながら、宿儺の指を全て取り込ませて仕舞う前に、虎杖悠仁は死ぬ可能性が高いと憲紀は考える。それは悠仁の実力不足からくるものではなく、より醜悪な、腐つた上層部と癒着しているお抱えの術師による暗殺だ。

現に、楽巖寺嘉伸により命を受け、憲紀も虎杖暗殺に加担したのだから。

「虎杖は早くに死ぬだろう。……伏黒くん。彼に入れ込んで永訣が辛いだけだ。引き返すなら——」

「俺は!!」

大声を出したのは久々だった。だが叫ばずにはいられなかった。

「……正直、以前の俺も加茂さんと同じ意見でした。ただ祓い、悠仁の命に手を掛けるだけ。そこに感情が介在する余地は無かったはずだった。それが呪術師だから。

——でもね、俺はもう知ってしまったんですよ」

己の信じるものを。

己の信じる人を。

俺の——友達を。

「光が影を生むと云うのなら、俺にとっての光は二人いる。ソイツらが居てくれたから、俺はまだ俺でいられる。もう俺は、光の暖かさを知ってしまった。光がすぐ隣にある事

の安心を、俺の心は覚えてしまった。

光を浴びて色濃く翳るのが影の役目なら、俺のやるべき事はただ一つ。

俺の使命は、全力で光を護る事だったんだ」

俺の目の前で否定するのだけは、許せない。

「俺は俺の良心を……『強欲』を信じる。

それを否定されるんだったら——呪い合うしか無いでしょ」

だから、もう我慢はしない。

伏黒恵が一度に召喚できる式神は原則二体まで。「玉犬・黒」は狗卷棘のサポートに徹していたが、先刻強制的に影へと戻ってきたのが分かった。新たな式神を召喚する条件は満たしたが、今から召喚する式神だけは例外だ。

恵の総呪力量は一級術師程度に匹敵するが、雨宮蓮のような規格外の呪力量は有していない。総呪力量は謂わゆる臓器のようなもの。鍛える事は不可能だ。故に雨宮蓮から見て少ない呪力で、恵はやりくりする他は無い。

だから、今から召喚する式神の特性を發揮する時は気を使うのだ。何せ最近調伏したばかりで、まだ要領を掴めていないのだから。

「押し潰せ、【満象】」

左手は右手の甲を覆い、右中指と薬指を下に押しやる。人差し指と小指は牙を、中指

と薬指は長い鼻を。——そうして『象』を模り、その全容は影より出る。

現れた桃色の象は、その頭や手足、鼻先に至るまで、煌びやかな装飾を施されており、まるでサーカスのために調教されたかのような印象を受けた。

だが【満象】がサーカスにお呼ばれする事は永遠にない。なぜならば、調教とはいっても、敵を屠るための調教を施してきたのだから。

大量の呪力を持つていかれる感覚に、しかし恵は一切眉をも顰める事はない。むしろ心地良さすらも感じている。目の前の敵を倒せる……そういう好ましい感覚が故に。

【満象】の口内が一息に膨張し、やがてそれは鼻の中間にて一度止まり——【満象】が持ち得る最高出力によって、その大量の水は放水される。巨軀から絞り出された激流水は、難なく憲紀を押し流していき、遂には壁そのものを破壊する！

そして、ようやくチャンスは訪れた!!

(水・押し出された——拙い、アレが来る!!)

しかし。

憲紀のその予想は大きく外れる事になる……!!

なぜなら、憲紀が次に召喚すると踏んだ【鶴】の掌印とは、全く異なるものだったからだ!!

左手は握り拳、右手は親指と人差し指をまるで鉤爪のように湾曲させ、掌印は完成し

た。

本来の世界線ならば、恵は調伏に至らなかつた。だが雨宮蓮というバタフライ・エフェクトが、恵に焦りを生ませた。ぶつちやけ言うと、これより召喚する式神の調伏に、恵は命に関わる大怪我をした。

無論蓮や野薔薇から心配という名の小言をいただいたのだが、死に掛けた苦勞はあつた。

「行けよ問題児——【貫牛】!!」かんぎゅう

「なにいつ?!」

呪力出力に特化したのが【満象】だとするならば、

この【貫牛】は単体での突撃力による状況の突破に秀でている。

【貫牛】には、他の式神が有するハッキリとした特性——例えば【鶴】の雷撃や【渾】の鋭利すぎる爪と牙など——を持たない。『突撃力』のただ一つだけを自らの得意とし、無理やりに突破口をこじ開けるのが、【貫牛】の唯一無二の役割。

ただ一直線にしか進めない暴れ牛……普通に考えれば使い勝手は悪いだろう。だが恵は己の式神を、誰一人として不要だと思つた事は無い。

特性を理解し、活かす。それが担い手の役目なのだから——!

「ブモオオオツツ!!」

黒い闘牛は、例えそこが空中だろうと構う事なく突き進む。その突撃力を前に、吹っ飛ばされて宙を漂うだけの憲紀は、身を振る事しかできなかった。

「知らない式神!!」

「別に俺は調伏したのが一体とは言ってねエよ……!」

——やられる。

そう直感した時、憲紀の手は袖の下に隠していた輸血パックを【貫牛】に向けて投擲し、術式を解放していた!!

「せきほく赤縛!」

《赤血躁術》【赤縛】。

大量の血液を消費するが、相手の行動を封じ込める事の出来る唯一の妨害用拡張術式。空中にて、校舎別館と己の体とを繋ぐように縛られて、なお【貫牛】はその突撃を止めようとはしなかった。猪突猛進だけが生き甲斐にして取り柄の【貫牛】を見て、もしもあの突進が直撃してしまったら、骨折どころか肉体に穴すらも開きそうな予感があった。

尤も、赤縛と重力に負けて宙ぶらりんになっている様は、あまりにもシユールだったが、

だが、封じ込めた。どうか体制を立て直しつつ中庭に着地し、再度【赤鱗躍動】を

開始する。とく、とく、とくつとくつ、と早まっていく鼓動が、今はなんだか頼もしい。加茂憲紀は、嫡男として加茂家から寵愛を受けていた。何せ相伝の術式を有した子供だ、次期当主としての器は充分に有していた。

しかし憲紀の母は違った。母親は側女で、正室の女ではなかったために、男だけでなく女中からも非難され、遂には加茂の家を出て行ってしまった。たかだか己らが相伝の術式持ちの男児を産めなかったというだけで、母親はその立場を追われてしまう事態になったのだ。

——幼い憲紀は許せなかった。古臭いだけの正室と側室という子孫を残すシステムも、側室の女故に母親を虐げられた事も……規律を重んじる家柄のはずなのに、不平等を見逃している加茂家の現状も。

だからこそ、憲紀は当主と成り——  
「負けられんのだ、私は!!」

——母の居場所を作るのだ。もう二度と、不平等を看過しないために。  
互いにボルテージは最高潮。二人の信念がぶつかり合う。  
規律と利己の衝突は……しかし。



爆、発、的、に、成、長、し、て、い、く、森、林、に、よ、り、強、制、的、に、中、断、さ、せ、ら、れ、た、。

P E R S O N A 5     i n     J u j u t s u     K a i s e n  
L e t     u s     s t a r t     t h e     g a m e .  
# 3 0     N o     M o r e     W h a t     I f s

## #31

世界が嫌いだ

呪いが嫌いだ

生まれが嫌いだ

光が嫌いだ

キミと共に歩めない

腐った己が大嫌いだ

17.

究極メカ丸には謂わゆる中の人がいるが、メカ丸の中には誰もいない。外部からの操作を受けて行動する汎用人型呪術兵器、それがメカ丸の全容。

遠隔地であれど、まるで自らの手足の如く操作する事が出来る、唯一無二の特別な人形だ。それはメカ丸の本体である与幸吉むたこうきちの《傀儡操術》と、与幸吉に課せられた天与てんよ

呪縛<sup>じゆばく</sup>——生まれながらに課せられた縛りによる術式効果の拡大と実力以上の呪力出力によるもの大きい。

その術式効果範囲は、なんと日本全土にも渡る。これほど大規模な効果範囲を持つ術師は、日本の術師の結界術を補佐する天元を置いて他にない。

だが幸吉は、こんな力など一瞬たりとも望んではいなかった。

生まれながらにして課せられた枷……右腕の肘から下と膝から下の肉体が欠損しており、腰から下の感覚が無く、肌は月明かりに焼かれるほどに脆く、常に全身の毛穴を刺されるような痛みに襲われる。全身を包帯でぐるぐる巻きにされて尚、その隙間から外気が入り込み激痛が走る。自らの意思とは関係無く行われる排泄を浴槽に浸かって耐え、顎と喉を極力使わないために水のように薄味の医療食しか食べられない。

暗い部屋で、誰と会う事もない。

皆が見えているのは、メカ丸としての……人形としての自分自身。

与幸吉は、孤独だった。

メカ丸として他者と通じ合っても、この侘しさを埋める事はできない。故に面と向かつて話したいという欲を抑えられない。

だからこそ、幸吉はパンダの存在が気に入らなかつた。

呪骸として与えられた偽物の命、針で小一時間ちくちく縫えば出来てしまう借り物の

体。そして何より、戦闘前にパンダが口にした『同類』の言葉に、幸吉の堪忍袋はとうとうはち切れた。

たかだか呪骸の分際で、日の下を悠々自適に歩いていられるパンダの存在が、どうしようもなく、我慢ならなかったのだ。

だが、最早自分の感情をぶつけていられるような状況ではなくなった。

——本来の世界線でも有り得ぬ、予期せぬ第三者の乱入によって。

「おいメカ丸よう、一時休戦と行こうや」

「奇遇だな、俺も提案しようと思っていタ」

市街地での戦闘を想定した都立高専第一演習場の屋根上にて、そう言い合うのは究極メカ丸とパンダ先輩だった。——ただし、二人の姿は、当初のそれとはかけ離れていたが。

以下、パンダとの戦闘におけるメカ丸の被害状況。

右腕損傷、頭部破損の軽傷。右腕の変形機構に問題発生。《推力加算》<sup>プリストオン</sup>出力十五%低下。《刀源解放》<sup>ソッドオブジョン</sup>並びに《砲呪強化形態》<sup>モッド・アルバトロス</sup>・三重大祓砲<sup>アルティメットキャノン</sup>使用不可。右腕回路に問題発生。右腕の作動に際し、本体からの操作命令に対する反応の誤差十〇・〇〇〇〇五秒のラグが十〇・〇一秒にまで増加。主映写機構<sup>メインカメラ</sup>に問題発生。映像の左半分が暗転、視界を損失。エネルギー低下、残呪力エネルギー八〇%。

それらを加味して尚、祓除行為に問題無し。

以下、メカ丸との戦闘におけるパンダの被害状況。

パンダが有する三つの呪核のうち、メインを担うバランス型のパンダ核及び恥ずかしがり屋のお姉ちゃん核を消耗。二つの呪核は休息状態へ移行しており、パンダ核を優先的に修理中。夜蛾正道の手によらねば完全回復は難儀。残すは短期決戦用攻撃特化型、お兄ちゃんのゴリラ核のみ。

それらを加味して尚、祓除行為に問題無し。

さて、脳みそと目玉をそのまま取り出したような風貌の呪霊は、未だこちらを見つめ漂う。だが——否、だからこそひしひしと感じる嫌な感覚。生理的嫌悪感だけではない。それよりももっと上の領域のそれ……威圧感。

心当たりは無い。無いからこそ、二人は理解出来る。

この呪霊は只者ではない……と。

「あまてらす　さま」

——そして、その勘は正しかった。

どこからか呪霊が発した少年の声に似せた言葉は、二人の間に尋常でない緊張をもた

らす。たかだか一言「あまてらす」という単語だけで。それだけでも、眼前の呪霊が格上であると理解させられた。むしろ、その言葉に聞き覚えの無い日本人の方が少ないだろう。

「おいおいおいおい!!? アイツ多分神、靈か何かの類じゃねーの!?!」

「だろウナ! とはいえ、日本には八百万の神がいるんだ。自然発生した仮想怨霊ならまだしも……あるいは神かみおろし卸の術式を持つ者が襲撃して来たか? 高位の神霊は降ろそうとする事自体が難しいハズだが、アレは……」

「アマテラスって言葉が出てる時点でもう一級案件だろこれ! つーかそんな貴重な術式持ってる、何で呪詛師やってんだよお!?!」

天照大神、あるいは天照大御神。

日本の皇室の祖であり、日本神話の主神。高天原を統べる、国内において最も知名度のある神の一柱。その御名を、何の意味も無く呪霊が発するとは思えない。パンダはこの目の前の呪霊が、天照大神に所縁有る類だと確信していた。そしてそれはメカ丸も同様で、パンダに激しい口調で問う。

「おい、お前のとこの特級はどこで油売ってんだ!」

「お宅の学長が前半は参加しちゃダメって言ったんだよ! 今教員と一緒にいる!」

「クソツ、余計な真似ヲ!!」

今だけはこの悪態に誰も文句は言えまい。

いくらメカ丸がこの襲撃を知つていて、且つ京都校側に被害が出ないと判つていても、この状況は流石に拙い。術師側が被るであろう損失があまりにも大きすぎる。仕方ない、と心中で呟き、あまり取りたくなかつた手段を以つてして、状況の収束の兆しを担う事にした。

「おいパンダ、一分時間稼げ」

「はあああ!?!」

「外部と連絡を取るにはこれしかない。その間、俺はこの体を動かさなくなる」

「くそ……:ASAPなる早で頼むぜ! こつちもあんま時間取れねえぞっ!」

そう言つてパンダは残り少ない呪力を回し、メカ丸はポケットでとある物を取り出した。

その物体は掌サイズに収まる程度の円盤で、表面にはメカ丸の顔面が彫られており、その薄い円弧には超極小ジェット機構が取り付けられていた。

しかしこのままでは作動はおろか起動すら不可能だ。メカ丸の術式効果範囲内だが、この傀儡だけは別だった。この傀儡は、とある保険のために作られたものであり、そしてその保険が適用されるのは今ではない。だから動かせない。

だがそれを、即席の縛り——飛翔追尾式通信機器型究極メカ丸・通称コミュニケイト報告メカ丸を

操作する際、与幸吉はその他一切の呪骸の操作が出来ない——を組むことで、ようやくその真価の一部を発揮するに至ったようだ。

操作権がメカ丸から小UFO型メカ丸に移り変わり、そして人型メカ丸の意識はブラックアウトした。

向かうは、一番近くの一信信頼出来る同級生へ。

刀を握っているくせに

人を殺める意思は無い

刀を握っているくせに

人を救える実力は無い

刀を握っているくせに

何も斬れず

何一つ、護れない



かーたな、取ーられちゃったーよー……。

燃え尽きながら呆然と歌うのは三輪霞。普段の彼女と異なるのは、真っ白な事と本来刀があるべき鞘にそれが無い事くらいか。後者に限っては彼女にとつて死活問題なのだ。

禪院真希との戦闘は、終始真希に圧倒されて終わった。呪具使いとして……何より真依曰く真希よりも階級が高い者として、霞にはそれなりの自信があった。

だがいざ真希と対面し、鏑迫り合い、本領を發揮せんとし——いつの間にか刀を奪われ投げ飛ばされ、そしていつの間にか真希は目の前から立ち去っていた。

霞は思った。

四級とか絶対嘘じゃん、と。

「はあ……タピオカってなんであんなに流行ってるんだろ。言うほど美味しいかなあ」  
 役立たずの烙印を押された事に、霞は奇妙な現実逃避をしていると、ふと自分の耳元に何かが飛来して来たのが分かった。

虫か何かの類か、と一瞬思い振り払おうとしたが、即座にその物体から発せられた音声に、霞は安堵の溜め息を吐いた。どうやらメカ丸の通信用飛行式呪骸のようだ。メカ丸はこんなものまで作れるのか、凄いなあ、と率直に感心した。

さて、飛来したミニメカ丸からの報告は、およそ芳しいとは言えないものだった。出

来るだけ優しい声で落ち着かせようと自分なりに気遣いながらも、しかし僅かながらに漏れてしまっている焦りの声に、霞にもその焦りを伝染させてしまう。

『三輪、今大丈夫力!?!』

「はい、役立たず三輪ですけど」

『何の話ダ? まあ良い、落ち着いて聞け三輪、今俺たちハ——未確認の呪霊に襲撃を受けている!』

「え……ええ!?! 大丈夫なの!?!」

『正直かなりヤバイ。だから三輪——』

「じゃあつ、私も戦うよつ!」

『——ハア!?!』

そう口にした時、霞の体は一直線に走り始めていた。今までこれほどにも力強く駆けた事は無いと思えるほどに、微かな焦りを含みながら、浅瀬川のために一張羅である制服の裾が濡れてしまうのも構わず、全力で風を振り切る。

しかし耳元のメカ丸は、霞の思いとは裏腹に叱咤の声を上げるのだった。

『だッ——ダメに決まってるだ口! 相手は最低でも準一級だゾ?! 危険すぎる、三級に務まる相手じゃない!』

「でも、メカ丸も戦ってるんでしょ!? だったら頼って! メカ丸からしたら私は弱い

かもしれないけど、それでも仲間だもん！」

『三輪……』

草木が邪魔で、無理矢理に押し入って一直線に突き進む。途中細枝が額や二の腕に当たり擦れてしまったが、霞は減速することなく、禪院真希が走って行つた道なき道を進み続ける。

メカ丸が霞を一番信頼出来る人間だと考える理由は、何もメカ丸が霞に好意を抱いているためでは……否、一割くらいはそれかもしれないとメカ丸は思ったが、すぐさまその思考を振り切り、それが主だった理由ではない事を言い訳する。

メカ丸は外部からの情報を得る為に、その広大な術式効果範囲を用いて、秘密裏に日本全土に自作の監視カメラを設置している。無論これは呪術規定に違反するのだが、自らが契約した者との縛りのために致し方無く行なっている。

その隠しカメラに映る三輪霞という人は、いつ何時も誠実だった。収入のほぼ全て弟の生活費や学費のために工面し、質素儉約を胸に抱いて、それに文句を言う事は無い。聞けば中学一年の頃から年齢や経歴を詐称してまでアルバイトをしていたと言うのではない。初めてその事を聞いた時、幸吉は開いた口が塞がらなかつた。

愛しい人のため、自らの鎬を削ることが出来る人間——三輪霞。好印象はやがて羨望へと進化し、そうして幸吉の心の内に、一つの『欲』を生み出させた。

皆に——霞に、面と向かつて向き合つて話がしたい、と。

その欲を認識した時、幸吉は——三輪霞という人に好意を抱いているのだと悟つた。一緒に居たくて、会えない現実が痛くて。

もどかしくなつて、戻れなくて。

……そうしてメカ丸は——否、与幸吉は、五人の京都校の生徒と七人の東京校の生徒から霞を選んだ理由の、その主だった理由を理解した。

与幸吉は、三輪霞という人を信じてみたいのだ……と。

口から出た言葉は、先ほどの叱咤の激しいものとは真反対で。

心に深く突き刺さる、杭の一つが取れたような気がした。

『ありがとう』

「うん。メカ丸、私に出来る事ある?」

『西宮に言伝を頼みたイ』

「桃先輩に?」

『そうダ。西宮に五条悟か雨宮蓮のどちらかを呼ばせてくれ』

「両方じゃなくて?」

『出来ればどつちもが望ましいガ、どつちかが来れば、この事態は収まる。三輪、頼ム』

「うんっ!」

『健闘を祈ル。必ず生きて会おうゾ』

「そつちも頑張つて!」

そう言い終わると、メカ丸からの音声と反応が途絶える。

さて、不用となった報告メカ丸を、しかし捨てるのもどうかと思つた霞は、背広の左胸内ポケットに大事に仕舞つて、今度は携帯を取り出す。

「西宮先輩!」

『もしもし、……つぐす、何? どうしたの?』

少し鼻声の西宮桃は、気をしっかりと保ち何でもないように聞き返した。が、タイミングが良いのか悪いのか、丁度霞は森から開けた草原に出た。そこにいたのは美女二人、禪院真希と禪院真依であつた。

「真希さんっ!」

「お、さつきの。どうした?」

「はあつ、はあつ、……今、襲撃を受けてます!!」

「何!?!」

『ええっ!?!』

「えー……」

目を見開き驚く真希、電話越しに驚く桃、面倒そうに驚く真依。みんな違ってみんな

良い反応を示し、霞はメカ丸から得た指示に従う。それも、出来るだけ端的に。

「西宮先輩は、外部へ救援要請をお願いします!」

『うん、ありがとう霞ちゃん!』

「真希さん、刀返してください!」

「はいよ」

「ありがとうございます!」

通話が切れ、刀を返してもらった事で、霞のやるべき事は終わった。少しだけ肩の荷が降り、緊張が切れて安堵する。

「で、どうする?」

「……どうしましょう!?!」

「考えてねえのかよ」

「そもそも霞、アンタどうやって襲撃されてるって知ったワケ?」

「ああ、それはメカ丸が——」

「いざなぎ どこお???

——だが、そこから先を告げる事は禁じられた。

d. # 3 1 A f r i e n d i n n e e d i s a f r i e n d i n d e e  
L e t u s s t a r t t h e g a m e.  
P E R S O N A 5 i n J u j u t s u K a i s e n